取扱注意

放送大学開設予定授業科目講義内容案

平成元年６月
第　７　版

放　送　大　学
教務部教務課

目　　次

	1. 基本・基礎科目	頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
	（人 文 系）					
1	生活と芸術（平成元年度限り） ……	1	60年度から	59	TV	2
2	日本の教育 ……	3	61年度から	60	TV	2
3	教育学概論（平成元年度限り） ……	6	61年度から	60	R	4
4	心理学 ……	8	1年度から	63	TV	2
5	行動科学（平成元年度限り） ……	10	61年度から	60	TV	4
6	現代の人間観と世界観 ……	14	63年度から	62	R	2
7	哲学の基礎 ……	16	60年度から	58（㊦）	R	2
8	古代中国の思想（平成元年度限り） ……	18	60年度から	59（㊦）	R	2
9	近代の思想 ……	20	1年度から	63	R	2
10	ことばとコミュニケーション ……	22	63年度から	62（㊦）	TV	2
11	思考と論理（平成元年度限り） ……	24	61年度から	60	R	2
12	記号論 ……	26	1年度から	63	TV	2
13	比較思想論（平成元年度限り） ……	28	61年度から	60	TV	2
14	文学と芸術（平成元年度第1学期限り） ……	30	61年度から	60	TV	2
15	日本語の基礎（平成元年度限り） ……	32	61年度から	60	R	2
16	日本語 ……	34	63年度から	62（㊦）	R	2
17	作歌・作句（平成元年度限り） ……	36	61年度から	60（㊦）	TV	2
18	人間の歴史 ……	38	63年度から	62	R	2
19	文化の形成と普及（平成元年度限り） ……	40	61年度から	60	TV	2
20	世界歴史と国際交流 ……	42	1年度から	63（㊦）	R	2
21	人文地理学の基礎 ……	44	63年度から	62	TV	2
	（社 会 系）					
22	社会生活と法（平成元年度限り） ……	46	61年度から	60	TV	2
23	憲法概論 ……	48	1年度から	63	TV	2
24	国家と法Ⅱ（平成元年度限り） ……	50	61年度から	60	R	2
25	政治学入門 ……	52	63年度から	62	R	2
26	比較経済・経営・社会（平成元年度限り） ……	54	61年度から	60	R	2
27	経済学入門 ……	56	63年度から	62	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
28	社会学入門 ……	58	63年度から	62	R	2
29	社会科学の成立と発展（平成元年度限り） ……	60	61年度から	60（㊦）	R	4
30	現代社会論Ⅰ（平成元年度限り） ……	64	61年度から	60	TV	2
31	現代社会論Ⅱ（平成元年度限り） ……	66	61年度から	60	R	2
32	日本経済と産業と企業 ……	68	1年度から	63	TV	2
33	経営総論 ……	70	63年度から	62	R	2
34	会計総論 ……	72	63年度から	62	TV	2
	（自 然 系）					
35	現代の数学観 ……	74	63年度から	62	R	2
36	基礎数学Ⅰ ……	76	63年度から	62	TV	2
37	基礎数学Ⅱ（平成元年度限り） ……	78	61年度から	60	R	2
38	基礎数学Ⅲ（平成元年度限り） ……	80	61年度から	60	R	2
39	確率論 ……	82	1年度から	63	R	2
40	統計学 ……	84	1年度から	63	R	2
41	物理科学史 ……	86	1年度から	63（㊦）	R	2
42	物質とエネルギー（平成元年度限り） ……	88	61年度から	60	R	2
43	基礎物理学Ⅰ（平成元年度限り） ……	90	61年度から	60	TV	2
44	基礎物理学Ⅱ（平成元年度限り） ……	92	61年度から	60	R	2
45	基礎化学（平成元年度限り） ……	94	61年度から	60（㊦）	TV	4
46	基礎生物学（平成元年度限り） ……	98	61年度から	60	TV	4
47	人間の生物学 ……	102	1年度から	63	TV	2
48	生命科学史Ⅰ ……	104	1年度から	63	R	2
49	生命科学史Ⅱ ……	106	1年度から	63	R	2
50	地球と宇宙（地球編） ……	108	63年度から	62	TV	2
51	地球と宇宙（宇宙編） ……	110	63年度から	62	TV	2
52	日本の自然（平成元年度限り） ……	112	61年度から	60	TV	2
53	科学と実験 ……	114	1年度から	63	TV	2
平成2年度改訂開設科目						
	（人 文 系）					
54	生活と芸術 ……	116	2年度から	1（㊦）	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
56	教育学概論 ……	118	2年度から	1	R	2
57	行動科学Ⅰ ……	120	2年度から	1	TV	2
58	行動科学Ⅱ ……	122	2年度から	1	TV	2
59	比較思想 ……	124	2年度から	1	TV	2
60	日本語学概論 ……	126	2年度から	1	R	2
61	近代詩歌 ……	127	2年度から	1 (七)	R	2
62	歴史にみる日本人と仏教 ……	129	2年度から	1	TV	2
	（社 会 系）					
63	法学入門 ……	131	2年度から	1	TV	2
64	行政法 ……	133	2年度から	1 (七)	R	2
65	経済社会論 ……	135	2年度から	1	R	2
66	比較社会史 ……	137	2年度から	1	R	2
67	民族学 ……	139	2年度から	1 (七)	TV	2
	（自 然 系）					
68	線形代数学 ……	141	2年度から	1	TV	2
69	物理の世界 ……	143	2年度から	1	TV	2
70	基礎化学 ……	145	2年度から	1	TV	2
71	物質の構造と機能 ……	147	2年度から	1	TV	2
72	基礎生物学Ⅰ ……	149	2年度から	1	TV	2
73	基礎生物学Ⅱ ……	151	2年度から	1	TV	2
74	日本の自然 ……	153	2年度から	1	TV	2

2. 外国語科目

75	英語Ⅱ ……	155	1年度から	63	R	2
76	英語Ⅲ ……	157	1年度から	63	TV	2
77	英語Ⅳ ……	159	1年度から	63	TV	2
78	英語Ⅵ ……	161	1年度から	63	R	2
79	英語Ⅱ－Ｂ１（平成元年度限り） ……	162	61年度から	60	R	2
80	英語Ⅱ－Ｂ２（平成元年度限り） ……	164	61年度から	60	R	2
81	ドイツ語Ⅰ ……	166	1年度から	63	TV	2
82	ドイツ語Ⅱ ……	168	1年度から	63	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
83	ドイツ語Ⅲ ……	170	1年度から	63	R	2
84	ドイツ語Ⅱ－B 1（平成元年度限り） ……	171	61年度から	60	R	2
85	ドイツ語Ⅱ－B 2（平成元年度限り） ……	173	61年度から	60 (㊄)	R	2
86	フランス語Ⅰ ……	175	1年度から	63 (㊄)	TV	2
87	フランス語Ⅱ ……	177	1年度から	63 (㊄)	TV	2
88	フランス語Ⅲ ……	179	1年度から	63 (㊄)	R	2
89	フランス語Ⅱ－B 1（平成元年度限り） ……	181	61年度から	60	R	2
90	フランス語Ⅱ－B 2（平成元年度限り） ……	183	61年度から	60	R	2
91	中国語Ⅰ ……	185	1年度から	63	R	2
92	中国語Ⅱ ……	187	1年度から	63	R	2
93	中国語Ⅲ ……	189	62年度から	61	R	2
94	中国語Ⅳ ……	191	63年度から	62	R	2
95	ロシア語Ⅰ ……	193	1年度から	63	R	2
96	ロシア語Ⅱ ……	195	1年度から	63	R	2
97	スペイン語（平成元年度限り） ……	197	61年度から	60	R	4
98	Japanese Ⅰ ……	201	1年度から	63	TV	2
99	Japanese Ⅱ ……	203	1年度から	63	TV	2
平成2年度改訂開設科目						
100	英語Ⅰ（'90） ……	205	2年度から	1	R	2
101	英語Ⅴ ……	207	2年度から	1	R	2
102	英語Ⅶ ……	209	2年度から	1	R	2
103	ドイツ語Ⅳ ……	211	2年度から	1	R	2
104	ドイツ語Ⅴ ……	213	2年度から	1	R	2
105	フランス語Ⅳ ……	215	2年度から	1	R	2
106	フランス語Ⅴ ……	217	2年度から	1	R	2
107	スペイン語Ⅰ ……	219	2年度から	1	R	2
108	スペイン語Ⅱ ……	221	2年度から	1	R	2

3. 保健体育

109	保健体育 ……	223	60年度から	59 (㊄)	TV	3
110	体育実技 ……					1

4. 専門科目

生活と福祉

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
			開設年次	作成年度	メディア	単位
111	生活史（平成元年度限り）	225	61年度から	60	R	2
112	人間と社会環境	227	1年度から	63	TV	2
113	家庭の本質	229	61年度から	60	R	2
114	家族関係	231	62年度から	61	R	4
115	家庭の経済	235	63年度から	62（㊐）	R	2
116	家庭の経営	237	1年度から	63（㊐）	R	2
117	衣生活概論	239	63年度から	62	TV	2
118	衣服論（平成元年度限り）	241	61年度から	60	TV	2
119	衣生活の科学	243	62年度から	61	TV	2
120	食生活論	245	61年度から	60	R	2
121	食物総論	247	63年度から	62	TV	2
122	食物各論（平成元年度限り）	249	60年度から	58	TV	2
123	住生活史	251	1年度から	63	TV	2
124	住居Ⅱ（平成元年度限り）	253	61年度から	60	TV	2
125	住居Ⅲ	255	62年度から	61	TV	2
126	人間の病気	257	63年度から	62	R	2
127	母子保健	259	62年度から	61	TV	4
128	青少年の保健Ⅰ（平成元年度限り）	263	61年度から	60（㊐）	R	2
129	青少年の保健Ⅱ	265	62年度から	61（㊐）	R	2
130	成人の保健	267	63年度から	62	R	2
131	老人の保健	269	62年度から	61	R	2
132	精神衛生	271	62年度から	61	R	4
133	環境科学	275	1年度から	63	TV	2
134	余暇生活	277	1年度から	63（㊐）	TV	2
135	家庭の福祉	279	1年度から	63	R	2
136	生活福祉	281	62年度から	61	R	4
137	生活と福祉特論		63年度から			6
	平成2年度改訂開設科目					
138	生活原論	282	2年度から	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
139	衣服論	284	2年度から	1（㊐）	TV	2
140	食物の探究	286	2年度から	1	TV	2
141	住まいと環境	288	2年度から	1	TV	2
142	少年期の健康科学	290	2年度から	1	R	2

発達と教育

143	教育思想Ⅰ	292	1年度から	63（㊐）	R	2
144	教育思想Ⅱ	294	1年度から	63（㊐）	R	2
145	学校教育	296	1年度から	63（㊐）	TV	2
146	教育の方法	298	62年度から	61	TV	2
147	学習と指導	300	62年度から	61	TV	2
148	言語と教育	302	62年度から	61	R	2
149	道徳教育	304	62年度から	61（㊐）	R	2
150	教育評価	305	62年度から	61	R	2
151	家庭教育	307	1年度から	63	R	2
152	児童観（平成元年度限り）	309	61年度から	60	R	2
153	情操の教育	311	1年度から	63	R	2
154	青少年文化	313	1年度から	63	TV	2
155	地域社会と学校	315	62年度から	61	TV	2
156	生涯教育論	317	1年度から	63（㊐）	R	2
157	教育社会学（平成元年度限り）	319	61年度から	60（㊐）	TV	4
158	青少年の指導	323	62年度から	61	TV	4
159	発達心理学Ⅱ（平成元年度限り）	327	61年度から	60	TV	2
160	発達段階の心理学	329	1年度から	63	TV	2
161	学習心理学	331	63年度から	62	TV	2
162	学習心理学の応用	333	63年度から	62	TV	2
163	文化と精神発達	335	62年度から	61	R	2
164	認知と思考	337	63年度から	62	TV	2
165	社会心理学	339	1年度から	63	TV	2
166	人間関係論	341	62年度から	61	TV	2
167	パーソナリティ論	343	62年度から	61	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
168	臨床心理学	345	62年度から	61	R	2
169	深層心理学	347	62年度から	61	R	2
170	カウンセリング	349	63年度から	62（㊐）	R	2
171	心理・教育における測定法	351	1年度から	63	TV	2
172	乳幼児の健康と心理	353	61年度から	60（㊐）	TV	2
173	児童の心理と教育（平成元年度限り）	355	61年度から	60（㊐）	R	2
174	青年の心理と教育	357	63年度から	62	R	2
175	障害児の心理と教育	359	1年度から	63	R	2
176	言語障害（平成元年度限り）	361	61年度から	60（㊐）	R	2
177	発達と教育特論		63年度から			6
	平成2年度改訂開設科目					
178	生徒指導の実際	363	2年度から	1	R	2
179	幼児教育	365	2年度から	1	R	2
180	教育社会学Ⅰ	367	2年度から	1	TV	2
181	教育社会学Ⅱ	369	2年度から	1（㊐）	TV	2
182	発達心理学	371	2年度から	1	TV	2
183	児童の心理と教育	373	2年度から	1	R	2
184	老人の心理と教育	275	2年度から	1	R	2
185	言語障害	377	2年度から	1（㊐）	R	2

社会と経済

186	犯罪と刑法	379	1年度から	63	R	2
187	裁判と市民生活	381	63年度から	62	TV	2
189	日常生活と法（平成元年度限り）	383	61年度から	60	TV	4
190	取引と企業の法	387	62年度から	61	R	4
191	日本の社会と法	391	62年度から	61	R	2
192	国際社会と法（平成元年度限り）	393	61年度から	60（㊐）	R	2
193	経済活動と法	395	62年度から	61（㊐）	R	2
194	労働問題と法	397	62年度から	61	R	2
195	日本政治思想	399	1年度から	61	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
196	西欧政治思想	401	1年度から	63	R	2
197	現代の政治理論	403	1年度から	63	TV	2
198	現代の政治生活	405	62年度から	61	TV	2
199	現代の国際政治	407	62年度から	61（㊦）	TV	2
200	日本の政治（平成元年度限り）	409	61年度から	60	TV	4
201	先進諸国の政治	413	63年度から	62	R	2
202	第三世界の政治	415	63年度から	62	R	2
203	日本政治史	417	1年度から	63	R	2
204	西欧政治史	419	1年度から	63	R	2
205	行政学	421	63年度から	62（㊦）	R	2
206	近代経済思想	423	62年度から	61	TV	4
207	現代の経済学	427	1年度から	63	TV	2
208	経済発展論	429	62年度から	61（㊦）	TV	2
209	産業組織論	431	62年度から	61	TV	2
210	国際経済学	433	63年度から	62	R	2
211	財政と金融	435	61年度から	60	TV	4
212	日本経済史	439	1年度から	63	R	2
213	欧米経済史	441	62年度から	61（㊦）	R	2
214	近代日本の生活と社会	443	1年度から	63	TV	2
215	社会学研究法	445	1年度から	63	TV	2
216	社会構造と社会変動	447	62年度から	61	R	4
217	地域と生活	451	62年度から	61	TV	2
218	地域社会学	453	62年度から	61	TV	2
219	芸能と社会	455	1年度から	63	TV	2
220	アジアの社会	457	63年度から	62（㊦）	TV	2
221	社会と経済特論		63年度から			6
	平成2年度改訂開設科目					
222	民法	459	2年度から	1	TV	2
223	家族法	461	2年度から	1（㊦）	TV	2
224	国際法	463	2年度から	1	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
225	現代日本の政治 ……	465	2年度から	1	TV	2
226	日本の地方自治 ……	467	2年度から	1	TV	2

産業と経済

227	経営管理 ……	469	1年度から	63	TV	2
228	経営戦略 ……	471	62年度から	61	R	2
229	企業と人材 ……	473	1年度から	63 (㊐)	R	2
230	労働経済学（平成元年度限り） ……	475	61年度から	60	R	2
231	企業と会計Ⅰ（平成元年度限り） ……	477	61年度から	60	TV	2
232	企業と会計Ⅱ（平成元年度限り） ……	479	61年度から	60	R	2
233	マーケティング論 ……	481	1年度から	63	TV	2
234	経営組織論 ……	483	62年度から	61 (㊐)	R	2
235	経営科学 ……	485	62年度から	61	R	2
236	生産管理 ……	487	1年度から	63	TV	2
237	経営分析と財務管理 ……	489	62年度から	61	R	2
238	財務会計 ……	491	1年度から	63	TV	2
239	数理計画法 ……	493	1年度から	63	TV	2
240	産業と情報 ……	495	63年度から	62	R	2
241	産業と企業 ……	497	1年度から	63	R	2
242	産業と資源（平成元年度限り） ……	499	61年度から	60	R	2
243	産業と環境（平成元年度限り） ……	501	60年度から	58 (㊐)	TV	2
244	交通と通信 ……	503	62年度から	61	TV	2
245	流通と商業 ……	505	63年度から	62	R	2
246	サービス産業論 ……	507	62年度から	61	R	2
247	産業および生産としての農業 ……	509	1年度から	63	R	2
248	中小企業論 ……	511	63年度から	62	R	2
249	技術史・技術論（平成元年度限り） ……	513	61年度から	60	TV	2
250	産業技術の動向Ⅰ ……	515	62年度から	61 (㊐)	TV	2
251	産業技術の動向Ⅱ ……	517	63年度から	62 (㊐)	TV	2
252	システム工学（平成元年度限り） ……	519	61年度から	60	TV	2
253	人間工学 ……	521	63年度から	62	TV	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
254	情報工学	523	62年度から	61	TV	2
255	計測と制御	525	63年度から	62（㊐）	TV	2
256	設計工学（平成元年度限り）	527	61年度から	60	TV	2
257	物質工学	529	62年度から	61	TV	2
258	エネルギー工学	531	62年度から	61	TV	2
259	都市計画	533	63年度から	62	TV	2
260	産業と技術特論		63年度から			6
	平成2年度改訂開設科目					
261	仕事とくらしの経済学	535	2年度から	1	TV	2
262	管理会計	537	2年度から	1	TV	2
263	税務会計	539	2年度から	1	R	2
264	産業と環境・資源	541	2年度から	1	TV	2
265	技術史	543	2年度から	1（㊐）	R	2
266	システム工学	545	2年度から	1（㊐）	TV	2
267	設計工学	547	2年度から	1	TV	2

人間の探究

268	哲学思想史	549	62年度から	61	R	2
269	社会思想史（平成元年度限り）	551	60年度から	58（㊐）	R	2
270	知識と学問の構造	553	60年度から	58	R	2
271	行為と規範（平成元年度第1学期限り）	555	60年度から	58	R	2
272	宗教学を学ぶ	557	63年度から	62（㊐）	R	2
273	構造と解釈	559	63年度から	62	TV	2
274	存在と価値（平成元年度第1学期限り）	561	1年度から	63	R	2
275	哲学的人間学	563	63年度から	62	TV	2
276	日本の言語文化	565	1年度から	63	R	2
277	上代日本文学	567	63年度から	62（㊐）	R	2
278	和文古典Ⅱ（平成元年度限り）	569	61年度から	60（㊐）	R	2
279	和文古典Ⅲ	571	62年度から	61	R	2
280	和文古典Ⅳ	573	63年度から	62	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
281	近代文芸Ⅰ	575	62年度から	61（㊅）	R	2
282	近代文芸Ⅱ	577	63年度から	62	R	2
283	漢文古典Ⅰ	579	62年度から	61	TV	2
284	漢文古典Ⅱ	581	62年度から	61	R	2
285	西洋古典学	583	63年度から	62	R	2
286	日本語教授法	585	63年度から	62（㊅）	TV	2
287	歴史の理論	587	63年度から	62	R	2
288	日本文化史	589	63年度から	62	TV	2
289	アジア論Ⅱ	591	62年度から	61	TV	2
290	アジア論Ⅲ	593	1年度から	63	R	2
291	ヨーロッパ論Ⅱ（平成元年度第1学期限り）	595	62年度から	61（㊅）	TV	2
292	アメリカ論Ⅰ	597	61年度から	60（㊅）	TV	2
293	アメリカ論Ⅱ	599	62年度から	61（㊅）	TV	2
294	美の本質と様態（平成元年度第1学期限り）	601	62年度から	61（㊅）	R	2
295	文芸史と文芸理論（平成元年度限り）	603	61年度から	60	R	2
296	美術史と美術理論	605	62年度から	61	TV	2
297	演劇史と演劇理論	607	63年度から	62	TV	2
298	音楽史と音楽論	609	63年度から	62	TV	2
299	民族音楽	611	62年度から	61	R	2
300	文化人類学	613	61年度から	60	TV	2
301	アフリカ論	615	62年度から	61	TV	2
302	イギリスの言語文化（平成元年度限り）	617	61年度から	60	TV	2
303	アメリカの言語文化Ⅰ	619	1年度から	63	TV	2
304	アメリカの言語文化Ⅱ	621	63年度から	62	R	2
305	ドイツの言語文化	623	61年度から	60	TV	2
306	ドイツの言語文化Ⅱ	625	63年度から	62	TV	2
307	フランスの言語文化Ⅰ	627	1年度から	63（㊅）	TV	2
308	フランスの言語文化Ⅱ	629	63年度から	62（㊅）	TV	2
309	ロシアの言語文化Ⅰ	631	1年度から	63	TV	2
303	ロシアの言語文化Ⅱ	633	63年度から	62	R	2
304	人間の探究特論		63年度から			6

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
平成2年度改訂開設科目						
305	社会思想史	635	2年度から	1	R	2
306	思考と論理	637	2年度から	1	R	2
307	中古日本文学	639	2年度から	1 (㊐)	R	2
308	アジア論Ⅳ	641	2年度から	1	R	2
309	ヨーロッパ論Ⅰ	643	2年度から	1	TV	2
310	文芸史と文芸理論	645	2年度から	1	R	2
311	イギリスの言語文化Ⅰ	647	2年度から	1	TV	2
312	イギリスの言語文化Ⅱ	649	2年度から	1	R	2
313	博物館学Ⅰ	651	2年度から	1	TV	2
自然の理解						
314	解析学	653	63年度から	62	R	2
315	現代応用数学	655	62年度から	61	R	4
316	現代数学特論Ⅰ	659	62年度から	61	R	2
317	データ解析法の基本	661	63年度から	62	TV	2
318	データ解析法の進歩	663	63年度から	62	TV	2
319	統計学特論	665	61年度から	60	R	2
320	時系列論	667	63年度から	62	R	2
321	統計的データ解析とソフトウエア	669	1年度から	63	TV	2
322	量子論	671	1年度から	63	TV	2
323	現代物理学Ⅰ	673	63年度から	62	R	2
324	現代物理学Ⅱ	675	63年度から	62	TV	2
325	物質の科学Ⅰ	677	62年度から	61	TV	4
326	物質の科学Ⅱ	681	63年度から	62	TV	2
327	物質の科学Ⅲ	683	63年度から	62	TV	2
328	生命のしくみⅠ	685	1年度から	63 (㊐)	TV	2
329	生命のしくみⅡ	687	63年度から	62 (㊐)	TV	2
330	植物の生理	689	63年度から	62	TV	2
331	生態学概論(平成元年度限り)	691	61年度から	60	R	4
332	集団遺伝学	693	1年度から	63	R	2

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
333	動物の進化 ……	695	62年度から	61	TV	2
334	植物と菌の系統と進化 ……	697	62年度から	61	TV	2
335	動物の行動と社会 ……	699	63年度から	62	TV	2
336	脳と行動（平成元年度限り） ……	701	60年度から	58（㊦）	TV	2
337	太陽系の科学 ……	703	62年度から	61	TV	2
338	恒星天文学 ……	705	1年度から	63	TV	2
339	宇宙の構造と進化（平成元年度限り） ……	707	61年度から	60	TV	4
340	宇宙像の変遷 ……	711	62年度から	61（㊦）	TV	2
341	地球の科学Ⅰ ……	713	62年度から	61	TV	2
342	地球の科学Ⅱ ……	715	62年度から	61	TV	2
343	大気と海洋（平成元年度限り） ……	717	61年度から	60	TV	2
344	現代資源論（平成元年度限り） ……	719	61年度から	60	R	4
345	自然の理解特論 ……		63年度から			6
	平成2年度改訂開設科目					
346	応用数学 ……	723	2年度から	1	R	2
347	ベクトル解析 ……	725	2年度から	1	R	2
358	数学基礎論 ……	727	2年度から	1	R	2
349	計量生物学・行動計量学 ……	729	2年度から	1	TV	2
350	物質とエネルギー ……	731	2年度から	1	R	2
351	力とエネルギー ……	733	2年度から	1	TV	2
352	生態学概論 ……	735	2年度から	1	R	2
353	脳と行動 ……	737	2年度から	1（㊦）	TV	2
354	宇宙の構造と進化 ……	739	2年度から	1	TV	4
355	大気と海洋 ……	743	2年度から	1	TV	2
356	現代資源論 ……	745	2年度から	1	TV	2

5. 総合科目

357	生活と環境 ……	747	63年度から	63	R	4
358	心理と教育 ……	751	63年度から	63	TV	4
359	都市の研究 ……	755	63年度から	63	TV	4

		頁	開設年次	作成年度	メディア	単位
360	情報化時代の産業・技術	759	63年度から	62	TV	4
361	科学と宗教	763	63年度から	62	R	4
362	生命論	767	63年度から	62	TV	4
363	文学の東西	771	63年度から	62	R	4

＝ 生活と芸術 ＝（TV）

－ 日本生活文化史 －

〔主任講師：熊倉功夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

日本の芸術は西洋の芸術にくらべて独自の性格を持っている。芸術が純粋にその美を目標として創造されるのではなく、日本では生活の道具として制作される。また喫茶の習慣が、古今東西の美術工芸を取り込んで、茶の湯という独自の生活文化も作っている。芸能と工芸を軸に日本人の生活と芸術が結びついた文化の歴史を論じる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人の生活と芸術	日本人の生活と芸術を総合的にとらえるにはどんな視点があるか。生活文化としての展開をたどり、ことに室町時代以後における生活に即した新しい文化として、茶の湯の意義などを考える。	熊倉功夫（筑波大学教授）
2	茶の文化の成立	中国の茶の文化は、唐代に大きく成長し、日本にも９世紀に伝わってくる。さらに鎌倉時代にふたたび茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	熊倉功夫
3	供える花と飾る花	「花を瓶に挿す」ことは、仏教の伝来とともに供花として盛んになり、平安貴族たちはそれを楽しむようになる。「瓶の花」がいかにして生活空間に入ってきたかをみる。	熊倉功夫 山根有三（群馬県立女子大学教授）
4	南北朝時代の美意識	鎌倉時代末期以後、中国から輸入された書画や工芸品が珍重され、「ばさら」という新しい美意識が流行する。「座敷飾り」は洗練され、それを母胎に茶の湯といけばなは発展する。	熊倉功夫
5	書院の茶の湯	室町時代の武家文化の発達にともない、新しい生活様式が完成される。そうした様式の１つの核となるのが書院における茶の湯で、書院の茶といわれる。その姿を具体的に述べる。	熊倉功夫
6	室町時代のいけばな	「花を瓶に挿す」ことにおいて、技術や方法が問題となりはじめたのは室町時代、15世紀の中葉である。室町時代のいけばなの確立と展開を、花伝書などを引いて論ずる。	熊倉功夫 山根有三
7	わび茶の成立	京・堺などの都市には豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみ直した。村田珠光と武野紹鷗の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	熊倉功夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	千利休と桃山文化	わび茶の大成者千利休の茶とは、どのようなものであったのか。その生涯をたどりながら、わびを徹底させ、主客の礼法を完成させた利休の茶について考えてみる。	熊倉功夫
9	茶室の世界	茶の湯の発達はその舞台にもあたる茶室という独自の建築空間を展開させた。中世の書院造りから流れだす茶室の系譜をたどりながら、日本の住宅建築に与えた影響も考えたい。	同上
10	池坊専好の立花	江戸時代初期にあらわれた池坊専好（二代）は、いけばな史上最大の天才であった。専好により完成したいけばなの古典・立花様式について、専好の人物像とあわせてみてゆく。	熊倉功夫 山根有三
11	桂離宮と寛永文化	17世紀前半の文化を寛永文化とよぶ。公家、武家、町衆たちの協同した文化活動によって、繊細で装飾性豊かな芸術が誕生した。その性格を桂離宮をとおして考える。	同上
12	町人文化と建築	元禄時代を中心に町人の文化は遊芸の新しい展開をもたらした。遊芸は地方にも広がってゆく。京都の遊郭の建築、地方都市の町家建築のなかに、その実現をみる。	同上
13	料理文化の系譜	日本の料理は味だけではなく見る料理だといわれる。かって料理は立派な芸能であった。室町時代から江戸時代後期までの料理文化の流れを概観し、茶の料理の特質をみる。	同上
14	近代の工芸運動	日常生活の道具である工芸品に美を見いだし、これを民芸と名づけて評価したのが白樺派の宗教学者柳宗悦であった。民芸運動と柳の思想をたどりながら、その意義を考える。	同上
15	伝統文化と近代	近代になって西欧的な思考様式が取り入れられると同時に、伝統文化は大きく変貌した。伝統文化の衰退と変質がなぜ起こり、今日、ふたたび流行しているのはなぜかを問い直したい。	同上

＝ 日 本 の 教 育 ＝ （TV）

〔主任講師：深谷昌志（元放送大学教授）〕

全体のねらい

日本の教育の特色を、諸外国との対比を視野に置き、それと同時に、歴史的な系譜をふまえて掘り下げていきたい。１５回は、初等教育から高等教育への流れを追う形で構成してある。なお、巾の広い視野を必要とするテーマなので、放送教材作成にあたって、さまざまな専門家の協力を得た。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近代化と教育	日本の近代化を支えたのは教育の力だといわれる。たしかに、量的な普及という面で、日本の教育は、短期間に成果をあげた。しかし、質的な面では、急速な近代化のもたらした歪みが見受けられる。近代化の光と影は、現在、どのような姿を見せているのか。	深谷昌志
2	学 校	教育の中心は、なんといっても、学校教育であろう。そして、日本の学校は、社会的な期待に添った形で、多くの機能を果してきた。しかし、このところ、学校の機能を見直そうとする気運が強まっている。学校のどこに問題が潜んでいるのであろうか。	同 上
3	教 育 費	教育費については、伝統的に、受益者負担をめぐって論議が重ねられてきた。そして、公共による負担への働きが世界的な傾向であった。しかし、日本に限らず、欧米でも、教育費の公共負担をどの範囲にとどめるのかが社会問題になりつつある。	同 上
4	授 業	日本の教育のひとつの特色は、知識や技術を伝達するさいのたしかに見出しえよう。そうした成果が、学力の高さとなってあらわれるが、ここでは、一斉授業の系譜をたどりながら、日本の授業の持つ功罪を考察していきたい。	同 上
5	教 師	教職のあり方をめぐって、聖職論や労働者論、専門職論などが論じられてきた。全体として、教師たちの間に、専門職志向への動きが目につく。教師たちは、専門職のイメージの試に、教職がどのような形をとるのが望ましいと思っているのであろうか。	同 上
6	教 科 書	明治以後の教科書をみると、授業の形態に応じていろいろの種類のものがある。それらをみながら「教科書とは何か」を考えたい。また、外国の教科書のなかに私たちにとって参考となるものを探ってみたい。	天野正治（筑波大学教授）（国立教育研究所教授）
7	教 科	私たちは学校というと、すぐに国語・算数・社会といった教科を思い浮かべる。だが、教科というのは絶対不変のものではなく、歴史により、国によってさまざまの形をとる。今、わが国や世界において、教科の再編成がどのように進んでいるかを探る。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学力	入試は学力をはかることを目標にしているのだが、わが国の入試問題には知識・理解に関わる問題が多く、思考力、興味・関心、意欲などの側面が軽視されている。国際学力調査の結果なども含め、真の学力とは何かを探る。	天野正治
9	制服	今、大学では制服・制帽がほとんど姿を消したが、中学や高校の多くはそれを義務づけており、「服の乱れは非行のバロメーター」などと言われる。それは仮個性の型にはめる教育のあらわれではないのか。制服の歴史をさぐり、諸外国の様子などもみてみたい。	同上
10	非行	校内暴力やいじめなど社会問題化している現代の青少年非行について、その原因、背景、克服策などについて、実際にこの問題にとり組んできた人々の提言をもとに考える。現代の青少年の規範意識についても探ってみたい。	同上
11	国立と私立	我国の高校生の28％が、そして大学生の74％が、私立学校に在籍している。公立と私立の併存が、日本の中等教育、高等教育の一つの特徴といえよう。これまでの日本の教育拡大は、そのかなりの部分を私学に、依存してきた。しかし、その反面では、公私間の授業格差をもたらしており、こうした経済負担の格差を、いかに考えるべきかをめぐって、さまざまな議論がある。ここでは、こうした問題点の検討を行う。	潮木守一 （名古屋大学教授）
12	入試選抜	高校入試、大学入試をめぐって、さまざまな議論がなされている。高校はいまや中卒者の95％が進学するところとなっているが、その入試選抜をめぐる競争は、依然として厳しいものとなっている。一体、こうした入試競争の背後には、いかなる背景がひかえているのであろうか。また、大学入試をめぐっても、さまざまな改革案が提出されているが、一体、日本以外の国々では、いかなる方法がとられているのであろうか。	同上
13	教育と産業	日本の産業の海外進出はめざましく、多くの国々はこうした日本の経済的成功に、きわめて強い関心を払っている。外国の関係者は、こうした日本の奇跡の原因を、日本人の教育水準の高さに求めたり、あるいは企業内訓練組織の充実に求めたりしている。しかし、その反面、日本の教育が余り職業教育を重視していない、という事実を指摘する見方もある日本では、一体、教育と産業とは、どのような関係にあるのであろうか。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
14	学　歴　社　会	日本は学歴社会だとして、さまざまな批判をあびているが、一体、学歴社会とはどんな特徴をもった社会のことをいうのであろうか。また、実際問題として、日本はどの程度まで、学歴社会としての特徴をもっているのであろうか。こうした特徴は、どのような歴史的な背景から生じてきたのであろうか。日本以外の国では、学歴とはどのような意味をもち、そこには、どのような変化が現れはじめているのであろうか。	潮　木　守　一
15	生　涯　教　育	人生一生涯が、学習の過程とする考え方が登場するとともに、生涯学習論が多くの論議を呼んでいる。社会生活の複雑化、職業生活の高度化は、これまでの教育のあり方、考え方に、新しい発想の転換を求めている。生涯学習とは、一体どのような考え方を意味しており、現実問題として、生涯学習はどうような形で、具体化されつつあるのであろうか。新なメデイアの登場とともに、人間の学習スタイルは、どのように変わりつつあるのか。	同　　上

＝ 教 育 学 概 論 ＝ （R）

〔主任講師：田浦武雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し、理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達との接する面で、文化と人間との現実構造や変化過程を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。多くの教育問題との関わりを含め、教育の基本問題を研究し、それらの改善の方向を究明する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育学の意義	1～7の7回にわたって、教育学及び教育の意義を検討する。 教育学の概念、教育論と教育思想、教育学の始まり動向、日本における戦前と戦後の教育学の変遷について考察する。	田浦武雄（愛知学院大学教授）
2	教育の構造	人間形成には、すくなくとも素質と環境と教育との要素が含まれている。これら三要素の勧的関連の基本構造について、検討する。併せて、ＩＱをめぐる論争及び野生児の記録が示すものなどについて考察する。	同上
3	教育の機能	教育という用語を吟味し、意図的教育と無意図的教育との関連について考察し、教育の社会的機能とに文化伝達、社会統制、文化改造の諸機能に関して、検討を行う。	同上
4	成長と教育	教育は人間の成長と発達をめざしている。成長の概念を重視したジョン・デューイの教育学の中心的主張と、かれが批判した諸学説すなわち準備説・開発説・形式陶冶説などの問題点を考察する。併せて、デューイの成長観について検討する。	同上
5	発達と社会化・文化化	発達の類似概念としての成長・社会化・文化化との関連について考察する。人間の成長・発達の過程の動態を捉え、いかに改善していくかの処方の重要性について検討する。	同上
6	発達と教育の理論	人間の成長・発達の過程の把握とその処方をめざすものとして、成長・発達の教育学を志向することが重要である。そのための学際的研究の必要性、成長・発達の考察の視点として文化内存在の概念を吟味し、全人的成長の構造を検討する。	同上
7	現代教育の動向 ―教育の人間化	現代教育の動向のうちで、注目すべきものは教育の人間化の追究であり、人間的教育の確立である。その構成要素として、民主的価値観、豊かな感情・情操、確かな知識、不屈の意志、逞しい健康、道徳的実践力、創造的態度などについて検討する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代教育学の 類型　1 進歩主義・伝統主義	8～11の4回にわたって、現代教育学の類型について検討する。 戦後わが国の教育に影響を与えた進歩主義と、それと対立する伝統主義とについて、それぞれの理論的特色を類型的に考察する。	田浦武雄
9	現代教育学の 類型　2 改造主義・実存主義	プラグマティズムの立場にたちながら、進歩主義とちがった歩みをした改造主義、および人間存在の問題を重視した実存主義について、理論的特色を検討する。	同　上
10	現代教育学の 類型　3 教育の現象学・教育人類学・教育社会学	現代教育学の新しい動きとして台頭した教育の現象学と教育人類学について検討する。教育の現象学は、実証主義のゆきづまりに対処して興り、実存主義の傾向をもった点、教育人類学は、教育現象についての文化人類学的研究として注目されている点を中心に考察する。あわせて教育社会学の特色も検討する。	同　上
11	現代教育学の 類型　4 社会科学的教育学・分析哲学・教育人間学	社会科学的教育学、とくにマルクス主義教育学は、社会主義圏の拡大とともに勢力を増しているが、その理論的特色を考察する。他方、イデオロギー的には中立であるが、哲学的分析を重視した教育学、いわゆる分析哲学の検討を行う。近年台頭している教育人間学について考察する。	同　上
12	教育の文化的基礎	12～15の4回にわたって、現代社会と教育との関連構造について検討する。 教育は文化と密接に関連している点を、能力と文化的多様性、文化的産物としての能力、文化的相対主義、文化と人間形成、教育における文化研究等の側面に分けて考察する。	同　上
13	地域社会と教育	教育をめぐる地域社会の問題、地域社会における学校の役割について検討し、学校の人間化と社会の教育化との関連について、教師の指導力の向上、非行問題への対応、地域社会のもつ教育力の向上などの側面にわたって、考察を行う。	同　上
14	情報化社会と教育	情報化社会とマス・コミュニケーションの関係について考察し、併せて、情報化社会における教育のありかたについて、判断力の育成、学び方の学習、教養の向上、人生のビジョン、民主的価値への献身、生涯学習の必要性などの側面にわけて、検討する。	同　上
15	家族・仲間集団 と教育	幼少期から青年期にかけて、人間形成に影響を与える家族集団・青少年集団と教育との関係について検討する。家族と教育との関連については、家族集団の構造、機能の変遷、教育的機能の面から考察し、仲間集団と教育については、発達段階に応じた構造を考える。	同　上

＝　心　理　学　＝　（TV）

（主任講師：大山　正（日本大学教授）
　　託摩武俊（東京都立大学教授））

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態と感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。つぎに、このような人の心と行動が、子供から大人へと発達していく過程において、いかに変化していくか、また個人個人によりどのように違うかについて述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心理学とは	心理学とは何かについて、2回以降の内容を説明しながら具体的に述べ、つぎに、心理学の課題対象方法などをめぐって、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大山　正（日本大学教授） 託摩武俊（東京都立大学教授）
2	環境の認知Ⅰ 感覚	人間が環境の中で生活し行動し、環境に適応していくためには、まず環境の状況を把握する必要がある。その手段としての感覚の特性について考える。	大山　正
3	環境の認知Ⅱ 知覚	われわれが環境の状況を見、聞き、感じる場合、それは単なる感覚のよせあつめでも外界の忠実な反映でもない。この観点から知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同　上
4	情報の処理Ⅰ 注意と探索	われわれが日々接している情報の量はきわめて膨大であるが、われわれはその一部しか利用していない。この観点から注意と知覚的探索について述べる。	大山　正 御領　謙（千葉大学教授）
5	情報の処理Ⅱ 記憶	人間が利用している情報のかなりの部分は記憶として保存されている過去の情報である。この記憶の成立、保持、検索、変容などについて述べる。	大山　正 小谷津孝明（慶応義塾大学教授）
6	情報の処理Ⅲ 思考と言語	選択され、検索された情報を用いて、ある目的のために、人が問題を解決していく過程が、思考である。その際には、人々が長年にわたり作り上げ、個人が幼時より習得してきた言語の体系が大きな役わりを演ずる。	大村彰道（東京大学助教授）
7	経験の効果学習	多くの生物とともに人間は、過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容している。この学習の過程を、条件づけの原理に基づいて考えてみる。	片桐雅義（宇都宮大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	要求と感情	人が行動を起こすのは何らかの要求にもとづいている。要求には、多くの動物と共通している生物的要求と、人間の社会生活にもとづく社会的要求がある。また、これらの要求が実現される過程にさまざまの感情と情動が生じる。	大山　正 託摩武俊
9	心の発達Ⅰ 乳児期・幼児期	他の動物に比べて、人には本能的行動が少なく豊かな可塑性をもって生れてくる。赤ちゃんが周りの人々とのかかわり合いの中で、どのように成長していくか、幼児期の心の特徴はどのようなところにあるかについて述べる。	託摩武俊 柏木恵子 （東京女子大学教授）
10	心の発達Ⅱ 青年期から老年期	青年期から成人期、老人期にかけての心の変化、とくに他人との関係、自分自身についての考え方や感じ方の変化について述べ、さらに現代のわが国の青年の特徴や、高齢者の諸問題についても言及する。	託摩武俊
11	個人差Ⅰ 知能	知能とは何か、知能にはどんな働きがあるのか、知能はどんな構造をもっているのか、知能の測定は可能か、天才とは何かなどについて述べる。	伊藤隆二 （横浜市立大学教授）
12	個人差Ⅱ 性格	性格に認められる多様な個人差の形成過程、性格の類型、性格の測定法、性格の認知、性格の好き・嫌いなどについて述べる。	託摩武俊
13	社会的行動	人はつねに他人とのかかわりをもって生きている。個人と集団との関係、他人に対する態度の形成過程、人と人との距離感、人間関係にみられる日本人の特徴などについて述べる。	永田良昭 （学習院大学教授）
14	心の異常	精神病、神経症、性的倒錯、非行、自殺などの実態、現在の特色、これらの原因、対策などを取り上げる。	福島　章 （上智大学教授）
15	心理学の応用	現在の心理学は個人の生活とも社会の諸事象とも密接に関係している。心理学の研究成果や研究法が実際にどのように応用されているかを実例をあげながら述べる。	託摩武俊 大山　正

＝行　動　科　学＝　（TV）

〔主任講師：小川　隆（明星大学教授）
　　末永俊郎（帝京大学教授）〕

全体のねらい

人間の行動に関する諸科学の概説ではなく、心理学としての行動科学を扱う。前半は個体の行動について生得的、習得的行動を扱い、後半は社会的行動を扱う。心理学概論、他の心理学関係の科目で多くは扱われないが、行動科学の視点からは大切な比較心理学、社会心理学の領域に重点が置かれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行動科学の視点	1　心理学としての行動科学 2　行動の区分 3　行動と環境	小　川　　隆 （明星大学教授）
2	生得的行動 ——環境と行動	1　行動の発生 2　行動環境	同　　上
3	生得的行動—— 行動の系統発生Ⅰ	1　行動の種類 2　種に固有な行動の特徴と意義 3　行動の相同 4　行動の相似	渡　辺　　茂 （慶応義塾大学・助教授）
4	生得的行動—— 行動の系統発生Ⅱ	1　自発生と内部要因 2　行動の周期性 3　行動の選択 4　行動の階層性 5　行動の最適化	同　　上
5	生得的行動—— 行動の個体発生	1　系統発生と個体発生 2　行動の発達的変化 3　個体発生の生得性と習得性	小　川　　隆
6	行動の生理学	1　はじめに　　6　連合野の働き 2　空間定位とは 3　フクロウの音源定位 4　こだま定位のメカニズム 5　頭頂葉と空間定位	酒　田　英　夫 （日本大学教授）
7	習得的行動 ——行動の分析	1　習得的行動の種類 2　実験的行動分析	小　川　　隆

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	習得的行動 ——認知機制	1　刺激性制御 2　条件性強化	小　川　　隆
9	習得的行動 ——行動機制	1　強化 2　有害刺激の制御 3　選択行動	同　　上
10	言　語　行　動	1　オペラント行動としての言語行動 2　言語行動の機能 3　言語行動の行動的基礎	佐　藤　方　哉 （慶応義塾大学 教授）
11	選択行動 ——意志決定	1　意思決定論 2　主観確率 3　効用 4　認知的意思決定論	戸　田　正　道 （中京大学教授）
12	行動修正Ⅰ ——応用行動分析	1　行動修正とは何か？　　6　結論 2　目標の設定 3　行動の基本原理 4　行動を増加させる手続 5　行動を減少させる手続	出　口　　光 （明星大学講師）
13	行動修正Ⅱ ——教授工学	1　システム分析 2　トークン経済システム 3　個人化教育システム （Personalized System of Instruction PSI）	同　　上
14	行　動　薬　理　学	1　薬物の行動に対する効果 2　薬物の強化効果 3　薬物の弁別刺激効果 4　まとめ	安　東　　潔 （財実験動物中央研 究所精神薬理部長）
15	行　動　工　学	1　科学的管理法 2　科学的管理法の問題点とその後の展開 3　行動解析の事例	西　岡　　昭 （労働科学 研究所員）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	社会的行動の発生	1　社会的行動とはなにか 2　動物の社会的反応 3　乳児の社会的反応 4　母子関係 5　言語の発生	末永俊郎 （帝京大学教授）
17	社会的行動における学習	1　レスポンデント条件づけ 2　オペラント条件づけ 3　モデリング 4　態度形成・対人魅力と学習 5　攻撃・援助行動と学習	安藤清志 （東京女子大学助教授）
18	社会的認知と行動（Ⅰ）	1　認知のバランス 2　認知の不協和 3　自由の認知	山口勧 （東京大学助教授）
19	社会的認知と行動（Ⅱ）	1　因果関係の認知 2　因果帰属と行動 3　社会的比較と行動	同上
20	社会的行動と自己	1　自己意識・自己概念・自尊心・自己関係 2　自己意識と社会的行動 3　自己概念と社会的行動 4　自己評価・自尊心と社会的行動 5　自己開示と社会的行動	安藤清志
21	対人場面における行動Ⅰ	対人場面における作業成績	中村陽吉 （学習院大学教授）
22	対人場面における行動Ⅱ	対人行動における他者共存の影響	同上
23	対人場面における行動Ⅲ	対人距離と行動	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	集団内行動Ⅰ	1　集団とは何か 2　集団に参加するのは何故か 3　集団の特徴	古畑和孝 （東京大学教授）
25	集団内行動Ⅱ	1　個人の遂行と集団の遂行 2　課題の性質・型と生産性との関係 3　集団における意思決定	同　上
26	集団内行動Ⅲ	1　リーダーシップの概念 2　リーダーシップの機能 3　リーダーの情況との適合	同　上
27	集団間行動	1　集団間行動とは何か 2　集団間における相互作用 3　集団間葛藤の軽減 4　実験的間接的経験を通しての国際関係	同　上
28	集合行動Ⅰ	1　集合行動の類型 2　集合行動の一般的特性 3　集合行動における人間的行動の特徴	岡部慶三 （帝京大学教授）
29	集合行動Ⅱ	1　流言 2　パニック	同　上
30	行動科学の展開	1　行動科学の歴史 2　今後の展望	末永俊郎

＝ 現代の人間観と世界観 ＝（R）

〔主任講師；中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

激動しつつある複雑多様な現代の文化・社会・生活の根本に働いている人間観と世界観の本質をさまざまな角度から照明し、現代に生きることの意義を考えたい。第2回以降は2回ずつ担当講師によるそれぞれ専門的な視点からの講義を行い、各2回目の終りには主任講師との対談によって理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	私たちにとって「現代」はいかなる意味を持つか、現代の文明論的な特質は何か、現代の人間観と世界観はどのようなものか、などについて全般的・総括的に論ずる。	中埜　肇（放送大学教授）
2	現代社会に見られる人間観 ―技術と現代文化(1)	近代の産業社会を「技術」の世界として捉え、そのことを世界観的な意味を考える。そのさい、技術をそれ以前の「ａｒｓ」の観念と比較し、その同じ根から「芸術」の概念が生じたことに注目し、その状況を現代以前の特色として論じる。	山崎正和（大阪大学教授）
3	現代社会に見られる人間観 ―技術と現代文化(2)	前回の論述を受けて、現代の脱産業社会の特色を、技術・芸術分裂の時代の終りの始まりとして論じる。現代の新しい生産と消費動向のなかに、古い「ａｒｓ」の復活の可能性を考えたい。	同上
4	哲学的思想に現れた現代の人間観と世界観 (1)	現代思想の源流をだいたい今世紀のはじめにもとめ、哲学のさまざまな問題とその解決をめざすさまざまな方法が今日までどのように展開してきたかを、いわばタテに考察する。	塚本明子（東京大学助教授）
5	哲学思想に現れた現代の人間観と世界観 (2)	現代における哲学のおかれた状況とその使命をさぐるため、哲学とともに今世紀さまざまに展開してきた、哲学以外の学問分野との相互連関において、また学問の外の人間の活動や世界の問題との連関において、哲学をいわばヨコに考察する。	同上
6	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (1)	この回は、科学・技術の成立を捉し、あるいは逆に科学・技術の進展によって深化された世界観を中心に考えてみる。物質、エネルギー、情報の三つの基本概念によって支えられた現代の世界観はどのような姿をしているか学ぼう。	村上陽一郎（東京大学教授）
7	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (2)	この回は前回に扱った世界観の中で、人間がどのような位置にあるかを考えてみる。特に心理学、医学の《科学・技術化》が進むのに並行して、人間に対する考え方が大きく変化していることを中心に、人間疎外といわれるものにも触れよう。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (1)	精神医学は人間を1)生物学的2)心理学的3)社会学的4)形而上学的な、多元的存在としてとらえる。人間は「生物としてのヒト」であるが、一回的でかけがえのない自覚的存在である。この回は、とりわけ行動研究や脳研究が人間観・世界観に及ぼす影響を考える。	小田　晋 （筑波大学教授）
9	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (2)	この回には、現代人のこころの病態と行動の異常を通してみた現代の人間観と世界観の特徴を考える。精神病の軽症化と一般化、異常ー正常の境界喪失、妄想の内容変化などを通じて、現代人における境界線喪失・情報化・物象化などの特徴が浮かび上ってくる。	同　上
10	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (1)	個別・特殊な宗教の立場からではなく、人類（史）の宗教現象の統一的理解という宗教学の課題・視点から現代世界の宗教（現象）ーそれは多様なものであるーに顕わになっている人間観と世界観の特徴と意味について、とくにまずその多様な現われについて考える。	荒木美智雄 （筑波大学助教授）
11	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (2)	現代の多様な宗教現象を人類の宗教史から類型学的に把握し直して、その特徴と意味について考える。	同　上
12	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (1)	芸術作品の中には、同時代の本質を映し出したものがある。そういった視点から、20世紀の特に現代的な芸術作品ー　美術、音楽、文芸などのジャンルにおけるいくつかの特色ある作品に映し出された現代の人間の姿を見て、その意味について思想的に考える。	増成隆士 （筑波大学助教授）
13	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (2)	(1)と同様の視点から、現代の世界の特色について、この場合は特に現代人の居住空間、生活環境という具体的な局面で見つつ、その意味について考える。建築論・都市論のほか絵画や文芸に描かれた現代世界の様相およびそれについての思想を問題にする。	同　上
14	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (1)	現代人の生活は、新聞・テレビ・雑誌などのマスコミと切り離しては考えられない。特にテレビの影響力は大きい。この映像を中心とした擬似的現実の受容と共有が人間をどう変えたかを論ずる。	青木　彰 （筑波大学教授）
15	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (2)	電気通信と情報処理の技術の発達によってもたらされる「高度情報社会」では、情報の洪水に対する賢明な選択が求められる。ニューメディアの登場など今後の情報環境の変化と人間の関係について考える。	同　上

＝哲学の基礎＝（R）

〔主任講師；山本　信（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学は我々の日常生活に根ざし、人生観や世界観の問題に連なるものではあるけれども、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学とは何か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山本　信（東京女子大学教授）
2	哲学史の意義	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点でも特別の問題が課されている。	同　上
3	哲学の諸部門	普通哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見とおしをつける。	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「本質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとって最も基本的な諸概念をとりあげる。	同　上
5	主観概念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上
6	近世的二元論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものであり、観念論と唯物論という対立的立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上
7	認識論の系譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論的問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにし、その後の展開を跡づける。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性をになう一方の柱として、どのように展開されてきたかを考察する。	山本　信
9	近代科学の思想史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性をになうもう一方の柱として、思想史的に何を意味しているかを考察する。	同上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考法、それはまたわれわれが小学校以来の教育で叩きこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その特質と帰結とを、いくつかの項目にわけて露わにする。	同上
11	生命と人間性	科学の進歩は、生命現象をも物理的化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剝奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同上
12	心身問題	からだとの関係において心とは何なのかということは、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。特に近世的二元論の文脈のなかで現在どう考えたらよいか。	同上
13	自由と必然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同上
14	真理論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問が最後までつきまとう。ではそもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見てわれわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、ということを知るために、現代の諸学説に現われている思想的動向を概観する。	同上

＝古代中国の思想＝（R）

〔主任講師：戸川芳郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国古代中世に生れた思想の歴史を概観する。その源流を追って、発現のすがたと現実に果たした役割またその後世への影響をえがきつつ、中国思想のいとなみを把握したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	“仁”と孔子	周代文化の基礎ー古代宗族制の世界ーが再編にさしかかった春秋後期、はじめて人間関係のあり方を自覚した孔子が出現する。この儒家の開祖の思想と行動を時代の様相とともに説明する。	戸川芳郎（東京大学教授）
2	墨家集団の思想	礼楽文化に依拠した儒家の思想基盤をおびやかす墨家の、“兼愛・交利”の考えと党派的な結社集団の行動軌跡をたどる。“非行・節葬”の社会批判や“尚同・天志”の政体論にも言及する。	同上
3	孟子の王道論	戦国期の社会変動のただ中、聖人孔子を聖王の系列に加えた孟子は、その正統伝道者として王道政治の理想を遊説する。“仁義礼智”を支えた性善説を紹介し、その思想史上の評価を行う。	同上
4	荘子と老子	人為を排した「全性保真」の養生論と相対世界を脱して“斉同”の真実在をもとめた荘周の夢は、古代観念論の極致である。後続の『老子』の“無為而無不為”の政術をあわせ論ずる。	同上
5	“礼”と荀子	古代中国は、荀子の指示する方向に進んだ。天人の分離・後王思想・性悪説によって“礼法”秩序を支える根源を現実の実力者王者の権威に帰した。この、法家思想を導いた内容を伝える。	同上
6	諸子百家	儒墨二大集団のほかに戦国中・末期に活躍した遊説の士のうち、のちに名家ー恵施・公孫龍ー、法家ー商鞅・申不害・慎到・韓非ー、縦横家、兵家と称される思想家の行動をあつかう。	同上
7	陰陽思想と「易伝」	中国の生んだグローバルな思想とは、漢初の陰陽二元と五徳終始の説である。“変易”原則を説く「易伝」へも習合され、自然と人事を包括して、形而上の一者“太極”の概念を生む。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	司馬遷と歴史記録	叙事巨篇『史記』に現れた司馬遷の意図をその列伝を主軸に窺うとともに、周代伝来の政事記録―『尚書』と『春秋』を紹介する。加えて春秋学とその三伝を説明し史家の体例に論及する。	戸川芳郎
9	黄老思想と董仲舒	雑家の書『呂氏春秋』と『淮南子』を黄老思想を媒介にして説明する。一方、国教に立った儒学の教義、董仲舒の政治理論―天人相関の陰陽災異思想、春秋三統説、君権則天主義を述べる。	同上
10	儒教と経学	王朝支配の体制教学として前漢後期から清末に及んだ儒教について、その特徴を綱常倫理・修己治人・名分論・権威主義にわけて概観し、その学術の内容―経学―の史的展開を跡づける。	同上
11	漢家の復興	王莽新の簒奪政権をはさんで、当時の学術・文化を象徴する、劉向父子と班氏一族の事業を紹介する。前者の中秘書の総合整理、後者は劉漢受命説に立つ断代史『漢書』の編纂である。	同上
12	讖緯思想と王充	陰陽災異説から「以往知来」の予言化が進み、図讖の政術利用と緯書の出現に及ぶ。その批判者王充の唯物論的な気一元論と徹底した命定論を紹介し、その頌漢思想との関わりを述べる。	同上
13	許慎と鄭玄	学官と学制が整備された後漢礼教国家は、学術の分化と論争をよび、また総合解釈へと動く。漢唐訓詁学を代表する経学―許慎と鄭玄―を登場させその閲歴と学問のあらましを見る。	同上
14	生成論と"無"	「太極」「元気」の統合概念が成立すると、後漢期を通じて宇宙生成論が発達し魏晋期に三気五運へと展開する。その展開の様態を追究する一方「無」の存在論の深まりを王弼の所説に見る。	同上
15	人間史のこと	人間社会の歴史を遡って、その開闢に及び、宇宙生成と人間史とを継ぎ合わせたのは、魏晋期である。史体通史の創制とその盛行を通じて歴史意識を探る。末尾に、中国思想をまとめる。	同上

＝ 近代の思想 ＝ （R）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代というものをある時間的な長さをもつひとつの思想的な構造体と見なし、その内実を神・人間・自然という３つの主題にもとづいて分析する。講義の対象は主として西欧の近代であるが、できるかぎり世界全体に及ぶ普遍的な視角をも忘れないようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「近代」の概念(1) 思想としての近代	「近代」という概念を検討することによって、それにまつわる問題点を指摘し、かつ近代をひとつの思想と考え、その内容について考える。	中埜　肇 （放送大学教授） 湯川　佳一郎 （法政大学教授）
2	「近代」の概念(2) 中世と近代	近代は中世に対する明確な対立を自覚することから、その対立の本質を具体的に考察する。	同上
3	近代における「神」の概念(1) 近代初頭の宗教・哲学・科学の関わり	ルネサンスから17世紀までに見られるキリスト教信仰と哲学思想や自然科学との関わりのなかで考える。	同上
4	近代における「神」の概念(2) 近代の宗教運動	神秘改革・宗教改革・ピエティズム・ピューリタニズム・ジャンセニズムなどの宗教運動を近代人が提示した信仰の内面化としてとらえ、その思想的な意味をさぐる。	同上
5	近代における「神」の概念(3) 啓蒙思想と宗教	啓蒙思想によって合理的なものに変容させられたキリスト教の様相を、理神論や無神論について考える。	同上
6	近代における「神」の概念(4) ロマン主義と宗教	19世紀におけるロマン主義の流れのなかで試みられた哲学と宗教との統合を「理性宗教」について考察する。	同上
7	近代における人間像(1) 新しい人間	近代の出発点において理念的・現実的に形成された新しい人間の像を具体的な例示にもとづいて概観する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近代における人間像(2) 「心」の優越	近代の思想全体にわたって「心」・「精神」・「自我」・「意識」が優越していたことを、主として哲学の流れのなかでとらえる。	中埜　肇 湯川佳一郎
9	近代における人間像(3) 市民社会	近代人の社会性の凝縮的表現とも言うべき「市民社会」の思想的な意味について考える。	同　上
10	近代における人間像(4) 国家と歴史	「近代国家」と呼ばれるものの思想的な基礎と、ロマン主義のもとで拡大した「歴史意識」の思想上の意義を検討する。	同　上
11	近代における自然観(1) 近代的自然観の特質	近代になって成立した新しい自然像・宇宙像の思想的な意味を、それ以前のものと対比して考察する。	同　上
12	近代における自然観(2) 自然科学の成立と自然哲学	「自然科学」の思想的な基礎および近代になっても生き続ける「自然哲学」と自然科学との関係を論ずる。	同　上
13	近代における自然観(3) 人間的自然と自然法	「人間的自然」（human nature）の自覚にもとづいて形成された思想の展開と、それに由来する近代の自然法思想について述べる。	同　上
14	近代における自然観(4) ロマン主義の自然概念	ロマン主義が構想した「生きた自然」の思想や美的・目的論的自然観について、その否定的・肯定的な意味を考える。	同　上
15	近代と現代 近代の否定としての現代	現代は近代の「死」から生れたと言われる。その「死」の意味と、その「死」から生れた現代の思想的な特質や問題点とを考慮する。	同　上

＝ ことばとコミュニケイション ＝ （TV）

〔主任講師：吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

ことばがコミュニケイションの中で果す役割を考えることを通じて、心、物、抽象的なもの、の三つのものの間の関係についての知見をえることをめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	「コミュニケイション」の語義・表現と内容指示による説明　唯物論　哲学	吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）
2	広い意味でのことば	景色　みたて　遺伝子　絵・音楽　メタ言語	同上
3	せまい意味でのことば	心の存在・名詞　話の世界　複数の可能性論理	同上
4	鳥や獣のことば	話す鳥　類人猿の文字　ア・プリオリ主義	同上
5	ことばとコミュニケイション	文の正しさ「良心」　ことばによってつくられた世界	同上
6	ことばと心	五感でさわれるもの　文脈と存在　コンピュータ　機械としての脳	同上
7	物とことば	物体　空間・時間　種類　形而上学　物の世界	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	論理とことば	自然科学と常識　論の単語　数学の応用 お伽噺　集合論への還元　語際性 論証の直観	吉田夏彦
9	計算機とことば	論理設計　「生物」　配号配列の変形 自然言語	同　上
10	ことばの背景	母語と外語　文学の翻訳　風物　習慣 身ぶり　感情　木敦どり	同　上
11	個　　物	心　プログラム　個体　種類の限定　自分	同　上
12	モ　デ　ル	人物画　幾分学　数学的な構造　模型　仮説 理論　認知科学　文法　規範　規格	同　上
13	表現と内容	写真　俳句　心　正文	同　上
14	語法の問題	人工語　主語　「君は悲しい」 「はい」と「いいえ」　模形性	同　上
15	終　　に	「意味」　「外来語をつかうな」　思いやり 正書法　母語　ことば自体の価値	同　上

＝ 思 考 と 論 理 ＝（R）

〔主任講師：大森荘蔵（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

思考、論理という曖昧模糊とした二概念を明確にすることによって、両者の関聯が言語の場にあることを示そうとする。そして具体的に日常日本語の中から若干の語の意味規則を撰んでそれらの規則から現行市販されている教科書の論理学が導出されることを示すことによって論理の言語規則説の一般的証明を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	本章の目的　本題の誤解　「思考」の曖昧さ　「思い」も思考　「思い」の言語化　言語規則説　記号論理学　我が国での記号論理　思考と論理　規則説の述べ方	大森荘蔵（東京大学名誉教授）
2	思考とは？	思考の意味の曖昧さ　「思い」としての思考　知覚（perception）に対しての思考（conception）　思考的理解の様々　知覚の中に籠った思考　四六時中常に思考	同上
3	思考と言語	経験は普通言語化されない　言語以前の経験という誤解　想起とは過去形の経験　思考が言葉になる　夢の場合　繰返して誤解を排する	同上
4	論理とは？	論理的正しさを手掛りにして「論理」を考える　排中律の形式の正しさ　言語規則説　出発点となる語を選ぶ一四つの接続詞　それら接続詞の意味規則　論理学の導出　結果の検定　日本語から論理学が導出される　言語規則と論理的正しさとの関係の実例　平面幾何学の語群　親戚名集団　等高線の意味により平面図から切断面図を導出する	同上
5	言語規則から論理を導く	言語規則説の証明の必要　局所的論理　全域的論理　非主題的な言葉から出発　非主題的な名詞・動詞　接続詞は非主題的　真理値表による接続詞の意味表現　真理値表を使って複合文の真理値を決める　恒真文型　接続詞間の依存関係	同上
6	述語論理(1)	言語規則説を述語論理に及ぼす　主語ー述語の表表記法　関係を含む述語の表記法　「すべて」の表記(x)　「すべて」の範囲　話題世界を不定にしておく存在記号の導入　最大数に関する文例　束縛変項、自由変項述語文の簡単な表記法　真理値による述語の定義　n座述語　$(xi)H(x_1, x_2, xn)$　と$(xi)H(x_1, x_2, xn)$の真偽　述語論理の文型　回帰定義　妥当文型　公理系による公式的証明	同上
7	述語論理(2)	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　総称詞の接続機能　論理は世界に相対的　E.T生物の論理	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	異なる言語に異なる論理？	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　論理は世界に相対的	大森荘蔵
9	論理的必然性	必然性をとり上げる　論理的文は経験的検証と無縁　排中律の場合　規則に従う　規則に従わないと	同上
10	古典的三段論法	古典的三段論法と記号論理学　三段論法各種　正しい三段論法　推論型と文型　推論型と文型の相互導出　接続詞　矛盾文型から任意の文が推論できる	同上
11	思考の論理性	二つの結論　思考は必ず論理的？　論理と言い換え　首尾一貫　はやり言葉の論理	同上
12	形式化とコンピュータ	形式性の必要　形式化と機械化　算盤　コンピュータ　接続詞に対応するスイッチ回路　・のスイッチ　Vのスイッチ　～のスイッチ　機械的解法　決定可能性	同上
13	人間・脳・コンピュータ	言い廻しの危険　§1コンピュータ　コンピュータは「計算する」　機能的同類化　§2脳「脳が…する」　脳過程　重ね描き　キメラ命題　キメラ命題は無意味　脳には機能的同類化は及ばない	同上
14	言語と世界	言語表現という誤解　事物の輪郭　「家」の固定「家」の制作　言葉に生活が籠る　人の動作　カントの図式論も同様　時間順序　時間順序の制作　要約　人間的意味を世界に与える	同上
15	論理と世界	世界の法則としての論理　論理は経験法則ではない　論理は言語を通して世界に成り立つ　時間順序　カントと規則説　今一つの観点　命題論理の接続機能　古典物理と量子論　弁証法論理　有効性の観点　結論	同上

＝記　号　論＝（TV）

〔主任講師：吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

論理学の成果にもとづいて記号の役割についてのべることに第一の重点をおき、ついて、より広い見地から記号について論じ、哲学と記号論との関係についてものべる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	変項	1. 記号とは何か 2. 変項 3. 論理学 4. 変数 5. 噂話と筋書 6. 代名詞	吉田夏彦 （お茶の水女子大学教授）
2	形式と抽象	1. 抽象と捨象 2. 形式 3. 文脈 4. 俳優	同上
3	そのほかの論理記号	1. 「である」の分析 2. 否定の記号 3. 連言記号 4. しばり変項と存在記号 5. 定義 6. 必要最小限と実用 7. 実例	同上
4	計算と証明	1. 証明問題 2. 論理計算 3. 証明の記号化	同上
5	形式化	1. ブルバキズム 2. つかわれる可能性 3. 不完全性定理 4. メタ理論 5. メタ理論の形式化 6. 科学の理論の形式化	同上
6	記号の濫用	1. 2つの導入のしかた 2. クラス表現 3. 定義の例 4. ラッセルの矛盾 5. 帰謬法	同上
7	ものごと	1. 架空と実際 2. 唯名論 3. 形而上学 4. 名前 5. 実体 6. 心 7. ものごと	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	話	1. 意味 2. 分節性 3. 話の両面 4. 話の多義性 5. 変項としての話	吉田夏彦 （お茶の水女子大学教授）
9	記号の役割	1. 嘘と本当 2. 矛序 3. 相対的真実 4. 人為 5. 呪文と記号	同上
10	環境としての記号	1. 意識の中の環境 2. 自然環境 3. 風景の描写 4. 心とことば 5. 数字と数 6. 物質	同上
11	記号としての環境	1. 心とひろい意味での記号 2. 記号の独立 3. 設計された環境	同上
12	かたち	1. 宗教美術 2. 図形 3. 美術品	同上
13	楽譜と音楽	1. 歌 2. 楽譜 3. ことばとの比較 4. さまざまな問題	同上
14	自然と記号	1. 天文気象 2. 解読 3. 自然科学の優位 4. 実在	同上
15	終に	1. 1つの図式 2. 記号の変換 3. 読者へのすすめ	同上

＝ 比 較 思 想 論 ＝（TV）

〔主任講師：中村　元（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の思想の発展に関して、単に知識を伝えるというのではなく、世界が一つになり、万事がグローバルに考慮されねばならぬ時代になったので、＜思想＞そのものを取り上げて、東西を通して発展史的に述べて行きたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	比較思想論とは何か	思想は万人に承認され得るものである。この視点に立って、学問のセクショナリズムを打破し、普遍的思想確立のために諸文化圏の思想の比較考察が必要であると説く。	中村　元（東京大学名誉教授） 前田専学（東京大学教授）
2	比較思想論の発展	「比較思想論」はアメリカやヨーロッパにおいて長い発展史があるが、インド・シナ・日本など東洋においても古い歴史を有している。こうした東西の比較思想の歴史を概観する	中村　元 松本照敬（大東文化大学教授）
3	古代思想の特徴神々と究極のもの	どの文化圏においても最古代にはそれぞれに民族宗教が形成され、多くの神々が崇拝されていたが、やがて神々を超えた真の実在を探究する哲学的思惟が起こったことを考察する。	中村　元 上村勝彦（東京大学助教授）
4	自由思想家の出現	もろもろの文化圏のうちでも特にギリシャ・インド・シナにおいてそれぞれの伝統的な思想に反抗した唯物論・快楽論・道徳否定論・宿命論・懐疑論などの自由思想家を紹介する。	中村　元 丸野　稔（早稲田大学助教授）
5	人間の反省	人間が現実のすがたを直視し、現世の苦しみ、はかなさ、無常を自覚して、それらを超克することによって真の自己を探求する動きが起こったことを論じる。	中村　元 田辺和子（名城大学講師）
6	普遍宗教の生活倫理	普遍ないし普遍宗教といわれるものは、互いに伝統を異にするにもかかわらず、人間の生き方について意外と共通性をもっている。併せてその相違点を考える。	中村　元 末木文美士（東京大学助教授）
7	世界共同体の理想	都市国家から広域国家へすすむ中で、理想の政治・国家とは何かを宗教的思惟との関わりを中心に考察し、さらに世界国家をめざす動きによる世界共同体の理想に論をすすめる。	中村　元 三友景順（立正大学短期大学部助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	普遍的国家の成立	普遍的宗教を政治の中に生かそうという理想を掲げて統一的国家が諸文化圏において形成された。それら国家の諸帝王の思想や宗教的な考えをさぐる。	中村　元 斉藤　敬 （埼玉大学講師）
9	中世社会の思想的特徴	中世には諸国家の社会を通じて封建制度が確立されるにいたる。それに伴って身分的階位制が出現し、それを基礎づける思想体系として普遍的宗教が支配者によって権威づけられた。	中村　元 宮元啓一 （法政大学講師）
10	＜慈悲一愛＞の道	普遍宗教は人々をわけ隔てなく愛することを説いた。ここに＜慈悲一愛＞の道が成立する。その＜慈悲一愛＞がどのようなすがた・かたちをとったかを考察する。	中村　元 阿部慈園 （日本大学講師）
11	瞑想の道と哲学的思想	中世においては＜慈悲一愛＞の道と並んで＜瞑想＞の道が実践され、哲学的思索も深められたがそこから自力か他力かの二つの類型が論じられるようになった。	中村　元 津田真一 （日本大学講師）
12	自我の自覚と批判的精神	中世の伝統的権威を合理的主義をもって批判し、自我を自覚するところに近代的思惟が確立されてゆく。この点で徹底的であった東洋の思想家の所論へと考察をすすめる。	中村　元 丘山　新 （東京大学講師）
13	人間の平等	人間すべて平等であるという主張は近代において特に顕著になった。しかし国により、文化圏によって異なる点を考慮しつつ、平等思想による社会的連帯性の重要さを探る。	中村　元 吉野恵子 （東方学院講師）
14	宗教改革と近代思想	近世初期の宗教が職業倫理ないし資本主義精神を基礎づけたといわれるが、ここにも諸文化圏ごとに相違点があることを論じ、併せて主義や国家を離れた人類性の実現を説く。	中村　元 山口泰司 （工学院大学講師）
15	未来への展望	近代精神がもたらした種々の問題点を考察しながら、未来に向かっては、仏教でいうところの、「何人にとっても生命は最もいとしいものである」という自覚の重要性を論じる。	中村　元 前田専学

＝ 文 学 と 芸 術 ＝（TV）

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）〕

全体のねらい

文学を世界文学の視野においてとらえることは、古今の文学者や哲学者の夢のひとつである。漱石の文学論もアリストテレースの詩学も、時と処とを異にしても、その夢を果たそうとした企てであった。本講義は、国文学と西洋文学とにわたって、テキスト研究を介し、文学を他の芸術との照応において、省察する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	西洋文学の起源ーホメーロスとヘーシオドス	• ギリシャ文化について • 文学の概念 • 叙事詩について	今 道 友 信 （清泉女子大学教授）
2	古典ギリシャの文学 抒情詩と劇詩	• 抒情詩 • ギリシャ悲劇 • 喜 劇 • その後のギリシャ文学	同 上
3	ローマ古典文学	• ローマ文化とキケロー • 詩人たち • ローマの芸術	同 上
4	聖書の世界と超自然の光芒	• 聖 書 • 旧約聖書と芸術 • 新約聖書と芸術 • 超自然の光芒	同 上
5	ヒューマニズムの問題	• ルネサンス • 後期ルネサンスの文学 • 後期ルネサンスの芸術	同 上
6	黄 昏 と 死	• 黄昏（Le Crépusculaire） • L' Insolite（異常なこと） • 死	橋 本 典 子 （青山学院女子短期大学助教授）
7	模 倣 と 批 評	• 近代人と批評の自立 • 『ラオコーン』 • 発想と批評 • 模倣と想像力 • 視点の多様性と時間	坂 部 恵 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	永遠と時間	1. 有限と無限 2. 永遠と時間 3. 瞬間と時間	今道友信
9	フィクションとイメージ	1. フィクションとイメージ 2. 巨匠たちの群像 不在の詩	同上
10	日本文学の風土性	1. 日本人の風土観 2. 日本文学と自然	高橋良雄 （昭和女子大学教授）
11	歌論 「古今和歌集」仮名序	1. 「万葉集」と「歌経標式」 2. 「古今和歌集」仮名序 3. 「和歌体十種」「新撰髄脳」「九品和歌」 4. 「俊頼髄脳」	藤平春男 （早稲田大学教授）
12	物語論 源氏物語「螢」巻	1. 女性の消閑の具としての物語と「源氏物語」 2. 物語の本質とは何か 3. 物語論の語られる場 4. 「源氏物語」の達成に見合う物語論	秋山虔 （東京女子大学教授）
13	幽玄論	1. 平安時代における幽玄 2. 藤原俊成における幽玄 3. 鴨長明の幽玄論 4. 藤原定家の幽玄、日常語としての幽玄 5. 藤原為家から正徹まで 6. 世阿弥における幽玄	久保田淳 （東京大学教授）
14	演劇戯曲論 近松・南北・黙阿弥	1. 近松門左衛門 2. 鶴屋南北 3. 河竹黙阿弥	諏訪春雄 （学習院大学教授）
15	現代文学	1. 近代小説の揺籃期 2. 近代小説の確立 3. 回顧と移行 4. アメリカ大学の役割 5. 文学の現代的使命 6. 現代文学の状況 7. 現代文学の課題	三好行雄 （大妻女子大学教授） 今道友信

＝ 日 本 語 の 基 礎 ＝(R)

〔主任講師：阪倉篤義（甲南女子大学教授）〕

全体のねらい

母国語である日本語は、われわれが“言語”というものについて考えるための、最適の材料である。ここでは、特に日本語における特徴的な事実を取上げて、その意味を解明しつつ、実際的な問題にも触れて、日本語の基礎的な問題について、ひとわたり述べたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語とは何か	何を指して日本語というか。世界の諸言語の中で、日本語は、どういう位置をしめているか。また、それはどういう系統の言語か、などの問題について述べる。	阪倉篤義（甲南女子大学教授）
2	日本語のさまざま	日本語と言われるものの中には、地方的な違い、歴史的な違いがあり、「話しことば」と「書きことば」との違いがある。そういう日本語の種々相について述べる。	同上
3	日本語のコミュニケーション	一般に、ことばによるコミュニケーションは、どのようにして成立するか。特に日本語のコミュニケーションの特色は何か。それが日本語の構造とどう関係するか、などについて述べる。	同上
4	敬語について	日本語の特色の一つとして問題にされる、敬語の本質は何か。「読んでやる」「見てもらう」などとともに、こういう物言いの生れてくる理由はどこにあるのか、について考える。	同上
5	「は」と「が」の使い分け	「は」と「が」との使い分けは、実践的には容易であるが、両者の違いを説明することは、むずかしい。これの解明は、日本語の構文論（シンタックス）の基本的な課題の1つである。	同上
6	語順の問題	日本語は、語順の比較的ゆるやかな言語であると言われるが、そこにある一つの法則とはどういうものか。また、日本文の句読点は語順とどのように関係するか、などについて述べる。	樺島忠夫（大阪府立大学教授）
7	日本語の語彙	語彙とは何か。語の種類には、どういうものがあるか。特に使用率の大きい語と小さい語との性格・機能はどう違うかなどの点を考え、日本語の語彙の特色を述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	和語・漢語・外来語	和語の、文章の中での役割、漢語が日本語において果す役割はどういうものか。特に造語という面から考えた場合の両者の特色。さらに、いわゆる外来語の役割などについて述べる。	樺島忠夫
9	語の意味と辞書	語の意味は、どのように記述されるか。また、それを集めた“辞書”というものについて、その種類と、利用法を述べ、語の意味の中核について考える。	阪倉篤義
10	日本語の文字と表現	日本語表記における漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字、4種類の文字。その役割分担や分かち書きの問題、外来語の表記やワードプロセッサーなどとの関係を将来の問題を含めて述べる。	樺島忠夫
11	日本語の発音	日本語の音韻組織は比較的簡単で、アクセントも、他の言語に比較して意義弁別の役割が軽い。その体系の概略と、方言的・歴史的な差異について述べる。	阪倉篤義
12	かなづかい・送りがな	仮名遣いとは何か。特に現代仮名遣いにおける“とお”と“とう”“こうし”は格子か子牛か、問題などを考え、また、送り仮名の問題点などを考える。	樺島忠夫
13	語史と慣用句	現代日本語は、過去の日本語の変遷の結果として生れてきたものである。現代語の単語が、かつてはどのような形や意味を持っていたか、また慣用句の意味などについて説く。	阪倉篤義
14	日本語の過去	日本語の歴史が始まって以来、今日まで千数百年の間に、内発的な原因、また外国語との接触による外発的な原因で、日本語はどのような方向に変化してきたか、その要点を述べる。	同上
15	日本語の将来	日本語は、将来、発音・語彙・文字など、どのような面で変化する可能性があるか。それは日本人の言葉に対する態度によるが、将来の日本語はどうあるべきかを考える。	樺島忠夫

＝日　本　語＝（R）

主任講師：宮地　裕（帝塚山学院院長）
水谷　修（国立国語研究所日本語教育センター長）

全体のねらい

大学教育の目的の一つは、言語の運用能力の向上にある。この講義においては、全体を三つの部分にわけ、第1部においては、「話すことと聞くこと」、第2部においては「書くことと読むこと」に焦点を当て、日頃使っている日本語に対する自覚を促し、あわせて日本語の基礎的な運用能力の向上を目差す。さらに、第3部は、「応用編」とし、大学の講義の聞き方、レポートのまとめ方、発表と討論の仕方について、実際の場面に則して、応用力を身につけさせることを目標とする。したがって、日本語能力の開発を求める学生のみならず、日本語教育に関心を持つ層に対しても有益な講義となろう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	国際化と日本語	序論。日本社会の国際化とともに、日本語に対する関心は世界的に高まっている。このような事態の中で、日本人は自国語に対して、どう自覚的である必要があるかを論じる。	宮地　裕（帝塚山学院院長） 水谷　修（国立国語研究所日本語教育センター長）
2	日本語の母音と子音	音としての日本語の基礎について考える。他の言語との比較を通して日本語の母音と子音の特徴を考察する。外国人の誤用例も取り上げながら、日本語の音の難しさにもふれる。	水谷　修
3	日本語の音節	持続音節、速音節といった日本語の特徴的な音節をとらえ、音節と表記との関係、さらには外来語の表記の問題についても考える。	同　上
4	アクセントとイントネーション	日本語の多様性について、各種の方言を中心に考えるとともに、外国人のアクセントやイントネーションの違いについても、その原因を考える。	同　上
5	話ことばの特色	終助詞や不完全文など、話しことば特有の言語現象をとらえ、文レベルでの話しことばの特色をとらえるとともに、実際の談話場面でのコミュニケーションについても実例をもとに考える。	同　上
6	聞くことの大切さ	コミュニケーションの成立には、いかに相手の言いたいことが聞けるかが鍵だ。中でも最も重要なのは推定の能力である。円滑なコミュニケーションのための聞く態度について考える	同　上
7	発音と表記法	発音をそのまま表記することは容易なことではない。発音と表記とのずれについて考え、書くことにまつわる難しさと、注意すべきポイントについて解説する。	水谷　修 竹内俊男（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	書き方の基本	原稿用紙の使い方の基本から説き起こし、句読点のつけ方、縦書きと横書きはどう違うか、数助詞の表記法など、さまざまな文章の決まりについてふれる。	竹内俊男
9	名文と悪文	名文とは、わかりやすくて、説得力のある文章のことである。名文と悪文の違いを、実際に読むことを通して考えてみる。	同上
10	エッセー・小論文の書き方	芸術文と実用文ではどこが違い、どの点で共通しているか。エッセーについては書き出しの難しさ、結びの生かし方を、小論文についてはデータの使い方、構成などを考える。	同上
11	はなしあいの要素	言語的コミュニケーションにおいて、どんなことが表現され、伝えられるか。また、その成立にどんな要素が関与し、言語のどんな機能が問題になるかを考えていく。	清水康行（名古屋大学助教授）
12	聞き違い・行き違い	コミュニケーションに支障が生じる場合、その成立要因のどこに問題があるのか。行き違いの原因・理由を落語「味噌倉」を例に考えてみる。	同上
13	発表の仕方・聞き方	発表、討議の席で、円滑なコミュニケーションを行い、実りのある議論を展開していくためには発表報告者は、どんなことに注意していく必要があるかを、問題点中心に考える。	同上
14	討論の仕方	相手の言いたいことを理解し、その上で自分の考えを相手に納得させなければならない討論の高度のテクニックとはどんなものか。あいづちの打ち方、否定や反論の仕方など討論の要点。	同上
15	まとめと展望（座談会）	コミュニケーションの手段としてのこれからの日本語について、話すこと、書くこと、読むことの各要素の関連についてふれ、全体のまとめとする。	清水康行 宮地裕 水谷修 竹内俊男

＝ 作 歌 ・ 作 句 ＝（TV）

〔主任講師：井本農一（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

短歌・俳句を知的に理解するだけでなく、それらを創作する試みによって、文学に対する共感と理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	短歌と俳句の成り立ち	古典和歌・俳諧から現代短歌・現代俳句までの歴史的展望を述べ、短歌と俳句の文学的特質についても触れる。	井本農一（お茶の水女子大学教授）
2	風雅への共感	短詩型文学における作者と読者の同一性の問題を論じ、何等かの意味において風雅への共感が必要であることを述べ、いわば国民詩ともいうべき短詩型文学創作への導入を計る。	同 上
3	なぜ歌をつくるか	短歌という表現様式はどういう発生の過程を持ち、どのようにして文学意識を深めてきたかを述べる。	岡野弘彦（国学院大学教授）
4	抒情の源流	短歌における二つの大きな主題である旅と恋について、各時代の実作にあらわれた抒情の変化を述べる。	同 上
5	近代短歌の流れ	正岡子規・与謝野鉄幹によって開かれた近代短歌の二つの流れの、展開と変化のあとを実作品の上に見る。	同 上
6	現代短歌の動向	戦後、きびしい批判の中から新しくよみがえった短歌が、どのような新生面を開いてきたかを、作品の上に見る。	同 上
7	歌のしらべと写生	短歌を実作するに当って最も重要な、歌の「しらべ」と「写生」の問題について、作品に即して考える。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	批評と推敲	作歌の上の要点となる、頭材のとらえ方や言葉について考え、さらに鑑賞力、批評力を深め、推敲を進めることについて考える。	岡野弘彦
9	なぜ俳句を作るか	芭蕉の「古池や」の句をめぐって「俳」の意味をさぐり、俳句の特性を考えるとともに、俳句をつくることの意義について考える。	川崎展宏（明治大学教授）
10	近代俳句の出発	子規の俳句革新運動とそれによって切り捨てられたものの意味を、芭蕉の句を例にして考え、句作の「場」の問題、先行の文芸との関係などを考える。	同上
11	写生	明治という時代の中で子規が文学や俳句をどう考えたかを明らかにしながら、子規の写生について述べ、さらに写生の現代俳句における意義を論じる。	同上
12	花鳥諷詠と季語	虚子が俳句と俳人の在り方を規定した「花鳥諷詠」と、その方法としての「客観写生」について述べ、さらに季語について考える。	同上
13	対話の世界	挨拶の句は、連句の第一句目としての発句のはたらきが、近代の社交の場に生かされているものだが、挨拶句を鑑賞して俳句の対話性に着目する。	同上
14	俳句の近代化の過程	子規の俳句革新の試みが、その後いかに継承され、俳句の近代化がいかに推進されたかを具体的に考える。	同上
15	創作の根源にあるものとその形象化	この講座の結びとして、短歌・俳句の根源にあるものと、その形象化について述べる。	井本農一

＝ 人 間 の 歴 史 ＝ （R）

～ 日 本 女 性 史 ～

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

われわれは、「人間の歴史」として日本の女性史をとりあげてみた。その日本女性史も、原始・古代・中世・近世・近代・現代へと時代を追って、政治的・経済的・文化的等々の女性生活をたどるのではない。ここでは日本の女性が宗教生活という面で、どのような歴史を辿って来たかを仏教を中心とした宗教史のなかで考えるつもりである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
2	日本仏教にみる女性解放史序章	1. 現代と女性 2. 古代の仏教と女性 3. 中世の仏教と女性 4. 近世の仏教と女性	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	女性を差別する古代仏教	1. 『無量寿経釈』と女性 2. 古代仏教の聖域と女性 3. 往生・成仏の障り 4. 聖法師	小栗純子
3	巷の女性と古代仏教	1. 光孝天皇の孫娘 2. 論より証拠 3. 藤原兼経の妻 4. 奈良の女性 5. 往生の条件 6. 人間的条件の優先 7. 正直の心は極楽の門　参考資料	笠原一男
4	女性の差別を否定した鎌倉仏教	1. 念仏と禅と題目 2. 巷に出た鎌倉仏教の開祖 3. 法然の選択本願の理由 4. 伝から論へ	同上
5	法然と念仏と女性	1. 御家人の妻に説いた女人往生 2. 『無量寿経釈』の女人往生 3. 法然の女人往生論 4. 『念仏往生要義抄』の女人往生論 5. 室の遊女 6. 信仰問答	同上
6	念仏に救われた平家物語の女性	1. 平家物語と仏教 2. 祇王と仏 3. 欣求浄土	小栗純子
7	親鸞と悪人正機と女性	1. 法然と親鸞 2. 弥陀の本願は悪人のため 3. 悪人正機 4. 煩悩具足が救われる証拠 5. 女人正機	笠原一男

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	正法眼蔵にみる女性と仏教	1. 深草の道元 2. 礼拝得髄 3. 道元の女性観 4. 女性差別は笑止千万	笠原一男
9	日蓮と女性	1. 女人成仏拒否の諸経 2. 法華経だけが女性を救う 3. 女人為先 4. 日蓮と女人往生 5. 月水御書	同上
10	女人正機の誕生	1. 女人往生聞書 2. 罪深い女性 3. 女人正機	同上
11	戦国時代の女性と蓮如	1. 坊主の妻に説く女人往生 2. 晩年の女人往生思想 3. 娘見玉の死をいたむ 4. 妻如勝をいたむ御文	同上
12	江戸時代の女性と仏教	1. 真宗の女人往生論 2. 真宗の女人往生伝	小栗純子
13	近代における女性と宗教	1. 中川みき～天理教～ 2. 出口なお～大本教～	同上
14	現代社会と女性教祖	1. 小谷喜美～霊友会～ 2. 長沼妙佼～立正佼成会～	同上
15	女性と宗教	1. 古代 2. 中世 3. 近世 4. 近代・現代	笠原一男 小栗純子

＝文化の形成と普及＝（TV）

－ 日本仏教の形成と普及 －

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本人は外国に学ぶことによって、数々の文化を形成して来た。そのなかで、最もながい歴史と普及度を誇っているのが仏教文化である。日本仏教の形成と普及の歴史のなかで、仏教界の宗祖＝英雄が果した役割に視点をむけて考える。なかでも、親鸞と蓮如を具体例として、文化の形成と普及という問題を考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教の形成	1 仏教の伝来 2 聖徳太子と仏教 3 聖武天皇と仏教 4 最澄と空海 5 浄土教と末法思想 6 鎌倉仏教の誕生	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	奈良時代の民衆と仏教	1 論より証拠 2 日本霊異記 3 日本霊異記の世界 4 悪人切り捨て	同上
3	平安時代の日本人と仏教	1 善人正機 2 悪人でも往生出来る 3 最悪の悪人が往生 4 質直と慈悲が往生の条件	同上
4	仏教の普及と鎌倉仏教	1 選択と専修の易行 2 法然と念仏 3 学問を否定する親鸞 4 悪人正機 5 仏教普及の条件	同上
5	比叡山の親鸞	1 叡山に登る 2 悪人こそ人間の本質 3 煩悩具足のほとけ親鸞	同上
6	悪人正機	1 歎異抄 2 悪人正機 3 煩悩具足が救いの条件 4 本願ほこり	同上
7	親鸞の世界	1 師と弟子 2 念仏して地獄におちても後悔せず 3 報恩の念仏 4 親鸞における慈悲 5 和讃	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	念仏の普及と弾圧	1　報恩のための布教 2　念仏の普及と弾圧の必然性 3　親鸞の流罪	笠原一男 小栗純子
9	越後から関東へ	1　越後の親鸞 2　関東への旅 3　親鸞の責任感 4　関東の親鸞	同　上
10	親鸞と政治権力と宗教	1　念仏の普及 2　弾圧者のために祈れ 3　念仏の縁つきたら去れ 4　国家と国民のために祈れ	同　上
11	親鸞以後の真宗	1　発展をきそう真宗諸派 2　仏光寺派の発展 3　仏光寺教団の統制	同　上
12	戦国時代の真宗と蓮如	1　部屋住みの蓮如 2　念仏の普及と御文 3　念仏の北陸への普及	同　上
13	御文の世界	1　念仏者の理想像 2　極楽は往き易くして人なし 3　戦国乱世の生き方 4　念仏と現世利益 5　異端の批判	同　上
14	念仏の発展と蓮如	1　貴族ぶるな 2　民衆の心をつかむ 3　蓮如の布教と発展 4　門徒の反体制的言動と蓮如	同　上
15	一向一揆 ～ 激励の世と仏教 ～	1　本願寺教団の発展と一向一揆 2　蓮如と一向一揆 3　江戸時代と仏教 4　転換期の時代と民衆宗教	同　上

＝ 世界歴史と国際交流 ＝（Ｒ）

－ 東アジアと日本 －

〔主任講師：田中健夫（東洋大学教授）〕

全体のねらい

現代の世界は多くの民族によって構成される多くの国家群に分裂している。これまでの歴史研究・歴史叙述は民族や国家の枠組みのなかで行われるのが普通であったが、それから離れた広い視野から歴史をみなおすことはできないだろうか。日本の歴史を東アジアの歴史のなかで、それとの関連において再検討してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	海から歴史をみる	「海国日本」という言葉があるが、果たして日本はふるくから海国だったのであろうか。日本人は海に対してどのような思いをいだいていたのか、またどんな対応をしてきたのか。海の日本人に対する影響はなんであったか等の諸問題を考える。	田中健夫（東洋大学教授）
2	古代日本列島をめぐる国際的環境	日本は、倭国・倭人とよばれる時代から、東アジアの一員として、中国や朝鮮と密接な交流を持ち、その影響を受けながら、次第に国家としての形をととのえていく。その推移について、東アジアにおける国際交流の展開を軸に考えてみたい。	石井正敏（中央大学助教授）
3	遣隋使・遣唐使と文化交流 －民間貿易の展開－	中国で隋・唐が、律令を基礎に中央集権国家を築き、高度の文化を開花させると、日本は積極的に先進文物の輸入に努めた。ここでは、政治・文化に重要な役割を果たした遣隋使・遣唐使の行動を中心に、朝鮮半島の動向を視野にいれて国際交流の様相を見る。	同上
4	中国社会の発展と日宋交流	唐が滅び、五代十国の時代を経て宋が中国を再統一すると、国内の商業・経済が発展し、日本や高麗との海外貿易も盛んに展開されるようになった。この日本・宋・高麗間の交流が、日本の社会・経済・文化にどのような影響をもたらしたかを考えてみる。	同上
5	中世日本の内と外	中世の日本人は、日本をどのようなひろがりとして認識していたか。その空間の内と外および境界は、どんな性格を帯びた場だったか。逆にアジアの人びとは日本をどんな眼で見ていたのか。境界を活動の場として内と外とを媒介した人びとの行動にも注目したい。	村井章介（東京大学助教授）
6	モンゴルの興起と国際関係の変貌	日本の前近代では稀有の経験だった蒙古襲来を、アジア規模の視野から把えなおす。侵略を蒙った諸国（南宋・高麗・ベトナム・ジャワ・日本等）の運命の共通性と差異。また夷秋が中華の主となったことが、国際関係にどんな変貌をもたらしたかを考える。	同上
7	倭寇の活動とその本質	１４世紀から１５世紀にかけ、朝鮮半島を中心に倭寇とよばれた集団が猛威をふるった。倭寇の構成員、その行動の様相、行動の舞台、大規模化の理由などを検討して、これまで通説とされていた倭寇像を修正し、東アジア海域で演じた倭寇の活動の歴史的意義を考える。	田中健夫

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	東アジア通交圏の成立と日明関係	中国大陸で明帝国が起こり、漢民族支配が回復すると、周辺の諸国に朝貢をよびかけた。日本・朝鮮・琉球等はこれに応じて使節を送り、東アジアには新しい通交の秩序が形成された。ここでは室町政権の対明通交や新興貿易商人の活動を中心に述べる。	田中健夫
9	朝鮮および琉球との関係	１５世紀の初め尚王統が琉球王国の統一を完成し、明に入貢するとともに日本・朝鮮・南方諸地域に貿易船を派遣して多彩な海外活動を展開した。一方、東アジア海域に登場したヨーロッパ人は中国僑商や琉球人と接触しながら北上し、やがて日本に到達する。	同上
10	豊臣秀吉の朝鮮侵略	東アジア世界の征服をめざした秀吉の朝鮮侵略について、(1) 1592 年の侵略にいたるまで、(2) 1592 年から翌年までの第１次侵略（文禄の役）、(3) 1593 年から'96年までの日明講和交渉とその破綻、(4) 1597 年から'98 年までの第２次侵略（慶長の役）を再検討する。	北島万次（高崎経済大学教授）
11	豊臣政権の世界認識とアジア外交	秀吉は、「日本は神国」であるとして宣教師追放令をだし、「日輪の子」であると称して朝鮮の服属を強要した。この「日本は神国」「日輪の子」の論理を軸として、秀吉は東アジア諸国および南蛮諸国と通交関係を持とうとした。	同上
12	「鎖国」の再検討	近世日本の対外関係のあり方を「鎖国」とよぶことが定着して久しいが、実態に即してみると、同時代の中国・朝鮮などの「海禁」政策と同じ類型と考えられる。その観点から「鎖国」概念を再検討し、近世日本の対外関係の特質を、東アジアとの関連で考える。	荒野泰典（立教大学助教授）
13	日本型華夷秩序の成立と展開	近世日本は、長崎・薩摩・対馬・松前でそれぞれ隣接する異国・異民族と恒常的な関係を結ぶとともに、それぞれの関係を、自らを「華」とし、他を「夷」として「華夷主義」的に編成していた（日本型華夷秩序）。ここでは、その秩序の成立と展開について述べる。	同上
14	幕末維新期の国際関係 ー日朝関係を中心に	多彩な幕末・維新期の国際関係のうち、ヨーロッパ的、近代的な外交体制の創立と、それ以前の東アジア的、伝統的な対外関係のあり方との相克に焦点を絞り、日朝関係を中心に、日本の対外関係の近代化が、同時にアジアに対する侵略を随伴する理由を考える。	同上
15	東アジアにおける国際相互認識	人と物との交流の歴史を通じて、東アジアの諸国家間にはそれぞれ異なった国際認識が生まれた。文化的落差・経済的需給関係・軍事的緊張等を反映したものであるが、地域別に(1)中華型、(2)中国周辺型、(3)島興孤立型に分け、その特質を考えてみる。	田中健夫

＝人文地理学の基礎＝（TV）

〔主任講師：西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

人文地理学は、人間・環境系、社会活動の地域の組織、科学的世界像などの学際的研究及び地域計画、環境管理、景観育成、国際親善などの応用面においても基礎的な役割りを持つ空間的・環境的科学である。本講義では全体を、1.環境を作る人間、2.地域を組織する社会、3.世界を彩る文化、の三つに分けて説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人の住む星 －人文地理学の視界－	1. 世界像の探求と地理学の理念 2. 人文地理学の成立過程 3. 人文地理学からみた世界像	西川　治 （立正大学教授）
2	比較風土論の系譜	1. 風土の意味 2. 江戸時代の風土思想 3. 啓蒙的風土論と人文地理学	西川　治
3	気候変化と民族移動	1. 人類の描く文様 2. はげしく変る気候 3. 民族移動	鈴木秀夫 （東京大学教授）
4	地形環境と治水および利水	1. 平野の種類－西ヨーロッパとアジアの平野－ 2. 日本の平野の分布と配列 －東北・中央日本と西南日本との比較－ 3. 平野の微地形と開発 －武田信玄による甲府盆地の開発－ 4. 治水と利水の様式－利根川の開発と治水・利水－ 5. まとめ	中山正民 （埼玉大学教授）
5	村落景観にみる歴史	1. 景観の意義 2. 村落景観の構成要素 3. 古代の計画的地割景観 4. 古代方格状地割の意義 5. 中世の地割景観 6. 近世・近代の地割景観 7. 人間生活と地割景観	山田安彦 （千葉大学教授）
6	地域を分ける農業	1. 世界の農業地域区分 2. E．ハーンの世界の農耕形態の地域区分 3. D．ホイットルセーの世界の農業地域区分とその現代的修正の試み 4. 世界の農業の地域類型の若干の特徴 5. 農業地域分化の諸要因 6. 日本の農業地域区分	山本正三 （筑波大学教授）
7	地域を動かす工業	1. 工業の地域的システム 2. 技術革新と機械工業の展開 3. 風土と結びついた地場産業 4. 工業振興と地域活性化	竹内淳彦 （日本工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地域の人口問題	1. はじめに ー人口問題の地域的多様性ー 2. 世界人口の動向 ー現状と将来ー 3. 人口都市化の進展 4. 高齢化社会への接近	浜　英彦 （成城大学教授）
9	都市プランと機能システム	1. 都市史の概観 2. 日本の都市とヨーロッパの都市 3. 都市の機能 4. クリスタルラーの中心地理論	西川　治
10	大都市地域の構造と動態	1. バージェスの同心円理論 2. ディッキンソンの同心円理論 3. 田辺の同心円理論 4. ホイトの扇形理論 5. ハリス＝アルマンの多核心理論 6. 社会地域分析と因子生態研究	山口岳志 （東京大学教授）
11	大都市化に伴う都市問題	1. 大都市化の進展 2. 大都市問題の発生と対応	井内　昇 （お茶の水女子大学教授）
12	都市情報の作成と利用	1. 情報化と都市 2. 都市の変化と情報 3. 国土と都市の情報 4. 地理情報システムとコンピュータマッピング 5. 地理情報システムの利用	久保幸夫 （お茶の水女子大学講師）
13	ヨーロッパの文化地理	1. 文化領域としてのヨーロッパ 2. ヨーロッパにおける国家と民族 3. ヨーロッパの風景	竹内啓一 （一橋大学教授）
14	民族の住み分けと文化交流	1. 東アジア世界における民族の住み分け 2. ブータンにおける民族の住み分けと文化交流 3. 雲南における農耕文化と牧畜文化の接触	諏訪哲郎 （学習院大学助教授）
15	世界地図の中の日本	1. ヨーロッパ人の日本像 2. 江戸時代の自国認識 3. 明治・大正期の地理的啓蒙思想 4. 地政学から地泰学へ	西川　治

＝ 社 会 生 活 と 法 ＝　（TV）

〔主任講師：山田卓生（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

国家のような大きな社会から会社・学校・同好会といった小さな社会にいたるまで、社会生活が秩序だって営まれていくためには、法による秩序維持が必要である。もっとも重要なのは、国家法であるが、慣習や習俗も重要である。本講座では、法の形態・役割、変動といった問題を考えながら、法律を学ぶ基礎を提供したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	社会生活における法	1　社会と法 2　法の敬遠 3　法は何故必要か 4　法による社会秩序の維持 5　国家法と	山田卓生 （横浜国立大教授）
2	法の存在形態	1　法はどこにあるか 2　法令集 3　成文法の構造 4　不文法 5　判例法	同　上
3	法と裁判	1　裁判による法の実現 2　法の不備と裁判の拒否 3　法の適用 4　先例としての裁判 5　判例の変更	同　上
4	法は誰がつくるか	1　法はつくるものか 2　法典編纂 3　立法府による法律 4　行政府による法 5　裁判所による法形成	同　上
5	法の種類(1) 民事法と刑事法	1　法の制裁による区別 2　民事責任と刑事責任の差異 3　民事責任と刑事責任の関係 4　民事責任と刑事責任の統合	同　上
6	法の種類(2) 公法と私法	1　公法と私法　　6　むすび 2　公法と私法の区別の意義 3　公法と私法の差異 4　公法と私法の区別の基準 5　国または公共団体の特別扱い	同　上
7	法の種類(3) 実体法と手続法	1　手続に関する法 2　法における形式 3　手続法は何を定めるか 4　刑事手続 5　行政手続 6　手続の簡略化	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	法の種類 (4) 国家法と自治法	1 国家の法と社会の法 2 地方自治と条例 3 自治団体の法 4 むすび	山田卓生
9	法の解釈	1 法とことば 2 解釈の方法 3 法の解釈と結果 ― 合目的解釈 4 法解釈の主観性 5 結論と理由 ― 論理と心理	同上
10	法と法律家	1 法の専門家 2 法曹とその養成 3 法曹の資質 4 裁判官 5 検察官 6 弁護士 7 準法律家 8 むすび	同上
11	法の順守	1 法を守らせる 2 法と強制 3 法の順守の教育 4 守りやすい法 5 法の順守の確保	同上
12	法の衝突	1 法の抵触と適用法規決定のルール 2 国家法相互間の矛盾 3 国家法と自治法 4 国家法と国際法 5 日本法と外国法	同上
13	法と道徳	1 法と道徳の関係 2 道徳と法的制裁 3 悪法論 4 正義に反する法、社会常識に反する法 5 悪法論の問題点	同上
14	法と常識	1 法における常識 2 法律・裁判と常識 3 常識の変化 4 法の比較 5 法のヴァラエティと普遍性	同上
15	法と社会変動	1 法と急激な社会変化 2 法の保守的傾向 3 社会変動への法の対応 4 新しい問題の法的処理	同上

＝ 憲 法 概 論 ＝ (TV)

〔 主任講師：樋口陽一（ 東京大学教授 ）〕

全体のねらい

近代憲法発展史の流れの中では日本国憲法を理解し、その主要な諸条項の意味を明らかにするとともに、憲法運用のなかで提起されている法的な問題点について考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	憲法から見た「東西」と「南北」	―「4つの'89年」からの問いかけ 1. 1689年・1789年・1889年・1989年 2. 権利保障と権力分立―その具体的なあり方の変遷 3. 「人類普遍の原理」―西洋近代文明の光と影	樋口陽一（東京大学教授）
2	日本の近代にとって憲法とは	―「和魂洋才」と「西洋かぶれ」の間 1. 幕末の開国から帝国憲法の発布へ ―「建国ノ体」と「海外各国ノ成法」の間 2. 帝国憲法の運用―立憲学派と大正デモクラシー 3. 1911・12年と1925年―2つの画期の意味	同上
3	なぜ「国民主権なのか」	―日本国憲法の生まれに即して 1. ポツダム宣言受諾と戦後変革 2. 「国体」は変わったか 3. 「おしつけられた憲法」か	同上
4	なぜ「平和のうちに生存する権利」なのか	―国際化時代の国家とは 1. 戦争の放棄と戦力の不保持 2. 平和の憲法思想＝制度史 3. 「戦争をしない」だけでない平和 ―人権の国際化	同上
5	なぜ「人権」なのか	―「個人の尊厳」の重み 1. 人一般の発見＝個人の解放としての人権 2. 特に「法人の人権」をめぐって 3. 外国人の人権	同上
6	思想・信仰と教育	―自分が自分でなくならないために 1. 信教の自由と政教分離 2. 教育の自由と国家の役割	同上
7	表現の自由	―なぜ「優越的」か 1. 表現の自由の「優越」性 2. 事前抑制、とりわけ検閲の禁止 3. 新しい問題	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済的自由と社会権	—「自由」と「公正」の間で 1. 財産権の制約と社会権 2. 経済的自由－現状と問題点	樋口陽一
9	政治的権力からの人権と社会的権力からの人権	—国家の役割はどこまで? 1. 私人間の人権－妨害排除のための国家の役割 2. 私人間の人権－国家の積極的措置	同上
10	選挙権と代表	—議会制民主主義のしくみと前提 1. 選挙権－その実質的平等の問題を中心に 2. 選挙権と表現の自由の交叉 3. 二つの「代表」観と議会制民主主義	同上
11	中央の政治と地方の政治	—政党のはたらきと住民自治の役割 1. 議院内閣制と政党の役割 2. 地方分権と住民自治	同上
12	公正な裁判と裁判の独立	—「人権のとりで」としての期待 1. 人権にとっての裁判 2. 裁判の独立と裁判官の身分保障 3. 裁判の公開	同上
13	違憲審査の積極主義と消極主義	—「憲法の番人」ということの意味 1. 付随的審査制の構造 2. 付随的審査制の機能 3. 「違憲審査制革命」のなかでの日本の経験の特性	同上
14	憲法改正と憲法擁護義務	—「憲法をまもる」とはどんなことか 1. 硬性憲法と、関連する諸論点 2. 憲法擁護の二つの型－憲法忠誠制度と「開かれた」方式 3. 改憲論の推移	同上
15	おわりに 戦後日本の憲法体験	—世界のなかの日本にとって持つ意味は?	同上

＝　国家と法Ⅱ　＝　（R）

〔主任講師：南　博方（一橋大学教授）〕

全体のねらい

国家権力の担い手の一つである行政権が法律関係の一方当事者となる場合には、多かれ少なかれ民事関係とはちがった特殊固有の法原理の適用をうけることになる。このような行政に特有な法（行政法）を認識し、現実の行政において生起する法律上の問題を解決するのに必要な知識を身につけるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	行政法とはどのような法か	1　行政に固有な法 2　行政と法 3　行政法の法源	南　博方 （一橋大学教授）
2	行政は誰が行うか	1　行政主体 2　行政機関 3　国の行政組織 4　地方自治組織 5　公務員	同　上
3	行政はどのような作用を行うか	1　行政作用の類型 2　秩序行政作用 3　整序行政作用 4　給付行政作用	同　上
4	行政行為とは何か	1　行政行為の意味 2　行政行為の種類 3　羈束と裁量 4　行政行為の附款	同　上
5	行政行為はどのような効力をもつか	1　行政行為の効力 2　違法な行政行為 3　職権による行政行為の取消し 4　職権による行政行為の撤回	同　上
6	行政立法・自治立法とはどのような作用か	1　行政立法 2　自治立法	同　上
7	その他の行政作用について	1　行政計画 2　行政契約 3　行政指導	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	行政上の法律関係とはどのようなものか	1　権力関係と非権力関係 2　特別の公法関係 3　私人の公法行為	南　博方
9	行政はどのような手続で行われるか	1　行政手続法とは何か 2　行政行為手続 ― 略式聴聞 3　行政審判手続 ― 正式聴聞	同　上
10	行政の実効性はどのようにして確保されるか	1　はじめに 2　行政罰 3　行政上の強問執行 4　行政上の即時強制	同　上
11	行政によって受けた損失はどのようにして償われるか	1　損失補償とは何か 2　損失補償の法的根拠 3　損失補償の内容と方法	同　上
12	行政によって受けた損害はどのようにして償われるか	1　国家賠償とはどのような制度か 2　公権力の行使に基づく損害賠償 3　公の営造物の設置管理の瑕疵に基づく損害賠償 4　私経済作用に基づく損害賠償 5　結果責任に基づく国家補償	同　上
13	行政庁に対する不服申立てはどのようにするか	1　行政不服申立てとは何か 2　行政審判 3　苦情処理手続	同　上
14	行政事件訴訟とは何か	1　行政事件訴訟の意義 2　行政事件訴訟の性質とその限界 3　行政事件訴訟の類型	同　上
15	行政事件訴訟はどのような手続で審理されるか	1　処分取消訴訟の提起 2　処分取消訴訟の審理 3　処分取消訴訟の判決 4　行政事件訴訟の課題	同　上

＝ 政 治 学 入 門 ＝ （R）

〔 主任講師：阿部　齊（ 放送大学教授 ）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を作りたい。同時に政治家の入門的講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	政治と権力	政治の機能 自治と統治 権力の特性 権威と正統性	阿部　齊 （放送大学教授）
2	国家の機能と諸型態	国家の機能と特性 国民国家 夜警国家と立法国家 福祉国家 行政国家 法治国家と立憲主義	同　上
3	政府の諸類型	現代政府の組織原理 権力分立と混合体制 議院内閣制 大統領制 ソビエト制	同　上
4	代表制と議会	国民代表と地域代表 二院制 議会制の機能 議会機能の転換 現代の立法過程	同　上
5	選挙と世論	選挙の意義 投票率の意味 多数代表制と小選挙区制 少数代表制と比例代表制 中選挙区制と定数不均衡	同　上
6	政党と政党制	政党の意義 政党の機能 政党の発展 二党制と多党制 政党とイデオロギー	同　上
7	利益集団の圧力活動	利益集団の台頭 圧力活動の役割 審議会制度 ロビイストと議会 コーポラティズム	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	官僚制と行政国家	官僚制の概念 管理者国家の成立 現代国家と政軍関係 大きな政府と小さな政府	阿　部　　齊
9	地方自治と市民参加	地方分権と地方自治 地方自治とコミュニティ 団体自治と住民自治 固有事務と委任事務 住民自治と住民運動	同　　上
10	民主主義と自由主義	民主主義の成立と発展 自由主義の論理 自由民主主義の形成 代表制民主主義の意義 参加民主主義の機能 平等化と平等主義	同　　上
11	政治体制と政治変動	政治体制と政治システム 自由民主主義体制 政治システムと政治文化 政治変動の諸形態 革命の意味と条件	同　　上
12	全体主義と独裁主義	市民社会から大衆社会へ 全体主義の意味 独裁と専制 軍部独裁体制 権威主義体制	同　　上
13	日　本　の　政　治	明治国家の前近代性 明治国家の近代性 戦後の民主主義 保守政党の統治体制 日本の政治的課題	同　　上
14	内　政　と　外　交	内政を動かす国外の要因 国内政治と国際政治 勢力均衡と古典外交 帝国主義とナショナリズム	同　　上
15	現代の国際社会	集団安全保障と集団防衛体制 核兵器と軍備管理 東西対立と南北格差	同　　上

＝ 比較経済・経営・社会 ＝（ R ）

－ 多様化する組織のなかで －

〔 主任講師：加藤秀俊（ 放送教育開発センター所長 ）

全体のねらい

現代の世界は、多様な社会・経済体制の共存によって成り立っており、それはひろい意味での経営体制のなかに徴分化され、ないしは反映されている。本講義は、その多様な体制、システムを歴史的・同時代的に比較しつつ、ことなった組織原理によって形成されている諸社会の相互交渉にともなう問題点をも解明することとする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	比較研究の意味と方法	比較研究とはなにか 比較研究の視点 比較研究と新しい世界像 比較研究の応用 文化的差異の意味	加藤秀俊 （放送教育開発センター所長）
2	組織の諸形態	人間関係の網の目 組織とはなにか 組織の特徴 組織の時代 目にみえない組織	同上
3	社会・経済・経営	歴史の発展段階説 ロストウの発展段階説 リースマンの段階説 発展段階説の一般化 単系進化説の限界	同上
4	市場経済と指令経済－財配分メカニズムの比較	財と労働の配分　市場経済の限界 需要と供給　指令経済の限界 経済の調整メカニズム　分担経済 市場の調整メカニズム 指令の調整メカニズム	坂井素恩 （放送大学助教授）
5	分権制と集権制 ― 経済の情報コミュニケーション構造の比較	経済の情報コミュニケーション 情服の種類と権限の位置 網状組織と樹状組織 分権制の利点と限界 集権制の利点と限界 企業組織における分権と集権	同上
6	伝統と近代 ― 慣習経済と発展経済の比較	時計と蒸気機関 貫習経済の特徴 発展経済の特徴 貫習経済と発展経済の重層的関係 経済における慣習の意味 社会に埋め込まれた経済	同上
7	効率と公正 ― 政府の経済的機能比較	ニューディール政府の意味　分配における正義 政府の役割　現代の課題 自由と計画 経済的自由 経済的正義	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	企業家の比較(1)	江戸時代の企業家 工業化の開始期の企業化（ 1868 ～ 1895 ） 工業化の進展期の企業家（ 1896 ～ 1937 ） 第２次世界大戦後の企業家（ 1945 ～ 1973 ） 比較の方法との関連で	堀内正博 （東京工業大学 助手）
9	企業家の比較(2)	革新と企業家（シェムペーター） 不確実性と企業化（ナイト） 直感力と企業家（カーズナー） 比較の方法との関連で	同　　上
10	経営の国際比較(1)	オオウチの「セオリーＺ」 パスカルとエイソスの「ジャパニーズ・マネジメント」 比較の方法との関連で	同　　上
11	経営の国際比較(2)	権力の格差 不確実性の回避 個人主義化と男性化 比較の方法との関連で	同　　上
12	経営組織の比較	機械的管理システムと有機的管理システム 組織の設計 比較の方法との関連で	同　　上
13	社会組織間の葛藤(1) ― 企業と家族の間にある葛藤	組織間の比較とコンフリクト　　業績本位と帰属本位 女性の役割　　家族と企業間の葛藤 産業社会の特徴 家族の社会的役割 家族と企業の経済的役割	坂井素恩
14	社会組織間の葛藤(2) ― 企業と国家間の葛藤	多国籍企業の問題点 規制者としての国家 会社設立の準拠法比較 投資の規制 経済権力と政治権力	同　　上
15	相互依存の世界	宇宙船地球号 「地球主義」の立場 「国家」の時代 相互依存の世界	加藤秀俊

＝ 経 済 学 入 門 ＝ （R）

〔 主任講師：嘉治元郎（ 放送大学副学長 ）〕

全体のねらい

我々の日常の経済生活に則して、現代の経済学の骨組みを概説する。家計、企業、政府という経済単位の活動について論じ、経済社会の構造を明らかにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済生活と経済学	経済学とは何か　人間の経済活動 取引の行なわれる場 ― 市場 消費財・サービスの市場　労働力の市場 企業の経済活動　家計の貯蓄　資本の市場	嘉 治 元 郎 （放送大学副学長）
2	家計の経済活動 Ⅰ 所 得	家計の経済力　家計の所得　家計の資産 資産と所得	同 上
3	家計の経済活動 Ⅱ 消費と貯蓄	所得の処分　可処分所得　貯蓄 消費と貯蓄　日本の貯蓄率　最適な消費支出 個別家計の消費と総消費	同 上
4	企業の経済活動 Ⅰ 財の生産	企業の経済活動　生産とは何か　生産の行程 生産活動の目的　費用と収入　物的資本の費用	同 上
5	企業の経済活動 Ⅱサービスの生産	財とサービス　サービスの重要性 サービスの種類　サービス生産の特色 公務と公共サービス	同 上
6	企業の経済活動 Ⅲ 金 融	金融機関の経済活動　利子とは何か 資金の需要と供給　お金の便利さと利子率 資産の組み合せ	同 上
7	貨 幣 －中央銀行の役割－	貨幣とは何か　金本位制　管理通貨制 通貨管理の目的　貨幣量管理の手段	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	市場の機能	市場とは何か　市場の種類　価格の作用 需要供給の均衡　市場機構の作用	嘉治元郎
9	経済社会の構造	巨視的（マクロ）理論と微視的（ミクロ）理論 集計された経済量　一大家計の経済行動 一大企業の経済行動 粗投資gross investmentと純投資net investment	同上
10	総需要と総供給 －雇用問題－	経済の動　総需要と総供給　GNPの決定 投資の決定　雇用水準の決定 過大な需要によるインフレーション	同上
11	経済成長 －技術革新－	総供給能力　供給能力の決定要因 総供給能力の拡大　経済発展の諸要因 労働力の変化　生産設備の変化　技術の進歩	同上
12	政府の経済活動 －財政支出－	混合経済体制　財政支出の種類 財政支出の規模　「小さい政府」をめぐる論議	同上
13	政府の経済活動 －租税－	政府の収入　租税の種類　税と所得の再配分 所得配分とその再配分　財政収支 公債の負担	同上
14	経済政策の目標	経済政策の役割　独占の禁止 巨視的経済政策の目標　完全雇用の達成と維持 経済の安定の実現　経済発展の促進 巨視的経済政策の手段　所得配分の公正化 適切な対外経済関係の実現	同上
15	対外経済関係	対外経済関係とは何か　対外経済関係の内容 国際収支表　貿易の理論　国際通貨 為替レートの変化　生産要素の国際的移動 経済分析の国際化	同上

＝社会学入門＝（R）

主任講師：井上　俊（大阪大学教授）
大村英明（大阪大学教授）

全体のねらい

社会学は間口の広い学問であり、きわめて多様なテーマを扱っているが、ここでは、その多様性の根もとにある社会学的な「ものの見方」を理解することにねらいを絞る。できるだけ具体的な事例に即しながら、社会学的な見方の面白さを伝えるような形で、話を進めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	＜第1部・社会的存在としての人間＞ 社会のなかの人間	1. 社会学の前提 2. 「自分」の発生 3. 社会的知覚 4. 社会による型どり	井上　俊 （大阪大学教授）
2	文化と価値	1. 言語による世界構築 2. 意味秩序と文化的拘束 3. 文化と価値	大村英昭 （大阪大学教授）
3	集個と個人	1. 共同体と機能集団 2. 未分化と分化 3. 模倣＝欲望の世界 4. 集団参加の諸相	同上
4	知識と現実	1. 意味と社会 2. ＜私＞と社会 3. 社会学という知識	架場久和 （関西大学助教授）
5	＜第2部・社会学の考え方＞ 自殺と社会 ―デュルケム	1. 社会学と自殺 2. 統計データの分析 3. 自殺と集合意識	大村英昭
6	宗教と資本主義 ―M.ウェーバーの社会学	1. 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 2. 利害状況と理念 3. 集合的動機と歴史の皮肉	井上　俊
7	自由からの逃走	1. E．フロムのナチズム研究 2. 権威主義的性格 3. 社会的性格の理論 4. 夫と妻の世界	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	潜在的機能の分析	1. デュルケムの犯罪論 2. 潜在的機能の概念 3. 予言の自己実現	井　上　　俊
9	場　面　と　体　面	―日常的相互作用の秩序 1. 演技者としての人間 2. 相互作用儀礼 3. 相互作用秩序の修復	同　　上
10	ストレンジャーの世界	1. 都市のライフスタイル 2. ストレンジャー・インタラクション 3. 関与と不関与	同　　上
11	＜第3部・社会性と社会秩序＞ 家族のなかの世界	1. 家族の形態 2. 家族の機能 3. 親と子の世界	亀　山　佳　明 （香川大学助教授）
12	逸脱と社会変動	1. 逸脱行動論 2. マートンのアノミー論 3. 社会変動論に向けて	大　村　英　昭
13	社会病理現象 ―子ども問題を中心に―	1. コミュニケーションの病理 2. 学校教育の病理 3. 演技とラベリング	同　　上
14	統　制　と　権　力	1. 内面的制裁の原理 2. 交換と権力 3. 恥による権力	同　　上
15	＜ま　と　め＞ ― 結びにかえて	1. メガネとしての社会学 2. 集合主義の発想 3. 探偵としての社会学者 4. 皮肉な視線	井　上　　俊 大　村　英　昭

＝ 社会科学の成立と発展 ＝（R）

〔主任講師：松田智雄（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の社会集団に関する法則性 ― という問題がこの講義の中心の主題である。人間の社会集団のなかにはある構造があり、その構造を歴史の流れでみれば発展のみちを進んでゆく。ここで法則性というのは、ひとりひとりの人間が、社会集団の構造と発展のなかで動いてゆくとき、その在り方を定める力を法則性と呼ぶのである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	社会科学とは何か	一切の学問の源泉は、古典ギリシアに出発する。ソクラテスは対話のうちに哲学を語った。後に続いたプラトン、アリストテレスは学問の基礎を置く。	松田智雄（東京大学名誉教授）
2	社会科学の主要問題	人間の社会集団を貫く法則性とは何か、という問いである。やがてギリシヤには、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが科学への途を展望する。	同　上
3	認識論のいみについて	カントは、すべて認識が経験とともに始まるとしても、その対象は認識する人が与えるのではない。人間の道具＝概念が、客観的認識をつくるという。	同　上
4	コペルニクス的転回	主観から客観に至る通路は、メトーデ〔＝方法〕であり、これは自然科学の実験と同じである。これを哲学に応用したことをコペルニクス的転回という。観察者を回転させ全星群をみる。	同　上
5	歴史的諸科学のあとづけ	ウインデルバントは、カントを継いで、科学を二分類し、法則科学と事件科学を、法則定立的方法と、個性記述的方法によって二分類した。自然科学と歴史科学に相応する。	同　上
6	経済学と固有の方法論登場	リッケルトによって、歴史的文化科学の成立が論ぜられた。自然科学的類概念でなく、文化科学的類概念を考え、すでに存在する経済学につき、中間的領域を設定した。	同　上
7	方法論論争	レコモーラーに対するメンガーの論争は、理論の有無をめぐって、レコモーラーは歴史的・帰納的方法を主張し、メンガーは理論の欠如を論難した。ここにマスク・ウエーバーが登場する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	自然認識と自然法について	自然法思想は、ギリシアに発し、中世を経て近代にきた。自然状態に根ざす、自己保存権と処罰権とが、自然法から導き出された。	松田智雄
9	社会思想の科学への傾斜	ロックは、自然状態を想定して、そこから人間相互間の同意と契約による政治社会の設立を導き出した。市民社会的契約説が出現したのである。	同　上
10	自然状態についての先駆的パターン	フランス重農学派は、ケネーを頂点として、ついに社会科学としての、「経済表」の理論を樹立した。時代はすでに、資本主義的生産方法が、社会の基礎づけの初期に入り込んだ。	同　上
11	経済学の序曲 ―アダム・スミス―	自然的状態から「利己心」の自由を推し進め、自由放任を社会の利想として主張した。しかも、これを受けるのは、予定的調和で、神の見えざる御手の導きである。	同　上
12	経済学の根本問題	ピン製造工場における分業が、生産力を極度に拡大する。これが富の生産力であり、人間の労働が富を生産するのであるが、有用労働に従事する人数が増加する社会的分業を要する。	同　上
13	古典派経済学の軌道	デーヴィド・リカードウの経済学は、資本主義経済の法則性を把握する単越した理論性を備え、三階級への地代・賃金・利潤の三配分を明確に指摘し、これをミルの憂鬱な科学論が継続する。	同　上
14	ユートピア・社会批判から生まれるもの	フランス啓蒙主義は、革命的思想家ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーを経て基本的な社会批判を確立するに至った。	同　上
15	社会批判から帰結するもの	いわゆる空想的社会主義は現実の社会から離脱した空理であった。マルクスは、社会構造の精密な把握から社会への革命的な批判を生み出す方法について自然科学的傾向が強い。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	歴史派経済学	リストに於ける歴史派経済学は、その主著「経済学の国民的体系」Das rationale Sgotem der Polifischen Oekonomie 1841のなかで、そのねらいは、「祖国（ドイツ）の実情」と「ドイツの利害」を把握して、必要なものはドイツの国民的市場と国民的工業を指摘した。	松田智雄
17	新歴史学派	ロッシャー、ヒルデブラント、クニースなどの「旧歴史学派」の成果は、次にシュモーラーやビュッヒャーなどの「新歴史学派」へと継承された。いずれも共通するのは、国民経済の「発展段階」を歴史的方法によって構成した、点にある。	同上
18	マルクス経済学の発展	マルクスの学説は資本主義社会の形成を前提として体系化されたが、現実の資本主義社会は「自由競争」の原則から、更に「独占」の組織へと進んだ。これに対応する「修正主義」が、ベルンシュタイン、カウッキーなどの学説として現れてきた。	同上
19	限界効用学派 (I)	古典学派とマルクス学派は経済学でいう価値の本質を、価値の客観的・歴史的根拠に求めたのに対して、現界効用学派は主観的・個人的判断に置き変えた。これを理論経済学の体系の基礎とし、ゴッセン、メンガー、フルラスなどが、築きあげた。	同上
20	限界効用学派 (II)	その発展は、オーストリアにウィーザー、ボェーム＝バヴェルクによって分配論について、ミーゼス、ハイエクによって貨幣論・景気変動論に至るまで展開された。アメリカにはクラーク、フィッシャー、カーヴァー、タウシッカ、セログマンなど。	同上
21	メンガーの学問的課題	歴史の発展とともに社会も転換してゆくときに限界効用原理は、社会の総体を一局部の「小宇宙」microcosmosによって理解する。経済現象を先ず「小宇宙」として探究し、それを通って世界全体を国民経済現象として、「大宇宙」として把握する。	同上
22	ワルラス人	かれの主著は「純粋経済学要論」であり、そのなかには純粋経済学、応用経済学、社会経済学の三部門が組織的に体系化される。その体系の特徴は一般均衡体系であり、数学的方法を駆使して、合理的方法によるより豊かな社会的富の生産と分配を扱う。	同上
23	新古典学派・マーシャル	ケンブリッジ学派を創立したのはマーシャルであり、新古典派経済学へ方向づけ、近代経済学のアダム・スミスである。社会観における自然法則でなく、有機的成長と進化を基礎的視点とし、数理解折的方法の摂取により、積密理論を展開した。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	マーシャル理論・均衡理論	経済社会の有機的成長過程の解明は究極の課題であるが、その前提として先ず果すべき部門は均衡理論と国民所得論である。この二つの礎柱の上に、「経済学原理」は、特殊均衡論、寡占と独占の問題、さらに長期・短期均衡の導入により体系化した。	松田智雄
25	ピグーと厚生経済学	厚生Welfareはいかにして増大されるか。測定用具を貨幣として、社会的厚生を測定すれば、それはとくに経済的厚生と呼ばれる。経済的原因によって、国民所得が形成されると、その平均量が大きければ大きいほど、厚生は増大する。	同上
26	ケインズと近代経済学の革新	現代の経済学において、ケインズ「一般理論」は、国民所得を中心とする巨視的分析によって、国民経済の総体把握を単純化し、かつ可能とした。いわゆる「ケインズ革命」の名は、経済学の一画期を示し、それは経済の理論と政策とに影響した。	同上
27	ケンブリッチ学派	マーシャル、ピグー、ケインズなど、いずれもケンブリッジ大学の講壇に立ち、しかも、イギリスが直面している政治・経済・社会問題について理論と政策を提起した。社会科学が時代を反映し、それに対して積極的な照明を与える関係の適例である。	同上
28	シュンペーターと「新結合」	シュンペーターの経済学の特質は、あの「新結合」（＝革新）の概念は、驚くべき妙味を発揮しうるので、かれに「革新の社会経済学者」の名を与えることは正当であろう。「経済発展の理論」は、資本主義の発展を「新結合」として把握する。	同上
29	毛沢東理論とその後の展回	中華人民共和国の社会主義体制は中国の全領域と全人民に展開されたが、そのうちに「文化大革命」における挫折と損失をいかにすべきか。この問いへの答えが、「社会主義体制と商品流通」という両者の矛盾なき結合を肯定する理論的提起（馬洪）である。	同上
30	要約の意味で	ギリシア哲学、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに始まり、カント学派の認識論および社会科学方法論への帰結。そして、イギリス社会思想、経済学の流れの画却はマルクス経済学であり、更に近代経済学が社会科学の精密化へと至る。	同上

＝ 現代社会論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：辻村　明（静岡県立大学副学長）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅰでは、現代社会を基本的に規定している諸条件を、世界的視野のなかで眺め、現代社会が歴史的にどのように位置づけられるかを検討する。そのためには、資本主義か社会主義かといった社会体制という条件と、近代化という条件との絡み合いのなかでみていく必要がある。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会のとらえ方	人類の発展過程を5つの社会類型でとらえるマルクスとロストウの理論を紹介し、両者の比較を通して、現社会のとらえ方の典型を検討する。	辻村　明（静岡県立大学副学長）
2	現代社会と大衆社会	現代社会を階級社会とみるか大衆社会とみるかで、意見は大きく成立するが、日本での大衆社会論とアメリカでの大衆社会論を比較しながら、コーンハウザーの大衆社会論を検討する。	同　上
3	社会体制と近代化	現代社会を規定している最も基本的な条件である「社会体制」と「近代化」について、それぞれの定義をおこなったのち、両者の絡み合いのなかで、現代社会を分析することの必要性を説明していく。	同　上
4	初期の資本主義	そのまず初めとして、資本主義社会を動かしている根本的なメカニズムを明らかにする。ウェーバーの初期資本主義のエートスやマルクス・エンゲルスの説を紹介する。	同　上
5	現代の資本主義	資本主義社会が、「機械化」と「民主化」を内包とした「近代化」が進展することによって、どのように変貌してきたかを検討する。	同　上
6	初期の社会主義社会	資本主義社会の対極をなす社会主義社会の基本的メカニズムを明らかにする必要があり、具体的にはソ連をとりあげて、国家機構、経済機構、党機構、言論機関などの現状を報告する。	同　上
7	現代の社会主義（その1）	社会主義社会も、資本主義社会と競争していかなければならず、「機械化」という「近代化」は大いに推進されてきた。それが社会全体にどのようなインパクトを与えているか、主として経済や階級の面での可能性を検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	現代の社会主義（その２）	「近代化」によって、社会主義社会も「豊かな主会主義」になっていくわけで、その結果余暇、家族、宗教などの面で、イデオロギーに抵触しかねない現象が発生する。	辻　村　　明
9	収斂理論と拡散理論	資本主義社会と社会主義社会とは、類似した社会に接近していくであろうとみる収斂理論と、両社会は根本的に対立し続けるとみる拡散理論とを比較検討する必要がでてくる。	同　上
10	現代社会と官僚制	大規模組織には不可欠の官僚制というメカニズムが、資本主義社会にも社会主義社会にも出現してくるのでその病理現象を検討することが、最終的な体制選択をするために必要な参考となるであろう。	同　上
11	発展途上国の近代化	これまでは、両社会体制の先進国間での比較ということになるが、近代化の遅れている発展途上国も近代化を指向しているので、その近代化途上におけるさまざまな難問も検討しておく必要がある。	同　上
12	高速社会と人間	機械技術のうちでも、特に交通機関の発達はめざましく、その総合的な結果として、「高速社会」とも呼ばれるべき状況が出現し、それが人間にどのようなインパクトを与えているかをみる。	同　上
13	情報社会と人間	機械技術の発達は、単に交通機関においてばかりでなく、最近は通信機関や情報処理機関での発達がめざましく、「情報社会」が人間にどのようなインパクトを与えているかも検討しておく必要がある。	同　上
14	機械技術発達の功罪（その１）	機械技術の発達は、人類に多くの利益をもたらした反面、過度の発達から逆に最近は不利益をもたらしている面があり、ここでは「高速社会」の功罪の両面を検討する。	同　上
15	機械技術発達の功罪（その２）	同じように、「情報社会」の功罪も検討する必要があり、特にＩＮＳ（高度情報通信システム）の実現する高度情報社会の問題を検討する。	同　上

＝ 現代社会論Ⅱ ＝ （R）

〔主任講師：辻村　明（静岡県立大学副学長）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅱは、Ⅰのマクロな視点にたいして、ミクロな視点にたった現代社会の現象的な諸問題をとりあげる。Ⅰが社会学的なマクロな視点とすれば、Ⅱは社会心理学なミクロな視点といえる。内容的には、自我の発生から対人関係、全国的レベルでの大衆現象、そして国際レベルでの文化摩擦に説き及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	選択的接触といいわけの論理	現代社会には、あらゆる情報が氾濫している。しかしわれわれは、それらをすべてうけいれているわけではなく、選択しながら接触している。そのメカニズムについて、フェスティンガーとハイダーの理論を考察しながら、いいわけの理論の分析を試みる。	辻　村　　明（静岡県立大学副学長）
2	自己成就予言と自己破壊予言	人間は自己暗示によって、その後の行動が変わるという心理的特性をもっている。そこに生じる現象として、自己成就予言と自己破壊予言をとりあげ、予言が人間の行動にどのような影響を与えるかを検討する。	同　　上
3	匿名の無責任と責任の分散	現代社会は大衆社会ともいわれているが、大衆という大勢の集まりのなかで、個人は匿名の存在になりがちである。そうした匿名性がひき起こす無責任な行動について分析する。	同　　上
4	縄張りと空間距離	動物には縄張りがあるが、人間にもそれに似たようなものがあって、他人と一定の空間距離をとりながら生活している。その諸相について考察するとともに、非言語的コミュニケーションにも言及する。	同　　上
5	流行と物の普及	個性をもつ個人も、大衆の一員という側面があり、大衆現象のメカニズムに規定される。そのようなものとして、流行や物の普及といった現象がどのように発生していくかを検討する。	同　　上
6	情報不足と流言	大衆現象の一つとして、流言や　話などの情報の伝播現象も重要であり、それをマス・コミュニケーションの物理的な機能および政治的な機能との関連で分析していく。	同　　上
7	パニックとゲームの理論	現代社会はパニックをひき起こしやすいさまざまな条件をそろえている。そのメカニズムについて、ゲームの理論を参考にしながら考察する。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	文化摩擦と誤解のレベル	国際化が進むにつれ、文化や価値観の異なる国民同士の接触が増大して、そこに誤解やコミュニケーション・ギャップが生じている。それを解消するにはどうしたらよいか。その対策を考える。	辻村　明
9	対外国イメージの研究	一衣帯水の隣国同士であるにもかかわらず、日韓両国は相互に偏見と悪いイメージを保持してきた。この日韓のコミュニケーション・ギャップを考察する前に、まず世界各国における対外国イメージの研究についてみておく。	同上
10	日韓のコミュニケーション・ギャップ	前章での考察をふまえて、日韓のコミュニケーション・ギャップの分析を試み、そこにみられる偏見や否定的イメージの実態と、それを解消するための方策を考えていく。	同上
11	日本人の国民性	われわれ日本人はどのような特徴をもっているのか。まず代表的な日本人論をとりあげ、さらに客観的な調査によるその実態を把握しながら、日本人の国民性を総合的に検討する。	同上
12	戦後日本の大衆心理・1	大衆心理は国民性とは多少異なり、ある特定の時代にあらわれる大衆の心理的特性を意味する。戦後日本の大衆心理を分析するに先立ち、その歴史的背景について考察しておく。	同上
13	戦後日本の大衆心理・2	大衆心理をとらえる方法として、ベストセラーの本をとりあげ、戦後40年間のベストセラーについて、特に「日本に対する肯定と否定」という観点に立って、年代別に分析を試みる。	同上
14	地域社会の復権	現代社会では、さまざまな要因から社会全体の画一化現象が多発し、地域社会や地方文化が破壊されていきつつある。その諸相をとらえながら、それを阻止するための方策を考える。	同上
15	地方文化の多様性	現代社会の危険性に対処するためには、地域社会の活性化が望まれるが、それは必ずしも容易ではない。ここでは、実際にそうした努力をしているさまざまなケースを紹介しながら、現代社会の今後の在り方について考察する。	同上

＝日本経済と産業と企業＝（TV）

主任講師：小林靖雄（元放送大学副学長）
磯部浩一（放送大学教授）
宮沢健一（一橋大学名誉教授）

全体のねらい

日本経済の国際的地位は最近数年の間に大きく変化し今や世界一の債権国となり、貿易摩擦などの難問に直面し、進むべき方向を真剣に捜索している現状にある。転換期にある「日本経済と産業と企業」の動きを、自分の眼で見、自分の頭で考えるための分析の用具や、枠組みを提供するのが本書のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本経済の国際的地位	1. はじめに —「日本経済と産業と企業」の狙い 2. 1970年代以降の諸変化 3. 国際的地位を示す指標 4. 諸変化の意味するもの	磯部浩一 （放送大学教授）
2	経済の実態把握の方法	1. 方法を取り上げる理由 2. 研究の目的 3. 研究の対象 4. 変化する実態へのアプローチ 5. 方法と価値	
3	日本経済の歴史的展開	1. はじめに 2. 日本経済の100年 3. 世界経済の変動期 4. おわりに	
4	日本経済の現状 —国民経済計算による	1. はじめに 2. 新SNAについて 3. 新SNAによる日本経済の現状	同上
5	経済基盤の変動	1. はじめに 2. 経済基盤の変動 3. 基層・中層・表層間の変動メカニズム 4. むすび	同上
6	産業経済のとらえ方	1. 活動単位としての産業の二面性 2. 産業経済の分析方法の類別 3. 産業機構の作動と産業政策	宮沢健一 （一橋大学名誉教授）
7	産業構造と経済発展	1. 産業発展の経験法則 2. 工業化と産業構成の変動 3. 産業発展と国際的環境	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業連関の仕組み	1. 産業間の連結の型とはたらき 2. 産業間波及と最終需要の構成 3. 日本の産業連関の変貌	宮沢健一
9	産業組織の成り立ち	1. 産業活動と市場および企業 2. 有効競争と企業への公共政策 3. 日本の産業組織の動態	同上
10	産業社会と経済体制	1. 産業社会の機構評価の着眼点 2. 日本の産業発展の体制的側面 3. 産業活動と制度の枠組み	同上
11	企業経営の歴史的展開	1. 日本企業の経営特質の形成 2. 財閥本社の成立と資本支配 3. 終身雇用と年功序列型賃金制度の成立 4. 科学的管理の導入 5. 管理会計の整備 6. 中小企業の下請的利用 7. 稟議制度による意思決定	小林靖雄 （元放送大学副学長）
12	日本企業の国際比較	1. 国際競争力の要因 2. 高度の技術・製品開発力 3. 設備の近代化投資 4. すぐれた人的能力とその育成 5. 経営管理力の充実 6. 諸要因の労働生産性と収益力強化への結実	同上
13	企業の多国籍比	1. 海外直接投資の動向 2. 海外企業の状況 3. 海外日本企業の経営管理 —日本的経営との関係 4. 国際的企業経営のあり方	同上
14	日本的経営とその変化	1. 戦後の日本経営の変貌と職務給 2. 年功型賃金の修正 3. 近代的経営管理と経営土壌—職場集団主義 4. 労使関係における協調主義 5. 日本的経営の長所と国際性	同上
15	日本経済と産業と企業の今後の動向と課題	1. 構造変動から構造調整へ 2. 産業経済の変容の方向と課題 3. 経営管理の発展と環境変化への適応	小林靖雄 宮沢健一 磯部浩一

＝経　営　総　論＝（R）

〔主任講師：栗山盛彦（千葉大学教授）〕

全体のねらい

今日の高度産業社会の中核的組織である「経営（企業）」について研究する場合の基礎的な考え方や概念、できるだけ平易に、包括的に示したい。とくに専攻「産業と技術」という特定の諸専門科目を考慮に入れて、それらと有機的な関連をもたせるように工夫する。新しい時代的要請である技術革新や国際経営にも重点を置く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の社会と経営	1. はじめに 2. 新しい社会、新しい経営 3. 現代経営の特徴とその志向性	栗山盛彦 （千葉大学教授）
2	経営と経営学	1. 経営とは 2. 経営学の対象としての経営 3. 経営の本質を究明することの必要性 4. 経営の本質へのアプローチ	同上
3	経済的な経営理論	1. 経済的な見方による経営 2. 「経営の経済」における基本原理 3. 「経営の経済」の活動過程	同上
4	経営と事業　(1)	1. 事業志向経営の成立 2. 資本と経営の分離 3. 経営の社会的存在意義の意識化	同上
5	経営と事業　(2)	1. 経営の社会的な見方 2. 社会的な見方をビルド・インした経営理論（「経済・技術的システム－社会的システム」を基礎とする諸理論） 3. 経営二重システム論（「経済・技術的システム」－「社会的システム」） 4. 経営三重・四重システム論	同上
6	経営目的	1. 経営目的の意義 2. 経営理念について 3. 経営目標について	同上
7	経営職能の基礎	1. 「事業の営み」としての経営職能 2. 経営基本職能　－維持職能と成長職能との複合的な関係と指導原理 3. 経営維持職能とこのための経営管理活動 4. 経営成長職能とこのための経営管理活動	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営管理	1. 2つの経営管理 2. 「人間努力の結集」としての経営管理 3. 「事業遂行」としての経営管理	栗山盛彦
9	経営組織	1. 経営組織の意義 2. 経営組織の基本要素 3. 経営組織の構造	同上
10	経営の成長理論	1. 経営成長に関する2つの見方 2. 初期の2つの古典的経営成長論 —有機的成長過程論と機械的成長論 3. 現代の経営成長論	同上
11	現代の経営計画思想	1. 未来志向的・形成的な経営計画態度 2. 未来志向メンタリティーと経営予測 3. 事業形成メンタリティーと戦略的経営計画	同上
12	新規事業形成と研究開発	1. 新規事業の形成論理 2. 研究開発による新規事業の形成 3. 総合事業経営戦略	同上
13	国際経営論 (1)	1. 現代経営の国際化 2. 国際経営化にともなう対象市場志向性の推移と事業世界観 3. 国際経営の業種別特性と進出動機	同上
14	国際経営論 (2)	1. 国際経営戦略 2. 国際経営の海外事業会社所有関係 3. 現代世界の代表的国際経営—多国籍企業 4. 国際合弁会社の経営—日本の代表的国際経営形態	同上
15	21世紀の経営ビジョン	1. 模倣から創造へ 2. 日本・米国・ドイツの経営 3. 新しい経営ビジョン構築上の問題点 4. 日本経営の未来ビジョンと世界への寄与	同上

＝会　計　総　論＝（TV）

〔主任講師：江村　稔（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義は企業会計の「しくみ」と「はたらき」のあらましを学ぶことを目的とする。企業会計における会計処理は複式簿記として特色づけられるので、これを説明するが、会計処理は期間損益の算定という目的をもつので、その諸相についてもとりあげよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	決算書とその役割	企業会計の所産である貸借対照表と損益計算書は株式会社の定時総会に提出され会社の財産と損益の状況（財政状態と経営成績）を報告する役割をもっている。そこでまず、決算書としての貸借対照表と損益計算書について述べる。	江村　稔（放送大学教授）
2	複式簿記と複式記帳	複式簿記は左右両欄式の２つの勘定の間で行われる借方（左側）と貸方（右側）の同額記入としての複式記帳によって特色づけられる。この複式記帳を経済活動のもつ２面性に注目して説明する。	同　上
3	複式記帳の法則	複式記帳は一定のルールに従って行なわれる。このルールは必ずしも理論的に設定されたものではないが、ぜひとも記憶しておかねばならないものである。	同　上
4	決算のしくみ	各勘定の残高を借方・貸方の別に従って、１つの勘定にまとめると、その借方と貸方の合計額は一致する。この特長を用いて、記帳と計算の検証がなされるほか、勘定の締め切りとしての決算が完了し、決算が作成されるのである。	同　上
5	損益計算書の様式	損益計算書に設けられている各種の区分、および、その区分ごとに示される各種の損益につき説明し、また、損益計算書の末尾に当期末処分利益が記載されることを明らかにする。	同　上
6	利益の処分と留保	損益計算書の末尾に当期未処分利益が記載されることになっている。当期未処分利益は株主に対する配当など、会社が処分することができる利潤を示すものであるが、同時に、この未処分利益の増減計算書を知る必要がある。	同　上
7	貸借対照表の様式	貸借対照表に設けられる各種の区分について述べるが、この場合、もっとも重要な問題として、流動・固定分類につき詳説しよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	損益計算の原理と方法	ある期間の損益は、その期間の収益からこれに対応する期間費用をさしひくことによって計算される。この計算のもつ理論的な意味について考えてみよう。また、期間収益と期間費用の決定にあたっては、発生主義と呼ばれる考え方がとられるが、現金主義との差を明らかにしながら、その意味につき説明を加える。	江村　稔
9	売上高と売上原価	企業の収益は、売上高から売上原価を差し引くことによって売上総利益または売上総損失として求められる。そこで売上高と売上原価の決定についての問題点を取り扱う。	同　上
10	棚卸資産の貸借対照表価額	商製品の貸借対照表価額は取得原価によるといわれているが、この金額は取得価額から払出価額を減じて求められる金額に期末修正を行ったものと解される。	同　上
11	固定資産の貸借対照表価額	固定資産の貸借対照表価額は、取得価額から減価償却累計額を減ずることによって求められる。取得価額もしくは取得原価の期間配分としての減価償却を中心として説明しよう。	同　上
12	繰延資産とその償却	企業による支出には、その効果が将来の数週間におよぶものがある。期間損益計算では、このような金額は数期間にわたる費用として扱われるが、このための会計技法として繰延資産の計上と償却が行われる。	同　上
13	引当金の設定	企業会計では、将来に生じる事象の金額を、あらかじめ期間費用として計上する処理としての引当経理が、例外的に認められている。引当経理が行われる条件は、きわめてきびしいが、この章では、これらの問題を論述する。	同　上
14	企業内容の開示と財務報告	有価証券報告書の主要部分をなす財務諸表については大蔵省令である財務諸表等規則が適用される。そこで、いわゆるディスクロージャーの諸問題を説明しよう。	同　上
15	財務諸表の監査制度	会社が作成し公表する決算書もしくは財務諸表については、監査役や公認会計士による監査が行われる。この章では、商法特例法と証券取引法による規制を説明する。	同　上

＝ 現 代 の 数 学 観 ＝ （R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学史のなかから、現代の数学観の形成に強く関係していると思われる事項のみをとり上げ、現代の数学者の大多数がもつ「数学に対する考え方」を解説する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	論証的数学の起源	タレス　ピタゴラス　黄金分割　無理数　幾何学を知らざるものはこの門に入るべからず	前原昭二（放送大学教授）
2	ユークリッド原論 I	『原論』の著者　ユークリッド原論　原論における証明の性格原論における「命題」命題20の証明のあらすじ	同上
3	ユークリッド原論 II	ユークリッド原論の構成　定義　公準（要請）公理（共通概念）　平行線の公理（＝第5公準）「平行線の公理」の通常の表現　3角形の内角の和	同上
4	非ユークリッド幾何学	非ユークリッド幾何学　3角形の内角の和　リーマンの研究　球面上の幾何学	同上
5	非ユークリッド幾何学の無矛盾性	サッケリの研究　ガウスの研究　ベルトラミのモデル　リーマンの非ユークリット幾何学のモデル　クラインのモデル	同上
6	ヒルベルトの幾何学基礎論	非ユークリッド幾何学の統合的理解　リーマン幾何学　ユークリッド原論の立場の再検討　ヒルベルトの『幾何学基礎論』　ヒルベルトの公理主義　抽象数学	同上
7	アインシュタインの『幾何学と経験』から	アインシュタインの「幾何学と経験」　物理法則と数学との違い　公理主義の数学　自然科学に使われている数学	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	虚数	虚数の必要性　複素数　複素数の計算　コーシーによる複素数の定義　ハミルトンによる複素数の定義　複素数についての計算法則	前原昭二
9	無理数論	無理数　無理数の必要性　無理数論　有理数の切断　有理数の切断の例　無理数の定義　実数の連続性	同上
10	整数と有理数	整数の定義　有理数の定義	同上
11	デデキントの自然数論	ユークリッド幾何学の無矛盾性　一連の無矛盾性証明　自然数　ペアノの公理　ペアノの公理の無矛盾性	同上
12	ラッセルの数理哲学	論理主義　公理主義数学における論理　論理の公理化　ハーンの見解　要約	同上
13	集合論のパラドックス	カントンの集合論　集合論的数学観　集合論のパラドックス　ラッセルのパラドックス　フレーゲ宛のラッセルの手紙　意味論的パラドックス	同上
14	数学基礎論	ラッセルのパラドックスの分析　論理主義　直観主義　形式主義	同上
15	数学の現状	記号論理学　公理的集合論　数学の現状	同上

＝基礎数学Ⅰ＝(TV)

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

高等学校の微積分に引き続いて、微積分の初等的部分を講述する。計算法に主眼をおくが、最後に、微積分を論理的に構成する筋道の概略を説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	逆三角関数	逆関数　逆正弦　逆余弦　逆正接　逆三角関数　逆三角関数の微分法　逆三角関数になる不定積分　問題	前原昭二（放送大学教授）
2	微分	無限小　高位の無限小　ランダウの記号　微分　置換積分法への応用　$x=a\sin\theta$とおく置換積分　微分の性質　問題	同上
3	有理関数の不定積分	分子の次数を分母の次数より小さくする　分母が異なる1次因数に分解される場合　分母が1次式の累乗になる場合　分母を微分すると分子になる場合　分母が因数分解できない2次式の場合　一般論（その1）　一般論（その2）　問題	同上
4	微分方程式	1階定数係数同次線形微分方程式　定数変化法　2次の行列式　2階定数係数同次線形微分方程式の一般解　特性方程式　定理3の証明　定数変化法（2階の場合）　問題	同上
5	定積分の定義の拡張	本来の意味での定積分　微分積分法の基本定理　第1種の広義積分　第2種の広義積分	同上
6	平均値定理	微分法における平均値定理　平均値定理の表現法　積分法における平均値定理　コーシーの平均値定理　$\frac{0}{0}$という形の極限値　$\frac{\infty}{\infty}$という形の極限値　問題	同上
7	偏導関数	偏導関数　高階の偏導関数　2変数関数の極限・2変数関数の連続性　全微分可能性　全微分　合成関数の微分法　問題	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	重　積　分	立体の体積（その１）　立体の体積（その２） ２重積分　楕円体の体積　重積分　問題	前　原　昭　二
9	重積分の変数変換	２次の行列式の幾何学的意味　典線座標　２重積分の変数変換　問題	同　上
10	テイラーの定理	テイラーの近似式　極大極小への応用　テイラーの定理　問題	同　上
11	無　限　級　数	無限級数　正項級数　絶対収束　問題	同　上
12	ベ　キ　級　数	テイラー展開　ベキ級数　項別積分　２項定理 収束半径	同　上
13	平　面　曲　線	媒介変数方程式　典線の長さ　導関数を表わすニュートンの記号　典率　典線$y=f(x)$についての公式　円の伸開線	同　上
14	極限の定義	直観的な定義に対する反省　数列の極限　関数の極限　関数の連続性　その他の極限の定義	同　上
15	微積分の論理的構成	連続関数の性質　微分法の平均値定理　微分積分法の基本公式の証明　積分法の平均値定理　原始関数の存在定理の証明　平均値定理のその他の効用	同　上

＝ 基 礎 数 学 Ⅱ ＝ （R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

線型代数学について講述する。しかし、線型代数学の詳論に立入ることはせず、連立1次方程式の解法と2次曲線・2次曲面の分類という古典的な問題に線型代数の方法を適用することによって、線型代数の方法の直観的性格と線型代数における諸概念の幾何学的な意味とを明らかにしたいと思う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	n 次 元 数 空 間	n次元数空間の概念を説明し、2次元・3次元の図形的なベクトル空間からの類推によって、n次元数空間の初等的な性質を解説する。また、連立同次1次方程式との関連において、ベクトルの1次独立性と次元との関係に言及する。	前 原 昭 二（放送大学教授）
2	行 列 式	平行4辺形の面積と平行6面体の体積を利用して2次と3次の行列式の定義を与え、それを一般化することによって一般の行列式を定義する。また、行および列についての展開法にも触れる。	同 上
3	1 次 変 換	n次元数空間からm次元数空間の中への1次変換の定義を与え、1次変換を行列によって表現する方法を説明し、行列の演算を1次変換の演算によって定義する。また、行列式の積の計算法を、行列式の基本性質と1次変換の考えを利用して説明する。	同 上
4	行 列 式 の 応 用	正方行列が逆行列をもつ条件とか連立1次方程式のクラメルの解法を含め、行列式を用いると表現が簡潔になる事例のいくつかを初等数学の範囲から選び、それについて解説する。	同 上
5	部分ベクトル空間	数空間の部分ベクトル空間とその次元について説明する。それとは独立に行列の階数の定義を与え、行列の階数と部分空間の次元との関係を明らかにすることを目標とする。	同 上
6	連立 1 次 方 程 式	一般の連立1次方程式に対し、解が存在するための1つの必要十分条件を与え、解が存在するときの一般的解法について述べる。	同 上
7	対称行列と2次形式	転置行列の基本的な性質を述べ、対称行列を用いて2次形式を表現する方法を説明する。また、原点を中心とする2次曲線の標準形を求める方法を例にとり、2次の対称行列の固有値と固有ベクトルの幾何学的な意味を解説する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	正規直交基底と2次形式	正規直交基底と直交行列について説明し、2次形式を表わす対称行列が正規直交基底の変換によってどのように変形されるかを説明する。とくに3次の対称行列について、直交変換による対角比の方法を述べる。	前原昭二
9	2次曲線の分類	これまでに得た知識を用い、2次曲線の方程式の標準形を求める方法を述べる。	同　上
10	2次曲面の分類（その1）	前章と同様な方法により、2次曲面の方程式の標準形について述べる。	同　上
11	2次曲面の分類（その2）	前章で得た標準形をもとに、個々の2次曲面の形状や名称について述べる。	同　上
12	ベクトル空間	スカラーが実数である場合に限定し、ベクトル空間の一般的定義を与え、その基本的な性質について説明する。また、n次元ベクトル空間がn次元数空間と同形であることにも言及する。	同　上
13	n次元ユークリッド空間	n次元アフィン空間、n次元ユークリッド空間について説明する。	同　上
14	複　素　数	複素数に関する基本的事項について説明する。代数学の基本定理にも、証明なしで言及する。	同　上
15	ユニタリ空間	スカラーを複素数とするベクトル空間の一例としてユニタリ空間の定義を与え、ユニタリ変換による正規行列の対角比について説明する。	同　上

＝ 基 礎 数 学 Ⅲ ＝ （R）

〔主任講師：廣瀬　健（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

集合と位相の概念について講述する。

これらは、いずれも現代数学の基礎となる極めて重要な概念である。現代数学の諸分野を構成する各概念、手法は、これらの概念を用いて記述されるといってよい。

本講では、具体的な例をあげつつ、なるべく平易に、これらの解説を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	集合とその演算	集合概念の説明から、用語の導入、歴史的経緯、その有用性について解説する。 集合論における基本概念、集合の上の演算とその意味、論理との関連などについて述べる。	廣瀬　健 （早稲田大学教授）
2	写像とグラフ	関数概念の説明、それを集合間の写像としてとらえることなどについて述べ、写像についての基本概念、すなわち単射、全射、1対1対応逆写像、写像の合成などについて説明し、さらに、それを集合の直積の部分集合として表現することなどを解説する。	同　上
3	同値美	現代数学の1つの特徴は、対象の"ある性質"に着目し、その性質について同じであるものは、これをひとまとめにして同一視し、"1つのもの"と考えるところにある。この考え方を集合を用いて表現する同値関係、同値類などについて述べる。	同　上
4	集合の濃度	"数"についての基本概念は、それによって個数を表現する濃度（基数）および順序を表現する順序数に関わるものが中心である。ここでは、集合の"個数"の概念を一般化した濃度について説明し、濃度についての代表的結果について解説する。	同　上
5	濃度と次元	1対1対応によって類別された各集合では、例えば、1次元の直線上の実数全体と二次元の平面上の点全体とは同じ濃度をもつ、次元を区別するのは位相的概念であって、これらの対応は連続にならないこと、ペアノ曲線などについて述べる。	同　上
6	順序集合	自然数全体の集合や実数全体の集合では、集合の要素の間に順序が定義されている。数学で扱われる集合の多くは、なんらかの順序関係が定義されているのが普通である。 ここでは順序をもった集合、すなわち、順序集合とその基本的性質を明らかにする。	同　上
7	ツォルンの補題	集合論を建設したカントルは、集合に適当な順序を導入すれば整列集合になることを仮定した。この仮定は後に選択公理やツォルンの補題という形で表現されることになった。ここでは、それらの意味についてなるべく平易な解説をする。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	実数の集合と ユークリッド空間	実数の集合と自然に対応する直線上の距離の概念を拡張してユークリッド空間を定義し、ユークリッド空間の“距離”の概念を用いて、関数の連続性の概念を定義し吟味する。また、集合に“構造を入れる”ことの意味について解説する。	廣瀬　健
9	距　離　空　間	ユークリッド空間を、空間としてさらに抽象化し、“距離”の概念を一般化して距離空間を定義する。実例をなるべく豊富に示し、やさしい関数空間などをも挙げる。	同　上
10	位　相　空　間	距離空間における、収束性、連続性などの性質を考察することにより、開集合、閉集合系の概念を用いて、距離空間をさらに一般化して、位相空間を定義する。	同　上
11	位相写像と連続写像	定義された写像の定義域に構造が与えられているとき、その写像が定義域の構造をどの程度保存するかが問題になる。 位相空間の間の連続写像、位相写像が保存する性質、つまり位相的性質について解説し、実例をなるべく多数挙げる。	同　上
12	コンパクト集合	位相空間に関わる議論の代表的な手法を考察すると、コンパクト性と呼ばれる性質が浮かびあがる。 コンパクト集合の定義、基本的性質について述べ、収束の概念などとの関係を説明し、その有用性を示す。	同　上
13	連　結　集　合	位相空間における部分集合同志の連結、分離の概念について考察し、連結集合に関わる諸性質、実例などを示す。 コンパクト性、連結性が位相的性質であることに注意し、直観的イメージとの関連を重視する。	同　上
14	位相空間の分離条件	位相空間の概念は、きわめて一般的であるから、位相空間の点や部分集合の間の関係を導入し、内容を豊富にすることを考える。コルモゴルフ、フレシェ、ハウスドルフ、ヴィエトリス、ティエツェの分離公理などを解説し、正規空間によって、再び、実数にめぐりあう。	同　上
15	距離空間と完備集合	可算公理、距離づけ可能性、可分、全有界などの概念と共に、位相空間への一般化への前程としての距離空間としてではなく、最もよく扱われる位相空間としての距離空間を考察し、完備性などについても解説する。	同　上

＝ 確　　率　　論 ＝ (R)

〔主任講師：清水良一（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

確率論は偶然現象を記述するための一つの数学的手段である。偶然現象というのは現実に起るのか起らないのか起るとすれば何時どのような形で起るのかということが予測出来ない、という意味でのでたらめさをもっているものをいう。このような現象も一定の条件下で観察を続けていると発生の仕方に一定の法則性が現われて来る。それを見るためには現象を適当にモデル化しなければならないことを説き、その方法と効用を述べる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	確率とは何か	1. 確率の意味 2. 先験確率と経験的確率	清水良一 （統計数理研究所教授）
2	偶然現象の不規則性と規則性	1. 乱数 2. 硬貨投げの実験 3. 度数分布とヒストグラム	同　上
3	偶然現象の記述	1. モデルの利用 2. 標本空間 3. 確率事象	同　上
4	確率空間	1. 離散型の確率空間 2. 組合せの数 3. 一般の確率空間	同　上
5	つぼのモデル	1. つぼとボール 2. 2項分布 3. 超幾何分布	同　上
6	公平な賭け	1. 賭け金の配分 2. 聖ペテルスブルクのパラドクス 3. 宝くじの価値	同　上
7	条件つき確率	1. 確率の加法性と連続性 2. 条件つき確率 3. 乗法公式とその応用	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	条件つき確率	1. 全確率の公式 2. ベイズの定理 3. 事象の独立	清水良一
9	互いに独立に成起する事象	1. 同時分布と周辺分布 2. 独立試行 3. 重複試行	同　上
10	互いに独立な試行の系列	1. 確率変数 2. 分布関数 3. 確率的シミュレーション	同　上
11	稀な現象の記述	1. 2項分布の特性値 2. ベルヌウイの定理 3. 2項分布の正規近似	同　上
12	多変量の確率変数	1. ポアソン分布 2. 格子型分布の期待値 3. 確率母関数の利用	同　上
13	極限状態での確率変数の行動	1. 連続分布 2. 待ち時間 3. 大数の法則	同　上
14	正規分布	1. 独立な確率変数の和 2. 中心極限定理 3. 正規分布	同　上
15	互いに独立でない変数の系列	1. マルコフ系列 2. マルコフ連鎖	同　上

＝統　計　学＝（R）

〔主任講師：長坂建二（放送大学助教授）〕

全体のねらい

統計データの整理の仕方として、ＥＤＡの手法や伝統的な平均・分散・相関関数等の計算の仕方や性質を紹介し、その一例として暗号解読を考える。後半は、主として正規母集団に対する推定・検定論を標本分布論の基礎の上に展開するが、ベイズ推論や統計的決定理論の一端にも触れ、統計学の意義や将来への展望を考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	統計学への招待	統計学の歴史を古代から近代に渡って概観し現在の統計学につながる大量データから一定の法則を発見する基本的な考え方を紹介し、ケトレーによる近代統計学の成立とその行き過ぎを説明し、統計学とは何かを考える。	長坂建二（放送大学助教授）
2	資料の整理	統計学データを整理するための基本的な手法を学ぶ。ＥＤＡの手法から、幹葉表示と要約表示の作成と利用法を実例とともに示す。また統計で扱う「変数」の一般的な概念について、及び度数分布、累積度数分布、パーセント点、などについて学習する。	美添泰人（立正大学教授）
3	位置と散らばりの尺度	統計資料を整理した後に、その全体的な状況を説明する数字として、平均、中央値、最頻値などの位置の尺度の計算の仕方と性質、及び最大値、最小値、範囲、分散などの散らばの尺度、さらに尖度、歪度について述べる。	長坂建二
4	関連の尺度	二つの量の間の関連を見るための手段として質的変数に対する分割表、量的変数に対する散布図・相関係数、回帰直線の計算法と、最小二乗法を通じての解釈を説明する。また、分割表の関連度や因果関係と相関関係との差異についても言及する	同上
5	データの変換	データの構造をより明確に理解するための手段として、データの変換という手法について学ぶ。度数分布の対称化、散布図の線形化、時系列データの移動平均値について、例とともに解説する。また、外れ値とその処置についても言及する。	美添泰人
6	ベイズの定理	数学的には極めて単純なベイズの定理は、統計学においては深い内容をもつこと、そして事前確率や事後確率の考え方を紹介し、それが因果推論などに役立つことを示す。	松原望（東京大学教授）
7	暗号と統計推論	文字の出現頻度を理論頻度と比較して、古典的な換字暗号の解読に統計手法が適用可能であることを示すとともに、最近の暗号システム、特に公開鍵暗号法を紹介し、統計手法の限界について論ずる。	長坂建二

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	母集団と標本	統計学の基本的な枠組みである母集団を確率論の上に構成し、統計モデルの考え方を導入する。また、標本も確率論の言葉で定義し、統計推論のパラダイムを確定する。さらに、計数型品質管理技法より、離散分布の例を与えると共に、モデル化の実例をＯＲより紹介する。	長坂建二 牧野都治 （東京理科大学教授）
9	統計量と分布　Ⅰ	測定誤差という見地から正規分布を考え、それが統計学の理想上の分布であることをみた上で、x^2分布、t分布、F分布と導入してゆく。統計学（数理統計学）の中では、基本的部分である。	松原　望
10	統計量と分布　Ⅱ	標本平均と標本分散の性質を、平均演算の性質より示すと共に、重要な極限定理や有限母集団補正について説明する。また、前章の結果に対して数学的に厳密な証明を与える。	長坂建二
11	統計的推定論	不偏・一致・十分・有効などの推定量の性質を紹介し、点推定についてのべる。また、最尤推定量の考え方を説明する。さらに、信頼正間の求め方と正規母集団に対する例を与える。	同　上
12	統計的検定論	統計的仮説検定論の考え方と枠組を示し、正規母集団を仮定して平均、分散に対する検定の原理と計算法を解説する。また、独立性の検定、相関係数の検定についても計算法を与える。	同　上
13	ベイズ推論	ベイズ的な統計推論についての基本的な考え方を紹介する。ベイズの定理の意味について再考し、主観確率がなぜ必要なのかを解説する。つづいて比率と平均についての応用を示し、最後に非ベイズ的手法の理論的な問題点にも触れる。	美添泰人
14	統計的決定理論	戦略的思考としての統計的決定の理論であり不確実性下での意思決定であることをみたのち、ベイズの定理を用いてデータを取り込む過程を、わかり易く解説する。日常の決定で決しかねる場合も、これによれば一応の解決を見る。	松原　望
15	統計学の将来	1）パレート分析の手法とその実例を紹介しＯＲの面から統計学の将来を語る。 2）コンピューターの利用が不可欠となることと、統計教育の将来について。 3）探索的データ解析と統計手法の頑健法。 4）統計学の社会的役割について論ずる。	牧野都治 美添泰人 松原　望 長坂建二

＝物理科学史＝（R）

〔主任講師：坂本賢三（千葉大学教授）〕

全体のねらい

科学史は科学を歴史的に扱う学問であるが、単に過去の発見を時間的順序に並べて説明するだけのものではない。歴史的に扱うとは、科学をその時代の社会の中に置いて考察することであり、それぞれの　代に、なぜそのことが問題になったのか、なぜそのようなとらえ方をしたのかを探ることである。

この講義では、科学史のうち生命科学に関する分野を除いた全部、すなわち、物理学．化学．天文学．工学等の歴史を扱うが、物理科学は単に研究対象によって生命科学と区分されるのではなく、基本的には対象を扱う方法の相違に大きな特徴がある。現代は生命現象をも物理科学的に扱おうとしているから、生命科学と重なり合う部分も持っているが、歴史的には別の学問的伝統として今日に至っているので、物理科学史だけを独立させて扱うことは十分意義がある。

したがって、自然に対する物理科学的なアプローチの仕方を歴史的に見ることによって、「自然の理解」を理解する助けにしようというのがこの講義の目的である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	緒論	科学史を学ぶことの意義 科学史の方法	坂本賢三 （千葉大学教授）
2	中世科学の3つの流れ	近代科学の意義を認識するために、17世紀までの主要な自然へのアプローチの仕方を、アリストテレス主義（目的論）、ヘルメス（錬金術と占星術）、アルキメデス（機械論）の3つの流れから概説する。	同上
3	科学革命	近代科学の成立を「科学革命」ととらえる現代の科学史像を概説し、その基本的特徴を、宇宙像の変革と数学の利用と実験装置の発達から見る。	同上
4	方法の確立	近代科学の方法は、ほかならぬ物理科学の方法であり、その基本的性格と意義を、フランシス・ベーコン、デカルトなどの扱い方の中に見て行く。	同上
5	力学の形成	物理科学の基本的モデルとしてまず成立したのが古典力学であった。ガリレオやデカルトの運動学がニュートン力学に統合されて行った過程を追い、「力」という概念成立の意義と公理系としての側面に注目し、なぜ古典力学が物理科学のモデルになったかを考察する。	同上
6	十八世紀の諸科学	18世紀には、光・電気その他あらゆる面で物理科学が展開したが、とくに流体力学と地学と工学を典型として取りあげ、その社学的背景や技術との関係、教育機関の成立などについて考考する。	同上
7	微積分の役割	数学は一応、物理科学の中には含めないが、物理科学の特徴として数学の利用は見ないわけに行かないし、とくに微積分は力学の成立と切り離すことができないので、その意義を見る。とくに物理科学において法則が微分方程式の形で表現されることの意味、18世紀に展開した変分法とその意義、それらの結晶としての解析力学について扱う。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近代化学の成立	それまで錬金術や薬学として近代科学になっていなかった化学がラヴォアジエによって近代物理科学の1つとして出発を始めたことの意義を元素の概念の確立、分子説、原子説の成立において扱う。19世紀化学工業との関係についても論じる。	坂本賢三
9	電磁気学の完成	初期の理論からあらためてふりかえり、電気学の歴史を概観するとともに、電磁誘導の発見を媒介にして成立した「場」の概念、マクスウェルによる電磁気学の体系化、さらに電磁波の概念や光の波動説にも触れる。	同　上
10	熱力学の成立	蒸気機関の研究から熱力学が成立した経過をたどり、エネルギー概念の成立、熱力学の基本原理とその特質を見る。さらに分子運動論と統計力学についても触れる。	同　上
11	相対性理論の確立	エーテルの概念を検討して、古典電磁気学との関係を明らかにし、とくに力学の面における特質を強調する向きのある一般の解説に対し、科学史的に見た場合の相対性理論の意義を述べる。	同　上
12	量子論と原子の構造	19世紀末に始まった電子論と原子論の復活、さらに放射能の発見等から「量子」の概念が出てきた過程をたどり、量子論から量子力学の成立、素粒子論への展開の経緯を述べ、解釈問題、観測問題にも触れる。	同　上
13	宇宙物理学と宇宙の構造	天体の物理的研究の発展、天体望遠鏡の発達などから、20世紀前半に盛んになった宇宙構造論や宇宙進化論の歴史を概観する。20世紀後半における新知見にも触れる。	同　上
14	情報科学とサイバネティクス	20世紀後半に登場した新しい物理科学のアプローチの仕方として、通信と制御の理論の意義を述べる。ここでは、自然科学と工学との密接化の問題や推測統計学の役割、オペレーションズ・リサーチとの関係、情報概念の成立について歴史的に見て行く。	同　上
15	物理科学の現在	むすびに当る部分であるが、現代物理科学が完成しているわけではないので、物理学における最近の統一理論や生物物理学の動向や工学において物理科学がモデルとしての役割を果しつつあることなど、最近の話題をとりあげながら、物理科学史全体をまとめる。	同　上

＝ 物質とエネルギー ＝ (R)

〔主任講師：池上雄作（東北大学非水溶液化学研究所教授）〕

全体のねらい

自然界を形づくっている物質とエネルギーの科学でもっとも基本となることがらを学習する。とくに物質と熱エネルギー、化学構造とエネルギー、光と物質がみせるスペクトルなどに焦点をあわせて化学の立場から解説し、エネルギーと物質とのかかわりあいを学ぶことによって、自然への理解を高めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	エネルギーの形態 ―序論として―	物質が形づくっている自然界や文明社会を動かしている原動力がエネルギーである。熱、化学、光エネルギーなど、エネルギーのいろいろな姿、エネルギーの変換、エネルギーと物質のかかわりあいを序論として解説する。ミクロの粒子がもつエネルギーを理解することの重要性を強調したい。	池上雄作（東北大学非水溶液化学研究所教授）
2	物質の理解	多様な物質の分類や構成をどう理解するかについて述べ、原子、分子、イオン、モルの概念を簡潔にまとめる。さらに、無機、有機物質のいくつかを化学式とともに解説し、最後に物質の状態変化および結合エネルギーに言及する。	同上
3	物質の状態と熱エネルギー	3～6章は化学熱力学の基本を取り扱うが、本章ではまず力学的エネルギーから入り、仕事と熱、内部エネルギー、そしてエネルギー不変則としての熱力学第一法則を解説する。さらに理想気体を取りあげ、可逆および非可逆的体積変化過程を述べ、熱、温度および熱容量に言及する。	関集三（大阪大学名誉教授）
4	状態変化・化学変化と熱エネルギー	物質の変化が起こるときは熱エネルギーの出入が伴う。反応熱の一般的性格、つづいて代表的化合物の生成エンタルピー、熱容量とその温度変化を説明、とくに熱測定、カロリメトリーを解説する。代表的な反応熱と緩学結合エネルギーにも言及する。	同上
5	物質変化の方向：エネルギーとエントロピー	自然に起こる物質変化には、主としてエネルギー変化で理解できるものとそうでないものがある。可逆変化と不可逆変化、変化と確率の関係を述べエントロピー概念の必要性に言及し、熱力学第二法則を示す。さらに、エネルギーとエントロピーから自由エネルギーを導く。	同上
6	自由エネルギーと化学平衡	エネルギーとエントロピーからギブズ自由エネルギーを導き、その性質と役割を解説したあと、化学ポテンシャルの概念を導入する。つづいて、代表的な化学反応系での反応の進行の可能性を予測するための熱力学量を与え、具体的に平衡条件を導く。	同上
7	エネルギー量子の概念	量子論のはじまりとなった物体の放射スペクトルの説明に関するプランクの量子の考え方、水素原子の電子の運動とスペクトルとを説明したボーアの原子模型、光と電子の粒子性と波動性の二元性について説明する。	米澤貞次郎（京都大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	電子の分布と エネルギー準位	電子の運動状態を明らかにする量子力学の基本方程式（波動方程式）について述べ、これから明らかにされる水素原子の電子状態にふれ、分子の結合に対する電子の役割について、いくつかの例を挙げて解説する。	米　澤　貞次郎
9	分子軌道と フロンティア電子	エチレンを例にとって炭素ー炭素二重結合にσ電子とπ電子がかかわっていること、ベンゼン、ナフタレンなどの化合物中のπ電子の挙動を説明する分子軌道法について述べ、これら化合物の化学反応の理論であるフロンティア軌道理論にふれる。	同　　上
10	フロンティア軌道 理論とその周辺	フロンティア軌道理論を提唱した福井謙一博士との対談形式により、フロンティア軌道の発端、その展開、有機反応への応用、創造への道がどうあるべきかなどに関する博士の意見を聴く。	米　澤　貞次郎
11	電磁波と スペクトロスコピー	光や電波で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで周波数が広い範囲に及び、$E=h\nu$ のエネルギーをもつ。電磁波の性質について、つづいて物質による光の吸収や発光が分子やイオンのエネルギー準位と密接な関係があることを説明し、スペクトロスコピーを概説する。	池　上　雄　作
12	紫外・可視光の 吸収スペクトル	多くの物質は紫外線や可視光を吸収して、その物質に特有なスペクトルを見せ、吸収帯は電子エネルギー準位間の遷移に対応する。そして、可視光の吸収は物質の色と深い関係がある。分光法について述べ、スペクトルと化学構造の関係を代表的な例とともに解説する。	同　　上
13	赤外線吸収 スペクトル	2μmから25μmまでの領域の電磁波は化学結合の振動や分子の回転運動と共鳴し、その吸収は赤外スペクトルとして便利に利用されている。 基本的な分子の振動や複雑な分子のスペクトルの例を挙げ、応用を含めて解説する	同　　上
14	生体とエネルギー	物質エネルギーの科学にとって、「生体とエネルギー」の課題は重要な位置を占める。生体における同化、異化とエネルギーの流れのわくぐみ、またエネルギー交代の主役がATPであることを中心に、概括的に説明し、解糖・呼吸とそのエネルギー収支にもふれる。	同　　上
15	光合成／まとめ	生物におけるエネルギー変換の代表的なものに光合成がある。緑色植物による光合成のしくみ、光エネルギーの捕足と電子伝達、CO_2の固定を中心に解説する。 最後に、本講のまとめを述べる。	同　　上

＝ 基礎物理学 Ⅰ ＝ （TV）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

自然現象をできるだけ少数の基本概念と法則によって理解しようとするのが物理学の立場である。Ⅰでは重要な概念と法則を明かにする。Ⅱではさらに深く物理学の基礎と人間の思考方法との関わりを考える。なぜ科学は常識をはなれなければならないか。数学はどの程度必要か。物質の科学と技術の関係は？。空間と時間の概念の変遷。物質と重力と宇宙の関係などの本質的な問題を古典物理学の範囲で明かにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学のはじまり	自然現象を理解しようとする知的な努力から科学が生まれた。エジプトのピラミッドに代表される技術、ユークリッド幾何学、アルキメデスによるがこの釣り合いの静力学の研究は数量的な科学のはじまりを物語っている。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	浮力と水の圧力	アルキメデスは風呂の中で浮力の原理を発見したと伝えられる。パスカルは大気の圧力が空気の重さによるものであることを明らかにした。これにより自然には真空が存在することが明らかにされたが、これは自然を理解する上で大きな発見であった。	同上
3	落下運動	ガリレイは落体の運動を研究し、速度が変化する場合の運動を明確に捉えた。実験と数理的な推論を組み合わせて自然現象を理解する方法がはじめられた。さまざまな運動、振り子の等時性について述べる。	同上
4	地球	ガリレイは望遠鏡によって木星の衛星や太陽の黒点などを発見し、地球もこれらと同じように天体の一つであることを明らかにした。地球が球形であることは古代ギリシャ時代にも考えられたが、この時代にこれが確認された。コペルニクスの地動説が提出された。	同上
5	太陽系	ケプラーの法則の発見について述べる。火星の楕円軌道、太陽系の秩序はどのように知られたか。	同上
6	運動の法則	ニュートンは運動の法則、それを有効に扱う数学、それに万有引力の法則をもって太陽系の問題と取り組んだ。地球をまわる月の運動はそのテストケースであった。	同上
7	力と運動	力に対する身近かな例といろいろの運動の具体的な例をあげる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	回　転　運　動	多くの日常的な運動は回転を含んでいる。玉の衝突、円板の回転、潮汐、体操などにおける身体の回転、猫の空中における回転、コマの運動。	戸　田　盛　和
9	仕事とエネルギー	ワットは蒸気機を発明し、馬力という単位を作った。エネルギーの概念は力学においても重要である。永久機関の夢にも触れる。	同　上
10	温　度　と　熱　量	熱はエネルギーの一つの現れであることがわかってきたのは19世紀半ばである。熱現象に関する学問、低温の物理学も19世紀後半にはじまった。	同　上
11	物　質　と　分　子	物質の分子的構造は今世紀になってから明らかにされたものであるが、ここでは原子分子に対する進歩、アボガドロの法則などについて述べる。	同　上
12	流　体　の　運　動	飛行機の翼やヨットの帆に働く揚力をはじめ流体の運動は大変興味深い現象が多い。台風などの運動には地球の回転もからんでくる。	同　上
13	波　　動	波は重要な運動の形態である。音の波、光の波、水の波などについて述べる。	同　上
14	電　気　と　磁　気	電流は磁気的な作用がある。その研究は独特な歴史をもち、ファラデーを経てマクスウェルによって完成された。	同　上
15	光　と　熱　放　射	マクスウェルの研究は電波の存在を予言した。一方で光速度の測定と熱放射の研究は物理学の２０世紀における大きな変革につながるものであった。	同　上

＝ 基礎物理学Ⅱ ＝（R）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

物理学の基礎と人間の思考方法との関係を中心にしたい。なぜ科学へ導かれるのか、なぜ科学は常識をはなれていくのか、数学はなぜ必要なのか。空間と時間に対する考え方の変遷、物質と重力と宇宙に対する考え方の深まり、心と科学、科学と技術や社会の関わりなどについて、古典物理学の範囲で考察を加えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	常識と科学 －科学の出発点	『自然はなぜ存在するか』といったいわゆる形而上学に属することを除外し、『自然の法則』だけを追求することにしたとき近代科学は出発することができた。	戸田盛和 （東京教育大学 名誉教授）
2	空間と時間 －地上から宇宙へ	ガリレイにおいては力学は地表の運動だけに限られていた。コペルニクス、ケプラー、ニュートンを経て恒星の集まりに対して静止した座標系が確立された。	同上
3	数学と物理学 －自然の数学的モデル	数学は人間の頭脳が作り出す論理的構造物である。数学が適用されるように自然をモデル化できたときに、その科学分野は大いに発展するようになる。	同上
4	物質変化と原子 －ミクロの世界へ	小さな原子と分子を考えることにより物質の物理的性質や化学反応などを説明できる。原子のモデルは太陽系について作られた重要なモデルである。	同上
5	温度と状態変化 －分子運動	原子・分子というモデルに力学を適用することにより、気体の性質が説明できる。そして温度は分子運動のはげしさの尺度であることが明らかにされる。	同上
6	エネルギーと熱量 －熱機関の効率	物質の分子的構造まで立ち入らずに、熱現象の間の関係を追求する学問が熱力学である。熱力学の法則は自然現象の多くが不可逆変化であることを学ぶ。	同上
7	決定論・確率・非可逆現象 －エントロピー－	不可逆変化を数量的に特徴づける量がエントロピーである。エントロピーの意味を分子論的に考察することにより、これが分子の配置の多様性の尺度であることがわかる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電磁気学 ― 場の概念	太陽系や分子の集団にニュートン力学を適用した成功は力学的自然観に導いたが、電磁現象は力学的モデルで理解できない。空間は電磁現象を伝える場であると考えられる。	戸田盛和（放送大学教授）
9	物質の電磁気的性質 ― 物性物理と技術	金属と半導体や磁性体の性質は古典力学でなく量子力学で扱わなければならないが、古典物理学の範囲でも性質的に理解することができる。	同上
10	光と物質 ―空間を伝わる波	光は波として空間を伝わる。光は物質によって散乱されたり、吸収されたりする。光を放射したり吸収するのは物質内の電子やイオンである。	同上
11	地球と太陽 ― 知識の統合	人間、地球、太陽などに対する好奇心は科学の出発点であり、科学の進展の各段階でたえず戻ってくる問いである。地球の構造、大陸の移動についても考察する。	同上
12	光と相対性理論 ― 時空の概念の再考	空間を光が伝わるとき、これを高速で追いかけても光の速さはおそく見えず、同じ速さに見える。このことからニュートンの時間と空間の概念は修正されるに至った。	同上
13	宇宙と一般相対性理論 ― 重力と時空	加速度系をすべて同等に扱う一般相対性理論では、ニュートンの万有引力の法則も、宇宙の概念も全く改められ、宇宙全体を物理学の研究対象とすることができる。	同上
14	科学と創造 ― 科学をつくる頭脳	科学は熱心な努力によって進められるが、創造的なひらめきは突然の啓示のように与えられることが多い。そしてそれを育てる上で社会的環境が重要である。	同上
15	個と全体 ― 科学的認識のかなた	科学の進歩は主に分析的な方法によってもたらされたが、生物の全体的な機能を研究したり、他の文化との関係を深めるには、全体論的な観点が必要である。	同上

＝基　礎　化　学＝（TV）

〔主任講師：伊能　敬（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

前半では化学という学問の対象である物質（その性質と変化）を究めるために必要な基礎知識を平易に述べる。

後半では応用面として化学がわれわれの日常生活や現代社会とどのようにかかわっているか。いくつかの角度から興味ある話題を取り上げる。初学者にも理解しやすいように、しかも可能な限り新しい情報を含め解説する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	化学とは (1) ～身のまわりの化学～	台所、自動車など、われわれの周辺にある親しみやすいものが、いかに化学とかかわっているか、実物と対応させながら化学におけるミクロな見方、考え方にはいりこんで行く。	綿抜邦彦 （東京大学教授）
2	化学とは (2) ～自然界に見られる化学変化～	自然界において、化学変化がどのような形で見い出せるか。化学変化イコール実験室、白衣、ビーカー、試薬瓶といったイメージを、ここで改めて見直す。	綿抜邦彦
3	物質の構造 ～物質は何からできているか～	固体物質の構造から発展させて、エネルギーと物質の不連続の問題、さらに原子の構造へとつないで行く。	同　上
4	原子の構造 ～陽子・中性子と電子～	原子を構成している電子、陽子、中性子の本性を調べ、さらに水素原子の構造、同位体、原子の電子構造などを明らかにする。電子の殻構造、価電子の数などの知識は、次章の理解に生かされる。	伊能　敬 （武蔵大学教授）
5	化学結合 ～価電子のはたらき～	いろいろな化合物の結合、特に結合のエネルギーや結合距離など、そこに認められる規則性などを概観したあと、結合はなぜできるかを考える。ここでは共有結合に重点をおいて話を進める。この理解が他の結合様式すべてを理解する上で必要だからである。	小谷正博 （学習院大学教授）
6	物質の三態 ～物質の状態変化はどのようにして起こるか～	気体の性質からはいって、液体、固体の特徴を明らかにし、それらの状態の相互変換について調べる。	綿抜邦彦
7	溶　液 (1) ～水のはたらき～	とくにすぐれた溶媒である水の性質から説き始めて、溶けるという現象、溶液の性質、純物質の液体との違いなどを学ぶ。	伊能　敬

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	溶　液　(2) ～溶液からの離脱～	前章に続いて溶解と沈殿、蒸留、再結晶などに伴う諸現象を検討する。	伊能　敬
9	コロイド状態 ～中途はんぱな粒子～	物質の三態、正常な溶液から見れば、いろいろな意味ではんぱな状態にあるのがコロイドである。ところが、われわれを取り囲む自然界、衣食住を支える多くの物質が、実はそのコロイドの状態にある。	同　上
10	化学反応　(1) ～はやいかおそいか～	水素と酸素を一定割合に混合しただけでは反応しないが、点火すると一瞬にして爆発して反応が終る。鉄でもさびやすいもの、さびにくいものがある。いろいろな反応が、さまざまの反応速度を示す。その仕組みを調べてみよう。	田丸謙二 （東京理科大学教授）
11	化学反応　(2) ～連鎖反応と触媒作用～	水素と塩素との光化学反応は、ひとつの連鎖反応とは何かを調べ、これに関連した反応として触媒反応を説明する。	同　上
12	化学反応　(3) ～陽子・酸素・電子のやりとり～	酸と塩基、酸化・還元などの化学反応を、陽子、電子などのとり合いと平衡の立場から考える。	同　上
13	有機化学　(1) ～アルコールを中心として～	基礎化学の後半「化学と人間のかかわり」において活躍する有機化学関連の諸分野の話を理解するためにも、知っておかなければならない有機化学の基礎のうちこの章ではアルコールを中心に学ぶ。	務台　潔 （東京大学助教授）
14	有機化学　(2) ～カルボン酸を中心として～	前章に引き続き、カルボン酸とその誘導体を中心に学ぶ。	同　上
15	核化学 ～放射能とはどんなものか～	放射能とは何か。から始まって、核反応の表し方、人工核転換、核融合、原子力利用、放射性同位体など、核反応という他の化学分野と違う特異な領域について学ぶ。	綿抜邦彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	生命の化学 (1) ～生命は分子機械である～	生命は分子を部品とする機械である。細胞の主要部品としての核酸、タンパク質は、また何からできているのか。酵素の役割は何か。	大島泰郎 (東京工業大学教授)
17	生命の化学 (2) ～生命の歴史～	生命の起源から説き起こし、先カンブリア代における生命の歴史、酸素の歴史、分子進化という生物進化研究の新しい手段に至るまで、生命の歴史を追求する。	同上
18	食物と化学 (1) ～食物のエネルギー価～	生物が生命を保ち、生活現象を続けて行くためには、外界から物質を取り込み、生体に役立つように変化させるいわゆる栄養現象が不可欠である。五大栄養素とは何かを述べ、またエネルギー源食品のエネルギー値について考察する。	福場博保 (お茶の水女子大学教授)
19	食物と化学 (2) ～食品の色と味と香り～	私たちの食生活は、エネルギー源食品をカロリー計算の勘定合わせだけで与えられて満足するものではない。多くの食品の配合の妙を生かして、よりおいしく食べるのが私たち人類の特色ある食生活である。日常の食卓における色・味・香りを化学の面から解説する。	同上
20	生物のコントロール(1) ～天然物化学と生物活性物質～	天然物化学のあゆみを知るために日本における天然物研究者の足跡をたどる。生物活性物質の研究の現状と、植物の生活に関与するホルモンに触れる。	森謙治 (東京大学教授)
21	生物のコントロール(2) ～生物活性物質研究の進歩～	天然有機化合物の構造決定法の進歩は、分析の微量化と切り離せない。生物活性物質研究の進歩について昆虫の生活に関与するホルモン、フェロモン、幻のオーキシンaなどの例によって解説する。	同上
22	化学と産業 (1) ～転換期にある化学工業～	学問としての化学は、いわゆる化学工業を成立させただけではなく、材料を媒介として他の産業分野にも貢献してきた。その歴史と現状を概観し、化学技術開発における指導原理の展開を探る。	平澤冷 (東京大学助教授)
23	化学と産業 (2) ～高分子を例として～	素材や材料としての物質の開発には、その組成、分子構造のみならず、ミクロ、マクロな物質の構造、集合状態まで考慮する必要がある。合成高分子を例にしてニーズに適合する素材設計を考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	化学と産業 (3) ～どんなつくり方があるか～	材料の開発はまたその合成法の開発でもある。設計された「物質の構成」を実現するためにどうアプローチするか。その指導原理を探る。	平澤　泠
25	化学と産業 (4) ～極限を追求する～	物質の極限状態、または極限条件下における物質の性質を追求する過程で、画期的な新素材が生み出されている。新素材開発の動向と、それが産業に与える衝撃を予測し、化学工業の将来を展望する。	同　上
26	エネルギー資源 (1) ～人類が利用したエネルギー～	人類は火を利用することを知って、他の動物と異なる生活をするようになった。人類がこれまで利用してきたエネルギー資源を化学の立場から論述する。	綿抜邦彦
27	エネルギー資源 (2) ～将来のエネルギー～	前章の化石エネルギーに替わるべき今後のエネルギーは何かを求め、原子力、地熱エネルギーについて解説する。	同　上
28	化学と環境 (1) ～地球環境はどのように変遷してきたのか～	太陽系の特異な一惑星としての美しい地球の環境の特色とくに水の果たす役割、大気の変遷、海水組成変動の歴史について述べる。	同　上
29	化学と環境 (2) ～人類の活動と地球環境～	人類が膨大な資源を消費し、膨大なエネルギーを使用するようになって、大自然の流れ、地球環境に影響がおよぶようになってきた。主として大気汚染を中心に、この問題を考えてみよう。	同　上
30	再び化学とは ～分ける・つくる・考える～	基礎化学の締めくくりとして、再び化学とは何かを問いかけ、化学における方法論を説明すると共に、今後の化学は専門家のみのものではなく、広く皆のものであることを説く。	伊能　敬

＝ 基 礎 生 物 学 ＝(TV)

主任講師：毛利秀雄（東京大学教授）
平本幸男（放送大学教授）

全体のねらい

生物学の分野では日々新たな発見が行われ、新しい概念が提出されている。また医学、農学、工学など応用分野との関連も深まっており、人類の将来に大きな影響を与えつつある。本講では、生物学の基本となる一般的事実や概念をできるだけ分り易く述べ、生命の探求がきわめて魅力に富んだものであることを伝えたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生物とは何か	生物の特徴である「生きている」とはどういうことか。生物と無生物の違いはどこにあるか。本講座のいとぐちとして、さまざまな生物が示す生命現象をフィルムなどで追いながら、この問題を担当者全員によって考えていく。	平本幸男（放送大学教授） 毛利秀雄（東京大学教授） 山田晃弘（東京大学教授） 石川統（東京大学助教授）
2	生物のつくり	生物の基本単位は細胞であり、多細胞生物では形態的・機能的に分化した細胞群が組織・器官を形成し、それらの統合によって個体が作られている。形態的、機能的な面から生物体のつくりについて解説する。	平本幸男
3	生命の単位としての細胞	細胞の基本的な構造、物理・化学的性質および細胞の機能について解説する。また細胞分裂のしくみや、増殖と分化についても述べる。	同上
4	細胞小器官	細胞膜や核をはじめ、ミトコンドリア・葉緑体・小胞体・リボソーム・ゴルジー装置・中心体など、さまざまな細胞小器官の構造と機能について概説する。	同上
5	生体を構築する分子	生体構成物質のタンパク質、核酸、脂質、炭水化物はどのような性質のものか。また、細胞小器官などを構成する生体膜はどのような特徴をもち、生物のはたらきにどのように役立っているかを解説する。	山田晃弘
6	物質交代と酵素	生体内のはたらきの基礎となる物質交代はどのようなものか。物質交代を司どる酵素のはたらきおよびエネルギー運搬体のＡＴＰに注目する。細胞内に散在する物質交代（反応系）の調節のしくみも知る。	同上
7	光合成	光エネルギーは緑色植物の行う光合成により生物に捕捉される。光合成のしくみを実験を含めて解説。トウモロコシやサトウサビ、さらに多肉植物の行うC_4-型の光合成についても学ぶ。光合成に伴う光呼吸にも目を向ける。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発酵と解糖	発酵の反応系の解明を歴史的に考察する。それは生化学の発達史でもあるからである。筋肉運動の際に行われる解糖反応と発酵との共通性とその役割を学ぶ。実験を組みあわせて理解を高める。	山田晃弘
9	呼吸	生物になぜ呼吸が必要か。呼吸を行うための体のつくりと血液のはたらきを学ぶ。呼吸の内容を物質交代の面から明らかにし、他の物質交代との関連にも注目する。	同上
10	太陽エネルギーと生物	太陽エネルギーに依存して生きる地球上の生物を、エネルギーの流れと物質（炭素、窒素、リンの化合物）循環の面から考察し、その流れを分担する重要な反応系とそれを担う生物について、野外観察のフィルムと共に学ぶ。	同上
11	神経	多細胞動物の多くは神経系によって個体内の情報伝達を行っている。神経系の基本単位であるニューロンの構造と興奮（活動電位発生）、興奮の伝導と伝達、神経情報の統合と処理などについて述べる。	平本幸男
12	受容器	動物は受容器によって外界の変化および体内の状態を感知してその情報を神経系に伝える。さまざまな型の受容器の感覚受容機構について解説する。	同上
13	運動	筋肉の構造とその収縮機構について、脊椎動物の骨格筋を中心として解説する。また平滑筋の構造と機能や神経による筋収縮の制御についても述べる。筋収縮による個体のさまざまな運動様式について解説する。	同上
14	運動、発電発光	筋収縮以外の生体運動、すなわち原形質流動、アメーバ運動、繊毛・鞭毛の運動のしくみについても解説する。これらの運動による生物体全体としての運動や、個体内における物質輸送などについても述べる。また生物発光や発電の機構についても解説する。	同上
15	ホルモン	神経系とともに生体機能の調節に与っている内分泌系について述べる。脊椎動物や無脊椎動物の内分泌器官から分泌されるホルモンの種類と働きを実例を示しながら概説し、さらにホルモンの作用機構についてもふれる。	毛利秀雄

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	ホメオスタシス	生物には外界や内部環境の変化に対して、その形態や生理的状態をできるだけ一定に保とうとする性質がある。これをホメオスタシス（恒常性の維持）と呼ぶ。血糖値・体温・浸透圧の調節などにおける神経系と内分泌系の関与について学ぶ。	毛利秀雄
17	免　　疫	外来性の病原菌や体内に生じた異常細胞などの異物を排除し、生体の恒常性を維持するしくみとしての免疫現象について説明する。血液型や臓器移植の問題などについても述べる。	同　　上
18	遺伝の法則	優劣の法則、分離の法則、独立の法則について述べるとともに、複対立遺伝子、伴性遺伝、従性遺伝に関してもふれる。とくに、遺伝現象における対立形質の意味を正しく理解することに重点を置く。	石川　　統
19	染色体と遺伝	染色体、遺伝子、ＤＮＡの関係を説明し、種から子へ形質の遺伝するメカニズムを減数分裂の機構とともに解説する。染色体地図、染色体外遺伝子、染色体突然変異についてもふれる。	同　　上
20	遺　伝　子	遺伝子の本体がＤＮＡである事実はどのようにして明かになったかを述べ、ＤＮＡの化学的構造について解説する。遺伝子であるＤＮＡと遺伝子でないＤＮＡについても述べ、ＤＮＡ複製の機構および遺伝子突然変異に簡単に言及する。	同　　上
21	遺伝情報の発現 Ⅰ	ＤＮＡ上の遺伝情報をＲＮＡへ転写するのに必要な構造、プロモーター、ＲＮＡポリメラーゼなどについて説明するとともに、転写を調節する機構とその因子に関して述べる。ｍＲＮＡの加工と成熟およびその構造上の特徴についても解説する。	同　　上
22	遺伝情報の発現 Ⅱ	ｔＲＮＡ、リボソームの構造について解説し、遺伝コードがどのようなメカニズムでタンパク質に翻説されるかを、開始、伸長、終止の３段階に分けて説明する。翻訳後にタンパク質分子が受ける加工と運搬のしくみにも簡単にふれる。	同　　上
23	遺伝子操作	プラスミドベクター、制限酵素などについて述べ、組換ＤＮＡをつくる基本操作を解説する。遺伝子操作には大きく分けて２つの目的があることを紹介し、ウィルス、可動遺伝因子などをベクターとした高等生物の遺伝子操作にもふれ、その未来像を探る。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	性と生殖	子孫を残すための生殖は、生物のもつ特質の一つであり、従ってきわめて重要な現象である。動・植物にみられる生植方法、両性生殖における性の決定機構、生活環などについて具体的な例をあげながら解説する。	毛利秀雄
25	受精	配偶子の形成から卵と精子の相互作用、さらに両核の融合に至る一連の受精現象を、実験をまじえながら説明し、その意義について考察する。細菌の受精や単細胞生物の接合についても言及し、また体外受精や着床の問題にもふれる。	同上
26	初期発生	受精した卵は発生を開始する。卵割（細胞分裂）胞胚およびのう胚形成、外・中・内三胚葉の分化に至るいろいろな動物の初期発生過程を、フィルムで追いながら解説する。個体発生と系統発生の関係についても述べる。	同上
27	分化と形態形成 I	動物の発生のしくみに関する前成説と後成説、モザイク卵と調整卵、誘導と極性などの概念を解説した後、細胞・組織の分化と形態形成についての最近の知見を、分子生物学や細胞生物学の成果をおりまぜながら紹介する。	同上
28	分化と形態形成 II	植物の体のつくりをみると、一つとして同じつくりのものはない。しかし、巨木でも盆栽でもアカマツはアカマツである。植物の体はどのようにして発達するのであろうか。実験（フィルム）を混えながら考えてみる。	山田晃弘
29	分化と形態形成 III	植物の細胞および動物の細胞核の全能性について述べ、遺伝情報の時間および空間に関する選択的発現が分化の根幹をなすことを解説する。また、昆虫の発生と変態などを例として、形態形成を制御する因子についても考察を加える。	石川統
30	生命科学の展望	この講義のしめくくりとして、生物学とその周辺の分野が今後解明していかなければならない問題について話し合う。主な問題としては、発生のしくみ、脳の機能、遺伝子操作と細胞工学およびその応用としての品種改良、体外受精などがとり上げられる。	平本幸男 毛利秀雄 山田晃弘 石川統

＝人間の生物学＝（TV）

〔主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

人間（ヒト）も生物の1種であるが、他の生物とは違ったいくつかの特徴をもっている。それらの特徴とは何か、人間とはどんな生物かを、生物学の立場から探っていく。また、広く生物界に通用する法則性がどこまで人間に適用できるかを調べ、科学的に見た人間像の形成をめざしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物としての人間	人間（ヒト）は生物界でどんな位置を占めているのか、人体のおもな特徴は何か、脳を中心にして人間は他の動物とどこが違っているかなどを概説し、生物学の立場で人間をとらえる視点を明らかにする。	太田次郎（お茶の水女子大学教授）
2	人類の誕生と進化	生物の進化の歴史で、人類はいつ、どこで誕生したか、それはいかなる証拠で裏づけされるかなどを述べる。また、化石人類から現代人に至る進化の道筋をたどり、人類進化の歴史を探る。	同上
3	人体の成り立ち	人体は、いかなる成り立ちであるかを、形態的面を中心にして述べる。組織・器官・器官系の成り立ちを調べて人体の特徴を知るとともに、構成の単位となっている細胞の構造と機能について概説する。	同上
4	血液とその働き	人体内の細胞は血液に浸され、血液は細胞の働きを支えている。血液とはどんな組成でそれぞれの成分はいかなる働きをするか、血液循環のしくみ、腎臓での排出作用などを調べ、人体の働きにおける血液の役割を明らかにする。	同上
5	人体の活動とエネルギー	人体は様々な活動を行うが、そのもとになるエネルギーは何か、エネルギー獲得の手段などについて概説する。消化と吸収、呼吸などのエネルギー獲得手段、筋収縮などエネルギーを消費する活動を説明する。	同上
6	脳と神経	人体における情報の伝達と統御にあづかる神経と脳の構造と機能を説明する。神経系の単位となるニューロン、興奮伝達のしくみ、脳のつくりなどを調べ、脳とコンピュータを比較して、脳の働きの特徴を知る。	同上
7	ホルモン	神経と共に人体の働きの調節にあづかるホルモンとは何か、その働きの特徴などを説明する。人体の各内分泌器から分泌されるホルモンの種類、ホルモンの相互作用を調べ、人体の恒常性を維持しているしくみを説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	行　　動	動物の行動としての本能、学習（刷り込みも含む）、知能の意義を、具体例を示しながら説明する。人間の行動の特徴を、学習と知能を中心にした、他の動物の行動と比較しながら考えていく。	太田次郎
9	生殖と発生	人間も含めて多細胞生物は、1個の受精卵がもとになって発生、成長して成体となる。代表的な動物の発生の経過を説明し、それと人間の発生との共通点や相違点を明らかにする。また、発生のしくみを探る研究にもふれる。	同　上
10	遺伝のしくみ	遺伝の法則、遺伝のもとになる遺伝子と染色体の関係、性と遺伝、遺伝子の本体であるDNAの構造と機能などを概説する。生物一般に成り立つ遺伝の法則性が人間にどこまで適用できるかも考える。	同　上
11	人間の遺伝	ヒトのどの形質が遺伝し、どの形質が遺伝しないかを探る方法、その結果などを概説する。特に、双生児法をもとにした知能や病気などの遺伝、近親結婚の危険性など、身近かな問題をとり上げて説明する。	同　上
12	個と集団	自然界では、動物はふつう集団で生活している。集団生活をしている動物では、1個体で生活している場合とは異なる法則性に支配されることが多い。動物の集団生活の法則性を調べ、人間の集団生活の特徴を調べる。	同　上
13	自然と人間	自然界で、生物は環境と密接な関係を保ちながら生活している。自然界での生物どうしのつながり、生物と自然環境との関係を概説し、人間と自然の関係、生態系における人間の位置づけなどを説明する。	同　上
14	健康と病気	人間の生物学の特有の問題として、健康と病気をとり上げ、病気とは何かについて、生物学の立場で考える。特に、感染と免疫を中心にして、病気の予防と治療、人間の生活における健康の意味を考える。	同　上
15	人間の未来	この講義のしめくくりとして、生物学の発展が未来の人間生活に及ぼす問題をとり上げる。性と生殖、遺伝、脳の研究などが人間の論理に与える問題点、人口問題などを例にして、今後、人間の生物学てもつ課題を概説する。	同　上

＝ 生命科学史 I ＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

生物についてどういう研究がおこなわれてきたか、その歴史をたどりながら、科学的態度とはどのようなものか、あきらかにしてゆきたい。科学研究の偉大さはもとより強調されなければならないが、反面たんに絶対化するのではなく、それに宿命的にともなっている偏向ならびに限界も指摘したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「生物学」の源流	「生物学」の語源 独立したいくつもの流れ 学問の名称の時代的変遷 現代生物学の宿命、歴史をかえりみる意義	筑波常治 （早稲田大学教授）
2	統一法則対多様性	ふたつの源流　博物誌の起源 生命論の起源　対照的な方向 生物研究室の変化　生物研究と自然破壊	同上
3	生命観の変遷 I	死が生命を意識させた　生気論の起源 古代ギリシアの医学者たち アリストテレスのプシュケー説 ガレノスによる集大成 生命のやどる場所	同上
4	同上 II	新たな文化を創造するために　時計の発明と機械論　最初の提唱者はデカルト　デカルトの苦心 自動人形の発明　人間機械論の主張　生体各部の仕掛け　生きることと燃えること　フロジストン説の当否　呼吸の正体　精神の生理的解明 精神と体は基本的にちがわない	同上
5	同上 III	機械の分解、生体の分析　細胞の研究がすすむ 生物と機械にちがいがある　全体論の登場 生命論の社会風俗への影響　宗教の基盤 現代社会への影響　全体論と全体主義	同上
6	博物誌と分類学 I	博物誌のふたつの立場 ギリシアの学問、ローマの学問 ローマ独自の価値観 近代ヨーロッパと博物誌 博物誌から分類学および進化論へ	同上
7	同上 II	実用分類の段階 実用を離れた分類 動物分類学と植物分類学 新しい動向と混乱 新しい分類方法の提唱	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	同　上　Ⅲ	人為分類と自然分類　リンネの業績 生物界に普遍的な基準　種の不変説の根拠 リンネにおけるキリスト教と科学 分類学の理想と現実	筑波常治
9	生殖と個体発生Ⅰ	生物学の第3の源泉　アリストテレスの発生論 研究にとっての障害　ファブリチオとハーベーの業績　顕微鏡と個体発生　顕微鏡学派と前成説 卵子説と精子精	同　上
10	同　上　Ⅱ	生気論と後成説　後成説を支持する観察 哺乳類の卵の発見　脊椎動物の発生を比較 ベアの後継者たち　観察から実験へ 発生機械学の提唱　モザイク卵と調整卵 発生学と関連する領域	同　上
11	進化の思想Ⅰ	悠久の年月の出来事　日常の経験は反対である 古代の進化論的な主張　あまりにも空想的な主張 アリストテレスは進化論者か否か？ 中世における創造説の多様性	同　上
12	同　上　Ⅱ	化石の研究　新種の発見が進化論を生む 比較解剖学と品種改良　身分制を擁護した創造説 啓蒙主義者たちの活動　進化論者ビュフォン	同　上
13	同　上　Ⅲ	ラマルクの登場　生物は先天的に進化する　キュビェと天変地異説　イギリスの産業革命と進化論 ダーウィン以前の進化論者　ビーグル号の航海 自然淘汰説の提唱　ダーウィン説への賛否 自然界は残酷だ！　生存競争の是非をめぐって	同　上
14	微細な生物界、巨大な生物界	探検が開いた世界　探検は命がけだった 生物地理学の成立　顕微鏡による探検 顕微鏡の発明と普及　極度に見にくい顕微鏡 レンズ、固定、切片、染色 細胞内部の解明がすすむ	同　上
15	屈折した科学の軌跡	進歩、停滞、後退の複雑な関係 生命の神秘と個体発生 自然発生説と進化論の癒着 機械論と進化論の矛盾 学問の本領	同　上

＝ 生命科学史Ⅱ ＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰあるいは Ⅱをそれぞれ単独に履修しても、または両方あわせて履修しても、どれでも可能である。Ⅱは生命科学の歴史にのこる代表的人物の列伝を中心に構成する。しかしたんなる個人の人物論にとどめず、それぞれの生涯と実績をとおして、それぞれに代表される各分野の歴史をあきらかにするのがねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	古代最高の生物学者―ヒポクラテス、アリストテレス―	古代ギリシアと近代ヨーロッパ ヒポクラテスの医学　哲学と生物学の関係 アリストテレスとプラトン 幾何学とイデアの世界 アリストテレスの後半生	筑波常治 （早稲田大学教授）
2	古代ギリシアおよびローマの生物学者たち―アリストテレス(続)、ガレノス、農学者たち―	アリストテレスによる質料と形相 プシュケー3段階説　「動物誌」の内容 自然の位階性と目的性　「万学の祖」と呼ばれる 比較的注目されてきたガレノス 農業を重視したローマ	同上
3	ローマおよび中世の生物学者―プリニウス、クラチアス、ディスコリデス、アビセンナ、アヴェロエス、マグヌス―	多様性と統一法則　ローマの博物誌 プリニウスの業績と限界　図鑑の伝統 中世の動物たちの物語　中中世の再評価 中世末期の博物誌	同上
4	ルネサンスの生物学者Ⅰ―ゲスナー、アルドロヴァンディ、パラケルスス―	過渡期のルネサンス　ゲスナーとアルドロヴァンディ　偉人物語の主人公たち　迷信や妖術も復興 放浪のパラケルスス　科学に貢献した魔術	同上
5	同上Ⅱ―ファン・ヘルモント、ダ・ヴィンチ、ベサリウス―	ファン・ヘルモントの植物の実験 近代的な生命観と研究方法 ネズミの自然発生の実験　世紀末の怪奇趣味 人体解剖の実現　ベサリウスの光と影 解剖学の裏面史	同上
6	機械論者と顕微鏡学派―デカルト、ボレリ、サントリオ、フック、マルピーギ、スワムメルダム、レーウェンフク、他―	力学的自然観と機械論の登場　デカルトとボレリ サントリオの体重測定器　顕微鏡学派の人びと フックとスワムメルダム　微生物を発見したレーウェンフク　観察につぐ観察 趣味に徹した研究者	同上
7	多彩な18世紀の生物学者Ⅰ―ド・ラ・メトリ、ヴォルフ、スウェーデンボルグ、啓蒙主義者たち―	機械論の徹底化 生気論への逆行と後成説 そのほか注目される出来事 進化論の登場	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多彩な18世紀の生物学者Ⅱ―リンネ、ビュフォン―	同世代の比較人物論　リンネの生い立ち あいつぐ後継者の出現　ビュフォンの生い立ち 特権階級ゆえの成功　両者の共通性 両者の対照的な部分　反発しあった宿敵同士	筑波常治
9	進化論の提唱者と反対者―ラマルク、キュービェー―	科学的と非科学的の意味　ラマルクの生い立ち 変化しつづける生命　変化が希望ではなくなった時期　キュビエの生い立ち　比較解剖学と進化否定　実証の成果と限界　教養人と行政家 後世の不運な評価	同上
10	進化論の確立者Ⅰ―ダーウィン―	産業革命と進化論　スペンサーとテニスン 生涯と思想の落差　学校に適応できず ダーウィンが愛読した「セルボーンの博物誌」 ダーウィンがあこがれたフンボルト ペイリー神学の影響　ビーグル号への乗船 19世紀イギリスの国家活動	同上
11	同上　Ⅱ	ビーグル号の航海　進化論の着想 病気の不幸と幸運　ダーウィンの学習過程 自然淘汰説の提唱　ダーウィン説への賛否 社会進化論の諸流派	同上
12	遺伝法則の発見者Ⅰ―メンデル―	素人から専門家への伝達　遺伝学史は未開拓？ 古代から17世紀までの研究者 18世紀以降の研究者たち　メンデルの生い立ち 修道院のメンデル　国家試験とウィーン留学	同上
13	同上　Ⅱ―メンデル―(続)	実験を重視する態度　物理学による発想 いわゆる「メンデルの法則」　定量的方法の導入 研究成果の発表と反響　メンデルの後半生 いわゆる法則の再発見	同上
14	自然発生説の否定者Ⅰ―パストゥール―	ダーウィン、メンデル、そしてパストゥール 優等生としての生涯　リービッヒの発酵理論 発酵をめぐる化学と生物　プーシェによる実験と結論　自然発生説との遭遇　古代から常識だった思想	同上
15	同上　Ⅱ―パストゥール―(続)	自然発生説への疑問　ニーダムとスパランツァーニの実験　同一の結果、正反対の結論 ニーダム説が有力になる　「白鳥のフラスコ」を発明する　反論を予測しての再実験 自然発生説を間接的に否定する　医学への進出	同上

＝ 地球と宇宙（地球篇） ＝ （TV）

（主任講師；奈須紀幸（放送大学教授）
小尾信弥（放送大学副学長））

全体のねらい

われわれの住む地球は宇宙の一員である。地球は固体地球とその上をおおう水圏および気圏よりなる。まず宇宙の中における地球の位置づけを認識し、ついで地球についての諸々の事象に探究の目を向ける。現在、われわれが目にする地球に加えて地球の歴史についても学ぶ。以上何れも基本・基礎的な立場に立って考究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信弥（放送大学副学長）
2	地球の層圏	地球は気圏・水圏・固体地球の3圏よりなる。それぞれの圏は、さらに幾つかの層圏に分れている。これら地球の層圏について、現在までに知られている知識の内容を学ぶ。	奈須紀幸
3	地球科学の発展	当然のことながら、人類は太古の昔より大地について様々な思索を行なってきた。そして長い年月をかけて地球の本質を解明し、その実像に迫ってきた。そのような地球科学の発展の経緯について学ぶ。	同上
4	大気	気圏を構成する主体は大気である。太陽エネルギーは大気に対し大きな運動を行なう原動力を与える。大気の大循環、気圧、風、前線など大気のダイナミクスについて学ぶ。また天気や気候についても学ぶ。	同上
5	海洋	水圏を構成する水分の大部分は海洋にたくわえられている。海水は流体であるので絶えず動き易いという本質を持つ、海流、潮流、波浪など、いづれも海水の流動のあらわれである。これらの事項について学ぶ。また海底のもつ本質についても学ぶ。	同上
6	固体地球	固体地球は層状構造をもつ、地表から地心へ向って地殻、マントル、外核、内核よりなる。地殻とマントル上層の一部はプレートとして地球表層の固い部分を構成する。このプレートは動いている。これらについて学ぶ。さらに重力と地磁気についても学ぶ。	同上
7	岩石と鉱物	地殻やプレートを構成する単位は種々の鉱物であり、1種または多種の鉱物の集合体が岩石である。岩石は主として造岩鉱物で構成される。岩石は火成岩、堆積岩、変成岩に3大別される。これらのことがらについて学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地層	堆積物は固化して堆積岩となる。堆積物や堆積岩は水平的なひろがりをもつ地層を形成する。地層の中にはよく化石を含む。地層の層序と対比は重要である。地層は変形して断層や褶曲を示すことがある。また整合、不整合関係を示すことがある。これらについて学ぶ。	奈須紀章
9	地質時代	地球上に水がたたえられるようになってから地表における物質の循環がはじまり堆積岩が形成された。それから以後を地質時代という。対年代、絶対年代を用いて地質時代の実体は解明された。これらのことについて学ぶ。また地質図についても学ぶ。	同上
10	固体地球の表層	固体地球表層の実体とその変遷の歴史については１９世紀後半より解明が大いに進んだ。ゴードワナ大陸、大陸移動説の提唱から古地磁気研究の結果による大陸移動説の復活、中火海嶺系の発見。大洋底拡大説の提唱へと時間経過を追って学ぶ。	同上
11	プレートテクトニクス	大洋底拡大説は数年後プレートテクトニクス説へ進展した。その間に大洋底地磁気異常の縞模様の発見、トランスフォーム断層の提唱、ホットスポット説の提唱があった。これらはプレートテクトニクス説の中でも生かされた。これらの事項について学ぶ。	同上
12	地震	大洋底拡大説およびプレートテクトニクス説が提唱されてから、それらとの関係で地震発生のメカニズムが随分と明らかになってきた。これらの事情について学ぶ。また地震の種類、規模、震度などについて学ぶ。	同上
13	火山	プレート境界にはよく火山が形成される。とくに活動縁辺域であるプレートの潜没帯は火山帯をともなう。さらに中央海嶺系やホットスポットには火山が形成されやすい。このような火山の形成の過程について学ぶ。さらに火山の種類について学ぶ。	同上
14	地球の歴史	地球の創生以来の歴史は近年随分とよく解明されてきた。地質時代以前、それから地質時代に入って生物の発生と進化をともなう地表の変遷の歴史は多彩を極める。先カンブリア時代、古生代、中生代、新生代を通じてこうした地球の変遷の歴史を学ぶ。	同上
15	日本列島	日本列島は大局的には太平洋プレートがユーラシアプレートの下へ潜没する変動帯に位置する。これは現状である。この点についてまず学ぶ。ついで日本列島の地史について学ぶ。さらに地下資源について学ぶ。	同上

＝ 地 球 と 宇 宙 （宇宙編） ＝ （TV）

（主任講師：小尾信弥（放送大学副学長）
奈須紀幸（放送大学教授））

全体のねらい

地球と宇宙という私たちの自然環境を学ぶ科目のなかで、ここでは宇宙について学ぶ。人間の宇宙観の歴史に始まって、太陽系や恒星、銀河系や銀河について学習した後に、宇宙全体の構造や進化、そして最後に地球を含む太陽系の起源を学んで地球編につなぐ。全体を定量的に扱うわけではないが、可能な限り事柄を量的に理解させる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	天文学の歴史 Ⅰ	天文学は最も古く興った科学の1つである。ここではギリシアの王子学から16～17世紀における太陽系の確立、それに続く古典天文学の発展や恒星天文学の誕生、さらに天体分光学から天体物理学が始まる19世紀末までを扱う。	小尾信弥（放送大学副学長）
2	〃 Ⅱ	今世紀に入って天文学は面目を一新して、大反射鏡の建造、新しい物理学による物質観や時空観の革新、電波観測や宇宙開発、コンピュータなどの技術開発によって、天文学も大きく発展し、人間の宇宙観も一新した。それらの過程と成果を学ぶ。	同 上
3	現代の天体観測	ケプラーの法則からビッグバン宇宙の検証まで、宇宙の知識は宇宙の観測にもとづいている。今日では、光学観測ばかりでなく電波観測や大気圏内の観測が重要な位置をしめているが、それら種々の観測を概観し、また分光観測など観測の再本についても学ぶ。	同 上
4	太陽系の運動	惑星は距離が近いため明るく見え、その動きも古くから観測され、占星術が興り、天動説や地動説が唱えられ、ニュートンに至って力学的な太陽系像が確立して、ここでは太陽系における運動の典型的なものとして、惑星の運動について学ぶ。	同 上
5	太陽系の天体	惑星や小惑星、衛星、隕石、彗星や流星物質など太陽を回る無数の天体は、呼び名が異なるように、大きさや外観、組織などをはじめとする性質に大きな違いが見られる。ここでは惑星をはじめ太陽系の主要な天体について学ぶ。	同 上
6	太 陽	太陽系の中心である太陽はふつうの恒星であるが、距離が近いため、表面の現象がその変化が観測できる唯一の恒星である。恒星に関する知識のかなりのものは、太陽の観測や研究が基礎になっているし、また地球に大きな影響をもつ点でも極めて重要な天体である。	同 上
7	恒 星 Ⅰ	自分でエネルギーを放って輝いている点で、恒星は太陽と同種の天体がある。しかし、質量や半径、光度は広い範囲にわたっている。恒星についての種々の性質を知る手段は、その結果について学ぶ。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	恒　星　II	恒星の分光観測によって、表面の温度や化学組成をはじめ恒星についての多くの情報を得ることができる。ここでは分光観測の原理からそのの成果まで学び、また光度や表面温度、質量など個々の性質の間にみられる統計的な関係についても学ぶ。	小尾信弥
9	恒星の変化	恒星は星間雲のなかで誕生した、質量によって異なる寿命を終る。その間で主系列星や巨星、超巨星など特徴の大きく異なる状態を終る。また寿命を終る際も、質量により様相を異なる。ここでは進化を研究する原理から、進化の各段階の特徴を学ぶ。	同　上
10	銀河系の天体	銀河系には新星や超新星などの変わった天体や、星団のような恒星集団も見られる。また星間には星間物質や星間雲、さらに電波天体やX線天体なども見られる。これら銀河系の各種の天体について学ぶ。	同　上
11	銀河系の構造	われわれのまわりの恒星は、星間物質や星間雲とともに直径が約8万光年の薄い円盤状の集団をつくっている。これが銀河系である。ここでは銀河系の構造の歴史を概観した後で電波天体などで明らかにされ、銀河系の構造や運動、また銀河系天体の特作について学ぶ。	同　上
12	銀河の世界	銀河系の外には、銀河系と対等な別な銀河が無数に観測されている。これらの銀河の距離や大きさ、質量、さらに型などについて学ぶ。さらに、厘時銀河やクコー・リーなど特異な銀河や銀河集団について学ぶ。	同　上
13	宇宙の構造	宇宙の全体的な特徴をまとめて概観したあとで、相対論的宇宙論の基礎になっているフリードマンのモデルについて学ぶ。またフリードマンにモデルに基づく膨張宇宙の構造について学ぶ。	同　上
14	宇宙の進化	フリードマンのモデルに物質と放射を導入して得られる進化宇宙論を中心に学ぶ。3K宇宙背景放射に基づいて宇宙に転期のあったこと、またビックバン初期の宇宙の進化についても学ぶ。宇宙の未来についても述べる。	同　上
15	宇宙の進化と地球	宇宙で物質が優勢となった後に、銀河や恒星のような現在われわれが観測する天体が形成され、進化した。その過程のなかで、現在の宇宙に見られる元素も進化した、そのなかで地球をはじめとする太陽系の天体が形成された過程についても学ぶ。	同　上

＝ 日 本 の 自 然 ＝　（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
　　西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

日本の自然の姿を、いろいろな視点から眺めてみる。とくに、住民の地形・気候・水文・生物、ないし自然的環境とのかかわり方、日本人の自然観や自然保全等について生態的、歴史的、地域的に考察して、日本列島の自然的特色を総観する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	内外から見た日本の自然	1　変容した自然景 2　自然景の特色 3　外国人のみた日本の風景	西川　治 （立正大学教授）
2	日本人の自然観とその変遷	1　伝統的自然観の再検討 2　相反する二つの自然観 3　自然観の比較論	同　上
3	日本の地質	1　地質の基礎知識 2　日本列島の地質構造 3　プレートの動きと日本列島 4　日本列島の変成帯 5　日本列島の地史	奈須紀幸
4	日本の地形的特色	1　島国としての地形の特色 2　山国としての地形の特色 3　平野と盆地の地形 4　地形の環境論的意義	式　正英 （お茶の水女子大学教授）
5	日本の地域環境と生活 ― 地形環境と開田史	1　土地の使い分け 2　地形環境と開田史 3　地形面をはい上がる開田史 4　人工水系による景観変化	西川　治
6	日本列島の気候の特色	1　世界的視野からみた気候の特色 2　季節の成り立ち 3　冬 4　梅雨季と盛夏 5　秋霖　台風季	前島郁雄 （東京都立大学教授）
7	日本の気候環境と生活	1　亜熱帯から亜寒帯へ 2　顕著な季節変化 3　作物栽培と気候 4　雪と生活 5　気象災害	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の水文環境	1　水に恵まれた日本 2　日本人と水 3　水利用と環境問題	樋根　勇 （筑波大学教授）
9	日本の森林と文化	1　日本の植生分布 2　日本の森林と文化	大沢雅彦 （千葉大学教授）
10	日本の植生景観とその調査法	1　植生帯状分布の調査 2　微地形分布と土壌・植生調査	大沢雅彦 武内和彦 （東京大学助教授）
11	日本の動物と生活	1　動物の分布をきめる自然条件 2　過去の日本列島における動物分布 3　縄文時代の生活と動物 4　日本列島周辺の海生動物 5　陸上生物 6　日本列島における鳥の分布 7　動物分布と人間の生活	濱田隆士 （東京大学教授） 樋口廣芳
12	日本の海岸	1　海岸の大別 2　日本の海岸 3　特殊な海岸 4　流水の浸食・運搬・堆積作用 5　海岸に働く営力 6　日本の海岸の例示	奈須紀幸
13	日本の海	1　日本の海 2　日本の周辺の海水 3　日本周辺の海底 4　日本周辺の大陸棚	同上
14	日本の自然	1　自然災害　3　平野と高潮洪水 2　災害発生の素因としての日本の自然 4　平野と河川洪水　5　平野と内水洪水 6　津波災害　7　山崩れ、地滑り 8　火山災害　9　地震災害 10　自然災害対策としての自然環境認識の重要性	大矢雅彦 （早稲田大学教授）
15	自然の利用と保全	1　自然の再認識 2　日本における自然保全の先覚者 3　自然災害と防災対策 4　景勝地の保全運動	西川治

＝ 科 学 と 実 験 ＝ （TV）

〔主任講師：宮代彰一（元放送大学教授）〕

全体のねらい

広い科学のなか（工学や技術も含む）の多くの分野での実験的な仕事を横に貫き、共通する問題、考え方、あるいは手法などを抽出して考えてみよう。これらはそれ自体で興味深く、実際的であり、かつ、少し大げさだが、実証科学の本質にも係わるものと思う。なお、面接授業では、いくつかの実験を学生が自ら行えるようにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序論（科学と実験）	科学における実験　実証的な科学のおこり、近代物理、化学、生物学の成立　実験（科学）の限界、再現性　実験の舞台、基礎科学と応用科学 学習実験と研究実験	宮 代 彰 一 （元放送大学教授）
2	問題発見と計画	研究者の習性　問題の発見が最初　その手法、流儀、整理による発見、ＢＳ法やＫＪ法 計画性、その手法、フローチャート、ＰＥＲＴ法など　計画実施上の問題	宮 代 彰 一 宮 尾 亘 （東京工科大学）
3	情 報 ・ 文 献	科学は情報の拡大生産　科学技術情報の所在とその形　文献の種類と膨大な量　研究の各段階と調査　検索、原理と方法、機械検索、動向 情報活用のあり方	同 上
4	観察と記録、そして整理	観察からすべてが始まる　観察の例、野外観察なまのデータを記録　整理は事物把握の基本、周期表　試料の整理、生物の分類学、階級、学名 考え方の整理	吉 田 治 （千葉大学教授）
5	感 覚 と 観 測	五感という窓の性格　刺激量と感覚量、感覚の限界　機械による限界の拡張、例として視覚における機能（大きさ、強度、波長、時間の面での）拡張　感覚と知覚	宮 代 彰 一
6	単 位 ・ 標 準	日常生活と単位　昔の単位、単位の進化 単位はどうあるべきか、物理量と次元、単位 国際単位系（ＳＩ）、その基本単位と標準 社会習慣と単位、慣用の単位	大 井 みさほ （東京学芸大教授）
7	装置の準備と使用	ものを作り動かす楽しさ　目的に合う測定器、測定値の読み取り　装置の目的と仕様　設計、製図、工作、材料の常識を　ブラックボックス 実験装置の活用、習熟	宮 代 彰 一

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電気的な手法	実験に欠かせぬ電気・電子的手法　主な電気的量、抵抗の測定　受動素子と能動素子　トランジスタ、論理素子　電子計算機、プログラム 実験システム、自動化	田中清臣 （電通大助教授）
9	実験と安全性	実験は危険と背中合わせ　実験室、家庭、産業での災害、危険への感受性　危険の種類　危険な薬品、火災、爆発、中毒　電気装置と安全 事故が起こったら	若松　茂 （放送教育開発センター教授）
10	データの取り扱い	数値データの扱い、有効数字　データの図式化、グラフ化の効果　グラフの種類、対数目盛りとグラフ　グラフ化の手法、大量データの処理 実験式をつくる	遠山紘司 （文部省教科書調査官）
11	測定の不確かさ	真の値、不確かさと測定の限度　誤差の種類 誤差の伝播　偶然的な誤差とガウス分布 最小2乗法、確からしい線引き　妥当な測定とは	同上
12	観測とゆらぎ	対象自体のあいまいさ　放射線測定でのばらつきとポアソン分布　光量と画像の見え方、情報の不足　ブラウン運動　SN比、散射雑音と熱雑音 マクロなゆらぎ	宮代彰一
13	モデルと実験	対象事物のモデル化と適用範囲　減衰振動、数学的モデル　実体模型実験、寸法効果　計算実験、モンテカルロ法　コンピュータ・シミュレーション	同上
14	報告のまとめ	研究や実験は報告で仕上がる　学習実験でのレポート　報告（論文）の組み立て　よい報告、分かる報告とは、対策は　各種の技術報告、特許という形の報告	同上
15	しめくくり	学習と実験、本当の興味は？　知識と知恵、自分の問題への適用　創造性へのつながり　創造の技法、発散の段階と収束の段階　創造の成否、同時発見、同時発明	同上

＝ 生 活 と 芸 術 ＝（TV）

〔主任講師：熊倉功夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

生活と芸術の接点として芸能、建築、工芸などを取り上げてゆくが、それらの軸になるのは「茶の湯」である。日本独自の茶の湯がどのような展開をしたのか。さらに、茶の湯と関連しながら生活文化がいかに江戸時代から近代に発展してきたのか、そのさまざまの面に目を向ける。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人の生活と芸術	日本人の生活と芸術を総合的にとらえるにはどんな視点があるか。生活文化としての展開をたどり、ことに室町時代以後における生活に即した新しい文化として、茶の湯の意義などを考える。	熊 倉 功 夫（筑波大学教授）
2	茶の文化の成立	中国の茶の文化は、唐代に大きく成長し、日本にも九世紀に伝わってくる。さらに鎌倉時代にふたたび茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	同 上
3	南北朝時代の美意識	鎌倉時代末期以後、中国から輸入された書画や工芸品が珍重され、「ばさら」という新しい美意識が流行する。「座敷飾り」は洗練され、新しい生活文化が発展する。	同 上
4	書院の茶の湯	室町時代の武家文化の発達にともない、新しい生活様式が完成される。そうした様式の一つの核となるのが書院における茶の湯で、書院の茶といわれる。その姿を具体的に述べる。	同 上
5	いけばなの歴史	「花を瓶に挿す」ことが、やがて室内装飾として発展してきたのは室町時代。いけばなの成立である。さらに江戸時代初期に至って、立花と呼ばれる新しいスタイルの完成をみた。	同 上
6	わび茶の成立	京・堺などの都市には豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみ直した。村田珠光と武野紹鷗の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	同 上
7	千利休と桃山文化	わび茶の大成者千利休の茶とは、どのようなものであったのか。その生涯をたどりながら、わび茶を徹底させ、主客の礼法を完成させた利休の茶について考えてみる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	茶室の世界	茶の湯の発達はその舞台にもあたる茶室という独自の建築空間を展開させた。中世の書院造りから流れだす茶室の系譜をたどりながら、日本の住宅建築に与えた影響も考えたい。	熊倉功夫
9	桂離宮と寛永文化	十七世紀前半の文化を寛永文化とよぶ。公家、武家、町衆たちの協同した文化活動によって、繊細で装飾性豊かな芸術が誕生した。その性格を桂離宮をとおして考える。	同上
10	町人文化と建築	元禄時代を中心に町人の文化は遊芸の新しい展開をもたらした。遊芸は地方にも広がってゆく。京都の遊郭の建築、地方都市の町家建築のなかに、その表現をみる。	同上
11	生活のなかの飾り	建築の細部や身につける装飾品にも、みごとな文化遺産をわれわれの祖先は残してきた。さらに祭りや芝居小屋、あるいは神社の社頭などを飾りたてる。飾りを通して日本人の美意識を探ってみたい。	同上
12	料理文化の系譜	日本の料理は味だけではなく見る料理だといわれる。かつて料理は立派な芸能であった。室町時代から江戸時代後期までの料理文化の流れを概観し茶の料理の特質をみる。	同上
13	近代の工芸運動	日常生活の道具である工芸品に美を見いだし、これを民芸と名づけて評価したのが白樺派の宗教学者柳宗悦であった。民芸運動と柳の思想をたどりながら、その意義を考える。	同上
14	近代数寄者の世界	明治維新後の衰退のなかから、伝統文化を復興させるのに大きな力となったのは、近代産業のにない手であった財界人や官界の趣味人（数寄者）たちであった。横浜に三渓園を作った原三渓などの足跡をたどりながら、彼らの意味を考える。	同上
15	伝統文化と近代	近代になって西欧的な思考様式が取り入れられると同時に、伝統文化は大きく変貌した。伝統文化の衰退と変質がなぜ起こり、今日、ふたたび流行しているのはなぜかを問い直したい。	同上

＝ 教 育 学 概 論 ＝ （R）

〔主任講師：田浦武雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し、理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達との接する領域で、文化と人間との現実構造や変化過程を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。多くの教育問題との関わりを含め、教育の基本問題を検討し、それらの改善の方向を究明する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育学の意義	1～4の4回にわたって、教育学及び教育の意義を検討する。 教育学の概念、教育論と教育思想、教育学の動向と変遷等について考察する。	田浦武雄 （愛知学院大学教授）
2	教育構造と機能	素質と環境と教育との関連のダイナミズムの構造について検討する。さらに教育の社会的機能－文化伝達、社会統制、文化改造－について検討し、教育の目的を考察する。	同 上
3	発達と社会化	人間の成長・発達を焦点におく教育と、文化化、社会化を焦点におく教育とに、教育の働きを区別することができるが、両者の考え方の特質を吟味し検討する。	同 上
4	発達と教育の理論	人間の成長・発達の過程の把握とその処方をめざすものとして、発達の教育学を志向する必要がある。人間的教育・全人的成長の必要性とその構造を検討する。	同 上
5	現代教育学の類型1	5～6の2回にわたって現代教育学の類型を検討する。 進歩主義、伝統主義、改造主義、実存主義、論理実証主義、マルクス主義等について、それぞれの特色を比較検討する。	同 上
6	現代教育学の類型2	教育社会学、教育人類学、教育心理学、教育人間学等の諸領域について、それぞれの理論的特色と意義を比較考察する。	同 上
7	教育の文化的基礎	7～8の2回にわたって、現代社会と教育との関連構造について検討する。 教育は文化と密接に関連している点を、その多様性、文化と人間形成等の側面にわたって考察する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報化社会と教育	今日の社会は情報化社会の特色をもっており、地域社会や家族・社会集団に影響を与えており、教育上の問題も多い。情報化社会における教育のあり方、生涯学習の必要性等について検討する。	田浦武雄
9	学校の機能と目的	9～13の5回にわたって、学校教育の基本問題を広い視野から検討する。 学校の歴史的変遷、公教育、学校の機能を検討し、学校の教育目的の概念と構造、教育目的をめぐる論争を整理し、教育目的の基準をどう考えたらよいかを検討する。	同上
10	学力論と知識論	学力観の変遷と学力のあり方について検討する。とくに学力の概念、基礎学力論争を考察する。知識と学力との関わり、知識の捉え方のちがいを検討し、教育の人間化の観点から、知識教育の課問が何かを究明する。	同上
11	教育課程と教育方法	何をいかに教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育課程の構成要素、教育課程の類型を検討し、学問中心、人間中心の教育課程の特色を考察する。併せて、教育方法の多様化について検討し、学習指導の最適化の必要性について考察する。	同上
12	生徒指導と道徳教育	生徒指導・道徳教育は教科の学習指導とともに重要な領域である。生徒指導の必要性、生徒指導と自己実現、生徒指導の課題等について検討する。併せて道徳教育について、価値教育との関連、道徳教育体制の比較検討を行う。	同上
13	情意的教育・創造的教育	情意的教育および創造性の教育の必要性を考察し、それぞれの課題を検討する。情意的教育については、その現状と問題点を考察し、創造性教育については、創造性の人間学の面からも探究し、改善の方向について検討する。	同上
14	教育制度・教育行政	教育制度・教育行政の意義を考察し、学校制度の現状と課題、学校体系の改革、教育行政の動向について検討する。歴史的反省とともに、他の国の動向との比較研究を行い、教育上の課題を究明する。	同上
15	教師論	教育の質を左右するものとして、教師の役割は大きい。近年、専門職としての教師の考え方が台頭してきたが、その意義を吟味し、教職観の類型を考察し、併せて教員養成の課題、教員の研修の問題について検討する。	同上

＝ 行動科学Ⅰ ＝（TV）

〔主任講師：鹿取広人（帝京大学教授）〕

全体のねらい

人間行動にかかわる諸問題を扱う行動科学は、神経生理学、心理学、社会心理学、文化人類学、社会学、政治学など、幅広い学問分野の領域を含んでいる。ここでは特に人間行動の基礎過程に焦点をおき、人間行動の発生・成立について、主として(1)個体発生（発達）、および(2)系統発生の資料にもとづいて取り挙げることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	行動科学の視点	1. 行動科学とはどのようなものか。その対象と方法。 2. 心の研究と行動学的方法。 3. 知覚世界と行動。	鹿取広人 （帝京大学教授）
2	行動の基本様式	1. 行動のレベル。 2. 行動の間接化──遅延反応。 3. 行動の選択性と情報の保持。	同上
3	生得的行動 Ⅰ	1. 行動の個体発生。 2. ヒトの初期行動の特徴。 3. 行動の発達変化と環境。	下条信輔 （東京大学助教授）
4	生得的行動 Ⅱ	1. 行動の系統発生。 2. 本能行動の特徴。 3. 人間の本能。	長谷川寿一 （帝京大学助教授）
5	脳と行動 Ⅰ	1. 神経系の仕組み。 2. 知覚と学習の径路。 3. 連合野の働き。	渡辺正孝 (東京工科大学助教授)
6	脳と行動 Ⅱ	1. 神経行動学と脳。 2. 脳損傷者と行動。 3. 失認・失行・失語。	河内十郎 （東京大学教授）
7	習得的行動 Ⅰ	1. 習得的行動の種類。 2. レスポンデント条件づけ。 3. オペラント条件づけ。	山本豊 （帝京大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	習得的行動　Ⅱ	1. 社会的学習。 2. 観察学習とモデリング。 3. 模倣行動。	片桐雅義 （宇都宮大学助教授）
9	情動行動と動機づけ　Ⅰ	1. 情動の生理過程。 2. 動機づけの仕組み。 3. 探索行動。	浜村良久 （東京大学文学部助手）
10	情動行動と動機づけ　Ⅱ	1. 情動行動の発達。 2. 知的レベルと情緒。 3. 利他行動。	高橋　晃 （武蔵野女子短期大学助教授）
11	情報処理行動　Ⅰ	1. 赤ん坊の知覚世界。 2. 乳児精神物理学、 3. 感覚・運動協応。	下条信輔
12	情報処理行動　Ⅱ	1. 記憶の仕組みと記憶モデル。 2. 問題解決行動と思考。 3. 選択行動と意志決定。	市川伸一 （東京工業大学助教授）
13	コミュニケーション行動　Ⅰ	1. 動物のコミュニケーション行動。 2. 性行動とコミュニケーション。 3. 類人猿の言語学習。	長谷川寿一
14	コミュニケーション行動　Ⅱ	1. 非言語的コミュニケーション行動と言語的コミュニケーション行動。 2. 母子相互作用と前言語的コミュニケーション行動。 3. 言語と認知。	鹿取広人
15	行動発達	1. 遺伝と環境。 3. 行動発達の要因。 3. 自己意識の形成。	鹿取広人 長谷川寿一 下条信輔

＝ 行 動 科 学 Ⅱ ＝（TV）

〔主任講師：末永俊郎（帝京大学教授）〕

全体のねらい

「行動科学Ⅱ」では実験や調査など実証的な研究手法に基づいて社会的状況における多様な人間行動の理解を深めてきた社会心理学の諸研究の中から、(1)社会的環境の認知、(2)社会的影響、(3)対人的コミュニケーション、(4)集団過程、(5)集団行動などの問題を取り上げて解説を加える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動の科学	行動科学としての社会心理学の視点を、従来の研究の歴史を辿りながら解説する。	末永俊郎（帝京大学教授）
2	社会的環境の認知 Ⅰ	他者の外見や行動から、その人の内的属性を推測したり、全体的な印象を形成する過程を検討する。	今川民雄（北海道教育大学助教授）
3	社会的環境の認知 Ⅱ	他者の行動の原因を推測する過程の分析を中心にしながら、他者に対する魅力がどのように形成されるかを検討する。	奥田秀宇（中京大学専任講師）
4	社会的環境の認知 Ⅲ	社会的環境の中で自分自身をどのように認知するかを「社会的比較」の問題を中心に検討する。	山口勧（東京大学助教授）
5	社会的影響過程 Ⅰ	送り手や受け手の特性、メッセージの内容などが説得の過程にどのような影響を与えるのかを考える。	上野徳美（茨城大学助教授）
6	社会的影響過程 Ⅱ	他者から承諾を得るために用いられている各種の要請技法（段階的要請法、譲歩的要請技法など）の過程を検討し、その効果的な使用法を考える。	川名好裕（帝京科学技術大学助教授）
7	社会的影響過程 Ⅲ	他者から見られる自分のイメージを操作することによって他者に影響を与えようとする対人的方略（自己提示）が対人関係の中でどのような意味をもつかを検討する。	安藤清志（東京女子大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	対人的コミュニケーション Ⅰ	人と人を結ぶものとしての対人的コミュニケーションの基礎的な問題を、非言語的コミュニケーションを中心に解説する。	大坊郁夫（北星学園大学教授）
9	対人的コミュニケーション Ⅱ	教育場面におけるコミュニケーションの役割を、特に教師と生徒の関係を中心にして検討する。	古城和敬（大分大学助教授）
10	対人行動 Ⅰ	援助行動を促進・抑制する要因をさまざまな視点から検討し、併せて援助される側の心理を考察する。	中村陽吉（学習院大学教授）
11	対人行動 Ⅱ	攻撃行動が対人関係の中でどのような機能を果たすかを解説し、それが動因理論、精神分析理論などとどのように関わるかを検討する。	大淵憲一（東北大学助教授）
12	集団過程 Ⅰ	集団の中での成員相互の働きかけの過程について基礎的な検討を加えた上で、集団内の意思決定、集団思考などがどのように行われるのかを解説する。	古畑和孝（東京大学教授）
13	集団過程 Ⅱ	リーダーシップの問題を中心にして、集団内のコントロールシステムについて考える。	同上
14	集団間関係	集団と集団の間の葛藤がどのように調整されるのか、その過程が内集団、外集団成員に対する認知にどのような影響を及ぼすのかを考察する。	境忠宏（横浜国立大学助教授）
15	集合行動	集合場面におかれた人々の行動の特徴を、過去の事例（流言・避難など）を参照しながら解説する。	岡部慶三（帝京大学教授）

＝ 比較思想 ＝ （TV）

— 自然について —

〔主任講師：青山昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代の思想界における最大の課題の一つは、近代的な主観客観図式の乗り越えであり、現代文明における最大の課題の一つは、自然と文明の深い意味での調和の達成である。この講義は、古今東西の自然哲学をとりあげ、非主客図式的・非対象化的な＜一と全の哲学＞の視点から、これらの自然哲学の現代的意義を探ることにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序章 自然哲学の現代的意義	かつてメルロー・ポンティも指摘したように、現代科学は、自然を対象化し、利用可能な材料としている。この姿勢は近代的な主客図式の結果の一つであり、今日において自然の危機を生み、更に文明の危機を生んでいる。この現状を打破する自然哲学が待たれている。	青山昌文 （放送大学助教授）
2	歴史的遺産 I 日本(1) 安藤昌益	日本思想史の内で、「自然」という言葉を明確に哲学的意味においてキー・ワードとした代表的思想家である昌益は、世界と人間との有機的な相互連関、並びに世界自体の＜一＞性と＜全＞性とに着目した哲学者であった。その哲学の現代的意義を明らかにする。	同上
3	歴史的遺産 II 日本(2) 三浦梅園	昌益と並んで、日本における「気」の自然哲学を代表する梅園は、宇宙の生成消滅の根本原因を「一元気」ととらえ、その一気の分立として「気」と「物」を考えている。彼の反観合一の思想は、自然全体を根底的に一者と見るものであり、今日的意味をもっている。	小川晴久 （東京大学教授）
4	歴史的遺産 III アジア・アフリカ(1) 王船山	明末清初の思想家王船山は、北宋の張横渠に発する「気」一元論の哲学を宇宙論として大成させた。理気二元論と対立する彼の哲学は、自然の論理としての道を重視する。その道のダイナミズムと、自然と人間の同「気」論は、現代においてこそ示唆する所大きい。	坂出祥伸 （関西大学教授）
5	歴史的遺産 IV アジア・アフリカ(2) モシ	西アフリカのモシ族は無文字社会である。彼らの自然に対する態度は、文字社会の人間とは異なる別様の可能性をもっており、彼らの世界像は、自然との別様の通路を示唆している。文化と自然の関係を非近代的に考察する際に、彼らの世界像のもつ意味は大きい。	小川晴久
6	歴史的遺産 V アジア・アフリカ(3) イブヌ・ル・アラビー	イスラムの叡知学派の祖イブヌ・ル・アラビーは、一者から多者へと世界存在が自己展開してゆく際の連続性に重きをおいて、存在一性論を唱えた。自然と自己とが連続し共鳴しているという、このスーフィズムは、オリエント的であると同時に今日的でもある。	川田順造 （東京外国語大学教授）
7	歴史的遺産 VI ヨーロッパ(1) ソクラテス以前の哲学者たち	ソクラテス以前のギリシアの哲学者達は、自然を生けるものととらえ、しかも自然全体は、宇宙生成の同一元から生み出されたものとして、連続的であると考えた。この自然には人間も含まれており、このような自然と人間の生的一体観は、今日的意味をもっている。	五十嵐一 （筑波大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	歴史的遺産Ⅶ ヨーロッパ(2) （ルネサンス） ブルーノ	ルネサンスの思想家ブルーノは、世界の全存在の内に霊魂や生命や有機的構造を認める自然有機体論者であり、彼にとって世界霊魂とは、自然に内在する神的能動力であった。この思想は、地球の主人を人間ではなく太陽とする考えと共に、今日的意味をもっている。	広川洋一 （筑波大学教授）
9	歴史的遺産Ⅷ ヨーロッパ(3) ライプニッツ	ドイツ啓蒙哲学の祖であるライプニッツは、デカルト的な機械論的自然観を批判し、本質的に自己運動的で能動的なモナドが、結果として予定調和している世界として自然をとらえている。自然において全ては結ばれているとするその哲学の現代的意義は大きい。	横山紘一 （東京大学助教授）
10	歴史的遺産Ⅸ ヨーロッパ(4) ディドロ	百科全書派の中心的思想家であるディドロは、自然に関して、例えばヴォルテールとは異なった哲学を有している。自然の有機的一体性を重視し、その自己運動性と全一性に着目するディドロの自然哲学は、近代的地平を超えて、現代の問題群に応えるものである。	青山昌文
11	歴史的遺産Ⅹ ヨーロッパ(5) ゲーテ	ドイツ最大の文学者であるゲーテは、自然科学者でもあった。彼の自然科学は、ニュートン的な機械論的で自然利用的な立場と対立する、有機体論的で自然共生的な学である。生きて生成している自然の内に人間をとらえる彼の思想は、極めて今日的なものである。	同上
12	歴史的遺産Ⅺ ヨーロッパ(6) シェリング	ロマン主義的なドイツ観念論哲学者であるシェリングは、自然を例えばフィヒテの様に単なる死んだ道　の如くに見ずに、自己定立的な力をもつものとする。その有機的な自然観は、客観から主観が生じ、自然から自我が生ずる可能性を示唆しており、興味深い。	高橋義人 （京都大学助教授）
13	現代の探究 アメリカ カプラ マーチャント	アメリカのニューサイエンスの中心人物であるカプラは、デカルト・ニュートン的な機械論的世界像の限界を指摘し、自己組織化する有機システムとして世界をとらえている。この思想は、有機的自然観の歴史を探るマーチャントの仕事と共に重要な意味をもつ。	西村清和 （埼玉大学助教授）
14	現代の探究 ヨーロッパ モスコヴィッシ モラン プリゴジーヌ	ヨーロッパの物理化学者であるプリゴジーヌは、古典科学の機械論的で時間可逆的な世界像に対して、不可逆的で散逸的な世界構造を明らかにし、自然論を革新している。この立場はモスコヴィッシやモランと同方向的なものであり、現代における自然論の白眉である。	青山昌文
15	終章 回顧と展望	13回に亘り、古今東西の自然哲学・自然思想をみてきたが、初回にも述べた自然の危機＝文明の危機に対して、これらの思想はその乗り越えのための多大の示唆を与えてくれる。これらの思想は各々深く自己の文化に根ざしていながら、同時に深く普遍的なのである。	同上

＝ 日本語学概論 ＝（R）

〔主任講師：古　田　東　朔〕

1	日　本　語	（古田東朔）
2	日本語の位相	（古田東朔）
3	話しことばと書きことば	（尾上圭介）
4	日本語、東と西	（徳川宗賢・古田東朔）
5	日本語の発音	（上野善道）
6	敬　　語	（古田東朔）
7	日本語の文字	（簗島　裕・古田東朔）
8	日本語の表記	（古田東朔）
9	日本語の語彙（ごい）	（鈴木英夫）
10	「は」と「が」、コソアド	（古田東朔）
11	日本語の品詞	（古田東朔）
12	語・語句の用法	（渡辺　実・古田東朔）
13	日本語の語順	（清水康行）
14	日本語の文章・文体	（古田東朔）
15	これからの日本語	（古田東朔）

＝ 近 代 詩 歌 ＝ （R）

〔 主任講師：野山嘉正（東京大学助教授）〕

全体のねらい

この講義は主として明治期の詩歌の歴史を、作品を読みながら考察するのが目的である。「詩歌」には近代の特色とされる新体詩と、短歌、俳句が含まれるが、それら相互の関連を観察し、近代詩歌の全体像を浮び上らせる方法をとる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに ——「詩歌」ということば	この講義は主として明治期の詩歌の歴史を、作品を読みながら考察するのが目的である。「詩歌」には近代の特色とされる新体詩と、短歌、俳句が含まれるが、それら相互の関連を観察し、近代詩歌の全体像を浮び上らせる方法をとる。第1回はそのために様々な事例を提供する。	野 山 嘉 正（東京大学助教授）
2	『新体詩抄』とその周辺	証体詩の源流とされる『新体詩抄』の成立について考えるが、西洋詩からの影響・創作の質・和歌のことばを採用したこと等々、実際に作品を読み、3人の作者の見解を紹介する。それとは別に、讃美歌や唱歌など他の先駆的な試みについても併せ述べる。	同 上
3	『於母影』とその影響	鷗外を中心とするグループが発表した訳詩集『於母影』は『新体詩抄』の後をうけて当時の青年に新鮮な感動を与えた。音数律などの実験に発揮された詩的感性の特質を考えるわけだが、さらに、同時代への影響、特に雑誌「文学界」同人の受けとめ方を追跡する。	同 上
4	透 谷 と 藤 村	「文学界」同人のうち透谷と藤村の詩業を概略述べる。透谷における長詩の試みと挫折、抒情詩の達成。『若菜集』に始まる藤村の様々な模索。藤村の新体詩の歴史的意義と、詩集、詩文集の総体としての理解を心がけたい。	同 上
5	子 規 —— 俳 句	子規は詩歌の全体にわたる改良革新の計画を持っていた。最初に実現したのが俳句革新、発句の重視であることは広く知られている。その理論として「写生」を提唱したことも有名だが、『俳諧大要』について革新の方向を見定めながら、作句の大体を探る。	同 上
6	子 規 —— 短 歌（付. 漢詩と新体詩）	短歌の革新は「写生」によりつつ、ほぼ俳句の延長線上に考えられたが、俳句との本質的相違や長い伝統を持っているための困難など、子規の未来図は想像以上に緊迫に満ちている。子規の理想について考察するとともに、新体詩と漢詩の業績にも触れる。	同 上
7	鉄 幹 ・ 晶 子	雑誌「明星」では詩歌を〝図詩〟と呼び、新体詩には〝長詩〟、短歌には〝短詩〟の名称を与えた。詩歌を〝詩〟として統一的に理解したのである。「明星」はこの理念に基づいて総合的な文芸雑誌をめざした。鉄幹・晶子の業績を中心に、明星派の展開（光太郎・勇・啄木・白秋ら）について述べる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	有明と法堇	藤村以後、難解な詩語を駆使した有明・法堇は、文語詩の近代における運命について暗示的な意味を持っている。上田敏の訳詩集『海潮音』に代表される象徴詩の移入によって２人の詩人は或る頂点をきわめたわけだが、口語詩の抬頭によって詩筆を折ることを余儀なくされる。有明・法堇と口語詩という歴史の曲り角を概観する。	野山嘉正
9	鷗外と歌壇	鷗外の短歌との関連を考えるとともに、その主宰する観測楼歌会について素描する。子規・鉄幹の系統に佐佐木信綱を加えて短歌の可能性を探る意図に含まれるのは何か、という問題がそこにある。又、鷗外の実作として『うた日記』を詩歌観の表れとして紹介する。	同上
10	茂吉	子規以後の代表的歌人の一人としての茂吉を、第一歌集『寺光』成立までの時期に限定して考察する。左千夫・赤彦・憲吉らにも触れることになるが、近代短歌のあり得べき姿の一つをきわめたという意味において茂吉は重要な存在である。茂吉の実作を追いながら、短歌のこれ以後の流れにも見通しを立てるのが課題である。	同上
11	白秋	雑誌「文庫」「明星」から巣立った白秋は、短歌と新体詩から始めて、その生涯を詩歌のすべての領域に捧げた。ここでは初期の詩集・歌集の全体像を描くことが課題である。白秋に続いた犀星、朔太郎らについても簡単に述べる。	同上
12	啄木	白秋と同様に「明星」から出発した啄木は、文語詩から口語詩へ、短歌の口語化へ、という詩歌の転回点に位置する。そういう位置に考察を加え、啄木の核心にあるもの、或いはそこに揺れ動く心情を探るのがこの回の課題である。盟友であった哀果にも言及する。	同上
13	虚子	俳句の歴史は子規以後、虚子・碧梧桐の二派に別れて或る意味では現在にまで及んでいるとも言えるが、虚子の伝統重視、碧梧桐の新傾向それぞれの成立過程は単純なものではない。この回は虚子が小説に強い関心を示しながら定型と花鳥諷詠の旗幟を鮮明にするまでの軌跡を辿る。	同上
14	碧梧桐	子規没後俳句の主流に立った碧梧桐は、自由律、無季の俳句の源を切り開く。俳句の伝統的な約束事を離れるのは短い詩としての性格を持つ意味だが、又、俳句であり続けることも要求するのが新傾向である。そういう問題を抱えた碧梧桐を素描する。	同上
15	むすびに代えて	近代詩歌の流れは大正期に入って新しい展開を見せる。口語詩の盛行、欧米の新しい運動の影響、短歌・俳句のその後等々である。明治期の様相を引き継いでの発展を略述して一応のむすびとしたい。なお、付論として漱石の俳句と漢詩に言及する予定である。	同上

＝歴史にみる日本人と仏教＝（TV）

主任講師：速水　侑（東海大学教授）
小栗純子（中央学術研究所講師）

全体のねらい

仏教伝来以来1,500年の日本人と仏教の歴史を、日本史を舞台として時代別に究明する。さらに奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教、教派神道、新宗教等々の諸仏教にみられる教団の形成と普及、救いとは何か、女性の救い、転換期の時代と宗教などの諸問題を具体的に史料を解説しながら考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教の形成と普及	まず、日本仏教の歴史を概観的に眺める。そしてその間に生まれた飛鳥仏教、奈良仏教、平安仏教、鎌倉仏教、江戸仏教、教派神道、新宗教等々をとりあげてその特色を論じ、あわせて日本人が宗教に求めたもの、奈良、平安、鎌倉仏教における救いの条件の相違、日本仏教と女性等について論ずる。	速水侑（東海大学教授）小栗純子（中央学術研究所講師）、大橋俊雄（日本文化研究所講師）長谷川匡俊（淑徳大学教授）、船岡誠（明治大学講師）
2	仏教伝来	インドで生まれた仏教は、中国・朝鮮を経由して、六世紀中ごろ日本に伝来した。当時の日本と朝鮮の関係を背景に、仏教伝来の意義を考えるとともに、豪族たちの間に受け入れられた仏教の性格や、さらに聖徳太子の下で開花した飛鳥の仏教文化における渡来人の役割にふれる。	速水　侑 小栗純子
3	奈良仏教	大化改新によって天皇を頂点とする律令国家が成立し、仏教は国家仏教へと変化する。僧尼の国家奉仕を義務づける僧尼令が制定され、中央に東大寺、諸国に国分寺が建立される。こうした鎮護国家仏教の性格と、その一方で民衆救済をめざした行基らの民間への布教活動を明らかにする。	同上
4	平安仏教	腐敗した奈良仏教の粛正をめざす桓武天皇の下で、山林修行者たちの中から最澄と空海が現れ、天台・真言宗を開き、新たな鎮護国家の理念を説いた。しかし二人の死後、天台・真言宗は国家や貴族へ接近し祈禱宗教化し、密教が仏教界をおおう。こうした新しい平安新仏教の成立の背景とその特色を明らかにする。	同上
5	浄土教の普及	平安時代の中ごろ、古代国家の没落、末法思想の流行などを背景に、極楽往生を説く浄土教が盛んとなった。空也や源信が現れて念仏を広め、往生伝の編纂も行われる。ここでは多彩な浄土教芸術を紹介するとともに、平安浄土教と鎌倉時代に生まれる鎌倉仏教との関係を考える。	同上
6	鎌倉仏教	まず古代仏教を全面的に否定して生まれた鎌倉仏教六宗の特守を概観的にながめ、鎌倉仏教誕生の必然性にふれる。また、古代仏教と鎌倉仏教の救いの条件の違いを明確にし、鎌倉仏教が民衆に受け入れられた理由を、古代仏教との比較のなかで具体的に考える。	同上
7	浄土宗の形成と普及	法然は古代仏教を全面的に否定することによって浄土宗を開いた。法然はなぜ念仏一つを選び、それに救いを求めたのか。法然による浄土宗の形成と普及、それとならんでおこった古代仏教、古代権力からの弾圧などについて、法然の生涯のなかで考える。	速水　侑 小栗純子 大橋俊雄

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	真宗の形成と普及	真宗の開祖親鸞と中興の祖蓮如の生涯を中心に、真宗八百年の歴史を考えてみる。そこでは親鸞の行動と思想を悪人正機の思想の形成と普及のなかで考える。つづいて親鸞亡き後の真宗の発展において蓮如の果たした役割を、戦国乱世における蓮如の行動と思想を通じて考える。	速水侑 小栗純子
9	禅宗の形成と普及	栄西・道元によって開かれた禅は、中世社会を通じて武士層に受容された。このうち道元によって開かれた曹洞宗の形成と普及を、道元の生涯のなかで考える。道元の説いた禅の救いとは何か、道元は古代仏教にあきたらず、なぜ曹洞宗を開いたか等々の問題について考える。	速水侑 小栗純子 船岡誠
10	日蓮宗の形成と普及	法華経の行者日蓮の教えは、東国の武士層のなかに広まっていった。日蓮は蒙古襲来の危機感の下で、理想国家の実現をめざし、たびかさなる弾圧にめげず、鎌倉幕府を諫めつづけた。鎌倉仏教の最後に現われた日蓮宗の特色を日蓮の生涯と社会との関連のなかで考える。	速水侑 小栗純子
11	日本仏教と女性	日本の仏教は女性をどのように扱ってきたかを、古代と中世の仏教を例として論ずる。古代仏教では、聖域と巷における女性の救いが、どのように説かれたかを考える。また、鎌倉仏教と女性の関係を念仏・禅・題目の三つに分けて、法然・道元・日蓮の女人往生論を通じて考える。	同上
12	幕藩体制と仏教	強烈な幕藩権力の下で、仏教が発展をはかるためには、どのような役割を政治と社会のなかで果たしたか。この問題を幕藩による仏教の保護と統制の角度から考える。そこでは、寺院法度、本末、寺請、檀家等々の制度を通して、江戸時代の仏教が生きるためにとった政治権力と民衆に対する姿勢を考える。	速水侑 小栗純子 長谷川匡俊
13	体制宗教と地下信仰	幕藩の「体制宗教」本願寺の説く理想的宗教者像妙好人をとりあげ、幕藩体制下の民衆と宗教との関係を究明する。さらに反「体制宗教」として地下にもぐった「かくれ念仏」「かくれ題目」「かくれキリシタン」をとりあげ、妙好人との比較の中で、江戸時代の民衆宗教を考える。	速水侑 小栗純子
14	近・現代社会と民衆宗教	まず近代・現代約120年の歴史の中で生まれ、発展した教派神道13派と戦後の新宗教多数を概観的にとりあげる。さらに具体的には教派神道では天理教を、新宗教では立正佼成会を例に、近・現代の民衆宗教の誕生から発展のプロセスと民衆と宗教との関係を具体的に考える。	同上
15	日本仏教史の回顧と展望	1～14回までの講義を素材とし、歴史にみる日本人と仏教の関係を、仏典と法語の役割、日本人と現世利益、救いの条件の時代的・宗教的相違、転換期の時代と宗教の関係、日本史にみる政治と宗教等々の問題を通じて整理する。	速水侑 小栗純子 大橋俊雄 長谷川匡俊 船岡誠

＝ 法 学 入 門 ＝（TV）

〔主任講師：矢崎光圀（成城大学教授）〕

全体のねらい

法というものは人間の生活と離れてはありえないのに、限りなく技術化されて専門家の独占物になりやすい。あるローマの法律家はこれに抗して法の知識を一般民衆の手に戻したといわれるが、以来、法学はその両極に揺れつつ今日に至る。以下、近・現代において法学がなぜ人間生活にとって不可欠の意義をもつかを考えてみる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	法―法知識の担い手はだれか？	1. 一般の人々 2. 法律家、準法律家 3. 法学者 4. 官僚 5. 政治家	矢 崎 光 圀 （成城大学教授）
2	法の形成と権利の確保	1. 自由と権利 2. ルールの必要 3. 法的権利と主体 4. 人権 5. 国家	同 上
3	法の形成と近代国家	1. 近代国家による政治権力の独占 2. 権力をバックにした法の形成 3. 法による強制 4. 強制のいろいろ 5. 強制の正当化―同意	同 上
4	裁判による法形成	1. 社会あるところ紛争あり 2. 紛争解決と手続 3. 仲間内での解決 4. 中立的第三者による解決 5. 近代西欧の二つの途―大陸と英米	同 上
5	近 代 実 定 法	1. 近代の市場取引と法のルール 2. 法の働きの予測可能性 3. 私法と公法 4. 手続法と実体法 5. 法の支配と権利の確保	同 上
6	法 学	1. 実定法学、法解釈学 2. 基礎法学 a）比較法学　b）法史学 c）法哲学　d）法社会学 3. 法学教育	同 上
7	近・現代への法学の歩み	1. 自然の法と人間のつくった法 2. 万民法と個別の法 3. ローマ法の解釈と法典の注釈 4. 近代自然法論と法典化のうごき 5. 法について固い考えと柔かい考え	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	法学と隣接諸科学	1. 経済学 2. 政治学 3. 社会学 4. 哲学 5. 歴史学 6. 科学・テクノロジー	矢崎光圀
9	法の知識と世間	1. 渡る世間に鬼はいない 2. 法の不知はこれをゆるさず。法網をくぐる。 3. 一般人の法知識は限られているのに、法の支配？ 4. 法と実生活とのパイプ役：習慣、通念、常識	同　上
10	法　の　解　釈	1. 文章の解釈 2. 解釈、鑑賞、批評、創作 3. 法の解釈とそのさまざま 4. 〃　、適用、そうして法創造 5. 法解釈学と実務	同　上
11	法をめぐる事実と規範、ルール	1. 事実？ 2. 〃とルール 3. 法とルール、規範 4. 法体系と社会	同　上
12	法　と　道　徳	1. 恣意的支配への防波堤としての法 2. 崇高な理想には追いつかない法 3. 平均人に向いた法 4. 法と道徳の一応の分離	同　上
13	所、変われば、法変わる	1. 欧米の法―近代法モデル 2. 〃　はなぜ非欧米地域内でも継受されるのか？ 3. 非欧米地域での近代化と法 4. 社会主義諸国の場合 5. 法モデルにおける普遍性と固有性 6. 日本では？―開と閉	同　上
14	時が経てば、法も変わる	1. 近代から現代へ 2. 近代社会の地辷り状況と法の変容 3. 現代福祉国家と法 4. 現代への対応を迫られる法と法学	同　上
15	正義、自由、福祉―人類に未来はあるのか？	1. 拘束からの自由、等しい扱いへの熱望 2. 近代法によるせれなりの保障 3. 共同の名における自由の領域の限定 4. 巨大な科学・テクノロジーの進展がもたらす光と影 5. 法は正義、自由、福祉の実現に役立つか？	同　上

＝ 行 政 法 ＝ （R）

〔主任講師：藤田宙靖（東北大学教授）〕

全体のねらい

行政法の制度や理論にこれまで全く触れたことのない人々を対象に、行政法を本格的に勉強するためにその前提として必要となる基礎的な概念・ものの考え方等を修得してもらうことを狙いとして、できる限り解り易く又筋道の立った入門的講義を行うよう努めたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	行政法とは何か	憲法・民法・刑法等と異なり、行政法という名称を持った法律は我国には存在しない。それにも拘らず何故行政法という分野が独立に存在するとされるのかにつき説明し、又行政法上の法主体として登場する「行政主体」「私人」の概念等について説明する。	藤田宙靖（東北大学教授）
2	行政法上の法関係	前回の内容を承けて、行政法上の法関係を形成する基本的要素（当事者・行政の行為形成）につき、より詳しい説明を行う。又これを踏まえて、行政法上の法関係の中にも性質の異なるものが存在すること、行政作用法と行政組織法の基本的違い、等を説明する。	同 上
3	法律による行政の原理	行政作用法の最も基本的な法原理とされる「法律による行政の原理」について、その基本的な考え方を説明し、更にその具体的な内容である「法律の優位の原則」「法律の留保の原則」等について、詳しい説明を加える。	同 上
4	法律による行政の原理の例外と限界	「法律による行政の原理」は行政法の最も基本的且つ重要な法原理であるが、しかしそれは、あくまでも原則であるに過ぎない。古くから認められてきたその例外としての「自由裁量」の問題、又今日この原理そのものが対面しているその限界、等につき説明する。	同 上
5	行政過程への私人の参加	「法律による行政の原理の限界」を補う意味もあって、今日、私人が法律の制定過程すなわち立法過程に参加するのみでなく、行政の過程そのものに直接参加することの重要性が説かれている。この問題につき、「行政の事前手続」を中心として説明を加える。	同 上
6	行政行為論(一)	行政主体による公権力行使の中で最も代表的な手段である「行政行為」という行為形式につき、この概念の意味、行政法理論上の意義、他の行為形式（契約等）との法的性質の違い、等々についての説明を行う。	同 上
7	行政行為論(二)	承前。「行政行為」なる行為形式が有する法的性質を表すために用いられる、自力執行力、不可争力、公定力等々の概念について説明する。又、それとの関係で、行政行為の瑕疵論とりわけ「無効の行政行為」の問題について説明を加える。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	行　政　立　法	行政主体は行政活動を行う際に、既に見た「行政行為」のみでなく、他にも様々の行政形式を利用する。その一例である政令・省令・通達等々の一種の立法行為について、「法規命令」と「行政規則」の性質の違い等に触れつつ、その法的性質を説明する。	藤田宙靖
9	行政のその他の活動形式	行政活動に際して用いられる様々の行為形式の中で、前回までに見た「行政行為」「行政立法」のいずれにも含まれないもの、とりわけ「契約」「行政指導」等、公権力の行使とは言えない、非権力的な法的性質を持った活動形式について説明する。	同　上
10	行政の実効性の確保	法令の定めや契約・行政行為等によって行政の相手方に一定の法的義務が負わされている場合、この義務が任意に履行されないときに、行政主体の側でこれを強制し本来の目的を達成するためには、どのような手段があり、又どのような法問題があるかを説明する。	同　上
11	行政訴訟（一）	行政活動が法令に違反して行われ、私人の法的利益を侵害することとなったとき、私人としては自らの利益を護るためどのようなことができるか、について概観し、まず、私人が裁判所に対し行政活動の非を訴え原状回復をめざす「行政訴訟」の制度につき説明する。	同　上
12	行政訴訟（二）	承前。我国現行法上行政訴訟制度はどのような仕組みを以て出来上っているかにつき、行政事件訴訟法の条文を手掛りとしつつ、詳しい説明を行う。	同　上
13	行政上の不服申し立て	前回までに見た行政訴訟制度の他にも、私人が行政活動の非を訴え自らの利益を護るためにとり得る手段は色々存在する。ここではそれらの中で最も重要な「行政上の不服申立て」について、行政不服審査法の規定を参照しつつ、その仕組みを説明する。	同　上
14	国家賠償（一）	違法な行政活動によって私人の利益が侵害された場合、もはや原状回復が不可能であるようなときには、前回までに見た「行政争訟」の制度は余り意味を持たない。この場合、蒙った損害を金銭によって埋合わせる「国家賠償」の制度について説明を行う。	同　上
15	国家賠償（二）	承前。我国現行法上の国家賠償制度を、国家賠償法１条及び２条の規定を参照しつつ概観する。時間に余裕があれば、いわゆる「損失補償」制度との関係等についても説明を加えることとしたい。	同　上

＝ 経 済 社 会 論 ＝（R）

〔主任講師：坂井素思（放送大学助教授）〕

全体のねらい

経済社会の基礎的な制度・基本的な観念が、どのように成立し、どのような点で問題となっているのか。その学説の考え方と現実に生じている事象との対応関係のなかで明らかにする。とくに、市場経済とはどのような制度なのかという点に焦点があるが、後半では、現代経済社会の多面的性格についても考察を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済社会の発見	経済秩序というものの性格と、その変遷について考える。近代の経済社会成立の基礎となった産業社会と市場経済の成立について、時代背景と経済的観念のかかわりのなかで明らかにする。	坂井素思（放送大学助教授）
2	経済人と社会人	経済社会のなかで、個人・集団・組織・制度などの役割が、どのようなものであるのかを考察する。その際、個人と個人との間、あるいは個人と社会の間において、どのような経済問題が生じてくるのかをみる。	同 上
3	交 換	人はなぜ交換を行うのか。交換行為の基本的な枠組を明らかにするために、経済的交換論、そして社会的交換論などを検討する。	同 上
4	貨 幣	人はなぜ貨幣を使用するのか。経済社会における貨幣の存在意義と、今日の貨幣経済の特徴について述べる。	同 上
5	利 子	利得観念というものが、どのように成立してきたのか、また現代の経済社会にどのように定着しているのか。各学説と時代背景とを関連させ、その変遷を明らかにする。	同 上
6	所 有	なぜ人は財産を所有するのか。財貨が人・集団に帰属することの経済的な意味を検討する。とくに、経済社会の基礎的な条件になっている私有財産制について言及を行う。	同 上
7	市 場 制 度	経済秩序としての市場システムの特徴を明らかにする。今日の経済社会でみられる市場システムの有効性と限界について考察を行う。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業組織	経済組織としての企業の本質を考察する。なぜ企業が組織という形態をとるのかについて、現代経済社会の特質とのかかわりのなかで考察する。	坂井素思
9	家計集団	なぜ人は家計という場で生計を共にするのだろうか。家計という集団を形成する理由を考える。	同上
10	政府	政府の経済活動が必要とされる理由を問いたい。とりわけ、経済における公共性ということの意味を明らかにする。	同上
11	福祉社会（経済的正義）	経済領域における公正観念について、考察を加える。とくに、公正が経済的効率とのかかわりで、経済社会のなかでどのように位置付けられているのかをみる。	同上
12	競争社会（経済的自由）	競争の経済的意味について考える。この際、経済的自由・経済的平等などが、どのように現代経済社会で成立し、考えられてきたのか、という点に焦点を合わせる。	同上
13	経済的時間	経済進歩と経済的慣習のかかわりについて明らかにする。とくに、革新（イノヴェーション）の経済社会的意味に言及する。	同上
14	消費社会	消費という経済行為の経済社会的意味を明らかにする。なぜ人は消費を行うのか、ということについて、多面的な現実との関連において考えていく。	同上
15	経済社会の目的	経済生活を営むうえで、その最終的な目的は、どこにあるのだろうか。経済的福祉の考え方について、検討を加える。	同上

＝ 比 較 社 会 史 ＝ （R）

〔主任講師：樺山紘一（東京大学助教授）〕

全体のねらい

本講座では、世界史上における歴史文明にあって、社会的諸構成要素が、多様な様相と結合様式をしめすその形式を考察する。高度な文明と未開社会とのあいだにおける相違と類似とが、ともに明らかになるはずである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会史と比較史	方法的導入	樺 山 紘 一（東京大学助教授）
2	環 境 と 社 会	地勢、気候、植生	同 上
3	人 口 と 生 死	人口の数と変動、出生死亡、年齢、病い	同 上
4	家 族 の 構 造	核家族と拡大家族、生計家産と相続	同 上
5	社会的集団の諸相 (a)	部族、村の共同体	同 上
6	同 上 (b)	ソシリビリテー、仲間、贈与、民衆文化	同 上
7	農 業 と 牧 畜	耕作、土地所有、水利	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商業と工業	市場、資本、職人、技術	樺山紘一
9	労働と企業	雇用、営業、企業	同上
10	交通と情報	移動、道路、マスメディア	同上
11	都市の生活(a)	外的空間構造、機能構造、自治	同上
12	同上(b)	内的構造、街区、広場、階層性	同上
13	法と慣習	裁判、規制、伝統	同上
14	統治と国家	税制、軍事、権力	同上
15	祭儀と象徴	宗教、祭り、芸術表現	同上

＝民　俗　学＝（TV）

〔主任講師：宮田　登（筑波大学教授）〕

全体のねらい

現代社会の伝統的な民俗文化は大きく変貌しつつある。一方、都市には新しい民俗も形成されるし、いわゆる民俗の再生産の現象もある。日常生活文化の具体的な姿を通して、日本文化の多様な面を民俗学の視点からとらえていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	民俗学の意義	民俗学は、伝統的な日常生活文化を研究対象として、日本文化の深層を研明しようとする学問である。私たちの身近にある言い伝えや民具などを素材にして歴史的世界を再構成する方法や意義についてとり上げる。	宮田　登（筑波大学教授）
2	民俗学の発達	20世紀初頭より、世界の総文明民族の間に民俗学的関心が高まり、自国民の古文化の発見が盛んとなる。日本の民俗学も郷土研究を中心に、民間伝承の研究が開拓され、次第に学問が整えられていった。そうした過程を扱う。	同　上
3	日本民俗学の先達たち	江戸時代の菅江真澄、屋代弘賢など、明治に入って、外国人の民俗への関心を示したハーンやモースの成果、そして柳田国男を軸に、山中共古、西方熊楠、折口信夫、中山太郎、渋沢敬三らの活躍をとり上げる。	同　上
4	常民と常民性	日本民俗学の基礎概念となった常民の性格について、いくつかの学説を紹介する。一方日常生活文化の変容の中で常民性の概念が一般化していることや、近年の「非常民」の位置づけにも言及する。	同　上 ゲスト　福田アジオ（国立歴史民俗博物館）
5	ハレとケ、そしてケガレ	ハレとケは常民と並ぶ日本民俗学の基礎概念である。その具体例を、日常生活の表象である衣食住のあり方から説明する。また近年ハレとケの媒介役としてケガレの概念が導入されるようになった動向についても言及する。	同　上
6	イエとムラ	日本の民俗文化の重要な基盤であるイエを建物としての家、そして家族、生活、ウエ連合であるムラの成り立ちなどを、東日本と西日本の差異などに留意しながら、概観する。	同　上 ゲスト　赤田光男（帝塚山短大教授）
7	稲作と畑作	水田稲作農耕と対置される畑作文化の存在を強調した坪井洋文の学説を、餅なし正月を例として説明し、稲作と畑作の問題を通して日本の民俗が東アジア文化の中で位置づけられるべきことを説明する。	同　上 ゲスト　野本寛一（近畿大助教授）

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	山民と海民	民俗文化の一方の担い手である非農業民たちの存在を、マタギ、木地屋、漁民をはじめ、その他の職人たちを含めて概観する。とくに非農業民の漂泊性が、定着民に強い刺激を与えたことを説明する。	同上 ゲスト　野本寛一
9	女性と子供	民俗の重要な担い手である女性と子供のもつ文化創造力に注目する。とくに女性を中心とした祭り、子供集団の行事を通して、民間伝承の中で語られている女性と子供のもつ力を説明する。	同上 ゲスト　飯島吉晴 （筑波大講師）
10	老人の文化	女・子供と並び、老人のもつ民俗をとり上げる。日本の民俗社会に見られる長老制を支えている宮座の行事、うばすて伝説で語られる老人の知恵など、老人文化のもつ意味を説明する。	宮田　登
11	交際と贈答	社交や贈答は、人間関係を円滑にする機能をもっている。日本の社会に民俗化している贈答の機会である冠婚葬祭の事例を通して、つきあいや贈答から生じてくる人間関係の特徴について言及する。	同上
12	カミとヒト	日本人のカミ観念は、もっぱら人間側のニーズによって形成されている。氏神や産土神、境内神、勧請神、漂着神などと多量のカミが日常生活の中で発見されている。これらはアニミズムの上に成り立っていることを説明する。	同上
13	妖怪と幽霊	人間の怨霊、物霊、また動物・植物霊などの祟りが発生し、妖怪や幽霊の存在は、民俗宗教の上では否定できない。こうした怪異現象を生み出している民俗の基盤は何であるのかを説明する。	同上 ゲスト　野村純一 （国学院大教授）
14	仏教と民俗	外来宗教の仏教が民俗化した情況を盆や正月、彼岸、四月八日などの年中行事を通して説明する。これらは教団仏教とは異なり、民俗化した仏教儀礼であり、神仏が習合して生みだした民俗文化であることに言及する。	同上 ゲスト　藤井正雄 （大正大教授）
15	都市の民俗	日本各地には都市化した生活環境が拡大している。また各地の都市には伝統的な都市民俗が成長している。日本の都市がつくり出した都市民俗の実態を、欧米の都市民俗と比較しながら説明する。	同上 ゲスト　大月隆寛 （東京外大助手）

＝ 線形代数学 ＝（TV）

〔主任講師：長坂建二（放送大学助教授）〕

全体のねらい

ベクトル・行列・一次変換を初歩から解説し、線形代数の基本を直観的に把握する。また、行列論の鍵となる固有値・固有ベクトルを、2次形式の応用面より幾何学的に理解を深めると共に、線形空間の直和分解とスペクトル分解との対応を示し、一次（線形）変換の重要性を認識させ、実社会への応用例についても触れる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ベクトル	大きさと方向をもつ量であるベクトルを、実例と共に導入し、和・差・スカラー積の演算の意味を理解する。次いで、ベクトルの内積・外積を定義し、その幾何学上の意味を説明する。ベクトルの効用として、初等幾何の難問のベクトル解法を紹介する。	長坂建二（放送大学助教授）
2	行列	2次及び3次の正方行列を定義し、和・差・スカラー積を導入する。次いで、乗法を定義し可換でないことを注意する。また、単位行列、零行列、逆行列を定義し、連立一次方程式の解との関連を見る。一方、行列の巾乗と、ハミルトン・ケーリーの定理を紹介する。	同上
3	一次変換	平面上や空間内の一次（線形）変換が行列で表現できることを示し、点（線）対称移動、回転等の実例を示すと共に、基本的な性質を説明する。また、不動直線を例として、固有値と固有ベクトルについて2直観的な理解を求める。	同上
4	ベクトル空間	n次元数ベクトル、及びn次元ベクトル空間を導入し、1～3章の議論を一般化する。次いで、ベクトル空間の基底と次元について述べる。また、部分ベクトル空間の定義と基本的な性質や、その直和についても言及する。	同上
5	図形のベクトル表現	直線、空間の方程式とベクトル方程式を示し幾何学的な関係をベクトルで表現する。また、2次、3次、4次の行列式を定義し、図形の体積等が表現されることを示し、線形代数の有用性を説明する。	同上
6	行列の基本変形と階数	与えられた行列に、基本変形を施して標準形に変形できることを示し、標準形から行列の階数（ランク）を定義する。応用例として、逆行列の求め方、連立一次方程式の解の性質、一次(線形)変換の次元定理等を示す。	同上
7	直交行列と合同変換	特別な形をした行列の例として、対角行列、三角行列、対称行列、交代行列等を紹介する。また、合同変換を記述する行列は直交行列であることを示し、抽象代数の一部門である群論の有効性に言及する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	置換と行列式	置換とその実用例であるアミダくじについて簡単に解説する。次に、置換を用いて一般の正方行列の行列式を定義し、２次～４次の行列の行列式の場合の拡張となっていることを示す。さらに、行列式の基本的な性質と行列の階数の新たな定義を与える。	長坂建二
9	２次形式と２次曲線	対称行列を用いて、２次形式を表現する。次いで、２次曲線を２次形式より定義し、標準形への変換方法を特別な場合について解説し、固有値、固有ベクトルの幾何学的な意味を学ぶ。また、各種の２次曲線の例について述べる。	同　上
10	２次曲線の分類	与えられた２次曲線を、座標変換により標準形に直す一般論を展開する。その際、座標変換に対する不変量から２次曲線が分類されることを示す。	同　上
11	２次曲面とその分類	２次曲線の標準形を紹介し、様々な２次曲面とその性質（線織面、切断面等）を解説する。次いで、２次曲線の場合と同様に直交行列により標準形に変換するやり方を説明し、不変量による分類を与える。	同　上
12	固有値と固有ベクトル	１次変換の固有値、固有ベクトルを導入し、直交性等の基本的な性質を線形空間と行列の両方により表現する。また、固有多項式、固有方程式、最小多項式、ハミルトン・ケーリーの定理、巾等行列等について触れ、対称行列の直交行列による対角化可能性を示す。	同　上
13	射影と一次変換のスペクトル分解	射影変換の性質を示し、線形空間の直和分解との関連を示す。次いで、射影変換と巾等行列、固有ベクトルの直交性と固有空間への射影変換を通じて、対称行列の直交行列による対角化とスペクトル分解が対応することを示す。	同　上
14	線形空間の複素数	固有値を考える範囲は複素数まで考えざるを得ないのに、今までの線形空間は実ベクトル空間であった。そこで、線形空間を複素化して、複素固有値に対応できるようにして、同時に１次変換も複素化する。	同　上
15	一般固有値問題	一般の行列を標準形に直す場合には、対角化可能とは限らないので、一標固有空間を導入し、一般スペクトル分解について論ずる。つまり、行列のジョルダン標準形であり、単因子論との関連についても若干触れておく。	同　上

＝ 物 理 の 世 界 ＝（TV）

〔主任講師：戸田盛和（放送大学教授）〕

全体のねらい

自然は面白さと不思議さに満ちている。この面白さと不思議さとの出合いを大切にしよう。自然現象のさまざまな面を物理学の目を通して考えていこう。科学にとって基礎的な事柄、人間の思考方法、社会、技術との関係、空間と時間の概念、物質と重力と宇宙などの本質的な問題にも触れる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	月と人工衛星	近代の科学は、身近かな現象に注目することから出発した。現代の私達にとって身近かな物理現象は大変豊かになった。たとえば、月はなぜ落ちてこないのか、人工衛星は月と同じように運動しているのだろうか、などという問いから出発しよう。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	運動を見る	地上における落体や放物体の運動を調べたガリレイ。太陽系という広い空間における月や惑星の運動を解明したニュートン。運動の法則と力学の方法の確立は、その後の科学の基礎となった。	同上
3	音の世界	音は空気を伝わる振動であり、私たちは音の世界に生きている。管中の空気や弦の固有振動に応じて楽器は固有の音を出す。共振、ドップラー効果など、振動と波動の基本についても音はわかりやすい例を与えてくれる。	遠山紘司（文部省教科書調査官）
4	光と影	光の進み方、反射、屈折はよく知られたことであるが、カメラのレンズ、めがねなど、幾何光学に関係した現象は極めて多い。	同上
5	色のいろいろ	朝日や夕日はなぜ赤く、空はなぜ青いのだろう。虹やシャボン玉などはなぜ色づいて見えるのだろう。白熱電球と螢光灯の光はどうちがうのだろう。カラー写真、カラーテレビなども含めて、色との出合いをいろいろ考えよう。	同上
6	水と空気	水にもぐると約10mに1気圧の割りで圧力を受ける。大気の圧力は空気の重さによるものである。船の浮力、圧力の伝達、空気などの気体の性質を調べ、気体の圧力と温度の関係なども考察して、分子運動に言及する。	戸田盛和
7	氷と水	水は水蒸気になったり、水になったりする。このように多くの物質は、気体・液体・固体という、いわゆる物質の三態の変化をする。雪などの結晶は原子や分子の規則正しい配列を示している。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	エントロピーとは	気体は放っておけば広がる性質をもっている。熱は温度の高い方から低いところへ流れる。このように自然の変化にはある向きへ進む性質がある。これに関してエネルギーとエントロピーについて考えよう。	戸田盛和
9	静電気ショック	乾燥した天気のときは、自動車のとっ手などにふれるとパチッと静電気のショックを感じることがある。静電気の話からはじめて、電気がまわりに及ぼす力の場や電流などについて考察する。	遠山紘司
10	家庭の電気	電池は直流の電源であるが、家庭で使っている100ボルトの電気は交流である。直流と交流の性質、利用のちがいを明らかにする。また家庭で使われている電気器具やIC、LSIなどの半導体素子についても触れる。	同上
11	磁石はなぜくっつくか	磁石の作用は、磁気カード、カセットテープ、ビデオなどに極めて広く用いられている。もっと広く見れば、地球の磁場もあり、発電気、モーターなども磁気の作用を利用した装置であり、超電導など磁気に関係した技術の応用はますます開けていく。	同上
12	原子の世界	物体の色や、螢光灯のように物質が出す光も、静電気や磁気も、すべて物質を作っている原子によるものである。原子はどんな構造をもっているのか、化学的性質はどこからきているのか、などについて学ぶ。	戸田盛和
13	エネルギーの粒	光がエネルギーの粒からなることが明らかにされ、原子の構造と原子の出す光の研究から現代の物理学とよばれる量子力学が誕生した。原子の化学的性質も量子力学によって明らかにされた。	同上
14	時間とは何か	科学は常識から出発し、常識が間違いであることがわかれば、これを改める。空間と時間について、私たちは常識的によく知っていると思っていたが、これを改めたのはアインシュタインであった。	同上
15	私たちの宇宙	アインシュタインはさらに物理学の中心的課題である重力に対する基本的な考察に進んで、一般相対性理論を構築した。ニュートン以来の宇宙観はこれによって一掃されたのであった。科学の方法を反省し、物理学の最先端の状況と将来に対する展望を述べる。	同上

＝ 基 礎 化 学 ＝（TV）

〔主任講師：平川暁子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

地球上はもとより、行くことのできない宇宙にも各種各様の物質が存在することが分かっている。これらの物質の本性を統一的に解釈するのが現代の化学である。その体系を理解する基礎を形成することがこの講義の目的である。種類の多い物質も構成元素は100程度であること、元素の単位である原子の構造を物質の性質と結びつけられること、をなるべく実例を使って説明する。理論的な基礎として量子論の講義を参考にすることが望ましい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙を構成する物質	地球と宇宙の元素　電波天文学、　星、　石　太陽スペクトル　太陽系外物質　古文化財の銅の産地　処女水 原子核、素粒子、物質の基本粒子　原子核の実在　同位体、原子量、原子番号　原子量、原子番号の実測法 核化学、原子の合成　原子核の壊変　元素の循環、宇宙の元素組成	細 矢 治 夫（お茶の水女子大学教授）
2	物質の様々な状態とエネルギー	純物質と混合物（水を例として）　相変化と化学変化とエネルギー変化　均一相と不均一相　蒸気圧曲線　理想気体、分子運動論、実在気体 液体、固体と結晶　溶解度　分散質と分散媒	橋 谷 卓 成（東京農工大学教授）
3	原 子 の 構 造	ボーア模型　分光学、エネルギー差、発光と吸収 リュドベリーの式 量子数　主量子数　方位量子数　磁気量子数　スピン量子数 イオン化エネルギー　電子親和力　電気陰性度（マリケン）	平 川 暁 子（放送大学助教授）
4	物質の多様性と分子の形	立体化学　理想気体、非理想性の導入 低分子化合物　いろいろな形の分子 高分子化合物　金属と非金属 有機化合物と無機化合物　黒鉛、ダイアモンド 分子の可能な形（振動スペクトル）	細 矢 治 夫 橋 谷 卓 成
5	化 学 結 合	共有結合　不対電子　配位結合 結合エネルギー　0点エネルギー イオン結合　電気陰性度（ポーリング） 分子の極性、分極率、双極子モーメント 水素結合　ファンデルワールス相互作用 疎水相互作用　　分子間力 反応熱と結合エネルギー	同 上
6	いろいろな炭素化合物	炭化水素　鎖式、芳香族、二重結合 異性体　対掌性 芳香族 官能基　解離反応	持 田 邦 夫（学習院大学教授）
7	溶液（非電解質）、コロイド	溶けるということ　活動度、溶解度 分子分散とコロイド　均一相と不均一相、界面 理想溶液　化学ポテンシアル　自由エネルギー 界面エネルギー、表面張力　蒸気圧 浸透圧、蒸気圧降下　沸点上昇と融点降下	橋 谷 卓 成

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イオン性化合物、電解質溶液	気相と液相のイオン　イオン　イオン強度 酸と塩基、pH　解離平衡　緩衝液　ブレンステッド酸　ルイス酸　強電解質と弱電解質 イオン性結晶、格子エネルギー　溶解度 イオン化傾向 電池、自由エネルギー、電気分解　電極電位	橋谷卓成
9	金　　属	金属と分子　ディスクリートでない物質　最密構造、結晶、超格子構造　金属光沢、電気伝導 自由電子　合金、状態図　置換合金と侵入型合金 典型金属元素と遷移金属元素　格子欠陥と機械的性質	同上
10	炭素化合物と機能	高分子　機能性物質　分子結晶、液晶、ミセル 重合　　縮合	持田邦夫
11	反応と平衡	オーバーオール反応と素反応　素反応の種類 分子の衝突　結合の切断・形成　電子移動　ホモリシスとヘテロリシス　溶媒中の反応　結合の切断・形成　反応速度　速度定数 反応の経路　一次反応、二次反応 活性化状態　エネルギー源　電極反応	同上
12	反応と平衡	反応の可逆性　化学平衡と可逆反応　ル・シャトリエの原理　平衡定数と自由エネルギー変化 触媒　均一相触媒、不均一相触媒 活性化吸着	同上
13	錯　　体	銅タンパク質　染料　　水和イオン 配位結合　配位の立体化学、配位子置換反応 キレート反応　　有機金属化合物	橋谷卓成
14	自然界の元素	微量元素 資源、元素の循環	一国雅巳 （東京工業大学教授）
15	ま　と　め	周期律表との関係　同位体存在比、質量分析計 希ガス元素、超ウラン元素　　族の意味 典型元素、遷移元素　　プラズマ	斎藤一夫 （国際基督教大学教授）

＝物質の構造と機能＝（TV）

〔主任講師：斎藤一夫（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

物質は物の形の蔭にかくれて目立たないが、その進歩は文明を支えてきた主役であり、社会発展の原動力である。物質の探求には求心力と遠心力が必要で、多様な物質を整理し体系的理解を探る試みと共に、新しい多様性を求めて新物質創造を目ざす努力が不可欠である。物質構成の基本である原子分子の世界から多様な世界を探ろう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質構成の基礎	多様な物質界は約百種の原子の組合せで生ずるが、原子の種類に応じ原子間の結合はほぼ3種に分類される。単原子から複雑な物質系に至る過程は段階的に整理され、光学的・電磁気的・熱的・機械的・化学的諸性質は各段階ごとの属性として理解される。	斎藤一夫（国際基督教大学教授）
2	分子の形成	原子が集って生まれる分子の検出、原子配置の実験的決定方法を概観し、化学結合（共有結合）の近似方法、結合に伴うエネルギーの出入り、基本的性質としての双極子モーメントと分極率について解説する。また宇宙における物質進化の過程を考察する。	同上
3	色々の分子	非金属元素のつくる分子について、有機・無機という従来の分類にとらわれず、周期表に基づいた基本的理解をめざす。特に原子が電子を引きつける力（電気陰性度）を柱に分子の物理的化学的性質の体系的解明を試みると共に特殊な性質をもつ異常分子を探求する。	同上
4	小分子の集団	分子間に働く力を調べ、分子から液体・固体・異種分子集団を形成する過程を分子自身の個性に基づいて理解する。特に水素結合と疎水性相互作用を重点的に取上げ、水と氷、水中での酸・塩基関係、有機半導体などの電荷移動錯体等機能性分子集団を探る。	同上
5	金属元素と非金属元素の境界に添って	周期表で金属元素と非金属元素の境界付近にある元素の単体は変態が多く特異な物性を示すと共に、多様性に富む化合物を与える。電子材料としての半導体、多様な機能を示す有機化合物、周期表の孤児といわれるホウ素を中心に特異な物質群を探る。	同上
6	高分子化合物	小分子が化学結合で連結された高分子化合物は自然界・生物界はもとより人工のプラスチックス、合成繊維、陶磁器として広範に人類を取りまいている。一見無秩序無関係に見えるこれら物質群を化学結合の面から整理し、共通点と個性を探る。	同上
7	金属の構造と特性	元素の¾は金属元素で、鉄・銅などは文明の主要な担い手であった。金属中での一見単純な原子配列とその乱れが硬さ、強靱さ、導電性等を支配する機構を観察し、金属結合の特色を考える。また無限ともいえる多様な合金類を系統的に理解するいとぐちを探る。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イオン結晶	金属元素と非金属元素の組合せで生まれるイオン結晶中での原子配列の原理、静電相互作用による結合形式のエネルギー関係を調べる。同時に結晶の不完全さ—格子欠陥—、純粋なイオン結合からのずれが物質に多様性を与える状況を原子の個性に基づいて考察する。	斎藤一夫
9	イオンの水溶液	イオン結晶は電解質であり、水溶液となって電離するが、その過程を原子分子レベルから観察し、それに伴うエネルギー関係を明らかにする。また溶液中でのイオンの挙動や溶けてゆく過程を動的に捕えようとする努力を探る。	同　上
10	金属とイオンの間	金属がイオンに変わる過程を電池や錆びという現象を通じて観察し、それに伴うエネルギー出入りの関係を調べながら金属元素の個性を解明する。一方これらの現象と人間生活との深い関係を自然現象、工業的な諸過程について考察する。	同　上
11	金属錯体	金元化合物の色は古代から注目されてきたが、配位結合を通じて着色の原因を探りながら金属イオンと分子・イオンの間の錯体形成を中心に、いわゆる高次化合物の形成を考察する。錯体の物性・反応性を解明しながら、次章以下の基礎となる重要な原理を導入する。	同　上
12	無機物と有機物をつなぐ	二十世紀前半までの古典化学における有機・無機、金属・非金属といった分類になじまない新化合物を取り上げ、それらが分子・イオン結晶・金属という従来の化合物群の相互関係の解明を通じ、物質界の統一的理解を推進し新物質創造に貢献する状況を探る。	同　上
13	生体機能を支える金属化合物	生体の主成分は炭素原子を中心とする有機化合物であるが、ごく少量の金属元素が特殊な錯体となって、代替の不可能な重要機能を担っている状況を観察する。代表例について生命を支える無機化合物の作用を、構成元素の個性と結びつけて考察する。	同　上
14	先端材料をめぐって	「技術革新は先端材料から」と言われ、新しい物性をもつ機能性材料は文明の発展に不可欠である。新材料には従来用途の少なかった希有金属元素を含むものが多い。いろいろの分野での先端材料を概観すると共に、希土類元素を例に基礎研究と応用の関係を考える。	同　上
15	欲しい物質を創造する	新物質の創造は科学とその応用の発展にとり最大の原動力である。新物質合成にも、分子レベルでデザインし段階的に造る場合、原料を反応させてでき易いものを一気に造る場合など異った手法がある。先端材料の創造を例に、新物質への挑戦を探る。	同　上

＝ 基礎生物学 I ＝（TV）

〔主任講師：平本幸男（放送大学教授）
　　毛利秀雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

生物学は今世紀になって著しい進展をとげ、基礎的な知識の進歩とともに医学、農学、工学など応用分野との関係も深まっている。本講では生物学の基本となる一般的事実や概念をできるだけわかり易くのべ、生命の探求がきわめて魅力に富んだものであることを伝えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物とは何か	生物のもっている特性、すなわち増殖能、物質交代、反応性など無生物と異なる面および共通する面について述べる。また生物の系統、分類についても言及する。	毛利秀雄（東京大学教授）
2	生物のつくり	生物の示す多様な形がどのようにして成り立っているかを、生体の構成要素である器官組織および細胞の特性に基づいて説明する。また形態の多様性の意義を、機能的な適応性と関連づけて考え、形態と機能が密接に結びついていることを理解させる。	八杉貞雄（東京大学助教授）
3	細胞	生体の構成単位である細胞の基本的な構造と機能、分裂と増殖などについて概説する。	平本幸男（放送大学教授）
4	生体構築分子	生体は炭水化物、脂質、タンパク質、核酸等の特色のある分子により構築され、それぞれ生体における機能を果たしている。さらに、テルペノイド類、ポルフィリン化合物は多様な機能分子として生体に欠くことができない。	山田晃弘（東京大学教授）
5	タンパク質の機能	タンパク質は細胞内で起こる代謝や様々の活動の全ての局面に関与している。タンパク質はアミノ酸の高分子重合体であり、その種類は極めて多様である。各々のタンパク質は決まったアミノ酸配列をもち、それによって一定の折れたたまった立体構造を取る。各タンパク質はそれぞれ固有の役割をもっている。最も重要な触媒としての酵素であり、その他に抗体、ホルモン、輸送、運動、構造など独自の役割をもつ。	大隅良典（東京大学助教授）
6	生体と物質交代	物質交代は連続する多数の反応によって行われ、これらの反応はエネルギーの出入を伴って進行する。生体における物質交代がどのように進行し、コントロールされているか、解糖系を例にとって説明する。	山田晃弘
7	生体エネルギーの産生 I　呼吸	O_2の消費とCO_2の排出によっておこる呼吸（外呼吸）は細胞が生きていくために必要なエネルギーを細胞内で産生する（内呼吸）ために行う。内呼吸がどのような物質交代により行われるかを理解する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	生体エネルギーの産生Ⅱ　光合成	動物はエネルギー源および栄養源を植物に依存している。植物は太陽エネルギーを用い、無機分子から有機分子を合成する能力があり、光合成という。光合成がどのような物質交代によって行われるかを理解する。	山田晃弘
9	生合成と物質循環	生体構築分子は細胞内で産生されたエネルギーにより合成される。一方、不要となった物質は分解され、排除される。生体における炭素および窒素化合物の合成と分解の関係を理解し、これらの物質交代が地球上においては様々な生物の連鎖関係により成立していることを学ぶ。	同上
10	神　　経	神経は多細胞動物の体内における情報伝達に最も重要である。神経内興奮伝導、シナプスにおける興奮伝達などのしくみについて解説する。	平本幸男
11	受　容　器	受容器は外界からの刺激を受容するための機能が特に発達した細胞である。受容器の刺激受容のしくみ、受容した情報を神経を通じて伝達するしくみについて解説する。	同上
12	筋　　肉	筋肉は刺激に応答して収縮することにより動物の運動、呼吸、循環、排泄などに役立っている。筋肉が収縮してエネルギーを発生するしくみを解説する。	同上
13	運動・発電・発光	繊毛、鞭毛の運動、アメーバ運動、原形質流動など筋収縮以外のさまざまな運動のしくみ、発電、発光などのエネルギー放出のしくみについて解説する。	同上
14	ホ　ル　モ　ン	生体の内部環境などは、外部環境の変化に対応して、常にほぼ一定に保たれるように調節されている。このようなしくみをホメオスタシスと呼ぶ。血糖量・体温・浸透圧の調節などにおけるホルモンや自律神経系の働きについて説明する。	毛利秀雄
15	ホメオスタシス	神経系とともに、生体の恒常性の維持にあずかっているのが内分泌系である。内分泌器官の種類およびそれぞれより分泌されるホルモンについて説明し、さらに個々のホルモンの働きや作用機構、異なるホルモン間の相互作用などについて例をあげて述べる。	同上

＝ 基礎生物学 Ⅱ ＝（TV）

〔主任講師：平本幸男（放送大学教授）
毛利秀雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

生物学の基本となる一般的事実のうち、遺伝、発生、行動、生態および生命の起元と進化についてのべる。基礎生物学Ⅰとは独立の課目であるが、基礎生物学Ⅰで学んだ生物の構造、物質とエネルギー、個体としての基本的機能をよく理解したうえで学習することが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	遺伝とは何か―核と染色体―	遺伝とは何かについて概説する。核は遺伝現象の中心をなすオルガネラであり、有糸分裂、減数分裂という二つの様式で分裂する。遺伝情報の担い手である染色体はDNAとヒストンなどのタンパク質から構成され、通常の細胞には二対存在する。アカパンカビ、酵母などでは半数体も正常に増殖する。一方核をもたない原核生物も遺伝学の研究上重要な役割をもっている。	大隅良典（東京大学助教授）
2	遺伝の法則	古典的遺伝学はメンデルの法則の（再）発見から始まる。メンデルの実験から、優劣の法則、分離の法則、独立の法則が導かれた。メンデル以後の連鎖、伴性遺伝、量的形質の遺伝などを考察し、さらに遺伝子を生物集団全体の中でとられる集団遺伝学の基礎について学習する。	同上
3	遺伝子の本体―分子生物学の誕生	遺伝子の本体であるDNAの発見とその役割の解明にいたる重要な研究の歴史をあとづける。DNAの構造に関するワトソン、フサックの2重らせんモデルは、その後の遺伝学の研究に決定的な役割を演じた。一方、ビードルとテイタムによる遺伝形質と遺伝子との関係の解明に大きな貢献をなした研究を考察する。	同上
4	遺伝情報―暗号の解明	DNAのもつ遺伝情報はタンパク質をつくるための暗号文に他ならない。セントラル・ドグマと呼ばれる遺伝情報の流れ（DNA→RNA→タンパク質）についてその基本を学習する。転写、翻訳の過程の巧妙な機構を概説し、遺伝暗号のしくみを理解する。	同上
5	分子遺伝学の発展	遺伝子の構造、転写の単位としてのオペロン、真核細胞のもつ分断された遺伝子（エキソン、イントロン）構造について概説する。さらに遺伝子発現の調節機構について調節タンパク質の役割を考察する。	同上
6	遺伝子操作と最近のトピックス	DNAを特異的に切断する制限酵素の発見により、我々は現在遺伝子の構造を決定することが可能になった。さらには遺伝子操作と呼ばれる技術により、自由に遺伝子を取り出し、さらにそれを可変しそれを生物体に戻すことができるようになった。その生物学的な意義について考察し、最近のトピックスについてもふれる。	同上
7	性と生殖	生物の一世代の寿命には限りがある。生物が次代の新個体を生産することにより、生命の連続性を保つ過程が生殖である。いろいろな生殖方法（無性生殖・有性生殖）について述べ、さらに性の意義や特徴について説明する。核相交代や世代交代についてもふれる。	毛利秀雄（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	受精	生殖にあたって雌雄を生じるものでは、それぞれの配偶子（卵と精子）の合体によって新個体の発生が始まる。まず配偶子の形成について述べ、ついで受精現象の様子をウニの場合を中心にして示す。哺乳類の受精過程についても説明する。	毛利秀雄
9	初期発生	受精によって発生を開始した卵は、細胞分裂（卵割）によって細胞の数を増し、袋状の胞胚になる。ついで内外二層の胚葉よりなる嚢胚になり、さらに第三の胚葉である中胚葉が形成され、幼生から親になっていく。このような初期発生の過程について解説する。	同上
10	分化と形態形成Ⅰ	動物の発生における細胞分化と胚の形態形成のしくみについて、これまでの実験結果から導きだされたいくつかの仮説を紹介し、またこれらの過程における核の役割や、細胞間の相互作用などについて説明する。	同上
11	分化と形態形成Ⅱ 植物の場合	植物の発生は動物の発生とかなり異った様式で進行する。植物の発生の特色を調べ、成長と分化に関するホルモン、環境因子を通して植物の発生のしくみについて学ぶ。	山田晃弘 （東京大学教授）
12	分化と形態形成Ⅲ	発生過程においては、核の中の特定の遺伝子が胚の特定の場所で差次的に発現して、細胞分化や形態形成をもたらす。このようなしくみやその調節機構について、分子レベルで考察する。	毛利秀雄
13	動物の行動発現	動物の行動は大別して本能行動と知能行動に分けられる。本能行動の発現は種に特有な鍵刺激によって解発される。これは生得的な現象で行動の遺伝学であるといえる。知能行動は学習と記憶によっている後天的なものである。動物の行動の発現のメカニズムについて、トリの歌、フクロウの音源定位、動物のコミュニケーションなどの研究を中心に述べる。	青木清 （上智大学生命科学研究所教授）
14	生物の生態	地球上における生物は各種の生態系をつくり、生態系間には密接なつながりが見られる。生態系の基本的な構成を理解し、現時点での生態系の生産、エネルギーおよび物質循環を知り、過去から未来への生態系の変遷を学ぶ。そして、人間社会が及ぼした生態系への重大な影響を考える。	山田晃弘
15	進化	地球上の生物は非生物分子から原始生命体への発達（化学進化）と原始生命体から高等生物への発展（生物進化）を経て今日の繁栄に到達した。その筋道としくみを学び、特に最近の分子レベルでの解明に注目する。	山田晃弘 石川純 （東京大学教授）

＝日本の自然＝（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
　　西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

人口密度が高く、開発の進んだ日本の自然は人為の影響を強く受けている。それでも自然は活力に富み、多彩な景観をくりひろげている。そうした日本の自然の特色を地形、地質、気候、水文、生物などの視点から明らかにする。またこうした自然環境と人間生活の関係、よりよい適応の方向について論及する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の自然と歴史的風土	日本の国土においても、当然その基盤や背景には人為を超越した自然は厳存するが、その大部分は、生活環境の拡充、土地利用の集約化等によって歴史的風土に変貌している。こうした生活・文化とのかかわりにおいて、日本の自然の特色について概観する。	西川　治（立正大学教授）
2	日本人の自然観とその変遷	日本における伝統的自然観について再検討し、自然観は、時代や生活体験の違いによって多様であることを確認した上で、自然観の東西比較論にも言及する。具体例としては、日本の代表的な景勝地、とくに富士山をめぐる自然観の変遷について考察する。	同上
3	日本の地質	日本列島の東半は太平洋プレートが、西半はフィリピン海プレートが、アジア大陸の下へ潜没するところに位置し、環太平洋造山帯の北西部を占め、火山、地震も多い。このような状態の下にある日本の地質は複雑である。その全体像について概括する。	奈須紀幸（放送大学教授）
4	日本の地形	日本の地形は細かく変化し多様である。度重なる造山運動や火山活動を受けてできた土地に、風化や水の侵食が働いて地形を複雑にした。こうした地形を系統的にとらえ、環境要因としての性質を理解し易くするために、野外の実例に即して地形の特色を解説する。	式正英（お茶の水女子大学教授）
5	日本の地形環境と開発史	日本における村落の生活環境は、きめこまかいジェオシステムを基盤にして成立し、住民は、社会組織と農業土木技術の発達につれて、どのように地形環境に適応し、集落を作り、土地を開発し利用してきたか、各地の事例を示しながら説明する。	西川　治
6	日本列島の気候の特色	日本の気候の基本的性格は、列島が中緯度の大陸東岸に沿って位置すること、南北に長いこと、背梁山脈の存在、複雑な地形などによって形成されている。このような空間的スケールにより異なる気候や天候の特色を、各季節について説明する。	前島郁雄（東京都立大学教授）
7	日本の気候環境と生活	亜熱帯から亜寒帯に展開する日本の気候は、生活の環境（衣服・冷暖房など）、生産の環境（農業生産力・水資源など）としても地域的な変化に富んでいる。さらに観光・レジャーの立地条件、都市に特有な気候、気象災害などにもふれて、気候環境について説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の水文環境	日本は世界で最も水に恵まれた国の一つである。その日本の水文環境の特徴を、降水、蒸発散、流出などの水環境を柱として、外国との比較によって明らかにし、さらに地域条件を加味して、水文環境と人間生活との関係について諸述する。信濃川流域を取り上げる。	槻根　勇（筑波大学教授）
9	日本の森林と植生景観	日本の植生は、南北に多様である。この植生を世界の植生帯の中で位置づけるとともに、水平分布と垂直分布の特徴を、主として気候条件と関連させながら考えていく。さらに、各植生帯を代表する森林の構造と動態について現地調査を行い、特性を明らかにする。	大沢雅彦（千葉大学助教授）
10	二次林の成立と日本の文化	日本の森林は雑木林のような二次林が多い。こうした自然と文化の共同の産物といえる二次林について、縄文人の森林利用、古くからの薪炭利用、現在のレクリエーション、環境保全林としての利用などについて現地調査を行い、その保全と活用の方向を探る。	武内和彦（東京大学助教授）
11	日本の動物相	現在の日本の自然は、日本列島とそれをとりまく海洋環境の変遷史を反映した歴史的産物である。植生は気候と基盤地質とに支配され、その特性に応じた動物相が成立する。この地生態系は、人類出現以降大きな変化をとげ、自然サイクルとの調和を失いつつある。	浜田隆士（東京大学教授） 樋口広芳（日本野鳥の会研究所研究員）
12	日本の海	日本列島をめぐる海について、海流、海底地形、海底地質のあり方について学ぶ。プレート潜没の場として海溝やトラフが形成され、活動縁辺域としての特性を示す。また水期、間水期に対応する海水準変動の影響を受けて大陸棚が形成されていることも学ぶ。	奈須紀幸
13	日本の海岸	日本列島は造山帯としての島弧よりなる。そのため、海岸線は陸地の面積に比べて長い。また後背の平野はあっても規模が小さく、山地が直接海岸に迫るところも多い。このような日本の海岸は岩石海岸、砂浜海岸、内湾の海岸に大別される。海岸での営力にも言及する。	同上
14	日本の自然災害と防災	日本の自然の変化は災害と表裏一体である。河川洪水、内水洪水、高潮洪水、津波洪水の災害と平野地形との関係、地震による液状化災害、山崩れについて地形分類図を用いて説明する。また、火山災害とくに火砕流について、さらに防災についても考える。	大矢雅彦（早稲田大学教授）
15	自然環境の利用と保全	自然に対する態度は、国民の文化水準を反映する。日本における高度成長期の乱開発によって損われた自然的景観の修復をはかり、自然的環境によりよく適応するための事業やナショナルトラストについて、河川流域や海岸等の事例に即して説明する。	西川　治

＝ 英　語　Ⅱ ＝ （R）

Greative Communication in Social Situations

［主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
　　平賀正子（放送大学助教授）］

全体のねらい

これまでに習得した英語の基礎を活用して、自分で英語の文を作り、コミュニケーションを進めていくことができるようになることがこの科目の目標である。コミュニケーションの仕組みを学ぶと同時に、英語文化についての基本的な知識を身につけて、具体的な人間関係・状況・場面に応じた英語が使えるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	心構え、コミュニケーションの構造、人間関係のコミュニケーションの言語的特徴、および印刷教材に関する注意事項に関して説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	Thanking and Responding	コミュニケーションの基本である、お礼の言い方、感謝の気持の表し方、および問いかけや依頼に対する応じ方や断り方について説明する。	同　上
3	Apologizing and Interrupting	あやまり方、わび方、弁解の仕方、および相手の話のさえぎり方について説明する。	同　上
4	Openings and Closings	直接対面している相手や電話の相手との話し方などを例にして、出会いのあいさつや別れのあいさつなどを紹介する。	同　上
5	Makig Introductions and Starring Conversations	人を紹介する時、紹介された時、あるいは自己紹介をする時の話し方について、また会話の始め方について説明する。呼称、敬称、名前の呼び方などについても説明する。	同　上
6	Inviting and Treating	招待をする時、受ける時、断る時、および人にごちそうするときのコミュニケーションについて説明する。	同　上
7	Giving and Receiving	人に贈り物をする時、また人から贈り物を受ける時のコミュニケーションを紹介する。また、助力や助言の提供の仕方についても説明する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Asking a Favor and Getting Permission	相手に何か頼みごとをする時の言い方、および相手から許可や承諾を得るための話し方について説明する。「ていねいさ」の度合も検討する。	比　嘉　正　範 平　賀　正　子
9	Requesting Information and Giving Directions	いろいろな情報を得るための物の聞き方、道順などの教え方や用具などの使い方の説明の仕方、またその確認の仕方について説明する。	同　上
10	Complimenting and Correcting	お世辞の言い方、おだて方やほめ方について、またしかり方や注意の仕方、不満や不平の言い方について説明する。	同　上
11	Congraturating and Consoling	お祝いの述べ方、喜びのわかちあい方、なぐさめ方、悲しみのわかちあい方について説明する。	同　上
12	Listening and Interacting	相づちの打ち方も含めて、相手の話の上手な引き出し方や相手の関心の引き方について説明する。	同　上
13	Asking Preferences and Making Choices	好き嫌いの聞き方や表現の仕方について説明する。	同　上
14	Agteeing and Disagreeing	議論の仕方と同意の仕方、反対の仕方、妥協の仕方について説明する。	同　上
15	ま　と　め	本書で取り上げたことや強調したことなどをまとめて復習する。	同　上

＝ 英 語 Ⅲ ＝ （TV）

〔主任講師：鈴木　博（東京大学教授）〕

全体のねらい

映画化された文学作品を二つ使って、普通に話されている英語を聞いて理解する力を養成する。毎回、映画を5、6分ずつ学習し、映画全体を学習し終ったところで映画を通して視聴する。発音の解説と口頭練習も聴解力養成に資する目的で行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	The Necklace —1—	モーパッサンの「首飾り」を現代のアメリカに場面を置き換えてドラマ化したもの。 あらすじ：マティは友人ジーンの豪華な暮しぶりを見て意気消沈している。晩の食卓で夫が面白い話をしても乗ってこない。 発音コーナー：母音図の見方	鈴木　博（東京大学教授） 高山一郎（東京大学助教授） Dennis E. Schneider（東京大学外国人教師）
2	The Necklace —2—	前回の復習とテスト あらすじ：妻を喜ばせようとして手にいれたパーティの招待状を見せると妻は着て行くものがないと言う。ドレスを手に入れるとアクセサリーを借りにジーンのところへ行く。 発音コーナー：母音図上の個々の音の位置	同　上
3	The Necklace —3—	前回の復習とテスト あらすじ：パーティで人気の的になり大いに満足して帰宅したマティが首飾りが無くなっているのに気が付く。パーティ会場へ電話すると首飾りの落し物は届いていない。 発音コーナー：二重母音	同　上
4	The Necklace —4—	前回の復習とテスト あらすじ：代わりの首飾りを返そうと宝石商で値段を聞くと7万ドルとのこと。支払い能力を遥かに越えた額である。八方手を尽くし、ジーンには首飾りは修理中と電話する。 発音コーナー：破裂音、破擦音、摩擦音	同　上
5	The Necklace —5—	前回の復習とテスト あらすじ：遂に家を売り多額の借金をしてダイヤモンドの首飾りを作って返す。ジョージは借金返済のために働き続ける。5年たっても借金の半分も返済できない。 発音コーナー：鼻音、〔l〕,〔r〕,〔w〕,〔j〕	同　上
6	The Necklace —6—	前回の復習とテスト あらすじ：やっと借金を返済し終えた10年後のある日マティは湖のほとりでジーンを見て話しかける。マティの話を聞いてジーンは驚く。 発音コーナー：英語のリズム	同　上
7	The Man that Corrupted Hadleyburg —1—	このフィルムはマーク・トウエイン原作「ハドリバーグを堕落させた男」をドラマ化したものである。約40分の作品を8回にわたって学習し、9回目に通して視聴する。 発音コーナー：弱形—その1	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Man that Corrupted Hadleyburg −2−	前回の復習とテスト 発音コーナー：弱形ーその２	鈴木　博 高山一郎 Dennis E. schneider
9	The Man that Corrupted Hadleyburg −3−	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化ーその１	同　上
10	The Man that Corrupted Hadleyburg −4−	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化ーその２	同　上
11	The Man that Corrupted Hadleyburg −5−	前回の復習とテスト 発音コーナー：音の連結	同　上
12	The Man that Corrupted Hadleyburg −6−	前回の復習とテスト 発音コーナー：不完全破裂	同　上
13	The Man that Corrupted Hadleyburg −7−	前回の復習とテスト 発音コーナー：gonna とwanna	同　上
14	The Man that Corrupted Hadleyburg −8−	前回の復習とテスト 発音コーナー：イントネーション	同　上
15	The Man that Corrupted Hadleyburg −9−	前回の復習とテスト 映画を通して視聴する。	同　上

＝ 英　語　Ⅳ ＝（TV）

An Introduction to Living English Speech (2)

―ドラマの英語(2)―

〔主任講師：國吉丈夫（千葉大学教授）〕

全体のねらい

話されている、ありのままの姿の英語を学習の対象とする。標準的な英語が使われているテレビドラマを素材とし、ことばが使われている場面や、身体的動きなどの非言語情報などと関連させながら、主として音声英語の理解力および表現力の養成を目指す。文字英語の学習にはドラマのスクリプトが音声英語と一体の形で扱われる。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	"An Eye to the Future" ―1―	PHONETICS Corner：英語の母音と子音	國吉丈夫（千葉大学教授）
2	"An Eye to the Future" ―2―	PHONETICS Corner：日本語と英語の音声の流れの違い	同　上
3	"An Eye to the Future" ―3―	PHONETICS Corner：英語の強勢アクセント	同　上
4	"An Eye to the Future" ―4―	PHONETICS Corner：文表現の強勢音節と弱強勢音節	同　上
5	"An Eye to the Future" ―5―	PHONETICS Corner：英語文表現の強調と強勢	同　上
6	"An Eye to the Future" ―6―	PHONETICS Corner：英語のリズム	同　上
7	"An Eye to the Future" ―7―	PHONETICS Corner：英語イントネーション	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	“An Eye to the Future” －8－	PHONETICS Corner：英語イントネーションの基本形	國吉丈夫
9	“Let’s Marry Liz” －1－	PHONETICS Corner：文表現とイントネーション	同　上
10	“Let’s Marry Liz” －2－	PHONETICS Corner：英語のテンポとポーズ	同　上
11	“Let’s Marry Liz” －3－	PHONETICS Corner：声の音量の変化	同　上
12	“Let’s Marry Liz” －4－	PHONETICS Corner：声の音質の変化	同　上
13	“Let’s Marry Liz” －5－	PHONETICS Corner：音声の流れ：要素の分析と総合的効果	同　上
14	“Let’s Marry Liz” －6－	PHONETICS Corner：いろいろな英語：スタイルの違い	同　上
15	“Let’s Marry Liz” －7－	PHONETICS Corner：いろいろな英語：方言の違い	同　上

＝英　語　VI ＝（R）

主任講師：山 内 久 明（東京大学教授）
グレアム・ロー（恵泉女学園大学助教授）

全体のねらい

英語Ⅰ～Ⅶの中での位置付けによると，英語Ⅵは，文学作品，特にフィクションからの抜萃を読む作業を通じて，文化的コンテクストの中で現代英語に習熟することを目指している。二人の講師の協力によって，テクストの部分的理解を超えて　合的理解に到達するよう，さまざまな試みを行いたい。

（内　容）

1. George Orwell's, Nineteen Eighty Four Ⅰ 1984(1949).
2. 〃　Ⅱ
3. William Golding's, Lord of the Flies(1954).
4. 〃
5. John Wain's, Hurry On Down(1953).
6. John Braine's Room at the Top(157).
7. Iris Murdoch's An Unofficial Rose Ⅰ (1962).
8. 〃　Ⅱ (1962).
9. David Lodge's, The British Museum is Falling Down(1965).
10. Muriel Spark's, The Driver's Seat(1970). Ⅰ
11. 〃　Ⅱ
12. Margaret Drabble's the Ice Age
13. John Fowles's, Mantissa (1982).
14. Timothy Mo's, Sour Sweet(1982).
15. Kozuo Ishiguro's, A Pale View of Hills (1982).

＝英語Ⅱ—B1＝（R）

主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール
（同志社女子大学助教授）

全体のねらい

この科目の目的は(1)構造の複雑な英文を読めるようになることと、(2)日本の政治、社会、文化などについて英語で読み、英語で語れるようになることである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	構造が複雑なため解釈の難しい英文の読み方、大意の取り方や、この科目の学習方法などを説明する。	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	The Ideology of the Samurai	江戸時代の武士階級の政治・社会思想と儒教との関係および日本の儒教化を論じている。	同上
3	Modern Bureaucracy	日本の官僚制の特徴を述べ、政治家と官僚との関係を論じている。	同上
4	Japan's Two Constitutions	明治憲法と戦後の新憲法の二つの憲法のそれぞれの特徴をヨーロッパの憲法と比べながら論じている。	同上
5	Government and Politics	明治維新後における日本政府の成立および議会政治と政党政治の発達と問題点を説明している。	同上
6	Industrial Revolution	１９世紀末に始まった日本の産業革命がどのようにして明治政府によって推進されたかを説明し、日本の産業化が成功した要因を論じている。	同上
7	The Motorization of Japan	日本の自動車化の歴史と、自動車社会の問題などを紹介している。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Home	戦前と戦後の家庭を比較し、日本人の生活様式がいかに変化し、生活が物質的にいかに豊かになっているかを述べている。	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	Leisure	日本人にとって余暇とは何か、趣味とは何かを論じている。	同　上
10	Educating the Nation	日本の寺小屋教育の発達、特徴、問題点などを説明している。	同　上
11	Imitators or Innovators ?	日本人は模倣能力に優れ、創造力に欠けていると一般にいわれているが、人類の文化を発達させるのに模倣が重要な役割を果してきたことを論じている。	同　上
12	The Family System	明治時代に法制化された日本の家族制度を説明し、これが戦後どのように変化したか、今後どう変化し得るかを論じている。	同　上
13	Police and Crime	交番に代表される日本の警察は、外国の警察に比べて犯罪の阻止と犯人の検挙に良い成績をあげているが、これの要因が何であるかを探っている。	同　上
14	Sex	性に対する日本人の考え方や態度を歴史的に説明し、これが戦後どのように変化しているかを述べている。	同　上
15	An Ageing Society	日本も高齢者の数が増え、欧米並みに社会が高齢化してきているので、高齢化した日本人社会における人口問題、出生率と育児の問題、老人の福祉の問題などを検討している。	同　上

＝英語Ⅱ－B 2＝(R)

主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール
（同志社女子大学助教授）

全体のねらい

この科目の基本的な目的は、受講者が学術的な内容の英文を読めるようになることである。そのための入門的な教材として、学問分野の紹介文を使うことにした。このような英文に慣れることによって論文調の文章を読む能力を養っていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	An introduction to the goals, structure and content of the course, with advice on how to study for it and suggestions for further reading.	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	Philosophy	An introduction to Philosophy, the study of knowledge of and belief in reality. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
3	Anthropology	An introduction to Anthropology, the study of humanity and human culture. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
4	Archaeology	An introduction to Archaeology, the study of the remains of past human cultures. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
5	Sociology	An introduction to Sociology, the study of the individuals, groups and institutions that make up society. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
6	Psychology	An introduction to Psychology, the study of mental processes and behavior. Exercises in making questions about the text and then answering them, in analytical skills, and in vocabulary building.	同上
7	Learning	An introduction to Learning, the process by which changes in behavior result from experience or practice. Exercises in comprehension and analytical skills.	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Physics	An introduction to Physics, the study ofhow the world around us is put together and how it changes. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	Astronomy	An introduction to Astronomy, the study of the stars, planets, and other objects that make up the universe. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
10	Home Economics	An introduction to Home Economics, the study of the management of a household. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
11	Health	An introduction to Health, the study of physical, mental and social well-being. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
12	Ecology	An introduction to Ecology, the branch of biology that deals with relationships things have to each other and to their environment. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
13	Business	An introduction to Business, the activities of all commercial producers of goods and services. Exercises in paragraph outlining and structural analysis.	同　上
14	Industry	An introduction to Industry, a group of businesses that produce a similar product or provide a similar service. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
15	Statistics	An introduction to Statistics,a set of methods used to collect and analyze data. An exercise in outlining.	同　上

＝ドイツ語Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰは全課のカリキュラムを入門編と基礎編に分けて、発音や語形変化の基礎的な知識から始めて、文を作る為の最低限の文法知識を習得するところまでを学習する。具体的にはまず最初の５課で、ドイツ語の発音や読み方の練習を中心に置きながら、難解とされる語形変化の仕組みを見て、ドイツ語の言語として特長の概要を　むようにする。基礎編では、色々な状況の中でのドイツ語を学びながら、基本語集を増やしていくように努める。目標は、ドイツ語を学習していく上での土台を作ることである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	第１課 ドイツ語案内	1.はじめに 1-1 ドイツ語とはどのような言葉か？ 1-2.ドイツ語はどこで使われているか？ 1-3.ドイツ語人口はどのくらいいるか？ 2.発音 2-1.文字の種類 2-2.音の種類 2-3.発音の原則	辻　理 （東京大学名誉教授） 中山　純 （明治学院大学助教授）
2	第２課 品詞について	1.品詞の分類規準 1-1.品詞 2.動詞について 2-1.動詞の不定形と語幹・語尾 2-2.動詞と格	中山　純
3	第３課 変化と一致について	1.動詞の人称変化 1-1.人称とは何か？ 1-2.人称と数 1-3.人称代名詞と変化形 2.名詞の格変化 2-1.名詞の性と冠詞 2-2.定冠詞つきの名詞の格変化 2-3.不定冠詞つきの名詞の格変化 2-4.定形と名詞の格変化 3.呼応一致について	同　上
4	第４課 語順と文成分	1.不定句の作り方 2.語順について 2-1. 定形の位置 2-2.その他の成分の語順 3.文成分について 4.コンテクストについて	同　上
5	第５課 時称と話法	1.時称について 1-1.動詞の３基本形 1-2. sein, haben, werden の３基本形 1-3. ６時称の作り方 1-4.時称の用法 1-5.時称の相互関係 2.話法について 2-1.動詞による話法 2-2.助動詞による話法 2-3.その他の話法の表現	同　上
6	第６課 Was ist das？	1.品物を買う 1-1.発音練習 1-2.Was ist das？ 1-3.動詞の人称変化 2.名詞の性別 2-1.意味による見分け方 2-2.形による見分け方	同　上
7	第７課 Was siehst du？	1.発音練習 1-1.Was kaufen Sie？ 2.動詞の人称変化 2-1.語尾変化の練習 2-2.３人称の形の練習 3.名詞の複数形 3-1.複数形の格変化 3-2.特殊な格変化をする名詞 4. 2•3人称単数で幹母音が変音する動詞 4-1. つづりが変わる動詞 4-2. sein, haben, werden の現在人称変化 5. du と Sie の使い分け方 6.疑問代名詞	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第8課 Wem gehort Wagen ?	1.発音練習 1-1.動詞essenを使って 2.職業を尋ねる 2-1.発展練習 2-2.Was macht er denn gern? 2-3.発展練習 3.名詞に冠詞をつけない用法 3-1.男性弱変化名詞の格変化 3-2.人称代名詞の格変化 4. 3格目的語をとる動詞	中山　純
9	第9課 Ich schenke dir ein Buch	1.発音練習 1-1.発展練習 1-2.人の名前を尋ねる 2.前置詞を含む文 3.形容詞を使った練習 4.決定疑問文における定形の位置 4-1. 3格と4格目的語を要求する動詞 4-2. 3格と4格の目的語の語順 5.形容詞 6.前置詞について	同　上
10	第10課 In der Stadt	1.発音練習 1-1.発展練習 1-2.nichtを使って 2.前置詞を使った表現 2-1.発展練習 3.否定の表現 4.前置詞について 4-1.3格支配の前置詞 4-3. 3•4格支配の前置詞 5.不定代名詞 jeder	同　上
11	第11課 Die Burgpassage	1.発音練習 1-1.発展練習 2.分離動詞の練習 2-1.発展練習 3.非人称表現 3-1.形容詞の名詞化 3-2.不定代名詞のman 4. 分離動詞 4-1.非分離動詞 4-2.分離・非分離	同　上
12	第12課 Verschiedene Berufe	1.発音練習 1-1.指示代名詞を使った練習 1-2.所有代名詞の練習 1-3.発展練習 2.疑問副詞 3.冠詞類 3-1.定冠詞類の格変化 3-2.不定冠詞類の格変化	同　上
13	第13課 Im Kaufhaus	1. 発音練習 1-1.発展練習 2. 形容詞を使って 2-1.発展練習 3. 形容詞の付加語的用法	同　上
14	第14課 Ein Tag von Herrn Liebau	1.発音練習 2.Ein Tag von Herrn Liebau 2-1.Er steht auf. 2-2.Er zieht sich an. 2-3.Er geht aus seiner Wohnung. 2-4.Wie sieht Ihr Arbeitstag aus? 2-5.Er arbeitet im Buro. 3.指示代名詞 4.副詞 5.再帰動詞と再帰代名詞	同　上
15	第15課 Freizeit	1.発音練習 1-1.話法の助動詞の練習 2. In der Stadt 2-1.ガソリンスタンド 3.数詞 4.話法の助動詞 4-1.話法の助動詞の人称変化 4-2.話法の助動詞の意味 4-3.話法の助動詞の単独用法 4-4.話法の助動詞に準ずる動詞	辻　瑆 中山　純

＝ドイツ語Ⅱ＝（TV）

主任講師：辻　　理（東京大学名誉教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）

全体のねらい

ドイツ語Ⅱでは、語学スケッチを見ながら、生きたドイツ語の習得を目指す。言葉だけではなく、ドイツでの様々な生活の場面を鑑賞しながら、地誌的な知識をも深めていく。文法知識としては、副文や話法、また「　」等単純な語形変化を越えたものについて練習する。この段階から、積極的に視・聴・覚の語学の3要素を配慮した学習をしていく。ドイツ語Ⅱを修了した時点で、ドイツ語の初級学校文法の知識を習得し、1,500語程度の生活語を中心とする単語能力を身に着けることを目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課　Wir stellen uns vor	TEXT1 Die Stadt Celle liegt… TEXT2 Selbstverstellung TEXT3 Die Umgebung 1.前置詞と定冠詞の融合 2.形容詞の比較級と最高級 3.形容詞の比較の用法 3-1so＋原級＋wie 3-2比較級＋als 3-3 immer＋比較級；比較級＋比較級 3-4 je＋比較級、desto〔または um so〕＋比較級 3-5 最高級の用法	辻　理（東京大学名誉教授） 中山　純（明治学院大学助教授）
2	第2課　Am Fruhstuckstisch	TEXT1 Morgens TEXT2 In der Backerei TEXT3 Am Fruhstuckstisch 1.wissen の人称変化 2.形容詞の名詞化 3.数詞	同　上
3	第3課 Die Hausarbeit	TEXT1 Vormittags TEXT2 In der Reinigung TEXT3 In Lebensmittelgeschaft 1.指示代名詞 2.関係代名詞	同　上
4	第4課 Im Fremdenverkehrsamt	TEXT1 Fahrt zur Arbeit TEXT2 Im Fremdenverkehrsamt 1.時刻の表現	同　上
5	第5課 Am Arbeitsplatz	TEXT Am Arbeitsplatz 1.曜日と月の名称 2.複合時称 2-1.現在完了形の作り方 2-2.未来形の作り方 3.従属接続詞と副文	同　上
6	第6課 Im Lederwarengeschaft	TEXT1 Mittags TEXT2 Beim Mittagessen TEXT3 Im Lederwarengeschaft 1.不定形と不定句 2.過去形の作り方	同　上
7	第7課 Einkaufen im Supermarkt	TEXT1 Einkaufen im Supermarkt TEXT2 Im Supermarkt TEXT3 An der Tankstelle 1.語構成 2.接続法の形式 2-1.接続法第1式 2-2.接続法第Ⅱ式 TEXT4 In der Reinigung	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第8課 Kuchen backen	TEXT1 Feierabend TEXT2 Kuchen backen TEXT3 Planung 1.命令 2.受動態 2-1 受動について 2-2.受動の作り方 2-3.自動詞の受動態 2-4.話法の助動詞と受動態 2-5.状態受動	辻　　理 中山　　純
9	第9課 Ausflug	TEXT1 Am Sonntag/Ausflug TEXT2 Die Schifffahrt TEXT3 Nach der Fahrt 1.前置詞と人称代名詞・疑問代名詞の融合 2.接続法の時称形式 TEXT4 An der Hotelerezeptio	同　　上
10	第10課 Beim Friseur	TEXT1 Friseur TEXT2 Beim Friseur TEXT3 An der Kasse 1.接続法の用法 1-1.要求話法 1-2.非現実話法	同　　上
11	第11課 Celler Grotte	TEXT1 Celler Grotte 1.副文になった疑文 2.間接話法 TEXT2 Im Cafa	同　　上
12	第12課 Planung eines Erholungsgebietes	TEXT1 Der Leiter eines Fremdenverkehrsamtshat TEXT2 Im Amt fur regionale Planung 1.話法の助動詞の接続法第Ⅱ式 2.時称の補足	同　　上
13	第13課 Im Reiseburo	TEXT Im Reiseburo 1.分詞の用法	同　　上
14	第14課 Grillparty (1)	TEXT Grillparty (1) 1.感嘆詞	同　　上
15	第15課 Grillparty (2)	TEXT Grillparty (2) 1.並列の接続詞 2.「初級文法」について	同　　上

＝ドイツ語Ⅲ＝（R）

〔主任講師：辻　　堤（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

読むための文法に多少重点を移し、その復習をした上で、若いドイツ人夫婦の日包体験、特に二人の受けるカルチャー・ショックを軸として、現代ドイツのすぐれた作家や思想家のさまざまな文体に触れていく。同時に、まったくの日常会話から一歩脱して、考えを述べるためのドイツ語に近づきたい。

テーマ

1　構文について　－　定形の位置

2　構文について　－　副文・zu＋不定詞

3　Anne an ihre Eltern

4　Gesprach mit einem japanischen Professor

5　Schwierige Textauswahl

6　Über Tagebucher

7　Gespräch zu „Aufbruch“

8　Das Mittel zum wirklichen Frieden

9　Zum Überleben ?

10　Warum ein Deutsch-Deutsches Worterbuch ?

11　Sprache und Gesellschaft － Mit Wortern lugen ?

12　Der Humor und die Deutschen

13　Kulturschock

14　“ Raman ”

15　“ Erbe ”

＝ドイツ語Ⅱ－B1＝（R）

〔主任講師：辻　　瑆（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

「ドイツ語Ⅱ－A」で抽象的な思考への糸口を把握したものと考え、「Ⅱ－B1」では印刷教材の量をふやしていきたい。印刷教材をreflexivに扱い、解釈する態度が求められる。世紀の転換期にミュンヘンに活躍した作家たちの作品を取上げるが、1945年のTh.マンの発言までをも視野に収めつつ、政治的状況が文学に複雑な影を落しているさまを言語表現の中に見ていく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Brief aus Japan	7年間の日本滞在を終えて、ドイツに帰国したニグシュティと夫人にあてた手紙。南のミュンヘンで暮らす北ドイツ人は、何を感じているだろうか？	辻　　瑆（東京大学名誉教授）
2	Brief aus München	かつての芸術家居住区シュヴァービングは、今はただ不動産屋が跳梁するところ。かつての面影は全然ないとのむごいご託宣。	同　　上
3	Simpl ＜1＞	シュヴァービングの現在がそういうことであるなら、残された作品によって、私たちはこれを再生させなくてはならない。Ringelnatzが描く芸術家酒場ジンプル。	同　　上
4	Simpl ＜2＞	芸術家酒場ジンプルの続き。Ringelnatzはついにこのジンプルの座付詩人に昇格する。	同　　上
5	Gedichte von Ringelnatz und Mühsam	そのRingelnatzのひりりと皮肉の利いた可愛らしい詩と、ぐさりぐさりと人を刺すアナーキストMühsamの詩。	同　　上
6	Die Schutzimpfung ＜1＞	Wedekindは当時のシュヴァービングの大御所。芝居の自作自演もしばしば。そのWedekindがめっぽう不道徳な不倫物語を語って聞かせる。	同　　上
7	Die Schutzimpfung ＜2＞	こんな予防接種を女房にされたら、世の亭主たるもの生きた心地もしまいという、奇妙な話の続き。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Herr Fischötter <1>	伯爵家の生まれでミュンヘンのボヘミアンになった女流作家、Franziska Gräfin zu Reventlowの作品。	辻　　理
9	Der Herr Fischötter <2>	この作品、やはり世紀末の特徴をそなえていると言えそう。女性と死と動かすことのできない運命がその主題。	同　　上
10	Der Herr Fischötter <3>	かわうそ氏のせいで恋人を失った方もかわいそうだし、罪もないのに決闘で殺されるかわうそ氏もかわいそう。かわいそうな人がいて初めて物語ができ上がるのだろうか。	同　　上
11	Kriegserklärung	不遇な女流作家Lena Christの作品。第1次世界大戦が勃発したとき、なぜミュンヘンの人々はインテリをも含めて、あんなに喜んだのであろう。	辻　　理 大　貫　敦　子 （学習院大学助教授）
12	Räterepublik	１９１９年、たったの一か月足らずのことであるが、ミュンヘンにはレーテ共和国の政府が誕生した。その首班となったErnst Tollerの語る思い出。すごい混乱。	同　　上
13	Flucht und Verhaftung	レーテ共和国の首班であったTollerは、今は厳しく追われる身。ようやくかくまってもらった家でも、裏切り者の女に密告されてしまう。	同　　上
14	Ohrfeigen und Hausverkauf	これはKarl Valentinの二つの作品。いやでも笑っていただかないと、ミュンヘンから化けて出そう。どこか氷りつくようなValentinの笑い。	辻　　理
15	Mit Thomas Mann	Thomas Mannはミュンヘンに住み、ミュンヘンを愛し、ミュンヘンで傑作を書きあげた人。そのMannがいかにミュンヘンをまもり、またドイツ文化をまもろうとしたか。	同　　上

＝ドイツ語Ⅱ—B2＝（R）

〔主任講師：岩崎英二郎（独協大学教授）〕

全体のねらい

現在、ドイツの新聞や小説などでごくふつうに用いられている文章語が楽に読めるような実力をつけること。それを目標としてテキストの読解、「ドイツ語Ⅰ」では扱われなかった文法事項の解説、それと関連した独作文の練習を行う。単にドイツ語を受動的に理解するだけでなく、ドイツ語で自分の考えを発表する力をつけることの重要さを強調したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Die elektronische Gesellschaft (1)	文法解説　—話法の副詞— 独作文(1)	岩崎　英二郎（独協大学教授）
2	Die elektronische Gesellschaft (2)	文法解説　—語構成(1)— 独作文(2)	同　上
3	Die elektronische Gesellschaft (3)	文法解説　—語構成(2)— 独作文(3)	同　上
4	Die elektronische Gesellschaft (4)	文法解説　—語構成(3)— 独作文(4)	同　上
5	Die elektronische Gesellschaft (5)	文法解説　—文の種類— 独作文(5)	同　上
6	Die elektronische Gesellschaft (6)	文法解説　—文の構成要素— 独作文(6)	同　上
7	Die elektronische Gesellschaft (7)	文法解説　—補足成分と添加成分(1)— 独作文(7)	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Die elektronische Gesellschaft (8)	文法解説　－補足成分と添加成分(2)－ 独作文(8)	岩　崎　英二郎
9	Die elektronische Gesellschaft (9)	文法解説　－付加語－ 独作文(9)	同　　上
10	Die elektronische Gesellschaft (10)	文法解説　－配語法(1)－ 独作文(10)	同　　上
11	Die elektronische Gesellschaft (11)	文法解説　－配語法(2)－ 独作文(11)	同　　上
12	Die elektronische Gesellschaft (12)	文法解説　－心態詞－ 独作文(12)	同　　上
13	Begegnungen mit Fritz W　(1)	独作文(13)	同　　上
14	Begegnungen mit Fritz W　(2)	独作文(14)	同　　上
15	Begegnungen mit Fritz W　(3)	独作文(15)	同　　上

＝フランス語Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語に入りやすくするために、テレビ映像と言葉の結びつきを考え、ある喜劇的なシチュエーションを作り、フランス人の習慣と言語との関係を把握させる。自然なフランス語の習得を目ざすため、教材はフランス語を母国語とする考えが、ふつうに使う表現に限る。コミュニケーションのためのフランス語を中心にして、いわゆるmethodes communicalivesとし、復習、繰り返しを中心とする。なお、ビデオ、写真によるパリ案内も付ける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	あいさつ	Boniour, Merci, Cest ～／母音の発音〔r〕と〔l〕 単語レッスン＜家族＞ パリの表情(1)　セーヌ河	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	紹介	Ce nest pas ～ ,Je suis ～, il faut ～, 動詞の不定法／鼻母音／単語レッスン＜職業＞ パリの表情(2)　観光のパリ①	同上
3	数 ～ その1 ～	数・1～12，年齢の尋ね方、avoirの現在形／リエゾン 単語レッスン＜身体＞ パリの表情(3)　鉄道	同上
4	数 ～ その2 ～	数30～900，曜日、月／Ilest ～，Ila～，Quel âge avez-vous ?／発音とつづり字、エリジョン／単語レッスン＜顔＞ パリの表情(4)　公園	同上
5	復習と文法 (1)	発音のまとめ／冠詞、指示形容詞、所有形容詞動詞、-er動詞／efveとavoir，avoirを使った慣用句／単語レッスン＜食べ物＞	同上
6	時間	時間の数え方、Combieh de ～／アンジェヌマン、イレトネーション／単語レッスン＜飲み物＞ パリの表情(6)　美術館	同上
7	Comment me trouezvous ?（わたしをどう思いますか）	devoir，trouver，疑問副詞／疑問文のイントネーション 単語レッスン＜食器一揃い＞ パリの表情(7)　メトロ	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Je vais acheter （これから買うんです）	aller, Je voudrais ～／形容詞とリエゾン／単語レッスン＜気晴らし＞ パリの表情(8)　新しいパリ①	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	Ne vous en faites pas （心配しないで）	中性代名詞 en, Vous ne pouvez pas ～／つづり字と発音、-s-／単語レッスン＜文房具＞ パリの表情(9)　新しいパリ②	同　上
10	復修と文法 (2)	動詞の活用、形容詞の女性形、形容詞の位置、非人称主語／単語レッスン＜衣料(1)＞ パリの表情(10)　マルシェー食料品店	同　上
11	Jen ai assez （もう、うんざりだ）	感嘆文、直接法半過去／単語レッスン＜衣料(2)＞ パリの表情(11)　ローマの遺跡	同　上
12	a l air interessant Ca（それおもしろそうね）	疑問代名詞、avoir Iaivf 形容詞／単語レッスン＜家＞ パリの表情(12)　舗道	同　上
13	Que veux-tu ? （しかたがないじゃないか）	j' espève, Que veux-tu ? en avoir marre de＋不定法、前置詞＋疑問詞／enとリエゾン、エリジョン／単語レッスン＜公共の建物＞ パリの表情(13)　影像	同　上
14	Qaest-ce quil ya de mal ? （何が悪いんです）	接続詞の que, Je na: pas pu＋不定法、tu sais que…／〔ə〕の脱落／単語レッスン＜交通機関＞ パリの表情(14)　観光のパリ②	同　上
15	復習と文法 (3)	動詞＋不定法、依頼と許可、代名動詞／単語レッスン＜国々＞ パリの表情(15)　光のパリ	同　上

＝フランス語Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰの復習と兼ねつつ、コミュニケーション言語の習得をはかり、さまざまな情況で使い得るよう多くのシチュエーションを考える。これはフランス人の家庭へのロケーション、フランスから来た人へへのインタビューなどを行なう。なお、フランスの地方の案内も行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Iln'y a personne ?	スケッチ①／否定の代名詞／人称代名詞／非人称構文　コミュニケーション－あいさつ－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(1)指 Bonjour France (1)　地形と気候	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	Je suis content de vois revoir.	スケッチ②／疑問形容詞／近接未来／複合過去　コミュニケーション 楽しくおぼえるマナーとエチケット(2)ぶどう酒 Bonjour France (2)　人口・運輸	同上
3	Ce seva toujours utile.	スケッチ③／Conbien／複合過去／単純未来　コミュニケーション－初対面－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(3)カクテル・パーティー Bonjour France (3)　イル・ド・フランス	同上
4	De quoi te mêles-tu ?	スケッチ④／代名詞／性・数の一致／中性代名詞のy　コミュニケーション－依頼－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(4)お札 Bonjour France (4)　シャンパーニエ，アルザス・ロレーヌ地方	同上
5	Je ferais n'importe quelle foliepour Vous.	スケッチ⑤／間接疑問／条件法　コミュニケーション－呼び掛け，待たせる時－ 楽しくおぼえるマナーとエチケット(5)花 Bonjour France (5)　ブルゴー	同上
6	記述、　のしかた、形容詞	形容詞 インタビュー	同上
7	疑問の出しかた	インタビュー	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感情表現	インタビュー	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	過去の表現	インタビュー	同上
10	復習	インタビュー	同上
11	許可を求める、許可を与える、拒否する	ディアローグ、スケッチ	同上
12	賛意、反対	ディアローグ、スケッチ	同上
13	不満、怒り	ディアローグ、スケッチ	同上
14	非難、無関心	ディアローグ、スケッチ	同上
15	復習	インタビュー	同上

＝フランス語Ⅲ＝（R）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

ラジオの特性を生かし、聞く能力の性差をはかり、Ⅰ、Ⅱで勉強したことのとりまとめとして、文法、構文、知識の整理、基本文の習得をはかる。なお、単語の用法についてもこまかい検討を加える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	名詞とその周辺	文法：名詞の性・数／名詞標識語 Lecture：「白い服の婦人」①	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	être，形容詞	文法：efre の直説法・現在形／形容詞女性形／定冠詞の縮約 Lecfure：「白い服の婦人」②	同上
3	avoir,-er 動詞	文法：avoir の直接法・現在形／-er 動詞の直説法・現在形／形容詞の位置 Lecfure：「白い服の婦人」③	同上
4	代名動詞、tvouver	文法：代名動詞／動詞の現在形 Lecture：「白い服の婦人」④	同上
5	場所	文法：場所の副詞（句）・前置詞（句） Lecture：「白い服の婦人」⑤	同上
6	時、時制	文法：時の副詞（句）／時制（複合過去形、半過去形、大過去形、未来形、前未来形） Lecture：「白い服の婦人」⑥	同上
7	疑問	文法：疑問代名詞／疑問形容詞／疑問副詞 Lecture：「白い服の婦人」⑦	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	否定	文法：否定のいろいろな型 Lecture：「白い服の婦人」⑧	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	人称代名詞、中性代名詞	文法：人称代名詞／中性代名詞／二重目的に置かれた代名詞の語順 Lecture：「フランスのジャーナリズム」①	同上
10	si＋半過去、条件法	文法：副詞節／Si…／条件法 Lecture：「フランスのジャーナリズム」②	同上
11	ジェロンディフ、使役の助動詞	文法：laisser, faire＋inf／現在分詞／ジェロンディフ Lecture：「フランスのジャーナリズム」③	同上
12	間接話法	文法：直接話法と間接話法／時制の一致／間接疑問 Lecture：「フランスのジャーナリズム」④	同上
13	接続法、名詞節と形容詞節	文法：接続法／名詞節と接続法／形容詞節と接続法／関係代名詞 Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑤	同上
14	副詞節と接続法	文法：副詞節と接続法／前置詞（句）finf…接続詞（句）＋que＋inf Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑥	同上
15	成句	文法：成句 Lecture：「フランスのジャーナリズム」⑦	同上

＝フランス語Ⅱ－B1＝(R)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

Ⅱ－Aまでに習得した文法知識と語彙力の基礎的な部分によって、かなり高度のコミュニケーション能力が発揮できることを示すため、Ⅱ－B－1においては会話力、発表力の開発に重点を置く。特に重要な状況を想定して、相手の意見を聞き、自分の考えも述べられる。知的なコミュニケーションができるようになることを目標とするすべての課にフランス人、日本人ゲストによる実習をも含む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自己紹介	まず自分が何者であるかを相手に知らせること、ついではある人物を別の人にこまかく紹介する術を学ぶ。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	情報の求め方	相手にいろいろと情報をたずねる場合の言いかた。この場合聞きとり練習も兼ねることが必要であろう。	同上
3	指示・命令	仕事の上でいろいろな指示を出し、また命令を出す場合の言い回し、答えかたを学ぶ。	同上
4	指摘する	フランス流に適確な情報を与える場合、特にニュース、コメント、日常生活情報などの与え方を学ぶ	同上
5	復習と応用	1課－4課までのパターンを復習し、時や場所の副詞句を学ぶ。	同上
6	意見、判断の述べかた	まず自分の考え、意見を述べるための表現を学ぶ。	同上
7	賛意の表現	相手、あるいは第三者の意見に賛意を表し、あるいはそれを支持する言いかたをさまざまのニュアンスで表現できるように訓練する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	反論の言いかた	議論においては必ず反論が必要となる。時に西欧の人たちとの議論では反論の技術が必要となる。	福井芳男
9	疑い、保留の表現法	6, 7, 8課においてニュアンスをつける練習をするがそれをふえんして疑いなどの表現を加え、さらに論理立ての問題に触れる。	同　上
10	復習と応用	パターンを復習し、応用会話を通じて必要な合の手、成句を学ぶ。	同　上
11	感嘆文	11課－14課までは感情をこめた言い回しの練習になる。まずは感嘆文について学ぶ。	同　上
12	喜び、悲しみの表現	感情表現基本的なものは、喜び、悲しみである。これまでに学んだ平常の情報伝達、議論でも、これらの表現をどう生かすか考える。	同　上
13	感情の誇張	ここでは以上の感情表現のほかに単語の使用法によってどう感情を表わすかという語彙論的な側面も検討する。	同　上
14	皮肉の誇張	ここでは特に皮肉・反語の面を中心にして，いわば会話のテクニックについて考えてみる。	同　上
15	復習と応用	11課－14課までの復習とともに俗な表現、上品な表現という位相の問題に触れる。	同　上

＝フランス語Ⅱ－B2＝(R)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

書き言葉を中心として、社会、人文系のフランス語文献を読むよすがを作るための清読をおこなう。これは文学作品を読むために十分役立つであろう。特に新聞、雑誌での記事を読むための入門とし、フランス社会での重要事項『日常生活』『女性の（地位の）問題』『教育問題』をとりあげてフランス社会へのアプローチの鍵をそこに見出そうと考える。そして書き言葉への入門となればよいと考えている。現実の事象について考える力をつけることがフランス語の力をつけることになるのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	食事：新しい食うこと	フランス人の生活で最も重要なもののひとつが食事である。しかし、現代生活ではどう変わってきているのだろうか。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授）
2	食通の天国	現代のあらゆる変化にもかかわらず、フランス料理は依然としてフランス文明の最も重要な産物のひとつである。その中心にリヨンがある。	同上
3	フランス人の金銭感覚	「毛糸の靴下の中に」金貨をひそかに貯めているというのは、フランスについて一般的にもたれているイメージであるが、現代社会では、それがどうなっているであろうか。	同上
4	家族の変化	家族はしばしば糾弾されてきたが、多くの人がまだ執着しているものでもある。現代社会の中でフランスの家族はどうなっているのだろうか。	同上
5	バカンスによる大いなる断絶	バカンスはフランスでは大切な制度になっている。バカンスがどのようにフランス人の中に入りこんでいるか。この問題を考えることはますます発達するレジャー文明を考えることになる。	同上
6	生命を与える女性	女性の地位向上は20世紀後半、全世界での重要問題である。先進的な役割をしてきたフランスだが、どういうふうに問題をとらえているのだろうか。まず母性と女性の解放の問題がある。	同上
7	働く女性の問題	女性が働くときどういった問題があるのか。特に過労、心労は並たいていのものではない。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	女性の戦い(1)	女性解放の重要な担い手であり、女性問題省の大臣もやった、フランソワーズ・ジルーの手記から、まず女性の解放の基本問題に触れている部分をとりあげる。	福井芳男 井戸桂子
9	女性の戦い(2)	女性解放問題で、ジルーはシモーヌ・ド・ボーヴワールの立場を批判しているが、これは、問題のむずかしさをさらに明確化する。	同　上
10	女性の労働	総括として、女性の労働の状況を、働く女性たちがどう見ているか、という問題をとりあげる。	同　上
11	学校：人生についてのある種の概念	社会の根幹は教育にある。まずフランス人と学校との関連についての記事を見る。	同　上
12	秘かな選別	公式の選別（バカロレア）の他に、バカロレア内での格づけ、そして重要なリセへの優秀な生徒の集中化現象が見られる。	同　上
13	私学の新たな成功	フランスの公立絶対化がどうくずれているか、日本の現状とくらべて、たいへん興味ある現象が起っている。	同　上
14	エナ（E.N.A.）に入ること	フランスの高等教育で最も特徴ある、グランドゼコルの問題を見ていく。	同　上
15	5月の事件とその影響	68年5月、大学を吹き荒れた騒動とは何であったか。それはどういう影響を与えたかを見る。	同　上

＝ 中 国 語 Ⅰ ＝ （R）

〔主任講師：傅田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

やさしいスキットを読みながら、中国語の発音と文法の基礎を学習する。文法は全体の枠組みを見通しての把握を心がけつつ、中国語Ⅰで統語構造、品詞の機能の最も基本的な部分から始めて、中国語Ⅱに接続し、2個学期で基礎課程を終える予定である。その間、機能語を中心に基本的語集を習得出来るようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	第　1　課	四つの声調 単韻母(1) a，e 声母(1) b，p，m，f 声母(2) j，q，x	傅田　章 （東京大学教授）
2	第　2　課	声母(3) zh，ch，sh r，第三声の連続 声母(4) d，t，n，l，　主語と述語 複韻母(1) ai，ei，ao，ou，動詞と目的語 複韻母(2) an，en，ang，eng	同　上
3	第　3　課	軽　声 声母(5) g，k，h 修飾語　連用修飾語、副語 構造の重層 指示疑問　疑問詞疑問文	同　上
4	第　4　課	声母(6) z，c，s zhi，zi の韻母 断　定　動詞 shi（是） 状況の相　助詞 le（了），ne（呢）	同　上
5	第　5　課	単韻母(2) i，i で始まる複韻母 単韻母(3) u，u で始まる複韻母 単韻母(4) ü，ü で始まる複韻母 選択疑問(1)　肯定否定 bu（不）の声調変化	同　上
6	第　6　課	限定修飾語(1)　連体修飾語、助詞 de（的） 限定修飾語(2)　名詞句代理 当否疑問　助詞 ma（　） 推　量　助詞 ba（吧）	同　上
7	第　7　課	意志・勧誘　助詞 ba（吧） 感情の露出　助詞 a（啊） 助詞 a（啊）の連声 文の三層構造	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第　8　課	場所目的語　所在、移動動詞 zai(在)、 qu（去）など 二重目的語　授与動詞 gěi（給）など 形容詞述語(1) 人称代名詞　zánmen（咱们） 指示詞・指示代名詞	傅　田　　章
9	第　9　課	韻母 e　数　詞 韻母 er　基数と序数 限定詞－助数詞構造　yi（一）とyi（一），liang（　）と er（二） 数詞－助数詞、指示詞－助数詞、末尾桁助数詞省略、 yi（一）の声調変化	同　　上
10	第　10　課	疑問数詞　ji（几）と duoshao（多少） 完 了 相　動詞接尾辞 -le（了） 未　　然　副詞mei(you)（没（有）） 状況の相と動詞の相	同　　上
11	第　11　課	持　続　相　副詞 zài（在）、動詞接尾辞 -zhe（着） 経　験　相　動詞接尾辞 -guo（过） 選択疑問(2)　己然未然	同　　上
12	第　12　課	動作量補語(1)　動作の回数 動作量補語(2)　動詞の助数詞転用 動作量補語(3)　動作の期間 動作量補語と目的語	同　　上
13	第　13　課	動詞句補語を伴う動詞　néng（能）など 動作量補語(4)　性質の量	同　　上
14	第　14　課	文補語を伴う動詞　xiǎng（想）など 文目的語をとる動詞　gàosu（告訴）など 文補語と文目的語	同　　上
15	第　15　課	目的補語を伴う動詞(1)　使役動詞 qǐng（清）など 使役をいう動詞　jiào（叫）、 ràng（让）	同　　上

＝中国語Ⅱ＝（R）

〔主任講師：傅田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰに接続して文法の基礎の学習を続ける。文の核になる動詞句のやや複雑な形のものから、さらに複文へと進み、文法の大枠の学習を終える。また発音についても、音節の仕組みや発話の際のアクセント・イントネーションなどに及んで整理した理解をはかりたい。中国語Ⅱで一応の基礎課程の学習を終える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課	存在の表現 － 動詞 you（有） 現象描写 － “存現”文 個体叙述と現象描写 場所の提示 － 方位詞 shàng（上），lǐ（里） 目的補話を伴う動詞	傅田　章 （東京大学教授）
2	第2課	動詞句連用(1) － …lái（来）／qù（去） 動詞句連用(2) － lái／qù… 動詞句連用(3) － …-zhe（着）…	同上
3	第3課	前置詞句連用(1) － zài（在） 前置詞句連用(2) － bi（比） 事態の断定 － 助詞de（的）	同上
4	第4課	前置詞句連用(3) － dào（到） 前置詞句連用(4) － gēn（跟） 前置詞句連用(5) － 受身の表現 前置詞句連用(6) － gei（給）など	同上
5	第5課	包括限定(1) － lián（連） 包括限定(2) － yí cì yě（一次也）… 包括限定(3) － shenme dou（什么都）	同上
6	第6課	動作の評価　V-de（得）AP 結果の事態　V-de（得）S 動作結果結合(1)	同上
7	第7課	動作結果結合(2)　-shanglai（上来） 動作結果結合(3)　-de-（得），-bu-（不） 動作結果結合(4)　-buliao（不了）	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第　8　課	動作結果結合(5)　-dào （到） 動作結果結合(6)　-zhù （住） 動作結果結合(7)　-zháo（着） 動作結果結合(8)　-zài （在）	傅　田　　章
9	第　9　課	動作結果結合(9)　-jíle（极了） 試行相　動詞の重ね型 r　化	同　　上
10	第　10　課	起動相　　-qilai（起来） 継続相　　-xiaqu（下去） 経過相　　-guò　（过）	同　　上
11	第　11　課	接続(1)　yòu…yòu…（又…又…） 接続(2)　yī　…jiù…（一…就…）	同　　上
12	第　12　課	接　　続(3)　yàoshì…jiù…（要是…就…） 接　　続(4)　yīnwei…suǒyǐ　…（因為…所以…） 選択疑問(3)　A hǎishi（还是）B？	同　　上
13	第　13　課	接続詞と副詞 不定称接続　shéme…shéme…（什么…什么…） 描写形容詞　形容詞の重ね型 de（的）でつくられる描写修飾語	同　　上
14	第　14　課	名詞句述語 承前疑問 過度のle（了）	同　　上
15	第　15　課	不信疑問 付加疑問　…,bú shì ma？（…，不是吗？） 文・節末の助詞に近い語句　…de huà（…的活）	同　　上

＝ 中 国 語 Ⅲ ＝ （R）

～論理と接続関係～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰ、Ⅱで基礎課程を終了したので、この中国語Ⅲでは、やや長い文章や少しむずかしい作品を取り上げる。その中で、中国語の孤立語的性質の背後にある中国語の論理を把握すること。およびそれによって表現された中国的作品世界へのアプローチが読書力をつけるカギであると考える。これらを重点に学習して行く。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	有的人（ある人）	著名な現代中国の詩人藏克家が魯迅を記念して詠んだ詩。ここで中国語の主述関係、句と句節と節、文と文の接続関係、および文章全体の論理の問題を語法の観点から分析してみたい。	伊藤敬一（東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
2	魯迅詩文両則（魯迅の詩と文二つ）	第1課との関連で、魯迅の有名な旧体詩≪自嘲≫と散文≪；野草，題辞≫を読む。ここでも接続と論理の問題を考えると共に，参考としてこの二つの作品に関する評論の一部を収めた。なおローマ字　かち書きの規則と品詞分類をとり上げる。	同　上
3	牛郎织女 (1)（牽牛と織女・その一）	第3課から第6課は中国の代表的童話作家葉紹鈞（聖陶）が書いた七夕伝説（羽衣伝説）である。きわめて調子のよい名文で朗読や聞きとりの練習に適している。語法のポイントとしては、やはり文の接続関係と論理の展開の問題を論じたい。	同　上
4	牛郎织女 (2)（牽牛と織女・その二）		同　上
5	牛郎织女 (3)（牽牛と織女・その三）		同　上
6	牛郎织女 (4)（牽牛と織女・その四）		同　上
7	火车上的威风 (1)（バカ大将汽車に乗る・その二）	第7課から第10課は文革の初期1966年8月に、紅征兵の迫害を受けて非業の死をとげた作家老舎が、1959年頃ひそかに書き、未発表のまま、死後13年目の1979年、名誉回復後天人の手によって発表された一幕劇。老舎の初期のユーモア短篇小説≪馬　先生≫（1933年）を自分の手で改編脚色したもの	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	火车上的威风(2)（バカ大将汽車に乗る・その二）	で、きわめて中国的な作品であり、「かけあいまんざい」を思わせる会話は絶妙である。作品鑑賞と共に、ここでも中国語特有の接続と論理展開の問題を深める。 また、練習として、旧作の小説の一部もとり上げたい。	伊藤敬一（東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
9	火车上的威风(3)（バカ大将汽車に乗る・その三）		同上
10	火车上的威风(4)（バカ大将汽車に乗る・その四）		同上
11	夜（之一）（夜・その一）	第11課から第15課は中国の代表的な女流作家丁の円熟期とも云える延安時代の代表作'夜'を読む。作品鑑賞と同時に、ここでも論理と接続関係の問題を考える。なお、時代背景を知る上で、内容的に若干関連した同時期の問題作である随筆「三八節有感」の一部を練習でとり上げたい。	同上
12	夜（之二）（夜・その二）		同上
13	夜（之三）（夜・その三）		同上
14	夜（之四）（夜・その四）		同上
15	夜（之五）（夜・その五）		同上

＝ 中 国 語 Ⅳ ＝ （R）

～文革をめぐる中国人の心～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰで中国語の論理と接続関係を学んだので、その応用として、今回は比較的長い作品を読む。文革後の中国人の心を知るため、老世代を代表する　金と若い世代を代表する張抗抗の作品を選んだ。最近の新しい語　や全般的な語法の問題も随時とりあげる予定である。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	念蕭珊（之一）〔シアオ・シャンを憶う・その一〕	第1課から第6課は、中国文学界の長老であり、世界的にも著名な作家　金の作品である。 金は、「文革」中の迫害の中で、最愛の妻蕭珊を亡くした。その深い心の傷は読者の心を打たずにはおかない。そしてその傷が　金の現在の生き方の支えともなっている。	伊藤敬一
2	念蕭珊（之二）〔シアオ・シャンを憶う・その二〕		同　上
3	念蕭珊（之三）〔シアオ・シャンを憶う・その三〕		同　上
4	念蕭珊（之四）〔シアオ・シャンを憶う・その四〕		同　上
5	念蕭珊（之五）〔シアオ・シャンを憶う・その五〕		同　上
6	念蕭珊（之六）〔シアオ・シャンを憶う・その六〕		同　上
7	夏　（之一）	第7課から第15課は、文革中黒龍江の酷寒の農場に八年間下放した経験をもつ若い女流作家張抗抗の作品で、古い倫理的規範や共同体的な規制にひややかな目を向けるが、同時に祖国の未来と人間の個性の自由な発展を求める青春の血は、さわやかに躍動する。	同　上 （発音指導） 黄　麗　華

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	夏　（之二）		伊藤敬一 （発音指導） 黄麗華
9	夏　（之三）		同　上
10	夏　（之四）		同　上
11	夏　（之五）		同　上
12	夏　（之六）		同　上
13	夏　（之七）		同　上
14	夏　（之八）		同　上
15	夏　（之九）		同　上

＝ロシア語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語学習の基本を習得させる。発音と文字、基本的語彙の学習を中心にし、ついでやさしい会話的表現を軸に基本的な格変化、人話変化になじませると同時に、いかにもロシア的と思える表現法に興味をもたせることを主眼におく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 文字と発音に慣れる (1)	これは～です 疑問文 接続詞и とa イントネーション(1)	川端 香男里 安岡 治子 （東京外国語大学専任講師）
2	第2課 文字と発音に慣れる (2)	いる、ある 人称代名詞 否定の表現 Кто вы 「～も」の表現 イントネーション(2)	同上
3	第3課 文字と発音に慣れる (3)	名詞の性 所有代名詞（性と数） 名詞の複数形	同上
4	第4課	指示代名詞 этот、тот（性と数） 形容詞（長語尾形） 形容詞を使った日常表現 形容詞の形をもつロシア人の姓 形容詞の形をもつ名詞	同上
5	第5課 名詞と代名詞	動詞現在人称変化・第一変化（正副） 現在時制の動詞の意味 動詞を使った疑問文 副詞 動詞現在人称変化・第二変化（正副） по-русски の用法	同上
6	第6課	格 前置格の形態 前置格を要求する前置詞 в、на、о 動詞の現在人称変化（特殊変化など） 動詞の過去形 動詞 быть の過去	同上
7	第7課	生格の形態　у＋性格、 в、на＋前置格の表現 生格の用法　所有以外のу＋生格 所有の表現 否定生格	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第８課	対格の形態、時点を表すв＋対格 対格の用法、交通手段を表すна＋前置格 動詞の人称変化（特殊変化） 不定人称文 名前の尋ね方 идти と ехать	川　端　香男里 安　岡　治　子
9	第９課	与格の形態、идти(ехать)＋к＋与格 与格の用法、к＋抽象名詞を使った挿入句 動詞の人称変化（特殊変化）、通信手段を表す по ＋与格 出没母音　емотреть の用法 -ся 動詞	同　上
10	第１０課	形容詞短語尾形の形態、нра́виться の表現 短語尾形の用法 副詞として使われる短語尾形 無人称文の述語としての短語尾形 述語副詞と不定形が述語である無人称文 月の言い方	同　上
11	第１１課	動詞の体 完了体・不完了体の形成 体と時制 体の用法 動詞の人称変化（特殊変化）	同　上
12	第１２課	造格の形態、造格を要求する前置詞с 造格の用法 動作の様態を表す造語 職業・身分などを表す造語 造格を要求する動詞 述語の造格	同　上
13	第１３課	定動詞と不定動詞 不定動詞の用法 идти を使った表現 接頭辞をもつ運動の動詞 運動の起点を表す前置詞 из、с、от	同　上
14	第１４課	個数詞と順序数詞（1～30） 個数詞と名詞の結合 時間の表現 年齢の表現 月日の表現	同　上
15	第１５課	命令法 命令法の動詞の形態 命令法の体 пожа́луйстя の用法 関係代名詞 кото́рый кото́рый の用法	同　上

＝ロシア語Ⅱ＝(R)

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ゆっくりと基本を学習したロシア語Ⅰを受けて、主法的語彙的にも若干学習のスピードをあげて高度の文章表現になじませ、最終的には辞書の助けを借りて、比較的読みやすい古典、プーシキンの詩、チエーホフの短編が読めるようなレベルまで持って行く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課	動詞の体の復習 形容詞の長語尾複数変化	川端　香男里
2	第2課	定動詞・不定動詞 運動の動詞の特殊用法 前置詞の用法	同上
3	第3課	名詞複数の格変化 個数詞の格変化 数量を示す生格	同上
4	第4課	不定代名詞、不定副詞 定代名詞 再帰所有（物主）代名詞 свой	同上
5	第5課	否定代名詞 ничего́ と не́чего 否定副詞	同上
6	第6課	動詞の体の形成 сходить　съездить の用法 Выходи́ть とВыхо́дите？	同上
7	第7課	形容詞の比較級 副詞の比較級	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第８課	形容詞の最上級 副詞の最上級 год　человек　час と数詞・概数の表現	川　端　香男里 安　岡　治　子
9	第９課	能動形動詞 被動形動詞 形動詞から派生した形容詞・名詞	同　上
10	第１０課	２人称の命令形のつくり方 ２人称命令法の用法 １人称、３人称の命令法 быの用法	同　上
11	第１１課	関係代名詞 関係副詞 従属節	同　上
12	第１２課	副動詞現在 副動詞過去	同　上
13	第１３課	仮定法 仮定法の従属節 譲歩・認容の従属節	同　上
14	第１４課	ロシア語動詞の相（залóг） 被動相 -ся動詞の表現性	同　上
15	第１５課	語法	同　上

＝スペイン語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本授業は初級者に向けてあるので、まずはスペイン語に慣れるために平易な文を用いて、頻度の高い単語と基礎文法の学習をすることを主眼とする。そのため、できる限りの練習を行うが、その中心となるのが動詞の活用で、これをマスターすることがスペイン語初級学習の第一の主要課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	（Lección Drimera）	アルファベット／母音・子音＋母音の発音練習／単語による子音・母音の発音練習／あいさつ等簡単な表現（きまり文句）＜その1＞	山口羔正（放送大学助教授）
2	（Lección Dos）	単語による子音・母音の発音練習＜続き＞／2重母音・3重母音・2重子音／注意すべき綴字／音節の切り方・アクセント／あいさつ等簡単な表現（きまり文句）＜その2＞	同上
3	（Lección Tres）	名詞の性と数／定冠詞・不定冠詞／品質形容詞	同上
4	（Lección Cuatro）	固有名詞／人称代名詞の主格／直説法現在－動詞Ser／前置詞De	同上
5	（Lección Cinco）	直説法現在 － 動詞Estar／規則活用-AR動詞／直接補語／場所の副詞 CONVERSACION Amigos·61	同上
6	（Lección Seis）	直説法現在 － 規則活用－ER動詞、－IR 動詞／様態・量の副詞／基数詞＜その1＞／時刻 LECTURA Vida diaria·72	同上
7	（Lección Siete）	直説法現在 － 動詞Tener／Haberの特殊形Hay／所有形容詞／指示語 CONVERSACION En universidad·83	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	（Lección Ocho）	直説法現在 － 不規則活用動詞＜その１＞（yo の活用形が -go で終わる動詞／dar•ir•ver ）／接続詞＜その１＞／時の副詞 LECTURA Nuestra ciudad•94	山　口　恙　正
9	（Lección Nueve）	不規則活用動詞＜その２＞（語根母音変化動詞）／人称代名詞）／人称代名詞の対格／定冠詞＋形容詞による名詞化 CONVERSACION Problemas de la familia•102	同　　上
10	（Lección Diez）	不規則活用動詞＜その３＞（yo の活用形語尾が -zco の動詞／saber•caber ／不定詞語尾が -uir の動詞／活用形の -i-, -u- にアクセントのつく動詞）／人称代名詞の与格・与格＋対格／中性人称代名詞 LECTURA Internationalidad de mi familia•112	同　　上
11	（Lección Once）	人称代名詞の対格と与格＜続き＞／前置詞＜まとめ＞／人称代名詞前置詞格／基数詞＜その２＞ LECTURA Estadistica•122	同　　上
12	（Lección Doce）	不定詞の用法／ -mente のつく副詞 LECTURA Viaje en avion•131 CONVERSACION En el aeropuerto•132	同　　上
13	（Lección Trece）	Gustar および類似の動詞／序数／無人称文 LECTURA Como conocer Espana•139 CONVERSACION En el tren•140	同　　上
14	（Lección Catorce）	命令＜その１＞（肯定命令・否定命令、対格・与格を伴う命令）／感嘆文 LECTURA En la aduana•148 En la habitacion del hotel•148	同　　上
15	（Lección Quince）	再帰動詞＜その１＞／再帰代名詞 LECTURA Corta de mama hablando de un viaje•156	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	（Lección Dieciseis）	再帰動詞＜その２＞（相互・受身・無人称の用法）／復習 Ser•Estar およびEstar• Hay•Tener LECTURA Beisbol en Cuba•164	山口羔正 （放送大学助教授）
17	（Lección Diecisiete）	命令＜その２＞（nosotros への命令・再帰動詞の命令）／比較（優劣比較・同等比較・最上級・絶対最上級）／ CONVERACIÓN En un jardín de la plaza•173	同　上
18	（Lección Dieciocho）	直説法完了過去（規則活用動詞・不規則活用動詞＜その１＞／不定語・否定語 CONVERSACIÓN En una plaza de la ciudad•180	同　上
19	（Lección Diecinueve）	直説法完了過去（不規則活用動詞＜その２＞）／疑問詞（まとめ） CONVERSACIÓN Dos temas hispanicos •189	同　上
20	（Lección Veinte）	直説法不完了過去／接続詞＜その２＞ LECTURA El lago Titicaca y los aimaraes•196	同　上
21	（Lección Veintiuna）	過去分詞／直説法現在完了／受動態 LECTURA Deberes del ama de casa•203	同　上
22	（Lección Veintidos）	直接法未来／不定詞＜その２＞／接続詞 que CONVERSACIÓN Compras•210	同　上
23	（Lección Veintitres）	直説法過去完了／関係代名詞／関係副詞 donde LECTURA Teotihuacán•217	山口羔正

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	（Lección Veinticuatro）	直接歩可能／中性冠詞 lo／現在分詞 CONVERSACIÓN En el despacho de un abogado・226	同　　上
25	（Lección Veinticinco）	直説法未来完了／完能完了／形容詞・副詞の比較＜その２＞／縮少辞・増大辞 LECTURA Santiago de Compostela・232	同　　上
26	（Lección Veintiseis）	接続法現在＜その１＞（規則活用形・不規則活用形・名詞節での用法／知覚・放任の動詞 CONVERSACIÓN Patagonia・240	同　　上
27	（Lección Veintisiete）	接続法現在＜その２＞（副詞節・形容詞節・独立文での用法）／命令＜その３＞（間接命令） LECTURA El descubrimiento y la colonización de América・248	同　　上
28	（Lección Veintiocho）	接続法過去／直接話法・間接話法 CONVERSACIÓN por el amor o por el viaja・255 POESÍA Baladilla de los tres ríos・256	同　　上
29	（Lección Veintinueve）	接続法現在完了／条件文＜その１＞／直接疑問・間接疑問／不定詞＜その３＞ LECTURA La primera salida／La Andalucía trágica・262	同　　上
30	（Lección Treinta）	接続法過去完了／ comosi の表現／条件文＜その２＞／直接法と接続法 LECTURA El otoño del patriarca より・269	同　　上

＝ Japanese Ⅰ ＝　　（TV）

〔主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター第2研究室長）〕

全体のねらい

日本語のもっとも基本的な構造を、単なる詰め込みでなく応用可能な知識として正しく理解させ、それによって日本人の物の考え方、日本人の生活と文化を広く世界に紹介することを目的とする。

日本語を一見流暢に話しながら、その実正確に学んでこなかったような人々の「やりなおし日本語」としても活用されるように、コミュニケーションの流れの中で自然に使用できる表現を発展的に組み立て、有効な解説と適切な映像によって効率的に提示する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	STEP 1	UNIT 1 “Where are you going ?” UNIT 2 “Yes or No ?”	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子 国立国語研究所（日本語教育センター第2研究室長）
2	STEP 2	UNIT 1 “What are you going to do ?” UNIT 2 “Where did you see it ?”	同上
3	STEP 3	UNIT 1 The Topic of the Sentence UNIT 2 “What are you doing ?”	同上
4	STEP 4	UNIT 1 “Have you done it already ?” UNIT 2 “Can you wait a moment, please ?”	同上
5	STEP 5	UNIT 1 “Where are you ?” UNIT 2 “I have a problem” UNIT 3 Reading	同上
6	STEP 6	UNIT 1 “Dont do that, please” UNIT 2 “What sort of people ?” UNIT 3 Reading	同上
7	STEP 7	UNIT 1 “How many people ?” UNIT 2 “How much is it ?” UNIT 3 Reading	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	STEP 8	UNIT 1 “ It s a long night ” UNIT 2 On the Boundary and the Focus UNIT 3 Reading	アントニオ•アルフォンソ 西 原 鈴 子
9	STEP 9	UNIT 1 “ Which one is better ? ” UNIT 2 Introducing Plain Forms UNIT 3 Reading	同　　上
10	STEP10	UNIT 1 “ Mannequins that talk and walk ” UNIT 2 “ I like watching people ” UNIT 3 Reading	同　　上
11	STEP11	UNIT 1 Explanatory Sentences UNIT 2 “ I think so ? ” UNIT 3 Reading	同　　上
12	STEP12	UNIT 1 “ What did he say ? ” UNIT 2 “ I want to talk to you ” UNIT 3 Reading	同　　上
13	STEP13	UNIT 1 “ Give and you shall receive ” UNIT 2 “ I must do it ” UNIT 3 Reading	同　　上
14	STEP14	UNIT 1 Suru … Suru … Suru … UNIT 2 Doing and Becoming UNIT 3 Reading	同　　上
15	STEP15	UNIT 1 “ Come quickly ” UNIT 2 Clustering Verbs UNIT 3 Reading	同　　上

＝ Japanese Ⅱ ＝　（TV）

主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター第２研究室長）

全体のねらい

Japanese Ⅰ を基礎にし、より高度な日本語の知識を得、かつ、より複雑な表現の運用を習熟することを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	STEP 1	UNIT 1 Lining Up Facts and Causes UNIT 2 “Yes, but …” UNIT 3 Reading	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子 国立国語研究所（日本語教育センター第2研究室長）
2	STEP 2	UNIT 1 “What time do you get up ?” UNIT 2 When, Before and After UNIT 3 Reading	同　上
3	STEP 3	UNIT 1 “While there is life there is hope” UNIT 2 The Best Way to Learn a Language UNIT 3 Reading	同　上
4	STEP 4	UNIT 1 “Talk loud so that we can hear you” UNIT 2 Sometime, Somewhere UNIT 3 Reading	同　上
5	STEP 5	UNIT 1 Every Time, Everywhere UNIT 2 Anytime, Anywhere UNIT 3 Reading	同　上
6	STEP 6	UNIT 1 “It's quite the opposite” UNIT 2 This and That and That TNIT 3 Reading	同　上
7	STEP 7	UNIT 1 “Sensei, what does -TARA mean ?” UNIT 2 “That's a hypothetical question” UNIT 3 Reading	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	STEP 8	UNIT 1 Natural Outcomes UNIT 2 “Even a child can do that” UNIT 3 Reading	アントニオ・アルフォンソ 西原鈴子
9	STEP 9	UNIT 1 “Come as soon as possible” UNIT 2 “Make him do it. Let him do it” UNIT 3 Reading	同　上
10	STEP10	UNIT 1 “We call it Passive” UNIT 2 “We were caught in the rain” UNIT 3 Reading	同　上
11	STEP11	UNIT 1 Doing, Being, Becoming UNIT 2 On-going and Completed Facts UNIT 3 Reading	同　上
12	STEP12	UNIT 1 “I was about to leave, when …” UNIT 2 On the Looks of Things UNIT 3 Reading	同　上
13	STEP13	UNIT 1 Talking on the Nature of Things UNIT 2 “How du you explain that ?” UNIT 3 Reading	同　上
14	STEP14	UNIT 1 Discourse Referents UNIT 2 Discourse Adverbs UNIT 3 Reading	同　上
15	STEP15	UNIT 1 On the Familiar Language(A) UNIT 2 On the Familiar Language(B) UNIT 3 Reading	同　上

＝英語Ⅰ（'90）＝（R）
Rebuilding the Foundation of English

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
　　平賀正子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高等学校までに学習した英語の活性化をはかり、英語の基礎力を改めて養うことがこの科目の目標である。日本人にとって英語を難しくしている要因を、日本語と英語との比較と文法・語彙・構文の解説などを通して説明し、英語がより易しく使えるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	なぜ英語は難しいのかについて考える。この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	英文法の復習	基本的な英語の文法について復習する。文型、文の要素、品詞、態、話法、などについて、高等学校までに学習したことを再検討する。	同上
3	日本語からみた英語(1)	日本語と英語の文の構造の違いを、「省略」という点から探る。日本語では省略されるものが、英語では省略されずに表現されることが多い。日本語ではどのように省略がおこり、それが何故英語を学ぶ時の難しさにつながるのかについて説明する。	同上
4	日本語からみた英語(2)	日本語と英語の文や表現の構造の違いを、「曖昧さ」という点から探る。日本語には曖昧な表現が多いと言われているが、それが英語を学ぶ時、どのような影響を与えるのかについて述べる。	同上
5	日本語にない英語の特徴(1)	英語にはあって日本語にはない再帰代名詞、無生物主語などの文法的な特徴を再検討する。	同上
6	日本語にない英語の特徴(2)	英語にはあって日本語にはない仮主語－真主語文のような文の構文的な特徴を再検討する。	同上
7	重要な品詞(1)－動詞	英語の動詞と、動詞に関係する時制、態、などについて再検討する。また、動詞から名詞、形容詞への品詞交換の方法についても説明を加える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	重要な品詞(2)ー名詞および形容詞	英語の名詞と形容詞を再検討する。また、それぞれの品詞から他の品詞への交換についても説明を加える。	比嘉正範 平賀正子
9	語　　彙	いくつかの標準的な語彙表の活用法を中心に、語彙力のつけ方を検討する。	同　上
10	難かしい英文(1)ー長文	なぜ文は長くなるか、長文を短文にするにはどうしたらよいか、について説明し、難しい長文を易しく理解できるようにする。	同　上
11	難しい英文(2)ー省略文	省略はなぜおこるかについて説明し、省略のある英文になじませる。	同　上
12	難しい英文(3)ー美文・独創文	文学作品に見るような、美しい表現や独創的な表現がなぜ難しいかについて説明し、それらを理解するてがかりを与える。	同　上
13	難しい英文(4)ー丁寧文	英語に見られる敬語や丁寧表現の特徴について説明し、理解を深めさせる。	同　上
14	難しい英文(5)ー公式文書	公式文書独特の言い回しについて説明する。	同　上
15	ま　と　め	この科目で学んだことの総復習をし、知識を知識のまま終らせることなく、実際の英語の経験の中で役立たせるには、どのようにしたらよいかについて、今後の学習の方向を示す。	同　上

＝　英　語　V　＝　(R)

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）〕

全体のねらい

この科目の目的は(1)英語の長い文をいくつかの短い文で言い替えることができるようになること、その結果(2)構造の複雑な英文が読めるようになること、(3)日本に関する教材を読み、日本の歴史、社会、文化などについて英語で語れるようになることである。（この科目は英語Ⅱ－Ｂ１を改訂したものであり、従って、すでに英語Ⅱ－Ｂ１受講し単位を取得した学生の登録は認められない。）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	構造が複雑で難しい英文をパラフレーズする基本的な方法とこの科目の学習方法などを説明する。	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	Where the Japanese Came from	日本人はどこからやってきたかを人類学的な見地から論じる。	同　上
3	Japan Becomes Buddhist	仏教がどのようにして日本に伝来し、どのように受容されたかを説明する。	同　上
4	The Samurai	日本のかっての封建社会で重要な役割を演じたさむらい（＝武士）の発生、成長、特性などを述べる。	同　上
5	Modern Bureaucracy	日本の官僚制の特徴を説明し、官僚と政治家との関係を論じる。	同　上
6	Educating the Nation	寺小屋教育の発達、特徴、問題点などを説明する。	同　上
7	Japan's Two Constitutions	明治憲法と第二次大戦後の新憲法の特徴を説明し、日本とヨーロッパにおける立憲君主制の差を論じる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Government and Politics	明治維新後における日本政府の成立および議会政治と政党政治の発達と問題点を説明する。	比　嘉　正　範 ニコラス・ジョンティール
9	The family System	明治時代に法制化された日本の学族制度が、第二次大戦後どのように変化してきているかを説明する。	同　　上
10	Leisure	日本人にとって余暇とは何か、趣味とは何かを論じる。	同　　上
11	Industrial Revolution	十九世紀末に始まった日本の産業革命はどのようにして明治政府によって推進されたかを説明し、日本の産業化が成功した要因を探る。	同　　上
12	Immitators or Innovators ?	日本人は模倣能力に優れ、創造力に欠けていると一般に言われているが、人類の文化を発達させるのに模倣が重要な役割を果たしてきたことを論じる。	同　　上
13	Police and Crime	交番に代表される日本の警察は、外国の警察に比べて犯罪の予防と犯人の検挙に良い成績をあげているが、この要因が何であるかを探る。	同　　上
14	New　Town	第二次大戦後の急激な都市化がニュータウンと呼ばれる住宅団地を発達させてきたが、この新しい住宅街の特徴を説明する。	同　　上
15	An Ageing Society	高齢者が増えてきた日本における人口問題、出生率と育児の問題、老人の福祉の問題などを検討する。	同　　上

＝　英　語　Ⅶ　＝　（R）

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）〕

全体のねらい

この科目の基本的な目的は、受講者が学術的な内容の英文を読めるようになることである。そのための入門的な教材として、学問分野の紹介文を使うことにした。このような英文に慣れることによって論文調の文章を読む能力を養っていきたい。（この科目は英語Ⅱ－Ｂ２を改訂したものであり、従って、すでに英語Ⅱ－Ｂ２を受講し単位を取得した学生の登録は認められない。）

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	This lesson is an introduction to the goals, structure and content of the course, with advice on how to study for it and suggesions for further reading	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	Philosophy	This lesson is an introduction to Philosophy, the study of knowledge of and belief in reality	同　上
3	Anthroplogy	This lesson is an introduction to Anthropology, the study of humanity and human culture.	同　上
4	Archaeology	This lesson is an introduction to Archaeology the study of the remains of past human cultures.	同　上
5	Socioiogy	This lesson is an introduction to Sociology, the study of the individuals, groups and institutions that make up society	同　上
6	Psychology	This lesson is an introduction to Psychology, the study of mental processes and behavior	同　上
7	Learning	This lesson is an introduction to Learning, the process by which changes in behavior result from experience or practice	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Physics	This lesson is an introduction to Physics, the study of how the world around us is put together and how it changes.	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	Astronomy	This lesson is an introduction to Astronomy, the study of the stars, planets, and other objects that make up the universe.	同　上
10	Home Economics	This lesson is an intrtroduction to Home Economics, the study of the management of a household.	同　上
11	Health	This lesson is an introduction to Health, the stuby of physical, mental, and social well-being.	同　上
12	Ecoloqy	This lesson is an introduction to Ecology, the branch of biology that deals with relationships which living things have to each other and to their environment.	同　上
13	Business	This lesson is an introduction to Business, the activities of all commercial producers of goods and services.	同　上
14	Lew	This lesson is an introduction to Law, the rules under which a society is governed.	同　上
15	Statistics	This lesson is an introduction to Statistics, a set of methods used to collect and analyze data.	同　上

＝ドイツ語Ⅳ１＝（R）

〔主任講師：辻　　瑆（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

「ドイツ語Ⅲ」で抽象的な思考への糸口を把握したものと考え、「Ⅳ１」では印刷教材の量をふやしていきたい。印刷教材をreflexivに扱い、解釈する態度が求められる。世紀の転換期にミュンヘンに活躍した作家たちの作品を取上げるが、１９４５年のTh.マンの発言までをも視野に収めつつ、政治的状況が文学に複雑な影を落しているさまを言語表現の中に見ていく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Brief aus Japan	７年間の日本滞在を終えて、ドイツに帰国したニゲシュティヒ夫人にあてた手紙。南のミュンヘンで暮らす北ドイツ人は、何を感じているだろうか？	辻　　瑆（東京大学名誉教授）
2	Brief aus München	かつての芸術家居住区シュヴァービングは、今はただ不動産屋が跳梁するところ。かつての面影は全然ないとのむごいご託宣。	同　　上
3	Simpl　<1>	シュヴァービングの現在がそういうことであるなら、残された作品によって、私たちはこれを再生させなくてはならない。Ringelnatzが描く芸術家酒場ジンプル。	同　　上
4	Simpl　<2>	芸術家酒場ジンプルの続き。Ringelnatzはついにこのジンプルの座付詩人に昇格する。	同　　上
5	Gedichte von Ringelnatz und Mühsam	そのRingelnatzのひりりと皮肉の利いた可愛らしい詩と、ぐさりぐさりと人を刺すアナーキストMühsamの詩。	同　　上
6	Die Schutzimpfung　<1>	Wedekindは当時のシュヴァービングの大御所。芝居の自作自演もしばしば。そのWedekindがめっぽう不道徳な不倫物語を語って聞かせる。	同　　上
7	Die Schutzimpfung　<2>	こんな予防接種を女房にされたら、世の亭主たるもの生きた心地もしまいという、奇妙な話の続き。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Herr Fischötter <1>	伯爵家の生まれでミュンヘンのボヘミアンになった女流作家、Franziska Gräfin zu Reventlowの作品。	辻　　理
9	Der Herr Fischötter <2>	この作品、やはり世紀末の特徴をそなえていると言えそう。女性と死と動かすことのできない運命がその主題。	同　　上
10	Der Herr Fischötter <3>	かわうそ氏のせいで恋人を失った方もかわいそうだし、罪もないのに決闘で殺されるかわうそ氏もかわいそう。かわいそうな人がいて初めて物語ができ上がるのだろうか。	同　　上
11	Kriegserklärung	不遇な女流作家Lena Christの作品。第1次世界大戦が勃発したとき、なぜミュンヘンの人々はインテリをも含めて、あんなに喜んだのであろう。	辻　　理 大貫敦子 （学習院大学助教授）
12	Räterepublik	１９１９年、たったの一か月足らずのことであるが、ミュンヘンにはレーテ共和国の政府が誕生した。その首班となったErnst Tollerの語る思い出。すごい混乱。	同　　上
13	Flucht und Verhaftung	レーテ共和国の首班であったTollerは、今は厳しく追われる身。ようやくかくまってもらった家でも、裏切り者の女に密告されてしまう。	同　　上
14	Ohrfeigen und Hausverkauf	これはKarl Valentinの二つの作品。いやでも笑っていただかないと、ミュンヘンから化けて出そう。どこか氷りつくようなValentinの笑い。	辻　　理
15	Mit Thomas Mann	Thomas Mannはミュンヘンに住み、ミュンヘンを愛し、ミュンヘンで傑作を書きあげた人。そのMannがいかにミュンヘンをまもり、またドイツ文化をまもろうとしたか。	同　　上

＝ドイツ語Ⅴ＝（R）

〔主任講師：岩村行雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の学習にあたっては、できるだけ数多くの異なったスタイルを持った文章に接することが望ましい。その配慮をしながら、同時に教材の内容の拡散を避けるために、ワイマール共和国をテーマに据えて、歴史学者、政治学者、社会学者、さらには政治家などの文章を取上げて、読解力と表現力の訓練を行なう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Vom geist der Weimarer Repullik	ワイマール共和国を擁護しようとする理性的共和主義者たちは、左右からの激しい攻撃にさらされた。ワイマール時代の政治動向と政治思想を見ながら、反民主主義的思想の由来と特質を考える。	岩村行雄（東京大学教授）
2	〃		同上
3	〃		同上
4	Der Kaiser hat abgedankt	第一次世界大戦に敗れたドイツ皇帝は1918年11月に退位して、ワイマール共和国が成立する。ひとりの政治家がこの時代の政治や社会を精しく観察し克明に記録している。その日記によって、直接的に時代の様相を見る。	同上
5	〃		同上
6	Die Burger-familie	敗戦による社会の混乱は市民生活を直撃することになった。それにともなって、社会のモラル、とくに性モラルが急速に変化し、伝統的な家庭像もまた揺らいでいった。	同上
7	Fur die Befre-ing der Frau	民主主義思想が社会に浸透し、ヴィルヘルム時代の家父長制的な社会構造が揺らぎはじめるとともに、婦人解放問題も大戦前よりもさらに活発になった。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	Fur die Befreiung der Frau		岩村行雄
9	Benutze Fotoals Waffe !	1920年代は写真の技術・技法が著しく発達し、写真ジャーナリズムが発生したのもこの時代であった。とくにフォト・モンタージュの技法は、社会批判あるいは社会諷刺の武器として機能した。	同　上
10	…, daβ die Technikeres sind, die erst wahre Demokratie moglich machen	1923年、ベルリンでラジオ放送が開始された。当時の聴取者数は200であったが、1932年には400万を超え、ラジオ放送が新しいマス・メディアとしての地位を確立した。	同　上
11	〃		同　上
12	Traum und Trauma　USA	第一次世界大戦を機にヨーロッパの政治的経済的文化的比重が低下し、代ってアメリカが浮上してきた。1920年代のドイツにもアメリカの影響は大きく、アメリカニズムが社会の諸方面に浸透していった。	同　上
13	〃		同　上
14	Die hegende von den zwanziger Jahren	今日ワイマール文化の再評価が説かれ、ときにはこの時代にたいして＜黄金の２０年代＞という名もあたえられている。しかしこれははたして正当な評価なのであろうか。社会学者の反省を聞く	同　上
15	〃		同　上

＝フランス語Ⅳ＝（R）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語は理くつぽく、抽象的だと言われるが、それは文と文をつなぐ接続詞あるいはそれにかわる諸表現がかなり完備していることによる。フランス的な発想・表現を習得するためこれらの問題を中心に、発表、作文能力の涵養につとめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	原因・理由 (1)	原因・理由を示す接続詞、節を学び、作文能力の向上を図る。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（東京大学非常勤講師）
2	原因・理由 (2)	接続詞を使う節以外の表現により、いかにこの原因・理由を表わすか、さまざまの表現法を勉強する。	同上
3	結果 (1)	結果を表わす接続詞、節を学び、日本語のさまざまな言いかたをいかにフランス語にうつすかを習得する。	同上
4	結果 (2)	接続詞以外の表現により、いかに結果を表わすか、さまざまの表現手段を勉強する。	同上
5	復習 (1)	1～4課までの表現に応じた成句、ことわざなどを学び、表現の幅をつけることを目的とする。	同上
6	目的 (1)	目的を表わす接続詞、節を学習して、さまざまな表現法を学ぶ。	同上
7	目的 (2)	接続詞、節以外の表現法で、目的を示す表現を学び、それに応じた表現能力を習得する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	条件、仮定　(1)	条件・仮定を表わす、接続詞、節を学習し表現のさまざまなニュアンスの出し方を習得する。	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	条件、仮定　(2)	接続詞、節以外の表現法で、条件・仮定を表す。	同　上
10	復　習　(2)	6－9までを中心にした、成句、和文仏次など	同　上
11	比　較　(1)	比較の表現、円等接続詞　節を中心とする。ニュアンスを出すのに必要な表現を習得する。	同　上
12	比　較　(2)	さまざまな比較の表現、特に国等の表現を習得する。	同　上
13	対立、譲歩　(1)	接続詞・節による対立・譲歩の表現・接続詞の練習も含む。	同　上
14	対立、譲歩　(2)	接続詞・節以外の表現法	同　上
15	復　習　(3)	11－14を中心に成句、和文仏節	同　上

＝フランス語Ⅴ＝（R）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

文を読む訓練は必要であり、それも多様な文を読んで語いを増大させなくてはならない、しかも必要なことは現代に関し、ジャーナリズムが述べることがわかる必要がある。それを目標として語解練習を行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	イル・ド・フランス地方	パリを中心とするイル・ド・フランス地方の現状をさぐる。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	アリアーヌのこと	イル・ド・フランス地方は、先端技術の中心地を作りつつある。その中でフランスの誇る衛生アリアーヌについての話を読む。	同上
3	音楽都市とラ・ヴィレット	ラ・ヴィレット地区の再開発の一環として広大な音楽都市が作られている。前述するフランスの一環をさぐる。	同上
4	教育と読書	フランス・進展の健をにぎる青少年の教育、その中心としての読書教育について。	同上
5	香水産業の現状	フランスの産業のひとつの誇り、香水についても、アメリカ、日本の進出も著るしい、それに対しフランスはどう巻き返しているか。	同上
6	品質への戦い	品質を向上させること、フランスの産業はおくればせながら気がついた、フランスの革新の健をにぎるこの問題について。	同上
7	政治の黒子たち	若書を書いてやる黒子たちのこと。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	庭園	花、草木など庭いじりは、フランス人の情緒のひとつである。	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	地方化の問題	地方分権、地方の自主的発展は、フランスの重大課題である、その問題点について	同上
10	フランスの若者たち	現在のフランスの若者たちに関する調査をもとに、その傾向をさぐる。	同上
11	フランス料理の現況	フランス料理は、どんどん軽々料理になってくる。その現状を分析する。	同上
12	フランスのワイン	農業国フランスの切り札、ワイン製造の諸問題について	同上
13	フランスの女性	フランスの未来を担う女性たちは、かって女性解放の第一線にあった。彼女らは今？	同上
14	ヨーロッパ統合	∮9992年のヨーロッパ統合はどうなるのか日本にも影響を及ぼすヨーロッパの変統について	同上
15	フランス人であること	フランス人であることとは何かについて、フランス人も自身に問うている。	同上

＝スペイン語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

初めて学ぶスペイン語に早く馴れるために、平易な会話（国語）体の文を中心に、スペイン語圏の世界の日常生活のさまざまな場面でよく用いられる表現と初等文法を、種々の練習を通して学習していく。学習者は単に頭の中で理解するだけの「受身の学習」でなく、簡単なことをスペイン語で表現できるよう「積極的な」語学力をめざして勉強してほしい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	! Blenvenido!	発音練習、アクセント符号、人名（男性・女性）	山口羔正（放送大学助教授）
2	? Dónde eslás ahora ? ? Dónde cstá el hotel ?	動詞Esta－ その1、人称代名詞の土格、名詞の性と数、定冠詞、単語の発音練習	同上
3	? De dónde eres? ? Lstás contento aquí ?	動詞Ser－その1、 形容詞の語尾変化、estar－その2	同上
4	? Qué es eslo? Compramos unos libros	Ser－その2、名詞と形容詞の性・敬変化の一致疑問詞Que、 si とno、規則活用－AR 動詞直説法現在形）、不定冠詞	同上
5	? Qué lenqua aprende usted ?	規則活用－ER 動詞・－IR動詞	同上
6	Hay mucho tráflco en las Calles	動詞Haber の特殊形Hay、基数詞その1、疑問詞Cuanto、動詞 Iener－その1	同上
7	lenqo mucha hamber ? Qué hacemos tarde ?	Tener－その2、動詞Hacer、基数詞－その2、Tener que＋不定詞	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	? Qué hora es ? ?/\ qué hora sale este autobús?	時刻、動詞 Sallir、指示形容詞	山口羔正
9	? Adóndc vamos? ? Dóndc pongo mi cariera ?	動詞 Ir, Venir, Poner、 所有形容詞短縮形、 Ir ＋a・Venir＋aの表現	同　上
10	? Cuándo cmpicza cl curso ?	動詞 Empczar, Volvcr、指示代名詞、所有形容詞完全形、動詞に繋がる不定詞	同　上
11	No le oigo blen Le doy mi dlrección	動詞 Declr, Oir, Dar、 人称代名詞目的格その1	同　上
12	le lo pioo con todo ml corazon fs difícil explicársolo	人称代名詞目的格ーその2、動詞 Pedir, traer Ver、 Es＋形容詞｜不定詞、 Para・por・al｜不定詞の表現	同　上
13	No la conozco mucho. Me gusta la paella.	動詞 Conoccr, Sabor、 動詞 Gustar	同　上
14	? Cuándo te casas ?	再帰代名詞、再帰動詞ーその1	同　上
15	?Se quifan los zapalos en casa ?	再帰動詞ーその2	同　上

＝ スペイン語 Ⅱ ＝ (R)

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

すでに学んだ初歩的なスペイン語の知識を基礎に、スペイン語圏のさまざまなテーマを背景にした平易な会話・口語体の文を用いて、初級スペイン語の後半の学習を行なう。スペイン語Ⅰで見た通り、動詞の活用は初級スペイン語の学習において中心的な課題で、このスペイン語Ⅱでも直説法過去を始めとして接続法までいくつかの時制について練習を更に続ける。また、いままではほとんど単文であったが、このスペイン語Ⅱでは複文の基礎的なところを学習する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	?Cnándo llueve? El clima de España	無人称表現、単人称動詞	山口羔正 （放送大学助教授）
2	?Qué están haciendo los niños ? En una plazaleta	現在分詞、進行形、過去分詞、－menteのつく副詞	同上
3	Dicen que en su país se produce el mejor café. Geografía de Sudamérica	接続詞と複文、比較（優劣比較、同等比較、最上級、絶対最上級）	同上
4	Echale más sal Cocina españoia	命令－その1（Iu，Vosotrosに対する肯定・否定命令、人称代名詞目的格を伴う命令）	同上
5	Ahora，acuéstese usted ahí. El problema de salud	命令－その2（Vd，Vds.に対する肯定・否定命令、再帰動詞の命令）	同上
6	¿Estudiasteis mucho ? Las universidades antiguas	直説法完了過去　規則活用－AR，－ER，－IR 動詞、関係代名詞－その1	同上
7	¿Cuándo se construyó ? Ia Alhambra	直説法完了過去　不規則活用動詞－その1、関係代名詞－その2	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Lo que hice en las vacaciones. Acapulco	直説法完了過去ー不規則活用動詞ーその2、関係代名詞ーその3・関係副詞	山口羔正
9	¿Que pensaban cuando eran niños ? Un aspecto histórico hispano-japones	直説法不完了過去、不完了過去の複文	同上
10	Ellos llegarán pronto Zarzuela	直説法未来	同上
11	¿Ha estado usted en América Latina ? Las compañías mixtas	直説法現在完了（助動詞Haberの現在形）、受身	同上
12	Dijeron que saldrían al día siguiente. Guadalupe	直説法可能（過去未来）、過去の複文、直説法過去完了	同上
13	¿Quieres que bailemos? El Museo del prado	接続法現在ーその1（規則活用動詞・語根母音変化動詞1、名詞節／副詞節での用法）	同上
14	Es mejor que vengamos otra vez. El Museo del prado	接続法現在ーその2（不規則活用動詞2）	同上
15	¡Ojala que encontremos un piso que nos quste ! Costa del Sol	接続法現在ーその3（形容詞節／独立文での用法）、接続法過去	同上

＝保健体育＝（TV）

― 新しい人体論 ―

〔主任講師：平沢弼一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人は2本の足のうらで立つ。そこで、その足のうらに関与するさまざまな因子から、すべての動作の基本である直立能力を定量的に評価する。これをスタシオロジー（身体静止学）という。本講義はこのスタシオロジーの観点に立って「人」と「からだ」の関わりを解説する。なお毎回自己診断と調整のための基礎体操Medico physical Therapyを紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	見る人聴く人別の人	美しい人を見たり、美しい音楽を聞くと心のときめきを感じる。ここでは知覚の内省的把握が、健康の自己管理の基礎条件であることを中心課題とし、視覚と聴覚の分析能力の比較から、「見る人」から「聴く人」への転換について考える。	平沢弼一郎（放送大学教授）
2	息こらえ	「息こらえ」の時間の長短は、その人の、その時の身体的および精神的能力の総和である。これは心身の持久力を知るための最も簡便な方法である。運動負荷や姿勢変化にともなう実験結果と、長期間継続して測定した資料に基づいて解説する。	同上
3	偉人と健康	健全な精神ははたして健全な身体にのみ宿り、健全な身体には必ず健全な精神が宿るのだろうか。ユベナリスの言葉を出発点として、いわゆる偉人と呼ばれた24人の体格について考察しながら、心身の「健康」・「不健康」を考える。	同上
4	からだの形	人のからだの形はなぜこのようになったのだろうか。ここではソボッタ（J・Sobotta）の体表の地理図、サリウス（A. Vesalius）解剖図によって骨格の仕組みを学習する。また、カバラの思想によるセフィーロスのからだの部分の意味づけについて言及する。	同上
5	膝小僧	「膝小僧」とは膝関節のこと。この関節を中心に、脚の筋肉の起始部と停止部、神経支配とそのはたらきについて、実際に解剖をしている画面によって学習を展開してゆく。「膝小僧」は前方には曲がるが後方には曲がらないのはなぜか、も解明する。	同上
6	直立人の歩む道	ヒトはいつどのようなきっかけで、またどのような道のりをたどって「直立人」になったのだろうか。ヒト化（hominization）における「直立人」への進化の過程を系統発生学的見地から考察する。われわれ直立姿勢に完全に適応しきっているのだろうか。	同上
7	新生児の反抗	人は出生後約10か月でだれからも手ほどきをうけないで一人で立つことができる。その機序（要因と過程）の解明はいまだに明らかではない。ここでは出生直後の新生児の姿勢制御と神経発達との関連について個体発生学的見地から解説をする。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	か　ら　だ　ち	「からだ」の語源は、人が大地に両足を踏まえて立つさまを表す「からだち」（軀立ち）というやまとことばに由来する。「からだ」に関連する文字や言葉から、「からだ」の価値観の変遷について解説する。	平　沢　弼一郎
9	ス タ シ オ ロ ジ ー	アリストテレスの「動物運動論」から、からだの動的固定（Steady setting）の機序について解説する。スタシオロジーの原論、評価の方法、装置、応用面（平衡神経科学・整形外科学・神経内科学・神経眼科学）の現況について述べる。	同　上
10	日本人の直立能力	両足をきちんとそろえて立つロンベルグの姿勢を２０秒間とらせた時の重心図（重心動揺面積）から、日本人の直立能力について、年齢差、性差、環境差（地理的・社会的）、病経別、民族差を解説する。	同　上
11	左　足　と　右　足	左足と右足のあいだには、機能的な一側優位性（ラテラリゼーション）が存在する。左足は前進の方向性と全身の安定の支持作用、右足はスピードのコントロールと器用性の役割分担がある。また、左足は遺伝因子、右足は環境因子によることを解説する。	同　上
12	はだしとすあし	近ごろ全国各地で「はだし教育」がはじめられている。「はだし」と「すあし」の相異から、ここでは「足のうらをはかる」目的、方法、解析法、評価法について解説する。また、「足とはきもの」の問題についてもふれてゆく。	同　上
13	立つことと歩くこと	ヒトは立つことができてはじめて歩くことができる。ヒトは片足歩行である。正常な歩行はその重心軌跡がゆるやかなサインカーブを描く。脳性麻痺患者の歩容から、「立つこと」と「歩くこと」の関連を解説する。	同　上
14	ふんぞりかえった日本人	昭和５２年から日本各地の遺跡から沢山の古代人の足跡が発見された。この足跡から日本人の立ち構え（身構えと気構え）を考察したところ、平安時代あたりから変わったことが推定される。縄文晩期から年代を追ってその変化を解説する。	同　上
15	現　代　人　の　足	この20年くらいのあいだに、現代人の踵が丸くて大きくなっている。これは重心位置の後退現象を物語る。もしこのことが直立能力の衰退であると考えることができるとすれば、ことは重大である。人類の存亡の危機について論説を試みる。	同　上

＝生　活　史＝ (R)

〔主任講師：中鉢正美（慶應義塾大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代の生活史をそのミクロとマクロの視点から明らかにして生活をめぐる諸問題が直面している転換点を討論する為の素材を提供したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活史、生活学、生活構造論	広義の両方についてふれる。生活構造論は特定の社会階級の発達と変動を扱う。生活学は日本の急速な近代化過程に於ける主要な生活問題の生成とその安定化への動向を検討する。	中鉢正美（慶應義塾大学名誉教授）
2	マクロとミクロの生活史	生活学は日本の近代化過程に於ける生活の発展及び安定化に就いての学際的研究であり、生活史は特定の個人を典型とした生活近代化の追跡である。両者はそれぞれ密接な関わり合いをもっており、その問題点が明らかにする。	同上
3	共同体の生活史	生活史の原点は、家族、職場といった人々が直接関わり合う共同体的な集団である。とりわけ夫婦や親子がその生活を共有するためには一定の対話や相互行動を繰り返す過程が重視されなければならないことを解説する。	同上
4	文書記録の生活史	共同体は生活の直接的経験を相互に伝達し合って生活を続けるが、これを第三者に伝達し合う為には文書による記録の必要がおこる。関接的な伝達手段による生活史は近代社会に於ける生活史研究の基本型を構成するものといえる。	石毛直道（国立民族学博物館助教授）
5	都市の生活史	共同体の生活史が村落を基礎とするのに対して、都市は相対的に新しい生活様式を構成する。この都市の生活様式について解説する。	川添登（建築評論家日本生活学会理事長）
6	産業化と生活史	十九世紀産業都市の発達によって近代社会は全く新しい様相を呈した。産業都市は都市生活生活一般についてもこれに対する新しい対応をせまることとなった。この産業化との関わりを解説する。	副田義也（筑波大学教授）
7	諸文化の生活史	生活史とは、ある社会全体の生活が、時代によってどのように変化してきたかという意味と特定の社会の特定の時代に個人がどのように生きたかを記録したものをいう場合とがある。ここでは二つの場合を考え合わせて解説する。	原ひろ子（お茶の水女子大学学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	意識と無意識のかかわり	人間は無意識的に繰り返される日常的生活の中で一定の生活構造を形造り、やがて産業化による社会的変化に直面して新しい文化の諸関係を創造すべく模索を始める。この無意識的な日常生活と意識的な非日常的模索との関わりを精神分析学的諸研究を手がかりとして解明する。	中鉢正美
9	衣食住の生活史	労働力の再生産を行う主体である人間の近代的生活がどのように発生し展開されて行ったかを、近代生活の中心的な部分である衣食住から考察してゆく。	同上
10	医療・教育・住居・福祉の社会化	現代社会の発達につれて、生活の社会的共同消費の部分が発達してきた。そこで社会的な共通経費としての医療や教育・住居・福祉の問題について解明する。	同上
11	日本の生活史・1－1 明治維新～第2次世界大戦までの生活水準	幕末から明治初年において食糧の生産がその生活水準の約半分に達していた。第1次大戦後の近代化と共にこの水準は約3割に変化し、第2次大戦と共に再び嘗ての水準に迄転落した過程を概説する。	同上
12	日本の生活史・1－2 第2次世界大戦以降の生活水準	第2次大戦後ほぼ10年の間に生活水準は戦前の高さに回復した。その他20年間戦後日本経済の高度成長と共に現在のヨーロッパ並みの高さに迄回復し食糧生産はその2割内外にまで低減したことを概説する。	同上
13	日本の生活史・2－1 明治維新～第2次世界大戦までの人口変化	明治初期の人口は3700万人前後であったが、1930年代には8000人台を超えたが第2次大戦によって7200万人に縮少をした。戦後のベビーブーム以後、人口のピラミッドが拡大から縮少に転換する迄を一つの時期として説明する。	同上
14	日本の生活史・2－2 第2次世界大戦以降の人口変化	ベビーブーム以後の人口増加率は拡大から縮少に転化したが、人口の高齢化現象が現れてきた。人口総数は一億二千万人に達し、やがてその絶対数が減少の過程に入ろうとしている状態を説明する。	同上
15	「生活史」の総括	日本の生活水準が上昇し人口の増加が頂点に達した現状に於て、現代生活の再構成がせまられている事情を参加者を交えて討論したい。 4人の聴講者の感想	同上

＝人間と社会環境＝（TV）

〔主任講師：大橋　力（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

複雑なからだとこころを持つ生き物・人間と、その人間たちの多岐にわたる活動のステージになっている社会環境とについて、情報環境学の立場から包括的に学ぶ。動物行動学・分子生物学などの新しい生物学、生態人類学の諸領域、システム論・制御論などの情報科学を主要な学問的基盤におき、実際的に論を展開する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	"人間と社会環境"についてどう学ぶか	人間の社会行動の多様性を的確に捉えるためには専門分化した学問は限界が大きい。その限界を打破する新しい学問のひとつとしてこの科目で起用する情報環境学について、物質・エネルギー・情報の三つの次元から有機的に対象に接近する方法論を述べる。	大橋　力（放送教育開発センター教授）
2	生命と環境	まず、生命とは何かについて、自己増殖オートマトンの理論を出発点に説明する。次に地球型生命の特徴と地球の生態系について述べる。さらに、生命主体と、それを囲む環境との関係について、システム理論を導入して整理を行う。	同上
3	環境としての社会	生き物の中には、特別な秩序を持った群れをつくるものがある。その群れ一種社会一は生き物にどのような利益をもたらすのかを考える。こうしてつくられる"社会"を、新たに造成された環境として捉え、その構造・機能について検討する接近法を述べる。	藤井宏一（筑波大学教授）
4	社会をつくる動物たち	動物の中には、さまざまな社会をつくるものがある。その多様な姿について、動物行動学の観点から整理して学ぶ。また、動物の社会行動の過程を制御している生得的解発機構の理論等についても知識を得る。さらに、これらの原則が人類にもあてはまることを知る。	日高敏隆（京都大学教授）
5	人類社会だけの特異な多様性	社会をつくる動物たちを見ると、その社会の構造は種ごとに決まったパターンを持っていることがわかる。ところが人類だけは、きわめて多種多様な社会を生み出してきた。この多様性を生態人類学の観点から分類し、概観してみる。	掛谷　誠（弘前大学教授）
6	自然性を重視した社会とその環境	さまざまな人類社会の中には、生存上、人間の持つ生物としての自然性を比較的重視したライフスタイルを維持してきたものがある。発展よりは安定を志向する社会といえる。その代表例である狩猟採集社会について、実際のフィールドワークに基づいた知識を得る。	市川光雄（京都大学助教授）
7	加工性を重視した社会とその環境	人為的な加工とその蓄積に高い価値をおく社会がある。安定よりは発展を志向する社会といえる。いわゆる文明社会は総じてこのカテゴリーに入る。このような発想を持った社会システムの本質を探り、そこに生まれる環境の特性について検討する。	樺山紘一（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	棲みわけ型"の社会・非棲みわけ型"の社会	いわゆる"棲みわけ"は地球上の生物社会の原則といえる。ところが、人類では、この原則が守られている"棲みわけ型"の社会だけでなく、これを放棄した"非棲みわけ型"の社会が存在する。この社会の生態系に及ぼす影響、および環境特性について論じる。	大橋　力
9	本来と適応	すべての生命は、情報物質"核酸"に書き込まれたプログラムの指令下におかれている。そのプログラムには、基本的なライフスタイルに対応する"本来"のものと、状況の特殊化に対応する"適応"のためのものとがある。この二重構造と社会環境との関連を検討する。	村上和雄（筑波大学遺伝子実験センター長）
10	人間社会のシステム化機能する二つのプログラム	種社会をつくる動物たちの社会行動のプログラムも遺伝子の支配下にあり、人類もその例外ではないと考えられる。一方人間社会には法律、戒律など社会行動のもうひとつの規範ープログラムーが存在する場合がある。この両者が一致しない社会の環境を論じる。	大橋　力
11	人間の生物特性と社会環境との不適合(1)　物質・エネルギー・環境について	人間の生物特性は、その柔軟性の範囲を含めて、遺伝情報の支配下にあり、ほとんど固定されている。それと現実の社会環境との間に無視できない不一致が発生し、持続すると、社会は存続をおびやかされる。この問題を物質・エネルギー面について検討する。	岩城英夫（筑波大学教授）
12	人間の生物特性と社会環境との不適合(2)情報環境について	人間の心は脳という物質機械の活動に他ならない。脳は情報代謝装置であり、環境からのある種の情報入力で打撃を受けるだけでなく、ある種の情報欠損によっても異常を呈する。社会の情報環境が人間の脳にとって不適合になった場合の病理現象について検討する。	小田　晋（筑波大学教授）
13	自然性と加工性との調和を重視した社会とその環境	現存する多種多様な人間社会の中に、自然性と加工性との両者の調和を重視する発想を持つものが少数存在する。この種の社会の環境は、現状況下にあっても人間生存とのかなり高度な適合性を示している。実例にのっとって、このような社会環境について知識を得る。	河合徳枝（国際科学振興財団専任研究員）
14	社会の自己組織化を導く"情動"の役割	自然性と加工性との調和に成功している社会のひとつの特徴として、情動、ことにパフォーマンスの誘起する快感が社会の結集や葛藤緩和に有効に機能している。自我の制御と利他行動の活性化とを通じてシステム化をもたらす情動のメカニズムについて論じる。	猪原真知子 河合徳枝（筑波大学附属中学校教諭）
15	新しい調和の発見のために	加工性重視社会の頂点に立つ科学技術文明の社会環境は特に精神世界の面でけわしい限界に直面している。この危機の当面の打開策として人間に適合した情報環境の再建を欠かすことはできない。そのために精神活動領域における自然性と加工性との調和の道を探る。	大橋　力

＝家庭の本質＝(R)

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

社会の最小単位集団である家族、そして、その周縁概念である「家庭」を、歴史的、同時的にとらえ、きわめて今日的な課題としての家族、家庭の諸問題を考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家族の発生と進化 (1)	この2回の講義で、生物進化のなかでの家族の発生と進化を、とりわけ霊長類の行動をつうじて検討し、生物社会のなかでの人間の「家族」の特性を位置づける。	伊谷純一郎（京都大学教授）
2	家族の発生と進化 (2)		同上
3	家族の構成と構造 家族とは何か (1)	人類の諸文化のなかで、「家族」の観念はきわめて多様な意味をもち、また、家族構造じたいも、相対的な性質のものである。この3回の講義をつうじて、さまざまな文化のなかでの家族の類型、その社会的機能などについての基礎概念を学習する	中根千枝（東京大学教授）
4	家族内の人間関係 家族とは何か (2)		同上
5	配偶者と親子関係 家族とは何か (3)		同上
6	家から家庭へ 家族から家庭へ(1)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直（京都大学教授）
7	家族の析出 家族から家庭へ(2)		同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭の未来 家族から家庭へ(3)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直
9	近代化の秩序モデル 日本の近代化と家庭(1)	家族の中核にある「結婚」の問題、そして、そこから派生する結婚観、家族観を日本の近代のなかでさぐり、家族をめぐる思想史を学習する。	神島二郎 （立教大学教授）
10	家族主義の由来 日本の近代化と家庭(2)		同上
11	家庭と婦人教育 家庭の誕生 (1)	「家庭」ということばは、英語のhomeを福沢諭吉が翻訳したものといわれている。ここでは明治以降の婦人雑誌や生活運動をつうじて「家庭」が誕生し機能しはじめた経緯と現状をとらえる。	加藤秀俊 （放送教育開発センター所長）
12	家庭内の緊張関係 家庭の誕生 (2)		同上
13	近代日本の「家」と文学(1)	近代文学は、ある意味で、イエをめぐる個人の心理的葛藤の歴史であったといえる。この講義では、近代日本の文学作品のなかに「家」や「家庭」がどのようにえがかれてきたかを探求する。	多田道太郎 （京都大学教授）
14	近代日本の「家」と文学(2)		同上
15	家族の将来	都市化の進行、人口移動の加速化、さらに人口の高齢化などによって家庭は変貌しつつある。これまでの14週にわたる講義をふまえながら、家族と家庭の将来を展望する。	加藤秀俊

＝家　族　関　係＝（R）

〔主任講師：森岡清美（成城大学教授）〕

全体のねらい

1. 戦前から戦後をへて現在に至るまでの、日本家族の構造と機能にみられる変化を明らかにする。
2. 日本の家族関係の現状を、外国の家族関係と比較して考察し、その特色を明らかにする。
3. 高齢化社会における家族関係の問題点を探り、それへの対策を検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家　族　と　は	1.家族は集団　2.法令用語としての家族　3.日常語としての家族　4.家族の定義　5.形態面の特色　6.関係面の特色　7.機能面の特色	森岡清美（成城大学教授）
2	家族・家庭・世帯	1.家族　2.家庭　3.世帯　4.家族・家庭・世帯	同　上
3	核　家　族	1.家族の要素的単位　2.核家族説　3.小集団としての核家族　4.核家族の二面性　5.核家族の世代関係	同　上
4	家族の類型と分類	1.居住規則と家族の類型　2.夫婦家族制　3.直系家族制　4.複合家族制　5.家族類型の地域的分布　6.類型・典型・分類　7.家族の分類　8,類型と分類との関係　9.家族の再分類	同　上
5	核　家　族　化	1.核家族化　2.家族と世帯　3.産業化と核家族化　4.日本の核家族化の歩み　5.核家族化の諸要因	同　上
6	小　家　族　化	1.小家族、小家族化　2.家族規模の近似値　3.わが国の小家族化　4.小家族化の国際比較　5.小家族化の諸要因	同　上
7	家族のライフサイクル	1.ライフサイクルの発想　2.ライフサイクル研究の発端　3.家族のライフサイクル　4.ライフサイクルの捉え方　5.発達段階の設定　6.直系制家族のライフサイクル　7.複合制家族のライフサイクル	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ライフサイクルの変化	1.女子の一生の変化　2.日本におけるライフサイクルの変化　3.ライフサイクルの変化によって生じた新局面　4.ライフサイクルの問題点　5.ライフコースの発想	森岡清美
9	異性交際	1.相補的な二つの性　2.異性交際の発達　3.デイトの機能　4.デイトの逆機能　5.異性交際の実態　6.デイトの開始年齢　7.異性交際と性モラル	望月　崇 （大正大学教授）
10	配偶者選択	1.配偶者選択の範囲　2.配偶者選択の基準　3.規範－相互作用説　4.欲求相補説　5.配偶者選択の過程	同上
11	結婚	1.結婚の意味　2.結婚の機能　3.恋愛結婚の増加　4.結婚相談所の繁栄　5.高い結婚率　6.初婚年齢の変化	同上
12	離婚・再婚	1.離婚の意味　2.離婚に対する社会の態度　3.日本の離婚の動向　4.離婚の社会的背景　5.離婚原因　6.再婚の状況	同上
13	家族の危機	1.家族危機とは　2.ＡＢＣ－Ｘモデル　3.ジェットコースター・モデル　4.二重ＡＢＣ－Ｘモデル　5.マリッジ・カウンセリング	同上
14	子どもの社会化	1.親子関係と社会化　2.社会化としつけ　3.社会化の過程　4.現代家族の問題点	同上
15	共働き夫婦	1.女子の就労の動向　2.共働きの増加　3.共働きの理由　4.共働きの悩み	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	老親の扶養	1.家族機能としての老親扶養関係　2.何歳から老人か　3.老人の欲求とその充足　4.老親扶養の三側面と三種の居住関係　5.老親扶養の二類型　6.現代日本における同居型扶養の動向　7.現代日本における近居型扶養の登場	森岡清美
17	家族と住宅	1.家族と住宅　2.シェルターとしての住宅　3.戦後日本における住宅の量的改善　4.大型住宅と小型住宅　5戦後日本における住宅の質的変化と改善　6.和式茶の間の消失と洋式居間の確立	同上
18	家族と食生活	1.家族と寝食の共同　2.寝食と家族機能　3.家族は日常的会食の単位　4.台所と食事室　5.家計費のなかの食料費　6.戦後の食生活内容の変化　7.電気冷蔵庫の普及と食生活への影響　8.はたらく主婦と加工食品　9.外食および家庭内外食の増加	同上
19	家族と家計	1.家計の収支動向　2.階層と家計構造　3.中流家庭の家計　4.生活設計の意味　5.家計と生活設計	望月嵩
20	家族と余暇活動	1.余暇の意味　2.余暇活動の活発化　3.余暇意識　4.家族と余暇行動	同上
21	家族の役割構造	1.家族の構造　2.家族的地位　3.家族的役割　4.役割期待・役割認知・役割遂行　5.役割取得・役割葛藤　6.役割遂行による欲求充足　7.生物学的差異が役割配分を規定するか？　8.役割配分の規定要因　9.役割構造の変化	森岡清美
22	家族の勢力構造	1.地位の序列　2.権力の序列　3.権威の序列　4.勢力の序列　5.勢力構造の実態　6.夫婦の勢力関係　7.親子の勢力関係　8.勢力構造を規定するもの　9.勢力構造の変化	同上
23	家族の情緒構造	1.情緒とは　2.家族の情緒構造　3.夫婦の伴侶性　4.親子間の情緒	望月嵩

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	家族と先祖	1.先祖とは　2.先祖の類別　3.死者と先祖　4.家における先祖とその祭祀　5.家的先祖祭祀の機能　6.家的社会での非家的先祖祭祀とその機能　7.家の変化にともなう先祖観の変化　8.仏壇保持率の推移　9.先祖祭祀の変化	森岡清美
25	親族関係	1.親族・親族関係・親族集団　2.親族とは　3.親族の類別　4.親族関係　5.親族集団　6.夫婦家族制と異居近親関係　7.直系家族制の場合、とくに日本の同族と親類について　8.親族関係の変化	同上
26	家族と地域社会	1.家の社会的被拘束性　2.地域社会とは　3.村落的社会と家族　4.都市的社会と家族　5.家族の変化と地域社会　6.地域社会の変化と家族　7.都市的社会と住民運動	同上
27	家族機能の変化	1.家族の機能　2.オグバーンの家族機能縮小説　3.機能縮小のより積極的把握　4.産業化と家族機能の変化　5.社会の変化でなぜ家族が変わる？　6.パーソナリティー機能の分化　7.家族の機能復権　8.家族の機能はほんとうに縮小したか？	同上
28	家族意識の変化	1.家族意識とは　2.家族意識は果たして捉えうるか？　3.「家族意識の変化」の捉え方　4.子がない場合養子は必要か？　5.先祖を尊ぶか？　6.どの子に財産や事業を相続させるか？　7.老後を子どもに頼るつもりか？	同上
29	家族の未来	1.家族の変動にたいする悲観論と楽観論　2.未来への要請　3.過去の未来家族論　4.家族は消滅するか？　5.ソ連邦の家族政策　6.家族は存続しうるか？　7.日本の家族はどうか？　8.家族はどこへ？　9.家族のゆくえと政治	同上
30	家族福祉と社会福祉	1.福祉とは　2.家族福祉と親族福祉　3.企業福祉　4.社会福祉と家族福祉　5.福祉の最小性と最大性　6.福祉と幸福　7.家族の福祉機能と社会福祉との関連	同上

＝家　庭　の　経　済＝（R）

〔主任講師：今井光映（金城学院大学教授）〕
古郡鞆子（明海大学教授）

全体のねらい

1.家庭経済は家庭・個人の自己実現という目的価値を実現するために、生産・消費・貯蓄の経済行為を営むがそれを経済全体の中でシステム的にとらえる。

2.家庭経済の行為をシステム的にとらえる場合、とくに生活する者の視座・視点で主体的にとらえることによって、中核的なエコシステムである家庭経済の本質的な機能と位地づけを浮きぼりにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭経済の本質意義と機能	家庭経済の本質意義　国民所得を決定する4つの柱　個人消費と国民経済　民間投資と国民経済と家庭経済　金融政策と国民経済と家庭経済　財政政策と国民経済と家庭経済　税政策と国民経済と家庭経済　国民経済の成長の質と家庭経済の行動の質	今井光映（金城学院大学教授）
2	家庭内生産と家事労働	家計の存在意義　家庭内生産とは何か　家計生産の特徴　家計サービスのコスト　家庭内生産と相互依存関係	坂井素思（放送大学助教授）
3	家事労働の経済的評価	家事労働の変化　家事労働の評価　これからの家事労働	古郡鞆子（明海大学教授）
4	労働と家庭経済	労働供給と稼得の二重機能　家内的分業　労働供給と家内的分業　労働供給量の決定　女性労働の供給　家計のブーリング機能	坂井素思
5	流通機構と家庭経済	流通機構問題　生鮮食料品の流通と家庭経済　産直と家庭経済　衣料品の流通と家庭経済　医薬品・化粧品の流通と家庭経済　再販制度と家庭経済　家庭経済の価格形成参加権の自覚	今井光映
6	消費の理論	選好の自律性と他律性　経済学の伝統的アプローチ　依存効果　誇示効果　記号的消費	坂井素思
7	家庭経済の生活内容	生活水準　家計の収支構造　共働き世帯の増加と家計の変化　消費のサービス化	古郡鞆子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家計のライフサイクルと経済管理	家庭での生活設計　ライフサイクルと生活設計　お金と利子	古郡靭子
9	貯蓄と家庭経済	貯蓄の意味　貯蓄の目的　貯蓄・負債の内容　高い貯蓄率	同上
10	家計の資産選択	資産保有の意味　なぜ資産を保有するのか　不確実性の存在　家計の資産選択　権力・名誉と資産保有	坂井素思
11	物価と家庭経済	物価についての基本的な概念　インフレと家計　物価抑制のいろいろ　物価上昇が家計に及ぼす影響　物価の安定こそ生活設計のカギ　円高の物価への波及効果	今井光映
12	税と家計	なぜ税は必要なのか　公共財・サービスの供給　所得の再分配　経済の安定化　課税原則	坂井素思
13	長寿社会と家庭経済	長寿社会の実態　長寿社会の中での生活設計　長寿社会と年金の改正　老後生活資金の設計　企業年金の自覚　個人年金の自覚　人生80年時代の生活設計にこそ必要なシステムの考え方　長寿社会と社会的生活設計	今井光映
14	社会構造の変化と家庭経済	産業化とはなにか　産業化への適合　産業化との拮抗　家計の柔軟性	坂井素思
15	これからの家庭経済を考える	安定成長経済社会と家庭経済　付加価値社会と家庭経済　高負担社会と家庭経済　サービス化社会と家庭経済　キャッシュレス社会と家庭経済　長寿社会と家庭経済　高度情報化社会と家庭経済　国際化社会と家庭経済	今井光映

＝ 家 庭 の 経 営 ＝ (R)

〔主任講師：原ひろ子（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

家庭のあり方を比較文化的に考察することによって、人間にとって、家庭や家庭のあり方が多様であることを認識し、その上で、現代日本の家庭を、それをとりまく環境との関連において検討する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	家族の多様性と普遍性(1)	人間の諸文化に見られる家族の多様性を眺め、人間にとっての家族の普遍性は、どのようにとらえれるかを考える。	原 ひろ子（お茶の水女子大学教授）
2	家族の多様性と普遍性(2)	人間の諸文化に計られる家族の多様化を眺め、人間にとっての家族の普遍性は、どのようにとらえられるかを考える。	同 上
3	家 族 と 家 庭	欧米や日本の近代史のなかで、収入を得る場としての職場と、消費の場としての家庭が分離し、家族という人間の制度のもつ機能が限定されてくる変貌過程を考察する。	同 上
4	日本文化の中の家庭	夫と妻、親と子、祖父母と孫など、家庭の中でさまざまな立場にある、個人の自己実現についての欲求が高まってきている今日、それぞれの欲求を持つ個人の自己実現を促しつつ、サービスや情報や心のつながりが保証される「生活の港」としての家庭をどのように経営していくかについての可能性の巾を考える。それと同時に家庭をめぐる、さまざまな「危機」への対応を考える。	同 上
5	家事労働と市場労働	家庭における家事労働と、労働市場における労働とが、どのようにとらえられてきたか、を考える。	篠 塚 英 子（お茶の水女子大助教授）
6	家 庭 と 経 済	今日の家庭生活の経済的基盤が社会の経済システムとどのように関連しているかを眺める。	同 上
7	女性の働き方の変化	日本における男女雇用機会均等法の施行と労働基準法の改正が、女性の働き方にどのように関わり、家庭生活の多様化をもたらしうる基盤となっているかを考える。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家計運営の変化	世帯単位や個人単位の消費行動や貯蓄・財テクなどをめぐって、夫婦や親子がどのようにコミュニケートし、意志決定しているのかを眺め、さらに、個々の家庭の家計運営をどのように変化しているかを考察する。	篠塚英子
9	家庭と空間	一つの住宅における家族の生活のしかた、家族員の隣居・近居や単身赴任など、家族と空間の関係から、家庭経営を考える。	小澤紀美子（東京学芸大助教授）
10	生活空間のネットワーキング	公園、病院、保育園、幼稚園、学校、保健所、地域の集会所、図書館、相談サービス、老人のためのディホーム、身障者の活動の場、家族間の職場などを含む生活空間を生活者が主体的にネットワークしていくためのシステムについて考察する。	同上
11	ライフサイクルの変化と家庭	生れてから死ぬまでの個人の加齢や、ライフ・ステージの移行と家庭生活のあり方が近年どのような変化をとげてきたかをとらえるとともに、各ステージにおける危機とその解消方法を明らかにする。	袖井孝子（お茶の水女子大助教授）
12	老人・家族・コミュニティ	老人にとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。	同上
13	子ども・家族・コミュニティ	子どもにとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。特に雇用されて働く父母とそうでない父母をもっている子どもがそれぞれにかかえる問題を考える。	原ひろ子
14	単身家庭シングルライフ・単身赴任・共働き別居	現代日本に見られる諸現象を家庭経営の視点から考察する。	同上
15	ライフスタイルの選択と異質なものとの共存	今日の日本では個人が選択するライフスタイルは多様化しつつある。多様化したライフスタイルが存在する社会及び老若男女が共存する時代の家庭経営を考える。	同上

＝衣生活概論＝（TV）

〔主任講師：矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

“生活の中の衣服”という視点から、今日の衣生活にかかわる諸問題を、多くの事例をあげて通観する。

流れの筋を、衣服が語る人間、衣生活を支える科学に大別し、それぞれの立場から概説し、さらに高度な専門への橋渡しとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活の中の衣服	衣服は身体をおおうとか、寒暑を防ぐとか、上べを着飾るとか云った、バラバラの機能の寄せ集めではない。むしろ衣服をまとう人間がその根源にあることを、概論的叙述の中ではっきりさせておきたい。	矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	衣服の意味(1) ―衣服の機能―	衣服は単に寒暑や外敵・外傷から身を守る物理的機能をもつだけではなく、着る人の心と結びついた様々の機能をもっている。衣服とは何かを考えるにあたり、衣服の諸機能を概観する。	小池三枝（お茶の水女子大学教授）
3	衣服の意味(2) ―衣服と心情―	衣服を通して人間をみるということについて、いく種かの具体例によって考える。	同上
4	衣服の意味(3) ―衣服と社会―	衣服は個人の社会の一員たることを保証して、社会生活における保護の役目をもつ。衣服の社会的機能について、西欧中世の二つの習慣をとりあげて考える。	徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
5	衣服の意味(4) ―流行―	新しい流行は常に社会の批判をうけるが、一方流行に遅れた衣服もまた常に社会に入れられない。西洋の中世から近代に至る歴史の中に、流行に対する人々の反応を探り、その理由を考える。	同上
6	衣服の意味(5) ―制服―	現代社会において衣服の社会的機能の最も顕著な例は、制服に求められる。制服がもつ三つの性格、保護・主張・排除について、西洋服飾史の事例によって考える。	同上
7	衣服と人体	衣服は人体の体温調節や運動性などの機能をどのように補助しているか。また、妨げとなるのはどのような場合かを、衣服の素材、形、着方などの面から考える。	酒井豊子（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服の素材(1)	天然繊維から合成繊維まで、各種繊維の特質を、衣服の実用上の諸特性との関係など把える。またそれらの改良、改質の方向にも触れる。綿、毛などの輸入や、繊維消費などについても考えてみたい。	酒井豊子
9	衣服の素材(2)	織物・編物などの布を中心に、衣服を構成する種々な材料について、その製法、用途などを概観し、衣服の取り扱い易さや着心地のよさなどの上に関係の深い性能について考察する。	同上
10	衣服の色(1) －色とは何か－	形・文様・周囲の風物に托した情緒の表現など、人間の内面と外の世界との調和、人間の体験や学習効果と結びついた色の世界。 色の見方と見え方について、広範囲な視点から編ずる。色名（固有色名・基本色名）から、色の定量的記述にまで言及する。	矢部章彦 小池三枝
11	衣服の色(2) －染めについて－	染めの技法の伝統。染料・繊維の組合わせにもとずく近代染色技法ならびに染色理論。 染色物の、日光・洗濯・汗・マサツ等による変退色とその評価など、主として科学的な立場からの解説を試みる。	矢部章彦
12	衣服の製作(1)	伸縮性、剛軟性など、素材の物理的、力学的性能が、衣服を形づくる上でどのようにかかわるかを考察。縫う、編む、接着など、衣服製作の諸作業を、出来上りの丈夫さ、美しさなどの面から検討する。	酒井豊子
13	衣服の製作(2) －既製服－	既製服は、すでにわれわれの衣生活に欠かせない存在となっている。ここでは、既製服の企画から製造に至る工程を追って、既製服がどのようにわれわれに提供されているかを理解する。	同上
14	衣服の手入れ	新しい衣服を長持ちさせる手だてについて考える。平常の手入れ、保管のほか、最も重要な課題として、洗濯についてやゝくわしく論ずる。 衣服のいたみを、系統的に整理して、それぞれについての対策を考える。	矢部章彦
15	衣生活と環境 (付)衣生活の総合的考察	衣生活を社会的に見たときの諸問題を、衣服の廃棄と再利用、繊維処理剤の安全性、洗剤にかかわる諸問題の三点にしぼり、概要を説明する。 最後のまとめとして、人文・社会・自然の三つの立場を融合して、人間にとっての着ることの意味を再考する。	同上

＝衣　服　論＝（TV）

〔主任講師：谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
　　徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）〕

全体のねらい

日本、西洋の服飾の歴史の中から具体的な事象をとりあげて服飾表現の諸相をみる。前半で表現の担い手である形態・色彩・文様の問題を扱い、後半で服飾の美感をとりあげる。実物資料、絵画・彫刻等美術資料、服飾についての記録、考証等の文献、文学作品の資料を引用しながら、服飾研究の一つのあり方を示す。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	形態と表現	衣摺　面と表面装飾　形態の対比　装飾部分	谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
2	中世西欧の社会と服飾表現 (1) －騎士と宮廷生活－	封建儀礼と服飾　騎士道と服飾　宮廷風恋愛と服飾	徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
3	中世西欧の社会と服飾表現 (2) －衣服のヒエラルキー－	中世の衣服観　ヒエラルキーの実現　文字にみる衣服と社会階層	同上
4	中世西欧の社会と服飾表現 (3) －紋章と衣服－	国王と紋章　都市と紋章	同上
5	色彩の寓意と象徴	服制と色彩　寓意と象徴　重ね色目の抒情	谷田閲次
6	中世西欧の色彩の象徴	深紅－プールプルとエカルラット　緑衣の習慣の流行	徳井淑子
7	文様の意想	大様の三つの要素　意想のさまざま　雅びへの志向	谷田閲次

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	近世日本の服飾文様 (1) －小袖文様を読む－	「御ひいなかた」の文様から　様子と集磐の文様　橋に波　「一来」の大文字の文様　かまきり山の文様　かささぎの文様	小池三枝（お茶の水女子大学教授）
9	近世日本の服飾文様 (2) －歌舞伎文様の発生・展開－	舞台と役者と観客　江戸前期－女形の衣裳から　江戸後期－江戸町人の生活と歌舞伎　役者染の流行一路考恭	同上
10	流　　行	服飾の社会性　流行の構造　モード（時世粧）武家服飾の嗜み	谷田閲次
11	「だ　て」	「たて」という語　奴、町奴、男達　だての心　当世風としてのだて	同上
12	「い　き」	他政期の江戸文化　新風としてのいき　いきの好み　いきの心	同上
13	「ダンディスム」	風俗としてのダンディ　ダンディズムの展開	徳井淑子
14	「ハイカラ」	幕末維新期－洋装への関心　明治初期－洋装化と外国人の目　明治20年代　明治30年代－ハイカラ語の出現	小池三枝
15	服飾と人間	衣服の主人公　服飾の歴史とは　作家なき作品　形を生む心　表現された服飾	谷田閲次

＝衣生活の科学＝（TV）

〔主任講師：矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

衣生活と衣服の機能との関係に焦点をあてて、快適な衣生活の科学的側面を考えてゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の機能	衣服機能のもつ自然科学的側面を、ヒトの要求する諸性能、素材の性質との関係、衣服に仕立て着用する過程での要求性能、手入れ・保存から廃棄に到る道すじを通観し、衣服機能のもつ美的要求に関しても、自然科学的諸性能が、いかに深くかかわっているかを概説する。	矢部章彦（お茶の水女子大学教授）
2	ヒトの体温調節と衣服	衣服の機能をまずヒトの側から考えてゆくための基本事項について解説する。 ヒトの体温調節のしくみとその限界、衣服による気候調節（衣服気候）、ヒトの環境への適応、馴化などが主題となる。	田村照子（文化女子大学助教授）
3	気候に応じた衣服設計	衣服による保温と放熱の機構を、物理と衛生の両面から考察する。水分の吸収と放散も重要な課題であり、これら諸性能と素材の物理的、化学的性質との関連に多くの問題が隠されている。	同上
4	人体の動きと衣服の運動機能性	人体の動きの規則性と、これに応じた動きやすい衣服設計の考え方を、衣服のゆとりと素材の伸縮性、動きを拘束する衣服圧の許容限界の面から併せ考えていきたい。視点はあくまで人体の側にある。	同上
5	水にかかわる性質	肌着の吸湿、吸水性。レインコートの撥水性など、種々のかたちで要求される衣服と水とのかかわりを、繊維の化学的性質にさかのぼって考える。高分子の化学的特性との関係が重点となる。	中島利誠（お茶の水女子大学教授）
6	熱にかかわる性質	合成繊維は熱により収縮、融解しやすい反面、熱固定によるプリーツ加工ができるなどの利点もある。これら衣服の熱的な性質と繊維を構成する高分子の物理的性質との関係を述べる。	酒井豊子（放送大学教授）
7	型くずれ、寸法変化と素材の性質	収縮、伸長、型くずれの原因となる繊維の性質や、織物、編物などの構造的特徴を知り、防縮加工、形態固定加工などの原理を、羊毛の防縮加工や、パーマネントプレスとして著名な樹脂加工を例に解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服と色 (1)	衣服の素材は、デザインにあらわれる布構造や形態的特徴のほか、染色による色彩効果およびその耐久性（堅ろう度）が重要な要素となる。 染色の基礎原理、繊維別の染色法、染色物の堅ろう度とその評価法につき述べる。	駒城素子 (お茶の水女子大学講師)
9	衣服と色 (2)	衣服のもつ効果を、どのように評価するかは決して単純ではない。美学的立場、心理学的立場、自然科学的立場の総合的効果としてとらえねばならない。 ここでは、色の表示法を中心にして、主として自然科学の立場から色の問題を説明する。	矢部章彦
10	布から衣服へ	布により衣服を形づくるうえで重要な布の造形性の問題として、布の張り、剪断特性を中心にとりあげ、布を構成する繊維の曲げかたさなどの性能や、織物・編み物など布の組織・構造のちがいが、どのようにかかわるかを考察する。	酒井豊子
11	既製服と型紙	われわれは用いる衣服の大部分を既製服により調達している。満足度の高い既製服の供給には、すぐれた型紙の製作が第一歩である。既製服製造工程の中から、特にパターンメーキングに関するさまざまな手法を紹介する。	同上
12	衣服の手入れ (1) 洗浄理論	新しい衣服を、いかに長もちさせるかという衣生活の大切な課題を洗濯を中心に、2回にわたって解説する。 洗浄理論は、汚れる→汚れを落とす、過程を界面化学の立場から組み立てて説明する。	矢部章彦
13	衣服の手入れ(2) 洗濯の条件	日常行う洗濯に焦点をあわせ、洗浄理論を背景として有効な洗濯条件を考える。衣服の手入れの目的は、よごれ除去とともに形態、外観、風合いなどを含めた総合的な品質の再生・保存にある。	前島雅子 （千葉大学教授）
14	衣服のいたみ －劣化とその防止－	衣服のいたみとその防止法について系統的に考察する。着用、洗濯と保管の間に種々の原因で衣料は劣化が進むことは避けられない。 流行遅れなどの廃棄理由は次章にゆずり、主として科学的な立場に立って解説する。	駒城素子
15	衣服と環境	衣服の入手から廃棄までの道すじを考えること。着用する衣服の安全性と繊維処理剤との関係の考察。外部環境の汚染が問題になっている今日、洗剤に関する諸問題を広い視点から考え直すことを主題とする。	矢部章彦

＝食　生　活　論＝(R)

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）
　　鈴木継美（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代はわが国では飽食の時代といわれるが、世界には飢餓地域も存在する。人間がたどってきた食べる事を歴史的な視点から、また文化の発展の過程から追究してみたい。狩猟民、牧畜民、農耕民の食事から現代の食事に至る変化を考え、食の根源に存在する嗜好の心理について触れる。また近年におけるわが国の食生活に及ぼしている要因のなかから、都市化の問題と家族生活の問題をとりあげ、食の近代化とは何かを考えてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	食　の　文　化	人類は生存するために、食物を求めて数百万年ものあいだ努力してきた。その食にかかわる営みである「食の文化」について概観する。	宮崎基嘉（放送大学教授） 鈴木継美（東京大学教授）
2	人間の食事とサルの食事	食物を摂取するという活動は、根本的には飢えと渇きを癒すためのものである。その摂食行動の様式について、まずサルの食事に焦点をあて、次いでヒトへの進化の過程に言及する。	鈴木継美
3	採集・狩猟民の食事	採集・狩猟による食物獲得は、ホモ・エレクトゥスの段階にまでさかのぼることができる。現存の数少ない採集・狩猟民の食生活を観察し、その実態を探る。	同　上
4	牧畜民の食事	牧畜民とは、放牧家畜を飼育して生計をたてている人々のことをいう。彼らの食生活は当然、畜産物を中心としたものとなるが、アフリカのレンティーレ族の事例をみながら検討する。	同　上
5	農耕民の食事・1	今からおよそ1万年前に発生した農耕は、急速に世界各地に広がり、さまざまに進行していった。農耕民の食物・食事の原型を知るために、パプア低地・ギデラ族を考察する。	同　上
6	農耕民の食事・2	世界中に広がる農耕民のなかで、穀物を主産物とする人々に焦点をあて、穀物依存型の食生活の実態と問題点について考察する。	同　上
7	世　界　の　食　事	大航海時代直前の世界は、主作物によって色分けすることができるが、国際交流の盛んな現代において、それがどのように変化してきたかを探る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の食事文化	古代から現代に至るまで、日本の食事文化はどのような変遷をたどってきたのだろうか。それらをふまえた上で、今後の日本人の食生活における課題を検討する。	宮崎基嘉
9	嗜好の心理	味覚や嗜好は先天的に決められるのではなく、後天的なもの、環境・生活等により変化し、形成されていくものである。嗜好に関する民族的な伝統と変化について解明する。	祖父江孝男（放送大学教授）
10	米食の文化	稲の発生と日本への伝播・普及の歴史をたどり現代日本の米食文化に焦点をあて、その実態と問題点について考察を加える。	宮崎基嘉
11	豆食の文化	豆類は農耕の初期において、すでに世界中に広がっていった。豆はどのように食べられてきたのだろうか。豆食文化の起源と発展の経緯を探る。	同上
12	魚食、肉食の文化	魚食か、それとも肉食か。貯蔵技術や輸送手段が未発達であった時代においては、風土条件がそれを規定した。日本の場合を中心に、魚食、肉食文化の足跡をたどる。	同上
13	都市化と食生活	食生活の変化の度合いは地域により異なるが、その重要な要因は都市化にある。日本人の食生活パターンに及ぼす都市化の影響を考察し、今後の課題を検討する。	内野澄子（厚生省人口問題研究所・医学博士）
14	家族と食生活	家族がそろって食事をすることの重要性について、さまざまな角度から検討を加え、家族と食生活とのかかわりあいを考える。	足立己幸（女子栄養大学教授）
15	食の近代化	高度成長時代の昭和３５年以降、日本人の食生活は著しい変化をみせてきた。現代日本人の食生活を見直し、食の近代化とは何かを考える課題を提供する。	宮崎基嘉

＝食　物　総　論＝　（ＴＶ）

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の持つ意味、食物の役割は生活のなかで、また健康との係りあいにおいて近年いろいろの問題を提起している。また食物をめぐる諸科学の進歩もあり新しい視点から食物を理解することが日常生活の上においても必要になった。食物の種類は極めて多いが、全体に通じる問題を栄養、健康、嗜好、品質、保蔵の面から学習する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と食物	食生活の変化は生活の変化と深く関係している。食物の変化は技術の進歩もあるが需要の変化にもよる。今、食物は健康とのかかわりで見直しを迫まられている。食物と栄養の問題を中心に考えていく。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	炭水化物の役割	食物成分のうち最も量的に多く、また種類も多い炭水化物について主に栄養的役割について述べる。食物の調理や加工など食物を扱う上での炭水化物の変化やその栄養に及ぼす影響など多角的な解説をする。	加藤博通（東京大学教授）
3	脂質の働き	この20年間に最も摂取量の増加した成分で、食生活の変化を象徴する成分でありまた健康の視点からも注目されている成分である。研究の進歩も著るしく新知見を中心に解説する。	五十嵐侑（お茶の水女子大学教授）
4	たんぱく質とアミノ酸	たんぱく質は生命の基本物質であり、アミノ酸はそれを構成する成分である。たんぱく質の重要性について認識する。食物たんぱく質の栄養上の価値の相異について、アミノ酸組成との関係を述べる。	宮崎基嘉（放送大学教授）
5	ミネラルの働き	ミネラル（無機質）は種類が多い。それぞれ個別の働きがあると同時に相互に関連して働いている。体内での動きも極めて能動的である。ミネラルの吸収、利用について新しい研究が展開されている。微量ミネラルについても最近注目されている。	内藤博（東京大学教授）
6	ビタミンの役割	ビタミンの種類も極めて多く、その作用も多彩である。系統的にビタミン類全般について解説する。特にビタミンA、D、B、C などについて詳述するとともに、食物、食事によるビタミン補給についても述べる。	荒川信彦（お茶の水女子大学教授）
7	非栄養の役割	食物の成分の中には栄養素に分類されていない多くの成分がある。これら非栄養素の役割について近年研究が発展してきている。食物繊維は健康との関係で広く研究が発展している成分である。	綾野雄幸（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	栄養所要量と食事	前章までの知識を総括し、日常生活活動において摂取すべき望ましい栄養量の基準となっている栄養所要量について解説する。また日常食事の構成について説明する。さらに運動付加の意味について述べる。	宮崎基嘉
9	食物の色・味・香り	食物の具備すべき重要な機能に嗜好適性の問題がある。この章では嗜好に関係の深い、食物の色、味、香りの成分について解説する。この分野の研究は驚くほど広く深く行なわれていることが理解されよう。	小林彰夫（お茶の水女子大学教授）
10	食物の品質	食物の品質が問われる時代である。食物の品質を規定する因子を分析し、これを保証する手段としての国際食品規格、国内食品規格の問題を探る。品質の一つである食物のうまさとはどのようなことなのか。うまさを形成する食物の物性に触れる。	吉川誠次（共立女子大学講師）
11	食物の保蔵	食物の生産と消費を結ぶ中間技術としての保蔵の重要性は世界の食糧問題の一環としてその研究開発が急がれている。食物の品質を保持しつつ貯蔵するために新しい技術が駆使されている。中間水分食品もその1つである。	荒井綜一（東京大学助教授）
12	食物の調理科学	食物の調理は食物をおいしくするための操作を考えてもよい。また食物を処理したとき起る物理・化学的変化をみてもよい。どのような操作がどのような意味をもつのか、科学的、体系的にこれを解説する。	杉田浩一（昭和女子大学教授）
13	食品の衛生と安全性	食物の安全性を確保するために食品衛生学の領域において活発な研究が行なわれている。食中毒の問題、食品添加物の問題、安全性の考え方、法規制などにつき述べる。	細貝祐太郎（女子栄養大学教授）
14	食物をめぐるトピックス	特に新しい問題を扱うわけではない。13章までに入りきらなかった重要なテーマ3題について述べる。すなわち、(1)食物のエネルギー、(2)水、(3)微生物利用の3題である。	宮崎基嘉
15	食物の未来像	食物はこれからどのように変っていくのだろうか。過去に行なわれた未来予測の結果を検証し、新らしい未来予測に触れる。食物の機能について新しい見方がなされ、機能性食品の研究が開発されている。	同上

＝食　物　各　論＝　（ＴＶ）

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物総論における知識を土台として、日本における日常食品について、その生産、流通方式、含有成分、栄養価、品質、調理加工適性、貯蔵法、家庭における利用方法などにつき各論的に教える。食品をめぐる諸情勢、とくに法規制についても触れる。ねらいは食品についての科学的教育にある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の食品	わが国の食品の多様化傾向、消費の動向について述べ、日常食品の全体像を示す。食品をとりまく規制についても触れておく。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	農産食品 1 ー穀類	米、小麦を中心に、その食形態、成分、食味、品質と加工品との関係について解説する。	同上
3	農産食品 2 ーいも、でん粉類	各種いも類の性状について述べる。でん粉については、その性質、構造を明らかにしたうえ機能と利用法をあげる。	同上
4	農産食品 3 ー豆類、果実類	豆類の種類、成分について述べる。特に大豆については豆腐、豆乳、新たんぱく食品など広い用途を紹介する。種実類の種類、成分についても解説する。	同上
5	農産食品 4 ー野菜類、きのこ類	新野菜を含め野菜類の種類、系統、流通、成分について述べ、その効用に触れる。きのこ類の名称、種類についても解説する。	同上
6	農産食品 5 ー果実類	新品種や外国からの新導入果実も含め、果実類の種類を紹介し、品質、成分について述べ、その加工品について解説する。	同上
7	畜産食品 1 ー肉類	食肉の種類、肉の組織構造、肉の熟成、食肉の成分、部位による違いなどを解説する。また肉加工品についても触れる。	荒川信彦（お茶の水女大教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	畜産食品 2 ー乳類、卵類	牛乳成分の微細構造を説明し、牛乳の栄養価を検討する。さらに牛乳、乳製品を種類別に解説する。また鶏卵を中心に卵の構造、成分、栄養価について解説する。	宮崎基嘉
9	水産食品 魚介類藻類	魚介類の消費の状況、流通経路、魚介類の成分、鮮度判定法などを中心に解説する。藻類については種類をあげたうえ、栄養価を評価する。	同上
10	甘味食品、し好食品	砂糖・でん粉糖の種類と構造、甘味などについて解説し、新しい糖類も紹介する。また菓子類、茶、嗜好飲料について述べる。	加藤博通（東京大学教授）
11	醸造食品	みそ、しょうゆ、食酢、アルコール飲料など微生物を利用する醸造食品について述べる。微生物の働き、醸造食品の製造法、種類による成分の違いなどを解説する。	宮崎基嘉
12	調味食品	塩、調味料、トマト加工品、香辛料について述べるとともに、油脂食品についてもこの章で解説する。	同上
13	加工食品	新しい加工食品類を取り上げる。すなわち乾燥食品、冷凍食品、調理冷凍食品、レトルトパウチ食品などがどのように製造されるのか解説し、その成分、利用について述べる。	同上
14	特殊食品	栄養強化食品、特別用途食品、医療用食品などについて解説し、いわゆる健康食品の問題点や食品の栄養価表示についても触れる。	同上
15	食品のまとめ	食生活の変化要因をさぐり、食事の事例を検討したうえで、食品の特色を食品群別にとらえて説明し、食生活指針について述べる。	同上

＝ 住 生 活 史 ＝　（TV）

〔主任講師：平井　聖（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

何時の時代にも、人間は生まれた時から、家族の構成員である。子どもが始めて意識した時、普通はそばに親がいる。兄弟がいるかもしれない。少くとも、母と子は密接な関係にある。全く親族がいなかったとしても、廻りに誰もいないということはない。住まいは、家族のためのものである。家族の構成が違えば、住まいが変わる。社会の変化に対応して生活様式が変わり、住み方が変わる。住み方が変われば、住まいもその変化に応じて変わっていく。

通常は、家族は社会の中の最小単位で、これが一つの住居に収まるが、時代によっては、血縁のある最小単位が、集落を構成していることもある。このようなときは、一つの住居だけでなく、集落を対象としなければならないことになる。　この講義では家族と住まいの対応関係に焦点をあて、併せて家族の構成員それぞれの側からも、住まいをみていこうと考えている。そして、家族の構成員の中では、できるだけ家族の中心的な存在であった女性の生活を、追ってみたいと思っている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ　はじめに 住居と家族の生活・個人の生活	日本における家族の移り変わりと、住居形式との対応関係について概要を説明する。また、いくつかの形式について、家族あるいは男と女がどのようにその生活空間を占めているか、生活様式にどのように外国からの影響がみられるかについても簡単に解説する。	平井　聖 （東京工業大学教授）
2	先史時代の住居 住居と集落	縄文時代になると、住居跡が沢山発見されるようになる。遺物は少ないが、炉と竈と関係や集落の構成から、当時の人々の生活を類推することも出来ないことではない。弥生時代になると稲作が拡まる。住居の種類もふえる。生活用具の出土も多い。古墳時代になると、埴輪や鏡太刀の束飾などに家屋をかたどったものがあらわれ、住居の形がはじめて明らかになる。埴輪から当時の人々の姿も具体的になる。	同　上
3	古代の住居（一） 奈良の都と 都での生活	考古学の成果をもとにした平城京・平安京の再現と、出土品から都での生活を推測する。特に、寝殿造にいたる奈良時代の住居と、奈良・平安時代の都での庶民の住居について、発掘の成果と文献・絵画史料から復源、解説する。	同　上
4	古代の住居（二） 平安時代の 都での生活	寝殿造と寝殿造にいたる平安時代初期の上層住宅について、考古学の成果、日記・日記文学や絵巻物、そして結婚の形式ほかの習慣などから、家族と建物の対応やその中での生活を考えてみよう。	同　上
5	中世の住居 武家の生活・ 公家の生活	寝殿造から主殿造への移り変わりを、住居そのものの変化を追うと共に、家族と住居の対応関係の変化、結婚形態の変化、相続関係などを背景に考えてみることにしよう。対屋の消滅、小御所の成立、主殿内部の機能構成等が問題となる。	同　上
6	桃山時代の住居 武の生活・ 公家の生活	最近の発掘の成果と文献史料とくに絵図類から、戦国時代から江戸時代初期にいたる上層階級の生活と住宅との関係をみる。	同　上
7	江戸時代の住居（一） 大名の屋敷と生活	将軍や藩主の生活を、史料と指図を用いて、建物と対応させながら考える。特に書院の主室を飾った座敷飾については、その原型と成立過程を考察する。	同　上
8	江戸時代の住居（二） －中・下級武士 の住居と生活－	江戸における旗本、各藩の藩士たちの住居は身分によって差があり、大藩の家老の場合は大名屋敷に匹敵するが、一般にはそれほどの規模ではなかった。そこで家老以下すまいと生活について考えてみることにする。また、江戸詰めの時のすまいについても、考えてみたい。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
9	江戸時代の住居(三) 数寄屋風の意匠と遊び	数寄屋風の意匠をもつ建築をとりあげ、平安時代から存在していたその系譜について、絵巻物や屏風絵を用いて解説し、江戸時代においてはいくつかの数寄屋風の建物、特に桂離宮の書院群を例に、具体的に建物と用例を対比させながら考える。	平井　聖
10	近世・都会の生活	近世になると京都や江戸での生活が屏風絵などで明らかになるだけでなく、地方の城下町での生活も絵巻物・屏風・浮世絵・道中記・日記等様々な史料から探ることが出来る。また、近世には各地に町屋の遺構もまだまだ残されているので、それらを用いて庶民の日常生活を描いてみたい。	同　上
11	近世・庶民の生活	近世のはじめ、桃山時代から江戸時代初期の農村や宿場町での生活は、史料が乏しく具体的に描きだすことはむつかしい。農家の遺構も桃山時代以前にまでさかのぼれるものは、ごくわずかである。近世に入って、18世紀になると限られた地域ではあるが、農村の一村全体の構成を知ることが出来る史料が見つかっている。しかし、生活に関しては、残っている道具等を通して、推察できる程度である。	同　上
12	近代化の系譜 (一)	江戸時代以来の和風住宅に住み、伝統的な日常生活を続けてきた多くの人々が、西欧文明のどのような面から影響を受け、生活様式がどのように変わり、住居にどのような具体的な変化がおこったかを見ていく。茶の間での生活と座敷の使い方がどのように変っていったか、洋風の生活様式が住宅内部でどのように広まっていったか等が中心となる。	同　上
13	近代化の系譜 (二)	欧米式の生活様式をそのまま取り入え、洋風住宅に生活したのは、明治から昭和の敗戦に至るまでの時期には、ごく限られた人々であった。しかし、一方では庶民を相手に純粋にアメリカ式の住宅を輸入し、あるいは設計して、純洋式住宅の普及に努めただけでなく、啓蒙するために住宅雑誌をだして教育に心をくだいた人もいた。純洋式がどのように受け取られ、受け入れられたかを追ってみたい。	同　上
14	現代の住居 理論と実践	大正時代の後期から、新しい集合住宅が公共的機関によって提供されはじめる。不特定の居住者に対する複数の住宅の設計に建築家がかかわるようになって、科学的研究対象として住居が扱われる機会が生じ、実態調査にもとづく、住み方や使い方の類型化や標準化が行なわれはじめる。その結果、食寝分離論などが提示され、公共の集合住宅にダイニングキッチンが設計されることになった。	同　上
15	新しい生活様式 家族とすまい	敗戦後、建築家たちは極端に悪い住宅事情の中で、様々な試みを展開してきた。ダイニングキッチン、就寝分離、家族室としてのリビングルーム、2つのリビングルームなどを提案し、家族のくらしをよりよいものとするために努力してきた。最後に近年のいくつかの試みを紹介し、家族とすまいの関係を考える。	同　上

＝住　　居　　II＝（TV）

―住　環　境　論―

〔主任講師：東　修三（帝国女子大学教授）
　　本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は住生活の場である。健康で快適な住生活を営む前提として、住居の室内環境、敷地環境および地域の住環境、ならびに関連事項などについて、科学的理解を深める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住環境とは何か	「住居Ⅱ―住環境論―」の講義を展開するにあたり、住環境とは何か。なぜ、住環境を学ぶのかについて、まず考えてみる。	東　修三（帝国女子大学教授）
2	住居の敷地環境―1―自然的条件―	まず住居の敷地の選定にあたって留意すべき敷地の自然的条件、すなわち、地形、地質などの土地の性状、ならびに微気候について述べる。	同　上
3	住居の敷地環境―2―日　照―	住居の日照は敷地の南側の建物や樹木などで障害を受ける。日影曲線、日影図および日影時間図、太陽位置図などを解説して、日照時間と隣棟間隔、中高層建築物の日影規則ならびに日照障害などについて述べる。	同　上
4	地域の住環境―1―大気汚染と騒音―	都市は大気汚染、騒音などによってその住環境が悪化しており、多くの公害問題が発生している。住環境としての保健性、快適性を確保する立場からこれらの公害に注目して、その実態と対策を中心に述べる。	同　上
5	地域の住環境―2―社会的条件―	居住地の選択には、教育、医療などの公共施設の配置状況や公害、交通事情などの社会的条件が問題になる。居住環境が住宅を取り巻く周辺の空間要素によってどのような影響を受けるか、その関連について検討する。	本間博文（放送大学教授）
6	室内環境―1―室内気候と自然気候調節―	住居の内部は屋根や外壁などの住居構造体によって外気と隔てられているため、外部の一般の気候と違った気候状態を呈しており、これを室内気候という。室内気候の成立機構、さらに住居の自然気候調節機能を中心に述べる。	東　修三
7	室内環境―2―人工気候調節―	冷暖房などの設備によって快適な室内気候を実現しようとするのが人工気候調節である。熱貫流に関する基礎事項、冷暖房理論に基づき、住居構造体の断熱設計などについて述べる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	室内環境－3 －通風と換気－	通風は夏季在室者に涼感を与え、換気は冷暖房時の室内空気の汚染を排除し、ともに室内気候の改良に役だつ。通風計画および換気設計について述べる。	東　　修三
9	室内環境－4 －採光と照明－	室内に適度の照度を確保するのに昼間は窓その他の開口部から採光する。採光が不十分なときや夜間は照明を行なう。採光計画および照明設計について述べる。	同　　上
10	室内環境－5 －騒音の妨止－	外部騒音などを防止するには、住居構造体、特に外壁などの隔壁、窓、扉などの遮音性を高める必要がある。騒音に関する基礎事項、構造体材料の遮音性能などに関する事項を概説して騒音防止対策に役だてる。	同　　上
11	室内環境－6 －結露の妨止－	冬季暖房時などに、室内の壁、天井および床、さらに押入の内部などに結露が発生し、その表面に汚損を受けることが多い。結露の発生機構を探り、その防止対策について述べる。	同　　上
12	住居設備－1 －太陽熱利用－	省エネルギー時代における住居の設備計画のあり方について考える。まず、太陽熱利用の設備システムを使ったいわゆるソーラハウスなどの研究を紹介する。	本間博文
13	住居設備－2 －省エネルギー手法－	住居の室内環境を調節するための設備計画、すなわち、冷暖房設備、照明設備などの住居設備計画における省エネルギー手法について、その体系ならびに若干の具体例を述べる。	東　　修三
14	廃棄物処理	廃棄物は多様化し、量も増える傾向にある。廃棄物の発生と処理のバランスがくずれると、住環境の悪化を招く。廃棄物の排出、その収集・処理の実状などを述べ、更には廃棄物を出さないための工夫について考える。	本間博文
15	これからの住環境	講義内容を総括し、残されたいくつかの問題、近年の都市人口の急増とそれに伴う住居形態の変容、都市やその周辺地域の開発計画などの住環境への影響等について、本講義のしめくくりとして考える。	東　　修三

＝住　　居　　Ⅲ＝（ＴＶ）

－住　計　画　論－

〔主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
　　本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は住むための機械であると言われている。人間の行動に支障なくかつその行動を快適に安全に営むことを可能とすることが最大の役割であると言って良いだろう。また、外部の環境を適切に調整して人間の生命活動に最適なように環境を調整することも重要な機能である。住居Ⅲでは住居Ⅰ、Ⅱで学習した内容をふまえて、物としての住居が快適で利便性に富む住生活を可能とするための計画課題を様々な角度から検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住計画とは何か	「住居Ⅲ－住計画論－」の講義を展開するにあたり、その目的や課題、あるいは方法について解説し、望ましい住計画の条件を考える。	清家　清（東京工業大学名誉教授） 本間博文（放送大学教授）
2	風土と住計画－1 －沖縄の住まい	住計画論の最初に、わが国としては特殊な気候条件における住まいのあり方を概観し、気候風土と住計画の関連を考察する。本章では沖縄の住居を取りあげる。	本間博文
3	風土と住計画－2 －寒冷地の住まい	北海道はわが国としては寒冷な地域で、本州の住計画とは異なった問題点がある。このような寒冷地における住生活の特徴を明らかにし、住宅のあり方を考える。	同　上
4	平面計画－1	第２次大戦後の住宅には、戦前の中廊下型とは全く異なった平面型の住宅が登場し、モダンリビングと呼ばれた。この定着の過程と平面型の特質について述べる。	同　上
5	平面計画－2	前章に続いてモダンリビングの構成原理とその変遷について述べ、このモダンリビングが庶民の住宅にどのような影響を与え、今日に至っているかを検討する。	同　上
6	規模計画－1	住宅の室内空間の設計には、人体寸法が重要な決定要因となる。本章においては、人体寸法に基づいた室内空間の規模決定の問題について検討し、住宅の規模決定の為の基礎的な知見を得る。	清家　清 本間博文
7	規模計画－2	住宅の規模はどの程度あれば良いのだろうか。この点の国民的合意が得られなければ、居住状態の根本的改善は難しい。本章では、最低居住水準、適正居住水準を基に日本人としての住宅規模について考える。	本間博文

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	室内計画	外敵や猛獣などに対して比較的安全な島国に住む日本人と、大陸に住む民族との間の室内(インテリア)という言葉に対する感覚の相違、日本人の古来からの考え方の移りかわりなどから、室内計画の本質を考えてゆく。	清家　清
9	構造計画－1	建築物は、地震、積雪、強風、その他もろもろの災害に対して安全でなければならない。どうすれば安全な構造体にすることができるのか。基本的な事項から考察をすすめてゆく。	同上
10	構造計画－2	構造計画は、結局は各部位の平衡条件を検討し、力とその支持方法と変形の幾何学的・物理的・力学的な相互関係をしらべることに帰する。この章では、その問題を、いくつかの具体例について考える。	同上
11	構造計画－3	実際の建築物は、どのような構造計画のもとに建てられているのであろうか。いろいろな構造のメリット・デメリット、わが国に多い木造の場合の留意点などについてふれる。	同上
12	安全計画	住生活は、安全であることがもっとも基本である。本章においては、日常生活における各種の危険に対して、安全な住計画の課題を考える。	本間博文
13	防災計画	わが国のように、地震や台風を始めとする各種の自然災害の多い国では、災害に強い家を造ることは絶対的な条件である。本章では、主として地震を取り上げ、地震に安全な住宅について考える。	同上
14	住居の維持管理	住居の維持・管理は日常の住生活に直接関連し、住宅の居住性を大きく左右する。本章においては、集合住宅の管理と戸建て木造住宅のメンテナンスを取り上げ、現状の問題と今後の課題を明らかにする。	同上
15	おわりに これからの住まい	本章においては、住居Ⅰ「住生活論」、住居Ⅱ「住環境論」と今回の住居Ⅲ「住計画論」を合わせた45章の講義のまとめとして、日本における住生活の現状と今後の方向について総括的な展望を行う。	清家　清 本間博文

＝人　間　の　病　気＝（R）

〔主任講師：香月秀雄（元放送大学学長）〕

全体のねらい

人間は太古から現在に至る間そうであった様に、恐らくは将来とも、病気なるものとの対決を強いられることになろう。病気は個人のものに止まらず、人間が社会を形成するに至った時点では、個人のもつものが集団に影響を与え、また社会を維持する絆が往々にして個人の身心に影響を及ぼす。人間の病気を教養の概念として述る。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	病　気　と　は	健康と対比されるものとして病気が定義される。肉体的にも精神的にも安定した状態が健康の理想であるが、その破綻が病気であろう。また病気には個人差があり、社会の移り変わりとともに病因も新しく加わってくる。	香月秀雄（元放送大学学長）
2	病気と人間との闘いの歴史	古代にはほとんどの病気の病因が明らかでなかった。このため病気を呪術的、宗教的にとらえていた。これを破り、病気の真の原因に近づくきっかけになったのは伝染病の流行であった。	同　上
3	病気の原因と成立	大部分の病気は内因、外因によって全身レベルで起こっている変化として考えられる。病気と関係があると考えられる条件のすべてを病因としてとらえることには問題がある。	同　上
4	病気を診断すること	診断の方法はいろいろある。ここでは従来からの問診などのほか、急速に発達した検査法を紹介する。しかし病人は診断を望んでいるのではなく治療を望んでいるのである。	同　上
5	病　気　の　症　状	病気の症状は千差万別である。年齢、性、職業などの人間生活とのかかわりも病気を診断する重要な手がかりとなる。また病気を分類する必要もある。	同　上
6	科　学　の　参　入	科学の参入によって医療技術は飛躍的に進歩した。電流，放射線の医学分野での応用、さらに生理学、生化学の関与は病態だけでなく生命現象の解明にも灯をともした。その反面、医学と医療との乖離も伴った。	同　上
7	医　学　と　医　療	医学は医療の世界から出発し、他の学問分野から知識と知恵をもらい受けて成長してきた。医療は医学に基礎づけを求めなければならないが、情感の世界と社会科学の関与を医学に問いかけることも必要である。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	心と体の分裂	心と体はそれぞれ単独では十分存在できない。心身相関の問題を臨床のケースを通して考える。心と体を分裂に導くものは何か、心身症はどのようにして生じるかを検討する。	織田尚生（甲南大学教授）
9	心と体をつなぐもの	心と体の統合の機制について、第8章のケースを取り上げながら心理療法学の立場から検討する。心身症治療とイメージの関係、情動のシンボリズムの果たす役割、非因果律の意義について考える。	同上
10	病気と経済	経済学の視点から病める現代医療の制度を考える。医療費はなぜ上がるのか、医療の技術革新との関係。医療保険をどう改善したらよいか。21世紀へ向け、福祉税の設置を提案する。	伊東光晴（京都大学教授）
11	病気の治療	医学の存在する理由は病気の治療であり、予防である。ここでは、さまざまな治療法の現状を紹介するとともにその功罪、個人の資質、環境とのかかわりなどについても触れる。	香月秀雄
12	治療の適応	病因と治療手断は常に直結するというものではない。病人自身の生理的条件、家族や社会的条件によっても治療手段は選択されなければならない。病気の治療は治療手段の選択ー治療適応ーがよいかどうかが問題である。	同上
13	加齢と病気	加齢とは人間が生を享け、死に至るまでの現象である。その後半の過程を老化として取り上げ、この時期にみられる病気の特徴、現れる病態がどのようにして起きるかをみる。	同上
14	病気の予後	病気の予後とは病気の成り行きであり、予後がよいというのは治る見込みの高いことを意味する。しかし薬品や治療方法の開発によって予後の判断も変わってくる。	同上
15	人間の病気と社会	病気は単に個人的なものでなく、人集団、社会組織とも切り離せない問題をかかえている。そこで医療、医学の進歩のあとをたどり、医療体制のあり方を考え、医療の将来を展望する。	同上

＝母　子　保　健＝（TV）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）〕

全体のねらい

ヒトの出生は母の体内における卵細胞の受精という生物学的現象にはじまり、これに遺伝と環境がからんで胎児の発育、分娩、授乳、育児という一連の過程を経て、人間としての完成の第一歩となるものである。この過程は内外の要因によってその安定が維持されているが、ここではそのメカニズムについてのべたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	母と子の健康科学のねらい	母と子の健康は人間の要点であり、この健康が維持されるには多くの要因が複雑にからみあっている。この微妙で巧みな仕組みを理解するとともに意義も明らかにする。	古谷　博（放送大学教授）
2	生命のはじまり	生殖細胞の起源から始まり、減数分裂、卵子の成熟と卵胞の発達、精子の成熟、卵子数の推移、ホルモンと排卵、受精のメカニズム、精子のキャパシテュション、多精子受精防禦メカニズムと述べていく。	鈴木秋悦（慶応義塾大学助教授）
3	受精のメカニズム	受精卵の分割と分化、受精卵と卵管環境、着床前後の受精卵、子宮内膜と妊娠準備状態、胞胚の形とはたらき、着床のメカニズムについて述べる。	同　上
4	受精卵と胎盤	胎盤の初期発生学、胎盤の構造とはたらき、羊水のはたらきと組成、妊娠期間における胎盤と羊水、胎盤とホルモン、ヒトの胎盤の特徴について述べる。	同　上
5	母体・胎児・胎盤系の相互関係	胎児は胎盤を通じて母体との間に物質交換を行いながら成長する。また胎盤から産生されるホルモンは母児にさまざまな変化を及ぼしている。これらの相互関係について解明する。	太田孝夫（帝京大学教授）
6	胎児の発育	胎児の体は三胚葉がまず形成され、次第に各臓器に分化し、それぞれが機能を発揮しはじめ、胎外生活への適応のための準備を行っている。その発育過程について述べる。	同　上
7	妊婦のからだと心の変化	妊婦の全身的並びに局所的変化、妊娠中の生理的変化の個人差、心の変化、妊娠を安定維持させるメカニズムについて解説する。	伊藤博之（聖路加国際病院産婦人科医長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	妊婦と環境	妊婦をめぐる諸々の環境因子、すなわちくすり、放射線、嗜好品、ウィルス、細菌などと、人間社会とのかかわりあい、つまり里帰り分娩、夫立会い分娩、ラマーズ法、座位分娩などについて解説していく。	伊藤博之
9	妊婦と生活	妊娠中のスポーツ、食事、性生活のあり方と高年婦人の妊娠、若年婦人の妊娠、勤労婦人の妊娠について、くわしく解説していく。	同上
10	分娩の経過	分娩はどのようにしてはじまり、胎児はどの様にして分娩されるかについて、その過程をくわしく解説していく。	太田孝夫
11	分娩と胎児	分娩は胎児にとっての最初にして最大の試練でもあり、また母体にとっても分娩は肉体的・精神的にさまざまに影響している。この分娩が母児にどのように作用しているかについて解説する。	同上
12	産後の回復	妊婦から褥婦、授乳婦へのうつりかわり、全身局所の身体的な回復、ホルモンの変化、母性のめばえなどについてくわしくのべる。	古谷博
13	乳汁分泌	乳腺の発生と発達、構造と機能、ホルモンの作用と乳腺の機能、母乳の生成と分泌、乳汁分泌の調節などについて解説する。	同上
14	母乳哺育	子どもにとって、いかに母乳が優れているかについて述べ、その母乳栄養のすすめ方、母乳哺育と母子結合についてくわしく解説していく。	奥山和男（昭和大学教授）
15	子どもとは	2～3歳頃までは子どもにとって環境因子が大きく影響し、心身の成熟とともにその頃から社会への参加としてのしつけや教育が始まる。ライフサイクルにおける乳幼児期の位置づけを解説する。	巷野悟郎（東京家政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	胎児から新生児へ	出生に伴うからだの生理的変化と新生児の身体的特徴、それに応じた新生児の養護のあり方について解説し、未熟児についても触れる。	奥山和男
17	母と子のふれ合い	母と子のふれ合いと心の発達について、早期接触の重要性、母子結合を促進する育児のあり方、愛情遮断症候群など現在の母子関係の問題点も含めて解説していく。	同　上
18	子どもの栄養	新生児期をはじめその後の栄養、つまり母乳栄養・人工栄養、および離乳から幼食にわたる問題を扱うとともに、肥満、ヤセ、牛乳嫌い、小食など。	川崎富作 （日赤医療センター 小児科部長）
19	子どもの身体発育	身体の形態的成熟過程とその評価の意義及び評価の具体的方法について述べる。肥満、ヤセなどについてもとり上げ、解説する。	高野　陽 （国立公衆衛生院 母性小児衛生学部長）
20	子どもの運動機能発達	運動機能を順調に発達させる養育のあり方を考えていくとともに、乳幼児期の運動機能の発達過程とその評価判定についてくわしく述べる。	同　上
21	泣き声と言葉	産声から喃語、その後言葉へと発達していく段階を、母と子、環境などとのかかわりで考えていく。また言葉の発達のおくれ等にもふれる。	巷野悟郎
22	子どもの生理機能	乳幼児の生理の主なものについて、特に体温、すい眠、排泄などについてくわしい解説をしていく。	同　上
23	子どもと個人差	子どもの身体には、顔が各々違うように一人一人にそれぞれ個人差があり、その個人差により罹患傾向や疾病の軽重も違ってくる。この点を体質と併せて解説する。	川崎富作

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	子どもの発育と病気	子どもは新生児、乳児、幼児と発育していくがその発育に応じて病気の種類、現れ方とも違いがでてくる。この点を免疫の発達、また予防注射による病気の予防について述べる。	川崎富作
25	子どもの健康と環境	子どもの健康は環境によって大いに変化する。環境との関わりで、遊びの問題、事故の問題などについて述べる。	同上
26	子どもの健康増進	環境に適応するための日常生活における問題点を考え、健康増進について述べる。ことに自律神経系の働きの年齢的推移の解説と、生活とのかかわりにふれる。	巷野悟郎
27	子どもと生活	こどもが社会生活に適応し順応していくための日常生活のあり方、いわゆる「しつけ」についてのべる。	同上
28	子どもと社会	現在実施されている各種健康診査・保健指導をはじめ、こどもの健康のために社会がいかに関わっているかを述べる。子どものための施設などを紹介する。	高野陽
29	集団保育	乳幼児の集団保育の意義とあり方、特に、集団保育における健康管理・事故防止について述べる。また、保育の具体的内容や家庭保育での関連についても解説する。	同上
30	母と子どもの健康を考える	日本における母子保健の推移を見直すとともに、新生児とくに未熟児管理の進歩に果たした保育器の役割を解説し、母子保健向上の今後の視点をとらえる。	古谷博 馬場一雄 （日本大学教授）

＝青少年の保健Ⅰ＝(R)

－学令期の保健－

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師）〕

全体のねらい

健康科学に関連する講座には、母子保健・成人保健・老人保健とともに、少青年期保健がある。年令の順に、健康について考える構成になっている。この項では、学令期から成人するまでの、成育期の健康について、肉体的に精神的に、調和のとれた成長・成育とは何かについての理解を深めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	少年期の健康科学	放送大学における、生涯にわたる健康科学に関する講義の一環として少年期の健康科学を位置づけ、その内容について主任講師の立場から講義を行う。	本間日臣（元放送大学教授） 丸井英二（東京大学講師）
2	学齢期の心身の特徴	少年期は学校で生活をする学童期でもある。この時期の身体と心について、概括的に展望し、今後の講義の前提となる知識を整理する。	高石昌弘（東京大学教授）
3	少年期のからだの変化(1) －消化器、呼吸器を中心に－	少年期は消化器や呼吸器についての質的変化は少ない。しかし、身体全体の発育に伴い、その量的変化は著しい。これについて構造と機能の両面からみていく。	馬場一雄（日本大学教授）
4	少年期のからだの変化(2) －神経系、感覚器、歯など－	幼児期に出来上がった器官の機能的変化について講義する。特に、いくつかの運動機能を中心にその発達をたどる。また、感覚器および歯の発達にもふれる。	同上
5	少年期のからだの変化(3) －循環器を中心に－	循環系に関する基礎的な知識について解説し、循環系および腎機能の変化と、この時期にみられる病的変化についての講義をおこなう。	阿波彰一（東京大学講師）
6	少年期のからだの変化(4) －少年期の性的発育－	人間に男女の性差があるのはなぜか、性はいかにして決定されるか。その結果、思春期はどのようなメカニズムで発現するのか。生物学的な基礎知識を紹介する。	玉田太朗（自治医科大学教授）
7	少年期のからだの変化(5) －運動器を中心に－	学童の骨折が話題になることが多いが、その根拠はあるのか。人体の構造から、骨折はいかにして生ずるか、またその予防策について述べる。	杉浦勲（名古屋大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	少年期のこころの変化	少年期には身体上の変化に比べ、こころの変化は著しい。乳幼児期から学童期まで、それぞれの時期に特有の精神的課題を抱えている。子どもにとっての環境の変化と対応させて考えていく。	小倉　清（関東中央病院精神科部長）
9	身体の右と左	身体は一見すると左右対称のように見えるが、よく観察すると決してそうではないことが理解できる。脳の左右両半球の機能差から幼少年期の環境、言語、文化に言及する。	角田忠信（東京医科歯科大学教授）
10	保健環境としての家庭	家庭は子どもにとって最も重要かつ身近な環境である。健康問題発生の場、健康保持増進の場、健康問題解決の場としての家庭の重要性について考える。	江口篤寿（前筑波大学教授）
11	子どもの食事と栄養	学童期は身体の量的変化の著しい時期であり、それを支えるための栄養について考える。さらに、こどもの生活のなかでの食生活の役割についてふれる。	金子佳代子（女子栄養大学講師）
12	学校における保健	学校保健は保健管理と保健教育とに分けられる。ここでは、それにとどまらず、学校という場における健康問題、さらに、子どもたちの生活、成績との関連のなかで心身の健康について調査結果を交えて考えていく。	小倉　学（茨城大学教授）
13	学校給食	学校での生活のなかで学校給食はいかなる意義を持つか、またその内容はどうか。子どもの食環境の変化と併せて、「食」について考える。	茂木専枝（実践女子大学教授）
14	青少年期の健康と社会環境	子どもの健康は生物学的に理解されるだけでなく、ひろく社会的存在としてとらえなければならない。青少年の健康問題は同時におとなの問題でもある。広い視野から健康を見直していく。	中江公裕（独協医科大学助教授）
15	青年期への移行	少年期から青年期への移行期として思春期をとり上げ、身体的成熟の側面と健康についてふれる。成熟の男女差もトピックとなる。	高石昌弘

＝青少年の保健 II＝（R)

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師）〕

全体のねらい

この科目では、青少年の保健(1)に引き続き、一生にわたる健康科学の一環としての青年期を扱う。この時期は、身体的にほとんど成人と変わらないほどに成長している。しかし、環境が拡大していくにつれ、精神的な問題が様々な形で生じてくる。従って、生物学的な側面だけでなく、心理的、社会的な側面にも注目していく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期のからだ(1) 生理機能の成熟と問題点	からだの全機能がピークに達する少・青年期における遺伝的素因と環境諸因子との相互反応が、人間形成と以後の人生の健康維持にいかに大きく影響するかを、序説的に述べる。	本間日臣（元放送大学教授） 丸井英二（東京大学講師）
2	青年期のからだ(2) 男性を中心に	思春期男子にみられる身体的変化、とくに性成熟過程を中心に解説する。また、思春期早発症や遅発症の原因やその治療、さらにその他の疾患についてもふれる。	白井将文（東邦大学教授）
3	青年期のからだ(3) 女性を中心に	思春期から青年期にかけての女性の性成熟について概説し、よくみられる産婦人科疾患に関して保健学の立場からとらえる。また、結婚前にチェックすべき女性の健康問題についてもふれる。	林謙治（公衆衛生院学校衛生室長）
4	青年期のからだ(4) 思春期発現のメカニズム	思春期の概念・定義を復習したのち、性機能に関与するホルモンを説明する。これらホルモンの思春期における変化と、それを調節するメカニズムについて述べる。	玉田太朗（自治医科大学教授）
5	青年期のこころ(1) 中学生	中学生の年齢の人々は、からだ以上に、こころの問題の多い時期である。この時期に特徴的にみられる心理的課題をとおしてながめてみる。	小倉清（関東中央病院精神科部長）
6	青年期のこころ(2) 高校生	高校生のこころの動きについて考えてみる。この時期に避けて通ることのできないこころの成長の過程は、心身の両面に反映されてくることを理解する。	同上
7	青年期のこころとからだその相関に注目して	人のこころとからだは、元来ひとつのものである。その深い相関に注目して、人の成長について考え、青年期についての理解をさらに深めていく。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	青年期の体力とスポーツ	青年期の体力の特徴と、トレーニングの基本について述べ、次いで、青年期のスポーツの意義・環境、および傷害の実態とメカニズムなどにふれ、青年期の体力・スポーツを多角的にとらえる。	武藤芳照（東京大学助教授）
9	思春期の問題行動と相談	思春期は自立の時期でもあり、また受験期でもある。問題行動の要素の複雑さと、対応の困難さについて事例をとおして、多角的にふれていく。	江幡玲子（思春期問題研究所研究員）
10	青年期の栄養と食事	身体発育のいちじるしい青年期の栄養所要量について解説する。さらに、青年をとりまく食生活の今日的特徴を整理し、その後の人生の健康を左右する健全な食生活習慣を身につけることの必要性を講述する。	金子佳代子（女子栄養大学講師）
11	学生の性に関する問題	学生生活においても、さまざまな問題がある。それらを検討し、なかでもこの時期に問題となる性の問題について、学生という立場に焦点をあてて考える。	武田敏夫（千葉大学教授）
12	青年と労働環境	人の健康は環境とのかかわりの中でつくられる。労働環境は学齢期までは経験しない環境であり、健康阻害要因も少なくない。それらを例示して労働環境の概要を述べる。	滝川寛（三重大学助教授）
13	青年期のライフスタイル	人の健康に重大な影響を及ぼしうる飲酒と喫煙は、青年期に習慣性が確立されることが多い。この成年期になる以前でできあがるライフスタイルについて、酒とタバコを中心に考えていく。	片本哲郎（東京大学助手） 本間日臣
14	青年の健康と社会環境	青少年期は、一生のライフスタイルを決定する重要な時期であることを認識し、とくに社会的因子とのつながりの強い性行為感染症と薬物依存を中心に考えていく。	中江公裕（独協医科大学助教授）
15	青少年期の健康科学（まとめ）	青年期を死亡・疾病構造からみると、成年期以後への重要な入り口である。にもかかわらず青年の健康意識は高くない。そこから、望ましい生活習慣についても言及する。	本間日臣 丸井英二

＝ 成人の保健－成人期・壮年期の健康科学 ＝ （R）

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）〕

全体のねらい

母子健康科学、少年期・青年期の健康科学につづき、一生の中で最も生産活動の盛な成人・壮年期の健康科学であり、次の老年期健康科学へ続くものである。健康保持や成人病の予防は、生活様式（食事、運動、休養、睡眼、働き方、嗜好品など）と密接に関係するので、日常生活の中の刺激に対する生体反応の理解を目標として解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	成人期・壮年期健康科学序論 健康の指標としての検査値の読み方	成人期・壮年期の健康科学講座では、日常生活でわれわれが直接経験する様々のエピソードを取り上げ、その際の生体反応のメカニズムを解説し、それを積み上げて全体としてこの年代の健康についての知識がまとまるように企画した。まず検査値に影響する諸因子について述べる	本間日臣（元放送大学教授）
2	日常生活における生体反応統御のメカニズム (1) 睡眠と覚醒	睡眼の覚醒のメカニズムとパターン、その周期性に伴なう自律神経系、呼吸循環系、内分必代謝系の日周リズムと健康保持に関わる意義と役割について解説する。	同上
3	〃 (2) 運動・安静と生体反応	運動を負荷するとからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪、安静時にはからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪について述べる。	同上
4	〃 (3) ストレスおよび疲労と生体反応	ストレスは一般に生体に有害な刺激と受けとられているが、広義のストレスは、生命維持、からだの成育に必要な刺激ともいえる。ストレスに対しどのような生体反応がおこるか、また疲労とはどのような状態でどのような変化が生じているかを解説する。	吉田尚（千葉大学教授）
5	〃 (4) 肥満の生理学	肥満とは何か、肥満の原因とは何か、肥満時に呼吸、循環、代謝などの諸機能はどのように変化しているか、肥満にどのように対処すべきかについて述べる。	同上
6	〃 (5) 食事・飲酒と生体反応	食物の消化吸収のメカニズムとそれに影響を及ぼす諸因子、消化をよくする食べ方、腸内常在菌業の役割、アルコールと生体反応について解説する。	本間日臣
7	〃 (6) 入浴・水浴と生体反応	入浴・水浴に際して、体温、呼吸、血圧、心拍、血液、消化機能、自律神経機能はどのような刺激を受けどのように反応するかを解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日常生活における生体反応統御のメカニズム (7) 外傷と生体反応	外傷すなわち生体組織の損傷の種類は広義では多収にわたるが、日常生活で遭遇する創傷を中心に局所反応と全身反応発生の機序、すなわち生体防御反応発動のメカニズムを解説する。	香月秀雄 （放送大学客員教授）
9	〃 (8) 環境と生体反応① 高地・大気汚染・喫煙の影響	高地・高所への移動、大気汚染、喫煙の際にみられる生体反応を解説する。	本間日臣
10	〃 (9) 環境と生体反応② 家庭・職場と生体反応	日常生活の大部分を占める家庭と職場という環境内の多種多様の刺激因子と生体反応の解明は健康保持または増進に大きな意義がある。これらについて述べる。	丸井英二 （放送大学客員助教授）
11	〃 (10) 病気と薬剤と生体反応	病気については深く触れないが、病気の際にどのような生体反応がおこり、その際に用いられる薬剤がからだの中でどのような反応をおこし、効果をあらわしたり副作用を示すかについて述べる。	本間日臣
12	〃 (11) ジェット症候群（時差ボケ）の成因	生体のバイオリズムは、1年、季節、1月1日を周期とするものの他、瞬時も絶えることのない律動的リズムなどいろいろある、いわゆる時差ボケの成因を生体バイオリズムの立場から眺めてみる。	同上
13	生活々動と右脳・左脳	人類の約9割は右手利きであるかそれはなぜだろうか、手足をふくめ人のからだの形は左右対象にみえるが、諸機能は左右同じではない。右脳と左脳の機能の違いと生活々動との関わりについて考える。	朝長正徳 （東京大学教授）
14	更年期女性の生体反応の変化	女性の生殖期から生殖不能期への移行期にあたる更年期（閉経期）には、からだの中でホルモン分泌の変化がおこり、いろいろの不定愁訴の原因となる。これらについて解説する。	古谷博 （放送大学教授）
15	ライフスタイルと健康 成人・壮年期健康科学のまとめ	成人病や老年病の多くはライフスタイル病(生活習慣病）と呼ばれる程、長年にわたる生活様式を背景として発生する。これ迄述べてきた日常生活における生体反応をふり返り、健康の維持増進への方策を考える。	本間日臣

＝老　人　の　保　健＝（R）

〔主任講師：本間日臣（元放送大学教授）〕

―老年期の健康科学―

全体のねらい

健康に関する本学の講座は母と子の健康科学、少青年期の健康科学、成人壮年期の健康科学、老年期の健康科学からなり、受精卵の分裂から高齢末期までの加齢変化と各年代の生体反応を一貫した基本理念に基いて解説する。一人の個性の確立、自己同一性の完成の時期に相当するこの年代の健康について科学的総合的理解を目指す。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	老年期の健康科学序論	健康科学講義シリーズ構成の骨格すなわち総論と各論の解説、つづいて各章のテーマとねらい、老年期加齢変化（老化）に関与する諸因子、寿命と個人差の原因の解説。	本間日臣（元放送大学教授）
2	老化とは―老化の諸学説	老化のメカニズムは現在なお未知の部分が多く、昔から多数の学説がある。大きく分けて内因性の遺伝子説やホルモン説、外因性のストレス説や放射線説などがある。	朝長正徳（東京大学教授）
3	老化度の測定について―検査値のよみ方	老化度測定法の基礎となる老化のパラメーターとその意義を解説する。種々の健康診断検査値の青年や成人との相違、したがって検査値をよむときの注意を述べる。	同上
4	臓器・組織の変化(1)細胞の変化	細胞はからだの最小構成成分であり、加齢とともに分裂速度や様式が変わるか、すべての臓器・組織の構胞が同時性に変化するわけではない。また個人差も大きい。	本間日臣
5	臓器・組織の変化(2)神経の変化(1)	睡眠が中断される、物忘れをする、運動機能が低下するなどの現状から運動神経系の加齢変化を中心にそのメカニズムを解説。	朝長正徳
6	臓器・組織の変化(3)神経の変化(2)	老年期の視覚、聴覚、味覚、皮膚感覚の変化とそのおこり方、すなわち知覚神経系の反応性の低下の機序について解説する。	同上
7	臓器・組織の変化(4)呼吸・循環系の変化	階段や坂道を登るときの息切れ、夕方の足のむくみ、夜入眠時のせき・たん、夜尿など日常変化の背後にある呼吸循環系の反応の加齢変化を解説する。	本間日臣

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	臓器・組織の変化(5) 内分泌・代謝機能の変化	骨折しやすい現象の背後には骨粗鬆症と呼ぶ状態があるが、これに関係するカルシウムやビタミン代謝の変化をはじめ糖代謝、諸種内分泌機能の加齢変化を解説。	朝　長　正　徳
9	臓器・組織の変化(6) 消化機能・腎機能の変化	薬剤服用後の吸収、代謝、排泄の加齢変化のため老人では副作用がおこりやすい。解毒と排泄を担当する肝臓と腎臓機能の変化を中心に解説する。	同　　上
10	臓器・組織の変化(7) 防御・免疫機能の変化	高齢者の直接死因の第一は肺炎である。なぜか。肺の防御・免疫機能の加齢変化、つづいて生体の防御・免疫機構全般の発動様式と変化を解説する。	本　間　日　臣
11	外見の変化 顔つき、体型、歩き方などの変化	白髪、顔のしわやしみ、爪の変化、身長、姿勢、皮下脂肪、歩き方など外見の変化をもたらす生体内の変化を分析し、これまで解説してきた諸臓器・組織の変化をまとめて考える。	同　　上
12	知能の老化とボケ(1) －知能の老化と老年痴呆	"もの忘れ"がひどくなり認知能力が低下すること、すなわち知能の老化の特徴は何か、そして影響する因子はどのようなものがあるか、ボケとはどう違うかを解説する。	長谷川　和　夫 (聖マリアンナ医科大教授)
13	知能の老化とボケ(2) －痴呆性老人の実態	ボケは脳の器質性障害を基礎としておこる知能障害である。ボケと似た意識障害やうつ状態がある。その鑑別点やボケの予防法を述べる。	同　　上
14	知能の老化とボケ(3) －痴呆性老人の対策	ボケにはいろいろな原因があるので、個別的に原因対策を立てる必要がある。原因不明のアルツハイマー型は対応がむずかしい。介護の原則と社会的対策を解説。	同　　上
15	老年期の光と影 －自己同一性の完成とその栄光	人の肉体の諸機能は思春期を頂点として弱化するが、精神活動は60歳以後まで上昇をつづける。自己同一性の完成、それが老年期の栄光である。	本　間　日　臣

＝精　神　衛　生＝　(R)

〔主任講師：挾間秀文（鳥取大学教授）
織田尚生（甲南大学教授）〕

全体のねらい

精神医学および臨床心理学の応用科学である精神衛生学を、主に精神力動的立場から講義する。心の健康増進についての科学である精神衛生の基礎および応用の各方面に亘って、検討を加える。その際、人文諸科学特に文化人類学や宗教史学等との学際的領域にも留意する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	心の異常とは	心が健康であるとはどのような状態をさすのかを検討し、精神衛生の全体像を概観する。	挾間秀文（鳥取大学教授）
2	正常と異常	心の異常は、必ずしも価値の劣った破壊的な状態を意味するのではない。この点について、精神力動的な見地から述べる。	河合隼雄（京都大学教授）
3	現代の精神衛生	精神衛生の歴史について述べ、精神衛生の基本的な考え方を概説し、さらには予防の活動に関して検討する。	織田尚生（甲南大学教授）
4	心の異常とは(1) ー心理・社会的要因による精神障害	心理社会的要因による精神障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	挾間秀文
5	心の異常とは(2) ー身体的要因による精神障害	身体的要因による精神障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	同　上
6	家族の在り方 ー現代の家族の人間関係と問題点及び対策	現代における家族の人間関係とその問題点を取り上げ、問題解決の方向について検討する。	吉本千鶴子（国立京都病院非常勤医師）
7	現代における父性と母性	人間の心に内在する父性と母性について述べそれらがどのように子どもの心の発達に影響を及ぼすかについて検討する。	織田尚生

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	子どもの心の発達と健康(1)－胎児期新生児期・乳児期	胎児期から乳児期にかけての段階の心の発達と、その問題点について論じる。	山中康裕 （京都大学助教授）
9	子どもの心の発達と健康(2) －幼児期以降	幼児期以降の子どもの心の発達とその問題点について論じる。	同上
10	子どもの心の発達と健康(3) －症例を中心に	心が障害された子どもの事例について、その回復過程を検討する。	同上
11	思春期・青年期の心の健康(I)	この発達段階の心の健康と、その問題点や障害された場合について論じる。	村瀬孝雄 （立教大学教授）
12	思春期・青年期の心の健康(II)	障害された場合の事例について、その治療過程を含めて検討する。	同上
13	成人前期の心の健康	この段階の心の課題と、心の健康の障害された場合の対策について述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
14	成人中期の心の健康	この段階の心の健康のあり方とその対策について、例をあげながら検討する。	同上
15	成人後期の心の健康	この段階の心の構造と、心が障害される場合のカウンセリングについて述べる。	小川捷之 織田尚生

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	老年期の心の健康	老年期をいかに生き抜くかについて、精神力動的な立場から述べる。	小川捷之
17	職場における人間関係	職場におけるリーダーシップのあり方を通して健康な人間関係とは何かという問題を検討する。	三隅二不二（奈良大学教授）
18	海外生活と心の健康	事例を取り上げながら、異文化の中に暮す場合の心の健康を考える。	稲村博（筑波大学助教授）
19	睡眠と心の健康	睡眠と心の健康との関わりについて検討する。	川原隆造（鳥取大学助教授）
20	アルコールと心の健康	飲酒による心の障害について概説し、それに対する対策を考える。	斉藤学（東京都精神医学研究所）
21	薬物の乱用と依存	薬物乱用によって生じる心の障害について概説し、それに対する対策を考える。	佐藤光源（岡山大学教授）
22	文化と心の健康	文化と心の健康との関係を文化人類学の立場から述べる。	祖父江孝男（放送大学教授）
23	宗教と危機の心理学	心の危機において宗教の果す役割とその両義的価値について述べる。	織田尚生

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	自殺と自殺防止	現代わが国でみられる自殺の実態について概観し、それに関する対策を検討する。	稲村　博
25	心の異常に有効な薬物の作用	精神薬物が人間の心に与える影響を通して、心について考える。	小椋　力 （琉球大学教授）
26	心理療法の構造	力動的心理療法学の立場から、心理療法の基本構造について検討する。	織田尚生
27	行動とこころの健康	行動療法学の立場から、こころの健康と人間行動との関連性、さらには健康が障害された場合の対策について検討する。	山上敏子 （国立肥前療養所行動科学センター所長）
28	心の健康と責任能力	犯罪者の精神障害と責任能力の問題を検討することを通して、心の健康とは何かということを考える。さらに罪と罰と償いという問題にも触れる。	狭間秀文 織田尚生
29	生と死をつなぐもの ー末期ガン患者の生き方を通して	人の死のあり方を通して生を考えると同時に援助の方法を考える。	河野博臣 (河野胃腸外科医院長)
30	地域社会の心の健康	心の健康と地域社会との関連について論じ、精神衛生センターや児童相談所など関係諸機関について述べる。	増野肇 (栃木県精神衛生センター所長)

＝環　境　科　学＝　（TV）

〔主任講師：山根靖弘（千葉大学教授）〕

全体のねらい

健康な生活を守り、快適に暮らすためには、我々の環境について十分な理解が必要である。本講座は、水および大気の自然環境、食品や毒性の問題にもふれ、また緑化と生活などの社会環境などについて科学的な基礎概念を論じ、環境への知識を深めようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	健康な生活を守るために	環境汚染の歴史的背景として、環境汚染の移り変わりを述べつつ、「環境科学」の一般的概念について説明する。また、本講座で述べる内容についての概論を説明し、全体像を理解してもらう。	山根靖弘（千葉大学教授）
2	水環境 (1) 水と健康	我々の生活における水利用の重大さと、健康と水との関連について飲料水を中心にのべるが、日本の特色である温泉と健康との関連について説明する。	同　上
3	水環境 (2) 水の汚れ	環境中の水は物理、化学、生物学的に公共用水として好ましくない方向に変化し、汚濁がおこる。水質汚濁の進行過程を論じ、富栄養化やアオコの発生などを述べる。また、水質汚濁の基準値を説明する。	同　上
4	水環境 (3) 水の浄化	水質の汚濁状態を検査する方法すなわち水質汚濁の測定法を簡潔に説明し、さらに水質汚濁の浄化法として、下水道の普及、工場排水の規制、終末処理場における浄化方法などを解説する。	同　上
5	空気環境 (1) 環境大気	人間の生命維持の上に基本的に重要な環境大気を構成する成分やその役割を述べ、環境大気を汚染する成分について、最近の動向と健康に及ぼす影響を解説する。	中澤裕之（国立公衆衛生院室長）
6	空気環境 (2) 室内空気	人間の一日の生活の中で室内における生活時間は時として大きく、室内環境の重要性を述べる。又、室内空気の有害成分として一酸化炭素、窒素酸化物及びたばこの煙等を紹介する。	同　上
7	環境と緑 (1) 緑と人間	人間と緑のかかわりあいについて、八重群島竹富島の農民の暮らしを守る緑の態様や、旭川・帯広市のように人為的に自然林を切りひらいて生産空間をつくりだして居住している開拓地、そして、奈良の都・平城宮などの古代の都市に生きる人々の生活と緑の関係を基に解説する。	田畑貞壽（千葉大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	環境と緑 (2) 都市化の進む水辺と緑	市街地の水辺と緑、災害と緑などを中心に長崎市稲佐山山頂で収録。急傾斜地の緑の状況、宅地化した山なみで集中豪雨の時の災害状況、そして仙台杜の都の広瀬川を中心に都市化した水辺環境の保全運動について紹介し、特に丘陵地の宅地化、広瀬川の環境悪化の原因についても論及する。そして、特に近年重要視されている都市の緑とウォーターフロントについて解説する。	田畑貞壽
9	環境と緑 (3) 緑計画	ヴァチカルな地形、人為的な干渉、緑の施策などを事例に富士山五合目より学校林、自然公園、リゾート地区、ゴルフ場、農村集落工場、海岸など土地利用の違いを緑の環境について特に地域生態系の問題を中心に緑とのかかわりあいを解説する。	同　上
10	土環境と廃棄物処理	土壌汚染に関係する主な汚染物質として農薬、重金属等を取り上げ、その汚染原因と動植物を含む生体への影響を解説する。さらに一般及び産業廃棄物の処理対策についても述べる。	中澤裕之
11	環境と健康 (1) 重金属の毒	環境中に放出された水銀、カドニウム、鉛およびクロムなどの重金属の汚濁状況と、それが体内にとり込まれた場合の生体影響について説明する。	山根靖弘
12	環境と健康 (2) 農薬など有機物の毒	ＤＤＴ、ＢＨＣなどの農薬類の環境汚染と、これら農薬の特性、残留性と生体影響との関連、またＰＣＢなどの化学物質の汚染と生体への影響など、環境汚染有機物質について論ずる。	同　上
13	環境と健康 (3) 自然毒（有毒植物）	生活の周辺にある有毒植物、キノコなどによる中毒の実態を知り、それらがどのような毒なのか、どうしたら中毒を防止できるかについて学ぶ。	山崎幹夫 （千葉大学教授）
14	環境と健康 (4) 自然毒（有毒微生物）	前回にひき続き身の周りの毒のなかから微生物の生産する毒に注目する。この中には穀類など大切な食糧を汚染するカビ毒や微生物毒を起源とするフグ毒やホタテ、バイ貝などのような魚貝類の毒も含まれる。	同　上
15	環境と発がん	環境中には発がん物質が存在し、発がんの原因となるので、化学発がんを中心として述べ、終りに本講座のまとめについて論ずる。	山根靖弘

＝余　暇　生　活＝　（ＴＶ）

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

いまや余暇は、国民の大きな生活課題であり、権利である。ことに寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加し、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどがその背景にある。そのなかで受け身の余暇生活ではなく、自発的そして創造的な余暇活動をもつより、またその探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに 人権としての余暇生活	余暇とは何か。その概念・語源、および権利性について考察し、この講義の目的と意義とを述べ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬　康子 （日本女子大学教授）
2	1〕現代社会と余暇 (1)　高齢化と余暇	現代社会の焦点の一つである高齢化によって、余暇生活は、どのような影響をうけているか。また、それに対して、どういうことが、早急に考えられねばならない課題であるかなどについて、問題提起をふくめ、課題を検討する。	同　　上
3	(2)　情報化と余暇	現代社会の一つの大きな焦点となっている情報化によって、余暇生活は、いったいどのような影響をうけ、変化してきたのか。またそのなかで現実には、どのような課題が生じ、どんな問題が存在するのかなど、実態をふまえて検討する。	薗　田　碩　哉 （日本レクリエーション協会調査研究室部長）
4	(3)　国際化と余暇	現代は、余暇そのものも国際化しているといわれている。その国際化傾向のなかで、現実には、どのような問題が存在するか、さらにどんなことが、その焦点となっていくかなどについて、現実の動向ち問題をとらえ、課題を検討する。	牧　野　暢　男 （日本女子大学教授）
5	2〕余暇生活の歴史 (1)　近代前	余暇生活は、歴史のなかで変化していく。とくに自給自足経済のもとで、身分制のきびしかった前近代では、どのような余暇生活が展開されていたか。また、日本の風土のなかで生み出されたものが、どのようなものであったかについて述べる。	薗　田　碩　哉
6	(2)　近　　代	近代に入って工業化・産業化が進展していくなかで余暇生活が、どのように変化してきたか、とりわけ賃金生活者のそれについては、どのような問題が存在したか、さらに娯楽をふくんだ余暇生活の実態はどうであったか、その推移について述べる。	同　　上
7	(3)　現　　代	現代とりわけマスレジャーが発達し、とくに余暇産業が盛んになってきた時代において、余暇生活は、どのように変化していったか、一方多くを占める賃金生活者側からとらえて、どのような問題があるかなどについて、日本の推移を中心に述べる。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	3]日本人のライフスパンと余暇問題 (1)余暇歴とライフスパン	長くなった人生において、それぞれのライフ・ステージにおける余暇歴が、その人の人生をどのように規定するものであるか。人生をトータルにみて、いかに余暇は大きな課題であり、それぞれのライフ・ステージに具体的な意味をもつかについて述べる。	一番ケ瀬　康子
9	(2)平均的日本人の余暇生活	現在、日本における賃金生活者の平均像をとらえ、その賃金生活者の余暇生活は、いったいどのようなものであるか、またどういう傾向をもっているのかなどを探究する。そしてその状況をふまえながら、日本人の余暇生活の問題点をさぐる。	牧野　暢男
10	(3)海外の余暇生活	とくに欧米の賃金生活者の余暇生活、またアジア諸国の賃金生活者の余暇生活などについて述べ、日本の賃金生活者の余暇生活との比較をこころみる。そしてそれぞれの特徴をつかみ、日本人のこれからの余暇生活の検討をする。	同　上
11	4]余暇生活の条件づくり (1)子ども時代からの主体形成	余暇歴が、人々の余暇の在り方を大きく規制することを考えたとき、余暇については、その子ども時代からの在り方が検討される必要がある。そのことをどう考えるか、具体的に、どのような活動があるのか、改善点は何かなどを述べる。	同　上
12	(2)労働時間短縮	余暇活動は、一方で労働時間によって大きく規制される。現在の日本人の最大の課題となっている労働時間短縮問題とは、どういうことなのか。現状はいったいどうなのかなどから問題を探究し、余暇時間との関連を探究する。	一番ケ瀬　康子
13	(3)余暇の設備・環境	余暇が活発になるためには、そのための空間および環境が、それにふさわしくなることが必要である。とくにその点についての日本の現実がどうかをとらえ、またそれについての環境整備がいかにあるべきかにふれ、問題の提起をする。	薗田　碩哉
14	(4)余暇政策をめぐって	余暇生活を向上させるためには、個人的な努力のみならず、それ以上に地方自治体および国の政策の在り方が大きく問われる。とくに、諸外国のそれとくらべてみた場合、日本の政策はどうなのかなどについて、具体的に解説し問題点を述べる。	牧野　暢男
15	おわりに 創造的余暇生活をめざして	この講義のまとめとして、余暇生活を創造的に、積極的に営むことの意義を認識する。そしてそのような余暇生活を営むための方法について個人レベルの努力をふくめ、余暇生活の権利をまもるための社会的な在り方での展望を論じ、まとめとする。	一番ケ瀬　康子

＝家　庭　の　福　祉＝　(R)

〔主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、家庭の福祉を社会福祉の視点からとらえて解明することをねらいとする。すなわち、家族の共同生活体である家庭にとって福祉とは何か。また、福祉に欠ける状態とはどんなもので、それを生み出す要因は何か。問題解決のための福祉施策やサービスおよびその問題点は何か、等の諸点を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家族と家庭および家庭生活	家族と家庭の概念規定を明らかにした上で、家族の生活共同体としての家庭の生活の構造をどうとらえるかを考察する。生活の理解については「生活と福祉」専攻における生活に関する諸科目でえた知見をできるだけ活用する。	仲村優一（放送大学教授）
2	家庭の福祉とは何か	「福祉」ということばは多義的であり、とらえ方を限定しておかないと「家庭の福祉」についても理解があいまいになる。福祉を抽象的な「さいわい」ということでなく、生活の諸側面における快適さ(アメニティ)としてとらえて、その総体としての「家庭の福祉」の意味を検討する。	同　上
3	家庭福祉問題の構造	家庭生活の内容を生活構造の諸部面に照らして吟味した上で、家庭生活全体における福祉の不足もしくは欠如を家庭福祉問題としてとらえ、その構造を明らかにする。	同　上
4	生活問題としての家庭福祉問題	前章を受け、家庭福祉問題を社会問題としての生活問題の一つとして理解する立場から、その様相論と原因論を究明する。生活構造に関する指標を用いて、家庭のレベルで生ずる家庭福祉問題とはいかなるものかを究明する。	同　上
5	現代日本の家庭福祉問題(1) －児童	現代社会の社会変動が家庭に与えるマイナスの影響および、それが家庭福祉問題を生み出すメカニズムを明らかにするなかで、その問題の具体的な体現者としての児童に表われる諸問題を究明する。	同　上
6	現代日本の家庭福祉問題(2) －老人	前章に続き、都市化、高齢化、核家族化等が家庭生活に及ぼす影響を明らかにするなかで、それによって老人福祉問題が生み出されるメカニズムを究明する。	同　上
7	現代日本の家庭福祉問題(3) －家族関係	前の2章で取り上げた問題は、観点を変えると、家庭内における家族関係にかかわる問題としてもとらえられる。より具体的に、現代日本の夫婦関係、親子関係、三世代関係等に関する諸問題がどのような形をとって表われているかを明らかにする。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭福祉事業の成立と展開(1) －欧米の場合	英国や米国においては、家庭問題を社会福祉課題として取り上げ、社会福祉事業の一環としての家庭福祉事業（ファミリー・ソーシャルワーク）が発展して今日にいたっている。その成立と展開の歴史をふりかえってみる。	仲村優一
9	家庭福祉事業の成立と展開(2) －日本の場合	わが国の場合は家庭福祉問題の顕在化が遅れたこともあって、家庭福祉事業が未成熟であるが、最近になってやっとその萌芽が見られるにいたっている。その辺の歴史的事情と今後の方向について検討する。	同上
10	家族政策と家庭福祉	家庭の福祉を社会的に支えるものとしての家族・家庭に関する社会政策、社会保障、社会サービス等の政策体系を家族政策としてとらえ、その現状と問題点を概観する。	同上
11	家庭福祉の施策とサービス(1)	家庭福祉事業の範疇でとらえられる各種の施策が社会福祉の各分野（公的扶助、児童福祉、老人福祉、障害者福祉等）においてどのように展開されているか。また、その問題点はどこにあるか、等を明らかにする。その場合これまでの福祉サービスが分野ごとに対象を家族の一員としての個人としてとらえる視点が不十分であったことに特に注目する必要がある。この章は主として児童福祉をとりあげる。	同上
12	家庭福祉の施策とサービス(2)	前章に引きつづき、本章では主として老人福祉をとりあげる。	
13	家庭福祉の実践技術(1)	家庭福祉事業の実践技術としては、家族ソーシャルワークとしてケースワークを中心にグループワーク、コミュニティワーク等の方法が体系化されて今日にいたっている。本章では、ソーシャルワークの過程のうち、インテークを中心に事例をとりあげ、検討する。	同上
14	家庭福祉の実践技術(2)	前章に続き、家族ソーシャルワークの過程のうち、社会診断から社会治療にいたる部分を概観する。とくに、家族診断および家族療法について、事例をとりあげ、そのあらましを学習する。	同上
15	家庭福祉の現段階と今後の課題	家庭福祉事業の充実が期待されながら、その充分な発展を見ることができないでいるわが国の社会福祉の現状について、その実態を明らかにし、今後の課題を探ってみる。	同上

＝ 生　活　福　祉 ＝(R)

〔主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、人間が社会生活を営む際に直面する生活上の諸問題にどんなものがあるか、そして、それらに対処して問題解決を図ることを目的とする社会的諸施策はどうなっているか、また、その問題点は何か、についての基本的理解をえさせることを目的とする。中でも、社会福祉の制度と施策を中心に、一個の市民として当然にもっていってよいと思われる知識を身につけてもらうことをねらいとしたい。

主な項目

(1)　人間の社会生活と生活上の諸問題(1)
(2)　人間の社会生活と生活上の諸問題(2)
(3)　社会福祉の意味
(4)　社会福祉と関連諸施策
(5)　社会福祉の展開(1)　欧米
(6)　社会福祉の展開(2)　欧米（つづき）
(7)　社会福祉の展開(3)　日本
(8)　社会福祉の展開(4)　日本（つづき）
(9)　社会福祉の制度と仕組(1)　法制のあらまし(i)
(10)　社会福祉の制度と仕組(2)　法制のあらまし(ii)
(11)　社会福祉の制度と仕組(3)　行財政の仕組(i)
(12)　社会福祉の制度と仕組(4)　行財政の仕組(ii)
(13)　社会福祉の主な分野(1)　概要について
(14)　社会福祉の主な分野(2)　公的扶助(i)
(15)　社会福祉の主な分野(3)　公的扶助(ii)
(16)　社会福祉の主な分野(4)　児童福祉(i)
(17)　社会福祉の主な分野(5)　児童福祉(ii)
(18)　社会福祉の主な分野(6)　老人福祉(i)
(19)　社会福祉の主な分野(7)　老人福祉(ii)
(20)　社会福祉の主な分野(8)　障害者福祉(i)
(21)　社会福祉の主な分野(9)　障害者福祉(ii)
(22)　社会福祉の方法(1)　ケースワーク(i)
(23)　社会福祉の方法(2)　ケースワーク(ii)
(24)　社会福祉の方法(3)　グループワーク
(25)　社会福祉の方法(4)　コミュニティ・オーガニゼーション
(26)　社会福祉の従事者問題(1)
(27)　社会福祉の従事者問題(2)
(28)　社会福祉施設の問題(1)
(29)　社会福祉施設の問題(2)
(30)　社会福祉と国際化

＝ 生 活 原 論 ＝ （R）

〔主任講師：山手　茂（東洋大学教授）〕

全体のねらい

私たちの生活は、多くの要素から成り立っており、急激に変動する社会からさまざまな影響を受けつつ、不断に変化している。この科目では、私たちの生活を社会との関連において全体的・総合的に認識する方法を検討し、現代人の生活課題を明らかにし、２１世紀に向かって主体的によりよい生活を創造するための方法を考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活原論の課題と方法	生活に関する科学は、多くの専門分野に分かれているが、「生活原論」は、生活を総合的、全体的にとらえ、生活の基本的課題を明らかにし、私たちが主体的によりよい生活を創造するための方法を確立することをめざすものである。	山手　茂（東洋大学教授）
2	生活構造の変化と社会構造の変化	私たちの生活を構成している多くの要素は全体としてのまとまりを持っており、これを生活構造としてとらえることができる。この生活構造は、社会構造によって規定されており、現代社会の構造的変化によって、大きく変化し、社会化と不安定化が進んでいる。	同　上
3	生活意識と生活文化	人間の生ききかたは、社会的・経済的要因によってばかりではなく、精神的・文化的要因によっても影響されている。現代において、人びとの生活意識・ライフスタイル・生活文化がどのように変化し、生きかたがどのように再検討されつつあるかを考える。	牧野暢男（日本女子大学教授）
4	世代とライフスタイル	最近の若い世代は、「新人類」と称されるほど、親の世代と異る性格やライフスタイルを持っている。世代とはなにか、各世代の特徴はどうして生じたかを理解し、異る世代の相互理解・相互尊重協力・連帯などについて考える。	同　上
5	生活史とライフ・コース	人間は、社会のなかで、社会の歴史的変化の影響を受けながら生きており、ひとりひとり独自な生活の歴史を持っておる。歴史のなかの人生、「人生８０年時代」の生活周期などについて認識し、さらに主体的に人生を生きるライフコースについて考える。	牧野カツコ（お茶の水女子大学助教授）
6	生活問題の構造・生活の質	私たちの生活には、家計・消費生活・余暇生活や夫婦関係・親子関係・老後不安など多くの問題がある。それらを全体的・構造的にとらえ、それらの原因および発生のメカニズムを考察し、問題の解決・予防のための対策について検討する。	山手　茂
7	生活水準・生活指標・生活の質	国民生活の実態を把握し生活政策・社会政策の課題を明らかにするために、生活水準の測定や生活指標の開発などが行われ、生活の量的豊かさのみならず、生活の質的向上が図られてきた。このような生活実態と生活課題のとらえかたについて検討する。	庄司洋子（日本社会事業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生活権と生活政策	生活の社会化が進展するにともなって、生活問題は、個人や家庭の課題としてばかりではなく、社会や国家の課題としてとりあげられている。現代国家においては、生活権が確立され、それを保障するために生活政策が拡充されていることを述べる。	山手　茂
9	生活保障・生活福祉	社会保障・社会福祉を中心にして、生活問題を解決し、生活不安を解消するとともに、積極的に生活向上させるための政策と実践の課題を検討する。現代においては、国民の主体的参加による福祉国家の形成・維持が課題になっている。	庄司洋子
10	生活設計の学習と実践	生活の安定と向上のためには、国家の福祉政策の拡充とともに、個人や家庭の主体的な生活設計の確立と実践が、重要な課題になっている。学校教育・社会教育・家庭教育においてとりあげられるべき生活設計学習の内容および方法について検討する。	牧野カツコ
11	これからの国民生活	今日まで産業化・都市化・核家族化などによって私たちの生活は変化してきたが、これから21世紀にかけては、長寿化・国際化・情報化などがいっそう進展し、国民生活もさらに変化すると予想される。このような国民生活をとりまく条件の変化への対応策を考える。	山手　茂
12	これからの地域生活	都市化・核家族化・長寿化・情報化などに対応し、生活を安定・向上させるためには、地域社会において新しいコミュニティを創造することが重要な課題になっている。このような観点から、コミュニティ形成の動向と今後の課題について検討する。	牧野　男
13	これからの家庭生活	21世紀に向かって、社会の変化に主体的に対応しながら、私たちの生活を安定・向上させるためには、新しい家庭生活を創造することが必要である。これからの夫婦関係・親子関係など家族関係や家庭経営の課題について検討する。	牧野カツコ
14	これからの男性・女性関係	これからの生活の安定・充実は、家庭・学校・職場・地域社会などあらゆる生活の場において、男性と女性が対等の立場にたって協力することによって実現される。このような観点から、男性と女性との関係の問題点・課題について考える。	庄司洋子
15	自立と共生のネットワーキング	現代社会においては、心身障害者や老人なども参加した「自立と共生をめざすネットワーキング」が活発化している。その社会的背景や意義を検討し、これからの国民生活の安定・向上・充実のためのネットワーキングの課題を考える。	山手　茂

＝衣服論＝（TV）－服飾の歴史と現代－

主任講師：小池三枝（お茶の水女子大学教授）
徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）

全体のねらい

衣服を人間の意識とのかかわりの面から考察し、日本および西洋の服飾の歴史にあらわれたさまざまな事象が人間の心の多様な表われであったことを理解する。この理解が、現代日本の服飾のあり方を見つめ、ひいては現代日本人の生活態度や思想を見つめることにつながるであろう

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の諸相	本講全体の構成を概観し、衣服を人間の心情とのかかわりの面からとらえる方針を説明する。また、衣服および着装を示すさまざまな語（被服・服飾・衣裳・clbthes・castume dress・garments等々）の意味の違いをのべ、本講が服飾の語を用いることを確認する。	小池三枝（お茶の水女子大学教授） 徳井淑子（お茶の水女子大学助教授）
2	服飾の構造	服飾は、社会の中でどのような伝達の機能をもつかということを中心に、その記号性・象徴性・精神性などの構造についてのべる。	杉野正（横浜国立大学助教授）
3	中世フランスの社会と服飾 (1) 記号と象徴	中世社会において服装は、人の社会的立場はもとより、精神的情況を含めた一個の人間を定義するものとしてあるように思う。このような服飾の記号と象徴を考えるため、文学や絵画の人物描写から、服装についての決った型をとりあげる。	徳井淑子
4	中世フランスの社会と服飾 (2) 制度と慣習	上のテーマについて、ここでは、制度化された、または慣習化された服飾をとりあげる。	同上
5	絵画の中の服飾表現 (1) 南蛮風俗	異種の文化との接触の中で、絵画は人物表現に、現実とは遠くかけはなれた空想の産物を混じえることがある。日本の例として、南蛮文化の受け容れ方を考える。	坂本満（国立歴史民俗博物館教授）
6	絵画の中の服飾表現 (2)西洋近世の・エグゾティスム	上のテーマの西洋の例として、近世絵画にみられる異国人の表現をとりあげ、服飾における空想的なものについて考える。	同上
7	近世日本の服飾 (1)小袖文様の展開	現代の和装に直接連なる近世服飾について3回にわたって述べる。第1回は、小袖文様の主題と表現上の技巧について解説する	小池三枝

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	近世日本の服飾 (1)　趣向の種々相	西鶴作品ほか近世文学には服飾の多様な趣向が表されている。町人が服飾に示したさまざまな趣向についてのべる。	小池三枝
9	近世日本の服飾 (2)上方風と江戸風	伝統性の強い上方風の服飾と、近世後期に新たな様相を見せる江戸風の服飾の好尚について考察する。	同　上
10	近代日本の服飾 (1) 変容の過程	洋服導入による男子服の変容について、過程を紹介しながら、西洋化の意味を考える。	同　上
11	近代日本の服飾 (2)　洋風趣味と女性像	明治後期から大正期にかけての女性服飾における洋風趣味について、女学生の姿を中心にのべる。また洋風趣味の背景をなす生活空間を文学作品によって考える。	鈴木すゞ江（放送大学非常勤講師）
12	近代日本の服飾 (3)失われゆく美感	明治大正期を通じ次第に失われつつあった近世的美感についての論述、たとえば九鬼周造の「いき」の構造などの著された意味を考える。	小池三枝
13	西洋近代市民服の成立	１９世紀初頭、市民社会の確立とともに定着する市民服について、成立の過程をのべ、これを支えるダンディスムの意識を世紀末まで追う。	徳井淑子
14	機能と装飾 －近代から現代－	１９世紀後半から２０世紀初めにかけて西洋で展開した生活造形の思想と　の作品をとりあげ機能及装飾の意味を考える。	利光　功（玉川大学教授）
15	服飾の現代	現代の服飾現象と意識はどのような分析が可能か、過去の服飾意義との類似点が相違点は何かなどについてのべる。また、服爵は自己を他に示す表現の機能をもつだけでなく、着る人のさまざまな想いが投入されるものであることをのべる。	杉野　正 小池三枝 徳井淑子

＝食　物　の　探　究＝(TV)

〔主任講師：宮　崎　基　嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の世界の変貌は著しい。しかし食物に関する知識や情報は必ずしもそれほど深くはない。この講義では食物の総てをとり扱うわけにはいかないが、いくつかの食物をとりあげて解説する。その視点は「食文化・食の歴史」から「食物の現状」に移り、さらに「食物の社会学」、「食物の科学」を探る。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の食物	我が国の食物の歴史は日本人の生活の歴史の重要な部分を形成する。縄文、弥生の時代から現在に至る間、その歴史は時代区分に沿って変ってきている。最近40年間における変貌は特に著るしく、食物のもつ意味が社会の動きを背景として大きく変ってきている。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	食と味覚	食の味覚は民族によりかなり異なり、それぞれの国において独特の食文化を形成している。味覚の体質を探り、味覚の機能を追究する。	木村修一（東北大学教授）
3	香辛料の世界	先史時代から人々に用いられてきた香辛料は食品に風味を賦与して嗜好性を高めるだけではなく、食品の劣化抑制、腐敗防止などの保存効果も備えている。これらの機能特性とそれを発現する成分について解説する。	中谷延二（大阪市立大学教授）
4	甘味を求めて	甘味は基本的な食物の味の一種であるが、食の歴史とともに人々の求める甘味は変ってきている。甘味料の種類の変化も著るしい。	不破英次（福山大学教授）
5	変りゆく野菜（仮）	野菜は文化財といわれるほど、その歴史は奥行きが深い。野菜の起源から世界への分布、そして栽培型の変化へと野菜を追究する。	伊東正（千葉大学助教授）
6	きのこ、野生から栽培へ	きのこは種類が多く、その研究もまだ不十分であるが、近年、きのこ類の生態研究がかなり進んでいる。野生きのこから栽培きのこへと今後は変っていくであろう	小川真（農林水産省森林総合研究所科長）
7	昆布ロードを探る	昆布の主産地は北海道で、最近まで他で栽培されることがなかった。それが、薩摩を経て沖縄、中国にまで運ばれ、昆布食類型分布という地域独特の消費形態を作った。また運ばれた経路も一定していて、これを昆布ロードと称し、その生成理由について解説する。	大石圭一（函館短期大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本酒の伝統（仮）	わが国の気候風土のもとに育った日本酒の伝統は、同時にわが国の微生物利用の巧みさを物語るものである。日本酒造業の歴史と酒の文化に焦点をあてる。	矢野圭司（東京大学教授）
9	牛乳と日本人	牛乳飲用の歴史は奈良時代にさかのぼるが、わが国において一般的になったのは明治以後である。牛乳と日本人の係りあいについて技術論もまじえて探る。	古我可一（女子栄養大学教授）
10	食肉の選択	食肉を生産するためにわが国で飼育されている肉用家畜の品種を紹介し、肉用家畜から食肉に供するために必要な処理工程について述べる。生産された枝肉及び部分肉がどのような基準（規格）に基づいてどのように選別（格付）されるかについて解説する。	中井博康（農林水産省畜産試験場室長）
11	魚食の軌跡	日本人は魚食民族といわれるほど、太古から魚と深くかかわり、魚をおいしく食べる技術も世界に類例をみない。私たちの祖先は海の幸をくらしにいかすことをひとつの文化にまで高めたが、その軌跡をたどるとともに魚の生産、流通、消費の変遷を解説する。	山川健重（東海大学教授）
12	海を渡った水産練製品	日本の伝統的水産食品である水産練製品は最近ではSURIMIとよばれて国際的に愛好され海外でも生産されるようになった。水産練製品の製造原理を解説するとともに、地域的特色、新しい製品、製法、原料魚の開発について解説する。	岡田稔（鈴廣蒲鉾工業(KK)技術顧問）
13	豆食の進化	豆類の利用は世界各国において見られるが、わが国においては大陸文化の影響を受けつぎながら独自の豆食文化を築いている。わが国の豆食は米食と深く係りあい日本食文化の形成に重要な役割を果たしている。諸種の豆利用形態がどのように進んできたかを探る。	宮崎基嘉
14	米をめぐって	米は日本の食糧を支える基幹的食物であり、昔も今もそのことは変らない、しかし米の位置づけは最近著るしく変ってきた。その変化の過程を食生活全体の中で考えたい。また、米自体の生産、供給、品質などの諸問題を科学的に考えてみたい	同上
15	まとめ	15回にわたるこの講議全体を通しての日本の食物の姿を全体像としてとらえる。また、これから日本の食物がどう変っていくのか。食文化、食物科学の視点から考える。	同上

＝住まいと環境＝　（TV）

〔主任講師：本間博文（放送大学教授）
　梅干野　晁（東京工業大学助教授）〕

全体のねらい

外部の環境を調整して人間の居住に適した環境を造りだすことは住まいの重要な機能である。そのためには、住宅を取り巻く外部環境（気候、風土）に対する正しい知識と、それを制御する有効な手段を知る必要がある。本講義では、主に熱、光、空気、音、などの環境に関する科学的な理解を深め、同じ温帯にありながらわが国と対称的な気候風土のヨーロッパ地域を比較しながら、住戸内外の環境の調整手法について学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論（快適な住まいとは）	何が快適な環境であるかと言うことは、地域的な、あるいは歴史的な違いもあり、慣れも作用するので一概には決められない。科学的なアプローチによって真に快適な環境とは何かを考え、その環境を実現するための手法について述べる。	本間博文（放送大学教授）
2	気候・風土と住まい	わが国の気候は地域によって大きく異なり、四季の変化も激しいことから、年間を通じて快適な居住環境をつくりだすことは極めて難しい。ヨーロッパの気候特性とも比較しながらわが国の気候・風土を検討し、快適な居住環境を実現するための条件を明らかにする。	梅干野　晁（東京工業大学助教授）
3	都市気候	都市にはヒートアイランド現象のように郊外と異なる特有の気候が形成される。その形成要因をさぐるとともに、現在どの様な状況にあるかをリモートセンシング画像などで明らかにする。また、そのような気候の変化が、都市居住に及ぼす影響について考える。	同上
4	大気汚染と騒音	過密化が進むにつれ、大都市の居住環境は悪化する一方である。大気汚染、騒音と言った各種の公害は都市化に比例して我々の日常生活に様々な生活困難をもたらす。大気汚染や騒音の実態、健康との関係、その防止策について実例をもとに述べる。	山下恭弘（信州大学助教授）
5	都市の住まい	都市には様々な住居形式が混在しているが、それらの住居内の環境は想像以上に大きな違いが見られる。代表的な都市住宅の住戸内環境を具体的に調べ、個々の住戸形式の居住環境上の特色を明らかにし、今後一層の過密が予想される都市住宅がどの様な調整機構を持たなければならないか、実例を通して考える。	本間博文
6	住まいと音	近年、住戸内外で発生する音は飛躍的に増大し、これらの音を適切にコントロールすることは住環境計画における重要な課題である。日常生活で発生する音を実測し、その音の物理的性質や構造体の遮音、吸音などについて述べ、騒音防止設計や音響計画を紹介する。	山下恭弘
7	住まいと光	室内へ光をどの様に取り込むかはその民族の文化を反映していると言っても過言ではない。昼光の特色や人工照明に関する基礎的な事項を述べるとともに、わが国やヨーロッパの具体的な事例をもとに採光・照明計画の指針を述べる。	梅干野　晁

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	住まいと熱 Ⅰ（室内気候と体感）	熱環境を考える上で重要な暑さや寒さの感覚は単に気温だけで決るものではない。体感を規定する熱環境要素について述べ、現在提案されている主な指標を紹介する。さらにこれらの指標をもとに、快適な室内気候を形成するための条件を考える。	梅干野　晁
9	住まいと熱 Ⅱ（暖かい住まい）	熱の移動に関する基礎事項を述べた上で、暖かい住まいをつくるために必要となる。断熱性、気密性、熱容量などの建物性能を概説する。さらに、室内空気を清浄に保つための換気方法や、暖房方式とその特徴にも触れ、ヨーロッパと比較しながらわが国の今後の方向を考える。	同　上
10	住まいと熱 Ⅲ（涼しい住まい）	わが国の梅雨から夏にかけての高温多湿の気候を凌ぐためには日射を遮り、室内の通風換気を充分に計ることが基本である。日射遮蔽の方法とその効果を述べ、あわせて効果的な通風・換気の手法について概説する。	同　上
11	維持管理と室内気候	カビやシロアリに代表される生物による住まいの汚れ、傷みは室内気候の影響が大きい。湿気が篭り、あるいは結露が発生して汚れが進行し、次第に傷みに進行する。本章では結露現象に着目してその発生理由や防止方法を知り、清潔に住むための条件を考える。	同　上
12	太陽熱の利用	わが国はヨーロッパ諸国に比べて低緯度にあるため、太平洋岸の地域では地理的にも気象的にも冬季間の太陽熱の利用が可能である。この様な恵まれた条件を活用するために日照、日射に関する基本的な性質を概説し、具体的な住宅における活用の事例を紹介する。	本間博文
13	パッシブシステムⅠ	太陽や風など自然の力を生かし、建築的な工夫によって快適な室内季候を形成する方法は古くから民家などに見られるが、近年、パッシブシステムと呼ばれ、科学的なアプローチが試みられている。この基本的な考え方や具体的な手法とその効果について紹介する。	梅干野　晁
14	パッシブシステムⅡ	わが国の気候は地域によって大幅に異なり、自然気候の利用もその地域の気候風土の特性に合わせて計画しなければならない。わが国や欧米のパッシブソーラハウスを紹介し、その基本的な考え方や建物の性能などを知り、地域に適合した住いを考える。	本間博文
15	これからの住まい	わが国の複雑な季候条件のもとで、高度化する居住者の要求水準に対応した快適な居住環境をつくりだすことは難しい住戸内外の環境を見直し、おもに窓などの開口部に焦点をあて、現代に適合した住まいの条件を提示し、これからの住まいのあり方を考える。	同　上

＝少年期の健康科学＝　（R）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）〕

全体のねらい

この少年期の健康科学は、母子健康科学に続くもので、学童から、思春期を経て青年に達するまでの子どもを対象にしている。この時期の子どもは、学校、家庭、社会の中にあり、著しい発達・生長を示して、次第にひとり立ちしていく。その健康は生涯の基盤ともなるものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 ― 少年期の健康科学のねらい	少年、少女の健康な発達・成長は、長い人生にわたる活動にとって極めて重要である。少年期の健康科学のねらいについて述べる。	古谷　博（放送大学教授）
2	現代の少年の特徴と問題点	最近の学童から年長児にいたる子どもの身体的、精神的発育の特徴について述べ、また家庭・学校・社会の中で、子どもの心身の成長にみられる問題点を指摘して、健康科学の視点から考察する。	巻野悟郎（東京家政大学教授）
3	素因と健康	少年期には、素因・体質・環境によって発達・成長に個体差が著明に現われ、性的発育にもこれが認められる。これらの関連を包括的に考察する。	川崎富作（日赤医療センター部長）
4	成長と発達（Ⅰ）	全身各臓器、器官の発達について、系統的にそれらの構造と機能の変化を概説する。さらにこれら身体的発育が子どもの情緒、行動などに及ぼす影響について考察する。	渡辺言夫（杏林大学教授）
5	成長と発達（Ⅱ）	とくに脳神系、感覚器系、免疫系など高次機能に関する生長・発達について個別的、包括的に概説し、それらの発達が子ども精神面への影響とその意義についてのべる。	同上
6	運動機能、体力とスポーツ	少年期の発達・生長にともなう身体の鍛練、運動機能の訓練、スポーツの適性、習熟の評価などについて述べ、体力と情緒的発達との関連を考察する。	江口篤寿（前筑波大学教授）
7	学校の健康管理と健康教育	学校の健康管理は、地域の組織的活動によって支持され著しく充実してきたが、健康教育は保健学習、保健指導、安全指導、給食指導、事故防止など、多岐にわたり、や・形式的になりやすい。健康教育のあり方を考察する。	高野陽（国立公衆衛生院部長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	病気と異常	成長の過程で個人的、集団的に罹患しやすい疾患や、少年期に発症する異常など、少年期における疾患像も概説し、それらの予防、早期発見、対処のしかた、学業との関係について概説する。また予防接種、慢性疾患の子どものケアを述べる。	川崎富作
9	栄養と食事	最近の子どもの食事のパターン、摂食行動などをふまえて、少年期の栄養と健康との重要な関連について述べる。また偏食、多食や、食物アレルギー、食中毒、神経性食思不振症（思春期やせ症）などの病態についても述べる。	前田和一（埼玉医科大学教授）
10	学校給食	戦後まもなく児童・生徒を救済する応急的措置として発足した学校給食は、学校給食法の制定（昭29）、その後の整備と普及により完全実施率は約85％に達している。現在、嗜好、食事時間、家庭との連けい、食生活の自己開発の問題がある。	高野陽
11	強い子と弱い子	子ども全体的に観察すると、健康・不健康という視点からの区別の他に、強い子・弱い子という評価からの見方もできる。登校拒否、心身症、不適応徴候、情緒障害、非行など、現在とくに年長児に増加している弱い子の問題について述べる。	巻野悟郎
12	おとなの病気のはじまり－予防と健康管理－	子どもの時からおとなの病気がはじまっている。子どもの肥満と将来の動脈硬化や糖尿病との関係や、その危険因子などを考察する。また身体障害、精神遅滞のある子どもの健康管理、生活指導について述べる。	加藤精彦（山梨医科大学教授）
13	思春期の発来（Ⅰ）－男子－	男子の第二次性徴、性機能の発達をもたらす視床下部―下垂体―性腺系のホルモンの動き、精通現象、異性への関心、男子に対する性教育などについて述べる。	同上
14	思春期の発来（Ⅱ）－女子－	女子の第二次性徴、性機能の発達をもたらす視床下部―下垂体―性腺系のホルモンの動き、初経、排卵、女性特有の代謝、女子に対する性教育などについて述べ、思春期女子の婦人科的健康管理、主なる疾病などについて解説する。	古谷博
15	少年期から青年期へ	成年に達すると、実業に就くもの、学業を続けるものなど、子どもは青年となって独立していく、新しい次の世代の父や母なる準備も始められる。この時期の健康について統括した考察をしたい。	同上

＝教育思想（I）＝（R）

〔主任講師：村井　実（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう変化し、どう発展してきたかを代表的な思想家たちについて見ながら、古代より近代の始まりにまで及びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教育思想のはじまり (1) 教育ということば	教育ということばが生まれるということは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起こったか。	村井　実 (大東文化大学教授)
2	教育思想のはじまり (2)子どもを善くする	子どもを善くしたいというところから、そもそも何が善いのか、また、どうしたら善くすることができるのか、などが問題として生ずる。これが教育思想の始まりである。	同上
3	ソクラテス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯にかけて問うと同時に、その問いかたについて、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同上
4	プラトン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想は、ソクラテスに対して、対極ともいうべき特徴をもつに至った。その吟味。	同上
5	イソクラテス	イソクラテスは、ソクラテス、プラトンとほぼ同時代のアテナイの町で、さらに独自の修辞学校を開くことによって、教育思想の第三の原型ともいうべきものを展開してみせた。それは何か。	同上
6	人間主義・理想主義・現実主義	子どもたちを善くしたいという、教育の思想に子どもたち、および善さをどう考えるかに応じて、教育思想の三つの原型が生まれた。ソクラテスの人間主義、プラトンの理想主義、イソクラテスの現実主義である。	同上
7	クインティリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の術としての弁論をもって教育の理想とするに至った。その思想の集大成としての、クインティリアヌスの『弁論家の教育』の特色。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	アウグスティヌス	キリスト教が社会に力を強めるに至って、そのキリスト教的「神」との関わりにおいて人間の教育が考えられる。それと、ギリシアーローマの時代の教育思想との比較。	村井　実
9	中世の教育思想(1)教会の教育－神への形成としての教育	子どもたちを善くしたいという、その善さが、理想としての神とされ、その神にむかって子どもたちを形成することが教育と考えられた。しかし、神を求めることよりも、神に基づいての形成が強制された。還相の理想主義といえる。	同　上
10	中世の教育思想(2)　世俗の教育	教会が掲げる神の理想の下で、世俗の世界では宮廷は宮廷なりに、商人は商人なりに、職人は職人なりに、社会階層ごとに現実主義的な教育を展開した。思想上、理想主義と現実主義との癒着が生じたのである。	同　上
11	ルネサンスの教育思想	久しい中世の教会による桎梏からの解放を求める動きが、ギリシャ、ラテン時代の人間像を理想に掲げる人文主義の教育思想を生んだ。代表的な人物にエラスムス、トーマス・モアなどが挙げられる。	同　上
12	宗教改革の教育思想ールターとカルヴァン	中世は、人間にとっての「善さ」＝神が教会に独占された時代といえる。それを教会から開放して、聖書を通しての人間との直接の関係に置こうとしたのが、ルターとカルヴァン、宗教改革の思想家たちであった。その教育上の意味は何か。	同　上
13	ラブレーとモンテーニュ	人文主義の教育が形式化して「キケロ主義」と評されるようになるのに対して、形式よりも内容、ことばよりも感覚や理性、知識よりも経験を重んじようとする実学主義が台頭した。中世以来の理想主義的な大勢に対しては、現実主義的な思想の新しい形での復活である。	同　上
14	コメニウス	「知る」という働きの重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化する方法と組織が考察される。―近代を支配するに至った実学主義的教育思想のスタート	同　上
15	思想の系譜　現実主義の再生	教育の思想は、子どもを善くしたいという人々の意欲に貫かれて、人間主義的、理想主義的など、時どきの政治的、経済的、文化的等の状況に応じて変化しながら発展していく。その経過の回顧と展望。	同　上

＝教育思想（II）＝（R）

〔主任講師：村井　実(大東文化大学教授)〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう出現し、どう変化し、どう発展してきたかを、とくに近代の始まりから現代までについて、振り返ってみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現実主義の広がり―階層性と子ども観	ロックは、イギリス紳士階層の教育思想の代弁者として出現した。この階層的現実主義が絶対主義国家に広がるその際、子ども、あるいは人間は、どういうものと見られたか。―子ども観の問題	村井　実（大東文化大学教授）
2	ルソー	「造物主の手が出るときはすべてが善いのだが人間の手にかかってすべてがダメにされている」という革命的な宣言。―その教育思想的な意味は何か。	同上
3	汎愛派の人々	ルソーの影響下に、人間、自然、感覚と身体への関心等をもとに、ドイツに汎愛派の運動が生じた。バゼドウ、ザルツマンなどを代表とするが、とくにザルツマンについてその特色を見てみた。	同上
4	カント	人間と自然を重んずるというルソーの系譜に立ち、同時に実践上では汎愛派の実践に同調したが、カントは、両者の現実主義的な関心をはるかに越え出る、独特の思想を説いた。これは、人間性理念の完成という、その意味での新しい理想主義思想―理念主義―ともいうべきものの力強い宣言であった。	同上
5	コンドルセ―フランス革命の教育思想	フランス革命は、教育上、歴史的な二つの問題を提起した。第一は、圧制への抵抗としての自由と平等の強調であり、第二は、国家による公教育という考えである。この二つの、ほとんど矛盾的といってよい要求の、最初の調停者として、コンドルセが出現した。	同上
6	ペスタロッチー	政治への関心、経済への関心と、教育への関心との関係、したがって、政治思想・経済思想と教育思想との関係、こうした関係が、ペスタロッチーによって、どう把握されていたか。	同上
7	フレーベル	アウグスティヌスやルターのばあいの教育思想の中心にあった「神」が、新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」―それが教育の歴史にどういう新しい動きを作り出したか。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	オーウェン ー産業革命と教育	産業革命の進展とともに、社会が労働者の子弟の啓蒙を必要とし、そこから、社会の側からの労働者階級への教育的関心が生じた。こうして社会主義の教育思想が生まれる。その代表者としてのロバート・オーウエンの思想を吟味する。	村井　実
9	ホーレス・マン ーアメリカの教育思想	フランス革命によって提起された、自由・平等と公教育との緊張の解決への道が、新大陸の新国家アメリカにおいて、デモクラシーの理念のもとに拓かれることとなった。その代表的教育思想家、行政家としてホーレス・マンが出現した。	同　上
10	ヘルバルト ー思想と科学	近代に入って、教育に科学の成果としての知識・技術を取り入れると同時に、教育の思想を科学化する関心が高まっていった。その最初の積極的な試みがヘルバルトによって企てられた。ここでは、その試みの意味と限界とを考察する。	同　上
11	デューイ	国家と、知識・技術と、市民と、人間と、この四者の必然的なもつれ合いをどういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
12	森　有　礼	日本における国家と教育の関係をどう考え、どう調整するか、森有礼の国家主義的教育思想の成立を吟味する。	同　上
13	福沢諭吉	森有礼と同時に、同じ国家近代化の意図をもってスタートした福沢諭吉の教育思想が、どういう異なった主張に結晶していったか。その両者の相違の意味。	同　上
14	教育の民主主義 (1)　新しい出発	明治以来の日本での教育、戦争と敗戦、米国教育使節団報告書、教育基本法と新教育、新教育の運命、現在の日本の教育現実等は、教育思想上の問題として何を意味するか。	同　上
15	教育の民主主義 (1)　歩みの現実	日本の戦後の教育は、民主主義を旗印として進められたが、いつの間にか、その理想にかえって遠ざかる方向に進んでいるかに見える。これは何を意味するか、これを、明治以来の潜在的な教育的国家主義の問題として吟味する。	同　上

＝ 学 校 教 育 ＝　（TV）

〔主任講師：深谷昌志（元放送大学教授）〕

全体のねらい

学校教育がどんな意味を持っているかを考えていく。この講義は教育関係の入門的な性格を持たせてあるので、基礎的な事実を深めていく。なお、この科目は昭和58年に作成したものを手直ししたので、放送・印刷教材ともに工夫をこらしてある。学習しやすさを配慮したつもりなので、頑張って学習してほしい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を“いくつかの教育実践”を紹介しながら考えてみる。	深谷昌志（元放送大学教授）
2	日本の学校、その特色	諸外国の学校の姿との対比の中で、日本の学校の特色を、歴史的な背景を含めてとらえ、問題を堀り下げていく。	同上
3	近代の社会と学校の成立	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺子屋などと対比して考える。	中野光（立教大学教授）
4	国家による学校教育の明暗	明治中期の教育政策の展開を歴史的素材として、戦前における国家主義的な学校教育の明暗を解明する。	同上
5	教育改造を求めた動き	大正デモクラシーの時代といわれた第一次大戦後の教育に起った教育改造の動きを、教育の画一化と個性との関連でとらえる。	同上
6	戦後教育の原点	戦後の教育改革の原点を確かめるために、「教育基本法」の理念や、六・三制の成立事情などを考察する。	同上
7	学校をめぐる法規	学校教育と法規との関連を、子どもの「教育を受ける権利」の保障という立場から、学校の実態に即して考える。	下村哲夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校経営の仕組み	教育目標の達成のために、学校では校長をはじめとする教職員が組織化されている。その中でとくに重要な校長の役割を中心をとらえる。	下村哲夫
9	教育内容と授業	学校の教育内容について、教育課程の基準との違いを明確にしながら、教育課程編成の手順や、問題点を考える。	同上
10	教育活動の展開	教科書、補助教材、児童・生徒の懲戒、学校事故など、教育活動の展開に関連して生じるさまざまな問題を、法規との関連でとらえる。	同上
11	学級集団の構造	小学校教育の中心は学校にある。そこで、学級の持つ意味を集団構造の視点からとらえて、その特色を明らかにする。	深谷昌志
12	教師の仕事	教師の専門職化とのかかわりで、教職のあり方をとらえる。特に、教職の特性を教員養成のあり方の点から考える。	同上
13	地域社会と学校	学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。それと同時に、教育と学校との違いもとらえる。	同上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってみても、さまざまな学校論が提起されている。そうした系譜を現代の視角から分析し、あとづける。	同上
15	学校改革の可能性	さまざまな問題点をふまえて、これからの日本の学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえる。	同上

＝教育の方法＝（TV）

〔主任講師：東　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

学習および発達に関する心理学的知見と教授の過程に関する実践的検討とをあわせ、単に既存の教育方法についての知識を得るのみでなく、新しい教育方法の開発、理解、評価の能力を獲得してもらいたいと思う。心理学、教育学、教育工学の諸分野から、数名の講師が分担して講述にあたる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教えるという仕事	柔軟な方法観の必要 従来の学校教育の型にとらわれずに学習の場はどこにも	東　洋 （白百合女子大学教授）
2	教えのスタイル	教えのスタイル やりかた主義 学習観と教師の役割	同　上
3	家庭と学校	小さな対立 家庭の文化、学校の文化 潜在的カリキュラム 潜在的カリキュラムにおける家庭と学校 これからの家庭－学校関係	同　上
4	日本の学校と欧米の学校	外発的動機と内発的動機 動機の日米比較 内面的動機	同　上
5	いろいろな教育(1)	オープンエデケーション（Ⅰ） －イギリス・アメリカでの発展と現状	加藤幸次 （国立教育研究所 第四研究部第二 研究室長）
6	いろいろな教育(2)	オープンエデケーション（Ⅱ） －21世紀に生きる子どもたちのための学校と創造	同　上
7	いろいろな教育(3)	プログラム学習 完全習得学習 応答する環境	菅井勝雄 （大阪大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	いろいろな教育(4)	視聴覚メディア利用の発展 視聴覚メディアの特質 視聴覚メディアと学習指導の形態	高桑康雄 （上智大学教授）
9	いろいろな教育(5)	教育の中のコンピューター(1)(2)(3)	東洋 鈴木靖子 （福武書店ニューメディア研究所研究員）
10	幼児教育に学ぶ	学習者としての幼児－二つの見方 幼児の学習－知的側面 幼児の学習－動機的側面 水道方式	永野重文 （国立教育研究所第三研究部長）
11	障害児の教育	障害児 発達障害児 障害児の鑑別診断 学習課程と障害 治療教育の諸原則	森永良子 （日本電信電話株式会社伊豆通信小児リハビリテーション科副長）
12	人格の成長と教育	人格の成長過程－社会化の過程 自己意識の発達 カウンセリング的アプローチ 教育とカウンセリング	東洋 繁田進 （横浜国立大学助教授）
13	教師はどのように育つか(1)	「育つ」ということ 教師が最初に当面するむずかしさ 4年間の授業の変化(1)－最初の2年間	稲垣忠彦 （東京大学教授）
14	教師はどのように育つか(2)	4年間の授業の変化(2)－後半の2年間 方量の形成とライフ・コース	同上
15	これからの時代と教育方法	学習はいろいろな機会をとらえる 学習環境と教育環境 これからの教育の考え方	東洋

＝学習と指導＝（TV）

～教室の社会学～

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）〕

全体のねらい

「学者と指導」すなわち「何が、どのように、教えられ学ばれるか」は、心理的・主体的な問題であると同時に、文化的、人間関係的な問題である。ここでは、後者、社会学的視点に立って、学習と指導の行なわれる様々な現実の教室を分析し、その改善点を考える。印刷教材では論理的に、TV番組では実例時に、考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教室とは－成長と集団	生涯教育の盛んな今日、「教室」は至るところにあるが、これから考察する教室が「教室」の名に値いするには、どんな教育が必要か、競争と協同、学習集団、準拠集団などの概念から考える。	片岡徳雄（広島大学教授）
2	指導と経営－教師のリーダーシップ	指導者とは、どんな性格で、どんな働きをするのか。父理原理と母性原理、P機能とM機能の違いを考える。また教師と政治家、経営者との共通点と相違点も、比較考察する。	同上
3	教室づくり入門－－行為と感性による	学習者たち1人ひとりの個性が大事にされ、しかも、教室としてまとまっている。そんな教室をどうつくってゆくか。教室の人間関係づくりの新しい方法について考えたい。	倉田侃司（広島文教女子大学教授）
4	教室の組織と運営－参加と責任	教室はメンバーの成長のためにある。教室の組織と運営は、一人一役、全員参加の方式に求められる。それらを、対人感情の現実をからませて考えてゆく。	片岡徳雄
5	教室の規律と風土－温かさと厳しさ	教室には規律は必要か。そこに、生み出される集団風土は、いかなるものか。支持的風土とその風土をつくる手法とを、理論的・実験的・実践的に考えてゆく。	同上
6	教室の学習内容－－目的と養成	教室は、様々な学習内容を学ぶためにある。カリキュラムはいかに編成されるか。そこで学習者が味わう学習経験とはなにか。そして、教科外の学習、潜在的カリキュラム、そして放送教材と印刷教材の関係などを考える。	同上
7	授業の形態――一斉指導と集団学習	学習教育が始まって以来、最も普及したのは、一斉指導と呼ばれる授業形態であった。この形態は、最もやりやすいものであるが、欠点も多い。授業の三つの構造要因を手がかりにしながら、よい授業の形態について考える。	高旗正人（岡山大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	授業の評価－態度と意欲	ふつう評価というと、狭い意味でのテストによる知的学習効果に限定されがちである。しかし、ここでは、学習者が学習過程を通して身につける意欲や態度の、さらには、指導者の自己反省に役立つ、評価へも視野を広げて考えてみたい。	高旗正人 （岡山大学教授）
9	指導困難者の指導－偏見と信頼	教室で成長するための学習者が、教室で傷つき、むしろ反教室的になることがある。このような指導困難者がどうして生れるか。そしてまた、彼らをどう指導するか。ラベリング論、カウンセリング論、そして態度変容論から考える。	片岡徳雄
10	教室の移動と祭り－体験と解放	教室は、例えば修学旅行や野外キャンプのように、教室外で学習することもある。あるいは、運動会や文化祭のように、場所は学校内でも、学習者の体験を基に祭りの形で学習することもある。これらの行動のもつ意味を、現代の社会的・文化的状況から考えてみたい。	森　　楙 （広島大学教授）
11	幼児の教室－学習と遊び	管理や統制が厳しい学校に比べて、幼稚園や保育所の教室には、まだ自由が残されている。それは、幼児の学習が遊びを通してなされているからである。ここでは、遊びを中心とした幼児の教室の特性を取り上げることで、学習の本来のあり方を考えてみよう。	同　上
12	大学の教室－自学自習の場	大学の授業とその他の学校の授業には違いがあるか。講義はどんな特徴と長短をもつか。日本の大学教育の問題と今後などを、外国の大学教育との比較を通じて考えてみたい。	喜多村和之 （広島大学教授）
13	生涯学習の教室－自発と継続	生涯学習の「教室」を支えている、最も大きな要因は、メンバーの自発的で継続的な学習への意志である。それを、どのように引き出し、伸ばしてゆくか。学習参加度や人間関係、さらにはリーダーシップとのかかわりで、多角的に考察する。	住岡英毅 （滋賀大学助教授）
14	教室の歴史－日本の場合	教師の歴史は人類の歴史とともに古い。教室の教師のコミュニケーション形態の移り変りを探るとともに、日本の教室の人間関係の変遷をも、その社会的背景を合わせつつ、考える。	片岡徳雄
15	期待される教師像－人格と技術	教育の根源は教師の人にある。教室の教師に、今なにが求められているか、教師の人格の問題を、指導技術との関係において考えたい。そして、なお残された課題を、幼児教育、初等教育、中等教育、高等教育のそれぞれの教師について考える。	同　上

＝言語と教育＝（R）

〔主任講師：村石昭三（埼玉大学教授）〕

全体のねらい

人間の言語習得の問題に触れながら、言語発達に即した教育とはどうあるべきかを考える。このため言語の機能から始め、音声、文字、語彙、文法の諸能力の習得に触れ、表現、理解における創造性の問題までを扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	言語の機能	(1)伝え・伝わる (2)ことばの世界 (3)言い惜しみ、聞き惜しむ (4)ことばかけ、などに関する事例から、言語の機能とは何かを考える。	村石昭三（埼玉大学教授）
2	音と声	(1)ことばの誕生 (2)リズムの世界 (3)音と声のひびき、などに関する事例から、子どもの持つ言語への直観力（言語感覚）について考える。	同上
3	音から文字へ	(1)一音一字対応 (2)音と文字の有意味性 (3)ひらがなの機能、などに関する事例から、子どもにとって文字とは何かを考える。	同上
4	助詞の使い分け	(1)「も」と「は」 (2)未来年の文法 (3)助詞の習得 (4)助詞の修正 (5)文法への興味、などに関する事例から、機能語の問題を考える。	同上
5	語彙の習得 －好きな言葉－	(1)好きな言葉・嫌いな言葉、(2)「行く」と「来る」 (3)意味を習得する過程、などに関する事例から、語彙習得の順序性について考える。	同上
6	語彙の習得 －認知の方向性－	(1)あべこべ (2)対義の複合語 (3)順行と逆行、などに関する事例から、認知の方向性について考える。	同上
7	語彙の習得 －助数詞－	(1)助数詞はどれだけ (2)文化の変容と助数詞 (3)概念の発達と助数詞 (4)意味の構造化、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	語彙の習得 ー概念の意味づけー	(1)ことばで描く世界　(2)仲間づくり　(3)定義　(4)意味づけ、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	村石昭三
9	生活のことば	(1)保育に拾う　(2)目主焼き　(3)へのへのもへじ　(4)ファンタジーの世界、などに関する事例から、生活のことばの意味について考える。	同　上
10	絵本ー絵を読む	(1)絵を読む　(2)話の先を読む　(3)会話を読む　(4)「見え」を読む、などに関する事例から、読みとは何かについて考える。	同　上
11	ことば遊び ・文字遊び ー表現の心	(1)ことば遊び　(2)文字遊び　(3)ことば遊び、文字と遊ぶ、などに触れながら言語教育の中での意味を考える。	同　上
12	ことばと創造性	(1)子どもらしさとは　(2)話をつくる心、などに関する事例から、創造性の意味を考える。	同　上
13	話づくりと創造性	(1)ファンタジー　(2)話づくりの技法　(3)ロダーリのファンタジー論　(4)表現力とファンタジー、などに関する事例から、文章表現と創造性の問題を考える。	同　上
14	こ　と　わ　ざ	(1)ことわざの解釈違い　(2)ことわざの打ち返しに関する事例から、言語生活における、ことわざ、名言の意味について考える。	同　上
15	日本人の読み書き能力	(1)世界の読み書き能力　(2)日本における読み書き能力調査、(3)読み書き能力の基準、(4)読み書き能力の改善などから、国際比較や暦年調査の比較をし言語と教育の問題を総括する。	同　上

＝ 道 徳 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：宇佐美寛（千葉大学教授）〕

全体のねらい

道徳という事実の中心的部分は、社会的問題状況における個人の意志決定である。そして、どんな教育でも、この意志決定の能力に何らかの影響を与えている。その意味では、およそ教育というものは、道徳教育である。被教育者の道徳に影響しない教育などというものはあり得ないのである。だから、学校で行なわれている道徳教育一般を論じたのでは、学校で行なわれる教育の全てを扱うことになり、あまりに広くなりすぎる。そこで、この科目では、特に「道徳教育」を意識して計画的に特定の内容・方法で行なっている教育実践を論ずる。具体的には、いわゆる「道徳」の時間の問題を中心に論ずる。

第1章　道徳教育と「道徳」

1. Ⅰ　かくれたカリキュラム
2. Ⅱ　向山洋一氏の実践
3. Ⅲ　事例（現状の諸特徴）

第2章　「道徳」の現状

4. Ⅰ　「道徳」のしくみ
5. Ⅱ　事例（「道徳」の症状）

第3章　「道徳」の資料

6. Ⅰ　「ぼくはこうかいしない」
7. Ⅱ　「気持ち」

第4章　「言葉と経験」

8. Ⅰ　言葉による教育
9. Ⅱ　事実
10. Ⅲ　新しい認識
11. Ⅳ　何を教えたいか

第5章　道徳教育の今後

12. Ⅰ　事例（望ましくない事態）
13. Ⅱ　事例（今後の可能性）
14. 〃
15. 〃

＝教　育　評　価＝　（R）

〔主任講師：肥田野直（放送大学教授）〕

全体のねらい

教育評価は「点数をつけること」を意味すると考えられやすい。しかし、本来の教育評価は、児童・生徒の個性に応じた指導を行い、その実態に即して教育条件を改善するために必要な情報を集め、それぞれの目的に適した形で提供するものである。受講者の身近な経験を素材としながら、教育評価についての理解を深めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育評価とは	「教育評価」には暗いイメージがつきまとっている。ここでは教育評価の全体像を正確に理解するために、いくつかの視点から考えてみる。	肥田野　直（放送大学教授）
2	自己評価と他者評価	自己概念の形成に対して自己評価と他者評価の果たす役割、評価のもつ動機づけの積極的機能と消極的機能などについて考える。	同　上
3	学習過程と評価	教育目標・指導計画を設定するときの評価の活用、学習ー指導過程の中における形質的評価の意義と方法などについて考えてみる。	同　上
4	知識・思考の評価	学習完了後に行われる総括的評価における相対評価、到達度評価、個人内評価、進歩状況の評価の意義について考える。方法としては認知的領域の知識・思考の評価法、とくに学力検査法の理解を深める。	同　上
5	技能・習慣の評価	精神運動的領域の技能・習慣の評価法について、観察法、面接法、評定尺度法を中心として考える。	同　上
6	興味・意欲の評価	情意的領域の興味・意欲の評価法について、質問紙法、興味検査、達成動機測定、価値観調査を中心に考える。	同　上 宮本　美沙子（日本女子大学教授）
7	適性の評価	適性及び進路指導の意義を考えるとともに、レディネス検査、進学適性検査、職業適性検査について理解を深める。	肥田野　直

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	性格の評価	学習指導、生徒指導のいずれにも必要な性格の評価法として、目録法（質問紙法）、作業検査法、投影法について理解を深める。	肥田野　直 高橋一郎 （東京都荒川区立第6中学校教頭）
9	対人関係の評価	学級内の友人関係、親子関係、児童・生徒―教師関係の評価法を、相互評価法を中心として考える。	肥田野　直
10	試験・検査の影響	試験や検査が与える悪影響を減じ、積極的効果を発揮させるための問題作成法や実施法について考える。	同　上
11	評価と指導	教師が評価結果を有効に活用するためのさまざまな方法や指導態度について考える。	同　上 井上健治 （東京大学教授）
12	指導要録と通知表	評価の公的記録である学籍簿及び指導要録の変遷とそこに示される評価観の変化を考察するとともに、通知表（通信簿）の機能について考える。	肥田野　直
13	資格試験と選抜試験	資格試験と選抜試験の性格と役割を明確にし資格試験についての理解を深める。選抜試験については入学試験制度の歴史を考察する。	同　上
14	学力調査	学力調査の方法とその結果の教育改善への反映について歴史的に考察するとともに、国際学力調査と全米学力調査についての理解を深める。	赤木愛和 （国立教育研究所研究室長）
15	教育評価をめぐる諸問題	教育条件を改善するための評価として、授業分析や学校評価などを考察するとともに、他者評価を能動的に自己概念形成のために取り入れる評価観の確立について考える。	肥田野　直

＝ 家 庭 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：山村賢明（立教大学教授）〕

全体のねらい

家庭教育の問題を、乳幼児にたいするしつけや教育のハウ・ツー的手引としてではなく、人間が一人前の大人になる発達の過程を見通したうえで、日本の社会や文化という広い観点から、原理的・体系的にとらえたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と家庭	家庭教育というものを、子どもが一人前の大人へと発達していく社会化の過程のなかに位置づける。そして、そこでの家族の役割を取り上げ、家庭教育は家族の日常生活に即して、実際的に行われるべきことを示す。	山村賢明（立教大学教授）
2	日本人の形成と家庭	家庭教育は単に一個の人間の成長・発達であるだけでなく、それぞれの社会の文化の再生産の役割をも担う。具体的には、日本語や基本的生活様式の獲得を通しての日本人の形成を考える。	同上
3	家庭の教育・学校の教育	日常的しつけ機関としての家庭と、専門的教育機関としての学校のそれぞれの特質と相違を考え、両者が協力しつつも、それぞれ固有の機能を果たすことによってこそ、子どもの健全な発達が可能になることを明らかにする。	同上
4	母親の役割 ― 愛の原体験 ―	子どもの社会化にとっての母親の役割の本質と子どもの発達に応じたその役割の変化を考える。そして母親の役割の中心が、人間的な愛の感情を子どものなかに原初的に形成することであることを示す。	同上
5	父親の役割 ―権威の原体験―	母親と異なり、人間社会に特徴的に見られるという父親の役割の諸相を取りあげ、とりわけその第一次的役割が、規範意識や道徳の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを述べる。	同上
6	性別役割としつけ	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得されるものであること、性別役割は時代や社会によって異なるものであることを示し、男女平等をめざす家庭教育について考える。	同上
7	きょうだい関係の意義	両親の下でのきょうだい間の平等と庇護、親和の競争といった関係が、人間の発達に与える重要な意義を指摘し、今日の一人っ子的状況がもつ問題点について述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本の子ども観 －しつけの前提－	しつけや家庭教育の前提としての子ども観は、歴史・社会的に変わるものであることを示し、日本の性善説的子ども観の特徴を明らかにし、しつけにおける明確な言葉による要求の必要性を論じる。	山村賢明
9	母子関係への偏り	日本の親子関係においては、特に母と子の密着が濃厚であることを指摘し、それが結果的に父子関係を疎遠にし、甘えを助長し、規範意識をあいまいにさせるような効果をうみ出すことを問題にする。	同　上
10	家庭からの 集団主義	日本人の行動様式の特徴とされる日本的集団主義というものが、先ず家庭のなかからつくられることを示し、そのような家庭のなかで個人の自律性や主体性を伸ばすしつけについて考える。	同　上
11	小核家族化の問題	核家族化と情報過多は育児不安を、また子供数の減少と生活水準の向上は過保護を必然的にもたらす傾向をもつことを述べ、さらにそれから脱出する方法や、祖父母の役割についても触れる。	同　上
12	「見えない父親」 と子ども	父親の意義の曖昧化は現代の工業化社会一般の問題であるが、ここでは特にその日本的状況を指摘し、父親の回復なしには、家庭教育の機能も、子どもの問題行動への対応も困難になることを論じる。	同　上
13	子どもを 「管理する母親」	父親とは逆に、伝統的な母子関係の濃密さも手伝って、現代の母親はますます顕在化し、子どもの生活をすみずみまで管理する傾向があることを述べ、それが子どものパーソナリティに及ぼす影響について指摘する。	同　上
14	受験体制と家庭	受験体制のなかに組み込まれてしまった子どもたちの生活、偏差値に振り回され、学校の下請け機関になってしまう家庭のあり方を取りあげ、子どもを見る親の目に、勉強の成績以外の多様な物差が必要であることを述べる。	同　上
15	これからの家庭教育	全体の締め括りとして、家庭教育の基本的役割を要約し、現代の社会状況のなかで、本来の家庭教育を再生させ、２１世紀の国際社会に向けてしなやかでたくましい子どもを育成する方途を探る。	同　上

＝ 児　童　観 ＝（R）

〔主任講師：深谷昌志（元放送大学教授）〕

全体のねらい

子どもについての見方を概観しようというのが、本講義の目標である。全体は三部構成をとっており、まず4回までで、欧米の児童観をさぐる。次いで、5～9回で、日本の児童観を歴史的に掘り下げた後、10～14回で、臨床心理学の立場からの児童観をまとめる。そして、最後に、未来の児童観にもふれてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子　羊　た　ち ―西洋の児童観(1)	牧畜と役畜の高度な発達が西洋文明の基礎であり、そこで育まれた動物イメージは子どもに投影された。子どもたちははじめ子羊に、ついで子馬にたとえられた。明確な教育目標と計画性、教師の主体性という西洋の教育の特徴は、この児童観と表裏の関係にある。	舘　　昭 （放送教育開発センター助教授）
2	タブラ・ラサ ―西洋の児童観(2)	工業化の波が西洋におこると、児童に対する無機物イメージが支配的となった。素材に対する加工可能性の飛躍的な発展は、子どもの教育可能性の信念の源であった。子どもたちがあらゆる文字を書き込める白紙（タブラ・ラサ）に見立てられ、工場モデルの近代学校が成立した。 ゲストは西洋教育史の宮沢康人東京大学教授。	同　　上
3	子　供　の　発　見 ―西洋の児童観(2)	動物イメージと無機物イメージの濃厚な西洋社で、時として植物イメージがとてつもなく大きな役割を果たす。ルソーが提起した教育観は、伝統的な西洋のそれと正反対の、子どもの主体性に基礎を置くものであった。そしてその背景に植物イメージが躍動する。ゲストは宮沢康人東京大学教授。	同　　上
4	内　的　世　界 ―西洋の児童観(4)	ヒューマニズムの児童観が現代の西洋で力を得てきている。科学によって人間が解剖される時、子どもの動物視、無機物視は極限に達する。そうした時代のヒューマニズムの橋頭堡は、人間の内的世界の発見によってなされた。新しい児童観が西洋社会に育ちつつある。	同　　上
5	児　　童　　観 ・　東　　西	子どものとらえ方に、西欧と日本との間にかなりの開きが認められる。そこで、前回までの経過をふまえ、西洋教育史の専門家・志村鏡一郎静岡大学教授を招いて、日本の児童観の特色を、欧米との対比の中でとらえていきたい。	深　谷　昌　志 （元放送大学教授）
6	児童観の成立	子どもをいつくしむのが、日本の伝統だといわれる。この回では、藩学や寺子屋の時代にさかのぼって、日本の児童観の源をたしかめてみたい。放送教材のゲストは、日本教育史の専門家で、児童観にくわしい石川松太郎日本女子大学教授である。	同　　上
7	日本の近代と児童観	日本の近代化につれて、学校で学ぶ子どもたちが増加してくる。それだけに、学校関係者が、子どもをどうとらえていたのかが重要になる。そこで、児童規則などを素材として児童観をとらえてみたい。ゲストは、石川松太郎教授。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	児童観の転換	大正時代の新教育運動は童心礼讃とよばれるような児童観を生み出した。そこで、新教育運動の児童観を紹介すると同時に、児童文学にあらわれた児童観の分析を、児童文学者の西本鶏介氏とともに掘り下げてみたいと思っている。	深谷昌志
9	情報化社会の中で育つ	現代の子どもを特徴づけているものは、マス・メディアとのふれ合いであろう。そしてテレビ育ちとよばれるような成長のスタイルをたどる子が多い。そこで、マンガなども素材としながら、情報化社会の到来が児童観に与えた影響を考えていきたい。	同上
10	現代の子どもを どう理解するか —母子関係を中心に—	母子関係に問題のある具体的事例をあげて、その問題の背後にある心理を中心に、現代の子どもをどう理解したらよいのか述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
11	現代の子どもを どう理解するか —父子関係を中心に—	父子関係に起因する実際の治療事例を紹介する。そして、その子どもの治療過程を論じながら、現代の子どものもつ特徴をあげ、子どもをどう理解したらよいか考えを述べる。	同上
12	現代の子どもを どう理解するか —兄弟関係を中心に—	或る具体的な治療事例を紹介する。そして、その事例を中心に、現代の子どもの兄弟関係について述べ、彼等をどのように理解したらよいのか考察する。	同上
13	現代の子どもを どう理解するか —児童期と思春期—	思春期前期の治療事例をあげ、現代の子どもの児童期から青年期に到る問題点を浮彫りにする。そして、この時期の子どもたちをどう理解したらよいのか、述べる。	同上
14	現代の子どもたち	心理臨床の場で接する子どもたちを通して、現代の子どもたちの特徴についてまとめ、我々大人は、今後どのようにして子どもたちを理解していったらよいのか考察する。	同上
15	未来の子どもたち	これまで、①欧米の児童観から始まって、②日本の児童観を概観し、最後に、③臨床心理学の立場から、子どもをどう見るのかを考察してきた。今日は、それらの立場をふまえ未来の子どもたちについて、考察を進めたいと思う。	深谷昌志

＝ 情 操 の 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）
　　高萩保治（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

現代社会の非人間的なゆがみの多くは、人間の情操の貧しさから来ている。今こそ、豊かな情操をその育成に期待されるところが大きい。ここでは、この重要な情操の形成と教育について、子ども文化や子どもの生活から考える。とくに、子どもの読み物や音楽や遊びの領域をとりあげ具体的に考えてゆく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	子ども文化と子どもの情操	子ども自らが音楽するとは、どういうことか。子どもの文化とは。子どもの情操とは。そして、子どもの美的情操とは。文化と情操の一般論から考える。	片岡徳雄（広島大学教授） 高萩保治（東京学芸大学教授）
2	子どもの遊び － 今と昔 －	情操の原点は遊びにある。今と昔の遊びの特性を比較する中で、情操と遊びとの関連を明らかにし、豊かな情操や感性の育ちに対して果たす遊びの役割を検討する。	森 楙（広島大学教授）
3	遊びと授業	「遊び」と「授業」はどのような関係があるだろうか。その理論と実践例をたどりながら、遊びと授業の情操（教育）上の位置について考える。	野村幸治（広島大学助教授）
4	ごっこ遊びからクリエイティブ・ドラマへ	ドラマづくりの過程をたどることで、情操教育におけるドラマの教育的意義について考える。	倉田侃司（広島文教女子大学教授）
5	幼児の本	子どもが最初に出会う本、絵本をとりあげる。幼児にとって絵本とは何か、情操を育てる絵本とはどのようなものか、そして子育てに絵本を生かすにはどうすればよいかについて考える。	植田ひとみ（広島文教女子大学助教授）
6	子どもの本 － 今と昔 －	子どもの本は、歴史の上でどのように現れているか。日本と外国に分けて、考察する。近世はどうか。ジャンル別に、それぞれの時代を考えてみる。	須田康之（比治山女子短期大学助手）
7	子どもの読書生活 I － その影響 －	いまや子どもの情操の基本的トーンは、学校教育よりも、アニメや劇画など映像的マス・メディアを中心とする大衆文化によってかたちづくられているのではないか。ここでは現在の子どもたちの情操の特徴を、子ども大衆文化の内容と関連させながらみていく。	片岡徳雄

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもの読書生活Ⅱ －その方法－	本を読まない子どもが増えてきている現状の中で、情操を育てるための子どもの読書の導き方や本の選び方を、発達の特質に応じた適書を選び読ませるという観点から具体的に考える。	大槻和夫 （広島大学教授）
9	文学の授業	文学の授業の現状は、情操を育てるという観点からみた場合、どういう問題があるか。その問題を克服するためにはどうすればよいか。教材「わらぐつの中の神様」を例にして考える。	同上
10	子どもにとって音楽とは	子どもの発達や指導法に焦点をあてて音楽学習を考察し、音でコミュニケートするという音楽の原点に帰って、学ぶ音楽から楽しむ音楽へと創造的な展開について考える。	高萩保治
11	明治・大正の子どもの音楽（うた） －唱歌教育をとおして－	西洋のメロディーを借りて出発した唱歌は、時代とともに子どもの歌として位置づいていった。それらを言文一致の唱歌、文部省唱歌、童謡などを通して考えてゆく。	澤崎真彦 （東京学芸大学助教授）
12	昭和の子どもの音楽	昭和の初めから今日までの時期における子どもの歌について、マス・メディアと学校の二つの場から概観し、それらの歌が、時代の状況の中からどのように生まれてきたかを考える。	中嶋恒雄 （山梨大学教授）
13	現代の子どもの音楽	現代の子どもの歌を、音楽構造の上から分析し、それらの歌が、子どもたちの生活とどのように関連しながら取り入れられているかを考える。	同上
14	子ども大衆文化 －アニメ・劇画を中心に－	子どもらは氾濫するマスコミ文化の真っただ中で生活し、多くの面で影響を受けている。ここでは、子どもらの情感や感性に特に影響を与えるマンガを中心に、その価値観を探る。	森楙 西田忠男 （島根大学講師）
15	子どもの遊びと自己実現	現代の社会と子どもの病理の多くは、子ども文化と子どもの情操のゆがみから来ている。これからの社会の形態的・価値的変容を予想しつつ情操教育の将来について考える。	片岡徳雄 高萩保治

＝青少年文化＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（元放送大学教授）
〃　：門脇厚司（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

青少年文化を、前半は子ども文化、後半は青年文化とに分けて考察を進めていく。文化論なので、放送教材の中ではロケなどを多用し、印刷教材とデータを紹介する形をとる。したがって、放送と印刷の教材をあわせる形で学習を進めて欲しい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青少年文化のとらえ方	青少年文化を、青年文化と子ども文化とに分け、それぞれの文化の特性を明らかにする。そして、青少年文化の現状を概観する。	深谷昌志（元放送大学教授）
2	玩具の変遷	さまざまな玩具を紹介しながら、子どもの心を豊かに育てる玩具はどういうものなのか考えていく。また、現代の玩具がそうした条件を備えているか検討する。	同上
3	遊びの機能	子どもの人間形成にとっての遊びの意味を発達段階をふまえて考察する。続いて「群れ型」から「孤独型」へ、遊びが変遷したことにより、子どもの発達にどのような歪みが生じたのかを掘り下げていく。	同上
4	テレビとのつき合い	テレビとのふれ合いを、子どもたちはどうとらえているのか。子ども番組の変遷をふりかえりつつ、子どもにとっての望ましい視聴態度とは何かを検討していく。	同上
5	仲間集団のゆくえ	現代の子どもはギャング集団を失い、友をもたずに成長していく。そうした現状をふまえ、仲間集団の中で子どもたちが身につけたものは何なのかを考えていく。	同上
6	子どもの金銭観	豊かな社会の中で子どもたちは成長していく。そうした子どもたちの金銭観を子どもの持物などと関連させて考えていく。	同上
7	性差をめぐって	おとなの間では、性差の少ない社会への動きが顕著だが、子どもの間では、性差が拡大する傾向をたどっている。ここでは、少女文化の性質を、女子マンガや交換日記、人形などを手がかりとして掘り下げていく。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子ども文化の再生	子ども文化を再生するために、どういう方策が必要なのかを、遊び場や児童公園などと関連させて考える。あわせて、子どものすこやかな成長を保証する環境作りの必要性を考えていきたい。	深谷昌志
9	青年期と青年	青年文化を理解するには、その担い手たる青年集団のさまざまな特性を理解しておく必要がある。そこで、まず青年期に特有の身体的・精神的特性をみる。	門脇厚司
10	青年文化論の成立	青年文化を学問的な分析の対象としはじめた時代的背景と青年文化論にみられる代表的な見解を紹介する。また、青年文化の一般的な特質を整理し理解につとめる。	同上
11	近代社会と若者文化	若者（青年）文化は、社会の近代化にともない発生してきた文化といえるが、若者たちは、それぞれの時代に、どのように生き、その成果としてどんな文化を生み出してきたかを歴史的にたどる。	同上
12	現代社会と若者文化の変容	現在のわが国の青年文化を生み出してきた戦後日本の社会的特徴をみつつ、今日の若者文化がどのような質的変化をとげてきたかについて言及する。	同上
13	現代の若者文化・1	―― 浮遊文化の諸相 今日の若者文化の１つの特徴を“浮遊文化”ととらえ、そうした文化を支える青年の意識や価値観を紹介しつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同上
14	現代の若者文化・2	―― 閉塞文化の諸相 今日の若者文化のあと１つの特徴を“閉塞文化”ととらえ、このような文化を生む若者の気分や生活を考えつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同上
15	青年文化の展望	社会が大きく変わりつつある今日、青年文化は今後どのような方向をたどるのか。強化説と消滅説の２つの見解を軸に、若者文化と若者の将来を展望する。	同上

＝地域社会と学校＝（TV）

〔主任講師：溝口謙三（東北福祉大学教授）〕

全体のねらい

学校は、国の政策による制度として普及発達してきた。しかし学校は異った地域社会の中にあり、子どもたちはその地域の中で生活し成長している。学校教育は、国の統制と地域社会の独自性とをどのように切結んでいくべきか。最近の社会と地域の変貌を背景にすえ、地域類型を軸にして、学校教育の在り方を多面的に考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学校と社会	学校は、計画的な教育の場として、子どもたちを望ましい人間に形成し、社会人となることをねがう。子どもを受け入れる社会は、社会の進歩に役立つ人間を期待する。教育において、学校と社会はどのようにかかわるのか、その相互関係を考えて序論とする。	溝口謙三（東北福祉大学教授）
2	教育と社会	人間は生まれた後に、多くの行動を学びとって人間と成っていく。その場は家庭、交友、学校である。これらの学習の場は一定の地域社会の中に在る。それが地域とどのようにかかわりまた支えられているかを理論的に考える。	同上
3	教育における地域社会	地域社会とは、人間が生活する具体的な場である。教育においては、学校を中核として、地域社会をどう考え、どのような範囲ととらえるか。さらに最近の地域変貌が学校教育にどう影響しているかを検討する。	同上
4	地域社会の中の教育	子どもは地域社会の中で生活し成長する。地域は、それぞれの伝統と条件にもとづいて慣習や規制や価値観などを"仕込む"。このような地域の教育力はどのようにはたらくのか。それが学校教育とどうかかわるのかを考える。	同上
5	地域教育運動の実践	地域と学校とを結ぼうとす動きは戦前からあった。さらに戦後は、新しい地域学校運動も起こった。郷土教育、生活綴方運動、地域社会学校の試みなどの実践を通して改めて地域と学校とのかかわりを見直す。	同上
6	地域社会の変動と学校の変化	明治以来、国策としての近代学校制度は、それぞれの地域社会に支えられて発達してきた。最近の社会の変動と学校教育の変化によって、学校と地域との関係は変化し、相互に離れてきたとされる。この事実を明らかにし、次の地域類型別の学校分析の仮説とする。	同上
7	都市の学校	地域類型の一つとしての都市は、人工の文化に支えられて現代社会の先端にあり、子どもたちの学習・生活環境も豊かである。反面、過密といわれる社会状況の中で、子どもたちはかえって孤独になっているといわれる。都市の教育状況と学校の役割を考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	農村の学校	都市と対比される農村は、生命のある自然に包まれている。その学習環境は人間にとって欠くことのできない生活経験の場とされる。しかしいまの農村の生活は都市化され、子どもたちも身近な自然から遠さかっている。ここに農村学校の新たな役割がある。	溝口謙三
9	へき地の学校	"恵まれない地域"とされるへき地は、さらに過疎化に苦しんでいるといわれる。しかし豊かな自然を温存するへき地では、マイナスの要因を逆転するきっかけが見出せないだろうか。へき地に成長する子どもたちと学校の様子をさぐる。	同　上
10	大きな学校・小さな学校	定員を定めない小・中学校では、大きな地域では子どもも多く学校も大きくなる。小さな地域では学校も小さい。学校規模の大小はどのように規制されているのか。またそれが学校教育にどのような影響を与えるかを考える。	同　上
11	学校統合と学校寄宿舎	学校の規模が規制され、とくに小さな地域の小規模学校が非効率とされると、統廃合がなされる。その結果、自宅からの通学ができなくなると学校寄宿舎に入ることになる。地域との関連で出てくるこのような学校の実態から、新しい教育の問題を考える。	同　上
12	大きい学級・小さい学級	学校規模の中に学級の大きさの問題がある。学級の大きさも法的に規定されてきたが、狭い地域では数人だけの学級も多い。どれだけの大きさが適切か。ここから学校の集団教育の本質を考える。	同　上
13	複式学級	狭い地域でのごく小さな学校では、数こ学年を1学級に編成した複式学級になる。この"やむをえない"措置が固定化した現在の学級に多くの問題を投げかける。諸外国の学年別学級解体等を事例にしながら集団教育の意味を考え直したい。	同　上
14	地域社会と高校・大学	戦後の新制の高校は、地域のすべての青年に開かれた中等教育として発足し、大学は「一府県一大学」の確認で創設された。この原点にたちかえり拡げられた地域社会の視角から、高校と大学の在り方を見直したい。	同　上
15	地域社会の生涯教育体系	いま構想されている生涯教育の体系を地域社会の基盤でとらえ、幼児保育、学童の校外活動、コミュニティ・カレッジ論などを、学校教育との関連でとらえて、地域社会と学校との関連の問題をしめくくる。	同　上

＝ 生 涯 教 育 論 ＝ （R）

―生涯学習社会の発展をめざして―

〔主任講師：麻生　誠（大阪大学教授）〕

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが、生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内に含んでいる。このような生涯教育の理念と現実を今日の教育状況と関連させながら、学習者の立場に立って新しい生涯教育学を構想してみよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば抽象的な言葉の遊びに終わってしまう恐れのある生涯教育理念を、総合的・統一的な観点からとらえ直してみよう。	麻生　誠（大阪大学教授）
2	生涯教育の社会的背景	「人間は生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし、最近生涯教育論が提唱されてきたのは、この古き理念の新しい意義を要請する社会的条件が発生してきたからである。このことを考えてみよう。	同　上
3	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しうる継続的な学習要求を持っているものであろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
4	日本の生涯教育のルーツを探る	その生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを近世の在野の儒者、中江藤樹の思想と江戸時代の教育書に探ってみよう。	同　上
5	教育政策のなかの生涯教育	1965年、ユネスコにおいてはじめて唱えられた生涯教育論も、20数年の歳月を経て、人間にたとえれば成人に達する齢を重ねたことになる。それはわが国の教育政策に、もろもろの影響を与え続けている。だがその成果たるや未だしの感が深い。生涯教育論が、わが国の政府や地方自治体の教育政策のなかに、どのような影響を与え、どのような成果をもたらしたかを明らかにしてみよう。そして生涯教育の理念と現実のギャップを探ってみよう。	同　上
6	生涯教育と放送利用	放送は、生涯教育機会を社会に拡散させるのに大きな力を持っている。しかしまた、それは教育上無視できない限界もあわせ持っている。これら限界を克服し、放送を生涯教育に生かす手だてを考えてみよう。そのなかで、最近のニューメディアの役割もあわせて考えていこう。	同　上
7	生涯教育を欧米に見る(I) ―アメリカの生涯教育―	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、生涯教育の先進国といえるアメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生涯教育を欧米に見る(Ⅱ) ースウェーデンの生涯教育ー	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的な成人教育としての学習サークル、有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	麻生　誠
9	生涯教育を欧米に見る(Ⅲ) ーソビエトの生涯教育ー	社会主義体制下の生涯教育の事例としてソビエトをみてみよう。そこでは、政府主導型・官僚制・画一性などのデメリットが生じやすい。これらがいかに克服され、どのような社会主義的人間類型が形成されているかをみてみよう。さらに、最近のペレストロイカの動きが、ソビエトの生涯教育をどのように変えていくか予想してみよう。	同　上
10	生涯教育の谷間 ー夜間中学に学ぶ人々ー	わが国は高学歴社会となり、国民の平均的学歴水準は大きく上昇した。高学歴者は、生涯学習にも熱心だし、生涯教育の機会も高学歴者向けのものが多いのが実情である。このような傾向のなかで、低い学歴の者や、義務教育未修了者などの「教育的不利益者」の問題が忘れられていないだろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
11	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。誰でもが「何時でも何処でも学習できる」という生涯教育システムの行・財政的基盤を探り、生涯教育システムを確立するには、行政がどう変わるべきかを検討してみよう。	同　上
12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活圏としての地域社会を基盤として行われている。このような地域社会のなかで、地域住民に対してどのような教育機会が提供され、住民の学習要求をどのように充足させているのかを、一つの地域事例を取り挙げて考えてみよう。そして、地域社会の生涯教育を回復させる道を探ってみよう。	同　上
13	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現れる達成すべき課題を発達課題という。これらの課題を首尾よく達成することによって健康な人格が形成される。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育の果たす役割を考えよう。	同　上
14	成人教育学（アンドラゴジー）をもとめて	これまでの教育学は、子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同　上
15	生涯学習社会の可能性と課題	わが国の生涯教育を支える三本柱である学校教育システム、社会教育システム、職業能力開発システムの実態と問題点を明らかにし、それらをどのように組み合わせていけばわが国の生涯教育システムが確立されるようになるか、その可能性を考えてみよう。	同　上

＝教育社会学＝（TV）

〔主任講師：河野重男（お茶の水女子大学長）
新井郁男（上越教育大学教授）〕

全体のねらい

教育と社会の関係は一方向的ではなく、相互的なものである。教育は社会のあり方や発展をきめる重要な役割を果たすが、同時に教育のあり方や発展は社会の影響を受ける。このような社会の発展を規定しながらも、逆に社会の発展によって規定される教育を、人間の成長発達の過程とかかわらせて、ダイナミックに考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会現象としての教育(1) ～教育とは～	教育は、社会によってその内容、方法、形態、目的などは異るにしても、すべての社会に共通にみられる現象である。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考えてみる。	新井郁男 （上越教育大学教授）
2	社会現象としての教育(2) ～人間の発達と社会～	人間の発達は、単に生物学的・心理学的現象ではなく、人間が人間として発達するためには、人間社会、人間文化の働きかけが不可欠だという意味で、すぐれて、社会的現象であるということについて考える。	同上
3	社会現象としての教育(3) ～実証性・科学性～	理念としての教育あるいは教育技術を志向する教育学ではなく、教育を社会的事実として、実証的に分析する。科学としての教育社会学の特性を明らかにする。教育社会学研究の歴史を概観し、さらにそこで用いられる研究手法について学ぶ。	岡崎友典 （放送大学助教授）
4	社会現象としての教育(4) ～教育調査法～	教育の具体的な事象を、客観的に記述・分析するための手法として教育調査法について、調査目的、調査対象、調査技法などを社会調査の理論を用いて、調査の手順に即して考察する。	同上
5	学校の発達と社会の変化	教育を最も計画的、組織的に行う社会的制度として発達してきた学校は、長い歴史の中では、その目的・体系・機能などに変遷がみられるが、近年は急速な社会変化との間に大きなギャップを生んでいる。このような近況について考えるのが本章のねらいである。	新井郁男
6	学校の近代化と外国教育の受容	学校の発達における外国教育の影響の仕方にはどのようなパターンがあるかについて考える。	同上
7	学校の役割と機能	学校が社会から期待されている役割は何なのか、また、学校が現実に果たしている機能は何なのか。その役割と機能との間にどのようなギャップが生じているのか。このような問題を塾の発達と関連させて考えてみたい。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	職業としての教師	教職の性格をめぐって、これまで多くの議論がなされてきた。専門職論、聖職論、労働者論などを素描しつつ、ここではとくに「職業」として教師が果たす社会的役割を、多様な職種との対比をとおしてその特性を明らかにする。	岡崎友典
9	教師の養成と資格	教師養成の歴史を概観し、さらに高等教育機関で養成される「教員の資格」について，免許状の取得や教員の採用状況（需給関係）などを素材に考える。また教員の再教育・研修の実態についても考察する。	同　上
10	生活者としての教師	新卒の青年教師から半世紀近い教職経験をもつベテラン教師まで、同じ教師でも、生活の体験はさまざまである。社会人としての生活体験が教育実践に反映される過程を、学校組織内の教師集団といった視点から明らかにする。	同　上
11	教育内容と社会	社会の中に存在するさまざまの知識の中から、教育の目的の観点から選択された教育的知識としての教育内容が、いかに社会と深くかかわっているかを、歴史的に考察する。	新井郁男
12	学校と文化	学校には、社会一般の文化を反映しながらも、教師の文化と生徒の文化という二つの文化によって構造化された独自の文化がみられ、これが学校の教育的働きを、促進したり阻害したりしている。この学校文化の中でも特に生徒文化について考える。	同　上
13	学校組織の機能	学校は教育を目的とする組織体（オーガニゼーション）はいかなる特色をもっており、それがどのような機能を果たすのかについて考察する。	同　上
14	教育と政治	教育が社会統制機能を果たすための一つのメカニズムとしての教育行政を中心に考える。	同　上
15	教育と産業	近代社会の成立以降、産業の発展にとって教育は不可欠な条件となった。それは質的に高い労働力を産業に提供することはもとより、産業の構造の転換を促進するにたるだけの科学技術の進歩を教育が保障するからである。この点を歴史的に考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	コミュニティ形成と学校	地域社会の変貌、特にコミュニティ形成の基盤である地域性、共同性そして地域連帯意識が弱化、希薄化している。ここでは新しいコミュニティの創造の必要性を国民の「文化活動の場」としての地域社会と学校の関連でとらえ、地域社会学校の現代的可能性をさぐる。	河野重男（お茶の水女子大学長）
17	社会化 (1) ～社会化とは何か～	社会化の定義、関連する基本的概念について解説する。	新井郁男
18	社会化 (2) ～親の役割～	社会化は人間の一生にかかわる課題であるが、なんといっても、子どもの社会化は最も重要である。その子どもの社会化に、親はどのような役割を果たすべきなのか、という問題を現実の状況に照らしながら考えていく。	同上
19	社会化 (3) ～ の役割～	基礎的集団である家庭から、機能的集団である学校・職場に社会化の機関が移行するにともない、社会化の機能は分化・深化する。ここでは、政治的社会化、職業的社会化、そして性的社会化など、学校・職場で展開される社会化の実態を把握する。	岡崎友典
20	社会化 (4) ～地域社会の役割～	生活の場としての地域社会は、近年急激に変化しており、かつてのように個人の生活を全人格的に包括するわけではないが、その重要性は家族同様むしろ高まっているといえよう。現代社会の地域社会が社会化に果たす役割について、地域生活者としての子どもといった観点から考察する。	同上
21	学歴社会の成立	学歴とは、個人が生涯で得た学校教育の経歴の全体をさすが、学歴主業イデオロギーが支配する「学歴社会」では、最終学校の社会的価値（評価）の序列化が、人々の最大関心事となる。学歴が物言う社会がどのようにして成立し、いかなる問題をもつか考察する。	同上
22	学歴と職業	学歴が一定の職業資格と相関関係をもつとしても、学歴が職業を決定するわけではない。むしろ職業が新たな学歴を要請するのが現代社会であるといえよう。ここでは学歴と職業との間のダイナミックな関係を、職業教育、職業的社会化、企業内教育などからとらえる。	同上
23	試験	義務教育後の教育機関への進学には、何らかの入学試験がともなう。資格試験、競争試験のいずれにおいても、そこで測られる学力の養成・習得をめぐってさまざまな教育問題が生じる。受験地獄に代表されるわが国の試験の状況を、中・高等教育を中心にとらえる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	社会の病理と 教育の病理	社会と教育の関係はいうまでもなく相互規定的である。社会の病理現象が教育に反映されるだけでなく、教育の病理の進行は社会の進歩・発展を阻害する。両者の病理現象の実態を社会機能の観点から、どのようにとらえるか、アプローチの方法について考察する。	河野重男
25	問題行動 ～発達の病理～	近年、青少年の問題行動は枚挙にいとまがない。これらはいずれも、青少年が望ましい発達を阻まれているという意味で、まさに発達の病理にほかならない。ここではとくに、青少年の非行をとりあげ、非行を生み出す諸条件、非行の推移と現況の特質など考察する。	高橋　均 （武蔵大学教授）
26	学校の病理	登校拒否、校内暴力、教師のノイローゼなど教育実践にかかわる病理や、入学試験や就職などの学校制度や教育内容にかかわる病理について、その歴史的・社会的背景についてさぐるとともに、新しい形の学校教育についても検討する。	同　上
27	学校の改革	教育改革の必要性が指摘されて久しい。その際つねに学校改革が中心的課題として提起されながら、制度面についてはほとんど変化はみられない。それはなぜか。ここでは近代学校の歴史をおさえつつ、現代の学校批判における論点を整理し、改革の可能性をさぐる。	児島邦宏 （東京学芸大学助教授）
28	生涯教育論と学校	わが国の教育水準の高さは、学習社会といった概念に象徴的に現れている。学習社会は生涯教育（学習）の社会である。ここでは、生涯教育の理論を学校教育を軸として学び、これからの教育のあり方について検討する。	河野重男
29	情報化社会と学校	現代社会は、大量の情報が氾濫し人々を圧倒し、はては人間がその中に巻き込まれ、引き回され翻弄されて、あたかも人間が機材に使われるような状態を生み出している。ここでは情報化社会の特徴を整理し、情報の内容とその処理能力を高めるための学習形態についても学習する。	同　上
30	国際化と教育	海外生活や旅行はもとより、直接出かけなくとも、他の国の人々や文化に接する機会が増大しているが、日本人のこれへの適応の仕方はきわめて消極的である。この問題を特に異文化理解という観点から考える。	新井郁男

＝青少年の指導＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（元放送大学教授）

全体のねらい

児童・生徒の指導のむつかしさが語られることが多い。子どもたちの成長のスタイルがことなってきたので、これまでの指導方法は有効性を失ないつつある。そこで、本講義では、青少年の指導のあり方を、青少年の実態をふまえつつ、現実的な対応も含めて総括的に堀り下げていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	指導とは(1)人格の構造と発達	人格の構造を3つの領域に分け、教育作用として、よくわからせる、やり方を身につけさせる、やる気を育てるの3つを考える。また人格形成上の発達課題を幼児期から青年期までに分けてとりあげ、その達成のための方法をのべる。	坂本昇一（千葉大学教授）
2	指導とは(2)指導の考え方	指導のねらいとしての自己指導の力の育成の意味、それを達成するためのアプローチ、すなわち子どもに自己決定を与える、存在感（自尊感情）を保証する、そして、人間的ふれあいを基盤にして行うの3つについて具体的事例で説明する。	同上
3	指導とは(3)青少年の理解	青少年の理解のアプローチとして、共感的理解と評価的理解をあげる。前者については事例を中心にして説明する。後者は、主として客観化された検査を中心にする。たとえば、知能検査としてのビネー法や性格検査としてのロールシャッハ検査などを紹介する。	同上
4	指導とは(4)指導の領域と内容	青少年が直面する問題を分類して7つの指導領域を示す。その中の適応指導と進路指導をとくにとりあげ、前者は帰国子女の問題などの例示により、後者は、学級指導の時間での進路指導のあり方を説明することにより、理解を深める。	同上
5	指導とは(5)指導の機能と体制	生徒指導の組織と運営について説明し、さらに学校教育と社会教育の連携について、少年自然の家での活動やボランティア活動を例示して説明する。また、地域ぐるみの活動を展開するための組織・体制のあり方についても説明したい。	同上
6	学校の中で(1)教師の仕事	青少年指導を実際に担うのは教師であろう。もちろん教師の主たる仕事が授業であるのはいうまでもないが、それと同時に教師は児童・生徒の精神面での成長にかかわりを持つ。生徒指導に関連させて、教職の意味を深めていきたい。	深谷昌志（元放送大学教授）
7	学校の中で(2)学級集団	学校の中の子どもたちは、教師から指導を受けるとともに、学級の友だちと時を過す。そうした友の存在は、子どもたちの学校での充足感と密接な関連を持つ。集団としての学級集団の特質を述べ、指導にあたっての留意点を指摘していきたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校の中で(3) 学校の機能	学校は子どもにとって、生活の場でもある。ひとつの制度としての学校をどのように構成していったらよいか。学校のあり方を理論的に深めるとともに、将来の学校像の検討も進めていきたい。	深谷昌志
9	学校の中で(4) 学力の構造	学校の主たる機能は学力をつけることだという。しかし、学力のとらえ方は、かならずしも一義的でない。中でも系統学習の中心の学力と生活単元を媒介とした学力とでは著しい対比を示す。そうした学力のとらえ方を整理し、理論化を図ることにしたい。	同上
10	学校の中で(5) 学校文化	学校には、その学校なりのカラーがあり、そうしたカラーは児童、生徒の人間形成にインフォーマルではあるが、根強い影響を及ぼす。ここでは学校独自のカラーを学校文化ととらえ、その機能を多角的にとらえていきたい。	同上
11	人間形成の観点から(1) 性差の形成	男らしさや女らしさをどう考えるのかは青少年指導にとって、中枢の意味を持つ。特に性差の縮小あるいは伝統的な性的分業意識のゆれ動きが目につく現在、学校の中で、性差をどう指導していったらよいのかを堀り下げていきたい。	同上
12	人間形成の観点から(2) 言語の社会化	現代の子どもたちはマス・メディアの中から育つ。そうした成長を、ここでは言語的な社会化の観点から堀り下げていきたい。特にバーンスタイン教授の言語的社会化理論を中心に、言語面での指導のあり方を比較教育学的な視野をまじえて展開していく。	同上
13	人間形成の観点から(3) 家庭の教育力	現代の子どもたちは、人工的な環境の中で成長し、自然とのふれ合いに欠く。その結果、生活体験などに乏しくなる。キャンプなどの指導が重要になるが、それは学校内での指導と異質なものであろう。自然活動プログラムを展開するさいの留意点を考えていく。	同上
14	人間形成の観点から(4) 自然活動	子どもの成長に家庭は大きなかかわりを持つ。家庭の機能については、別の指導でもさまざまな形で扱われているが、ここでは子どもの人間形成の観点から父親や母親の役割を中心として、家庭の機能を問い直してみたい。	同上
15	人間形成の観点から(5) 個性の幅と文化	日本では、日本語を話し和食を食べる生活を、あたり前だと思う。そのため、人々をとらえるにあたって、同質性を前提とする。そして、差異を認めにくい土壌が持ってくる。生徒指導にあたって、個性の指導がなによりも大事だが、現実には課題が多い。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	問題への対応(1) 「症状の意味を考える」 －偏食を例に－	子どもの問題行動を扱ってゆこうとする際に症状として表面に表われているものは一つの信号に過ぎず、その奥に真の意味がかくされていることが多い。食事行動の異常を例に、症状のもつ意味の多様性を考えてみよう。	深谷和子 （東京学芸大学教授）
17	問題への対応(2) 「問題の根を探す」 －登校拒否を例に－	同じ問題行動でも、その根には様々のものが関わっている。不登校（学校へ行かない）の例をひきながら、その根を堀り下げようとする試みの必要性を示す。	同　上
18	問題への対応(3) 「経過を見る」 －ことばの異常を例に－	子どもは発達途上にある存在で時間と共に症状が少しずつ変化してゆくことが多い。早期に問題の所在を決めてしまうのでなく、経過を見てゆくことが大切である。遊戯観察の例なども紹介しながら発達の経過を見まもることの大切さを指摘する。	同　上
19	問題への対応(4) 「子どもを支える」 －いじめを例に－	すべての問題行動の対応のしかたには治療者として共通に「子どもを支える」必要性がある。遊戯療法を例に使いながら子どもを支えることの意味を探ってゆきたい。	同　上
20	問題への対応(5) 「母親を支える」 －再び登校拒否を例に－	母親は子どもの最大の環境であり、かつ子どもに問題行動が生じた際に、重要な補助治療者の役割を果すものである。母親面接を通して、治療者はどう母親と関りこれを支えれば、子どもの問題行動の指導につながるか考えてみようとする。	同　上
21	非行をめぐって(1) 非行の現状と背景	非行は第三のピークを迎えたといわれる。それと同時に、非行の幼稚化など、非行のさまがわりが説かれている。そこで、まず非行の実態をとらえ、その背景を探ってみたい。	麦島文夫 （帝京大学教授） 松本良夫
22	非行をめぐって(2) 非行の入口	非行といっても軽度のものから重度のものまでが含まれる。非社会性は、軽度な非行に属そうがここでは、そうした非行の入口的な症状をとらえその対応をまとめていく。	麦島文夫
23	非行をめぐって(3) 女子非行	女子の非行は、女性らしさの形成にからんで、複雑な様相を呈する。ここでは、女子非行を例として、非行のメカニズムを堀り下げていきたい。	麦島文夫 内山絢子

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	非行をめぐって(4) 非　行　集　団	非行というと、群れをなして、バイクをのりまわすツッパリグループがイメージにうかぶ。そうした非行集団がどういう特質を持ち、そして非行生徒が何故群れを組みたがるかなどを考えていきたい。	麦　島　文　夫
25	非行をめぐって(5) 非行からの回復	ここでは、シンナー等の薬物乱用などを素材として、非行から回復（再生）するためにどういう対応が望まれるのかを、総合的にとらえていく。あわせて、諸機関との連携の必要性を説く。	麦　島　文　夫 安　香　　宏
26	問題へのアプローチ(1) ー精神分析ー	精神分析の創始者フロイト、Sの考え方とその治療技法をわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 （横浜国立大学教授） 乾　　吉　祐 （慶応大学講師）
27	問題へのアプローチ(2) ー行動療法ー	近年、アメリカを中心に盛んになった行動療法の基本的考え方と治療理論および治療技法についてわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 中　野　良　顕 （筑波大学助教授）
28	問題へのアプローチ(3) ークライエント中心療法ー	来談者中心療法の創始者ロージャス、Cの人となりとその基本的な考え方、および、治療技法をわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 飯　長　喜一郎 （お茶の水女子大学助教授）
29	問題へのアプローチ(4) ー分析心理学ー	ユング、C.G.の人となりとその考え方の基本について紹介し、その治療観および技法についてわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 織　田　尚　生 （甲南大学教授）
30	問題へのアプローチ(5) ー箱庭療法ー	ユングの分析心理学を背景にして生まれた箱庭療法についての基本的な考え方を紹介しあわせて人間の心が癒え、成長してゆくさまを具体的な事例にそくして提出し、検討してゆく。	同　上

＝発達心理学Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の心理－行動は、一般心理学では、感覚・知覚・記憶・思考・言語等々というふうに、要素的な領域にわけて考察されている。発達心理学Ⅱでは、これにならって、人の心理－行動の発達を、上記のような要素ないし領域ごとにみてゆき、教育において発達心理学の果すべき役割について考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	身体の発達	人の身体とその運動能力の発達過程や性的成熟の過程を概観し、あわせて「発達加速現象」について考えてみる。	宮川知彰（放送大学教授）
2	知覚と記憶の発達	人間の知覚や記憶の機能がいかに形成され、その後それがいかに変化していくのかについて考えてみたい。	星薫（放送大学助教授）
3	思考の発達	動作を伴うことなしには困難な問題解決から視点が「中心化」してしまう表象での思考、具体的状況に拘束される論理的思考を経て純粋に抽象的、演繹的に展開できる思考へと発展する思考の発達特徴を概観する。	野呂正（宮城教育大学教授）
4	言語の発達	信号体系の中での言語、話しことばと書きことばの発達、言語と思考との関係、言語の行動調整機能の諸問題について発達的に考える。	同上
5	感情の発達	感情・情緒・情操とよばれる心理－行動の形態が発達するとはどういうことかについて検討して「情操教育」のあり方を考えてみたい。	宮川知彰
6	動機づけと教授・学習	動機づけとは精神的諸活動がどんな状態にあることをさすのかを説明すると共に、特に教授・学習が発達的にいかなる動機づけの過程で成立するのか、ならびに内発的ないし外発的な動機づけの手だてを中心として、教授・学習の有効なあり方について検討する。	寺田晃（東北大学教授）
7	物との交渉の発達	人間は、基本的には、物の世界と人の世界という交差する２つの世界の中で発達していく。ここでは、とくに、物の世界との関わりに焦点をあて、子どもが、それをどのように支配していくかということを発達的に考える。	野呂正

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会性の発達	「社会性」とは何か、また「社会性」の発達とはどういうことかを検討して、その発達過程のあるべきすがたを考えてみよう。	宮川知彰
9	愛着と分離	人の世界、とくに、ここでは、「愛着と分離」ということで特徴づけられる母子相互交渉に焦点をあて、動物研究の新しい知見をも参考にしながら、その世界の中で、子どもがどのように発達していくか、また、発達のつまずきについて考える。	野呂正
10	遊びと精神発達	物と人とが交差する典型的な世界としての遊びの中で、子どもたちは、何を、どのように発達させていくかについて考える。	同上
11	知能と創造性	知能とは何か。知能の概念の変遷や知能測定の方法とその限界、さらにさまざまな認知機能の発達を概観し、そのうえで創造性との関係を考えてみよう。	柏木恵子（東京女子大学教授）
12	成熟と学習	学習の適期の問題を、とくに、ここでは、成熟と学習との関係という点からとらえ、その中で、伝統的なレディネス観のとらえ直し、そして新しいレディネス観の創造について考えてみる。	野呂正
13	自己意識の発達と性格形成	自己をどう認知し、自己像をどう作っていくか、自己概念による人格形成、そして他律から自律への道すじと社会とのかかわりについて、概観する。	柏木恵子
14	発達診断	発達診断とは何かの定義と発達診断に関する諸理論を説明すると共に、具体的に身体と運動機能・知的能力・人格・学力・適性などの精神的諸機能の発達に関する測定と評価、ならびに発達障害の臨床的な診断・判断の方法と技術、問題点などについて解説する。	寺田晃
15	発達心理学と教育	発達心理学ないし発達理論が「教育」にいかなる点でどのような貢献をなしうるかまた「教育」に貢献しうる発達心理学ないし発達理論とはいかなる学問であり理論であるのかについてみたい。	宮川知彰

＝ 発達段階の心理学 ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）
〃　：星　薫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本講では、人生経過を乳児から老年にいたる6段階に分けて、それぞれの発達段階の心理行動の特徴について概述するとともに、養育や訓育、教育上の留意点について考察する。なお、学問としての発達心理学の性格、歴史、研究法、発達と学習の相違、動物と人間の比較、発達障害等の理論的な問題についても概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乳児	本章では、胎生期および乳児期におけるさまざまな発達的特徴を概観し、この時期にある者に対する養育のあり方を、さぐってみたい。	星　薫（放送大学助教授）
2	幼児	人間の発達段階的特徴は、基本的には教育を介した物及び人との関係の重要な変化の中で形づくられるものであろう。だとするならば、幼児期におけるその変化はどのようなものか。ここでは、「対象的行為」及び「ごっこ遊び」を主軸とした生活に焦点をあてて幼児期の発達的特徴を概観する。	野呂　正（宮城教育大学教授）
3	学童	学童期とは、身体・運動の機能、知的機能、人格・情動、社会的行動などの諸面で、発達的にどんな段階と言えるのだろうか。本講では、このことを、家庭と学校の中で育ちゆく子どもを通して実証的に検討し、あわせて望ましい発達に対する教育の在り方を考える。	寺田　晃（東北大学教授）
4	青年	青年期とは、いつからいつまでのことをいうのか、また青年期の「発達課題」は何かについて概述する。	宮川知彰（放送大学教授）
5	壮年	「精神発達」の過程では、新しい「能力」が獲得されていくと同時にこれまであった「能力」が失われたり減衰したりする。壮年期では若き日の何が失われ、何が新たに獲得されるのだろうか。壮年の社会的責任との関連でこの問題を考えてみよう。	宮川知彰 星　薫
6	老年	老年期の生理的、身体的特徴、知的機能、情動および性格などについての最近の研究を概観し、老年期という時代の特徴を、そこに至るまでの経過を踏まえつつ考えてみる。	星　薫
7	人間と人生	これまで6章にわたって人生各期の特徴を概説してきたが、本章は人生経過を全体として概観し、年齢の推移とともに変化する社会的な地位と関係づけながら、人生経過における人格特性の形成・変化の過程を考えてみよう。	宮川知彰

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発達心理学とは	発達心理学について、ヨーロッパ特にドイツとアメリカとでは、異なった視野・観点をもっているように思われる。この点を紹介するとともに、発達心理学はいかなる科学であるべきかについて、また発達段階設定の意義について考えてみる。	宮川知彰
9	動物における心理発達	進化の過程において、いかにして心理が発生し、また要素的感覚的心理の段階から知覚的心理の段階へと発展していったかを考察する。その際、動物の生活条件とそこにおける動物の活動に留意して、その心理発達を分析する。	松野豊（東北大学教授）
10	動物と人間	人間に固有の心理は社会的起源をもち、媒介的構造をもち、意識性をもって働く。このような人間心理の生物学的前提は何であろうか。また人間の心理は、どのような新たな生活条件と活動の下に生まれたのかを考察する。	同上
11	発達心理のあゆみ	哲学、教育学、心理学、さらに生物学や医学など、隣接する人文、社会および自然の諸科学の発展とあわせて、発達心理学が科学としていかに台頭し、その体系を整えるにいたったか、本講では発達心理学の今日までのあゆみと問題点とについて具体的に検討する。	寺田晃
12	精神発達の研究法	一つの問題を解決するのには、その問題を解決するのに最も適した方法を創案しなければならない場合が多い。それで発達心理学の領域でも幾多の独特な方法が考案されてきた。本講では、それらのうち基本的なものについて概説しよう。	宮川知彰
13	発達の理論	精神が発達するとはいったいどのようなことを指すのであろうか。そもそも「発達」は何か。この問題について諸家の考え方を概観し、できうれば首肯しうる発達理論を選択するとともに、新しい発達理論の建設の可能性をも考えてみたい。	同上
14	発達と学習	今日の子ども達には、「どうせダメだ」という悲観的な発達観にとらわれている者が多いのではなかろうか。本講では、発達と学習との関連についての諸家の見解を概観して、「やればできる」という積極的な発達観の形成に寄与したい。	野呂正
15	発達と障害	心身の障害とはどのような状態をいうのか。本講では、各種の障害型について、定義、行動特徴、診断の技法等を説明すると共に、教育・訓練・養育の内容と方法、指導上の効果を考察し、総じて発達およびその仕組みに対する障害の位置づけを論じたいと考える。	寺田晃

＝学　習　心　理　学＝(TV)

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

学習心理学が、人間にとって、どのような役割をしめるか、ということが全体としてのねらいになっている。したがって、「家庭」、「学校」、「社会」がかかわっている。実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	学習心理学の概要	1. 学習とは 2. 主要な心理現象 3. 学習指導 4. 研究課題	小口忠彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	学習と発達	1. 経験 2. 形成 3. 成熟	同上
3	学習と目標	1. 意図的学習 2. 偶然的学習 3. 意図的学習と偶然的学習	同上
4	学習の方向	1. 欲求 2. 欲求不満と病理現象 3. 欲求充足と病理現象	同上
5	学習の成立(1) －条件づけ(1)－	1. 新しい行動 2. 古典的条件づけ 3. 道具的条件づけ 4. 反応の連鎖化	同上
6	学習の成立(2) －条件づけ(2)－	1. 人間の水準 2. プログラム学習 3. プログラム学習の問題点 4. 集団の条件づけ 5. 強化説	同上
7	学習の成立(3) －認知構造の変化－	1. 認知構造 2. 認知説 3. 学習説	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	学習と外発的動機づけ	1. 動機づけ 2. 賞と罰 3. 賞と罰の構造	小口忠彦
9	学習と内発的動機づけ	1. 機能的快感 2. 解決の喜び 3. 認知的葛藤	同　上
10	学習と問題解決(1) －模　倣－	1. 問題解決過程 2. 見通し 3. 模倣	同　上
11	学習と問題解決(2) －創　造－	1. 創造 2. 問題をつくる 3. ブレインストーミング 4. 直観と類推 5. 発明と発見	同　上
12	学習と練習(1) －練習曲線－	1. 練習 2. 練習の段階 3. 練習の分配	同　上
13	学習と練習(2) －構造転換－	1. 練習曲線の特徴 2. 極限状態における訓練 3. 他者からの協力 4. 構造転換	同　上
14	学習と転移	1. 経験の効果 2. 転移の条件	同　上
15	学習と個人	1. 個人差 2. 個性 3. いい経験 4. 自己実現	同　上

＝学習心理学の応用＝　（TV）

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

学習心理学の応用として、学習指導、学習意欲、思考能力、人格形成（人間形成）、心理療法などの諸問題について、要点をのべる。　実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学習指導の概要	1. 学習指導と環境 2. 学習指導の概活 3. 学習指導の課題	小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	意欲の開発	1. 意欲 2. 内的障壁 3. 外的障壁	同上
3	才能の開発	1. 思考 2. 集中的思考と拡散的思考 3. 分析的思考と直観的思考 4. 体験学習 5. 才能 6. 才能の開発	同上
4	論理的思考	1. 論理的思考 2. 第1段階 3. 第2段階 4. 第3段階 5. 段階間の構造 6. 論理の問題 7. 思考の論理 8. 生活の論理	同上
5	創造的思考(1)	1. 促進する条件 2. 創造の過程 3. 創造の水準 4. 類推と飛躍 5. 妨害する条件 6. 身体と感情の障害 7. 認知と情報の障害 8. 文化と社会の障害 9. 個人の思考の限界	同上
6	創造的思考(2)	1. 教授－学習過程 2. 指導者の条件 3. 集団の創造	同上
7	受容学習	1. 講議法と発見法 2. 受容学習	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発見学習	1. 発見学習 2. 発見学習の役割	小口忠彦
9	集団主義	1. 自己と他者 2. 集団主義的方法 3. 社会化と個性化	同上
10	生活綴方	1. 自己認知 2. 自己意識と自己認知 3. 自己評価と自己認知 4. 自己洞察と自己認知 5. 生活綴方的方法 6. ヒントの種類 7. ヒントの構造 8. ヒントの活用	同上
11	役割演技	1. 役割演技 2. 役割遊び 3. 自己拡大	同上
12	生涯学習	1. 人生周期 2. 発達課題 3. 人格的活力 4. 人格の生成 5. 成熟と経験	同上
13	自己修復	1. 学習のエラー 2. エラーの発見 3. エラーの種類 4. エラーの訂正 5. エラーの活用 6. 自己修復 7. 自己修復の異常 8. 自己修復の正常	同上
14	学習と心理療法	1. 心理療法 2. 心理療法の種類 3. 精神分析療法 4. 来談者中心カウンセリング 5. グループ・エンカウンター	同上
15	学習と行動療法	1. 行動の療法 2. 学習の種類 3. レスポンデント学習による方法 4. オペラント学習による方法 5. コグニティブ学習による方法 6.学習説	同上

＝文化と精神発達＝（R）

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

精神発達は、文化によって影響されるが、その文化は、逆に、精神発達によって影響される、という仕組みになっている。こうした仕組みを前提にし、精神発達の望ましい発展についての考察を試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文化とは何か	1. 文化の存在 2. 文化と文明 3. 文化の向上	小口忠彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	文化の機能性と構造性	1. 構造的側面 2. 機能的側面	同上
3	文化の生産性と防衛性	1. 労働と余暇 2. ユーモア	同上
4	文化の特殊性と普遍性	1. 共感の基礎 2. 創造の機能	同上
5	精神発達Ⅰ －人類の立場	1. 知性と徳性 2. 自由・平等・博愛 3. 個人主義と集団主義	同上
6	精神発達Ⅱ －日本人の立場	1. 長所と短所 2. 矛盾と解決	同上
7	精神発達Ⅲ －個人の立場	1. 個人と人間 2. 人格的活力 3. 人間の生涯	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	未開社会と精神発達	1. 思考様式 2. 言語体系 3. 前論理的 4. 未開心性	小口忠彦
9	文明社会と精神発達	1. 社会状況 2. 精神状況 3. 精神発達	同上
10	乳幼児期と文化	1. 人間の能力 2. 自分と仲間 3. 素質と環境	同上
11	青年期と文化	1. 青年文化 2. 青年期の根拠 3. 青年期の問題	同上
12	老年期と文化	1. 高齢化社会 2. 生きがい 3. 新しい文化	同上
13	欲求と文化・Ⅰ	1. 特殊な生産性 2. 日本的準拠枠	同上
14	欲求と文化・Ⅱ	1. 文化と笑い 2. 人間と笑い	同上
15	文化の模倣性と創造	1. 人間の問題 2. 正常の問題	同上

＝ 認 知 と 思 考 ＝　（TV）

〔主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
星　　薫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

認知あるいは認知心理学は、人間の複雑な行動の背景にある内的過程に深くかかわりをもつ。この内的過程は、これまで大きな影響力をもっていた行動主義が、ブラックボックスとして検討をさけた点である。２０世紀後半に至って、情報理論やコンピューターの開発と普及の影響を受けた心理学は、認知に対する関心を強めてきた。このような流れの中で、本講は次のような項目により説述される。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	認　知　と　は	本章のねらい　1.認知とは　2.認知研究の簡単な歴史(1)科学的心理学以前の思想の流れ(2)科学的心理学の始まり(3)現代心理学のかっとう 3.認知心理学の始まり(1)心理学内の動き(2)心理学外からの影響　4.本講の概要	中川大倫（信州大学名誉教授）
2	刺激の受容とパターン認知	本章のねらい　1.刺激の受容(1)適当刺激と刺激閾(2)信号検出理論　2.形の輪郭(1)凝視(2)眼球運動(3)細胞の側方抑制(4)主観的輪郭　3.視覚的パターン認知(1)パンディモニアム・モデル(2)パターン認知とトップダウン処理(3)ボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用　4.情報の表出(1)形の表出(2)文字の表出	同　上
3	記憶の過程 Ⅰ	本章ねらい　1.記憶のモデル(1)アトキンソンとシフリンのモデル(2)情報の処理レベル説 2.感覚的記憶(1)視覚情報の一時保存(2)アイコンの持続(3)アイコンは中枢的か末梢的か　3.聴覚情報の一時保存　4.感覚的記憶と日常生活	同　上
4	記憶の過程 Ⅱ	本章のねらい　1.短期記憶存在の根拠(1)チャンク(2)臨床的事例(3)ピーターソンらの研究 2.短期記憶と系列位置曲線　3.短期記憶の諸問題(1)情報の符号化(2)情報の検索(3)情報の忘却 4.短期記憶と長期記憶	同　上
5	記憶の過程 Ⅲ	本章のねらい　1.記憶とリハーサル　2.リハーサルの種類(1)維持リハーサルと長期記憶(2)精緻化リハーサルと長期記憶　3.長期記憶における情報の型(1)意味的情報と聴覚的情報(2)意味的記憶　4.記憶情報の質的変容	同　上
6	記憶の過程 Ⅳ	1.忘却の理論(1)記憶痕跡の変化による忘却理論(2)干渉による忘却理論(3)符号化特性原理 2.注意と記憶(1)選択的注意(2)注意の集中と分配(3)注意のモデル　3.記憶の改善	同　上
7	記　憶　と　概　念	本章のねらい　1.知識を分類する　2.コンピュータによるアナロジー　3.TLCモデル (1)モデルの概要(2)TLCモデルの問題点　4.特性比較モデル　5.典型性　6.知識の命題的表現(1)意味基本単位としての命題(2)命題表現の方法(3)ACTモデル(4)LNRモデル	星　薫（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	記憶と言語	本章のねらい　1.はじめに　2.既出情報と新出情報　3.ブランスフォードとジョンソンの実験　4.オーウェンスらの実験　5.スキーマの働き　6.スクリプト　7.スクリプトの実在性	星　薫
9	思考と記憶	本章のねらい　1.記憶と思考の関係　2.再生的思考と生産的思考　3.記憶のゆがみ　4.ヒューリスティック(1)利用し易さのヒューリスティック(2)代表性のヒューリスティック(3)アンカー効果　5.顕著性のヒューリスティック　6.問題解決における期待	同　上
10	イメージと認知	本章のねらい　1.イメージの特徴　2.イメージは測定できるか(1)イメージの回転(2)イメージと大きさの認知(3)心の中の時計と角度の比較(4)情緒的意味の測定　3.イメージ効果(1)語のイメージ効果(2)視覚的符号化と言語的符号化	中川大倫
11	推論と理解	本章のねらい　1.推論とは何か　2.推論の文化的背景　3.推論の建て前と本音　4.心的モデルと実用的推論スキーマ　5.まとめ	佐伯　胖（東京大学助教授）
12	問題解決と理解	本章のねらい　1.「問題」とは何か　2.「問題」の問題　3.報酬と競争がもたらすもの　4.「スキーマ」による理解　5.概念と手続きの「バグ」　6.メンタルモデルとアナロジーによる理解　7.おわりに	同　上
13	認知と個人差	本章のねらい　1.　認知の堅さとあいまいさの拒絶　2.認知の場依存性　3.認知の複雑さ　4.帰属のスタイル	山口　勧（東京大学助教授）
14	社会的認知	本章のねらい　1.社会的認知の枠組み　2.スキーマとしての構造　3.社会的認知の構造(1)バランス理論(2)認知的不協和理論	同　上
15	認知のコンピューター・シミュレーションと人工知能	本章のねらい　1.認知研究の道具としてのコンピュータ　2.コンピュータ・シミュレーションと人工知能　3.ニューエル、サイモンらのLTとGPS　4.安西、サイモンの「行いながらの学習」の研究　5.キンチ、デラローザらの「子供の算数」模型　参考文献（全体にわたるもの）　索引	戸田正直（中京大学教授）

＝社会心理学＝（TV）

〔主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
山口　勧（東京大学助教授）〕

全体のねらい

人間の社会的行動の側面を心理学的に検討し、その間の法則性を明らかにしようとするものであるが、今回は、本書をできるだけ応用社会心理学的な体制化の観点からまとめあげたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動の動機	1. 動機（要求）の分類 2. 動機にかかわる諸問題 3. 主要なる動機論	中川大倫 （信州大学名誉教授）
2	社会的認知 Ⅰ	1. 対人認知とは何か 2. 対人認知の正確さ 3. 印象形成	長田雅喜 （名古屋大学教授）
3	社会的認知 Ⅱ －原因帰属－	1. 帰属過程の意味 2. 原因帰属の原則 3. 対人認知における帰属 4. 自己帰属	外山みどり （青山学院女子短期大学部助教授）
4	態度と態度変化Ⅰ	1. 態度の定義 2. 態度の測定法 3. 態度の三要素 4. 態度に影響を与える要因	山口勧 （東京大学助教授）
5	態度と態度変化Ⅱ	1. 説得的コミュニケーションによる態度変化 2. 要請を受け入れさせる技法 3. 説得への抵抗	安藤清志 （東京女子大学助教授）
6	態度と態度変化Ⅲ	1. 認知的不協和理論 2. 反態度的行動と不協和 3. 不協和情報の回避 4. 不協和理論の修正 5. 認知的不協和による生理的反応	山口勧
7	対人行動 Ⅰ	1. 対人行動：序 2. 動物の活動に及ぼす集団の影響 3. トリプレットの実験 4. ザイエンスの覚醒理論 5. リングルマン実験 6. 社会的手抜き	白樫三四郎 （鳴門教育大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	対人行動 Ⅱ	1. 問題の所在 2. 公正さとは何か 3. 公正さ回復行動 4. いくつかの残された問題点	広田君美 （関西大学教授）
9	対人行動 Ⅲ －対人コミュニケーション－	1. 対人コミュニケーションの種類 2. 対人コミュニケーションの機能 3. 男女差 4. チャネル間の相補的関係と対人的な相関性 5. 関係の展開と対人コミュニケーション 6. 欺瞞のコミュニケーションと解読…	大坊郁夫 （山形大学助教授）
10	対人行動 Ⅳ	1. 援助行動とは何か 2. 援助行動研究の流れ 3. 援助行動の規定因 4. 順社会的行動の生起メカニズム 5. 自立のための分かち合い	白井泰子 （信州大学助教授）
11	対人行動 Ⅴ －異文化間接触における対人行動－	1. 発達論的に見た文化－心の可　性 2. 異文化間接触における対人行動 3. 異文化間対人行動の適正化の方法 － 心の可　性を超えて 4. いくつかの問題点－文化の個人への回帰－	渡辺文夫 （東北歯科大学助教授）
12	集団内行動 Ⅰ －リーダーシップと対人認知の構造－	1. 垂直的二者関係的アプローチ 2. 対人知覚法（IPM）による二者関係における認知の相互対応比較 3. VDL モデルと対人知覚法（IPM）	薮内　稔 （学習院大学教授）
13	集団内行動 Ⅱ	1. モラール 2. 仕事への動機づけ 3. 目標設定と動機づけ	角山　剛 （東京国際大学助教授）
14	社会的不適応 Ⅰ	1. 健康と病気に関する研究動向 2. 心臓病とタイプA行動パターン 3. 肥満者と摂食行動 4. 医療場面のストレス	渡辺浪二 （立教大学非常勤講師）
15	社会的不適応 Ⅱ － 無気力 －	1. 社会的不適応の諸相 2. 無気力の心理構造 3. 無気力の修正仮説 4. 無気力の症候群 5. 無気力と抑うつ 6. 無気力の社会的背景 7. 無気力からの脱出	水口礼治 （立教大学教授）

＝人間関係論＝（TV）

〔主任講師：三隅二不二（奈良大学教授）〕

全体のねらい

人間関係の三つのレベル、則ち対人関係、集団・組織、文化のうち集団・組織に重点をおく。集団力学として、集団規範の形成、同調と逸脱、競争と協同のダイナミックス等、又、組織の人間関係として、小集団活動、リーダーシップ、意思決定について述べる。実践面としては教師のリーダーシップ、事故災害予防と人間関係に及ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人間関係の科学	1. はじめに人間関係ありき “こころ”の発生/自己の他者 2. 新日本人と人間関係 欲求体系の中心転換/新日本人の誕生/主座欲求と周辺欲求/これからの人間関係/行動科学	三隅二不二 （奈良大学教授）
2	対人関係	1. 対人関係と利得 利得関係/利得行列の変換/公平の原理 2. 対人関係の発生と抑制条件 援助行動/責任分散仮説/不安と対人関係	同上
3	家族の人間関係	1. 家族関係への新しいアプローチ 家族心理学とは/レヴィンの先駆的考察/研究の歩み 2. ファミリー・カウンセリング 家族関係のダイナミックス/家族危機/家族アセスメント/基本的な前提/援助の4段階 3. 家族教育～家族への心理－教育的方法	岡堂哲雄 （文教大学教授）
4	グループ・ダイナミックス	1. 人間関係の基礎科学と実践科学 グループ・ダイナミックス/民主型指導と専制型指導 2. 実践科学としての集団行動学 集団治療学/感受性訓練 3. 総合集団科学としてのグループ・ダイナミックス 4. 集団科学のパラダイム わが国での研究	三隅二不二
5	同調と逸脱	1. 個人主義と集団主義　わが国の研究 2. 同調行動の生起　ミルクラムらの通行人の実験 3. 知覚判断における同調 シェリフによる「自動運動」実験 4. 個人に対する集団圧力 アッシュによる知覚判断の実験/集団としての同調機能	同上
6	競争と協同	1.競争と協同の概念　2.競争と協同－集団内競争と集団間競争　3.ゲーム場面を通しての競争と協同－PDゲーム　4.小集団協同学習と偏見の低減：ジグソー技法－ジグソー技法　5.集団間葛藤の軽減の試み－内集団の実験的形成/集団間葛藤の生起/集団間葛藤の軽減/その他の方策　6.競争と協同の活用－競争に必要な配慮/協同の活用	古畑和孝 （東京大学助教授）
7	偏見の心理	1.はじめに　2.偏見－偏見とは/ラベリングとステレオタイプ/ステレオタイプの自己充足的機能　3.偏見の心理的メカニズム－権威主義的パーソナリティ/スケープ・ゴード説/反応増幅仮説/誤った関連づけ 4.現代における新たな偏見－スティグマとしての病気/バイオテクノロジー時代のマイノリティ 5.偏見の解消をめざして	白井泰子 （信州大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	リーダーシップ	1.はじめに－人物よりも行動様式 2.リーダーシップのタイプ分け－慣用類型の限界/リーダーシップPM概念/リーダーシップPM4類型/リーダーシップPM論の実験/PM型が最上/実験の結果/Mでは期待に答えられない/PM型効果はPとMの相乗作用/PM行動と創造性/達成動機の高い部下が高度のリーダーシップを求める。	三隅二不二
9	意思決定	1. 個人の意思決定－ジャニスとマンのモデル 2. 集団の意思決定 集団決定法/組織における参加的意思決定/複雑な参加の効果/勢力格差と参加/参加的意思決定が適合する状況	同上
10	職場の人間関係(1)	1. はじめに 2. 近代的組織としての官僚制 インパーソナルな人間関係 3. 小集団の発見 ホーソン工場での疲労実験/小グループの連帯意識 4. ヒューマン・リレーションズの時代 モラール・サーベイ/職場満足度の2つの要因/職場小集団の連帯感が活力源泉	同上
11	職場の人間関係(2)	1. 職場におけるリーダーシップの研究 第一線監督者行動の2つの研究 2. 職場でのPM行動を測る－測定の「ものさし」をつくる/先入観なしの質問項目収集/P行動・M行動の測定尺度/PM4類型への分類 3. PM4類型を吟味する－PM類型と仕事満足度 4. PM類型とチーム・ワーク－PM類型と集合会合/PM類型と精神衛生	同上
12	教師と児童・生徒の人間関係	1. はじめに－新しいインセンティブ・システム 2. 教師のリーダーシップ－教師のリーダーシップ測定項目/教師評定の測定結果 3. 中学教師のリーダーシップ 4. リーダーシップ(指導力)評定尺度の妥当性 5. 調査の結果	同上
13	災害・事故と人間関係	1.はじめに 2.自然災害と人間関係 3.緊急事態のリーダーシップ 4.緊急脱出時の避難誘導法－指差誘導法/吸着誘導法/吸着誘導法の有効性/吸着誘導法の避難誘導プロセス/誘導者と避難者の人数比による制約/指差誘導法と吸着誘導法の併用の有効性 5.人為災害・事故予防の集団決定－バス運転士の事故防止と集団決定 6.集団決定の効果 7.その後のアクション・リサーチの展開	同上
14	ゲーム理論と人間関係	1.実験ゲーム研究－マトリックス・ゲーム 2.ディレンマ・ゲーム－マトリックス型ディレンマ・ゲームの実験/ディレンマ・ゲームの方略構造/個人合理性/社会的ディレンマ/集団合理性 3.ディレンマ・ゲーム研究の展開－競争性の発達/木こりゲーム	戸田正直（中京大学教授）
15	日本人の人間関係	1.第一の特色 2.義理人情－義理人情スケール/義理人情という考えの筋道 3.中間的な回答 4.人間関係をさぐる諸方法 計量的方法/文化人類学的方法/その他の方法	林知己夫（放送大学教授）

＝ パーソナリティ論 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

心理学におけるパーソナリティ論で、解決を求められていたのは、従来としては、「知能＋性格」としての「よせ集め」の点であった、とまとめることができる。

この点を中心として、解決の方向づけを試みたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	パーソナリティとは	1 人間のこころ 2 パーソナリティの翻訳 3 パーソナリティの定義 4 パーソナリティの研究	小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	生産性と防衛性	1 生産性ー防衛性という側面 2 生産的方向 3 防衛的方向 4 開いたこころ・閉じたこころ	同上
3	社会化と同化	1 社会化ー同化という側面 2 時間的変化 3 場面的変化 4 病理現象 5 適応範囲	同上
4	正常と異常 Ⅰ	1 異常の状態 2 異常の根拠 3 異常から正常へ	同上
5	正常と異常 Ⅱ	1 正常の状態 2 正常の根拠 3 正常と成熟 4 正常の段階	同上
6	自己修復	1 自己修復 2 自己修復の異常 3 自己修復の正常 4 自己修復の限界	同上
7	自己実現	1 心理学の弱点 2 心理学的研究 3 自己実現	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自己	1 自己と自我 2 決定主義 3 上昇傾向 4 自分を知る	小口忠彦
9	基本的人格構造	1 集団のパーソナリティ 2 基本的人格	同上
10	人格類型	1 方法論 2 類型論 3 特性論 4 価値観	同上
11	性善説	1 人間の本性 2 創造性 3 集団の力	同上
12	性悪説	1 性悪説 2 死の本能 3 欲求不満—攻撃仮説 4 犯罪	同上
13	非性悪説	1 非性悪説 2 ロジャーズの立場 3 マズローの立場	同上
14	矛盾説	1 矛盾 2 矛盾の根拠 3 矛盾説	同上
15	人格心理学	1 人格心理学 2 心理学の領域 3 心理学の総合	同上

＝臨　床　心　理　学＝（R）

〔主任講師：村瀬孝雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

1. 異常心理学の全体像、基本的考え方、およびそれらとの関連においてとらえられた代表的病理と現代的病理について述べる。　2. 上述のような諸病理に対して、心理学的な援助・介入の考え方と技法およびその成果について紹介と考察を行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	異常心理学の全体像と基本的な考え方	臨床心理学の定義に触れ、次に主要な特性について簡単な解説を試みる。①対象は広義の心の不健康、不適応など広範囲におよぶ②実践的技術学③臨床的態度④体系性はゆるやか⑤学術的であり文化拘束性が高い。臨床家の役割と貢献および臨床心理学の歴史について短く述べる。	村瀬孝夫（東京大学教授）
2	a　神経症圏の中の中心的病理 b　犯罪心理学	神経症の定義と下位分類、診断と治癒の実際について：対人恐怖とヒステリー患者を例に用いて解説するとともに、不安、防衛、自我の強さ、性格障害の概念と反社会的性格、精神鑑定の実際についても述べる。	福島　章（上智大学教授）
3	精神病圏の代表的精神病理とくに精神分裂病と躁うつ病の心理	精神病についての最も基本的な理解のための解説を行いあわせて、精神分裂病と躁うつ病の精神病理、分裂病者、躁うつ病者への対応に際して留意すべき心理学的配慮についても解説する。	吉松和哉（東京都精神医学総合研究所）
4	臨床心理学的アセスメント(1)	臨床心理学の立場から病理的現象と病者に対して行う援助的介入を展望するとともに、アセスメント（評価、査定）について、その本質と目的を中心に、総論的考察を示す。	村瀬孝夫
5	臨床心理学的アセスメント(2)	アセスメント面接の目的と特異性、面接にあたっての留意点、初回面接の重要性と実例解説をし、さらに臨床面接の信頼性と妥当性についても述べる。	同　上
6	臨床心理学的アセスメント(3)	臨床心理検査法をその特殊性を中心に概観しさらに、検査法の分類と評価、活用上の留意点と戦略について解説する。	同　上
7	臨床心理学的アセスメント(4)・1	ウェクスラー式知能尺度の基本的考え方と特性を述べるとともに、この検査の解説と実用性にもふれる。また質問紙の一般的特質、効果と限界、代表的な質問紙検査（YG、MPI、GHQ）についても解説する。	伊藤研一（大正大学講師）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	臨床心理学的アセスメント(4)・2	投映法の特質と分類を解説するとともに、とくにその代表的技法としてロールシャッハ法および樹木描画法（バウムテスト）の説明をし、実例を示す。	村瀬孝夫
9	臨床心理学的アセスメント(5)	アセスメントの解釈とは、仮説をつくり上げる力であることを説明し、この仮説と現実との交流、総合的所見の重要性と困難性検査報告について解説する。	同　上
10	心理療法とは何か	原点としての精神分析療法を粗描した後、心理療法の一般的条件と諸種の立場を、4つの流れに大別して概観するとともに心理療法の典型的過程について、一つのモデルを示して解説を行う。	同　上
11	精神分析	精神分析のもっとも基本的な人間理解の特質として、無意識仮説、心理・性的経験の重視、幼児期の重視をあげて解説し、次いで、この療法の技法と過程について、実例に即して説明する。	同　上
12	来談者中心療法	アメリカ生まれのいくつかの立場では、現在の治療者、患者関係を生きること、それ自体をもって治療的とみなした。治療者の提供する成長促進的態度について述べるとともに個人が自己の内的な体験過程にフォーカスする技法を用いる立場の解説もする。	同　上
13	行動療法	行動主義心理学の立場から、完全に客観的にとらえられる行動を、学習心理学の実験的成果にもとづき、強化やモデリング等の技法を用いて変容しようとすることを解説する。	小林重雄（筑波大学教授）
14	森田療法と内観療法	日本で生まれ発展してきた全く独自の治療法が森田療法と内視法であり、この両者のよって立つ人間観や、目指す治療像は、基本的共通性をもつが、具体的手続きは全く対照的である。これらのことについて、ややくわしく解説する。	村瀬孝夫
15	社会心理学的接近と臨床心理学	異常心理の改善には、治療者と患者間の一対一の関係を活用するだけでなく、集団が成員におよぼす強力な影響力を活用する立場や技法が近年急速に発展してきた。これとは別に、生態心理学的観点からの環境調整などについても説明する。	山口勤（東京大学助教授） 村瀬孝夫

＝深　層　心　理　学＝　(R)

〔主任講師：織田尚生（甲南大学教授）〕

全体のねらい

無意識の構造に関する講義をおこなう。この際講義内容が単なる知識としてでなく、生きた体験として身につくように配慮する。深層心理学の二大潮流であるフロイトとユングのうちで、主としてユングの学説に従って話を進めるが、フロイトの説との関連性にも留意する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	無意識の心理学	フロイトとユングがいかにして無意識の存在に気づくようになったか。その研究史について述べる。	織田尚生（甲南大学教授）
2	自我とコンプレックス	自我の機能、さらには自我がコンプレックスの存在によっていかに強く影響を受けるかを考える。	同　上
3	コンプレックスの解消	コンプレックスが解消される過程について、心理療法の実際に触れながら解説する。	同　上
4	イメージと象徴	深層心理の内容と密接に関係し、また重要な機能をもつイメージと象徴について、例をあげて考える。	同　上
5	夢とその特性	無意識の生み出したものである夢を取り上げ、そのさまざまな特徴について検討する。	同　上
6	夢の分析	心理療法の技法としての夢分析について、わかりやすく解説する。	同　上
7	父と母の原型	親のイメージを検討することによって、普遍的無意識とその内容である元型について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	影の心理学	個人の心理のみならず集団の心理を理解する場合の鍵概念になる。影(shadow)の問題を論じる。	織田尚生
9	ペルソナとこころ	ユングのペルソナという概念を取り上げて、人間の外的および内的適応について検討する。	同上
10	心の中の異性	人間の心理的な成長のために、心の中の異性(アニマとアニムス)の発達が大切であることを述べる。	同上
11	自我と自己	意識の中心をなす自我が、無意識の深層から自己によって統禦されている点を論じる。	同上
12	個性化と布置	ユングの考えた心の成長過程である個性化について解説し、心的危機における布置と共時性の問題にも触れる。	同上
13	イニシェーションとコスモロジー	深層心理学と文化人類学（象徴人類学）や比較宗教学との学際領域の問題として、イニシェーションと心理療法との関連性について論じ、さらに内的なコスモロジーの意義にも言及する。	同上
14	神話と昔話の心理学	元型的モチーフの表現としての神話と昔話の重要性について述べ、前章について心理療法とコスモロジーとの関係を研究する。	同上
15	日本人の深層	ユングの分析心理学の視点から、日本人心性、特にその集団志向性と中心志向性について述べる。	同上

＝カウンセリング＝　(R)

〔主任講師：佐治守夫（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについて、その基本的な理論と、実践上の技法を学ぶことを目標とする。そして歴史的な過程をも含めて、今までの著名な理論家達の考え方を紹介し、同時にカウンセラーの態度実践上の倫理的問題、社会からの要請、訓練の方法などにもふれる。事例を適宜、挿入することで理解をふかめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	カウンセリングとは何か（序論）	カウンセリング、心理治療、さらに広く、人間援助の方法を概観し、このような領域が現在ますます注目されつつある状況を考える。家庭内の問題、子どもの発達と教育にかかわって、学校での問題、職業、職場にかかわる問題などなど。事例(1)、登校拒否	佐治守夫（日本・精神技術研究所・心理臨床センター所長）（東京大学名誉教授）
2	カウンセリングの定義(1)	カウンセリングの定義は、後にのべる様々の理論によって微妙なちがいがある。ここでは、かなり包括的に、今日通用している定義についてのべる。	同上
3	カウンセリングの定義(2)	カウンセリングの定義(1)をふまえて、様々な立場で特に強調される諸点をとりあげて評説する。カウンセリングは、そのように立つ、パーソナリティ理論と切りはなせないこと、人間の成熟、健康についての考え方と密着していることものべる。事例(2)	同上
4	望ましい特殊な対人関係		同上
5	心理療法の展開(1)	力動精神医学の黎明とその展開。フロイト精神分析が生れるまで 「メスメルと動物磁気術」 「シャルコーとジャネー」その後の展開	同上
6	心理療法の展開(2)	ブロイエル Breuer J.の 除反応(Abreaction)の理論とフロイト Freud S. 「フロイトの基本的理論」 「自由連想法」	同上
7	心理療法の展開(3)	フロイトの基礎的な発見とその理論 「抵抗（resistance）と抑圧（repression）」 「不安と防衛」 「性的衝動」 「精神力学（psychodynamics）」	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	フロイト以後の展開(1) ー特にユングを中心としてー	「フロイト補遺」 「ユングCarl Gustav Jung. 1875-1961」 「全体的自己 whole self」 「投影、及びその他の症状」 「集合的、普遍的無意識（collective, universal unconscious）」 「ユングのコンプレックス」 「自我と自己ego-self と真の自己real self」	佐治守夫
9	フロイト以後の展開(2)	「ユングの精神療法」 「新フロイト派（Neo-Freudian）」	同上
10	ロジャースの貢献 ークラインス中心療法ー		同上
11	ロジャースにおける治療関係の意味	「治療によるパーソナリティの変化」 「変化したパーソナリティの特徴」 「パーソナリティ変化の条件」の検討	同上
12	ロジャースにおける治療的変化の仮説と理論の特徴	この理論で取りあげられなかったもの	同上
13	治療的面接（カウンセリングの実際(1)	「事例を取りあげる意味と、その際の注意について」 「事例の概要」 「最初の面接に至るまでの接触の重要さ」 「第１回目の面接、沈黙と砂場の作品」	同上
14	治療的面接（カウンセリングの実際(2)	「第１回目の面接、沈黙と砂場の作品」 「２回目以降のサボテンの意味ある出現」 「３回目から５回目のキャンセルまでサボテンを通じての関係のふかまりと、その結果としての治療者の介入の失敗」 「５回目のキャンセルをめぐって」	同上
15	治療的面接（カウンセリングの実際(3)	クライエントの陰性転移感情、両向性感情にどのように共感し、対応することができるか、あわせて治療者の反対転移について	同上

＝心理・教育における測定法＝（TV）

〔主任講師：肥田野直（放送大学教授）〕

全体のねらい

学校や社会において、種々の測定が行われている。それは何を、どんな方法で測っているのであろうか。

測定法の基礎となる原理は何であろうか。また、測定の際にどんな誤差が生じやすいのか、その誤差を除くにはどうしたらよいのか。これらの知識を基礎にして測定値を正しく解釈し、適切に利用する仕方を学びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	測定とは何か (1)	人間を対象とする測定法にはどんな種類があるだろうか。学校生活や社会生活の中で行われている測定の例を考えてみよう。測定の誤差の性質とその扱い方を通じて、測定の基本的概念を学ぶことにする。	肥田野　直（放送大学教授）
2	測定とは何か (2)	ここでは測定の基本的特性について考える。直接測定と間接測定の区別、測定の信頼性や妥当性の問題など、心理学および教育学における測定に共通した基本概念を解説する。	池田　央（立教大学教授）
3	学力の測定	一番身近な測定の例として学校における学力の測定を取り上げる。学力測定の方法、種類、結果の表し方、素点と標準点の違い、集団準拠測定と目標準拠測定の区別などについて触れる。	同　上
4	知能の測定	知能測定法の歴史、知能検査はどの様な必要性から生まれてきたのか。またどのような形で発達してきたのか、知能測定の結果はどの様に表示されるか、知能検査の種類、それによって示される知能の概念などについて解説する。	同　上
5	パーソナリティの測定	パーソナリティの測定はどんな原理に基づいて行われるのか。その測定法はどんな条件の下に実施できるのか。パーソナリティの測定の生じる測定誤差はどうしたら避けられるか。測定結果はどう解釈したらよいかを考える。	肥田野　直
6	人間関係の測定	人間関係の遠さ近さは心理的距離で表される。それを測定するにはどうしたらよいか。また、リーダーシップを測定するにはどうしたらよいか、これらの測定法の基礎とその問題点について考える。	同　上
7	態度の測定	態度はどの様に定義され測定されるのか。その代表的な測定方法と、その根底にある基本的な考え方およびその限界について考える。またこれと関係の深い最近の展開についても触れる。	池田　央

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	価値観の測定	価値観の多様化といわれる現代における、諸種の測定法、把握法とその問題点についてふれる。歴史的な展開の経緯と最近の測定事例を引用する。	吉田正昭（中央大学教授）
9	閾と主観的等価点の測定	閾と主観的等価点につき、具体例をあげて解説を加える。ついで、それらの測定に用いられる精神物理学的方法のうち、ここでは調整法と極限法とを取り上げて説明する。このほか、言葉や文字などを提示材料にしたときの、認知閾の測定方法にも言及する。	鳥居修晃（東京大学教授）
10	色の認知と分光感度	色彩視が成立するための前提条件について述べ、色覚の仕組みを明らかにするための研究例を紹介する。とくに、分光感度測定の具体例として、明所視と暗所視の比視感度の測定結果と増分閾を指標とした分光感度の測定データの一例を取り上げ、検討と考察を試みる。このほか、上下法と恒常法による閾測定の一般的手続についても解説を加える。	同上
11	運動と形の認知	仮現運動に関する古典的研究を紹介し、視覚領域だけでなく、聴覚、触覚の各領域についても仮現運動が起こることを明らかにした近年の研究を取り上げる。ついで、ランダム・ドット・パターンを提示材料とした仮現運動に関する近年の研究例に触れる。さらに、運動対象の形の認知に関する研究例、運動視に及ぼすストロボ照明効果についての研究例にも言及する。	同上
12	香りと手触りの認定	視覚や頭覚のように認識的側面の強い感覚と異り、嗅覚や触覚は感情的好悪と強く結びついている。従って昔は美的感覚の問題とされてきたが、現代では統計学的ないしは計量心理的測定がすすんでいる。その一論を紹介する。	吉田正昭
13	味の測定	味と香りは機器測定が出来ぬといわれているが補助道具としてのマイクロコンピュータなどは有用である。これを用いて人間が感覚量を表現するときの問題点について考察する。	同上
14	重量感・触覚二点閾の測定	重量感あるいは重さの感覚に関する弁別閾の測定結果とそこから導かれたウェーバーの法則その他について紹介する。ついで、シャルパンティエ効果に触れ、その成立条件について考えてみる。さらに、触覚二点閾を測定する方法、とくに恒常法と閾値算出法の一つについて解説を加える。	鳥居修晃
15	測定をめぐる諸問題	測定について種々の角度から考えてきたが、それらに共通する問題や残された問題について、担当講師全体でまとめを行う。	肥田野直

＝乳幼児の健康と心理＝（TV）

〔主任講師：平井信義（大妻女子大学教授）〕

全体のねらい

児童学pedologyの立場、子どもを心理学、教育（保育）学、保健学、文化論、障害児論（精神衛生）などさまざまな分野から研究しながらそれらを総合する立場から、とくに子どもと直接触れ合うなかで、子どもから学ぶ（禅の言葉：三尺の童子を拝す）姿勢で研究したわれわれの成果を中心に、からだと心の問題を講ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人格形成の理論と人間関係	発達的観点と教育的（治療教育的）観点に立って人格構造論および形成論を総括してみると、からだは心の環境であり、心すなわち人格は自発性と自己統制の能力を柱にしており、後者は思いやり（共感性）が育つことによって形成されているという結論に達した。	平井信義（大妻女子大学教授）
2	自発性（とくに意欲）の発達と育児・保育	自発性の発達に伴って意欲がさかんとなり、いきいきと遊ぶ子どもになるが、そのためには、いたずら（探索活動）、おどけ・ふざけ、反抗、けんかなどが大きな意味をもっているが故に、それらを抑圧しない育児・保育をいかに実現したらよいかを論ずる。	同上
3	共感性（思いやり）の発達と育児・保育	思いやり（共感性）とは、相手の立場に立って相手の気持を汲む能力であるが、それは、大人（とくに母親）から思いやりを受けることによって発達する。それ故に、いかに思いやりのある母親になるための努力をしたらよいかを、育児・保育の具体性の中で述べる。	同上
4	言語発達・社会性の発達と育児・保育	言語発達には個人差が著しく、それは素因にもとづく面もあるが、乳幼児期の母子関係と密接な関係がある。また、社会性には友人関係の発達と生活習慣の自立があげられるが、前者は情緒の安定と自発性の発達と密接に関係している。後者は、決して急がないこと。	同上
5	知的発達と育児・保育	知的発達には個人差が著しく、それは素因による面もあるが、発達速度が関係していることを考慮すべきである。知能テストによって測定しようとする試みもあるが、誤りを犯しやすい。また、知的な面を優先させて育児・保育をすると、人格形成のゆがみを作る。	同上
6	身体発育・運動機能の発達と養育・保育	身体発育には個人差が著しく、それは栄養の条件によることもあるが、多くは素因にもとづくから、良否の評価は慎重でなければならない。また、運動機能の個人差は運動の機会が十分に与えられているかどうか、困難に挑戦する意欲が養われているかどうかと関係する。	同上
7	家族関係と育児・保育	家族関係は、子どもの人格形成に及ぼす影響が大きく、夫婦関係が調和しているか否かが母親の育児を左右するし、さらに年寄りが同居している場合には、姑嫁の関係が母親の育児に影響する。また、年寄りの孫に対する態度も、人格形成を左右することがある。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	集団保育―幼稚園と保育所	集団保育の中で、とくに幼稚園と保育所の問題を取り上げ、両者のちがいを述べ、とくに保育内容や方法について、子どもの自発性(意欲)と思いやり（共感性）とを育てる望ましい保育について述べ、さらに小学校教育との相違について明確にする。	平井信義
9	児童福祉の理論と実践	児童福祉には、健全育成の面と、心身に恵まれない子どもに対する保育・養護の面とがある。そのための施設およびその運営と理論的背景について講ずる。なお、世界で最も理想的養護施設であるＳＯＳ子どもの村での実践とその考え方を紹介する。	同上
10	児童と環境、自然・文化財・社会環境	児童を取り巻く環境、とくに自然、それに代る児童遊園、文化機（遊具、玩具、ＴＶ、ラジオ、絵本その他多数）について望ましいものを紹介するとともに、地域環境がどのように子どもの心身の発達に影響を及ぼしているか、われわれの研究を紹介する。	同上
11	問題（こころとからだ）の早期発見と医療・治療教育・福祉(1)	心身に問題をもっている子どもには、弱視（盲）児、難聴（ろう）児、言語障害児、肢体不自由児、病虚弱児、精神薄弱児、情緒障害児などがいるが、それらについて早期発見と早期療育の現状について述べ、今後の療育のあり方について考想を語る。	同上
12	問題（こころとからだ）の早期発見と医療・治療教育・福止(2)	とくに心に問題のある子どもについて、さまざまな問題行動の原因と治療方法を述べ、とくに人格形成上のゆがみが育児・保育によって生じており自発性の発達不全や情緒の不安定によることを述べ、治療の方法としてとくに遊戯療法を紹介する。	同上
13	思春期問題から見た乳幼児期	思春期以後の子どもの問題、例えば登校拒否、学習意欲の喪失、神経症、心身症、自殺企図、家出・非行などはすべて人格形成上のゆがみと考えてよく、その萌芽はすでに乳幼児期にある。その早期発見と対策について述べ、予防するための育児・保育を考える。	同上
14	文化人類学と国際比較から見た育児	文化人類学は、とくに未開社会の研究によって、親子関係や育児および人格形成について、豊富な提案を行ってきた。また、育児や教育についての比較も、わが国の育児や教育を考える上でさまざまな示唆を与えてくれた。それらを紹介しながら、今後の育児を考える。	同上
15	乳幼児をめぐる現代の問題点	現在、世界に起きている子どもの問題のトピックスを紹介する。例えば、アフリカなどの子どもの飢餓状態、アメリカで増加している親に虐待を受けている子どもたち、欧米での育児法の180度の転換、わが国にのみに多発している登校拒否などについて原因を考える。	同上

＝児童の心理と教育＝（R）

〔主任講師：東　　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

精神の発達と、教育および社会環境的諸要因との相互作用を概説し、知能、学力、情意に関し最近数年間に急速に集積しつつある研究成果の分析に立って、発達と教育とに関する通説の若干を批判的に検討する。特に知的発達と自我の形成の問題に力点を置き、心理学を勉強しようとする者に発達・教育的視点を、又、教育に関心を持つ者に心理学的視点を提供することを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの精神発達をどうとらえるか	講座の導入として、子どもの精神発達についての概念。（特にそのさまざまな考え方について）	東　　洋（白百合女子大学教授） 永野重史（国立教育研究所第3研究部長）
2	最初の一年	active な反応の発達、環境との相互作用、道具への反応などの問題も含む。	永野重史
3	親と子	出生前後から子どもへの期待、母性意識の形成、母子相互作用、愛着の形成、母親の仕事。	東　　洋
4	言葉の誕生	ジェスチュアや喃語からどのように形式的な面と機能的な面との両面において言語が発達するか。	永野重史
5	知的能力、その概念と最近の研究	知能とはどういうものか。その知能検査と意味。	東　　洋
6	子ども時代の始まり	赤ちゃんと子どもはどう違うか。子ども時代の発達課題。	永野重史
7	表象能力の発達	イメージの世界、イメージによる思考。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言語と思考	言語と思考、言語発達における問題や異常。	永野重史
9	論理的思考と知識構造	表象的思考から具体的概念的思考を経て論証的な思考の能力が形成されるまで。	同上
10	子どもと友達	自己中心性からの脱却、競争と協力、友達関係のひろがり。	東洋
11	行動基準の形成と発達	社会は、その社会の成因としての行動の型を各個人について形成していく。つまり社会化の働きをもつ。この社会化の働きを行動の基準の形成との関係で考えてみる。	同上
12	自我の発達	依存から独立へ、心理的離乳の問題、児童期の精神衛生。	東洋
13	子どもから大人へ	11、12歳（小五）の段階での論理的思考力の発達や、社会関係、情緒面での諸問題	永野重史
14	教育と発達	課題によって、その学習に適切な発達上の時期があるという考え方の紹介と、それを教育上どう考えるか。	永野重史
15	健康な精神発達をたすけるために	すこやかな精神発達を助けるためにどういうことをすべきか。	東洋 永野重史

＝青年の心理と教育＝(R)

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

青年期が人生経過の中で、また人の精神発達において、どのような役割・課題・意義をもつかをさまざまな視点から検討し、青年のための教育がどうあるべきかについて考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期とは －「青年」の誕生－	青年期の開始期と終期とをどうとらえるのか、青年の心理行動は、児童や成人のそれに比べてどのような特徴的な性質をもつか、そして青年心理学はいかなる課題をもつかについて考えてみる。	宮川知彰 （放送大学教授）
2	青年心理学の研究法 －その方法論と方法－	青年を個として把える立場と一般として把える立場がある。こうした目標の違いによって、この方法論と方法は異なっている。ここでは、その二つの立場と方法を解説し、さらに、個と一般（普通）についての問題を考察する。	久世敏雄 （名古屋大学教授）
3	青年期のからだと心 －からだとの出合いと性の問題－	身体的成熟（特に第二次性徴の発現）が青年の心理面にどのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して、青年がどのような問題に直面し解決していかなければならないのか。男の子・女の子から男性・女性としていかに自己を確立していかなければならないのか。	福富護 （東京学芸大学教授）
4	進路選択 －青年の発達課題－	青年期は、複数の進路可能性の中から、自らの進路を決定していく時期でもある。現代の日本社会というしくみの中で、青年達はどのように進路を選択しているのか、青年期の発達課題とのかかわりを通して、その実態と援助のあり方について考察を進める。	片岡彰 （東北大学助手）
5	反抗 －人生・社会と青年－	青年が自我を確立し、主体的な自己であろうと努力する過程で、青年の発達を阻害するかの如く青年が認識する既存の権威に対して“反抗”するのはむしろ当然である。青年の権利である健康な反抗と青年の発達との関係を考えてみたい。	佐竹宣夫 （芝浦工業大学教授）
6	友情と仲間 －青年と集団活動－	青年期に形成される友情は、われわれの生涯にとって極めて重要な意味をもっている。 青年の友情形成と青年の集団活動がどのようにおこなわれているのか、それが青年の発達にとって、どんな意義があるのか考えてみたい。	同上
7	青年の生活構造 －学習と余暇の活動を中心として－	青年期における人間形成にとって特別な重要性を持つ活動として、学習と余暇をあげることが出来る。多くの青年達が高等学校、大学に通う生活を送っている現在、学習と余暇はその生活の中心となる位置を占めている。この二つの活動の意義について考えてみる。	斉藤耕二 （東京学芸大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	今日の女子青年 －女子青年と職業－	ライフ・サイクルの変化、出生率の減少、高学歴化などによって女性の就業が増大している。しかし、雇用均等法が施行されても、雇用条件の性差別が解消される見通しもない。こうした就業構造の中で変動する女子青年の職業観、結婚観や性役割観などを考察する。	江川　亮 （芝浦工業大学教授）
9	今日の勤労青年 －その職業観と勤労観－	いわゆる技術革新の進展のもとで、人間労働の単純化、細分化、規制化が進行している。その職場で、単調労働を強いられる青年たちの過酷なまでの心理的・生理的負担の実態を明らかにするとともに、欧米における“労働の人間化”の試みについても触れてみたい。	同上
10	青年の精神病理 －思春期心身症、登校拒否、留年、自殺、性の問題－	青年期には、精神内界の均衡を保ちながらおとな社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、体の急激な変化や環境刺激がストレスとして作用し非適応状態を招くことがある。ここでは、精神的な病理現象を通して青年の心理について理解を深める。	中村雅知 （東北大学助教授）
11	青年のつまづき －非行・暴力・いじめ－	青年の非適応のもう一つの現れは、他者とのかかわりの領域においてである。非行・暴力・いじめには、いきいきとした生への意欲と他者への思いやりが失われている。ここでは、逸脱行動を通して、彼らのつまずきと、これへの対処の仕方を考えてみる。	同上
12	青年の活動意欲 －「やる気」・「生きがい」の問題－	現代の青年は、どのような物や事柄に価値を置いて行動しているのか。現代青年の「生きがい」「価値意識」の実態を検討しながら、青年の行動の源泉としての「やる気」「活動意欲」を考察する。	片岡　彰
13	青年文化論 －青年期における社会化と世代－	現代社会では、青年達は、成人や子供達とは異なった、独自な文化を持っている。この青年文化の特質、心理的機能を検討して、青年期と社会の関係について理解を深める。	斉藤耕二
14	現代の青年論 －アィデンティティ　アパシー、etc－	この問題の考察はさまざまな視点から展開することができるが、ここでは、その基底となる青年心理の諸理論が構成されてきた道筋として、生物学的、社会的、世代的要因、さらに、コーホートと歴史の要因にふれ、現代の青年論－アィデンティティ、アパシーなどについて述べる。	久世敏雄
15	青年心理学と教育 －青年心理学小史－	青年心理学の成立とその発展の歴史の中でこの学問がこれまでの青年教育において果してきた役割を概観するとともに、今後のこの学問の使命について考えてみる。	宮川知彰

＝障害児の心理と教育＝（R）

〔主任講師：寺田　晃（東北大学教授）〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問い、教育の本質にせまるものである。本講では、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのか、診断・判断、研究法などを検討すると共に、後半の各論では、障害の各領域別に、心身の発達的特徴と教育、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的な理解を深めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	障害児とはどのような子どもか	障害児とはどのような子どもなのか、各障害の別に、その定義と類型を、主に心理学的、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説する。	寺田　晃（東北大学教授）
2	障害児教育の目的と歴史的発展	障害児に対する学校教育の理念と目的および目標、普通教育との内容・方法・評価面の違い、特殊教育の現状などを述べ、あわせて障害児に関する研究、教育（養育）一般の歴史的なあゆみについて概説する。	同　上
3	障害児の研究・教育の課題と方法	障害児の病理（身体・諸器官ほか）、心理（認知、人格・情動、社会的行動ほか）、教育（教育内容、方法ほか）の各分野にわたり、従来の研究・教育の概況と傾向を捉えるとともに、現下の教育・心理の研究の課題性を考え、研究法を指摘する。	田中　農夫男（宮城教育大学教授）
4	障害の原因と診断・判断	主に医学・生理学、心理学の見地から、障害児の心身に関する病理と障害の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による障害の測定・評価の方法ないし診断・判断の実際的技法と問題点などを解説する。	寺田　晃 村井憲男（東北大学助教授）
5	発達と障害　Ⅰ －発達の仕組みと障害－	発達とは一般にどんな機構と段階とを経て展開するものであるのかを、個体発生の側面から検討し、従来の発達理論を紹介するとともに、発達に対処して障害がいかに位置づけられるかを考える。	寺田　晃
6	発達と障害　Ⅱ －障害児と家庭・学校および社会－	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件、学校教育・社会生活の諸問題などを概観し、その考察から発達と障害の二次的効果を指摘するとともに、家庭・学校・社会の在り方を検討する。	寺田　晃 仁平義明（東北大学助教授）
7	感覚障害論　Ⅰ －視覚障害児の心理と教育－	視覚障害児の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動などを通して、視覚障害児の心理的な発達と特徴を概観するとともに、主に盲学校での教育の現状と適切化を検討する。	田中　農夫男

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚障害論 Ⅱ －聴覚障害児の心理と教育－	聴覚障害者（言語障害を含む）の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動の各発達と特徴を把握し、主に聾学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	菅原廣一 （国立特殊教育総合研究所室長）
9	身体・運動障害論 Ⅰ －肢体不自由児の心理と教育－	主に医学・生理学、心理学の立場で肢体不自由児の身体・運動の能力の発達と特徴を捉え、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を検討する。	田川元康 （和歌山大学教授）
10	身体・運動障害論 Ⅱ －病弱児・虚弱児の心理と教育－	前章と同様な立場で、病弱児・虚弱児の身体と運動面の障害特徴、心身発達の相互関連性を論じ、健常児への復帰、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	寺田晃 村井憲男
11	精神発達障害論 Ⅰ －精神薄弱児の心理と教育－	精神薄弱児の身体・運動の能力、認知能力、人格・情動ならびに社会的行動の発達的特徴を述べ、特殊学級、養護学校、施設における教育・訓練の現状と適切化、社会的適応等をまとめる。	寺田晃
12	精神発達障害論 Ⅱ －自閉症児の心理と教育－	自閉症児の心理諸機能の発達と特徴を論じ、あわせて家庭・学校・施設等での教育・訓練および養育の現状と、指導の適切化、社会的適応等を論じ、精神発達障害論をまとめる。	小松教之 （宮城教育大学教授）
13	情緒・行動障害論 Ⅰ －情緒障害児の心理と教育－	登校拒否、非行等、いわゆる情緒障害児の心身諸機能の諸特徴を述べ、家庭教育と学校教育の現状、指導および教育相談の在り方などを、非社会的ならびに反社会的な問題行動型について論じる。	大山正博 （東北学院大学教授）
14	情緒・行動障害論 Ⅱ －学業不振児の心理と教育－	学業不振と学習障害の定義および類型、診断と判断等について述べ、心理的、環境的側面からの特徴と不振の原因を指摘することにより、家庭教育と学校教育、教育相談等を中心とした指導、措置の適切な在り方を考える。	寺田晃
15	障害児の福祉と教育の展望	障害児の福祉の理念と構造、福祉行政実践の現況等を概観するとともに、第7章から第14章までの各障害型の特徴を総括することにより、福祉と教育の今後の在り方、問題点を展望する。	同上

＝言語障害＝（R）

〔主任講師：内須川　洸（筑波大学教授）〕

全体のねらい

ことばによるコミュニケーションは、人間が社会生活上不可欠の機能である。この講座は、この機能に障害を示す人々の諸問題の理解を助けるよう言語障害学をやさしく解説した入門である。(1)言語障害の概説、(2)発達と言語障害、(3)人間関係と言語障害、(4)聴覚と言語障害を主柱として、各種の言語障害とその予防並に改善を論じた。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	言語障害とは	言語障害とは何か。定義の問題をコミュニケーションの立場から考察する。それに基づき8種に分類し、それぞれの言語障害について、出現率、障害の特性・問題点に関する解説を行う。併せて今後15回にわたる講義聴講に関するオリエンテーションを兼ねる。	内須川　洸（筑波大学教授）
2	言語障害の心理と教育	総論の第1に、人間の心理面から言語障害を考察し、そこに包含される諸側面から理解を深めるため、罰・欲求不満・不安・罪悪感・攻撃性の心理について解説する。さらに我が国の言語障害教育について、発展の経緯・現状・問題点・課題に関して紹介する。	同上
3	言語障害の生理と病理	総論の第2に、ことばの連鎖（チェーン）、すなわち言語の特徴であるフィードバック過程を解説し、その面から障害の発生を考察する。とくに発声・構音・リズムの生理および病理を解説する。さらに言語の中枢過程である象徴機能と大脳の仕組みの概要を述べる。	同上
4	発達と言語障害	総論の第3に、言語の特徴の別の側面、発達について考察し、障害の発生の基礎条件としてのスピーチ・レディネスについて述べる。さらに言語発達に関連する諸要因を器質的・情緒的・環境的の3局面から考察し解説する。また、言語学習の原理をわかりやすく述べる。	同上
5	人間関係と言語障害	総論の第4に、言語機能面に着目して、その4大機能を解説するとともに、特にコミュニケーション機能における考察を深める。言語的・非言語的コミュニケーション、直接的言語関係・間接的言語関係、言語の二大様式、すなわち音声言語と文字言語の特徴を述べる。	同上
6	言語発達遅滞児の理解	今回から言語障害の各論の第1に言語発達遅滞児をとり上げ、その理解を深めるため、発達の診断面を重点的に論じる。遅滞の器質的・環境的・人間関係的諸要因について述べ、診断法については、観察法・各種検査法・分析法などにふれて解説する。	同上
7	言語発達遅滞児の治療・教育	幼児を中心として言語発達遅滞児の言語治療法を解説する。これに関連して近年米国のコロラド大学で開発された対人関係反応学習法(INREAL)を紹介する。さらに言語発達を促進する聴きとり能(Listening Ability)開発法、人間関係改善法などについて述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	吃音児(者)の理解	吃音児(者)を診断・評価する方法について学習する。そのため言語・身体・心理の3側面の理解に必要な基礎知識を学び、重症度の判定法、吃音行動の観察法、検査法について解説する。吃音を幼児吃・学童吃・成人吃に便宜上区分し、それぞれの特徴を理解する。	内須川　洸
9	吃音児（者）の治療・教育	吃音児(者)の治療・指導問題を中心として、幼児吃音・学童吃音・成人吃音の治療上の相違を概略述べる。また治療・指導上留意すべき点として、各種治療法の特性を紹介し、この使用計画の立て方を学ぶ。成人吃音の場合には、吃音者の生き方吃音の克服を重視する。	同　上
10	構音障害児(者)の諸問題	構音障害のさまざまな種類について、原因・言語症状・治療経過・予後などを紹介し、構音障害の診断手続を解説する。とくに構音テストの種類実施方法などにふれる。なお、口蓋裂児の言語治療も含めて、構音障害児の治療・指導法について解説する。	同　上
11	音声と音声障害の諸問題	音声の3要素、大きさ、高さ、音質について音響物理的特性を考察する。音声障害の発生を音声習得過程の不全と病理的原因から考察し、さまざまな種類の音声障害について解説する。また音声障害の評価法、改善・治療法の概要を解説する。	同　上
12	聴覚と言語障害	聴こえの仕組みを聴器の構造とその機能面について解説し、聴力や聴覚の障害が如何にして発生するか考察する。さらに難聴に伴う言語障害の特性や教育・指導法について概略を解説する。また我が国における“ろう教育”と“難聴教育”について述べる。	同　上
13	器質的言語障害と重複障害	器質的言語障害のさまざまな種類について解説し、そのうち特に脳性マヒによる言語障害・失語症・小児失語症について、障害の特性・言語治療の概略を解説する。また障害の重複化傾向・治療指導問題にふれるとともに重複障害児教育の問題を考察する。	同　上
14	人間生活と言語障害	講義のまとめの第1に、さまざまな人の生活の中で、言語生活の意義を考察し、その言語が障害されたとき示される「ゆがみ」や問題について論じる。第1に生活環境に生ずる多種雑多な変化について、第2にこれらに直面する言語障害者のリハビリテーションについて。	同　上
15	豊かな言語関係を育てる	まとめの第2は、言語が正常に学ばれるのに必要な言語関係と環境面の配慮や努力について学ぶ。言語障害の進行をくい止めたり予防する方策は何か、言語障害児を自然治療に導くことは可能か、言語生活をとりまく望ましい環境や人間関係のあり方や言語衛生について学ぶ。	同　上

＝生徒指導の実際（R）＝

〔主任講師：内山喜久雄（日本赤十字看護大学教授）〕

全体のねらい

生徒指導の目標は生徒の資質・能力・可能性さらには人間性を高めることにある。そのための実際的方策として、まず、生徒理解の諸方法を述べ、次いで、無気力その他の諸問題の解決と、自発性その他の望ましい態度・パーソナリティの育成とをはかるための具体的アプローチを多くの事例をまじえて、体系的に解明・詳述する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生徒指導の意味と理解	検討中	内山喜久雄（日本赤十字看護大学教授）
2	生徒をどう理解するか －理論的背景－	〃	茨木俊夫（埼玉大学教授）
3	生徒理解の方法(1) －観察法・面接法－	〃	高野清純（筑波大学教授）
4	生徒理解の方法(2) －テスト法－	〃	同上
5	事例研究法	〃	同上
6	性格・行動は変えられるか	〃	坂野雄二（早稲田大学助教授）
7	無気力の克服 －帰属療法－	〃	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	引込思案の解消 －主張訓練法－	検討中	内山喜久雄
9	不安の克服 (1) －系統的脱感作法－	〃	同上
10	不安の克服 (2) －セルフ・ コントロール法－	〃	坂野雄二
11	登校拒否の指導 －行動・態度形成法－	〃	茨木俊夫
12	非行の善導 －社会スキル 訓練法－	〃	内山喜久雄
13	自発性の開発 －カウンセリング法－	〃	茨木俊夫
14	対人関係の改善 －ロール・ プレイング法－	〃	同上
15	望ましい学習態度 の形成 －シェーピング法－	〃	坂野雄二

＝ 幼 児 教 育 ＝ （R）

〔主任講師：萩原元昭（群馬大学教授）
高橋恵子（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

この講義の特徴は、幼児教育を教育学と発達心理学の両面からとらえてみようとするところにある。現代の幼児教育にとって重要な思想、方法、実際について述べるだけではなく、教育の対象としての幼児の心理的な性質を知ることで、より一層関心と理解を広め、深めることをねらいとする。

1章では講義のオリエンテーションとして幼児教育とはなにかを述べる。2～8章では幼児教育という点からみて必要と考えられる幼児の発達の心理について述べる。9～11章では幼児が成長につれて通過する集団として、家族、遊び仲間、保育所、幼稚園の諸問題を扱う。12～14章では、幼児教育の思想、内容、方法、評価について述べ、最終章では、幼児教育と学校教育、家庭と地域の連携の問題にふれておける幼児教育の意味を考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	幼児教育とはなにか	幼児教育をここでは、前半はコミュニケーション、知能、自己、対人関係など幼児の発達側面を前半に、後半に、家族、遊び仲間、園（幼幼園・保育所）など通園集団の関わる問題についてさらに幼児期の教育の意義や内容、方法、評価についても論ずる。	萩原元昭（群馬大学教授）
2	発達とはなにか	教育、しつけを考える上での鍵となる概念のひとつが発達である。発達は長い間、子どもが一人前のおとなになることとされきた。が、近年この考えかたでよいのかという再検討がされ始めた。この章では、発達をどのように考えるのがよいかを論じる。	高橋恵子（聖心女子大学教授）
3	コミュニケーション能力の発達	人は社会の中で生活してはじめて人となる。人は人から知識を受継ぎ、分かつ、あるいは、人とくらす楽しさを知って、人を愛し、人のためになりたいと願う。こうして人間は社会を造ってくらしてきた。この章では、乳・幼児の人との交渉の能力の成長について述べる。	同上
4	知的能力の発達	最近の乳・幼児の知的能力の発達についての研究は子どもがいかに能力が高いかについての発見に彩られている。新しい研究は、子どもは何も知らないとか、でたらめに答えているとか、考える力がまだないとかいう、これまでの見方を改めさせ、子どもの知的な能力の特徴を明らかにしている。この章では、子どもの真の幸せのためには、幼児期で大切にしたい能力とはなにか、また、そのためにおとなのするべきこと、してはいけないことはなにかについて考えてみる。	無藤隆（お茶の水女子大学助教授）
5	自己の発達	それぞれの人がもっともその人らしくあることを保証する社会を実現したいというのが現代のわれわれの願いだといってよいであろう。その人らしくいられる状態にある時にもっとも人間は幸せを感じるのだと、人類はこれまでに大きな犠牲を払って学んできた。この“その人らしさ”が、自己である。この章では、自己がいかに幼い時から確実に成長しようとしているか、それを保証するためにおとなはなにをすべきかを論じる。	高橋恵子
6	人との関係の発達	子どもはたくさんの人々に囲まれてくらしている。乳児が初めに愛着を持つのは母親であることが多い。母親に依存して生命を守られ、また、可愛がられることで、人間とはいいものだと知る。やがて、母親だけでは満足せずに、母親を安全地帯と頼みながら新しい人々との関係をもつようになっていく。この章では、依存から自立への変化とはどのようなものかを考える。	同上
7	社 会 化	子どもが社会の要求を受入れながら、社会のメンバーとなっていくことを社会化という。これまでの社会化の考え方では、社会が子どもに影響を与えるという、“社会→子ども”、あるいは、“おとな→子ども”という一方向の流れが強調されすぎてきた。しかし、子どもといえども人間は一方的に影響されてしまうようなことはない。新しい研究をもとに、子どもが社会的な影響をどのようにうけとっていくのかについて述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代社会の子ども	おとなの社会が著しく変るにつれて子どもをとりまく社会も急変している。それをもっともよく現しているもののひとつが子どもをとりまくマス・メディアである。テレビ、マンガ、テレビゲーム、パソコンなどを例にとり、現在社会が幼児の生活の中でどのような意味をもっているのか、それが発達に及ぼす影響はどのようなものかを考える。	無藤　隆
9	幼児期の家庭	幼児にとって家庭とは、第1次的社会化の機能と、精神安定の機能を備えた最初の場である。共働きやシングルペアレントなど、幼児をめぐる家庭理論の動向に止目しながら、家庭の意義について考える。	萩原元昭
10	幼児の近所遊び	幼児にとって遊びとはどんな意味をもち、実際にどのような遊び特に、家の近くで集団で遊ぶいわゆる近所遊びに焦点をあて、全国調査の結果にもとづきながら、幼児の遊びの重要性、方法、規定要因などについて考察をすすめたい。	同上
11	社会化過程における保育所・幼稚園	保育所・幼稚園は、幼児にとり小学校に入学する以前のいわば就学前機関として、家庭や親から精神的に離乳して入る初めての集団で、幼稚園は幼稚園教育要領、保育所指針に基づいて、実際に保育を行っている。幼保一元化や園児減少問題にもふれる。	同上
12	幼児教育思想の至譜	近代幼児教育の夜明けを思想的に支えてきた内外の思想家例えばロバート・オーエン、フレーベル、モンテッソーリ、ピアジェ、倉橋惣三らの全譜をたどりながら説明してゆく。	林　信二郎（埼玉大学助教授）
13	幼児教育の内容	幼児期におけるいわゆる見えない幼児教育の特質と、家庭で培われたヒドウン・カリオユラムとの関係、園保育のカリキュラムの編成の原則や内容と方法、保育形態との関連、遊びと学習とのかかわり方などについても、考えてみたい。	萩原元昭
14	幼児教育の方法評価	幼児教育とりわけ、幼稚園や保育所の保育方法の特質と問題点さらに、保育内容と方法との関連、さらに園保育の評価方法などについても考案をすすめる。また、保育のための方法としては、保育形態やクラスなどについてもふれてゆく。	同上
15	家庭・小学校地域との連携	幼稚園や保育所が、時間的原利的には、小学校との連帯、さらに、空間的には家庭や地域との連携の重要、その具体的な実例をあげて考察したい。	同上

＝教育社会学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：新井郁男（上越教育大学教授）〕

全体のねらい

教育はどこの社会にも、いつの時代にも共通にみられるが、その目的、内容、方法、形態などは異なっている。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	社会事象としての教育	教育はどこの社会にも、いつの時代にも共通にみられるが、その目的、内容、方法、形態などは異なっている。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考える。	新井郁男（上越教育大学教授）
2	人間の発達の社会的性格 ― 社会化とは	人間の発達は、単に生物的現象であるだけではなく社会的現象である。しかし、同時に個々の人間は独自性をもっている。それは何故なのか。本章ではこの問題について考える。	同　上
3	生涯発達と発達課題	かっては発達というとせいぜい青年期までの問題であると考えられていた。しかし、発達は人間の一生の課題である。それはどうしてなのか。具体的にどのような課題があるのだろうか。この問題について考えるのが本章の課題である。	同　上
4	子どもの発達と教育	「子ども」はいつの時代にも、どこの社会にも存在するのだろうか。子ども期は近代社会に誕生したものである。子どもの教育は子どもの発見によって発達したものである。本章ではこのようなことについて考える。	同　上
5	青年期の社会的意義	子どもが大人になるためには、さまざまな体験を試行錯誤できる自由が必要である。青年期はそのような意義をもった発達段階として社会的に設けられているものである。しかし現実はどうであろうか。	同　上
6	成人の生活と発達	学習は青年期にとどまらず壮年期にも老年期にも必要であるが、その内容や可能性を具体的に考えてみる。	同　上
7	発達の病理と教育	非行や犯罪は社会的な逸脱として一種の病理だと考えられている。なぜそのような病理が生れるだろうか。その原因をいろいろな観点から考えてみる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	家庭の役割と機能	人間の発達、特に子どもの発達にとって、家庭はどのような役割を期待されているのか。また、現実にどのような機能を果たしているのか。このことを家庭（家族）の実態との関連において考える。	新　井　郁　男
9	学校の役割と機能(1)	学校はどのような役割を果たすことを期待されているか。また、現実にはどのような機能を果たしているのか。プラスとマイナスの両面について考える。	同　　上
10	学校の役割と機能(2)	期待されている役割と現実に果たしている機にはどうして大きなギャップがあるのか。学校の制度や組織、教師などに焦点をあてて考えてみる。	同　　上
11	地域社会の機能	地域社会もさまざまな形において人間の発達に大きな影響力＝教育をもっている。地域社会は子どもにとっても、青年にとっても、壮年にとっても、高齢者にとっても、それぞれ重要な意味をもっていることについて考えてみる。	同　　上
12	職　業　と　教　育	急速な社会経済の変動のなかで、職業に必要な知識や技術を絶えず学習していかなくてはならなくなっていることを、いくつかの職種をとりあげて考察する。	同　　上
13	余　暇　と　教　育	絶えざる学習は、職業のためだけではなく、生活の質全体を高めるために必要となっている。それは何故なのか。どうすれば高まるのか。	同　　上
14	異文化理解と教育	国際化や生活の多様化のなかで、人間の相互理解の必要性が高まっている。異文化理解の能力を養うにはどうしたらよいのか。外国語が堪能になればそれでよいだろうか。	同　　上
15	生涯学習と生涯教育	生涯学習を可能にするためにはどうしたらよいのだろうか。学校教育の変革、意識の変革社会的諸条件の改善・変革など、さまざまな面について考察する。	同　　上

教育社会学 Ⅱ

〔主任講師　岡崎友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会の中で生起するさまざまな教育現象を、社会科学的な方法を用いて、体系的に把握する。教育社会学Ⅰでは、人間の発達段階を、また教育の対象を軸にしたが、教育社会学Ⅱではとくに教育の構造を、「集団・組織および体制の側面」から明らかにする。

教育という営みは、個人の社会化を、社会・集団・組織の目的・役割に即して、意図的に展開するものである。

教育社会学がこれまでに構築してきた理論・方法、とくに社会学を基礎とした手法を用いて、教育の社会的特質を考察する。具体的な教育が展開する集団場面に即して、また全体社会と教育の基本的なつながりを、政治、経済、文化の側面から把らえる。さらに、現代日本の教育の構図を、現代社会の社会類型に即して、教育態勢として明かにする。

回	テーマ	内容	ゲスト（所属・氏名）
1	教育社会学の課題(1)	教育現象を社会現象の一つとして社会科学的に把らえる学問としての教育社会学の、研究対象と研究課題について、具体的な例を通して学ぶ。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡および東京大学	
2	教育社会学の課題(2)	教育社会学が、今日の教育現象をどのような方法でとられているかについて、教育社会学成立の歴史と展開に即して学習する。 ロケ地　太田区・文京区	清水義弘 （東京大学名誉教授）
3	教育社会学の方法(1)	教育現象を科学的・実証的に把える方法としてここでは教育調査法について取り上げる。その1では、調査の実際について、地域教育調査の具体的な例を通して、資料の収集、聞き取り調査の方法について学ぶ。ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	
4	教育社会学の方法(2)	その2では、調査結果の集計と分析について、統計的な処理や解釈の方法を含め、具体的な作業を通して学ぶ。	牟田博光 （東京工業大学教授）
5	家族	家族の教育機能について、歴史的な視点と現代的な視点の両面から、その本質的な役割を考察する。 ロケ地　長野郡佐久市・南佐久郡	庄司洋子 （日本社会事業大学教授）
6	学校	学校を集団の側面から把らえる。とくに学級の人間関係について、学級規模、班活動、学校行事などの具体的な教育活動を通して学ぶ。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	
7	地域社会	子どもの生活空間を、学校と地域社会での、具体的な活動を通して明らかにする。（子供会、PTA etc）。 ロケ地　佐久市	住田正樹 （九州大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	職場	職業と教育の関係について、企業に働く青年の職場定着と転職を中心に学習する。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	吉本圭一 （雇用職業総合研究所）
9	文化と教育	文化の変容が教育のどのような側面に、影響を与えてきたか、また与えているかについてみる。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	祖父江孝男 （放送大学教授）
10	経済と教育	経済発展と教育の関わりについて、教育投資と産業構造の視点から考察する。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	牟田博光
11	行政と教育	教育の具体的な展開を指導する教育の役割について、教育委員会の具体的な活動を通して学習する。 ロケ地　佐久市	小峯勇 （帝京大学教授）
12	移動社会	産業構造の高度化に伴う、都市化、国際化の進展は、人々の社会的流動性をもたらす。ここでは教育と移動をめぐる問題について考察する。 ロケ地　長野県佐久市・南佐久郡	加藤秀俊 （放送教育開発センター所長）
13	管理社会	組織の高度化、情報化の進展、権限の集中化などに伴い、人間の管理化が進んでいる。このような現象が、教育にどのような影響を与えているかについて考える。 ロケ地　東京都　長野県	林友三郎 （板橋生活と自治研究所代表幹事）
14	高齢社会	人口の高齢化に伴う教育上の課題について、地域社会の生活条件と関わらせて考察する。 ロケ地　東京都　長野県	
15	高学歴社会	変動する社会の中で求められる、教育・学習の内容について、社会全体が高学歴化する実態を踏まえ、新たな教育態勢について考察する。 ロケ地　東京都　長野県	河野重男 （御茶の水女子大学長）

＝発達心理学＝（TV）

主任講師：宮川知彰（放送大学教授）
野呂　正（宮城教育大学教授）

全体のねらい

前に発刊された「発達段階の心理学」（放送大学印刷教材）は人生経過における発達を乳児・幼児・学童・青年・壮年の6段階に分けて横割的に考察した。これに対して本書は、人間の心理行動の発達を身体・知覚・思考・言語・感情・動機づけ等の側面に分けて縦割的に考察する。両書をあわせて勉強していただきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	発達の中のからだ	からだが、人の生活にどのようなかかわりをもつのかという問題を、からだと心との関連で、身体像、身体表現、発達加速現象などを通して発達的に考えてみる。	宮川知彰（放送大学教授） 野呂　正（宮城教育大学教授）
2	知覚の世界	人間の乳児は、出生直後から、見ることと聞くこととを始めている。その能力は、さらに年齢を追って、変化し、分化していく。乳児・幼児の知覚の世界を大人のそれとの比較を通して探りつつ、乳・幼児の特質について考えてみよう。	星　薫（放送大学助教授）
3	思考と問題解決	集中的思考と拡散的思考、洞窟の思考と広場の思考と、思考スタイルを対比しながら、日常の生活の中での人や物とのかかわり方との関係で、思考の発達的特徴を概観してみる。	野呂　正
4	発達の中の言語	信号体系としての言語、話しことばと書きことば、言語と思考との関係、言語の行動調整機能等の問題を通して、言語が人の全体的な発達過程の中で、どのような特徴を獲得していくか、そしてそれの変化が発達全体にどのような意味をもつのか考えてみる。	同上
5	感情と活動	人の活動にはさまざまな感情が混合し、あるいは先行し、あるいは後続する。そして特定の活動を力づけたり弱めたりしている。また逆に活動が特定の感情を強めたり弱めたりもする。この観点から感情の発達について考えてみたい。	宮川知彰
6	学習と意欲	学習は、単に刺激と反応との機械的な機構をもって展開するのではない。その成立には何よりも学習者の自発的な意欲が必要である。ここでは、いかなる動機づけのもとにどのように意欲が生じ、学習が成立するのかを考える。	寺田　晃（東北大学教授）
7	物とのかかわりあい	人間は、基本的には、物の世界と人の世界という2つの交差する世界の中で発達していく。ここでは、人とのかかわりに留意しながらも、とくに、物の世界とのかかわりに焦点をあて、人がそれをどのように支配していくかということを発達的に概観してみる。	野呂　正

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	人とのかかわりあい	「社会性」とは何か、また「社会性」の発達とはどういうことかを検討して、その発達過程のあるべきすがたを考えてみよう。なお感情と「社会性」とのかかわりについても考え、第5章の「感情と活動」を補充したいと思っている。	宮川知彰
9	愛着と自立	母子相互交渉の発達的意義、「母性」を特徴づけるもの、愛着の発達的変容、愛着の形成がもたらすものについて、人としての「自立」との関係で考えてみる。	野呂　正
10	発達の中の遊び	人間はなぜ遊ぶのか、遊びは人間の発達に何をもたらすのか、遊びの誕生とその発達的変容、遊びと発達の最近接領域の諸問題を検討し、遊びと人の生活とのかかわりについて考えてみる。	同　上
11	知能と創造性	知能の概念をめぐる理論を概観した上で、知能を測定する試みとして知能検査がどのように発展してきたか、その有効性と限界などについて考える。最近の知能とパーソナリティーとの統合的理論を紹介した上で、創造性との関係について考える。	柏木恵子 （東京女子大学教授）
12	自己意識と性格形成	自己をどのように認知し、自己像、自己概念をどのように形成してゆくかを、乳児から青年にわたって概観する。また、性格がいかに形成されるかを、出生順位と性別との関係についてみ、性格形成のメカニズムについて考える。	同　上
13	発達と文化	人間発達における文化・社会の問題について考える。特に、日本の子どもの発達を米国の子どもの場合と対比しながら概観し、その背景にある日米の社会と教育文化 — 家庭のしつけ、学校教育の特質について具体例を挙げながら明らかにしたい。	同　上
14	発達診断	発達診断とは何かの定義、発達診断に関する諸理論を説明するとともに、具体的に身体・運動機能、知的能力、人格、学力、適性などの精神的諸機能の発達に関する測定と評価、ならびに発達障害の臨床的な診断・判断の方法と技術、問題点などについて解説する。	寺田　晃
15	発達心理学と教育	「学歴社会」がどのように人間形成にかかわってきたかについての調査と実験の結果を提示しながら、発達心理学ないし発達理論が「教育」にいかなる点でどのような貢献をなしうるのかについて考えてみたい。	宮川知彰

＝児童の心理と教育＝(R)

〔主任講師：三宅和夫（北海道大学教授）〕

全体のねらい

ヒトが生まれてからおよそ10年間すなわち小学校卒業のころまでの心理的発達の姿について最近の研究成果をふまえて検討し、さらに子どもの発達を促進したりさまたげたりする要因を考察し、どのような教育的な配慮をすることが必要であるかについても考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの心理的発達と教育	生後のおよそ10年という期間に子どもは心身ともにめざましい変化をとげる。生物としてのヒトが社会的人間になっていく過程についてここでは概括的に考察し、心理的発達についてのいくつかの異なる考え方を提示して2回目以後導入とせる。	三宅和夫（北海道大学教授）
2	新生児・乳児の能力	人生の出発点においてヒトがどのような能力を身につけているのかについて近年の研究の明らかにしたところを説明し、ヒトがはじめからまわりの環境と能動的なかかわりをもって発達していくことを明らかにする。	同上
3	母と子の相互作用	生まれたその日から母と子は毎日いろいろなやりとりをすることになる。以前考えられていたように母から子へという一方向的な影響ではなく、子から母へという方向での影響もまた重視される。このようにして母子が育ちあっていくということについて考える。	同上
4	家族とこどもの発達	現代社会は子育てにとって昔はなかったようなさまざまな問題を生んでいる。育児ということを母子の関係だけで考えるのでは不十分であり、父親の役割、その他の家族関係などを検討することが大切であり、さらにそれらの相互に及ぼす影響についても考えたい。	同上
5	日本の母子関係の特徴	我が国の母子関係の特徴をとくにそれとは対象的なアメリカにおける母子の関係と比較しながら、その持つ問題点について考察し、こどもの発達に及ぼす影響について考える。	同上
6	知的能力の発達	子どもは生誕以来、世の中の事象や自身のことについて知識を獲得し、構造化していく。こうした知的活動の発達はどのようにおこるのか、そのメカニズムと様相について中心的な発達理論を紹介しながら解説する。特に、個人差をどう捉えるかについて考えてみたい。	田島信元（東京外国語大学助教授）
7	就学前児の思考の発達	子どもは生まれながらに優れた学習・思考能力を持ち、それを発揮することにより徐々に知識を集積する。しかし乳幼児期は知識を表現する手段がイメージに基くため、非論理的側面を持つといわれる。こうした独自性を中心に、思考能力発揮の条件について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	知的発達と環境	知的発達の様相は文化的、社会的、教育的環境条件によって異なってくることを比較文化的研究に基いて解説する。さらに、知的発達の個人差が具体的にどのような環境条件のあり方によって生ずるのかという点を、家庭環境を中心に考えてみる。	田島信元
9	仲間遊びの発達と教育的意義	就学前期から学童期において遊びは子どもの発達にとって非常に重要である。子どもの自発的活動としての遊び・仲間遊びについて検討し、特に社会化における意義について考察する。	三宅和夫
10	行動基準の形成と社会化	子どもは社会の中で次第に生物としてのヒトから社会的人間になっていく。これは社会化の過程といわれる。このような過程を子どもがさまざまな行動基準を身につけていく一連のものとしてとらえることができる。そこにおいて子どもに生じる問題について考える。	同上
11	自己の発達と社会化	子どもは乳児期にはじまって次第に一個の独立した存在としての姿をはっきりさせていく。これを自己の発達という視点から考えてみる。またこのことを他者と子どものかかわりという観点から検討する。	同上
12	数量の理解の発達と教育	幼児期から児童期にかけて発達する重要な知識の1つに数・量概念がある。これは最初、量にかかわる経験（大・多・長など）からはじまり、数概念、さらに演算へと進むが、数量に関することばの獲得に影響される。数量の理解と教育の関係について考察を深める。	田島信元
13	読み・書き技能の発達と教育	言語発達には幼児期の話しことば(音声言語)の習得に加え、児童期にかけての書きことば（文字言語）の習得という側面がみられ、言語生活は飛躍的に豊かになっていく。文字習得、読書能力・作文力の発達について、教育との関連を含め考察してみる。	同上
14	論理的思考力の発達と教育	幼児期における非論理性を持った思考から、論理的思考能力が十分発揮されるようになる児童期を中心に、抽象的論理操作が可能になる段階までを概観する。その発達には言語・記号を思考の手段にすることとかかわっており、学校教育がそれに果す役割にも言及する。	同上
15	学校環境と教育・発達	学校教育が子どもの発達にどのような点で影響を及ぼすのだろうか、教授法の違いによる知的達成、創造力、学習への積極性などへの影響過程、また、教師の個性、仲間関係の学校経験への影響などを含め、発達に及ぼす学校教育の影響の功罪について考えてみる。	同上

＝老人の心理と教育＝ (R)

主任講師：荒井保男（飯山医院院長）
〃　　宮川知彰（放送大学教授）

全体のねらい

高齢化社会の到来とともに老人問題は大きな国民的課題として、老人処遇の問題が種々論ぜられているが、これらはいづれも先づ老人の心理を解することから始めなくてはならないであろう。ここでは先づ正常老人及び異常老人の心理について考察し、終りに老年期の生き方について少しく論述してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	老人の心理を学ぶ社会的背景	なぜ老人の心理を学ぶことが必要になってきたのであろうか。その理由を ①高齢化社会の到来　②ライフサイクルの変化 ③家制度の崩壊　④高度産業社会の到来 ⑤老人能力の開発　⑥死をめぐる諸問題 などを中心に、その社会的背景を考察する。	荒井保男 （飯山医院院長）
2	老化の概念	老化とは何か。老化の概念について口述し、老化学説を紹介しながら、脳の老化に言及する。	同上
3	「老い」の自覚	老人の心理は、「老い」を自覚し、「老い」をどのように受容し、自己をどのように変容させて、「老い」に適応してゆくか、という問題としてとらえることもできる。ここでは「老い」の自覚発現年齢、その契機や社会的要因などを中心に論述する。	同上
4	老人の感覚と知覚	老年期には感覚器官、知覚機能が低下するために、環境からの情報（刺激）を正確にしかも速く知覚・認知することが困難になりやすい。視覚、聴覚を中心に、加齢に伴う感覚・知覚機能の変化が、行動やパーソナリティに及ぼす影響についても口述する。	長嶋紀一 （日本大学教授）
5	老人の記憶	老年期には、健康な人でも大なり小なり記憶力の衰えを経験する。これは、新しい事を憶えられなくなるためなのか、憶えたことを思い出せなくなるためなのか？記憶減退に関する、最近のいくつかの理論を紹介しつつ、老人の記憶について考えてみよう。	星薫 （放送大学助教授）
6	老人の知能	年をとると知能が低下する、と思われているが、これは老化性痴呆の病態などが極端に一般化されたものであることが多い。ここでは老人の知能の実際の姿について考察するが、百歳老人の知能や知能の病態としての痴呆についても触れ、考察を深めてみたい。	井上勝也 （筑波大学助教授）
7	老人の人格	老人になると人格は本当に変化するのであろうか、変化するとすればどのように変化するのであろうか？　又変化させる要因は何なのであろうか、以上のようなことに考察を加えながら老人の人格について論述する。	荒井保男

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	老人と性	人間の性は乳児の時代から意識や行動として顕在し、また潜在しながらも成長の過程をたどり、老年期に至っても消滅するものではない、ここでは老年期の性について行われた実態調査を紹介しながら、老年期の性について考察を加え、老婚の問題にもふれたい。	荒井保男
9	老人の生きがい（生きがい論）	生きがい、という問題は、人の口の端にのぼることは多いが、改めて生きがいを概念規定しようとすると、なかなか難しいものである。本講では、老年期になって人はなぜ急に生きがいを必要とするようになるのか、から考察を始め、生きがいの本質について論究する。	井上勝也
10	老人と社会	年をとって仕事から離れると、家族と地域社会の持つ意味が重要になってくる。また多くの人にとって老人のための社会制度やサービスが、生活して行く上で不可欠のものとなる。本講では老人にとって大切な社会のこれら3つの側面の現状と将来について考察する。	前田大作（東京都老人総合研究所社会学部長）
11	老年期と死	老人は、死と背中合わせで生きている。一体老人は死をどのように受けとめ、そのなかでどのように生きてゆこうとしているのであろうか、ここでは、死の恐怖や、老人の死に対する態度について述べ、更に死にゆく人々の心理についても、考察を加える。	荒井保男
12	老年期の精神障害	老年期の精神障害一般について述べ、とくに老年期の痴呆について少しく詳述したい。	同上
13	痴呆性老人の心理とその扱い方	老年期痴呆の原因となる老年期の疾患と心理的特徴について述べる。ついで痴呆の種類による対応の仕方の違いについて口述する。特に、痴呆のとらえ方については、従来とは異なる考え方について触れながら、その扱い方の違いについて考えてみたい。	長嶋紀一
14	老齢者の言語問題 ── その心理とリハビリテーション ──	老人にとって、老化現象は一般的事象で、その代表的問題に耳の「聴え」の衰えがある。いわゆる老人性難聴は言語障害に関連する。また、いわゆる老人病といわれる脳血管障害は、特に、失語症を併発する、失語病問題とそのリハビリテーションについて考察する。	内須川洸（筑波大学教授）
15	老年期を生きる	人が生きていくということは活動するということであろう。活動とは、周囲に対して、他者に対して、また生きんがために生じてくるもろもろの課題に対して、人が関係を実現していく過程である。この活動という観点から老人の問題を考えてみる。	宮川知彰（放送大学教授）

＝言　語　障　害＝（R）

〔主任講師：内須川　洸（筑波大学教授）〕

全体のねらい

言語障害の理解に必要な基礎知識を、生理・病理面、発達・学習面、言語関係面から学習する。さらに各論として、言語発達遅滞、吃音、音声障害、構音障害、器質的言語障害（口蓋裂・脳性マヒ・難聴に伴う言語障害等）、および成人の言語障害（失語症等）の各種問題について概述する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	言語の基本的構造	言語の基本的構造の理解に必要な3点について解説する。(1)言語の2様式（音声言語・文字言語）、(2)言語のフィードバック機構、(3)音声言語の4大機能に関する要点を概述する。 本講義15回のオリエンテーションを行う。	内須川　洸 （筑波大学教授）
2	言語障害とは	言語障害の定義・分類について、主として米国における知見を基にして解説する。各種言語障害の出現率、特徴を概述したのち、言語障害の基本的理解に必須の課題について、いわゆる「ヴェンデル・ジョンソンの言語関係図」を参考にして学習する。	同　上
3	発達と言語障害	発達面より言語障害を考察し以下の点について解説する。(1)スピーチ・レディネス、(2)言語発達遅滞に係わる諸条件、(3)言語障害の心理的要因、(4)言語保健と言語関係。 言語障害の基礎問題に、言語学習と発達の課題が存在し、その基礎的知見を学習する。	同　上
4	言語障害の生理と病理(1)	言語表出面の生理と病理について以下の諸点の学習をする。(1)発声機構（呼吸器・発声器）、(2)構音機構（発語器・構音の仕組み）、(3)聴器の仕組み（外耳・中耳・内耳）但し神経機構を除く。	同　上
5	言語障害の生理と病理(2)	言語理解面の生理と病理について以下の諸点の学習をする。(1)言語活動の基礎としての脳機能、(2)大脳皮質の主要機能、(3)学習の生理学、(4)聴覚に係わる中枢神経過程（聴覚伝導路の仕組み）	同　上
6	言語発達遅滞の評価	本講義（6回目）以降、言語障害の各論に入る。言語発達遅滞の理解を深めるため、発達の診断・評価面を以下の通り重点的に解説する。(1)概念、(2)臨床的評価法、(3)各種検査法、(4)各種言語発達遅滞の臨床鑑別上の留意点。	同　上
7	言語発達遅滞の治療教育	言語発達遅滞の治療・教育面を中心として以下の課題の学習をする。(1)言語発達遅滞の基礎訓練法、(2)各種の言語発達促進法、(3)行動療法の活用、(4)言語関係法の活用、(5)米国のIYREAL法の紹介。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	吃音の評価	吃音を診断・評価する方法について学習する。そのため言語・身体・心理の3側面の理解に必要な基礎知識について紹介し、吃音の環境論的理解、吃音児の臨床診断法について解説する。	内須川　洸
9	吃音の治療・教育	吃音の治療・指導・教育問題を中心として、幼児吃音、学童吃音、成人吃音の治療・指導上の相違点、共通点について概述する。また吃音児(者)の治療・教育上の留意点、各種治療法の特性を解説し、成人吃音のセルフ・ヘルプ・グループ活動について紹介する。	同　上
10	構音障害の諸問題	構音障害のさまざまな種類について紹介し、分類・原因・言語症状の特徴・治療経過・予後にふれながら、構音障害の診断・評価の手続、治療・訓練法についても解説する。また幼児語と構音問題にも言及する。	同　上
11	音声と音声障害の諸問題	音声障害の基礎問題として、音声の3要素、すなわち大きさ・高さ・音質にふれて考察するとともに、音声障害の発生を音声習得過程の不全、及び病理学的側面から解説する。また音声障害の種類・評価法・改善法についてもふれる。	同　上
12	聴覚と言語障害	聴力・聴覚の障害が言語障害の発生に及ぼす影響を考察し、基礎知識として、難聴の程度・種類・型について解説する。また難聴に伴う言語障害の特性や教育・指導法、補聴器の装用などの諸問題にふれる。	同　上
13	器質的言語障害と重複障害	器質的言語障害のさまざまな種類について解説し、とくに口蓋裂、脳性マヒ、発達性失語、微細脳機能障害などに伴う言語障害問題にふれる。なお障害の重複化傾向に関し、重複害児教育について紹介する。	同　上
14	成人の言語障害とリハビリテーション	新たに成人の言語障害問題をとり上げ、失語症、マヒ性構音障害、発語失行について解説する。失語症の定義、出現率、診断と治療問題について、言語障害面から考察し、合わせてリハビリテーション問題にふれる。	同　上
15	言語障害児教育の現況と展望	最後に、我が国の言語障害問題を概観し、スピーチ・セラピーの現況、言語障害児教育の現状を考察する。また諸外国の状況と対比しつつ、今後の課題、展望について解説する。	同　上

＝犯　罪　と　刑　法＝　(R)

〔主任講師：内藤　謙（創価大学教授）〕

全体のねらい

現代社会における犯罪現象に対して刑法がどのように対応しているかを、近代刑法の展開という視点から検討する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の考察が中心になるが、現代社会が犯罪と刑法について提起しているさまざまの問題を手がかりにして具体的に説明することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	犯罪現象と法の機能	犯罪現象に対する法の機能を、犯罪現象は、法を超える領域とも、また、刑事法以外の法領域ともかかわりをもっていることを視野に入れて、近代法の展開という視点から検討する。	内藤　謙（創価大学教授）
2	刑法の基本問題―刑法と国家	近代・現代の社会では、犯罪に対して刑罰を加える権能をもっているのは、国家だけである。そこで、このような国家刑罰権の根拠と限界をどのような方向にむかって考えるべきかを検討する。	同　上
3	罪刑法定主義	近代刑法の基本原理である罪刑法定主義の沿革、実質的・政治的根拠を考察するとともに、罪刑法定主義の内容と現代的意義について検討する。	同　上
4	刑法の機能	近代刑法の機能には、罪刑法定主義と結びつく人権保障機能、および、法益保護機能がある。この法益保護機能の内容を検討し、現代の問題状況と刑法の機能について考察する。	同　上
5	刑法理論の系譜と「学派の争い」	近代刑法理論の展開過程を、市民社会の成立期に形成・展開した前期旧派理論、それに続く後期旧派理論、さらに、旧派に対抗する新派理論について検討し、新旧両派の「学派の争い」を考察する。	同　上
6	日本刑法典の史的展開と現代刑法理論の基本動向	日本の旧刑法典・現行刑法典の成立とその特色を、刑法理論の系譜との関連で考察する。そして、現代刑法理論の基本動向を、日本、英米、フランス、西ドイツについて概観する。	同　上
7	犯罪論の構成と構成要件該当性―犯罪論の諸問題(1)	刑法解釈学における犯罪の定義と犯罪論の構成について、その基本的内容と特色を検討する。そして、作為犯・不作為犯、因果関係を構成要件該当性の問題としてとりあげる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	違法性と責任―犯罪論の諸問題(2)	違法の実質、正当防衛、緊急避難、法令行為・正当業務行為を違法性の問題として検討する。さらに、故意・過失、責任能力、違法性の意識、期待可能性を責任の問題として検討する。	内藤　　謙
9	未遂犯と共犯、客観主義と主観主義―犯罪論の諸問題(3)	未遂犯に関連する問題と、共犯に関連する問題を検討する。そして、犯罪論における基本的な考え方の違いである、客観主義と主観主義の対立について考察する。	同　　上
10	個人的法益に対する罪(1)―生命・身体・自由の保護	殺人罪・傷害罪・住居侵入罪などの個人的法益に対する罪について概観する。そして、脳死・安楽死・尊厳死がどのような視点から刑法上の問題になっているかをも検討する。	同　　上
11	個人的法益に対する罪(2)―名誉・信用・秘密の保護、および、財産の保護	名誉などに対する罪、および、窃盗罪・強盗罪・詐欺罪・横領罪・背任罪などの個人の財産に対する罪について概観する。そして、最近の刑法一部改正で規定されたコンピュータ犯罪をもとりあげる。	同　　上
12	社会的法益に対する罪―不特定・多数の人びとの生活利益の保護	放火罪などの人びとの生命・身体・財産に対する罪、文書偽造罪などの取引手段の信用に対する罪、猥　文書頒布罪などの性的感情に対する罪について概観し、コンピュータ犯罪にも触れる。	同　　上
13	国家的法益に対する罪―国家の存立とその作用の保護	内乱罪などの国家の存立に対する罪、公務執行妨害罪・偽証罪などの国家の作用に対する罪、職権濫用罪・収賄罪などの国家機関による罪について概観する。	同　　上
14	刑罰論の基本問題	刑罰の根拠と限界の問題について、応報刑論か目的刑論かという従来の一般的論議を検討し、問題解決の方向を考える。そして、刑罰の種類と内容について、日本の現行法を中心に考察する。	同　　上
15	刑事政策の現代的問題	法制度の全面改正が問題になっているものとして、自由刑の執行内容を規定する行刑法と保安処分とがある。この２つの問題について、改正作業の動向に注目しながら、検討する。	同　　上

＝裁判と市民生活＝（TV）

主任講師：井上治典（神戸大学教授）
〃　：三井　誠（神戸大学教授）

全体のねらい

近時、裁判に対する関心は高まってきてはいるが、日常的な市民生活にかかわる問題領域での裁判の「素顔」は、案外知られていない。また、司法といえば、裁判所の手続きだけを思いうかべる傾向がある。いったい裁判とは何なのか、市民生活にとって裁判所はどのような存在なのかを明らかにしていくことを通じて、司法制度とその作用をみるたしかな「眼を養いたい。講義の前半部分は民事（井上）を、後半部分は刑事（三井）を取り扱い、最終会で全体のまとめを行う（井上・三井）。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	紛争とその処理手続き	紛争 紛争解決手続きの諸方式 紛争解決機構一覧 紛争解決手続きの役割と手続き相互の関係 訴訟の位置づけと特徴	井上治典 （神戸大学教授）
2	民事手続きの流れと原理	訴訟の準備　　執行手続き 訴訟のはじまり　　民事訴訟法の原理 主張と立証 弁論の終了と手続きの結末 上訴と再審	同　上
3	裁判に対する利用者の期待と弁護士の役割	裁判の理念と現実 正しい裁判に対する期待 裁判における弁護士の役割	同　上
4	法廷における対話のあり方 ― 口頭弁論の意味とあり方を考える	口頭弁論の必要性 現行の口頭弁論の問題点 弁論らしい弁論のために	同　上
5	訴訟と政策形成 ― 嫌煙権訴訟の分析	現代型訴訟の特徴 嫌煙権訴訟 訴訟による法（政策）形成	同　上
6	少額紛争と裁判所 ― 簡易裁判所を考える	少額事件と簡易裁判所 アメリカ合衆国の少額裁判所 わが国の現状といくつかの提言	同　上
7	和解と調停	利用状況と効用 和解と調停と法原則 和解・調停の運用	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	刑事手続きの流れと原理	刑事手続きと民事手続きの異同 捜　査 公訴の提起と公判準備 公　判 上訴・確定後救済手続き 刑事手続きの流れをどうみるか	三　井　　誠 （神戸大学教授）
9	捜査と人権	被疑者の取調べ　　密室における取調べ 取調べの特徴　　取調べ問題の今後 取調べの必要性 取調べ受認義務はあるか 勾留された被疑者はどこに収容されるか	同　　上
10	検察官の役割	検察官の活動・性格 起訴処分 不起訴処分 制度の特徴 現行制度・運用の功罪 「検察官司法」	同　　上
11	裁判官と事実認定	ある事例より 裁判所(官)の活動 事実認定 ― 証拠法則 自由心証の内容 事実認定論の今後	同　　上
12	刑事弁護人の役割	刑事弁護とは 起訴前の弁護活動 被疑者と弁護人との接見交通 接見指定 指定をめぐる論議と接見の実情	同　　上
13	市民の刑事司法への参加	刑事手続きの関与者 検察審査会制度 陪審制度	同　　上
14	刑事事件からみた戦後史	「時代を映す鏡」 刑事事件と刑事司法 事件と刑事手続き 戦後「刑事手続き」史	同　　上
15	司法制度を考える	法廷の傍聴 展望 ― 民事の角度から 展望 ― 刑事の角度から	井　上　治　典 三　井　　誠

＝ 日 常 生 活 と 法 ＝(TV)

〔主任講師：川井　健（一橋大学長）〕

全体のねらい

日常生活において重要な役割を果たす民法が施行されて以来、すでに９０年近くになる。この間、民法はあまり改正されていないが、社会の変化はいちじるしい。法と社会のズレを調整してきた判例の変遷に留意しながら、現在の日常生活上の重要な問題をとりあげて、民法を説明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民法の意義	民法は、市民社会における財産や家族をめぐる紛争を解決する基準となる法である。民法典のほか判例法や慣習法があることを述べ、民法の解釈や民法の効力についても言及する。	川井　健（一橋大学長）
2	権利とその主体	民法は紛争を解決する便宜的手段として、各種の権利を認めている。権利の実現はどのように行われるのか。また、権利の主体である人の法律上の問題を扱う。	同　上
3	契　約	契約とは何か。契約自由の原則は、事実上約款により制約されており、公序良俗や強行法規の役割が増大している。契約と信義誠実などについてもふれる。	同　上
4	不動産の売買	不動産の売買による所有権の移転や、所有権の移転を第三者に対して主張するために必要な登記について述べる。また不動産物権変動の公信否定などについてふれる。	同　上
5	動産・債権の売買	動産の売買における所有権の取得の問題や、売主が無権利者であった場合の買主の保護の問題などをとりあげる。また、キャッチセールスや債権の譲渡にともなう問題を扱う。	同　上
6	売買契約の履行	売買契約の履行としての売主の登記移転、引渡し、買主の代金支払などの義務をとりあげる。また、弁済に関連しての相殺や売主と買主の義務、債権の消滅時効の問題などを扱う。	同　上
7	売買契約の不履行	売主や買主が履行を怠った場合や履行が不能となった場合の強制履行、損害賠償の範囲、契約の解除の問題について述べる。また、金銭債権の遅滞などについてふれる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	売買と目的物の瑕疵	売買が行われたとき、権利や物に瑕疵があった場合の売主の責任はどうなるか。瑕疵担保責任と錯誤の関係や保証書の問題などを取りあげる。	川井　健
9	借金を保証	金銭消費貸借契約と利息の関係について述べる。またサラ金問題と関連し、利息制限法や貸金業規制法を取りあげるほか保証や連帯債務、身元保証などについてもふれる。	同　上
10	請負と委任	請負契約における注文者の保護の問題として請負人の瑕疵担保責任や約款の果たす役割を述べる。また委任契約では委任と代理との関係、善良な管理者の注意義務や報酬請求権についてふれる。	同　上
11	契約の無効・取消	錯誤、虚偽表示、心裡留保などによって契約が無効とされる場合や、詐欺、強迫によって契約が取消される場合の問題をとりあげる。詐欺と善意の第三者の保護についても述べる。	同　上
12	所有権	所有権は物権の中心となる権利とされており、これを制限する各種の物権が法定されているほか慣習法上の物権もある。所有権の取得時効や共有の問題も取りあげる。	同　上
13	利用による所有権の制限	所有権を制限する物権である地上権、永小作権、地役権のほか入会権の問題をとりあげる。所有権の取得時効や共有の問題も取りあげる。	同　上
14	借家	民法の賃貸借の規定が大正10年の借家法によって修正され、賃借権の物権化が認められ、さらに昭和16年の借家法の改正によって賃貸借解約に制限基準が設けられたことを述べる。	同　上
15	借地	民法の賃貸借の規定が大正10年の借地法の制定によって修正された。明治42年には建物保護法が住宅問題や土地利用の観点から借地法のあり方を考える。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	担保による所有権の制限	金銭債権などを確保する手段として、抵当権や質権などがある。これらが所有権を制限する担保物権であることを説明し、留置権や先取特権のほか、仮登記担保などをとりあげる。	川井　健
17	抵　当	抵当権の設定の要件や効果などを説明する。また、特殊な抵当としての共同抵当や根抵当などにもふれ、関連して、工場抵当法や企業担保法にも言及する。	同　上
18	質	庶民金融として重要な役割を果たしてきた質権を説明する。しかし、実際界では、質権はあまり使われなくなってきており、譲渡担保がこれに代わる役割を果たしている。さらに新しい担保もつぎつぎに考案されている。	同　上
19	過失責任と無過失責任	過失責任の原則とこれを修正する無過失責任、中間責任の問題をとりあげる。債権侵害、医師の責任、安全配慮義務と不法行為との関係も扱う。	同　上
20	人格権の保護	人間にとって、もっとも重要な価値の一つである人格権は民法上どう扱われているか、名誉毀損、報道の自由との関係、プライバシーの問題などを取り上げる。	同　上
21	交通事故	交通事故の被害者の救済として、民法を修正する自動車損害賠償保障法がある。加害者が責任を負う要件、保険金給付の問題、国、公共団体の責任を取り上げ、航空機、列車事故にもふれる。	同　上
22	公　害	イタイタイ病、四日市ぜんそく、水俣病などの公害に対し、裁判所がどのような判断を示してきたかということを説明し、大気汚染防止法、水質汚濁防止法、公害健康被害補償法などを概観する。	同　上
23	欠陥商品と消費者保護	複雑な流通機構のもとで、欠陥商品による被害者救済はどのように行われるかを考える、また森永ひ素ミルク事件など欠陥商品事故を概説し、消費者救済立法の進展を見る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	損害賠償	損害賠償の範囲、損害算定の基準時、過失相殺などの問題を述べる。また、慰謝料についての損害賠償請求権の相続の問題や、補償や保険についても取り上げる。	川井　健
25	結婚	家族についての民法の扱いを概観したうえで、婚姻についての要件や効果を、男女平等、個人の尊厳という原則の下で検討する。また内縁の問題も扱う。	同上
26	離婚	離婚は、どのようにして成立するか。外国の離婚法の動きとともに、日本の裁判所が示している態度を見る。あわせて離婚後の財産分与請求権、子供の監護の問題を扱う。	同上
27	親子	嫡出でない子の地位や養子のあり方などについて検討する。特別養子、菊田医師事件にみられる虚偽出生届、人工受精子、体外受精子の問題も取り上げる。	同上
28	親権・後見・扶養	親権に関し、子の監護や子の財産の管理の問題を扱う。子の引渡請求、後見制度を取り上げる。親族間の扶養の問題では社会保障との関係にふれる。	同上
29	相続	財産の相続はどのように行われるか。相続人、相続分、相続財産や遺産分割を取り上げる。特別受益や寄与分にも言及する。あわせて相続回復請求権、相続の承認と放棄、財産分離などをも説明する。	同上
30	遺言	財産処分の自由は遺言によっても行われる。しかし遺言には厳格な方式が必要とされる。また、一定の法定相続人に対する遺留分は遺言によっても侵されない。これらを説明する。	同上

＝ 取引と企業の法 ＝（R）

〔主任講師：龍田　節（京都大学教授）〕

全体のねらい

現代の経済活動の主な担い手は企業であり、企業をめぐる取引の法律関係を知ることは重要である。また、企業の多くは会社形態をとるから、代表者の権限など、組織の問題が企業の取引に深く関係する。これら企業の組織および取引は、広い意味の商法が定める制度に乗って動く。その基礎的な部分をわかり易く説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	企業と取引	1　企業はどのような取引をするか 2　消費者と企業との間の取引 3　企業の取引を法律の目で見ると 4　市民の法と企業の法	龍田　節 （京都大学教授）
2	商品の流通	1　商品が消費者の手に渡るまで 2　販売店・代理店のいろいろ (1)卸売商　(2)代理店　(3)委託販売（問屋） (4)ブローカー（仲立） 3　企業と企業の間の売買	同　上
3	運送と倉庫	1　運送企業と物品運送のいろいろ 2　物品運送契約のしくみ 3　倉庫に物を預ける 4　物の代わりに動く証券 5　事故が起きたときの処理	同　上
4	旅行	1　旅行のプランといろいろの契約 2　運賃の支払 ── 切符さまざま 3　旅の宿と食事 4　事故が起きたときの処理	同　上
5	危険への備え	1　損害保険のいろいろ 2　損害保険契約のしくみ (1)契約に名の出る人　(2)保険料の支払 (3)保険金の額 3　保険の新しい働き ── 責任保険	同　上
6	からだと保険	1　からだに関する保険のいろいろ 2　生命保険契約のしくみ (1)契約に名の出る人　(2)嘘をつかない (3)保険金の受取り 3　けが・病気に備える保険 4　老後の生活と保険	同　上
7	約款に注意	1　約款を使う取引 2　約款がなぜ拘束力を持つか 3　約款をよいものにするために (1)法律による規制　(2)行政官庁の関与 (3)裁判所の役割　(4)消費者取引との約款	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業の名称	1 企業に名前をつける 2 紛らわしい名前が使われたとき 3 名前を貸したときの責任 3 営業や商品の名称・標章	龍田　節
9	取引をする権限	1 企業の活動を支える人たち 2 店員とセールスの従業員 3 支店長・部長・課長など 4 社長・専務・常務などと代表取締役 5 権限をよこしまに使ったとき 6 会社の事業目的からはみ出す取引	同上
10	トップ・マネジメント	1 トップは誰が選ぶか 2 トップは何をするか 3 企業の意見決定のしくみ 4 取締役会の役割と手続 5 社長が独断でした行為	同上
11	経営者の姿勢	1 会社の利益と取締個人の利益 2 役員報酬の決め方 3 取締役と会社との取引 4 会社を出し抜くな	同上
12	経営者の責任	1 会社に生じた損害の賠償 2 まわりに迷惑を及ぼしたことの責任 3 会社資本の充実 4 監査役の責任 5 企業の社会的責任	同上
13	経営をチェックする	1 経営に対する監査と是正 2 会社の規模によって違う監査制度 3 会計の監査 4 業務の監査 5 取締役から独立していること	同上
14	株主の声	1 株主は企業のオーナー 2 株主総会は祭典か 3 株主の声を総会に 4 株主のいろいろな権利 5 総会屋と手を切る	同上
15	企業の資金	1 企業の資金繰り 2 返す必要のない資金 ── 株式 3 増資さまざま 4 大衆からの借金 ── 社債	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	株式の売買	1　株主になる道 2　上場株式と店頭銘柄 3　非公開会社の株式 ── 譲渡制限 4　株式の名儀書換 5　会社が自社株を買うのは禁物	龍田　節
17	株式の配当と分割	1　株式投資からの収益 2　配当は利益から 3　持株のふえる楽しみ 4　半人前の株式 ── 端株	同上
18	投資のリスク	1　資産運用の狙いどころ 2　株式投資の危険性 3　株式の信用取引 4　商品の債券の先物取引 5　プロまかせの資産運用 6　甘言に乗るリスク	同上
19	会計と開示	1　経理のごまかし 2　損益を判定するプロセス 3　ガラス張りの企業経営	同上
20	会社を作る	1　株式会社の設立 2　会社のいろいろ 3　会社以外の共同企業 4　会社は法人である	同上
21	会社の変動	1　会社の衣替え 2　会社売ります 3　企業の融合と分裂 4　株主やめます	同上
22	企業のグループ	1　横のつながりと縦のつながり 2　親会社と子会社 3　国境をこえた企業戦略	同上
23	倒産	1　行詰まりと再建 2　戦線を縮小して再出発 3　会社が消えてゆくとき	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	お金の流れ	1　物の流れとお金の流れ 2　銀行取引と手形・小切手 3　手形・小切手のしくみと働き	龍田　節
25	手形の振出	1　手形・小切手の振出に必要なこと 2　書いてよいこと悪いこと 3　書かずに放っておくと 4　勝手に署名、勝手に手直し	同上
26	手形の裏書	1　手形・小切手には足がある 2　支払わなくてよいはずなのに 3　白昼の死角	同上
27	手形の支払	1　不渡りは命取り 2　支払をする側と求める側 3　権利の上の短い眠り	同上
28	紙にのった権利	1　紙と権利の結びつき 2　紙は強し、されど怖し 3　紙から権利を切離す 4　クォヴァディス――紙よどこへ行く	同上
29	貿易のしくみ	1　船の手すりをこえるとき (1)貿易条件　(2)FOB売買　(3)CIF売買 2　信用のネットワーク (1)荷為替　(2)商業信用状 3　ふえる黒字の悩み	同上
30	企業法の歴史と特色	1　ベニスの商人とナポレオン 2　文明開化とお雇い外国人 3　国の数より多い商事法 4　企業法のアイデンティティ	同上

＝ 日本の社会と法 ＝（R）

〔主任講師：碧海純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義は専門科目である。しかし、60・61・62年度に提供される法律関係の諸科目の充実度に鑑み、この講義は専門課程における教養科目として構想されている。日本の法をサンクロニクに（比較文化的に）かつディ・クロニクに（歴史的に）考察することを眼目とする。日本独特の社会構造と法との関係が基本問題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本における法の継受	1 法の継受ー法における自然と人為 2 継受と立法 3 継受法の日本的運用 4 継受と言語 5 ドイツ法と日本 6 戦前の日本におけるエリート養成と陸海軍	碧海純一 （放送大学教授）
2	大陸法系としての日本近代法	1 大陸法系と英米法系 2 成文法と判例法 3 現代日本法の性格 4 裁判の諸類型 5 司法権の独立	同上
3	日本法の史的展望(1)ー古代国家と律令の継受	1 固有法の時代 2 律令法の時代 3 律令法の変質と中世法の萌芽	植田信広 （九州大学助教授）
4	日本法の史的展望(2)ー武家社会の道理と法	1 中世武士の法観念 2 中世法の二つの顔 3 中世から近世へ	同上
5	日本法の史的展望(3)ー幕藩体制下の法と裁判	1 近世国家の権力構造 2 近世法の諸特徴	同上
6	日本の近代化と西欧法の継受(1)ー近代的法制度の成立	1 はじめに 2 明治国家の課題 3 西欧法との出会い 4 明治初期の裁判所制度	碧海純一 海老原明夫 （東京大学助教授）
7	日本の近代化と西欧法の継受(2)ー法典の編纂	1 明治憲法の制定 2 民法典の編纂 3 その他の主な法典の編纂	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の近代化と西欧法の継受(3)－法典起草過程の具体例	1 問題の所在 2 プロイセン憲法闘争 3 井上毅の構想 4 レースラーの見解 5 明治憲法第71条の成立	海老原 明 夫
9	日本の近代化と西欧法の継受(4)－学説の継受	1 「学説継受」の時代 2 「学説継受」の具体例 3 ドイツ法学隆盛の理由 4 ドイツ普通私法における法源と学説	同 上
10	近代日本法の成熟	1 西欧法の「継受」と日本的な法 2 日本的な法学の提唱 3 判例研究の提唱 4 「概念法学」批判 5 社会的弱者の法的救済	碧 海 純 一
11	第二次大戦の終結と日本の法	1 占領初期の法改革 2 新憲法の制定へむけて 3 労働三法と農地改革 4 占領政策の転換	同 上
12	日本国憲法の成立	1 日本国憲法の制定 2 「押しつけ憲法論」 3 国際環境の変化	同 上
13	法の支配	1 法とは何か 2 「法の支配」の原理の背景 3 現代日本と法の支配	同 上
14	立法改革とその限界	1 立法の実効性――法と社会	同 上
15	占領時立法と日本の改革	1 日本法の発展の概念 2 第二次大戦後の日本の社会と法 3 法の継受と立法 4 「法の支配」とフィードバックの概念 5 司法権の強化 6 日本の現行法体制における三権の関係	同 上

＝ 国際社会と法 ＝ (R)

〔主任講師：横田洋三（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

相互依存関係の深まる今日の国際社会においては、いかなる国家もその国限りですべての生活上の必要を充足することはできない。しかし他方では、今日の国際社会は依然として複数の主権国家の併存を前提としており、多様性と不安定性がつねに基調となっている。こうした状況のもとでは、法を通じての秩序の確保が強く要求され、またその法のあり方には、国内社会とは異なる特異性が見られる。このことをふまえて、国際社会における法の意義と役割を、とくに日本とのかかわりを念頭におきつつ、考えることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際社会における法の意義	国際社会において、法が必要とされる事情を考察し、あわせて、国際社会の構造の特殊性からくる法の存在形態の特異性にも目を向ける。	横田洋三（国際基督教大学教授）
2	国際社会を規律する法の種類	国際関係を規律する法には、国際法、国際私法、国際組織法など、さまざまなものがある。それらを個々に検討すると同時に、それらの法の相互の関係を明確にする。	同上
3	国際法の成立	国際関係を規律する法の中で中心的位置を占めるものが、国際法である。この国際法の成立のいきさつを、16、7世紀のヨーロッパにさかのぼって検討する。	同上
4	国際法の発展 －実定国際法体系の確立－	初期の国際法は、自然法の強い影響下にあった。しかし、次第に科学的思考の影響を受け、実証法体系へと移行し、19世紀には、実定国際法体系が確立した。この間のいきさつと、その政治的社会的背景を考察する。	同上
5	国際法の新展開 －新国際法秩序の形成－	今世紀に入って、戦争の違法化、国際機構の発達、個人の地位の向上など、伝統的国際秩序を根底からゆるがす現象が生じ、それに伴って国際法体系も大きな変容を余儀なくされている。この間の事情を、一つの必然的歴史の流れとしてとらえる。	同上
6	国際法の基本問題	従来、国際法学者の間で、理論上争われてきた基本問題のうち、(イ)国際法の法的性質、(ロ)国際法と国内法の関係、(ハ)国際法の法源、の3つについて考察する。	同上
7	実定国際法規 (1) －国際法の定立に関する規則－	現行の国際法の諸規則の中から、国際法の定立に関する諸規則をひき出して、検討する。とくに慣習国際法の成立の問題と、条約の締結、効力、実効性などに関する諸規則を考察する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	実定国際法規　(2) ー 外交関係法 ー	国際法の中でも比較的古くから慣習法として形成されてきた外交関係に関する諸規定、とくに、大使、公使をはじめとする外交官の職務、特権、免除などについて検討する。	横田洋三
9	実定国際法規　(3) ー国家に関する 諸規則ー	国際法上の重要な主体である国家の成立、種類、領域、主要な権利、義務などに関する実定国際法の規則を検討する。	同　上
10	実定国際法規　(4) ー 海洋法 ー	古くから確立し、永い間安定した法秩序を形成してきた海洋法が、近年、大きな変容をとげつつある。伝統的国際法に基づく海洋法をふまえたうえで、今世紀における海洋法の新しい動向に焦点をあてる。	同　上
11	実定国際法規　(5) ー 戦争と法 ー	国際法成立の直接の契機を与えた戦争と国際法の問題について、戦争それじたいが合法か違法かという問題と、戦争が起った場合に当事者によって守られるべき規則は何か、という二つの側面から検討する。	同　上
12	個人と国際法	従来、国際法は、国家間の関係を規律する法として確立されてきたために、個人については直接規定することがなかった。しかし、最近は、個人の地位の向上とともに、個人について直接規定する国際法規則が増えてきた。これを考察する。	同　上
13	企業活動と国際法	近年、企業活動の国際化に伴い、国際法も企業活動や経済関係について、さまざまの規律を及ぼすようになった。こうした企業活動に関する国際法の諸規則を概観する。	同　上
14	国際機構と国際法	今日の国際社会は、国際機構の存在を無視しては語れない。これらの国際機構は、国際法を基礎として成立し、国際法に従って行動するとともに、みずから、内部に独自の法体系を形成している。こうした国際機構に関する諸法規を概観する。	同　上
15	国際社会の将来と法	今日、地球上の全人類が平和のもとで繁栄を享受するためには、国際法の介在が不可決の条件といっても過言ではない。そこで、国際社会の将来を展望し、そこにおける法、とりわけ国際法の役割とそれに対する日本のかかわりを考察する。	同　上

＝ 経 済 活 動 と 法 ＝（R）

〔主任講師：来生　新（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

現代の資本主義社会における国民の経済活動と行政との関係を法律学的に検討する。本来、資本主義は市場による非人為的な資源配分、自由な企業の理念を持つ。現代の資本主義社会がこのような古典的な資本主義理念にどのような修正を加えているのか、それが国民の福祉とどのように結び付くのかを法律学的に究明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	資本主義経済における国家の役割	1　資本主義経済体制 経済体制とは　　資本主義経済体制の特徴 2　資本主義経済体制における市場と国家の関係 資本主義の成立と国民国家の成立　　市民社会、市民法、夜警国家　　資本主義の進行に伴う国家の介入の増大	来　生　　新 （横浜国立大学教授）
2	現代資本主義経済体制における国家の経済的機能	1　現代資本主義経済体制における市場と国家 現代資本主義の市場と国家　　雇用法による政府の経済的責任 2　国家のアジェンダとノン・アジェンダ 功利主義哲学と自然権思想　　市場の失敗と政府の失敗	同　上
3	経 済 政 策 と 法	1　現代の資本主義経済体制国家における経済政策の体系 経済的効率と他の社会的諸価値　　経済政策とは何か 2　政策手段と方法 経済政策の手段と法　　経済法の概念とこの講義の範囲・方法	同　上
4	経済政策実施の法手段と市場	1　法手段の態様 規制的手段　誘導的手段　直接・間接の経済活動 2　各種法手段と市場の関係 市場構造、市場行動、市場成果　　わが国の市場をとりまく法制度の概要	同　上
5	市場機能の維持と法―独占禁止法の目的と目的達成手段―	1　独禁法の目的規定の解釈 法の解釈と経済政策の手段性　　目的規定の構造　　究極目的の理解　　社会法的な立場からの独禁法理解 2　独禁法の目的達成手段 公正取引委員会と行政処分　　その他の目的達成手段　　公取委中心主義と改善可能性基準	同　上
6	独禁法の基礎概念	1　公正且つ自由な競争 不確定性の問題　　完全競争モデルとその現実的修正 2　事業者 事業者の意義　　公私混合領域における事業者 3　一定の取引分野における競争の実質的制限 一定の取引分野　競争の実質定制限	同　上
7	市場集中の規制(1)－私的独占	1　独禁法による公正取引の確保の意義 公正競争阻害性　　規制の政策的意義と公正競争の意味 2　特殊指定と一般指定 立法の変遷　　特殊指定と一般指定 3　一般指定の行為類型 差別的取扱　　不当対価　　不当顧客誘引　　事業活動の不当拘束　　取引上の地位の不当利用　　競争者に対する事業活動の妨害	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	市場集中の規制(2)－不当な取引制限	1. 定義規定の基本構造 2 共同行為の意義と成立 相互拘束・共同遂行と合意　合意形成のコストと個別当事者の利益　合意の存在の立証方法と排除措置　縦の合意と不当な取引制限 3 一定の取引分野における競争の実質的制限 合意の成立範囲と一定の取引分野　競争の実質的制限 4 公共の利益 従来の議論の対立　行政指導と公共の利益 5 課徴金	来生　新
9	市場集中の規制(3)－不公正な取引方法	1 独禁法による公正取引の確保の意義 公正競争阻害性　規制の政策的意義と公正競争の意味 2 特殊指定と一般指定 立法の変遷　特殊指定と一般指定 3 一般指定の行為類型 差別的取扱　不当対価　不当顧客誘引 事業活動の不当拘束　取引上の地位の不当利用　競争者に対する事業活動の妨害	同　上
10	市場集中の規制(4)－その他の市場集中規制	1 予防的市場集中規制 合併規制　株式保有の規制　役員兼任の規制 2 事業者団体に対する規制 事業者団体規制の位置づけ　規制の概要 3 独占的状態に対する措置	同　上
11	一般集中規制等	1 一般集中規制 一般集中規制とは　市場集中規制政策と一般集中規制の矛盾 2 同調的値上げの理由の報告 政策的意義　報告の徴収　40条の一般的な調査権、43条の公表との関係 3 国際契約に対する規制 規制の概要　国際契約等の規制の政策的意義	同　上
12	適用除外の諸制度競争	1 適用除外制度の歴史と理論的根拠 原始独禁法における位置づけ　昭和28年改正における位置づけ 2 原始独禁法以来の適用除外 自然独占と事業法令に基づく行為　無体財産権の行使　一定の組合の行為 3 政策的カルテル容認法 制度の歴史的変遷　適用除外カルテルの政策的な評価　積極的調整政策（PAP）の理念とカルテル政策	同　上

＝ 労 働 問 題 と 法 ＝（R）

〔主任講師：萩沢清彦（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

現代社会において、労働問題はどのような意味をもっているか、どのようなことが問題となっているのか、労働問題を処理するためにどのような法制度が定められているのかを明らかにし、あわせて労働紛争の特殊性とその解決手段を解説して、国民生活と労働法との関係についての理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会と労働問題	1 労働問題という意味 2 現代社会の労働の特色 3 商品としての労働の特色 4 労働者の生存のための労働法 5 憲法と労働法 6 労働法の内容と体系 7 生存権的基本権と労働基本権および労働法の体系	萩沢清彦（成蹊大学教授）
2	雇用の安定と新しい雇用形態	1 労働権と雇用の安定対策 2 失業救済から雇用安定対策へ 3 雇用対策の基本原則 4 労働者の募集、職業紹介、労働者供給事業 5 労働派遣事業 6 職業能力の開発 7 雇用保険事業 8 労働市場の開発 9 高齢者の雇用安定 10 身体障害者の雇用の促進 11 失業給付 12 失業対策事業	同 上
3	労働契約と労働条件	1 労働契約とは何か 2 労働契約と労働基準法 3 最低基準の原則 4 労働契約の締結 5 労働条件の原則	同 上
4	労働契約と就業規則・労働協約	1 労働条件の決め方 2 就業規則の作成・変更の手続 3 就業規則の効力 4 就業規則の変更と労働条件 5 就業規則と労働協約	同 上
5	賃金額の決め方と支払方法	1 賃金とは何か 2 賃金額の決定 3 賃金支払の確保 4 休業手当 5 企業の倒産と賃金	同 上
6	労働時間制度	1 労働時間制度の問題点 2 労働時間 3 休憩 4 休日 5 労働時間制の例外	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	女子および年少者の労働問題	1 女子労働問題の変化 2 男女雇用機会均等法の成立 3 女子の労働条件 4 雇用機会均等の確保 5 年少労働者の保護	萩沢清彦
8	労働災害の防止と補償	1 労働災害対策問題 2 労働安全衛生法 3 労災保険制度	同上
9	人事異動、服務規律、解雇	1 人事異動 2 服務規律 3 解雇	同上
10	労働組合	1 労働組合の設立 2 労働組合の組織形態 3 労働組合の組織機構 4 労働組合の統制	同上
11	団体交渉	1 労使間交渉の重要性 2 労使間の交渉方式 3 団体交渉の形態 4 団体交渉拒否の正当理由と不当労働行為 5 団交拒否紛争の解決	同上
12	労働協約	1 労働契約の機能 2 労働契約の成立 3 労働協約の効力 4 平和義務 5 労働協約の効力拡張 6 労働協約の終了	同上
13	争議行為	1 労働争議と争議行為 2 争議行為の正当性 3 争議行為の類模型 4 争議行為と賃金 5 使用者の争議行為 6 争議行為と第三者	同上
14	労働委員会と不当労働行為	1 労働委員会制度 2 労働委員会の組織と権限 3 不当労働行為	同上
15	労働紛争解決の手続	1 労働争議の調整 2 男女雇用機会均等紛争の解決 3 労働民事紛争の解決 4 不当労働行為の救済手続 5 労働保険審査	同上

＝ 日 本 政 治 思 想 ＝ (R)

〔主任講師：松沢弘陽（北海道大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の病いとして指摘される＜政治の貧困＞において、問われている＜政治＞とは何だろうか。私的・個的な利益・意見の分化を、自主的に公的なものにまで統合する営みがその中心であろう。そのような＜政治＞の成熟を阻んだ戦前日本の政治体制のもとで＜政治＞の問題と格闘した事例から、＜政治＞について学びたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 論		松沢弘陽（北海道大学教授）
2	明治啓蒙の政治思想	国民国家の形成と明治啓蒙思想 福沢諭吉 ― 「政治の診察医」	同 上
3		福沢諭吉の政治思想 ― 「一身独立して一国独立す」	同 上
4	自由民権論の政治思想	明治啓蒙思想の継承と反逆 植木枝盛 ― 政治運動と「道理」の追求と	同 上
5		中江兆民 ― 「東洋のルソー」	同 上
6	明治憲法体制形成期の政治思想	明治憲法体制の形成と新世代の登場 徳富蘇峰と平民主義	同 上
7		中江兆民 ― 「思賜の民権」から「回復の民権」へ	

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8		陸　南と国民主義	松沢弘陽
9	明治社会主義の二つの道	明治憲法体制と社会主義 幸徳秋水 ― 「志士仁人」の社会主義	同上
10		片山潜 ― 労働者の団結と都市自治の社会主義 直接行動・議会政策論争と「大逆事件」	同上
11	田中正造の政治思想	田中正造の生涯 ― 村から出て村に帰る 田中正造の憲法思想 ― 「宇宙間」の憲法と大日本帝国憲法のあいだ	同上
12	大正デモクラシーの二つの道	大正デモクラシーの知識人と民衆 吉野作造 ― 「立憲国の先覚者」	同上
13		吉野作造の政治思想 ― 「民本主義」における民衆と指導者	同上
14		河上肇 ― 東洋的マルクス主義者 河上肇の政治思想 ― 「利己心」の否定と肯定のあいだ	同上
15		むすびにかえて	同上

＝ 西 欧 政 治 思 想 ＝(R)

〔主任講師：田中治男（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

この講義は欧米における政治思想の発展を古典古代と呼ばれるギリシアから現代にいたるまで概説するものであるが、その際、思想家個々人の紹介は最小限にとどめて、政治社会・政治生活を構成し、かつ説明するものとして提起されてきた諸概念を、おおむね歴史的順序に従って叙述し、解説するという方針をとりたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 ── 政治思想史のテーマ：権力と自由 ── 民主主義理論の歴史的背景	政治社会の基本的原理を権力と自由という二つのものとして捉え、この両者がいかに対立し、また調和しうるかを探求するところに政治思想の課題があるとみる。それはまた、今日的テーマとしての民主主義がその内包を理論的に豊かにしてゆく過程でもあった。	田 中 治 男（成蹊大学教授）
2	Ⅰ. 政体論と理想国家論	古代ギリシアの政治的思考のエッセンスをさまざまな政体についての考察とそれらを越えた理想的国家の追求とに認めて、政治生活の自覚的把握が、ポリスの中での実際的経験とそれの哲学的反省とを通じて深められていったことを学ぶ。	同 上
3	Ⅱ. 自然法および神法の観念の生成とその意義	人間の具体的関係から成り立つ政治社会をより高い次元から規律するものとしての自然についての観念は古典古代の思想の中で育っていたが、これにはさらにキリスト教的な神の観念が加わって、中世から近代にかけて大きな影響をもった自然法思想が出てくる。	同 上
4	Ⅲ. 国家理性の観念と主権理論	ルネサンス期以降登場してきた近代国家を維持し、指導する力に対する要請と、これについての考察が、国家理論に新たな様相を与えることになった。これには、マキアヴェリとボーダンの名が結びつけて論じられる。だがその問題提起の意義は現代にまで及ぶ。	同 上
5	Ⅳ. 宗教改革の政治思想：内面的信仰と抵抗原理	カトリックの信仰箇条に対する挑戦から始まった宗教改革は、中世以来の政治的支配原理とその上に成り立つ政治秩序それ自体をも覆すという現実的帰結を伴った。16、17世紀の宗教戦争を通じて、権力と自由というテーマは良心の内面における葛藤としても現れた。	同 上
6	Ⅴ. 近世的自然法理論の意義と限界	宗教改革以後の状況から出てきた近世的世俗的自然法は、近代国家とその中枢に立つ君主権力とに合理的な法的規範を与えようとするものであったが、同時に、この時期からますます既成体制となっていく政治的支配秩序の大枠を抜け出ることはできなかった。	同 上
7	Ⅵ. 社会契約説と人民主権論 (1) 概説 ── ホッブス	契約説的政治理論は、自由・平等・独立の個人から出発して、政治社会が形成される筋道を論理的に構成しようとした。ホッブズは、人間がその自己保存本能を基に自然的能力を発揮する自然状態から、契約を通じて権力の秩序を創設する過程を原理的に論証した。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	(2)　スピノザ ―― ロック	ホッブズの方法を継承しながら、自然権と自然法の関係、合意と主権の理論、国家権力の目的と機能について、実り豊かな思想を展開したロックが、同じイギリスにおける政治的発展を背景に考察の対象となるが、同時期のオランダのスピノザも看過しえない。	田中治男
9	(3)　ルソーおよびその後	社会契約と形成された政治社会を導く一般意志とについての理論、主権の不可分性とその人民への帰属という観点がルソーの思想の特質であるが、そこに含まれる二律背反性は、一方に革命への方向性を与えるとともに、他方その理論の妥当性への批判をも生み出した。	同　上
10	Ⅶ. ブルジョワ革命と近代政治機構論 (1)　イギリス革命期	前三回では主として原理的レベルで問題を考えたのに対し、ここでは17～18世紀の政治革命の状況の中で新しい安定的秩序を思考する機構論的思考を取上げる。ハリントン、シドニー、そしてロックに代表されるイギリスの政治思想はその代表的な事例なのである。	同　上
11	(2)　フランス啓蒙期から大革命へ	フランスの啓蒙思想は旧体制と批判的に対決しつつ多様な展開を見せているが、ここではヴォルテール、モンテスキュー、ディドロらの政治論を検討するとともに、さらに大革命期の憲法論争を手がかりに、人権思想と権力分立理論の19世紀以後への影響をも考える。	同　上
12	Ⅷ. レパブリカニズムおよびデモクラシーの新しい伝統	独立宣言と合衆国憲法とを通じて表明された新興アメリカの政治理想を、その19世紀中葉までの現実的展開の中で、性格づける。ジェファソンの民主主義観、「フェデラリスト」の政府論、ジャクソン大統領期の政治的現実、リンカーンの政治理念等を中心に検討する。	同　上
13	Ⅸ. 19世紀の思想状況：保守主義・自由主義・社会主義をめぐって (1)　イギリスとフランス	フランス大革命以後のヨーロッパにおける政治イデオロギーの対立・葛藤はそのままわれわれの時代への遺産となっている。バークに始まる保守主義、ベンサム、ミルを代表とする功利主義及び自由主義、それらのフランスでの発現形態 ― これらを主に取上げる。	同　上
14	(2)　ドイツ，その他	政治的後進国とされるドイツも、19世紀における思想的寄与は重要である。カント、ヘーゲルの政治哲学は国家理論に深い影響をもつ。マルクスの社会主義理論はその根を英仏独の思想にもちつつ、広く普及した。他方、立憲的自由主義は各国共通の財産となっていった。	同　上
15	Ⅹ. 民主主義の政治理論をめざして ― 大衆化時代の問題	本講義全体に内在するテーマとしての民主主義理論の現代における課題を展望するため、トクヴィルの問題提起を手がかりに、今世紀において顕著な大衆化現象の政治的帰結を考え、欧米の何人かの政治思想家ないし政治学者の議論をこの文脈において検討する。	同　上

＝現代の政治理論＝（TV）

〔主任講師：曽根泰教（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

本書は、現代の政治理論を広く概観することを目指すが、政治の中心を「構成員すべてに関わりをもつような決定を作り出すシステム」として理解する。そこで、民主主義の理論、決定のルール、選挙の制度などの、ルールの側面と、そのルールのもとで動く現実の政治を、ゲームとして捉え、政策の形成過程から考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代政治理論の広がり	今日政治の果たす役割は、印象とは逆に増加している。それは、経済における非市場（政治）の割合の増加や、政治の場に登場する問題（経済摩擦、税制改革）の増加に見られる。同時に、現代の政治学の扱う領域も拡大しつつある。	曽根泰教（慶応義塾大学教授）
2	「政治理論」は蘇ったか	P・ラスレットが、かつて死んだといった「政治理論」は蘇ったのか。政治理論が死んだ理由、また、　った理由を考えることから、今日の理論の役割、政治学上の変化を、政治哲学、経験理論、政策分析の関連で探る。	同上
3	エリート論から民主主義へ	強力なエリート論者たち（パレート、モスカ、ミヘルス）の民主主義批判の中から、今日に通じる理論的な問題点を考える。ついで、現代の民主主義の理論的出発点をシュンペーターとして、基本的な主張を整理する。	同上
4	現代の民主主義理論	現代の民主主義の理論を、ダールのポリアーキーの概念を基礎として分析を進める。次に、比較の問題、体制（民主主義、権威主義、全体主義）との関連、主流派の考えに対する批判者たちの紹介と、理論的発展の系譜を探る。	同上
5	集合的選択	民主主義の選択理論を進めて、一次元的な民主主義を考える基礎として、決定のためのルール設定はどうしたらできるのか、合理的、最適な方法は何かを探る。ダグラス・レーの議論に従って、最適なルールを求める。	同上
6	多数決と問題点	多数決が仮に集合的選択として最適であるとしても、なお残る問題がある。その中で、特に、アローの提起した「投票のパラドックス」（循環）および「一般可能性定理」の問題と、少数者のインテンシティの問題を扱う。	同上
7	全員一致とコンセンサス	多数決に対するルールの代表として全員一致を考える。合意に基づく全員一致の中で、社会契約の代表としてロールズの正義論を考え、ブキャナンの主張の根拠も探る。「協調の可能性」をアクセルロッドの「囚人のジレンマ」の実験に見る。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自由主義的政治―代議制のモデル	直接的な集合的選択から代議制のシステムに話を発展させ、自由主義（多数制限）や代表の問題を分析する。次に、ダウンズのモデルを考えることで、選挙を通じた有権者と政党を含んだ2次元的な選択の関係を理解する。	曽根泰教
9	「政府」概念の再検討	公的選択の中で「政府」が存在するモデルを考える。まず、「国家」と「政府」の概念の整理をし、次にミニマリストの考え方から「小さな政府」論の根拠を探り、規模の問題から、政府の役割の問題など、3次元へと議論を進める。	同上
10	意思決定者としての個人と組織	人は情報をどのように認知して、「記憶」をもとに判断し、選択・決定をするのか。個人における決定の枠組みと、集団における決定上の問題について考える。認知心理学やコンピュータの発達を参考にする。	同上
11	政策過程のモデル	まず、アリソンの3モデルや、その他代表的な政治学的モデル（ダイ）の紹介を通じて、政策過程が扱う対象と方法についての枠組みを明らかにする。公共政策の決定と、その背後にある影響力の問題も考える。	同上
12	政治経済モデル	政治と経済の関係を、マクロ経済から論じ、いかに非市場的決定（政治）の果たす役割が大きいかを考える。政治的景気循環、外部性、公共財、利益集団（オルソン）、有権者・消費者（ハーシュマン）などを考えてみる。	同上
13	マクロの政治的構成	政治システムの比較において、特に、現実の政策形成過程の制度化の観点から、多元主義およびコーポラティズムの概念を説明する。団体（労働団体等）、利益表出、具体的制度化の場（審議会等）、政策領域などを明確にする。	同上
14	政策のアウトプットと評価	規範的な考え方（自由、平等、正義、公益）および政策分析に使われるいくつかの分析方法と、その評価基準を示す。目的と手段の関係、政策の構造、また比較政策の考え方を通じて、社会科学の実験の可能性を考える。	同上
15	現代政治学の問題と将来	現在の政治学はどのような理論的発展をしてきたのか。また、どのような成果をあげてきたのかを考え、同時に、日本の政治学の位置づけをする。そして、今後の政治学の方向性、進むべきフロンティアのいくつかを示す。	同上

＝ 現代の政治生活 ＝ （TV）

〔主任講師：堀江　湛（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

政治は我々の日常生活と決して無縁ではない。それどころか、今日、政治は我々の生活の隅々に至るまで深い関わり合いを持っている。政治は、一方で急速に国際化しつつある。他方、政治は経済や社会活動とも密接に関連し、運動するようになった。これら政治生活の諸側面を国家や、政府、国会、政党、選挙、公共政策やマスコミ、世論などと関連づけながら考察していく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	政治生活の拡大と国際化	(1) 政治と社会生活のかかわり (2) 金のかからない政府から巨大政府へ (3) 国際要因の政治に及ぼす影響	堀江　湛 （慶應義塾大学教授）
2	政治の性格と国家・政府の役割	(1) 政治とは何か (2) 政治権力と正統性 (3) 新しい正義論と最小国家論	同　上
3	現代国家の構成原理と政治発展	(1) 国家の成立と政治とのかかわり (2) 現代国家の構成原理としての立憲制 (3) 権力分立制と行政国家 (4) 代議制と民主集中制 (5) 政治発展と比較政治学	同　上
4	望ましい政治生活のあり方	(1) イデオロギー (2) 権威主義的パーソナリティー (3) 自由主義 (4) 民主主義 (5) 社会主義	同　上
5	合意形成の主体としての政党	(1) 派閥から政党へ (2) 議員政党から大衆政党へ (3) わが国における政党の誕生 (4) 現代の政党システム (5) 政党政治のパターン	同　上
6	集団利益と公共政策を媒介する圧力団体	(1) 利益集団と政治過程 (2) 伝統的利益集団と新しい公共利益集団 (3) 利益集団自由主義と集団利益の過剰代表 (4) 米国におけるロビイスト	同　上
7	国民の政治意識とマスコミ	(1) 政治的社会文化 (2) 権威主義・疎外・アノミー (3) 政治文化と価値観の転換 (4) マスコミと世論	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	政治参加の主要な装置としての選挙	(1) 民主的選挙の四原則と普通選挙 (2) 平等・直接・秘密選挙 (3) 代表選出の方法	堀江　湛
9	外交政策の形成と安全保障	(1) 投票行動研究の前史 (2) コロンビア・グループとミシガン・グループの研究 (3) シュミレーションによる投票行動予測 (4) 投票行動の数理的アプローチ (5) 投票行動研究における新しい展開 (6) わが国の投票行動	同　上
10	公共政策の形成と国会の役割	(1) 行政国家化と国会の比重 (2) 国会の組織 (3) 法律の審議 (4) 予算と国会審議 (5) 国会における立法過程 (6) 与党自民党の部会と族議員	同　上
11	公共政策の遂行と行政の役割	(1) 行政裁量権の拡大と行政責任 (2) わが国行財政の特色 (3) 予算の編成過程	同　上
12	公共政策形成の効率化と危機管理	(1) 行政委員会と審議会 (2) 審議会政治とネオ・ポラティズム (3) デモクラシーと危機管理	同　上
13	外交政策の形成と安全保障	(1) 平和の維持と国際連合 (2) 第二次大戦後の国際政治の動向 (3) 平和の維持	同　上
14	公共政策形成の一環としての司法過程	(1) 裁判と政治 (2) 違憲立法審査権 (3) 最高裁判事の司法行動	同　上
15	地方自治と都市行政の課題	(1) 公共政策と地方自治 (2) 米国の地方自治とシティー・マネーズャー (3) わが国の地方自治 (4) 都市行政の課題	同　上

＝ 現代の国際政治 ＝（TV）

主任講師：神谷不二（慶應義塾大学教授）
〃　　：高橋和夫（放送大学助教授）

全体のねらい

戦後の国際政治の展開を鳥瞰し、現代史を規定してきた諸要因を考え、さらにその将来を占ってみる。詳細な部分像ではなく簡潔な全体像を、事実の羅列ではなく分析のための体系的な枠組を提示したい。言いかえるならば学生自らが国際政治を考えていく上での案内図を描き出すことが本コースのねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第二次大戦後の世界	戦後の国際政治を、(1)米ソ超大国の対立と核戦略の展開、(2)アジア・アフリカの独立、(3)国際的な経済的相互依存の深化の三つの流れから概観し、コースの全体像を提示する。	神谷不二（慶應義塾大学教授） 高橋和夫（放送大学助教授）
2	ヨーロッパの冷戦	ポーランドの悲劇に始まるヨーロッパにおける冷戦の展開を課題とし、米ソ関係が大戦中の同盟から戦後の対決へと変貌を遂げる推移を振り返りその意義を考える。	同上
3	板門店からキューバへ	朝鮮戦争以後キューバ危機までの米ソ関係を取り扱う。特に米ソが核兵器とその長距離運搬手段を保有したことの軍事的、政治的意味を探り、両超大国の核戦略の展開を考察する。	同上
4	デタント	キューバ危機以降の米ソ関係を概説する。ニクソン、キッシンジャーのデタント、ソ連軍のアフガニスタン介入、レーガンのＳＤＩなどを現代史の中に位置づける。	同上
5	アジア・アフリカの独立	世界の人口の大半を占めるアジア・アフリカ地域の独立とその後の苦悩を振り返りつつ、米ソの世界的対立を背景として推移してきた第三世界の動向に焦点をあてる。	同上
6	インドシナ戦争とASEAN	米ソ日中の利害の錯綜する東南アジアは、西側寄りのASEANと共産勢力の支配するインドシナに二極分解した。その過程を分析し、国際政治におけるこの地域の役割を論ずる。	同上
7	中ソ対立と米中接近	共産圏の二大国間の対立は、米中の接近という事態を導き出した。この中ソ対立と米中接近の跡をたどり、モスクワ・ワシントン・北京間の外交的三角関係の将来を占う。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ドル支配の没落と混乱	戦後の貿易体制を支えてきた通貨制度、ブレトンウッズ体制の成立と発展、そしてその崩壊について述べる。また1970年代以降に採用された変動相場制、フロートの功罪を考える。	神谷不二 高橋和夫
9	戦後の貿易体制	戦後の日本、ヨーロッパの経済復興と発展を可能にした自由貿易体制の成熟と崩壊について説明する。また姿を現しつつある新しい貿易体制についても言及し、体制変革の要因を論ずる。	同上
10	多極化の時代	日本、ヨーロッパの経済発展により米国の隔絶した優位は過去のものとなり、世界は経済的には多極化の時代に突入した。その要因を探り、政治的意味を明らかにする。	同上
11	多国籍企業	戦後顕著になった企業の多国籍化の実態を解説し、その原因を考える。また多国籍企業が国際政治の場において果たす役割に関する論争の推移を紹介し、その将来を展望する。	同上
12	南北問題	先進諸国の生活水準の向上する中、第三世界の遅れが目立っている。後者の貧困の問題が国際政治の重要な議題となってきた。その実態と原因に関する論争を紹介する。	同上
13	石油と国際情勢	世界経済を揺り動かしたOPECによる石油価格の値上げ攻勢と、その成功が誘発した第三世界の国際経済秩序の変革について解説し、その政治的意味に光をあてる。	同上
14	国際連合	国際政治の力学の産物として国際連合及びその他の国際機関をとらえ、諸機関の成立と発展を解説し、その国際政治での役割りに評価を与える。	同上
15	国際政治の理想と現実	宇宙開発のもたらした人類は一体であるとの崇高な認識と国際政治の冷厳な現実を対比し、本書の三つの柱である「東西関係」「南北問題」「国際経済」について総括を試みる。	同上

＝日　本　の　政　治＝（TV）

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕

全体のねらい

基本的なねらいは、日本の政治についての体系的理解を深めることにある。受講者はすでに日本の政治について断片的部分的知識を持っていると想定されるが、それは必ずしも日本の政治を科学的客観的に理解していることを意味しない。そこで、この講義では受講者の日本の政治に関する常識を前提としながら、比較政治論および現代政治論の学習成果を活用しつつ、日本の政治の特性を明らかにしていくことにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	明治国家から現行憲法体制へ	政治と国家について簡単な概念規定を試みた後、明治国家をその近代性と前近代性との両面から捉え、それぞれが今日の日本の政治にいかなる影響を残しているかを検討する。次いで、第二次大戦後の民主化政策をとりあげ、その成果と限界とを明らかにする。	阿　部　　齊（放送大学教授）
2	国　会　の　機　能	日本の議会の法制度上の特徴を明らかにすることから始めて、二院制の意義と実態を検討し、次いで議会の機能を列挙する。さらに、立法国家から行政国家への転換に伴う議会機能の低下を分析した後、代表制の二類型としての国民代表制と地域代表制に言及する。	同　上
3	日　本　の　立　法　過　程	議会における法案の審議過程を概観した後、日本の立法過程の特色として、内閣提出法案の優位と委員会中心主義とをとりあげ、次に日本の立法過程において官僚が果たしている役割を明らかにし、さらに、国会の果たす立法機能が結局は何であるかを検討する。	同　上
4	議　員　内　閣　制	大統領制と対比される議院内閣制の特質を明らかにした後、日本の内閣制度の発達を概観し、次いで一党優位政党制のもとで、わが国の議院内閣制がいかなる特徴を持つかを検討し、最後に議院内閣制と行政官僚制との間の関連を考察する。	新　藤　宗　幸（立教大学教授）
5	福祉国家化と行政機能の拡大	福祉国家がいかなる文脈で登場したかを明らかにした後、戦後経済発展がどのように社会保障の拡充と関連しているかを検討する。さらに、福祉国家化が自治体行政機能の拡大をもたらしたこと、経済成長の鈍化とともに日本型福祉社会論が登場したことを指摘する。	同　上
6	日　本　の　官　僚　制	官僚制は多義的であるが、ここではウェーバーに準拠して、日本の官僚制を考察する。明治以後の官僚制の形成過程を検討し、次いで戦後の原理の転換と公務員の登場にふれ、さらに、官僚制による行政指導の意味と意思決定方式としての稟議制をとりあげたい。	同　上
7	審　議　会　の　役　割	行政国家化の進行とともに、審議会の役割が重要になる。日本での審議会の発展を概観した後、審議会が政策形成過程で果たす役能を明らかにし、次いで最近の政策決定システムの変化が審議会に及ぼした影響を論じ、最後に目下注目されている私的諮問機関にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	利益集団と行政	まず、利益集団台頭の背景を考え、次に利益集団と政治文化との関連を明らかにする。次いで、わが国の政治過程で利益集団が果たす役割を検討し、さらに戦後政治における利益集団と政党との関係、利益集団の多元的構造、日本型ネオ、コーポラティズムにふれる。	新藤宗幸
9	補助金の行政と政治	補助金の概念を明らかにした後、補助金の規模と交付対象を考察し、次いで、補助金の交付決定までの手続きを検討して、政治の影響がどこに現われるかを探り、さらに自治体行政に及ぼす補助金の影響をみる。最後に、補助金改革の方向にも言及したい。	同上
10	日本の予算政治	予算の意義と機能について概観した後、日本の予算制度の概要を述べる。次に予算編成がどのように行われるかについて、大蔵省と各省庁の接衝段階のそれぞれの段階で説明する。終りに、財政危機下の予算政治の課題にも言及したい。	同上
11	行政改革	行政改革概念の多義性についてふれた後、第一次臨調の果した役割を検討し、さらにその後の行政改革と「小さな政府論」の台頭について述べ、こうした文脈の中で第二次臨調の果たした役割を明らかにする。最後に政治シンボルとしての行革にもふれたい。	同上
12	日本の政策形成過程	政策の概念規定から始めて、政策形成の主体を明らかにし、次いで政策形成過程研究の焦点を探る。その上で「戦略的政策」と「実施政策」を区別し、「戦略的政策」の形成にあずかるエリート集団を分析した後、「実施政策」における官僚と政権党の役割にふれる。	同上
13	日本の選挙制度	日本の選挙制度の中心となる中選挙制について、小選挙区制及び比例代表制との比較を試みる。次に、参議院選挙における比例代表制に簡単にふれ、さらに日本の選挙制度の最大の課題とされる定数不均衡と、諸外国に比べてユニークな規定を持つ選挙運動を論ずる。	川人貞史（北海道大学助教授）
14	日本人の投票行動(1)	まず、投票行動の分析が今日の政治学において占める位置を明らかにした後、デモグラフィと投票との関連を探る。まず、各党得票率と選挙区特性との関係、職業と政党への投票との関係を分析し、次いで社会的済的地位と投票との関係について若干の仮設を検証する。	同上
15	日本人の投票行動(2)	有権者の意識調査によって明らかにされる政党支持の構造をとりあげる。まず、日本人の政党支持には、政治関与度と政党離れ度という独自の次元があることが指摘され、次いで政党支持率の変化と得票率の変化との間の関連、政策争点と投票との関係が分析される。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の政党	日本の政党制の特徴が、「1955年体制」と「一党優位政党制」という二つの面から明らかにされた後、自由民主党、日本社会党、民社党、公明党、共産党の各党について、それぞれの党の歴史、特質、課題などが指摘される。なお、新自由クラブと社民連にもふれる。	川人貞史
17	後援会組織	今日の日本の選挙と政党を考える上で最も重要なものの一つは、後援会活動である。そこで、後援会がなぜ組織されるようになったかを明らかにすることから始めて、後援会活動の形態、後援会がわが国の政治に対して及ぼしている影響を探る。	同上
18	マス・メディアの政治機能	現代の政治でマス・メディアの果たす機能はきわめて大きい。マス・メディアの政治機能を概観した後、新聞の日本的特質を探り、次いでテレビの果たす政治的機能を検討する。さらに、マス・メディアが世論形成に果たす役割を探り、雑誌が持つ機能にも言及する。	阿部齊
19	地方自治の歴史	近代国家における地方自治の意義についてふれた後、日本の地方自治の歴史を概観する。まず、明治地方自治の論理と構造を明らかにし、次に1920年代の都市化と工業化が地方自治に及ぼした影響、戦後改革と地方自治、高度経済成長期の地方自治などに言及する。	新藤宗幸
20	地方自治の現状	地方自治体の諸類型にふれた後、日本の特徴ともいうべき二元的代表制をとりあげる。次に、国と地方との関係に大きな意味を持つ機関委任事務の現状を探り、さらに都市型社会と自治体の政策との関連を検討し、最後に地方の時代における集権化の逆説にふれる。	同上
21	地方議会と地方選挙	二元代表制の下における地方議会の意義と役割を明らかにした後、都市化に伴う多党化の進行とそれが地方議会に及ぼした影響をとりあげ、さらに政策形成過程において地方議会の果たす役割、地方議会を活性化するための市民の役割などにも言及する。	同上
22	住民参加と市民参加	現代社会における政治参加の意義を探りながら、住民運動と参加デモクラシーの関連を検討する。また、住民運動は日本の政治文化を変容させ、自治体改革を促す契機にもなった。住民運動や市民参加が市民的政治文化を生み出す可能性にもふれたい。	同上
23	日本の民主主義	日本における民主主義の起源を探った後、明治憲法の枠内で最も民主的な政治が行われた大正デモクラシーを概観し、次いで戦後の民主主義の発展の過程を追う。さらに、民主主義にみられる日本的特徴を明らかにし、「官僚政治」の伝統との関連も考察したい。	阿部齊

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	日本の自由主義	日本の自由主義の起源にふれた後、天皇制国家のもとで自由主義がいかに後退をよぎなくされていたかをみる。また、第二次大戦後は私化の進行と過剰な自由のもとで、自由主義も変質を逐げざるをえない。最後に、日本の保守政治にみられる経済的自由主義にふれる。	阿部　齊
25	日本のナショナリズム	ナショナリズムの意義と起源にふれた後、明治国家のナショナリズムを検討し、その超国家主義への移行を考察する。次いで、敗戦によるナショナリズムの崩壊と分散の過程を明らかにし、日本のナショナリズムの現状をみながら、その再生の可能性を探る。	同　上
26	保守主義の政治	日本の政治はしばしば保守と革新の対抗関係において捉えられる。保守と革新の意義を明らかにした後、日本人の保守性の理由を探り、さらに革新勢力の伸張と停滞をもたらした要因を検討する。最後に、保守政党はいかなる形で日本を統治してきたかに言及したい。	同　上
27	日本の政治文化	日本の政治文化を論じた代表的な政治学者としそ丸山真男と京極純一をとりあげ、それぞれの理論を簡単に紹介する。丸山については、歴史意識の「古層」と個人析出の類型とをとりあげ、京極については、集合体コスモスと相　コスモス、タテマエとホンネにふれる。	同　上
28	日本人の政治意識	ＮＨＫの放送世論調査所のデータに基づいて、日本人の政治意識を具体的にとりあげる。テーマとしては、現行憲法体制の正統化、政治的関心度の推移、政治活動と政治参加をめぐる意識の変化など。このほか、政党支持率と内閣支持率の問題にも言及したい。	同　上
29	平等化と平等主義	平等化と平等主義は、今日の先進諸国の政治が直面している共通課題の一つである。まず、日本における平等化の推移をふり返った後、平等主義社会の政治の特徴にふれ、次に、平等主義社会に残存する差別の問題を考える。さらに、平等主義社会の教育にもふれたい。	同　上
30	日本の政治的課題	日本の政治的課題として、一党優位政党制化での政権交代の可能性、平和憲法下での自衛隊と安全保障、福祉国家下の大きな政府の行きづまりと小さな政府論の台頭、平等主義社会に残存する差別の解消、自律的市民育成のための政治教育といった問題をとりあげる。	同　上

＝ 先進諸国の政治 ＝ （R）

〔主任講師：河合秀和（学習院大学教授）〕

全体のねらい

「一国についてしか知らないものは、その国についてさえ実は知っていない。」この講義は、いわゆる先進諸国の政治 ── その政治的発展と現代の政治過程、政治文化の比較を通じて、各国の政治についての知識を深めると同時に、政治とは何かについての理解を深めることを目的としている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	比較政治と国民国家	この講義では、もっぱら国と国を比較しながら比較政治論を進める。国家と政治、近代国家の成立、国民国家の誕生、先進諸国の国家群、などについてこの章でふれる。	河合秀和（学習院大学教授）
2	比較の枠組	歴史的方法と構造的方法、国家主義・自由主義・民主主義・社会主義、政治的要求と政治機構、前期と後期の社会、階級という観念、コーポラティズム体制、などにふれる。	同上
3	イギリスの場合 Ⅰ	もっとも早かった先進的発展、四つの民族と四つの地域、早期の統一、法の支配、議会、内閣、議会制民主主義の成立、保守党・労働党、政治の長い連続性などにふれる。	同上
4	イギリスの場合 Ⅱ	バジョットのイギリス憲法論、政党の役割、首相の権限、閣僚と首相、法案、最高法廷にない違憲立法審査権、拮抗する労働党と保守党、利益団体、などにふれる。	同上
5	アメリカの場合 Ⅰ	世界史上最初の新興国家、自由で平等、経済的に豊か、人民の人民による人民のための政治、連邦制と三権分立制、「弱い政府」から「強い政府」へ、などにふれる。	同上
6	アメリカの場合 Ⅱ	大統領の指導力が強化、大統領制度の特色、連邦議会、政党の実状、議員採決の実態、連邦最高裁判所の違憲・合憲の判定、議会による大統領の弾劾などにふれる。	同上
7	フランスの場合 Ⅰ	フランスの「偉大さ」、知識人層の役割、大革命の進展とナポレオンの独裁、未完の革命、憲法の改正、ドゴールの登場、小財産所有者の国、小政党の乱立、などにふれる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	フランスの場合　Ⅱ	軍部の叛乱、第五共和制憲法の制定、中道に有利な選挙制度、大統領優位のもと政党選択が単純化、元老院は地方名望家の砦、ドゴールの失脚とその後、などにふれる。	河　合　秀　和
9	ドイツの場合	「上からの」統一、邦とプロイセン、ビスマルクの弾圧政策、世界観政党、ワイマール共和国憲法とヒットラーの登場、敗戦と国の分割、などにふれる。	同　上
10	西ドイツの場合	ドイツ連邦共和国の発足、選挙制度、連邦憲法裁判所、連邦議会選挙における各党得票率と連立関係、アメリカと競争する経済大国への成長、などにふれる。	同　上
11	ＥＣの場合	国民国家の直面する諸問題、ヨーロッパ経済共同体の設立、ヨーロッパ石炭・鉄鋼共同体の発足、ヨーロッパ共同体（EC）の組織、ヨーロッパ理事会・議会、その他にふれる。	同　上
12	ソ連の場合　Ⅰ	社会主義政権の成果、ロシア帝国の終焉、レーニンの革命政権樹立、新経済政策ネップの採用、スターリンの一国社会主義、スターリン以後の後継政権、などにふれる。	同　上
13	ソ連の場合　Ⅱ	ソ連共産党綱領、メンシェヴィキ派とボルシェヴィキ派、プロレタリアートの独裁、上意下達の組織、各級ソヴィエトの代議員の選挙、党と国家の分離、などにふれる。	同　上
14	日本の場合　Ⅰ	比較政治研究の実験室、イギリスと日本の相違、外からの影響と近代的発展、古代国家の成立、日本の封建制、明治新政府の樹立、憲法の公布、軍部の台頭、などにふれる。	同　上
15	日本の場合　Ⅱ	近代日本の政治的文化の特徴、新憲法の制定、世界史上もっとも成功した占領、憲法と軍備について暗黙の国民的合意、日本の政党の歴史、官界、政界、財界などにふれる。	同　上

＝第　三　世　界　の　政　治＝(R)

〔主任講師：小田英郎（慶應義塾大学教授）

全体のねらい

第三世界を構成するアジア、アフリカ、ラテンアメリカの各地域について、「序論」で述べるような共通の角度から分析、考察を進め、各地域の共通性と特殊性を把握しつつ、第三世界の全体像をえがきだすことをめざす。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　論 －比較地域政治論の試み－	現代における第三世界の比重の増大に触れ、さらに伝統と近代化の相互関係、国民的統合、イデオロギーと政治・社会体制、国際社会に対するイメージと対外行動などから、各地域の特殊性と共通性を検討する。	小田英郎 （慶應義塾大学教授）
2	中　国　(1) －革命と近代化－	近代化を目標とする中国が、いかにして伝統の克服をめざして苦悩しているかを、国民的統合の問題にも触れながら論ずる。	岡部達味 （東京都立大学教授）
3	中　国　(2) －政治と国際関係－	国内経済改革と対外開放政策のもとで進行する政治改革、および、それらを円滑に遂行するための対外政策について論ずる。	同上
4	東南アジア(1) －独立と国民的統合－	人種、言語、宗教、文化……世界のなかでもっとも多様性に富むといわれるこの地域の植民地支配からの独立と国民的統合の努力のあとを、ベトナム戦争などにも触れながら考察する。	松本三郎 （慶應義塾大学教授）
5	東南アジア(2) －イデオロギー、政治体制、国際環境－	東南アジア諸国の近代化過程に現われたさまざまなイデオロギーや政治体制と業績を考察し、さらにその複雑な国際環境を、とりわけ日本との関係に注目しつつ分析する。	同上
6	南アジア －苦悩するインド亜大陸－	10億の人口の圧力と貧困にあえぐ南アジア諸国のきびしい現状を、混合革命方式で国家建設をはかってきたインドと、これと宿命的対決をつづけるパキスタンを中心に考察する。	同上
7	中　東　(1) －古さと新しさのモザイク－	幾多の帝国の盛衰史のなかで豊かな文明と地域的、宗教的一体性を生みだしてきた中東の「古い」歴史を概観し、さらにヨーロッパ列強による「分割」と独立達成にいたる経緯を、現代中東政治との関連において考察する。	青木一能 （日本大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中　東　(2) ー紛争と対立の 図式ー	現代中東の重要争点である中東紛争の背景と展開に論及したのち、70年代後半以降の多発する紛争と対立を通して、中東政治の多元化と複雑化について考察する。	青　木　一　能
9	中　東　(3) ー国家建設の 模索と変動ー	社会主義体制から君主制にいたる多様な政治体制下の中東諸国が、それぞれに国家建設を模索する状況を考察し、石油産出地域・中東と国際社会との相互作用といった問題を考慮しつつ、中東政治の変動状況を検討する。	同　上
10	アフリカ(1) ー歴史的復権の 志向とナショナ リズムー	歴史的復権への志向が現代のアフリカにおいてなぜ強いのか、それはナショナリズムやイデオロギーや政策にどう反映しているか、といった問題を、植民地時代を振り返りながら考察する。	小　田　英　郎
11	アフリカ(2) ー近代化と政治 体制ー	アフリカ的社会主義、一党支配体制、軍部支配体制など、国家建設や近代化の過程で出現したイデオロギーや政治体制を考察し、あわせて南部の白人人種主義体制（アパルトヘイト体制）にも論及する。	同　上
12	アフリカ(3) ー団結と対立ー	アフリカ大陸諸国の連帯・団結をめざす反面、国家的自己主張で対立し、多元化の度合を高めるアフリカ圏内の国際関係、および非同盟運動を軸とした第三世界連帯運動への対応を考察する。	同　上
13	ラテンアメリカ(1) ー政治の伝統と 風土ー	植民地時代以来の統治理念や、独立後の国家形成の特徴、および個人独裁的な統治形態などの検討を通じて、この地域の政治の伝統と風土に迫ってみる。	加　茂　雄　三 （青山学院大学教授）
14	ラテンアメリカ(2) ー社会改革と 政治体制の 近代化ー	20世紀に入っての中間層や大衆の登場を契機とする社会変動と、それに対応していった政治体制の近代化について、軍部の役割にも論及しつつ考察する。	同　上
15	ラテンアメリカ(3) ー国際政治の 展開ー	対米関係の歴史と現段階、1960年代以降の国際政治の多面化、および地域自決主義の動向などに論及しつつ、国際政治の面でのこの地域の政治について考察する。	同　上

＝日本政治史＝（R）
1853～1987

〔主任講師：北岡伸一（立教大学教授）〕

全体のねらい

幕末以来の日本の内政と外交を講義する。歴史的事実の説明は最小限度にとどめ、各時代の政治権力の構造と変容の説明に力点を置く。また国際政治史や比較政治の視点を重視して、世界史の中に近代日本を位置づける。聴講者諸君が日本政治の特色を歴史的に把握し、今日の政治権力を見る目を養う一助となれば幸いである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	幕藩体制の政治的特質	16世紀の日本と西洋 西洋の多元性 幕藩体制の一元性 正統性の問題 崩壊の容易さと統一の容易さ 武士のエトス	北岡伸一 （立教大学教授）
2	西欧の衝撃への対応	日本人の対外意識 幕府リーダーシップへの期待 条約勅許問題の登場 尊攘運動の激発 幕府雄藩連合体制の模索と崩壊 倒幕への道 低コスト革命の条件	同上
3	明治国家の形成	公議輿論の調達 権力の集中 権力基盤の整備―軍事 権力基盤の整備―財政 国民的基盤の創出―西洋文明の導入 人的エネルギーの動員	同上
4	政府批判の噴出	国際秩序の伝統と近代 征韓論 反政府派の発生 宥和政策とその限界 西南戦争 民権運動の発展 明治14年政変 民権運動の高揚と後退	同上
5	明治憲法体制の成立	憲法制定への道 プロイセン流の憲法 憲法付属の制度 明治憲法の特徴 天皇親政論と天皇超政論 条約改正問題 大同団結運動	同上
6	議会政治の定着	議会政治の出発 超然主義 初期議会の諸相 民力休養論の変容 日清戦後経営 隈板内閣成立前後 山県内閣 政友会の成立	同上
7	日清・日露戦争	主権線と利益線 朝鮮をめぐる日清対立 条約改正 日清戦争 清国分割の進展 門戸開放宣言 戊戌変法と義和団事件 日英同盟 日露戦争	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	帝国主義の発展	朝鮮問題から満州問題へ 満州問題と国際関係 ドル外交の展開と日露の接近 中国革命 21か条と反袁政策 寺内内閣の中国政策 シベリア出兵と西原借款	北岡伸一
9	政党政治の発展	伊藤内閣から西園寺内閣へ 桂園時代と藩閥 桂園時代と政党 大正政変 第1次大戦期の藩閥と政党 3党鼎立論の挫折	同　上
10	国際協調と政党内閣	原内閣の成立 原敬没後 ワシントン体制の成立 ワシントン体制の崩壊 政党内閣の時代	同　上
11	軍部の台頭	軍縮と軍備近代化 昭和軍閥の台頭 満州事変と連盟脱退 連盟脱退後の国際関係 斎藤内閣と岡田内閣 陸軍の派閥対立	同　上
12	帝国の崩壊	広田内閣の成立 宇垣から近衛へ 日中戦争と総動員 東亜新秩序 第2次世界大戦の勃発 日米戦争への道 帝国の崩壊	同　上
13	敗戦・占領・講和	敗戦 占領 非軍事化と民主化 占領下の政治過程 冷戦と講和	同　上
14	自民党政治の発展	55年体制の成立 岸内閣と日米安保 池田内閣と佐藤内閣 派閥の発展 政策決定における自民党と官僚	同　上
15	新しい国際的責任	国際関係の変容 田中内閣と対外問題 保革伯仲 西側意識の定着 新たな国際的責任	同　上

＝西欧政治史＝ (R)

〔主任講師：犬童一男（神戸大学教授）〕

全体のねらい

近代から現代への西欧における議会制民主主義の形成と展開は、各国の歴史的諸条件によって多様であったことを主に講述する。19世紀の民主化から戦後の福祉国家にまでわたるが、その間の民主化の停滞や独裁にも言及し、日本やその他の国の政治を学ぶ上でも有益な素材が提供できるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	西欧における政治の発展	西欧諸国で政治的近代化を意味する民主政の確立がどのように行われたか、R・ダールのポリアーキーへの発展理論に即して説明する。	犬童一男（神戸大学教授）
2	イギリスの古典的民主主義	議会の黄金時代とされるイギリスの古典的民主主義の成立を、それ以前の議会寡頭制の段階に遡って捉えると共に、その実体および問題点を明らかにする。	同上
3	イギリス議会制民主主義の確立	労働者階級が参政権を獲得した第2次選挙改革の成立過程を紹介すると共に、この改革後に生じた政治体制がいかなるものであったかを述べる。	同上
4	フランス議会制民主主義の形成	大いなるフランス革命以来の目まぐるしい政体の変遷をまず概観し、次に、第2帝制の下で国民経済の「離陸」があり、政治的近代化が準備されたことを示す。	同上
5	ドイツ第2帝制の成立と展開	ドイツの政治的統一過程を概観し、ビスマルク時代を中心に第2帝制の国内政策および対外政策がどう展開したか、ヴィルヘルム2世時代と対比して検討する。	同上
6	帝国主義時代の民衆運動	この時代の多様な民衆運動の中で第2インタナショナルに結集した社会主義労働運動を、革命型と改革型に大別して位置づけ、その問題点を探る。	同上
7	第1次大戦の勃発と帰結	帝国主義戦争とみなされる大戦の発生因を考察し、その展開と帰結としてのヴェルサイユ体制の成立にまで触れるが、とくに開戦時の各国議会の機能を問題にする。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イタリア・ファシズム体制の成立	1920年代にイタリアがファシズム体制に移行したのは、戦前からの国家と国民の乖離を克服できず、戦後は議会政治自体が危機状況に陥っていたことを明らかにする。	犬　童　一　男
9	イギリス労働党の成長	第1次大戦後に英労働党は欧州社会民主主義政党の中で指導的地位に上る。そうなったのは戦時内閣に参加し、抜本的党改革をなし、24年に政権を担当したことによることを論ずる。	同　　上
10	大恐慌とイギリスの政治過程	大恐慌は、第2次労働党政権成立後に到来した。政府は状況打開の政策作成を迫られたがこれに応え得ず、金融恐慌の中で崩壊し、挙国一致内閣が成立した過程を明示する。	同　　上
11	ワイマル共和国の崩壊	ナチスの時代と第2次大戦との関連から史上きわめて重大な意味をもつこの出来事を、共和国成立当初からの不安定性の存在を探ると共に、大恐慌の到来で加速された体制崩壊の過程を分析する。	同　　上
12	2つの人民戦線政府	新しい政治運動である30年代の人民戦線の特質について考察し、フランスおよびスペインの人民戦線とその政府の成立、連合諸党間の不一致による崩壊の過程を捉える。	同　　上
13	第2次大戦と国内政治体制	ファシズム対民主主義の戦いにおける後者の政治体制の推移を探る。イギリスでは労働側が参加したチャーチル政権、フランスではド・ゴールとレジスタンスが重要だったことを示す。	同　　上
14	戦後政治体制と福祉国家	第2次大戦後、現在の欧州政治地図が米英ソの協力と対抗の関係から形づくられたこと、またイギリスが戦中・戦後に作った福祉国家が、西欧諸国に拡がったことを明らかにする。	同　　上
15	小国における民主主義の発展	西欧には多くの小国があり、大国とは異質の民主政が形成された。言語や宗教で同質的な北欧3国では社会民主主義の合意政治が、異質的なオランダ、ベルギー等では多極共存型デモクラシーが形成されたことを検討する。	同　　上

＝ 行　政　学 ＝ (R)

〔主任講師：西尾　勝（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代国家は職能国家・福祉国家・行政国家である。政治権力の正統性は、民意の代表性と共に、行政活動の成果に依存しているが、この行政活動の担い手こそ行政官僚制である。そこで、この講義では、行政官僚制の置かれた位置とその行動の仕組みについて理解を深めることを、主なるねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行政学の背景：現代国家の特質	現代行政学の生成と発展の背後には、近代国家が現代国家に移行する過程で生じた変化、すなわち、国家の職能国家化、福祉国家化、そして行政国家化といった諸現象があった。	西尾　勝（東京大学教授）
2	行政学の対象：三つの「行政」概念	行政学の考察対象となる「行政」の概念には3つの類型がある。すなわち、立法・司法と対比した行政、政治と対比した行政、そして組織の経営管理を行政とみるものである。	同　上
3	行政活動の類型	行政活動の目的別分類、性質別分類、民間活動との関係からみた分類について説明することをとおして、現代国家の行政活動の多種多様さを示し、行政管理活動の必要に論及する。	同　上
4	行政活動の分担(I)中央集権と地方分権	1国の行政活動はその国の政府体系を構成する複数の政府間で分担されている。そこで、この中央地方関係の歴史、類型について考察し、現代の相互依存関係について説明する。	同　上
5	行政活動の分担(II)戦後日本の中央地方関係	戦後日本の中央地方関係について説明し、出先機関・特殊法人の濫設、機関委任事務の増大、補助金等の増大といった新中央集権の諸現象について解説する。	同　上
6	政治家と行政官の関係	国会・内閣といった政治機関と行政機関の関係を政党政治家と行政官の関係からとらえ、各国の特徴を示すとともに、現代日本の官僚制をめぐる論議に言及する。	同　上
7	官僚制の特質	官僚制ということばの由来から説きおこし、マックス＝ウェーバーが指摘した近代官僚制の特質について解説したうえで、日本の行政官僚制にみられる若干の特徴にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	官僚制の機能(I)：規律と裁量	組織構造の類似した官僚制でもその作動様式は多様になる原因が階統構造の運用の仕方にあることを示し、官僚制の正常な作動の鍵が規律と裁量のバランスにあることを説く。	西尾　勝
9	官僚制の機能(II)：命令と服従	チェスター＝バーナードの組織均衡理論と権威受容説について解説しながら、上命下服の緊張関係、面従腹背の諸形態、部下の忠誠対象の転移と反逆の関係などについて説明する。	同　上
10	官僚制の機能障害	法規万能主義、繁文　礼、セクショナリズム、権威主義など通常官僚主義として一括される官僚制の機能障害が官僚制の健全な作動のために必要な諸原則と裏腹の関係にあることを説く。	同　上
11	官僚制の意思決定方式	日本の行政官僚制の意思決定方式の基本は稟議制にあるといわれている。この稟議制が実際にはどういうものであるのか詳しく検討して、日本の意思決定方式の特徴を探りたい。	同　上
12	政策過程と政策構造	政策の循環回路について説明し、政策の形成と政策の作成という観点の違いを明らかにしたうえで、政策作成の観点に立って政策の過程と政策の構造について若干の説明を行う。	同　上
13	予算編成と会計検査	法令とならんで重要な政策の表示文書である予算が編成されていく際の意思決定方式について解説して、先の第11講を補うとともに、予算執行に関する会計検査に論及する。	同　上
14	行政活動の評価基準	政策実施活動を評価する基準としては、合法性のほかに、有効性と能率性の基準があるが、このうちの能率性評価の意義と限界について詳しく論じる。	同　上
15	行政統制と行政責任	行政に対する民主的統制は制度的外在的統制をその基本としているが、現代国家の行政を統制する手段は多様になっていることを述べ、合わせて行政統制と行政責任の関係に論及する。	同　上

＝ 近 代 経 済 思 想 ＝ （TV）

〔主任講師：西部　邁（東京大学教授）〕

全体のねらい

ギリシャ以来の経済思想の流れを、その学説的内容とその時代背景とのかかわりの中で考察し、とくにここ二百余年における近代経済学がいかなる思想的変遷をとげてきたかを明らかにする。講義の前半部分はいわゆるケインズ経済学までの経済思想を扱い、後半部分はそれ以降のいわば現代経済思想の多面的な様相について言及する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経済思想とは何か	科学と思想 理論と実践	西部　邁 （東京大学教授）
2	前近代の経済思想	家政の法 公正の法 自然および契約の法	同　上
3	重商主義の経済思想	国家の哲学 保護の哲学 貨幣の哲学	同　上
4	重農主義の経済思想	生産の理 自由の理 理性の理	同　上
5	古典派経済思想の成立	労働の理論 交換の理論 価格の理論	同　上
6	古典派経済思想の展開	比較の方法 葛藤の視角 過剰の予感	同　上
7	古典派経済思想の変形	搾取の暴露 資本蓄積の矛盾 イデオロギーの暴露	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	歴史主義の経済思想	国民の観念 社会政策の構想 方法の意識	西　部　　邁
9	新古典派経済思想の成立	効用価値の理論 限界分析の方法 一般均衡の仮構	同　上
10	新古典派経済思想の発展(1)	需要と供給 短期と長期 産業と厚生	同　上
11	新古典派経済思想の発展(2)	資本の理論 利子の理論 企業利潤の理論	同　上
12	制度主義の経済思想	解釈の立場 実践の立場 観察の立場	同　上
13	ケインズ的経済思想の予兆	不完全競争の理論 失業および通貨の問題 乗数の理論	同　上
14	ケインズ的経済思想の成立	マクロの視野 所得の決定 市場の硬直性 将来への期待	同　上
15	ケインズ的経済思想の変遷(1)	マクロ動学の方向 混合体制の方向 計量化への方向	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	ケインズ的経済思想の変遷(2)	成長論 分配論 消費および投資の巨視的実証	西部　邁
17	新古典派総合の経済思想	新古典派総合の枠組み 経済政策の矛盾 不均衡の遍在	同　上
18	成長の経済思想	新古典派の成長観 ケインズ派の成長観 ミクロの成長観	同　上
19	技術進歩の経済思想	生産性の上昇 技術進歩の形態 技術進歩の発生因	同　上
20	発展の経済思想	歴史的段階論 数量的段階論 工業化の段階	同　上
21	貨幣の経済思想	貨幣数量説 貨幣国定説 資産選択の理論	同　上
22	期待の経済思想	先物市場 期待効用 期待の弾力性 静態的期待形成 適応的期待形成 合理的期待形成	同　上
23	厚生の経済思想	平等主義 効率主義 契約主義	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	公共性の経済思想	市場の失敗 公共的諸問題	西　部　　邁
25	民主主義の経済思想	多数決の問題 社会的選択の問題	同　上
26	自由主義の経済思想	功利主義者の自由 福祉主義者の自由 新自由主義者の自由	同　上
27	国家の経済思想(1)	計画主義 参加主義	同　上
28	国家の経済思想(2)	国民国家 国際経済機構	同　上
29	数の経済思想	数理化 統計化	同　上
30	総合の経済思想	学際的接近 超学的接近 解釈学的接近	同　上

＝現代の経済学＝(TV)

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

現代の経済学の理論体系を概説し、日本経済の現状について考える手段を提供する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代経済学の体系	現代経済学の基本的性格を説明し、その内容についての概観を与える。	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	消費者の行動	無差別曲線（無差別図）を用いて、消費者行動の理論を説明する。	同上
3	生産者の行動	企業の行動を利潤極大化の原理にもとずいて説明する。	同上
4	競争市場の役割	競争的市場が、経済社会において果している役割について説明する。	同上
5	独占・寡占	完全競争の場合との対比において、独占的立場にある企業の行動について説明する。	同上
6	市場の失敗	いわゆる市場の失敗の現象を、外部経済、公共財の存在などの事例に則して説明する。	同上
7	巨視的経済モデル	一国の経済を示すマクロ（巨視的）モデルについて説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	消費と貯蓄	マクロモデルにおける消費関数、貯蓄関数について説明する。	嘉治元郎
9	投　　資	マクロモデルにおける投資について、その需要面と供給面から論じる。	同　上
10	景気変動	一国の経済活動水準の循環的な変動について説明する。	同　上
11	経済成長	一国の経済活動の長期的な成長について説明する。	同　上
12	経済政策の目標	混合経済体制の下での、政府の役割について論じる。	同　上
13	財　　政	財政々策の理論と、財政の経済に関する関係を説明する。	同　上
14	金　　融	金融の役割と、金融政策の意義について説明する。	同　上
15	国際経済関係	一国の対外経済関係について、理論と政策の両面から論じる。	同　上

＝ 経 済 発 展 論 ＝（TV）

〔主任構師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

世界諸国および諸地域の長期的経過発展について、理論的ならびに実証的な分析を行なう。
主として市場経済の成立している経済における発展をとりあげる。
具体的には、我々にとって身近かな日本経済の長期的な変化について明らかにし、その将来を展望する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済発展とは何か	経済発展 economic development という言葉の意味を明うかにし、どのような尺度でそれを測るべきかを論じる。	嘉治元郎（放送大学副学長）
2	発展段階説の概観	経済発展を幾つかの段階として歴史的にみる考え方について説明する。	同上
3	現代の経済発展論	現代の経済理論において、近・現代の経済発展がどのように論じられているかを明らかにする。	同上
4	経済発展の諸要因	経済発展をもたらす諸要因について概観し、それぞれの役割について概略説明する。	同上
5	人口動態と経済発展	人口の変化が経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	同上
6	投資と経済発展	各種の投資とその背後にある貯蓄とが、経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	同上
7	技術革新と経済発展	技術革新 innovationとは何かを明らかにし、それと経済発展とがどのように関わっているかという点について論じる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生産性の上昇	生産性という概念について明らかにする。そして生産性の上昇が経済発展において、どのような意味をもつかを説明する。	嘉治元郎
9	経済発展と対外経済関係	一国の経済発展と、その国の対外経済関係とが、どのように関わっているかを説明する。	同上
10	経済発展と経済政策	市場経済の体制をとる国の経済発展に関する政府の役割について論じる。	同上
11	発展途上国―南北問題	現代の国際社会における「発展途上国」の地位を論じ、それと先進国との関係、いわゆる南北問題について説明する。	同上
12	現代世界の経済発展―東西問題	現代の国際社会には、市場経済の体制をとる国々と、計画経済の体制をとる国々とが併存しているが、この両者の関係、いわゆる東西問題について、経済発展の観点から論じる。	同上
13	日本の経済発展	過去一世紀の間、とりわけ第二次大戦後の期間における、我が国の経済発展について、理論的に証明する。	同上
14	先進国問題	既に高度に発展した国々の直面している経済問題について論じる。	同上
15	超長期の展望	世界経済の今後の発展について、超長期の展望を試みる。	同上

＝ 産 業 組 織 論 ＝（TV）

〔主任講師：植草　益（東京大学教授）〕

全体のねらい

産業組織論では個別の産業が特定の時点でいかなる構造をもち、その下で各企業がいかなる行動をとり、いかなる経済成果を実現しているかを分析するとともに、企業の行動や産業に対する公共政策がその産業の構造を長期的にどのように変化させてゆくかを解明することをねらいとしている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業組織論の課題と体系	まず産業とはなにかを説明し、そのなかで産業分類の方法について説明する。次に個別産業の分析の方法としての産業組織論の体系を説明し、さらに産業組織に重要な関連をもつ現代技術、産業構造、企業組織および産業に対する公共政策について概観する。	植草　益（東京大学教授）
2	産業構造の変化	産業組織論の具体的内容に入るまえに、産業組織論と重要な関連をもつ産業構造の変化と最近の技術革新の動向について論じる。ここではおもに戦後日本の産業構造の変化（重化学工業化、サービス化および情報化）と最近の先端技術開発の動向を論じる。	同　上
3	現代企業の組織	現代企業は所有の形態、企業規模、生産形態、企業結合の形態などにより、多様な形態に分類できる。それらの企業形態の分類を示すとともに、日本の企業組織の特徴をおもに産業組織との関連で考察する。	同　上
4	規模の経済性と範囲の経済性	現代の大企業はその主要製品について大量生産を実現するとともに、多品種にわたって垂直的、多角的に生産している。その実態を分析するとともに、その基礎としての規模の経済性と範囲の経済性について論じる。	同　上
5	売　手　集　中	産業組織論の体系に入って、まず売手集中についてその測定方法を示し、主要産業における売手集中の水準および時系列変化を説明する。さらに売手集中の水準を決定する要因について説明する。	同　上
6	製　品　差　別	製品差別の概念、製品差別を形成する要因、主要産業における製品差別の程度を論じ、さらに製品差別を形成する重要な要因としての広告についてその意義と問題点を論じる。	同　上
7	参　入　障　壁	参入障壁の概念、参入障壁の形成要因および参入阻止行動について論じ、現在の技術革新の進展過程で産業融合が進み、市場の国際化が進展するなかで、参入障壁が低下している実態に触れる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代企業の価格設定原則	現代の企業はいかなる価格設定原則を採用しているかを考えるため、価格設定原則に関する諸仮説を検討する。おもにフル・コスト原則、参入阻止価格、目標価格設定等を検討して長期利潤最大化仮説を論じ、それと売上高最大化仮説との異同を考える。	植草　益
9	寡占価格	現代の主要産業においては寡占が支配的市場形態である。寡占における価格形成について、クールノ以来の理論をサーベイし、現代における寡占の価格形成について論じる。また寡占における生産効率の向上と価格変化の実態に触れる。	同上
10	カルテルとプライス・リーダーシップ	寡占ばかりでなく原子的競争市場において各企業が協調的行動をとると、独占と同じ価格形成が可能となる。この協調形態の典型としてのカルテルとプライス・リーダーシップについて論じる。	同上
11	資源配分効率	特定産業における市場支配力や複数市場における多角的市場力が存在した場合には、資源配分効率が歪められる可能性をもつ。はたして現代において独占的市場支配力によって資源配分非効率が発生しているか否かを検討する。	同上
12	技術進歩	技術進歩は経済発展の原動力である。産業においていかに技術進歩が追求されているかを考えるため、技術進歩の概念、技術進歩の測定方法、技術進歩の基礎としての研究開発活動について概観する。	同上
13	独占禁止政策	これまでみてきたように、経済の成長・安定・進歩を実現するためには、市場機構にのみ全面的にゆだねておくことはできない。市場の不完全性による失敗が存在する。「市場の失敗」に対処するための産業に対する公共政策の1つとして独占禁止政策を論じる。	同上
14	直接規制政策	産業に対する公共政策の第2の形態としての自然独占分野（おもに公益事業）における政府の規制政策について、おもに価格規制のあり方を論じる。特に総括原価方式、限界費用価格形成、二部料金、ラムゼー方式などについて論じる。	同上
15	産業政策	産業に対する公共政策の第3の形態としての産業政策は多様な政策を含むが、おもに新産業の保護育成と衰退産業の構造調整について論じる。	同上

＝国際経済学＝ (R)

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学副学長）〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。そのことを通して、我が国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際経済学とは何か	国際経済学の対象 対外経済取引 対外取引の種類 対外取引と国際通貨 通貨の交換と為替レート 国際収支とその表示	嘉治元郎 （放送大学副学長）
2	国際貿易の理論	貿易活動の目的 比較生産費説 自由貿易の利益	同上
3	自由貿易論	今日の世界貿易体制 貿易自由化とそれに対する反対論 自由貿易論の基本原理 自由化に伴う摩擦	同上
4	保護貿易論	自由貿易論に対する批判 保護貿易政策 自由貿易理論の諸前提 幼稚産業の保護 経済的安全保障への配慮	同上
5	国内経済と対外経済関係	開放巨視モデル（Open Macro Model） 総需要と総供給　政府購入　家計の消費 企業の投資　封鎖巨視モデル　輸入の説明 輸出の説明　乗数の理論　輸出と輸入	同上
6	貿易外収支	貿易外収支とは何か　貿易外収支の内容 サービス取引の特長　サービス需要の増大 金融活動の国際化 貿易外収支と生産要素の国際移動	同上
7	国際資本移動	資本収支の実態　直接投資　延払信用 借款　証券投資　短期資本収支 国際資本移動の原理　利潤率の国際比較 国際投資に伴う危険 自発的収支と調整的収支	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済発展と対外経済関係	経済発展の諸段階　国際収支の段階的変化 若い債務国　成熟した債務国　若い債権国 成熟した債権国　世界諸国の実績 貯蓄・投資と国際収支	嘉治元郎
9	国際金融の理論	国際金融とは何か　国際通貨とは何か 国際通貨の役割　現実の国際通貨 国際通貨としてのドル　国際通貨の適正量 ドルの相対的価値	同上
10	国際金融の機構	国際金融のシステム　システムの崩壊 システムの再建 戦後国際経済システムを支える組織 国際通貨基金（International Monetary Fund） 国際復興開発銀行（世界銀行） 国際金融システムの調整	同上
11	外国浮替の理論	為替レートとは何か 為替レートの表示法 外国通貨の価値 外国為替の需要・供給 為替レートの長期的変化	同上
12	国際収支の均衡	国際収支の均衡とは何か 収支均衡化のメカニズム 金本位制の自動調整機能 経済政策による国際収支の調整 国内均衡と国際均衡の同時達成 為替レートの変動と国際収支	同上
13	労働力の国際移動	生産要素の国際移動 労働の国際移動の誘因 国際的な賃金格差 労働力の国際移動の実績 労働力の国際移動の経済効果 第二次大戦後の労働力の国際移動	同上
14	国際経済の現状	世界経済の分析方法 貿易マトリックス（貿易行列） 国際資本移動の分析　世界諸国の分類 南北関係　東西関係 世界経済の一体化と国際経済学	同上
15	日本経済と世界経済	戦後における日本経済の発展 Ⅰ　援助と特需の時期　朝鮮動乱と特需 Ⅱ　重化学工業化達成の時期　軽工業から重化学工業へ Ⅲ　貿易黒字、円の為替レート上昇の時期 貿易収支と為替レート Ⅳ　経済大国への移行の時期 Ⅴ　債権国の役割を果すべき時期 自由化と国際化 — 貿易の場合 国際化と自由化 — 金融の場合	同上

＝ 財 政 と 金 融 ＝ （TV）

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

通常のカリキュラムでは財政と金融とに分けて講義が行われるのに対して、ここではできる限り統一した形で内容を盛り込む。理論的な分析の応用という点で一貫性を保つが、なるべく具体的な問題にも話題が及ぶよう配慮する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	財 政 と 金 融 ― 問題の例示 ―	経済は、生活を営んでいるわれわれのすべてを包み込んでいて、日常的であるため、かえってその全体像や問題の所在がはっきりしない。まず、話の糸口として、財政と金融によって大きな問題が生じた事例を示しておく。	貝 塚 啓 明（東京大学教授）
2	民間部門と公共部門	私企業体制を中心とする資本主義経済においても、政府は必要不可欠な役割をもっている。公共部門は長期的に拡大化傾向を示し、多様な活動を行っている。ここでは公共部門の拡大を統計から跡づけ、公共部門の行動原理を民間部門との対比で説明する。	同 上
3	財政金融と経済政策	公共部門の運営は政府が行っているのであるから、政府が政策目標を追いかけているすれば、当然経済政策としての側面をもつ。一般的な交換手段である貨幣は中央銀行によってコントロールされているから、当然経済政策の重要な手段となる。	同 上
4	日本の財政システム ―予 算―	公共部門の運営は、予算制度を通じてなされる。予算は、通常1年を単位としており、その年度の支出計画（才出の上限）と収入（才入）の見積りを示したもので、議会（国会）の議決を経て成立する。ここでは中央政府について予算の概要を説明する。	同 上
5	日本の財政システム ―租税と公債―	予算の才入面は、租税収入と公債収入に分かれる。ここでは、租税収入の構成と主たる税目の概略、および公債制度の概略を説明する。	同 上
6	日本の財政システム ― 地 方 財 政 ―	これまでの説明は、単一の政府を前 にして議論してきたが、現実の公共部門には、複数のレベルの政府が存在する。日本では、国、都道府県、市町村の三つの政府のレベルがあり、その相互関係は複雑である。	同 上
7	公 共 支 出 の 役割	政府活動が必要不可欠になるのは、民間部門において市場の失敗が生ずるからである。特に社会のすべての構成員にとって共通に消費される財、サービス（公共財）が存在し、民間部門がこれを供給しえないことが最小限政府活動の存在理由となる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多様な公共支出	現実の公共支出は、多様な内容をもっている。すなわち、防衛、警察、司法、一般行政などの純粋な公共財、一般道路（街路）、河川改修などの準公共財、さらには、高速道路、鉄道などの私的財に公共支出が支出され、また所得再分配のための移転支出がある。	貝塚啓明
9	公共支出と所得再分配	公共部門は、資源配分上必要な活動を行うとともに、所得再分配上も重要な役割をもっている。すなわち、その経済社会において必要最低限の生活水準を政府が保障し、そのために社会保障のシステムが機能している。	同上
10	租税体系	公共部門の財源調達のうちで大きな比重を占める租税をどのような形で課税するかは重要な問題である。どのような経済指標を基準にして課税するのが公平で中立的な課税方式であるのか。所得、消費、資産などが課税ベースとしてもつ長所・短所を説明する。	同上
11	所得税	現在、ラテン系諸国を除いて先進諸国の租税の中核をなすのが（個人）所得税である。簡単に所得税の仕組みと現行所得税がかかえる問題点を説明する。	同上
12	法人税	日本の国税収入においてかなり大きな比重を占める法人税は、法人利潤（法人所得）を課税対象（標準）とする。ここでは法人税の仕組みとその経済効果を説明する。	同上
13	間接税	転嫁することを前提として課税されるのが間接税である。現在の日本の税制では、特定の個別品目にのみ課税される個別消費税が主たる間接税である。ヨーロッパ諸国では、消費一般に広く課税される付加価値税が重要な税収入となっている。	同上
14	公債発行をめぐる問題点	日本の財政は、現在大幅な赤字を示し、これを公債発行によって調達している。公債発行は、経済を安定化させる役割をもつとはいえ、インフレーションの危険性、民間資金の圧迫、財政規律の低下をまねくという悪影響が生じうる。	同上
15	金融市場と金融取引	交換経済における貨幣と金融の機能を説明し、資金余剰部門から資金不足部門へ資金がどうように流れてゆくかを明らかにする。この流れを仲介するのが銀行をはじめとする金融仲介機関である。	岩田規久男（上智大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の金融システム	日本の金融市場における非金属部門を(1)公共部門(2)法人部門(3)個人部門(4)海外部門に分けて、これらの部門間を資金がどのように流れているかを説明し、その過程での各種の金融機関の役割や企業の資金調達の方法を具体的に説明する。	岩田規久男
17	国際金融	一時的な貨幣の過不足を調整する場である、短期金融市場と実物資産の蓄積のための資金を調達することを目的とする、資本市場について、それぞれの現状を説明する。	同上
18	貨幣の供給(1) —ハイ・パワードマネーの供給—	中央銀行の債務である現金通貨と民間金融部門が保有する中央銀行への預け金はハイ・パワードマネーと呼ばれ、一国の貨幣量を決定する重要な変数である。このハイ・パワードマネーがどのようにして供給されるかを説明する。	同上
19	貨幣の供給(2) —預金通貨と信用創造—	一般的な交換手段である貨幣は現金通貨と預金通貨とから成る。ここでは、預金通貨が銀行によってどのように供給されるかを説明する。さらに、預金通貨が人々によって広く交換手段として用られるための条件を、金融自由化との関連で考える。	同上
20	貨幣需要と利子率の決定	利子率は貨幣の供給と需要とによって決定される。ここでは、貨幣の需要はどのような要因に依存するかを説明した後に、流動性選好理論による利子率の決定メカニズムを明らかにする。	同上
21	マクロ経済と金融財政(1) —ＩＳ・ＬＭ分析—	ＩＳ・ＬＭ曲線を説明した後に、中央銀行による貨幣供給量の調節が、国民所得に対してどのような影響を及ぼすかを明らかにする。	同上
22	マクロ経済と金融財政(2) —インフレーションと失業—	現代の経済は、インフレーションと失業の併存というスタダフレーションの問題をかかえている。スタダフレーションに対して金融政策は果して有効かどうかを検討する。	同上
23	マクロ経済と金融財政(3) —国債と民間投資—	政府支出が国債の発行によって資金調達されると、民間の投資支出が締め出される、という国債の民間投資締め出し効果が、国債が大量に発行されている今日、大きな問題になっている。この効果が、どのようにして生ずるかを明らかにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	日本の銀行行動(1) —個別銀行の行動—	日本の金融政策は従来、銀行の行動に影響を及ぼすことを通じて行われてきた。そこで、銀行の行動を簡単なモデルを用いて説明する。	岩田規久男
25	日本の銀行行動(2) —インターバンク・マネー・マーケットの役割—	銀行間の資金の貸借市場であるインターバンク・マネー・マーケットは、金融政策の波及経路を知るうえで重要である。そこで、ここでは第24回の銀行行動の理論を用いて、日本のインターバンク・マネー・マーケットの機能を説明する。	同上
26	金融政策	銀行行動の理論を用いて、日本の金融政策の波及メカニズムを明らかにする。また、今後、金融自由化が進むにつれて重要性を増すと思われる公開市場操作についても説明する。	同上
27	日本経済と財政金融(1) —経済発展と財政金融—	これまでの講義を基礎に　現実の日本経済に即して財政金融の役割を説する。ここでは、明治以降の急速な日本の経済発展において、政府が財政面を通じて積極的にとった成長政策と間接金融優位の金融システムが経済発展に果した役割を検討する。	貝塚啓明
28	日本経済と財政金融(2) —インフレーションと財政金融—	財政金融政策の如何は、インフレーションの原因となりうる。第二次世界大戦直後のハイパー・インフレーション、最近の第一次石油危機直後のインフレーションは、財政金融政策をひきがねとしている。	同上
29	日本経済と財政金融(3) —金融の自由化・国際化—	昭和50年度以降、国債の大量発行をきっかけに金融システムに大きな変化が生じている。この変化は、金融の自由化・国際化といわれることが多いが、ここでは自由化・国際化のもつ意義と今後の展望を示す。	同上
30	日本経済と財政金融(4) —財政再建と行政改革—	昭和50年代に入って日本の財政は大幅な財政赤字を示し、財政再建が唱えられてきた。他方、行政改革が異る発想の下で進められている。ここでは、財政再建と行政改革における考え方の差異を説明し、公共部門の役害に即して、二つの政策の将来展望を示す。	同上

＝日本経済史＝ (R)

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の経済成長は、国際的に比較してみて、際立って急速なものであった。封建社会から資本制社会への移行期、資本制社会の確立期、そして資本制社会の変質期において、日本経済はどのような特質を示したかを見るなかで、急速な経済成長をもたらした要因とその国民生活や国際関係への影響を検討してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	資本制社会論	高い経済成長が可能な資本制社会の構造をそれ以前の社会と対比して検討する。その構造の特質として共同体が解体した社会、身分的支配のない社会、市場を軸に再生産をおこなう社会という3つの面から見る。	三和良一（青山学院大学教授）
2	幕末の経済と開港	商品経済が発達してきた幕末では農民層の分解が進められる一方、問屋制家内工業やマニュファクチュアも見られるようになった。そして開港によって日本は世界資本主義と接触する。そこでは半植民地化の危機にもさらされた。	同上
3	明治維新	中央集権を確立した明治政府によって、領主支配をささえていた身分的支配体系が解体される。地租改正と秩禄処分によって近代資本制社会が成立するための基本的前提条件が整備される過程を見ながら、明治維新の経済史的意義を考える。	同上
4	殖産興業と松方財政	明治政府は殖産興業に力を入れた。それはまず近代的生産技術の導入であり、近代的企業の育成であった。そのために必要な通貨金融制度の整備がはかられた。また大隈財政と松方財政はインフレとデフレの渦に農民をまき込み、結果として賃金労働者の供給源をつくり出した。	同上
5	近代産業の発達(1) ―軽工業―	松方財政のあとをうけて日本は企業勃興期に入り、日本の産業革命時代あるいは産業資本確立の時代がはじまった。日本の産業革命は当時の最先端技術の導入による後発国型産業革命であった。しかしそこには特殊な歪も生じる。ここでは近代紡績業発展の軌跡もたどる。	同上
6	近代産業の発達(2) ―重工業―	日本の産業革命は前章で触れたように綿工業・石炭業・輸出産業・軍需工業の4つの確立によって完成する。ここでは近代石炭業の確立、近代鉄鋼技術の導入、兵器生産と機械工業の発達、運輸業の発達の様相などを見る。	同上
7	日清・日露戦争と日本経済	戦争は財政規模を一挙に拡大させた。この時期に日本は金本位制を採用、植民地経営に乗り出した。独占化の傾向があらわれ、財閥もコンツェルン形態をととのえた。資本制社会確立期の再生産の構造も概観する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第1次世界大戦と日本経済	国際収支の危機に直面していた日本は第一次大戦により債務国から債権国に転化した。しかしやがて反動恐慌に見舞われ、政府は企業の大規模な救済措置をとった。関税改正と商権回復、労働運動についても概観する。	三和良一
9	1920年代	第一次世界大戦後、世界経済の基軸国は交替し、現代資本主義への変容がはじまった。日本経済もまた国内市場を拡大して、新しい局面を迎えた。重化学工業化を進めながらも、資本蓄積と国際収支の危機に見舞われ、新しい経済政策の展開もはじまる。	同上
10	昭和恐慌	片岡蔵相の失言をひきがねに金融恐慌が起こり、やがて銀行の集中化が進められた。1920年代の危機への対策として金解禁と緊縮財政を柱とする井上財政が登場した。しかし、暗黒の木曜日ではじまる世界恐慌と重なり、日本の諸産業は痛烈な打撃を受ける。	同上
11	高橋財政	金本位制を放棄し、景気政策を採用した高橋財政期の日本経済はどう展開したか。各国にさきがけて日本は恐慌から脱出したが、軍事費を抑制しようとした高橋蔵相は2・26事件で倒された。貿易・産業構造は大きく変容し、独占体制も強化されていった。	同上
12	戦時経済	満州事変・日中戦争・太平洋戦争へと突き進んでいった日本の戦時経済の姿を追う。この時期に世界経済はブロック化し、日本は統制経済の道を歩む。また軍需主導の重工業化が進み、財閥が強大化する一方で、地主制は凋落していく。	同上
13	戦後経済改革	戦後の日本経済はアメリカの対日占領政策によって大きな構造改革を迫られる。それは経済的非軍事化政策であった。財閥解体、農地改革、労働改革が次々と実施されていった。しかし東西関係の変化は対日占領政策を転換させることになる。	同上
14	経済復興	戦後の混乱と荒廃から立ち上がり、高度成長へのレールを敷くまでの経済復興の経過を見る。悪性インフレの克服、企業の再建整備、ドッジ・ライン、朝鮮戦争による特需ブームの役割などを確かめ、さらに戦後の経済構造の変化を分析する。	同上
15	高度経済成長	高度成長を可能にした市場的要因や産業・貿易・資本構造の変化を分析する。さらに、この時期に急激に進められた技術革新を概観するとともに、高度成長に果たした経済政策の役割を見る。高度成長の終焉の意味するところを考えよう。	同上

＝ 欧 米 経 済 史 ＝（R）

〔主任講師：関口尚志（東　京　大　学　教　授）
　　梅津順一（青山学院女子短期大学助教授）〕

全体のねらい

比較史的な観点から、中世末以降の欧米諸国における資本主義経済の成立と展開の特徴を明らかにするなかで、1.近代資本主義の独自性、2.社会制度と経済発展、3.国民経済と世界経済、4.宗教意識と経済行為、5.産業革命の諸類型、6.資本主義の構造、といった諸問題を取り上げる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　説	欧米諸国と日本との歴史的接触をたどりつつ、近代資本主義の世界史的意味を考え、資本主義の出発点となった中世ヨーロッパ経済の特徴を、徳川時代の日本経済と比較しつつ考える。	梅津順一（青山学院女子短期大学助教授）
2	商業革命とヨーロッパ経済	大航海時代を背景とする、ヨーロッパ経済の世界的進出と、東インド貿易と新大陸貿易の実態、ヨーロッパ的世界経済の変貌と南欧諸国の盛衰を考える。	同　上
3	北西ヨーロッパ諸国の台頭	16世紀末におけるオランダとイギリスの世界経済への進出とその背景、両国の国民経済の構造的特徴を考える。	同　上
4	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業	近代資本主義の発展における農村工業の役割に注目し、その展開の姿をたどりつつ、旧来の都市工業との抗争を考える。	同　上
5	近代ヨーロッパにおける国民国家と経済政策	イギリスとフランスの比較を通して、近代国家の経済政策の内容と、経済発展に対する影響を考える。	同　上
6	市民革命と資本主義の精神	イギリス市民革命の経済史的意味を考えるとともに、近代資本主義の発展の担い手となった社会層と宗教意識の問題を考える。	同　上
7	アメリカ植民地の経済的展開	南北アメリカ植民地の経済的展開の特徴を、本国経済との関わり、入植者の階層、植民地の経済構造などを比較しつつ考える。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イギリス産業革命の世界史的意義	イギリス産業革命が、市民革命、保護主義、中産的生産者層の広範な形成を背景とした、イギリス独自の個性的な産業変革であるとともに、その後の世界史の展開に、さまざまな意味で、決定的な影響を与えるものであったことを考える。	関口尚志 （東京大学教授）
9	産業化の波及と後進資本主義の経済構造	イギリス産業革命の影響下に展開する後進諸国の産業化を、アメリカ型（仏・米）とプロシア型（独・露・日）について検討し、後者のばあい、社会の近代化が不徹底ななかで産業化と経済成長がみられるなど、先進国にない独自な構造と問題をともなうことを考える。	同　上
10	19世紀の世界資本主義	「世界の工場」イギリスを頂点に、欧米諸国や非西洋諸地域を周辺に配して構成された19世紀の国際分業システムを検討し、自由貿易が経済強国に有利な体制であったことや、経済摩擦が政治的・文化的摩擦でもあったことを具体的に考える。	同　上
11	「大不況」と資本主義の構造変化	19世紀末「大不況」の実態と原因を検討し、長期にわたる価格の低迷と投資の沈滞のなかで、自由貿易体制が崩壊し、関税障壁と、これに保護された生産の集積、集中を土台に、独占と帝国主義の時代が到来した経緯を考える。	同　上
12	イギリスの産業的停滞とアメリカ型大量生産体制の展開	大不況からの脱出と20世紀初頭にかけての新興産業の抬頭の過程で、イギリス産業の相対的停滞と、ドイツおよびアメリカ産業の躍進が著しい。「イギリス病」の歴史的根源と、アメリカ型大量生産体制の歴史的基盤を、両国の社会構造を対比しつつ考える。	同　上
13	帝政ドイツ・旧ロシアの経済と社会	帝政ドイツの高度な技術的・経済的発展を、他面におけるドイツ社会の伝統的・コンカー的構成、およびこれを基盤とする「政治寄生的資本主義」の優位との関連で検討し、さらに、ドイツとの対比において、ツァーリ制ロシアの社会とその工業化の特質を考える。	同　上
14	ファシズムと世界大戦期の欧米資本主義	ファシズム、とくにナチズムの社会的基盤を、ドイツ革命・ワイマール民主主義、そのもとでのインフレ・高度成長・大恐慌という経済変動との関連でとらえ、また、両大戦前後の各国資本主義の動向を、「国家と経済」を焦点に考える。	同　上
15	近代化と現代資本主義	講義をふりかえり、欧米における近代「市民社会」形成史がいかに「現代資本主義」の構造と問題を深く規定しているかを考え、また、欧米「近代化」の歴史的経験に照らして、現代資本主義の世界システムに組み込まれた「低開発」諸国が直面する根本問題を考える。	同　上

＝近代日本の生活と社会＝（TV）

主任講師：大濱徹也（筑波大学教授）
熊倉功夫（筑波大学教授）

全体のねらい

日本人の生活は、明治維新以来、今日に至るまで大きく変化してきた。その変化は西欧化という側面や合理化機能化といった様々な面をもっているが、しかし生活の実態を支えてきたのは伝統的な生活感覚だった点も見逃せない。日本の近代生活と伝統的社会、地域、日本人の心意とがいかに結ばれ、また切り離されてきたかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活のリズム	勝手口からの眼 国家祝祭日をめぐって 学校行事のなかで ハレ日とハタ日の間で	大濱徹也 （筑波大学教授）
2	開拓地の生活と祈り	移民の動向 入植者への手引き 天塩川流域の町村 共同一致の場を求めて	同上
3	生活のなかの碑	建碑をめぐって 戦争記念碑のこと 記念碑が問いかける世界 心を問う場として かたりとしての歴史	同上
4	世間とつきあい	つきあいとは 神前結婚式の誕生 世間の変容	熊倉功夫 （筑波大学教授）
5	良妻賢母	開化の学問 女学校の誕生 高き志をもって 「女子教育」をめぐって 女子の心得	大濱徹也
6	礼儀作法の近代化	近代の小笠原流 合理性と機能 礼法書の世界	熊倉功夫
7	食事の変化	外来料理の黎明 肉食の登場 新しい味	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	台所と食卓	新しい住まいの基準 台所の機能 箱膳からちゃぶ台へ	熊倉功夫
9	田園都市	東京と大阪 ― 産業経済を中心に ― 村の革命 「一家団欒」主義の虚実 郊外住宅の形成 近郊農民の生活 「吾等が村」を求めて	大濱徹也
10	サラリーマンの誕生	呼称をめぐって 腰弁 ― 俸給生活者の世界 「学歴社会」の誕生 浮き沈みの人生	同上
11	酒と煙草の文化	日本固有の酒の飲み方 洋酒と酒場 煙草の文化	熊倉功夫
12	習いごとの社会学	習いごとと家元制 家元制度の歴史 家元制度の条件の権限 現代の家元 個性と創造性	同上
13	和服と洋服	洋服の導入 女性の洋装 大正・昭和の服装	同上
14	戦争と生活	兵役の義務 「尚武須護陸」の世界 内務班での生活 兵士と家族をめぐって	大濱徹也
15	現代日本人の生活と社会	歴史への視点 生活を読む 世相と風俗 盛り場と娯楽	大濱徹也 熊倉功夫

＝社会学研究法＝（TV）

〔担当講師：甲田和衛（放送大学学長）
高坂健次（関西学院大学教授）〕

全体のねらい

社会学研究法とは、社会学説史と対をなす社会調査法のうち、後者すなわち経験社会学の方法をさす。経験社会学の採択している方法は、社会事象の量化と事後実験である。この両者にみあう社会事象はきわめて限定されている。まず、なぜ限定されるかについて考えたい。そこから社会学が歴史学や心理学とどう異なるかがおのずからあきらかとなる。そこで社会学は分析のためのデータを広い意味での人類学に求め、それに統計学・数学を適用しようとする。ついで直接、社会調査を実施することはいうまでもない。その結果はまだ全体社会とよばれるものを説明するにはいたっていない。しかし、婚姻、社会的移動、階層などの人間の選択行動と社会制度との関係の説明が、歴史学、人類学あるいは心理学などといささかは異なり、社会学的説明といわれるものを提出しえたかどうかが、この研究法の課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動	社会学の対象のうち数理社会学のアプローチの可能な分野についての解説、とくに使用できるデータは社会人類学が中心となる。	甲田和衛（放送大学学長）
2	インセスト・タブー	Freud以降のインセスト・タブーをめぐる解釈の未解決について	同上
3	近親婚	許される婚姻についてFrazer 以降の問に答える	同上
4	南インドの婚姻規制		同上
5	系譜空間		同上
6	親族体系		同上
7	系譜的方法・タイポロジイ		同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	社会学研究法の課題		甲田和衛
9	年齢階梯制		高坂健次 （関西学院大学教授）
10	呪術と不安		同　上
11	人間集団のモデル		同　上
12	親族構造のモデル		同　上
13	学歴社会と不平等		同　上
14	階層のイメージ		同　上
15	意図せざる結果		同　上

＝社会構造と社会変動＝（R）

― 近代化の理論 ―

〔主任講師：富永健一（東京大学教授）〕

全体のねらい

マクロ社会学理論の視点から、産業化と近代化の解明に一貫した理論的説明を与えることがこの講義の目的である。産業化と近代化は西洋17世紀にはじまって世界をすっかり変えてしまった社会変動である。この社会変動の性質を、構造 ― 機能分析の視点（社会変動とは社会構造の変動であるから）に立ちつつ詳細に分析してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ 序論 近代化と産業化：問題の出発点	キー・ワード（その1）：産業化 キー・ワード（その2）：近代化 近代産業社会の概念	富永健一 （東京大学教授）
2	近代化・産業化への「先発」と「後発」：日本の位置	近代化と産業化における先発と後発 近代化と産業化における西洋と東洋 非西洋後発社会の近代化と産業化	同上
3	Ⅱ 社会構造へのアプローチ 社会構造とは何か	「理念型」としての近代産業社会 社会構造の概念 社会構造の変動としての社会変動	同上
4	社会のミクロ分析対マクロ分析	社会実在論と社会名目論 ミクロ分析 ― 行為理論的アプローチ マクロ分析 ― システム理論的アプローチ	同上
5	社会の基本類型	ここでの社会とは「狭義の社会」を意味する 全体社会と部分社会 社会の基本類型	同上
6	近代産業社会の社会構造（総論）	構造分化 ― 家族と組織との分離 組織と市場 地域社会と地域行政組織	同上
7	Ⅲ 近代産業社会の社会構造(各論) 家族・親族の構造	家族と親族 家族の諸類型と核家族の意味 家族・親族としての機能縮小とゲマインシャフトの最後の拠りどころとしての核家族	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	組織の構造	機能集団としての組織 組織の構造分析 近代産業社会の構造要素としての組織	富永健一
9	地域社会の構造	生態学的アプローチ 村落 都市	同上
10	社会階層の構造	不平等の構造化 身分・階級・社会階層 階層的地位形成の過程論的・多元論的特性	同上
11	国家と国民社会の構造	国民社会 国民国家 世界社会の問題	同上
12	Ⅳ　社会変動へのアプローチ 社会変動とは何か	何が変動するのか 社会成長・社会発展・社会進歩 社会変動の諸類型	同上
13	近代化理論・1 進歩の理論	近代的精神の基礎：啓蒙主義 実証主義・経験主義 「進歩の観念」	同上
14	近代化理論・2 進化の理論	古典社会進化論（その１） 古典社会進化論（その２） ネオ社会進化論へ	同上
15	近代化理論・3 発展の理論	産業化・近代化の社会構造的諸次元 ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ （テンニエス） 伝統的支配から合法的支配へ（ヴェーバー）	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	構造―機能理論と社会変動	構造と機能 構造ー機能分析の論理 社会変動の理論化	富永健一
17	社会変動における発展段階（総論）	ネオ社会進化論の理論枠組 社会進化の発展段階図式 社会進化の発展段階と社会構造の変動	同上
18	V　社会変動における発展段階（各論） 家族・親族の変動	未開社会における家族・親族 農業社会と家父長制家族：「家」制度 日本社会における家と同族	同上
19	組織の変動	農業社会段階における組織 近代産業社会前期における組織 近代産業社会後期における組織	同上
20	地域社会の変動	農業社会前期における都市と村落 農業社会後期における都市と村落 共同体の解体としての近代化	同上
21	社会階層の変動	農業社会前期における社会階層 農業社会後期における社会階層 近代産業社会における社会階層	同上
22	国家と国民社会の変動	近代以前の国家の諸形態 近代産業社会における国民社会と国民国家 高度産業化と福祉国家化	同上
23	VI　世界史の中での近代化と産業化 社会変動の構造―機能主義的解釈	社会進化の共通の方向性 社会進化についての構造ー機能理論的解釈 なぜ世界は一様に進化しなかったのか ― 予備的考察	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	社会進化の動因：「内在的」発展対「伝播的」発展	内生因 ── 先発国における「内在的」発展 外生因 ── 後発国における「伝播的」発展 後発国における社会発展の成否をきめる諸条件	富永健一
25	非西洋後発社会における近代化と産業化・1 ：日本の場合	日本の伝統社会 幕末・明治維新における近代主義対伝統主義 明治・大正・昭和における近代化と産業化	同　上
26	非西洋後発社会における近代化と産業化・2 ：中国の場合	中国の伝統社会 清末・辛亥革命と中華民国のもとでの近代化と産業化 中華人民共和国のもとでの近代化と産業化	同　上
27	非西洋後発社会における近代化と産業化・3 ：日本と中国の比較	伝統社会の構造についての日中比較 近代化段階における社会変動の日中比較 近代化段階における国際環境についての日中比較	同　上
28	Ⅶ　未来へ向けての展望 ポスト工業社会と情報化社会	ポスト工業社会 情報社会 情報社会は知識社会と言えるだろうか	同　上
29	高齢化社会と福祉国家	人口構成の高齢化 人口の高齢化と社会の構造変動 国家と自治体の役割	同　上
30	回顧と展望：19世紀から20世紀への遺産と20世紀から21世紀への遺産	19世紀から20世紀への遺産としての社会主義 社会主義の思想と運動の正統派としてのマルクス主義 21世紀へ向けての20世紀の遺産は何か	同　上

＝ 地 域 と 生 活 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

人間は、大地とはなれて生活することはできない。その大地に根をおろした人びとは、おのずから地域社会を形成した。この番組では自然的環境や風土の中での人びとのさまざまな生活のありかたを多様な角度からさぐる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会をさぐる	「地域」とはいったいなにを意味するのであろうか。また、地域研究がなぜ必要なのか。さらに、地域研究の方法はどのようなものなのか、「地域と生活」への手がかりを考えてみることにする。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
2	盆地の世界	日本列島には無数の盆地がある。それらの盆地は、そとにむかって閉ざされた小宇宙であるといってもよい。そしてそこでは、ゆたかな想像力によって民話も生まれた。放送では日本民俗学の成立にもふれる。	同上
3	杉と地域社会	日本の国土の７０％は山林であり、その山林のなかにもたくさんの地域社会がある。日本の林業の現在の状況をふまえながら、主として日本を代表する杉をとりあげる。	同上
4	島の社会	日本は文字どおりの島国である。だがわれわれの多くは、いわゆる「離島」に生活する人びとの姿を知らない。本州に近接した島でさえ、そこには小さな島の地域社会がある。その問題をさぐることにする。	同上
5	雪国日本	太平洋がわに住む人間には想像もできないような積雪地帯が日本海がわにはひろがっている。その雪国のなかでの地域生活はいったいどのようなものなのだろうか。雪と人間生活のかかわりを考察する。	同上
6	地域と住まい	日本の風土的条件は地域によって大きなちがいをもっている。そのちがいが、もっともきわ立って反映されているのは住居であろう。その住居のさまざまを各地でとらえ、研究してみたい。	同上
7	村おこし	日本の人口移動は急激な都市化の波のなかで加速化し、いわゆる「過疎」の村がほうぼうにできてしまった。しかし、そういうなかで、村の再活性化がおこなわれている。その実態を研究する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	市と鍛冶	地域と地域のあいだには、物資や情報の交流がふるくからあった。その典型として、「市」と、野鍛冶のふたつを題材にしながら地域間交流の形態をさぐってみることにしたい。そしてその伝統のうえでの現代をも考察する。	加藤秀俊
9	のびる郊外	大都市への人口集中と、ぼう大な数の通勤者の誕生によって、「郊外」というものが生まれはじめた。さいきんでは、「超郊外」とでもいうべき状況さえみられる。いったい「郊外」にはどんな問題があるのかを考察する。	同上
10	街道の役割	地域と地域とをむすぶのは道路である。現在では鉄道や高速道路が発達し、交通は便利になったが、むかしは、日本の主要な地点を街道が通っていた。宿場町という町もできあがった。中山道の例で考察する。	同上
11	高齢者と地域	日本はいまや世界一の長寿国になった。そのように変貌してゆく社会のなかで、高齢者の果たすべき役割は大きい。地域社会形成者、そして文化の伝承者としての老人の姿を学習する。	同上
12	地域のイメージ	それぞれの地域には、それぞれのイメージがつきまとう。いったい、なにがイメージをつくるのか、そして、イメージと人間とのかかわりはどのようなものなのか、をとらえてみることにする。	同上
13	ひろばと生活	地域社会、とりわけ都市生活のなかでは、人間どうしの出会いの場としての「ひろば」が大きな意味をもつ。日本の都市の「ひろば」の歴史と現代とを再検討しながら、現代生活を研究する。	同上
14	地域と食生活	第6章で日本の諸地域と住居形態をみたが、ことなった地域それぞれは独自の食文化をも形成してきた。その地域差と背景にある歴史とを研究しておくことは、日本を知るためのだいじな手がかりである。	同上
15	現代都市の祭	むかしの村落共同体には、さまざまな祭礼があった。しかし、都市のなかにも祭の伝統はあるし、また、あらたな祭を形成してゆく力もはたらいている。都市の人間にとっての祭の意味と役割をかんがえて結びとする。	同上

＝ 地 域 社 会 学 ＝ （TV）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

地域社会の成立は比較的あたらしいが、原初的村落から都市にいたる、もろもろの地域社会には、歴史的背景や行政をふくめてそれぞれの特色がある。この番組は地域社会の構造・組織をあきらかにすることを目的とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会学への招待	地域社会学という学問分野がつくられたのは比較的あたらしいことだ。どのようにしてこの学問が成立したのか、またその意味はどこにあるのか。それを国際比較的な視野からもとらえることにする。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
2	農耕と定着	人類がムギ、イネなどの栽培植物を発見してから、人びとの特定地域への定着性は急激に向上した。その過程を考古学的な視点をまじえつつ考察し、日本における村落の起源をたずねる。	同 上
3	地域と血縁	初期の村落は、おそらく人数のすくない血縁集団であったとおもわれる。そのことは一村同姓といった共同体がこんにちも健在であることからもうかがわれるであろう。そのような視点から血縁集団と地域の関係をかんがえる。	同 上
4	土地と神さま	日本のそれぞれの地域社会、そして分割された「土地」には土地神がいらっしゃる。氏神から土地神（うぶすながみ）などの系譜をたどり、同時に、土地神と人間とのかかわりを研究する。	同 上
5	村・町・都市	人間がつくりあげた地域社会は、小さな農村共同体から、さらにそれが拡大した町、そして、こんにちでは巨大都市にまでふくれあがった。こうした集落、ないし居住様式を比較検討する。	同 上
6	地域と宗教	第4章でみた土地神のほかに、高等宗教の成立・浸透によって形成されてゆくことがある。ここでは日本の代表的な仏教、浄土真宗教団と地域のかかわりをとりあげる。	同 上
7	地域と水域	日本列島は小河川の網の目のうえに成立している。その小河川は、生活用水であるとともに、農耕に欠かすことのできない灌漑用水としても決定的に重要だ。水域と地域はどのような関係にあるのかを考察する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	現代の農村社会	1980年代の日本農業は大きな転換期をむかえつつある。これまでの日本の農政そのものが見直しの時期にさしかかっているといってもよい。主として水田稲作の農業社会と農家の生活を検討する。	加藤秀俊
9	現代の漁村社会	日本は海にかこまれた国である。そのゆたかな海洋資源は、そのまま日本人の栄養資源でもあった。しかし、漁村もまた大きく変貌しつつある。その実態をひとつの個別事例をつうじてかんがえる。	同　上
10	現代の山村社会	かつて、ゆたかな日本の森林はさまざまな恩恵を日本人にもたらした。現在でも、木はわれわれの生活と密着している。山村のなかで木を材料にしてそれを加工する人びとの姿をとらえなおしてみたい。	同　上
11	開拓地の地域社会	農業の生産性の向上と人口増加とのあいだには相互的な因果関係がある。耕作面積を増加させるために、江戸期から新田開発がすすみ、明治から現代までの近代日本にも開拓地ができあがった。諸相をみる。	同　上
12	都市の近隣社会	都市には巨大な人口集積があるが、その巨大な人口も地域的に細分化してみると、町内会などの近隣社会が機能していることに気がつく。都市化時代をむかえつつあるこんにち、この都市内地域社会に焦点をしぼる。	同　上
13	歴史のなかの地域社会	あらゆる地域社会は歴史の産物であり、その延長である。ここでは日本の都市の原型のひとつとしての城下町にその例をとって、歴史的伝統がどのように現代の地域社会にうけつがれているかを考察する。	同　上
14	未来への挑戦	前章にみた過去からの延長としての現在と対照的に、こんどは、現在から未来に延長線をひいて、さまざまな地域社会がどのような未来設計をおこなっているかを検討してみる。そこには自治体の努力がみられる。	同　上
15	主張する地域社会	未来を見つめ、あらたな地域社会をつくってゆく主体はあくまでもそれぞれの地域に住む市民たちである。その市民たちがみずからを主張する姿をとらえて、地域の将来を考える。	同　上

＝芸能と社会＝（TV）

〔主任講師：小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）〕

全体のねらい

テレビの発達、普及によって芸能は、社会の前面に押し出てきました。その結果、社会に於ける芸能のしめる位置、そして役割にも変化がおこっていると思われます。この際、社会と芸能との関係を本質的に考察し、あわせてその将来を展望してみたいと思います。折りにふれては、講師が芸能人であるので、その立場から……。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	芸能と私	この教材の最初の章は、講師のわたくしごとから始まります。芸能の原点を、とくに職業芸能者の根本をつかもうと、大道芸の万歳をやってみた講師自身の報告です。	小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）
2	遊びと芸能	日本人の遊びの内容を分析して、日本人の遊び観を理解し、神と人とが交流する遊びが、やがて芸能化の道をたどるなど、遊びが発達してゆく過程を考えます。	同上
3	芸能のはじまり	『古事記』に於ける天の岩屋戸の天女命の舞踊、また『日本書紀』のなかの海幸山幸伝説の滑稽演技など、神話にみえる劇的要素を点検するのをはじめ、芸能の起源についてさまざまに考察します。	同上
4	なりわいとしての芸能	権田保之助（1887—1951）は都市に於ける娯楽を調査して「社会生活の推移」と「現代社会に於ける生活の基調」を明らかにしようとしました。その著作の一端にふれつつ、大道芸、及び大道芸人についてさぐります。	同上
5	芸能と差別	「芸能と社会」について考えるとき、芸能民の被差別の歴史をぬきにして語ることは出来ません。多くの日本の文化が、被差別的な土壌から生まれたことを、深く真剣に考えたいと思います。	同上
6	商いと芸能	市での商人たちは、弁説を駆使して人を集め、それは極めて芸能的でしたが、同時に多くの芸能が、市を支配する香具師の傘下にあったのです。そういう商いと芸能との関係を考究します。	同上
7	宴会と芸能	宴会に歌や踊りはつきものですが、『万葉集』の歌謡が古代の饗宴の場を母胎として生まれたように、日本人は宴会を、技芸を公開し養成する場として伝承してきました。そういう宴会の歴史をたどります。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	信仰と芸能	人は理屈だけではなかなか信仰に入れません。そこで布教者はしばしば感覚にうったえます。芸能化した説教は布教方法として極めて効果的でした。そういう芸風説教を研究します。	小沢昭一
9	芸能の盛衰	ひとつの芸能が世の中にうけ入れられる、あるいは捨てられる、その過程をつぶさに点検することによって、民衆の芸能に求めるものは何か、がわかるかもしれません。そこを追求してみたいのです。	同　上
10	芸能と悪所	江戸の「かぶき」と「吉原」は、ともに江戸庶民の理想境であり、同時に「悪場所」として社会から隔離されていた世界でした。この2つの世界を考えることで「芸能と社会」の関係をより明確にしたいと思います。	同　上
11	芸能の社会学	そもそも芸能は、ふつうにいう意味での社会の秩序からはずれています。芸能人はアウトローです。一般社会を律している規制や道徳とは無関係な社会現象として芸能は存在します ― このことの考察です。	同　上
12	スポーツと芸能	今日、スポーツと芸能とはますます近似であると考えます。しかし日本では、もともと相撲は芸能であり、いまも芸能が失った芸能的要素を多く残しています。スポーツと芸能の境果をさぐりたいのです。	同　上
13	テレビの社会学	「テレビでは出演者の素顔が透けて見える。だからタレントは地＝素顔で演じなくてはならない。またタレントという存在はさまざまな領域に“軽薄”に越境してくるもの」 ― という論点を中心に、テレビに於けるタレントを考えます。	同　上
14	余暇生活に於ける芸能	余暇生活の拡大によって、参加型のレジャーが発達したものの、実演芸能へ足を運ぶ人は減少しています。実演芸能の将来はどうなるのか。くわしく点検したいのです。	同　上
15	これからの芸能	「見る芸能とする芸能では、する芸能こそが芸能だ。すべて1人1人の人間自身が芸能者であるという方向へ動きはじめているのではないか」 ― という梅棹理論の展開を考えることでしめくくりとしたいのです。	同　上

＝アジアの社会＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

アジアの社会を総合的に理解することを目的として、稲作と米食について主に東アジアに焦点をあてながら、地理学、農学、言語学、気象学、経済学、宗教学、歴史学、文化人類学、生物学など隣接諸学の成果をふまえながら学際的、総合的に理解をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アジアの社会を学ぶ	＊アジアのイメージをとらえる。 ＊アジアの範囲について考える。 ＊この講義の成り立ち、および学習の方法について理解する。	祖父江 孝男 （放送大学教授）
2	長い米と丸い米 ── 米と人とのかかわり	＊稲の代表的な分類のしかたを理解する。 ＊情報の集め方について学ぶ。 ＊稲に関連したことばの体系について考える。	同上
3	ライスロード	＊稲の起源に関する研究方法について理解する。 ＊稲の、アッサム・雲南地方起源説を概観する。 ＊日本への稲作の伝播の問題について考える。	同上
4	モンスーンと稲作〜水と人とのかかわり〜	＊アジアの自然環境の鍵をにぎるモンスーン気候についての基礎的な知識を得る。 ＊モンスーンの地域的影響の差を理解する。 ＊水の利用とその管理の問題について考える。	同上
5	遠永の連作〜土と人とのかかわり〜	＊水田の稲作における有効性について考える。 ＊水田を使っての稲の連作の土壌学的メカニズムを理解する。 ＊稲の栽培の方法について整理する。	同上
6	稲を育てた人々	＊稲作における種子の重要性を理解する。 ＊稲の収量増加への努力について、自然条件との関連を考える。 ＊「緑の革命」について考える。	同上
7	稲作と宗教	＊日本の風土と神道との関係について考える。 ＊稲作と神道との関わりについて考える。 ＊稲にまつわる東南アジアの信仰について理解する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	わらの民俗と信仰	＊日本においてわらがトータルに利用されていることを理解する。 ＊わらの特徴と、わらが利用される原因について考える。 ＊韓国におけるわらの利用との比較を行う。	祖父江　孝　男
9	米の利用と食文化	＊西アジアにおける稲作について理解する。 ＊米の食物としての重要性について考える。 ＊米の調理法、食べ方の多様性に目を向ける。	同　上
10	稲作と共同組織	＊日本における水田の水管理の重要性を理解する。 ＊「ゆるやかな構造の社会」という概念について考える。 ＊田植え組織と村落共同体の形成の関係について理解する。	同　上
11	米と経済	＊日本の近代化に農村が果たしてきた役割を考える。 ＊日本の農業の将来について考える。 ＊米の国際市場での位置について理解する。	同　上
12	アジアの農村1 ～タイ～	＊タイの社会の特質を「ゆるやかな構造の社会」の概念で考える。 ＊タイの稲作の特徴を理解する。 ＊日本とタイの農業生産構造の比較を試みる。	同　上
13	アジアの農村2 ～フィリピン～	＊東南アジアの稲作の基本的性格を農民を軸に考える。 ＊水田所有と社会的ステータスの関係について考える。 ＊「かげの循環」というとらえ方について考える。	同　上
14	アジアの農村3 ～インドネシア～	＊アジアの米経済について考える。 ＊「分配社会」、「低安定社会」という概念について理解する。 ＊インドネシアの米の流通と特徴について考える。	同　上
15	アジアの農村4 ～韓国・日本～	＊韓国における米の増産の過程を、品種改良を中心に理解する。 ＊日本と韓国の農村の比較を行う。 ＊アジアの社会について考える。	同　上

＝ 民　　法 ＝ （TV）

〔主任講師：山田卓生（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

民法は私人間の紛争を解決する基準（規範）である。民法は財産法と家族法に分けられるが、ここでは財産に関する法を中心にする。民法の全体は量的に膨大なので、基本的な制度を取り上げ、具体的事例をもとにしながら、民法の仕組み、民事紛争を法によって解決することの意味を考え、法的なものの考え方の修得を目指す。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民法とはなにか	民法とその周辺の特別法の成立過程及び法構造を概観し、更に民法を補充拡充する慣習法、判例法の役割を見る。次に民法を具体的事件に適用するにあたっての種々の解釈方法と、裁判基準、先例と具体的妥当性との関係を考える。	山田卓生（横浜国立大学教授）
2	権利と権利主体	財産取引、財産権の主体として人と法人がある。あらゆる人は生まれながらにして権利主体性（権利能力）をもつが、一定の者は行為能力が制限される。法律の根拠により設立される法人は、経済取引において極めて重要な役割を果している。	同　上
3	法律行為と意思表示	民法の中心概念として法律行為と意思表示がある。民法においては法律行為自由の原則が支配するが、法律行為の内容は公序良俗に反してはならない。意思が外部的表示とくいちがう場合の表意者の保護制度としての錯誤、詐欺、強迫について考える。	同　上
4	代　　理	代理は法律行為を他人に委ねるもので、極めて頻繁に利用されている。代理には本人の能力を補充するものと、本人の活動を拡大するものとがある。代理は便利であり不可欠であるが、代理権のない者が代理人と称した場合どうなるかの問題（表見代理）がある。	同　上
5	時　　効	民法は時間の経過により権利の消滅または権利の取得という効力を付与する時効制度を設けている。時効はこれにより利益をうる者の援用を要件としているほか、放棄もできるとされている。時効の援用、中断などは時効制度をどのように理解するかと関連する。	同　上
6	物　　権	民法上の権利は物権と債権に大別される。物権は物に対する支配権であり、所有権とその他の物権がある。物権には対世的な効力があるため、権利関係を公示する必要がある。不動産に関する登記制度と動産取引における占有について考える。	同　上
7	担保物権	担保物権は、債権を担保するために物の価値を優先的に把握するものである。不動産を担保にする方法としては、抵当権が代表的であり、変形として仮登記担保がある。動産を担保にする方法として、民法は質権をおくが、他に譲渡担保という方法がある。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	債権の効力	債権者は債務者に対してどのようなことをもとめうるか。債務者が任意に履行（弁済）すればよいが、履行しない場合、強制的な履行を求めうるほか、債務不履行による損害賠償を求めることができる。債権を他人に譲渡する場合の法律関係（債権譲渡）も考える。	山田卓生
9	債権の保全	債権者は債務の履行を確実なものとするために、債務者の権利を代位行使（債権者代位権）したり、債務者のなした行為を否認する（債権者取消権）ことも出来る。更に事前に保証人を要求するとか、債務を連帯にするかたちで債権の効力を強化することもできる。	同上
10	契約	契約は法律行為の中で最も重要である。契約は当事者が自由に形成できるのが原則である。契約は民法の定めるものの他多種多様のものがあり、有償か、双務か、要式か、等の基準で分類できる。次いで契約の拘束力と契約の解除の場合の法律関係を考える。	同上
11	売買	売買契約は契約の中で最も日常的一般的なものである。売買の成立要件、予約、手付の意味を考えたあと、売買の目的物の瑕疵（欠陥）によって、買主が損害を受けた場合の救済手段を扱う。次いで割賦販売、訪問販売など新しい契約の問題点について考える。	同上
12	賃貸借	賃貸借は他人の物を借りて利用する契約である。とりわけ土地と建物の賃貸借が重要である。土地については民法のほか借地法があり、長期にわたる利用関係を規律している。建物については借家法があり、賃借人の居住を保護している。	同上
13	請負と委任	他人の労務を利用する契約として雇用、請負、委任がある。このうち雇用は労働法で扱われる。建物の建設のような請負契約は、仕事の完成を目的とするものであり、委任は事務処理を委託するもので、受任者の利益を実現する行為に対して報酬が支払われる。	同上
14	不法行為…責任論	テクノロジーの発達、社会生活の複雑化に伴ない、思わぬ損害を与えたり、損害を被むることが起きてくる。そうした場合誰に対して如何なる要件のもとに損害賠償を求めうるか。損害賠償の要件を定める民法と膨大な判例によりながら、各種の責任について考える。	同上
15	不法行為…損害論	損害を受けた者はいかなる内容の賠償を請求できるか。損害は金銭賠償を原則とする。人的損害については、積極損害、消極損害（うべかりし利益）、慰謝料があり、物的損害としては経済的損失が中心になる。損害算定にあたって考慮すべき事由も問題になる。	同上

＝家　　族　　法＝（TV）

〔主任講師：鍛冶良堅（明治大学教授）〕

全体のねらい

家族は、社会の基礎的単位といわれるように、社会を支える人的結合関係の基礎をなしている。それ故、国家は、家族のあり方に強い関心をはらうのが常である。わが国の家族関係を規律する法律制度の中心は、民法の親族編・相続編であるが、その解説を通じて、それが現実にどのように機能しているかをみてゆきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家族法の変遷	近代的民法典としてわが国で最初に立案されたいわゆる旧民法が、施行無期延期となった経緯と、その後に制定された明治民法が少しずつ変質しつつ第二次大戦後の「家」制度の廃止につながり、やがて現行親族編・相続編の成立に至った過程を概観する。	鍛冶良堅（明治大学教授）
2	婚姻の成立	わが国は届出婚主義をとっているが、その意義を考えることを通じて、法律婚主義と事実婚主義、婚姻届に対する成立要件説と効力要件説の対立、さらに婚姻成立の形式的要件・実質的要件等について解説する。	同　上
3	婚姻の効力	婚姻の成立によって発生する夫婦の身分上の権利・義務について解説し、同時に戸籍制度の仕組についても言及したい。そして、これらの解説と合わせて、法律上の婚姻と内縁との差異についても説明する。	同　上
4	夫婦財産制	夫婦の財産関係につき民法は、契約財産制と法定財産制の二つの制度を用意しているが、圧倒的多数は法定財産制に従っている。その法定財産制の構造を、夫婦の団体性とのからみにおいて明らかにしてゆきたい。	同　上
5	離　　婚	わが国は、離婚に関し、協議離婚、調停離婚、審判離婚、判決離婚の四種を認めている。その要点を、1970年代以降に強まっている世界の破綻主義の傾向との対比で説明し、合わせて離婚後の財産や子の措置等についても説明したい。	同　上
6	親子関係(1) ―実親子関係	親子関係は、血族関係の基本をなしているが、ここでは自然の血縁に基づく実親子関係をとりあげ、嫡出子と非嫡出子の区別を通じて、親子関係の推定制度および認知制度について説明し、最後に準正制度に及びたい。	同　上
7	親子関係(2) ―養親子関係	養子制度は、実親子でないものに対して擬制的親子関係を創設する制度で、現行法が認める唯一の法定血族関係であるが、その存在理由をたずねつつ、従来からある普通養子制度と昭和63年1月から新設施行された特別養子制度について説明し、離縁にも及びたい。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	親権・後見	近代的親権が権利性よりは義務性を中核としていること、その反映として利益相反行為の禁止や親権喪失の問題が生じること、そして、未成年者に親権者が欠けた場合の保護や禁治産者の保護を目的とした後見制度について説明する。	銀冶良堅
9	扶養	自己の資産収入によって生活することができないものの生存の維持は、親族間の私的扶養もしくは国・地方自治体による公的扶助に頼るほかない。その両者の関係をまず考察しながら、次いで親族間の私的扶養制度の仕組について説明する。	同上
10	相続制度の仕組	死後における財産承継制度の存在理由について考えつつ、法定承継制度と遺言との関係、当然承継の原則と相続の承認・放棄の自由との関係、そして、財産分離の制度についても説明したい。	同上
11	相続人	法定承継制度において、どの範囲のものが相続人となり、それらのものたちの間の順位はどうなるか、また、推定相続人の欠格事由や廃除事由等について説明し、最後に相続人がいない場合の遺産に対する措置についても説明する。	同上
12	相続分	数人のものが同順位で相続人となる場合の相続の割合が相続分であるが、それには法定相続分と指定相続分がある。また、法定相続分によって相続するのでは共同相続人間に具体的不公平が生じる場合に対処する特別受益者の相続分や寄与分制度についても説明する。	同上
13	遺産分割	単独相続の場合には遺産分割は問題とならないが、今日では共同相続が原則といってよい。ここでは、共同相続人間の遺産分割方法について解説し、合わせて、遺産の帰属とくに債務の帰属の問題を考え、さらに相続分の譲渡の問題にも言及したい。	同上
14	遺言の方式	遺言は、自分の死後に、自分の意思に基づいて身分上および財産上の効果が生じることを期待して行うものであるが、その遺言が厳格な方式を要求され、遺言能力や遺言事項が限定されている理由を考えつつ、法律で定められた各種の遺言の方式について説明する。	同上
15	遺言の効力	民法の相続編第七章「遺言」の第三節「遺言の効力」では、主として遺贈の問題を扱っているが、ここでは、その要点を簡単に説明し、さらに、遺言の撤回の自由の問題、および遺言の自由に限界を画する遺留分制度について説明する。	同上

＝国　　際　　法＝（R）

― 現代国際法を理解するために ―

〔主任講師：栗林忠男（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

現代の国際社会を存立基盤とする国際法の基本的構造とその問題点について理解を深めることを目的とする。とくに、国際法現象に対してどのようなアプローチをもって臨むか、という問題意識の下に、近代国際法が現代国際社会の政治・経済・社会的変動にともなって質・量ともに変容しつつある動向を把握するようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	国際法への視点	国際法を学ぶことの意義、とくに国際社会の相互依存関係の内実化傾向のなかで、国民生活と密着する法秩序として発展しつつある現代国際法を理解することの必要性について考える。また、多元化する国際関係における国際法研究のアプローチのあり方にも触れる。	栗林忠男（慶応義塾大学教授）
2	国際社会の法構造	国際法の発展過程を近代国際法の生成から現代国際法に至るまで辿るとともに、国際法の存立する社会的基盤である国際社会の基本的構造とそこに機能する法の特質について考える。また、国際法と国内法の関係について理論・実践の両面から考察する。	同　上
3	国際法規の存在形式	国際法の法源とされる国際条約、国際慣習法、法の一般原則などを説明するとともに、最近問題となっている国際組織の決議・宣言等の法的拘束力について考える。また、国際連合を中心とした国際法の漸進的発達と法典化のための作業についても触れる。	同　上
4	国際法の主体	国際法において最も基本的な法主体である「国家」の成立、承認及び承継の問題、ならびに国際組織の権利能力、個人（企業）の法主体性に関する問題をとり上げる。	同　上
5	国際関係を律する主要な法原則	現代国際関係を規律する国際法上の諸原則のうち、主権平等、内政不干渉、武力の不行使、人権の保護、民族自決権などの基本的原則を考察する。	同　上
6	外交関係と主権免除に関する国際法	国際交渉を行う国家の機関について述べ、大使・公使・領事などの特権、軍隊・軍艦・軍用航空機などの特権について説明する。また、国家機関とその財産の外国における主権免除の原則及びその動向について考える。	同　上
7	個人と国際法	国籍、外交的保護、外国人の地位、難民、庇護、犯罪人の引渡などの側面から、個人と国際法の関係を考察する。また、企業活動の国際的規制についても言及する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	空間の地位と利用に関する国際法(1) ―― 国際領土と国際的地域 ――	領域の得喪に関する国際法規を説明し、主として日本をめぐる領土紛争の国際法上の問題点を考えるとともに、南極大陸・国際河川その他の領域に関する問題をとり上げる。	栗林忠男
9	空間の地位と利用に関する国際法(2) ―― 海　洋 ――	海洋法の歴史的発展過程を概観し、第三次海洋法会議の結果採択された国連海洋法条約を中心に、海洋区分（領海・群島水域・国際海峡・排他的経済水域・公海・深海底など）、海洋環境の保全、科学調査、紛争の解決等の諸問題と日本の立場について考える。	同　上
10	空間の地位と利用に関する国際法(3) ―空域・宇宙空間―	領空主権原則を中心に国際航空活動の法的規制がいかに行われているか、また、宇宙開発の進展とともに生成しつつある宇宙法体系について考察する。とくに、今後予想される宇宙の商業利用に関する法的諸問題にも触れたい。	同　上
11	国際違法行為とその責任	国際法主体の違法行為能力、国際責任の原則、私人の行為による国際責任、責任の解除などについて、国際社会の法構造に照らして考える。また、国際公益の概念の発達にともなう国際犯罪の規制についてもとり上げる。	同　上
12	紛争の平和的解決	国際紛争の性質とその平和的解決システムの現状を考察するとともに、交渉、審査、仲介、調停、仲裁裁判、司法裁判、国際機関による解決等の紛争の平和的処理方式を検討する。	同　上
13	現代国際法の主要課題 (1) ―― 武力紛争の規制、人権の保護、軍縮問題 ――	現代国際法の当面する課題のなかから、武力紛争の規制、人権の保護、軍縮問題をとり上げ、その法的規制上の問題点を考察して、国際法の発達段階について考える。	同　上
14	現代国際法の主要課題 (2) ―― 国際経済関係、環境の保全、国際テロの防止 ――	前章に引続いて、現代国際法の当面する課題のなかから、国際経済関係、環境の保全、国際テロの防止をとり上げ、その法的規制上の問題点を考察して、国際法の発展段階について考える。	同　上
15	国際社会の展望と国際法の役割	国際社会の多様化・流動化にともなう現代国際法の役割について考える。とくに、主権国家の並立関係から協力関係への移行のなかで、今後の国際法秩序がいかにあるべきか、を検討する。	同　上

＝現代日本の政治＝（TV）

〔主任講師：新藤宗幸（立教大学教授）〕

全体のねらい

現代日本政治における重要なイシュウを採り上げ、それぞれのイシュウを多角的な視点から教科書と映像によって分析してみることにより、現代政治をみる眼を養うことを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代日本の政治構図(1)	日本の近現代史を踏まえて、現代日本の政治構造が、どのような特徴をもっているか、また現代日本政治の生理と病理は何かについて論じる。	新藤宗幸（立教大学教授）
2	現代日本の政治構図(2)	1980年代に入って、日本政治学のなかに抬頭してきた「近代主義批判」あるいは「日本モデル」の内容と意味を考えながら、日本政治へのアプローチ方法について述べる。	同上
3	選挙	自由民主党は1955年以来30年余にわたって政権政党の座にあるが、この長期政権の要因を主として選挙の制度、構造、機能について考える。	阿部齊（放送大学教授）
4	労働	日本の経済構造の変化、政権政党の長期化などによって、日本の労働界は再編成されつつある。労働界の再編を統治構造の変化の視点から考えることにする。	同上
5	国際化と経済摩擦	1980年代に入って以来、日本の経済社会は国際化の時代を迎えたとされる。しかしその一方において経済摩擦は強まるばかりである。国際化時代の内政構造について考える。	新藤宗幸
6	安全保障と軍事費	安全保障は常に政治のイシュウとなる。現代日本においても、80年代に入って軍事力の強化が論じられ、多様な議論をよんでいる。安全保障なるものの意味を、軍事費との関連で考えることにする。	同上
7	民営化と規制緩和	“小さい政府”論の下に各国において民営化や経済活動に対する政府規制の緩和が進んでいる。こうした政府活動の変化がもつ意味について、ＪＲ、ＮＴＴなどをケースとして考えることにする。	阿部齊

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	国土構造	東京への政治・行政、経済機能の一極集中が、何故に極だってきたのか、対策はどのようなものであるか、について政治学的に考えることにする。	新藤宗幸
9	反消消文明 ―エネルギー	現代政治のひとつの流れとして、ポスト物質文明あるいは反消費文明を志向する政治運動が存在する。文明史および国際的視野のもとに、主としてエネルギーの側面から、日本の状況を考える。	同上
10	自然保護	第9回と同様の文脈の下に、緑、自然保護について、日本の状況を考える。	同上
11	少数派	日本政治において女性、障害者、アイヌ、同和地区住民らは、少数派として政治的に正当な地位をもってきたとはいえない側面がある。日本政治を少数派の政治として考察することにする。	阿部齊
12	教育と学習	明治近代以降、教育と学習は高度に整備されてきた。しかし、都市型社会の成熟にともなって、教育と学習は多様な矛盾と課題を抱えるに至った。日本政治の構造と機能の中に教育と学習を位置づけて考えてみることにする。	同上
13	税制	税制とその現実的機能は、政治権力の所在を的確に示す。日本の税制ならびに改革過程を素材として、日本政治の構造を考察する。	新藤宗幸
14	財政	財政は、政治権力がいかなる政策を、どのようなプライオリティの下に実施しようとしているかを、数字をもって示してくれる。財の配分を中心として、日本政治を考察する。	同上
15	ナショナリズム	国民国家としての日本のアイデンティティをめぐって、多様な議論をおきている。日本のナショナリズムの思想構造を、国際化時代と照らし合せつつ、考察する。	阿部齊

＝日本の地方自治＝(TV)

〔主任講師：阿部　齊（放送大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は、現行の日本国憲法の精神を支える基本的な柱の一つである。しかし、今日の地方自治がその本来の在り方にふさわしい現実を備えているとは必ずしもいえない。ここでは、わが国の地方自治の制度的しくみについて理解を深めるとともに、具体的な争点の分析を通じて、日本の地方自治が直面する課題を提示する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	地方自治の構図1	アメリカ、イギリス、西ドイツなどの地方自治制度との比較によって、日本の地方自治制度の特徴を明らかにする。さらに、明治憲法下の地方自治制度の展開をたどり、そこで形成された制度的遺産が、戦後改革によって作られた現行制度に与えた影響を検討する。	阿部　齊（放送大学教授）
2	地方自治の構図2	日本の地方自治の戦後の展開を明らかにする。地方自治の確立後も中央政府の税制手段として残された機関委任事務の増大、革新自治体の盛衰、地方の時代から東京一極集中時代への転換、中央政府の財源難による地方への権限委譲などの問題をとりあげる。	同上
3	首長の役割	日本の地方自治制度において、中心的な役割を果たすのは、各自治体の首長である。自治体の首長が制度上にいかなる位置を占めるかを明らかにした後、自治体首長のリーダーシップの諸類型を検討し、首長主義の現状と課題を明らかにする。	同上
4	地方議会	地方議会は国の議会とは異なり、自治体の最高機関でも唯一の意見決定機関でもない。しかし、地方議会の正常な機能がなければ、住民自治の実現は困難であろう。地方議会の実態あるいは地方選挙の現状を分析しつつ、地方議会の問題点を明らかにする。	新藤宗幸（立教大学教授）
5	財政	財政的独立は地方自治の最大の課題である。しかし、自治体の財源難のために、地方財政は中央政府からの援助に大幅に依存せざるをえなかった。こうした政府間関係に焦点をあてながら、地方財政の現状を明らかにし、あわせて最近の変化にも言及する。	同上
6	コミュニティの崩壊	コミュニティは地方自治を支える基盤の一つである。しかし、最近の急激な人口移動に伴う過疎化と過密化は、一方で既存のコミュニティを解体するとともに、他方で新たなコミュニティの形成を困難にした。コミュニティの崩壊が地方自治に与えた影響を探る。	阿部　齊
7	地域医療	地域医療とは、地域住民の健康を維持増進するために、医療提供のしくみを合理化し、地域に包括医療の最適システムをつくることである。その核となるのは、初期診療の充実と継続医療体制の確立であるが、具体例をあげて、自治体の地域医療の現状を検討する。	新藤宗幸

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	福祉政策	現代の国家の特徴の一つは、体制の違いを越えて、福祉国家への傾斜を強めていることに求められる。わが国もまた福祉国家の一つであるが、福祉政策の実施は各自治体にゆだねられている。地方自治体の福祉政策へのとりくみを分析して、その問題点を探りたい。	新藤宗幸
9	生涯学習と社会教育	地方自治の柱の一つである住民自治の実現のためには、住民の自治能力を高める必要がある。社会教育は住民の自治能力の向上をその課題の一つとしてきたが、最近では社会教育よりも住民の自主性に訴える生涯学習を重視する傾向もみられる。その背景を探る。	阿部齊
10	情報公開とプライバシーの保護	住民の政治参加を拡大するためには、政府の情報が可能な限り公開されなければならない。国の政府の情報公開はまだ制度化されていないが、一部の地方自治体ではすでに制度化されている。その現状を明らかにするとともに、プライバシー保護の必要性を考える。	同上
11	地域交通	過疎地域では、交通機関が採算悪化から運行をとりやめることが多く、過密地域では、道路の渋滞や異常な混雑が大きな問題になっていることが多い。いずれにしても、地域交通は今日の地方自治体が直面する重点課題の一つである。その現状を明らかにしたい。	新藤宗幸
12	環境保全	1960年代後半から、環境汚染は地域社会が直面する最も困難な問題の一つであった。最近では、大気や河川の汚染、騒音、振動による公害に加えて、ハイテク汚染やアヌベスト公害が注目されている。こうした環境保全に関して自治体の果たす役割を探りたい。	阿部齊
13	自治体外交	日本の国際化が進むとともに、国際交流は国の政府相互間にとどまらず、さまざまなレベルで展開されている。姉妹都市提携や世界大都市会議は、自治体レベルでの国際交流の主要な例といえよう。こうした地方自治体の国際活動の現状と課題を明らかにしたい。	新藤宗幸
14	内なる国際化	国際化は単に国と国との間だけで進展するものではない。国内にも、外国人が激増すれば、内なる国際化を迫られることになろう。わが国の場合、「ヒトの国際化」に対する抵抗が強いが、その理由を考えながら、内なる国際化を促進する条件を検討する。	同上
15	NGOと市民運動	国際化を進展させる窮極的な担い手は、市民の自主的運動である。こうした視点に立って草の根での交流を図っているNGO（非政府的民間組織）に注目するとともに、市民運動が国際交流において果たしうる役割を明らかにする。	阿部齊

＝経　営　管　理＝（TV）

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

現代企業における経営管理の内容を体系的に理解し、実践のための基礎能力を育成する。経営管理の内容は多面的であるが、大別すれば、細分化された生産管理、財務管理、労務管理などの各論と、それらの共通基盤となる総論になる。本講義では、総論相当部分を学習する。経営管理が主体的実践行動であることを重視する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営管理の意義	経営管理の課題は、経営目的達成のためにイノベーションと効率化をはかることである。それは、各種経営資源を対象にした計画・組織・コントロールのような機能によって合理的に遂行され、そこに複雑な体系が出現する。本章では、経営管理の機能と体系を学ぶ。	森本三男（青山学院大学教授）
2	経営管理の発展	経営管理の発展は、大略3期から成る。1930年頃までの古典的経営管理、1950年頃までの新古典的経営管理、それ以降の現代的経営管理である。本章では、それぞれの問題意識、技法、システム、特徴を学習する。現代の中に古典や新古典が生きている点に留意する。	同上
3	経営管理と意思決定	戦略や計画の策定、組織の設計など、経営管理のあらゆる問題は、意思決定に還元される。また意思決定は、主体性を発揮する行動の核でもある。このような点から、経営管理の統一視点を意思決定に求める。本章では、意思決定の前提、過程、型、技法を学ぶ。	同上
4	経営管理と情報	意思決定には情報が不可欠であり、意思決定の結果は情報として関係者に伝達される。このようにみれば、経営管理は意思決定と情報伝達のネットワークとしてとらえられ、その機能は、情報の収集、処理、伝達の巧拙によって左右されることになる。	村松司叙（成蹊大学教授）
5	経営者・管理者の役割	経営管理の主体は、経営者と管理者である。彼らは、意思決定によって経営の目標、理念、戦略、計画、組織を策定し、変革し、行動をコントロールする。本章では、経営管理の構造に即して経営者・管理者の役割を明らかにし、必要な資質と行動基準に論及する。	森本三男
6	経営戦略 (1)	企業による資源運用の基本原理を、経営戦略という。経営戦略は、対象とする資源の種類やカバーする行動領域の範囲などにより、各種のものに分けられる。本章では、経営戦略の特質や種類をまず学び、ついで多角化を中心にした内部戦略を学習する。	村松司叙
7	経営戦略 (2)	内部資源の運用基本原理である内部戦略に対照されるのは、外部資源に関連した外部戦略である。本章では、主として外部戦略を勉強する。その主要内容は、M&A（合併および買収）、合弁、提携、集団形成、連合などである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営計画の意義と役割	戦略を展開するために、計画が策定される。計画は、時間的限定のいた具体的行動予定であり、行動の主体（誰が）、時間的限定（いつ）、具体的行動内容（何を）を明らかにする。本章では、経営計画の特質、種類、体系と、長期経営計画を学習する。	古川浩一（東京工業大学助教授）
9	中期経営計画	長期経営計画と対照され、その内容を詳細化したものが短期経営計画である。それは、日常の業務執行行動にとって不可欠であるばかりでなく、必要に応じて多くの種類を生み出している。本章では、短期経営計画の内容と策定技法について説明する。	同上
10	短期経営計画とコントロール	企業の行動は、計画通りに展開されるとは限らない。そのため、行動の業績を不断にチェックし、その是否を分析し、必要に応じて補正する機能が不可欠となる。この機能がコントロールである。経営管理におけるコントロールの原理と技法を、本章で説明する。	同上
11	経営管理と組織	計画を遂行するため意識的に調整された協働のシステムが組織である。経営管理のための組織が経営管理組織である。本章では、経営管理組織の特質、要素、設計原理、形態などの構造面と、動態化、活性化などの機能面の双方を学習する。	森本三男
12	リーダーシップと動機づけ	最も重要な経営資源は人間である。人間は人格や主体性をもっているから、その管理には特別な配慮が必要になる。その柱となるのは、人間を統合するリーダーシップと、人間の活動力を高めるモチベーション（動機づけ）である。本章では、これらを学習する。	同上
13	イノベーションと研究開発	経営管理の課題であるイノベーションとは、経営に関するすべての抜本的変革をいうが、その中心は、製品ないし事業の変革（プロダクト・イノベーション）と生産方法の変革（プロセス・イノベーション）であり、それらは研究開発によって生み出される。	古川浩一
14	資金の調達と運用	人的資源と並ぶ重要な経営資源は、財務的資源すなわち資本である。必要な資本を必要な時に低いコストで調達し、それを有効に運用することは、経営管理の基本要件である。この要件を満たすための財務の原理、方法、手段、技法を、この章で習得する。	村松司叙
15	経営管理の国際化	日本企業の当面している最大の課題は、国際化である。国際化は、日本的経営とよばれる従来の経営管理を、大きく変化させようとしている。変化の方向、内容、望ましい国際化した経営管理のあり方などを、この章で展望する。国際化は文化の問題である点に留意。	同上

＝経　営　戦　略＝(R)

〔担当講師：河野豊弘（学習院大学教授）〕

全体のねらい

経営戦略とは、企業が環境にどのように対応し、どのような製品やサービスを提供するかを決定することである。即ち製品構成を決定し、そのための新製品を開発し、後方への垂直的統合や前方への垂直的統合をどうするか、海外に子会社を設けるか否か、競争戦略をどう進めてゆくかなどを決定することである。

戦略的意思決定は前例のない一回限り意思決定であり、企業の業績に大きな影響を与える。そのような意思決定をどう行なうか、をこの科目では研究する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営戦略の意義と戦略的意思決定	経営戦略の意義 経営戦略の重要性 戦略的意思決定の特長 戦略的意思決定のタイプ 長期計画の立案 要約	河野豊弘 （学習院大学教授）
2	環境の分析 ── 機会と脅威	戦略情報の意義　　戦略情報の体系 環境情報の体系 アウトサイド・インとインサイド・アウトと 情報の収集・処理・伝達のプロセス 公式情報と非公式情報 予測の方法　　要約	同　上
3	自社分析 ── 強みと弱み	自社分析の目的 自社分析の体系 比較の基準 ＰＰＭ分析 自社資源の分析 企業文化 要約	同　上
4	戦略発想と目標設定	意義 戦略のアイデア形成 目標設定 要約	同　上
5	製品構成と多角化	製品市場戦略の領域 製品構成の原理 製品構成の類型 製品構成と組織構造 要約	同　上
6	新製品開発	新製品の意義と成功条件 新製品開発の成功要因と失敗要因 開発のプロセス 最初のアイデアの形成 方針の類型 新製品のための意識改革とコンセンサス 要約	同　上
7	垂直的統合	概念と類型 統合の原理 統合の不利 統合に適する場合 要約	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	多国籍企業経営	多国籍企業経営の概念と目的からみた類型 有利性の原理 多国籍企業経営の不利 多国籍企業経営の適する領域 多国籍企業経営の成功要因 多国籍企業の問題点 要約	河野豊弘
9	体質の強化	体質とは 要員計画 能力強化の戦略 企業文化の変革 要約	同　上
10	戦略の評価	評価の困難性と必要性 評価の種類 評価項目の原理 評価の評価 戦略的評価 要約	同　上
11	戦略の実行	問題の所在 戦略の実行とは―上からみて 戦略の実行の過程―下からみて 実行計画の要素 実行への動機づけ 利害対立をとく 実績検討と計画の改訂　　要約	同　上
12	戦略の立案と実行の組織	トップマネジメント 企画室 開発部門 プロジェクトチーム 社内ベンチャー制度 SBU 組織の創造性　　要約	同　上

＝ 企 業 と 人 材 ＝（R）

〔主任講師：石田英夫（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

日本が経済的に成功を収めた要因のひとつとして、人材の育成と活用の巧みさをあげることができる。このコースでは、日本の企業がどのようなしくみで人材を管理しているか、現代の人材管理の主要な問題はなにかを明らかにし、新しい潮流を展望する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の経営と人材	「企業は人なり」という言葉があるが、これはわが国の経営者が共通に持っている人材観を表している。日本の経営の強みとして、組織の柔軟性とヒラの労働者の労働意欲の高さがあげられる。それは日本人の弾力的な職務観と平等主義の思想から説明できる。	石 田 英 夫（慶應義塾大学教授）
2	人材管理システム	日本企業の人材管理を、環境ー理念ー戦略ー制度・慣行ー目的・成果というシステムとしてとらえ、欧米との比較を念頭におきながら、日本の特色を説明する。人材管理の目的はヒトの能力・意欲・集団意識の向上を通じて生産性と品質をあげることにある。	同 上
3	人材の内部化戦略	日本企業の人材に関する基本戦略は「内部化」戦略であり、それは企業の人材ニーズを満たすために外部労働市場に頼ることをできるだけ少なくするという方針である。しかし近年、そのベースをなす長期的雇用慣行を修正する動きが見られる。	同 上
4	採 用 と 異 動	人材の内部化戦略の下で、企業は新卒採用を重視し、若者にとって就職は一回限りの勝負になり、いろいろな問題を引きおこす。ひとたび入社すると、比較的幅広い職務の異動が行われ、それが仕事をしながらの訓練（OJT）として重要な意味をもつ。	同 上
5	人 材 ← 開 発	人材訓練の進め方 人材育成の進め方 組織の効果性を高める	同 上
6	人 事 評 価	人事評価は昇進・昇格という賞罰目的だけでなく、適性の発見や配置のためのカギとなる。わが国の人事評価は年功重視の全人格的評価と言われるが、勤続だけでなく能力・業績も考慮され、長い目で見ると能力主義的な評価と言える。	同 上
7	昇 進 ー 管理職と専門職	低成長と高齢化のはざまで、かつてのように大多数の人が管理職のポストにつける可能性はなくなった。キャリア開発も従来のように管理職志向一本槍ではなく、専門職などのコースを設けてキャリアの多様化をはかり、多くの人の意欲づけをねらっている。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	賃金と福祉	適正な賃金水準を維持するとともに、賃金を公平に配分する賃金体系が必要である。年功賃金体系から職務給や能力主義賃金への移行が説かれてから久しいが、職能給体系が普及している。従業員福祉は高齢化と社会意識の変化への対応が望まれている。	石田英夫
9	労働時間と欠勤	わが国の労働時間は先進国の中で最も長い。有給休暇は6割程度しか消化されず、残業は恒常化しており、残業代が支払われない「サービス残業」も多いと言う。こういう事態は貿易摩擦がらみで、人間的な生活を犠牲にした競争力強化と外国から批判されている。	同上
10	労使関係と労働組合	わが国の労働組合は企業別組合をベースとしており、過去20年間、経営者主導の協調的労使関係が維持されてきた。組合組織率は低落傾向にあるが、昭和62年秋、労働界の大同団結に向けて「連合」が発足した。労働組合の活性化と交渉力の回復につながるか注目される。	同上
11	経営参加	わが国には労働者重役制のような制度こそないが、労使協議制が普及し、小集団活動など職場での労働者の参加も活発であり、経営参加の先進国だと言えよう。産業民主主義の推進と職場の活性化に向けて経営参加の深耕がのぞまれる。	同上
12	男女雇用平等	女性の職場進出はめざましい。勤続は伸び、就業意欲は向上しているが、管理職の地位にある女性は非常に少ない。雇用における男女差別を廃止し、平等な扱いを促進するための雇用機会均等法が施行され、新たな段階に入った。今後の動きが注目される。	同上
13	高齢化と人材管理	日本の人口は今後長期間にわたり高齢化がハイピッチで進む。当面60歳、更に65歳への定年延長、ピラミッド型の人口構成を前提にした年功制度の大幅修正、退職金・年金制度の再検討、従業員の高齢化に対応した職務設計と仕事の再配分など課題は多い。	同上
14	経営戦略と人材	経営戦略の優劣が問われる時代になって、経営戦略と人材計画の連動が必要になっている。戦略課題の中で研究開発と新規事業開発は最も重要なものである。それを担い、成功させる革新的な人材をいかに育成し、評価し、報いるべきか重要な検討課題である。	同上
15	国際化と人材	日本企業の国際化・グローバル化が進行している。海外での生産・販売・経営を担う人材の育成、本社での外国人の雇用、国境を超えた人材の再配置、世界的視野にたった人事・労務政策の再検討など、国際化時代の人材管理の新たな課題は多い。	同上

＝労　働　経　済　学＝(R)

〔主任講師：古郡鞆子（明海大学教授）〕

全体のねらい

このコースではまず労働力の供給、需要、賃金決定のメカニズムに関する近代経済学の基礎理論を学ぶ。

次に、現実の経済と労働市場に目をむけて、労働市場で実際に生じている諸問題を経済理論と結びつけて考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	労働力の構造と変動	人口と労働力率 労働力率の推移 労働力の中高年齢化 労働時間 労働の質	古都鞆子 （明海大学教授）
2	労働力の供給	労働と余暇の選択 労働供給のタイプ 経験的観察 社会全体の労働供給 労働時間短縮の雇用効果	同　上
3	家計の労働供給	経済主体としての家計 景気変動と労働供給 経験的観察 税制と労働供給	同　上
4	労働力の需要	労働の限界生産力 企業の労働需要 産業の労働需要 労働力需給の動向	同　上
5	技術革新と労働需要	資本と労働の代替 技術進歩と雇用変化 マイクロエレクトロニクスと雇用問題 ワークシェアリング	同　上
6	労働市場と賃金決定	賃金決定の理論 労働市場の均衡 技術者の不足 賃金決定の制度要因 賃金決定の実情	同　上
7	賃金と人的資本	経済成長と人的資本 学校教育投資 職場訓練（OJT） 特殊訓練と内部労働市場	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	失業	失業の概念 失業のタイプ 失業と欠損の関係 労働市場の構造変化 労働市場のストックとフローモデル	古都鞆子
9	潜在失業と不完全就業	失業の潜在化 不完全就業の理論 不完全就業の実態 潜在失業者の測定	同上
10	労働市場と労働組合	労働組合の機能と形態 日本の労働組合の組織状況 団体交渉 労働争議の経済モデル ストライキの発生状況	同上
11	賃金格差	賃金格差の形成要因 企業内賃金格差 企業間賃金格差	同上
12	労働市場と男女差別	差別の概念 差別の実態 差別の経済理論（性の経済学） 女子労働の将来	同上
13	労働力の移動と労働市場	労働移動 職さがしの理論 日本の労働市場と労働移動 今後の労働移動	同上
14	マクロ経済における労働	ケインズによる失業と完全雇用 労働分配率とその実態 フィリップス曲線	同上
15	経済発展と労働	実質賃金の上昇 所得分布 経済成長と就業構造の変化 高齢化社会の雇用問題	同上

＝ 企業と会計Ⅰ ＝（TV）

管 理 会 計

〔主任講師：西澤　脩（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

企業会計には、財務会計と管理会計の二大領域がある。財務会計は、財務諸表を作成し、企業外部の利害関係者に報告することを目的とするのに対し、管理会計は、企業内部の経営者や管理者に必要な会計情報を提供することを目的としている。このような管理会計の全領域にわたって最新の原理と技法について論述する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	管理会計の意義	管理会計は、経営管理者が経営計画を設定したり経営統制を実施するのに有用な会計情報を作成し提供することを使命としている。このため、会計法規や貸借理論には必ずしも拘束されず、経営管理に最も役立つ会計が最善とされ、不断に進歩・改善が図られてゆく。	西澤　脩（早稲田大学教授）
2	経営分析と経営比較	管理会計は、企業の現状分析から着手される。その用具が経営分析で、その中心は財務諸表分析である。損益計算書や貸借対照表を分析し、経営成績や財政状態を診断するには、まず各種の経営比率を算定し（経営分析）、次に標準値や前期実績と比較する（経営比較）。	同　上
3	利益計画の設定	経営分析・比較の結果を参照して、次期における目標利益を決定し、それを実現するための売上高と費用の大枠を見積る。これが利益計画の設定である。ここでは、費用を変動費と固定費に分解した後、図表や算式を使用して、費用・売上・利益の相関分析を行なう。	同　上
4	資金計画の設定	利益計画が設定できれば、その資金面の裏付けを行なうため資金計画を設定する。資金の中心は現金資金であり、月次の資金繰計画を設定する。さらに運転資金の年間計画を設定するため、資金運用表を作成し、運転資金の調達源泉と運用先及び増減額を明示する。	同　上
5	予算管理の新展開	利益計画と資金計画が設定できれば、それに基づいて詳細な企業予算を編成し、その実現に努める。これが予算管理である。旧来の予算統制では、差異分析による責任追求を偏重したが近代予算管理では、予算目標達成の動機づけを重視することが肝要である。	同　上
6	設備投資の経済性計算	経常予算のほか資本予算も編成される。資本予算の焦点は設備投資の経済性計算であり、十分な経済性を確認した上で設備投資を決定すべきである。経済性計算では、特定の投資だけを対象とし、全耐用期間中の現金流入額を割引計算する手続が新たに必要となる。	同　上
7	在庫管理の諸方法	設備投資と並んで重要なのが在庫投資である。在庫投資の管理に当たっては、棚卸しを行なって、在庫の推移と有高を把握する。次いでＡＢＣ分析を試み、Ａ在庫には経済的発注数量や発注点を設定し、科学的に管理するがＣ在庫の管理は割愛する方が経済的となる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	販売業績の評価法	販売業績は、売上高の多寡ではなく販売利益の大小で測定し評価すべきである。そのためには、販売費分析を試み、製品や地域毎に売上総利益から販売費を控除して貢献差益を算出する。このような貢献差益法を使用すると、従来の純利益法の欠陥を排除できる。	西澤　脩
9	研究開発費の管理	新製品販売によって企業成長を図るには、研究開発を重視しその管理を徹底させるべきである。そのためには、研究開発の原価計算によって研究開発費の実態を把握した後、研究プロジェクト別に計画設定と予算管理を試み、最後に費用効果分析でその効率を測定する。	同　上
10	製造原価の管理	製造原価を管理しその削減に当たるには、製造原価計算の徹底が前提となる。原価管理を推進するには、実際原価計算のほか、標準原価計算、直接原価計算、標準直接原価計算が必要となる。その外、特殊原価調査によるコストダウンもぜひ推進すべきである。	同　上
11	物流費の管理	コストダウンの宝庫として、近年物流費の削減が社会的関心を集めている。輸送費や保管費などの物流費に対して、原価計算や予算管理や採算分析を適用すると、大幅な原価削減が可能となる。その結果、売上高を急増させたのと同一の利益効果が実現できる。	同　上
12	生産性分析と成果分配	投入と産出の比が生産性である。産出を付加価値で測定し、投入を人数で把握すると労働生産性が判明する。生産性が向上し、付加価値が増加すれば、その成果を関係者に分配すべきである。特にラッカープランを活用すると、生産性向上の意欲を高めることができる。	同　上
13	ゼロベース予算の導入	低成長時代の管理方式として、ゼロベース予算（ＺＢＢ）が登場した。従来の既得権主義による弊害を打破し、グランドゼロから予算を編成する方式がこれである。ＺＢＢを導入するとゼロ思考による経営革新が断行でき、マンネリ経営を排除することができる。	同　上
14	事業部制による利益管理	分権管理の完成形態として、事業部制が開発され実践されている。事業部を「会社の中の会社」として利益管理を行なうには、事業部制会計を導入し、事業部利益の形で業績を評価すべきである。そのため、新しい利益管理技法を開発し採用することが必要となる。	同　上
15	これからの管理会計	果たして管理会計は、２１世紀に向ってどのように発展してゆくだろうか。管理会計と隣接諸学との学際研究が強力に展開されることは疑いない。情報会計、意思決定会計、人的会計などがそれであるが、最も注目されるのは行動会計－特に動機づけ会計であろう。	同　上

＝企業と会計Ⅱ＝（R）
税務会計

〔主任講師：富岡幸雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

企業の会計には、財務会計と管理会計のほかに、税務会計がある。企業の税務会計は、課税の基準となる課税所得の計算、課税財産の評価を目的としている。この税務会計の仕組みと体系を、企業の組織形態と経営行動の実際に即応しながら具体的に論述する。その際に、企業の合理的な税務対策への役立ちをも配慮していきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	企業経営と税金問題―税務会計の意義と役割―	企業の経営において税金を無視することができないとともに、我が国の企業経理の実際は、税法規定や税務上の取扱から大きな影響を受けている。税金の意味と種類、企業の経営形態と所得課税の態様、法人税制の仕組み、企業経理と課税所得の計算の関係等を説明する。	富岡幸雄（中央大学教授）
2	営業活動と税務	企業の主たる経営活動である販売・請負・役務提供により獲得される収益の計上の仕方につき、それぞれの取引形態に区分して解明する。割賦販売・延払条件付販売、建設請負、不動産の仲介斡旋報酬、技術役務の提供報酬等については、特別な税務上の取扱がある。	同上
3	財務活動と税務	企業の本業以外の活動である証券投資・金融投資・不動産投資等による収益の計上が問題になる。株式投資の法人間配当の無税をはじめ、貸付金利子、固定資産譲渡益、受贈益、債務免除益、受取保険金、還付金収入等については、課税上、特別な取扱がある。	同上
4	在庫投資と税務	企業の在庫投資である商品・製品など棚卸資産の経理は課税上重要である。商品・原材料等の購入品の取得価額、製品　半製品・仕掛品等の生産品の製造原価による取得価額の決定、売上原価を計算するための在庫品の期末決算評価の仕方が問題となる。	同上
5	設備投資と税務	企業の設備投資である土地・建物・機械装置など固定資産の経理も課税上重要である。固定資産の取得価額の決定、修理・改良等の支出の処理、通常の減価償却費の計算のほか、特別償却や投資税額控除など投資減税、特別の場合には圧縮記帳の経理処理がある。	同上
6	人事給与費と税務	企業の支出する給与は、受給者の身分・給与の支給形態・経理方法により課税上の取扱が異なる。役員報酬・従業員給料、役員賞与・従業員賞与・従業員賞与、役員退職給与・従業員退職給与のほか、退職金共済、退職年金とともに、福利厚生費の解明が必要である。	同上
7	販売促進費と税務	企業の支出する販売関係費は、その支出の態様、支出の基準、経理方法により課税上の取扱が異なる。売上割戻し・広告宣伝費・景品費・販売奨励金・情報提供料・現地案内費・諸種の会議費と、課税対象となる交際費とを区分することが重要となっている。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	特殊諸経費と税務	企業が支出し又は負担するもののうち、損金計上の時期・限度・制限につき多様なルールの存在する項目がある。試験研究費・開発費、新株発行費・社債発行費、営業権の取得費、貸倒損失、寄付金、租税公課、各種保険料、海外渡航費、損害賠償金等である。	富岡幸雄
9	引当金設定と税務	企業は適正な期間費用を計算するため見積将来費用を引当金として設定する。税法が損金設定を認めているのは貸倒引当金、返品調整引当金、賞与引当金、退職給与引当金、特別修繕引当金、製品保証等引当金である。ほかに、特別なものに価格変動準備金等がある。	同上
10	関係会社と税務	企業経営の発展は、その組織形態として、親子会社・系列会社・グループ会社を形成している。この関係グループ会社間には、特有な取引や資本取引があり、金銭・減価償却資産・土地等の賃貸借、人件費・管理費等の経費分担等をめぐる特殊な税務問題がある。	同上
11	国際活動と税務	経済の国際化の進展と国際的事業活動の拡大による国際税務問題が重大化している。海外に進出している日本企業に対する国際二重課税の排除、日本に進出している外国企業に対する課税、タックス・ヘイブンやトランスファー・プライシングの規制問題がある。	同上
12	同族会社と税務	少数の大株主により経営が支配されている同族会社はオーナー型企業が多い。この同族会社には、留保金課税・行為計算の否認・特別取扱ルールがある。会社役員間の金銭貸借、土地建物の貸借・売買など、課税上、問題となり特別に留意を要する課題が多い。	同上
13	個人企業と税務	個人企業は事業所得に所得税が課税される。事業所得の計算は、収入金額・必要経費とも法人企業とは異なっている。正確な記帳に基づく誠実な申告納税をする青色申告制度の精神と要件・特典、みなし法人課税制度の仕組み・課税上の理解が必要である。	同上
14	事業承継と税務	オーナー型企業の経営者の世代交代期を迎え企業相続に対する相続税が深刻な問題となっている。事業承継税制の創設による中小企業の相続税制の改善がなされ同族会社の株式評価方法・個人の小規模宅地評価が改正された。取引相場のない株式の評価が重要である。	同上
15	企業税制の改革問題―これからの税務会計の課題―	現行の税制・税務会計制度の問題点と改革課題を考える。現行の法人税制とその問題点、企業の経済的実態に適合するように法人税制を改革し中小企業税制と大企業税制の区分構築、税務会計制度の見直しによるタックス　エロージョン（課税の侵食化）の解消をめざす。	同上

＝ マーケティング論 ＝（TV）

〔主任講師：八巻俊雄（東京経済大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングはマーケット（市場）をつくるということばから発生した企業経営の考え方である。需要のつかみきれなくなった大恐慌以後が特に関心を集めた。その基本的考え方は消費者志向ということである。それまでの企業志向の考え方と180度異なる。本講では日本企業のマーケティングの実践を紹介しながら理論的理解も深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングの基本的考え方は消費者志向（Consumer Oriented）ということである。消費者志向はただ消費者に頭を下げ、お世辞をいうことではない。それが企業者志向とどう違うかをまず事例をまじえて説明する。	八巻俊雄（東京経済大学教授）
2	企業競争とマーケティング及びマーケティング理論史	マーケティングは需要を上回る供給体制となった資本主義社会の成熟期に生まれた。企業競争も価格競争から非価格競争へ移り、またマス・メディアの発達もあって、セールス中心の売り方から広告へ重点を移しつつある。	同上
3	マーケティング戦略、市場細分化と戦略ドメインの決定	このところ需要は高度化し、つかみにくくなっている。消費者研究を進めていくと市場は限りなく細分化されていく。地理的、人口学的、経済学的、社会学的さらに心理学的に細分し、どこに自社、及び自社製品を位置づけるか、戦略ドメインの決定をどうするか。	同上
4	需要予測と消費者行動	消費者志向の第一歩は需要予測である。マーケティングのスタート時は心理学が使われ、次いで社会学、文化人類学、意味論なども応用されるようになった。コンピュータ利用で、需要予測は大がかりになり、またこまめになっている。実例に即した需要予測を紹介。	同上
5	製品開発から商品開発まで	需要予測にもとづいた製品づくり、次いで商品開発について解説する。需要予測から想定される商品を500とすると、このうちテスト・マーケティングに回る商品が100で実際に売り出される商品は10という。製品計画と商品化とは異なる点も理解してほしい。	同上
6	マーケティング戦力とその配分	マーケティング戦力には価格、商品、流通、プロモーション、セールス、ＳＰ、広告などがある。各戦力の力を説明し、その配分をどうするか。商品のライフサイクルによって、競争条件によって各戦力の配分は変わってこよう。	同上
7	価格決定	価格を決める要因は原価と需給関係できめる。その兼ね合いに苦心する。原価以下では利潤が出ない。かといって消費者意識で高いと思われるような価格では売れない。短時日で原価を回収するか長期間で回収するかによっても価格の決定は変化する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	流通戦略	直販組織を使えればそれにこしたことはない。しかし、これには多額な費用がかかり、販売店が利益を確保できるかがかぎを握っている。合販組織ではどう自社製品のシェアをふやすかがかぎを握っている。いずれにしてもその維持、拡大をどうするかが問題である。	八巻俊雄
9	セールスマン活動の人間関係学	マーケティング戦力の中で最も古くから存在し、かつ基本をなす戦力である。セールスマン配置、管理とセールスマン活動とに分かれる。セールスマン活動の基本は人間関係である。初めての顧客を百年の知己にしてしまう技術は一流セールスマンの秘伝でもある。	同上
10	ＳＰ．イベント	マーケティング戦力の中で人間（セールス）と物（広告）の中間にあって、強力な役割を果たす活動がＳＰ（セールスプロモーション）である。おまけ（プレミアム）サンプリング作戦、マネキン、展示会、見本市など豊富な手段が使われている。	同上
11	広告、クリエイティブと媒体選択	広告はターゲット（対象）をきめてからスタートする。ターゲットに向けて商品の持っているコンセプトをどう伝えていくかが基本である。伝える手段は媒体が担う。これにはマス媒体からミニ媒体まで多様である。	同上
12	顧客管理とアフターサービス	マーケティングは顧客志向の経営である。商品を売ったあとどう顧客のロイヤリティを保持していくかが問題である。耐久財と包装商品では対応策が異なるが、それだれ基本は顧客志向ということである。	同上
13	マーケティング組織と人材	以上のようなマーケティングを展開するうえにどのような社内外の組織を作っていったらよいか。販売会社をメーカーと同一にした場合の利害得失、作戦部門と営業部門のウエィトは、また営業部門は商品別か顧客別かなどを検討する。	同上
14	マーケティング法	マーケティング活動はシェア拡大を目ざす経済行動でもある。したがってマーケティング活動は独占禁止法、その下部法の景品と表示に関する法律の規制を受ける。ほかに特許法、商標法、あるいは業界ごとに配慮しなければならない法規制、自主規制がある。	同上
15	マーケティングの新潮流	エレクトロニクスとコンピュータの発達によって、消費者をとらえる方法、これにアプローチする方法も大がかりになった。このためのデータ・ベースの利用、処理技術など、各項でふれられなかった問題についてふれる。ほかに無店舗販売、ニューメディアを扱う。	同上

＝ 経 営 組 織 論 ＝(R)

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営組織の構造と行動に関する諸問題を理解してもらうよう努める。全体の前半部分は主として理論的命題の説明に充当し、後半部分は主として実践的課題の分析に向けている。現代が組織社会であることに留意することとともに、組織が変動する環境に主体的に適応する動態的システムであることを重視する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経営組織の意義	個人と協働 協働システムと組織 経営と経営組織 経営組織の３要素 ３要素と組織の諸問題領域 組織の環境適応	森 本 三 男 （青山学院大学教授）
2	経営組織論の発展と系譜	理論展開の潮流 各種の組織理論(1) ― 古典的組織論 各種の組織理論(2) ― 人間関係論 各種の組織理論(3) ― 現代組織論 各種組織論の分類	同 上
3	経営組織の構造(1) ― 設計原理	組織構造の意義と次元 組織原則(1) ― 課業分担の設計原理 組織原則(2) ― 伝達システムの設計原理 組織原則に対する批判 組織原則から組織戦略へ	同 上
4	経営組織の構造(2) ― 組織形態	組織単位と組織形態 経営組織におけるラインとスタッフ 組織形態の発展的分類 各種組織形態の特質 現実の組織形態	同 上
5	経営組織の行動	組織行動の意義 意思決定 リーダーシップ 組織影響力 葛藤とその解決	同 上
6	経営組織と環境	外界と環境 組織環境の構成要因と構造 環境主体の重要性 環境適応行動の特質	同 上
7	経営組織の有効性	組織有効性の意義と展開 組織有効性の目標モデル 組織有効性のシステム・モデル 組織有効性と組織開発 日本における組織開発 組織開発から創造性開発へ	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	経営組織の成長	組織成長の意義 組織成長の規模的接近 組織成長と組織学習 組織成長の細胞分裂モデル 組織成長の構造均衡モデル(1) 組織成長の構造均衡モデル(2) 組織成長の変容モデル　　組織成長の鬼火モデル	森本三男
9	経営の組織戦略	経営組織と戦略 経営戦略と組織構造 設計戦略(1) — 技術と組織構造 設計戦略(2) — 規模と組織構造 組織間関係戦略 統合化戦略	同　上
10	経営組織の環境適応	組織環境の変化の様相 OAと経営組織 情報プロセッシング・アプローチ 組織内諸制度の変革 キャリア開発	同　上
11	経営組織の中枢機能	組織の中枢機能 経営者組織としての取締役会 経営執行委員会(米)と常務会(日) 本社の機能と組織 研究開発組織	同　上
12	経営組織の動態化	組織動態化の意義 組織の簡素化 — 課制廃止 組織の弾力化 — プロジェクト組織 組織の多元化 — マトリックス組織	同　上
13	経営組織の人間化	組織の非人間化現象 職務設計の人間化(1) — 職務拡大 職務設計の人間化(2) — 職務充実 小集団活動 意思決定参加	同　上
14	経営組織の国際比較	国際比較の意義と方法 定性的差異分析による国際比較 主観的測定手段による国際比較 客観的測定手段による国際比較 普遍理論の命題による国際比較 総合的国際比較	同　上
15	経営組織の国際化	経営の国際化と組織問題 国際化による組織構造の変容 グローバル構造と経挙焼略 日本的組織特性 日本的経営の海外移植	同　上

＝経　営　科　学＝(R)

〔主任講師：大澤　豊（摂南大学教授）〕

全体のねらい

企業が生産、販売、財務などのそれぞれの領域において合理的な意思決定をしようとすれば、企業経営を取りまく経済環境をはじめ、その決定に影響を与えるさまざまな要因を分析し、それらを表現する数量的なモデルを構築し、その上でいろいろな代案を検討することが必要である。この種のモデルがどのように役立つかを、数値例を使って、実際に電卓などを利用して計算しながら、具体的に議論していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業経営における意思決定の科学	「経営科学」という言葉は、一般にはオペレーションズ・リサーチ(OR)と同義語として扱われることが多い。本書では企業行動の経済分析も含めて、企業経営における意思決定の経済的側面に重点をおいたモデルに焦点を合わせ、数値例を実際に計算しながら理解していく。	大澤　豊（摂南大学教授）
2	企業活動の経済モデル	いく種類かの生産要素を結合することによって製品が生産され、市場に供給されていく。企業活動を経済学的立場から考察する上でのもっとも単純化されたモデルをとりあげ、そこに含まれる基本的な概念を明らかにする。そして利潤最大化のための「限界分析」を検討する。	同　上
3	生産関数と資金制約	生産関数が与えられれば、いろいろな生産量に対応して最適な生産要素の投入量がきまる。実証分析でしばしば使われるコブ・ダグラス型の生産関数を導入し、その場合の費用関数を数値例によって計算する。さらに資金制約がある場合についての最適政策を考える。	同　上
4	広告と研究開発	需要関数に価格だけではなく、広告費の支出による影響をも含めてモデル化することも可能である。広告投資により製品の差別化を図り、あるいは研究開発投資によりコスト・ダウンを図ることは、企業が需要関数や費用関数を自社に有利になるように制御するための行動である。	同　上
5	企業の経営方程式	経営方程式とは、企業が総資産回転率、内部留保比率、売上高成長率、資本金比率についてある一定の経営政策を継続的に採用したときの、その企業の自己資本比率を与える関係式である。これにより長期経営計画立案に際しての変数間の整合性をみることが可能である。	同　上
6	線形計画法Ⅰ ―線形計画モデルの構成	現実の姿を数量的モデルとして表現しようとするとき、いくつかの仮定をおいた上でモデルがつくられることになる。線形計画モデルの前提を示し、図による解法を説明する。	小山昭雄（学習院大学教授）
7	線形計画法Ⅱ ―計算による解法	線形計画問題の基本的な解法である単体法の考え方を数値例によって示す。それが単体表とよばれる計算表で計算されることを説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	線形計画法Ⅲ ── 双対性とその意味	与えられた問題に双対問題とよばれる別の問題を結びつけ、両者の間の関係を説明し、双対問題のもつ意味を考える。	小山昭雄
9	線形計画法Ⅳ ── 輸送問題	線形計画問題の１つの特殊なケースである輸送問題について、その定式化の仕方と解法を説明する。	同上
10	ゲームの理論Ⅰ ── ゲームの一般的構造	競争条件下での利害の対立する状況を分析するために、どのようなモデル化が可能であるかを考える。	同上
11	ゲームの理論Ⅱ ── ゼロ和２人ゲーム	もっとも基本的なゼロ和２人ゲームについて、合理性の判断基準をどのように選ぶべきかを考え、その基準のもとでどのような帰結が得られるかを示す。	同上
12	ベイズ決定理論Ⅰ ── 不確実な条件下での意思決定	環境条件に不確実性が存在する場合、そのもとでの行動基準はどのように選ばれるべきかを考える。	同上
13	ベイズ決定理論Ⅱ ── 情報のもつ価値の評価	環境条件にかかわる情報が新たに追加されるとき、その情報がどれだけの価値をもつと評価されるべきかを考える。	同上
14	シミュレーションⅠ ──モンテ・カルロ法	いろいろなタイプのシミュレーションの技法の適用領域を分類した上で、モンテ・カルロ法の応用例について自分で計算することを試みる。円周率を導出するための計算と待ち行列のシミュレーションの問題をとりあげる。	大澤豊
15	シミュレーションⅡ ── システム・ダイナミックス	企業、産業あるいは一国の経済など、社会システムの機能を記述し、分析する目的で、システム・ダイナミックスとよばれる手法が登場してきた。簡単な在庫管理システムを例に、どのような考え方でモデル化が行なわれるかを理解することを試みる。	同上

＝生　産　管　理＝（TV）

主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）
横山雅夫（福島大学助教授）

全体のねらい

生産に当たって、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応え、また自動化にも対応できるように、生産とその管理活動の体系を適切に計画し運用していく考え方、技法を説く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生産管理の体系	生産とは何か。基本的な生産の見方である過程（資材調達、工程稼働、製品産出）、特性品質、数量、時間、金額）、段階（企画、設計、計画、作業、統制）の各概念を説明し、それらを組み合わせて体系的に生産活動をとらえ管理していく考え方と仕組みを示す。	秋庭雅夫（東京工業大学教授） 横山雅夫（福島大学助教授）
2	生　産　方　式	生産活動の体系に基づいて各種の生産方式を区分する考え方を示し、それぞれの生産方式について管理上の特徴を説く。さらに、これから生産方式がどのように移り変わっていくのか、その趨勢と現在の課題を示す。	秋庭雅夫
3	製品企画と品質管理	市場の品質に対する要求を技術的、統計的に分析し、製品に何が期待されているのかを導き出す製品企画の方式とその結果を示す。さらに、そのような品質の製品をどのように造り出していくのか、品質管理の基本と管理図法および抜取検査の考え方、手法を示す。	同　上
4	工　程　分　析	工程図記号と、それに基づく各種工程図（工程計画図、工程分析図）の作り方を説明し、これを生産工程の分析、設計、改善にどのように活用するのか、その方法を示す。	同　上
5	作　業　管　理	適切な作業方法を設計するための動作分析および作業分析など方法技術と動作経済の原則、標準作業時間を設定するための既定時間法および標準資料法など作業測定、それらに関連して複式活動分析の考え方と活用の仕方を示す。	秋庭雅夫 木村敏郎（IE・生産管理事務所長）
6	生　産　計　画	生産計画における意思決定問題について線形計画法によるモデル化を取り上げ、具体的解法として図式解法およびシンプレックス法の仕組みと解の求め方について示す。	横山雅夫
7	日程計画1（ジョブ・ショップ・タイプ）	複数の仕事をいくつかの機械で処理するときの日程計画のたて方について説明する。そのさいに用いられるガント・チャートにより日程問題の意味を説明し、またジョンソンおよびペトロフの解法を示す。	秋庭雅夫 横山雅夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日程計画2（プロジェクト・タイプ）	プロジェクトに含まれる仕事の順序関係が与えられたときに進度管理を行う手法としてPERT・CPMを取り上げ、アロー・ダイヤグラム、日程計算、クリティカル・パス、人員配置、3点見積り、時間短縮に関する方法とその意味を説明する。	秋庭雅夫 横山雅夫
9	ライン・バランシング	流れ作業において、作業負荷を平準化、効率化するためのライン・バランシングの基本について説く。また、ライン編成効率、山崩しの考え方とともに、列挙消去法および位置重みづけ法による解き方を示す。	秋庭雅夫
10	設備能力の決定	設置された設備能力と到着した仕事の状況から、その処理と待ちとの関係をモデル化し、その一般化を図る。さらに設置能力の水準が仕事の待ちに与える影響をモンテカルロ・シミュレーションによって分析する方法を示す。	同上
11	資材調達	資材調達に関する各種発注方式および経済的発注数量の考え方と決め方について示し、それと関連して、在庫されている理由を体系的に明らかにして在庫ゼロ方式への取り組み方を説く。また、外注とその目的について考える。	同上
12	多段階の生産・流通計画	生産、流通を多段階からなる品物の流れとしてとらえると、小売店での需要があるからこそ生産が必要になってくるというように、各段階での品物の流れは互いに従属している。生産・流通計画を効率的に行うためには、その従属性に着目した概念が不可欠であり、それに基づく計画方式・環境条件について説く。	圓川隆夫 （東京工業大学教授）
13	コンピュータ労働科	コンピュータを利用して行う作業に対する問題点、要因およびマン―マシン・システム実現の方法を説明する。さらに、このようなコンピュータ作業を設計・管理するための方法として、コンピュータ労働科学の活用の仕方を示す。	伊藤謙治 （東京工業大学助手）
14	生産合理化	生産合理化の総合目標を設定し、その目標を生産各部門に重点的に展開して具体的な個別目標を決め、そのための施策を生産活動全般にわたって求め、生産性を体系的に向上させていく取り組み方を示す。	秋庭雅夫
15	生産自動化	生産自動化の傾向と、トランスファ方式および群管理方式における自動化への取り組み方ならびに自動化機器とその活用について示す。さらに自動化の経営に与える影響とそこでの問題点について説く。	秋庭雅夫 下地脩亮 （㈱未廣技研）

＝ 経営分析と財務管理 ＝(R)

〔主任講師：小林靖雄（元放送大学副学長）〕

全体のねらい

企業の資本調達および運用の管理という広い立場で財務管理を扱う。経営分析についてもこの財務管理との関連で考察する。基礎的、原理的考察を中心とするが、随所で、日本の企業の財務問題にもふれて説明する。本科目の履修には、会計学に関する基礎知識をもっていることが望ましい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	財務管理の意義と経営分析	財務管理には、資本調達および処分という財務活動の管理という狭い解釈と、資本運用全体にわたる管理という広い解釈があるが、本講義では両者を総合して財務管理とする。その場合、内部管理目的の経営分析はその一部分となる。なお近年の財務的意思決定を中心とする新しい財務管理の研究もとり込んで説明し、またわが国企業の財務構成の特徴を、製造業と卸売・小売業とについて概観する。	小林靖雄（元放送大学副学長）
2	企業財務の基本原則	企業財務に関する古典的原則を、財務流動性（財務均衡）の原則、財務安全性の原則、財務経済性の原則について説明し、そのうち財務安全性と財務経済性の要求との調整について、資本コストと財務危険との調整として論ずる。	同　上
3	長期資本の調達	株式会社企業における長期資本の調達について、株式、社債、長期借入金による資本調達につき、その内容を説明する。	同　上
4	短期資本の調達と資金繰り	短期資本の調達について、まず正味運転資本の概念を説明し、ついで短期借入金、買掛金、その他の短期負債による資本調達を説明する。さらに資金予算の編成および資金運用表について概説する。	同　上
5	内部資本調達	内部資本調達としては、留保利益と毎期の減価償却費が主要なものであるが、特に減価償却費に相当する部分の資金化とその設備投資への充当による“ローマン・ルフチ効果”について、その内容を説明する。	同　上
6	資金の時間的価値	資金が時間的価値を持つ理由を述べ、現在価値と終時価値の計算方法を述べる。ついで、資金の流れの時間的調整を行う方法を取り上げ、この資金の流れが無限に続く場合を取り上げる。	古川浩一（東京工業大学助教授）
7	設備投資の意思決定(1)	確実性の状況の下での設備投資の経済的評価の方法として、原価比較法、会計的利益率法、回収期間法、現在価値法、内部収益率法、収益性指標法の算定方法を取り上げる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	設備投資の意思決定(2)	設備投資は、その結果を必ずしもはっきり経済的に評価しにくい問題をもっている。そこで、不確実性と関連をもつ回収期間法を再検討し、リスクに関連する情報を設備投資の評価の中にどのように取り入れるかを検討し、予算制約がある場合の問題を取り上げる。最後に、設備投資のもつ戦略的な意味を検討する。	古川浩一
9	経営分析の意義と発展	経営分析の発展を概観し、その進め方を述べる。そして、経営分析の重要な資料である貸借対照表と損益計算書とについて、その基本的な特性を検討する。	同　上
10	収益性と生産性分析	企業の収益性を分析するために、各種の売上高利益率の求め方と意味を取り上げ、ついで各種の資本利益率の求め方と意味を述べる。また、生産性分析の方法を述べる。これらの方法はわが国の資料を用いて説明される。	同　上
11	財務流動性と安全性分析	企業の支払能力を短期流動性と長期流動性ないし安全性の分析方法として取り上げ、各種の比率の求め方とそれらの意味を述べる。ついで、回転率と回転期間の分析方法に触れる。	同　上
12	企業評価と資本市場	企業が資本市場でうける評価は企業の資本調達能力にも関連する。企業が資本市場でどのように評価されるかを、完全市場という分析のための仮定的な市場を想定して検討し、企業の資本構成がその価値にどのような関係をもつかを述べる。	同　上
13	企業合併と財務	企業合併は企業間の提携よりも密接な結合で、当事者企業にメリットを与えると同時に、財務面でも難しい問題も投げかける。	村松司叙 （成蹊大学教授）
14	為替レート変動と国際財務	今日では多くの企業が国際的活動を営み、そこで最初にぶつかるのが外国為替レートの変動問題であるが、この問題をとりあげる。	同　上
15	ま　と　め	前章までの諸考察をまとめ、特に諸外国との比較により、日本の企業が直面し、かつ解決すべき財務管理上の問題点について説明し、まとめとする。	小林靖雄

＝財　務　会　計＝（TV）

〔主任講師：若杉　明（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

企業の実施する会計は財務会計、管理会計および税務会計から成る。財務会計は、企業が株主や債権者などの利害関係者に、受託責任等に基づいて、その経済的意思決定に役立つよう、必要な会計情報を測定・伝達する領域である。この財務会計の社会的意義、仕組み、原理などにつき、基礎にある考え方にふれながら述べてゆく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業会計と会計学	企業の情報測定・伝達システムである企業会計がどのような性格を有し、社会的役割を果たしているかについて述べ、さらに企業会計の学である会計学の体系を明らかにして、そこにおける財務会計の位置づけを行う。	若杉　明（横浜国立大学教授）
2	企業内容開示制度	財務会計は企業内容の開示制度にほかならない。そこで開示制度を構成する商法会計および証券取引法会計に関し、その基礎原理、目的、理論的性格などについて述べる。	同　上
3	企業会計の働き	企業会計が社会的制度として存在意義をもつのは、これが種々の職能を果たしうるからである。そこで会計のもつ、測定、伝達、財産保全、計画設定、業績評価、社会的統制等の各種の職能について取扱う。	同　上
4	一般に認められた会計原則	財務会計は、法令に基づいて行われる制度会計を中核とする。制度会計において法令に定めのない部分は一般に認められた会計基準に準拠することになっている。そこでこの会計基準の性格、役割り、具体的内容等について明らかにする。	同　上
5	財　務　諸　表	財務会計において、企業の財務内容の開示は財務諸表、すなわち貸借対照表、損益計算書などによって行われる。財務諸表の性格、役割り、体系、限界などについて取扱う。	同　上
6	収益力の測定と損益計算書	企業の財務報告の内容は多様であり、その１つの柱として企業の収益力の表示がある。企業の収益力は各種の利益数値によって表される。損益計算書は企業利益の算定表示を役う財務表であり、そこでこの計算表の性格構造、構成等に言及する。	同　上
7	期間損益計算の構造と諸原則	損益計算書において行われる利益の計算表示は、一定の理論に基づく計算構造と計算原理に基礎づけられている。そこで利益計算構造の特質と計算原理について述べ、またこれらの原理の相互関連にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	財政状態の測定と貸借対照表	企業の財務報告の柱の１つとしての企業の財政状態の測定・伝達に言及する。そしてそのための財務表である貸借対照表の性格、構造、構成等について明らかにする。	若杉　明
9	資産の貸借対照表価額の算定	貸借対照表に記載される資産は、一定の評価原則に基づいて、会計数値として表される。そこで資産の評価の基本原則について述べ、さらに個々の資産ごとの評価方式に関する商法や会計基準の規定を解説する。	同上
10	減価償却	固定資産は、時の経過、経営目的のための使用等によってその価値を次第に減少してゆく。そこで固定資産の取得原価は減価償却の方法によって、一定の会計期間に配分される。この減価償却の特質、具体的方法、これのもたらす効果等について述べる。	同上
11	繰延経理	会社の創立費、開業費、研究開発費などの諸支出で相当額にのぼるものは、これをすべて当期の費用に計上すると、当期の収益力の表示がゆがめられることがある。そこでこのような場合にこの支出を資産化して、数期間に費用配分する方法が選択適用される。	同上
12	引当経理	将来の期において実現する費用や損失などで、その原因がそれ以前の期に生じているものについては、関連する期に見越計上される。このような引当経理とよばれる会計処理法の性格、目的、効果等に言及する。	同上
13	資本金と資本剰余金	企業の元手たる資本が調達されたり、他の形態に転換される場合の会計処理法、貸借対照表における表示法などについて明らかにする。具体的には資本金と資本剰余金をめぐる会計上の諸問題について取扱う。	同上
14	利益処分	企業の獲得した利益は、法人税等の支払い、配当金、役員賞与などとして企業外に流出するが一部は社内に留保されて、将来の資金的必要に備えられる。そこで利益処分とこれに関する会計処理に言及する。	同上
15	財務諸表の見方	今日の企業は個々に独立の会社がグループを形成して一体となって経営活動を展開する。かかる企業グループの財務報告のための連結財務諸表制度につき、その特質、計算原理、開示方法などについて述べる。	同上

＝数理計画法＝（TV）

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）
横山雅夫（福島大学助教授）〕

全体のねらい

数理計画法と総称されている多くの技法のうち、特に線形計画法（LP）について講述する。具体的には、その根源的な計算手法を解説するとともに、応用例も数多くとりあげＬＰの有効性を認識させる。あわせてＯＲや経営科学における基礎的知識の習得にも寄与しようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	数理計画法概説	計画問題における数理的アプローチの内容を述べるとともに数理計画法の全般を概説する。	加瀬滋男（放送大学教授）
2	ＬＰの具体例	若干の解説的な問題と、それらのモデルを例示し、ＬＰ応用の可能性の大きさを説く。	横山雅夫（福島大学助教授）
3	ＬＰの構造	ＬＰの各種形式を列挙し、さらに平易な図解によりＬＰの構造に対する十分な理解を誘導する。	同上
4	シンプレクス法〔1〕	シンプレクス法の核心を成すシンプレクス表の意味と作成につき基礎的概念を略記する。	同上
5	シンプレクス法〔2〕	シンプレクス法における計算の意義と実際を詳述し、シンプレクス法の理解を助ける。	同上
6	各種の特殊解法	簡易シンプレクス法などについて略説し、場合における解法の実際を呈示する。	同上
7	2段階シンプレクス法	ＬＰの応用可能範囲を広げるための２段階法の根拠と手法を説き、ＬＰの妙味を紹介する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	応用例	ＬＰを効果的に活用している数社の実態を紹介し、ＬＰに対する理解を深める。	横山雅夫 高井英造 （三菱石油㈱ 企画二部次長） 加瀬滋男
9	実施上の検討〔1〕	現実の問題に最適解を適用するに際し、留意すべき若干の事項を論ずる。	加瀬滋男
10	実施上の検討〔2〕	最適解そのものを再検討する方法を考察し、あわせてシャドウプライスを解明する。	同上
11	モデルの改変	問題自体のかなり大幅な変転に即応するための便法を理論的な立場から探求する。	同上
12	双対問題と整数解問題	双対性を介して最大化問題と最小化問題の関連を説き、計画法にも言及する。	同上
13	特殊問題の解法	割当問題を含む輸送問題の解法を述べ、あわせてネットワーク問題の概要にふれる。	同上
14	企業における数理計画法の実際	石油精製問題における検討料により、シャドウプライスの有用性を立証する。	高井英造
15	総括	補遺的事項ならびに数理計画法の未来像等につき、各講師がそれぞれの意見を開陳する。	加瀬滋男 横山雅夫 高井英造

＝産　業　と　情　報＝(R)

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）

全体のねらい

近時企業環境の複雑化に伴い、経営に関する情報の重要性は、以前にも増して広く認識されるようになった。他面、情報の処理や伝達の技術も、文字どおり日進月歩の様相を呈しつつある。この時流に沿い、企業内外の技術情報を中心に産業と情報の関連を論述する。また随時、一般産業人の情報に対する望ましい心構えにもふれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	情報概論 (1) －情報とは何か－	情報一般、ビジネス情報についての若干の特徴を述べ、本講義を進める上でのイメージとコンセンサスの確立を試みる。	加瀬滋男 （放送大学教授）
2	情報概論 (2) －情報活用－	情報の探索と収集の具体的方法、収集から活用を経て、保管・管理に至るまでの実際的手法を解説する。	同　上
3	情報の収集 (1) －技術情報の種類－	技術情報の種類を、形式・生産場所・加工度から分類し、1次情報の種類と特徴に関しては、特に詳しく講述する。	同　上
4	情報の収集 (2) －情報調査－	情報調査の要点を論ずるほか、2次・3次情報の活用法を示唆する。主な総合情報機関や各種の文献・資料も紹介する。	同　上
5	情報の収集 (3) －情報検索－	情報検索の発展過程と内実につき説き、次に情報検索に関連してデータベースの基礎的事項を略説する。	同　上
6	情報の創出 (1) －情報産出の意義－	情報の研究・開発に対する個人や企業の責任の重要性を強調し、研究者や技術者も情報流通活動に積極的参加を促す。	同　上
7	情報の創出 (2) －新情報の産出例－	最近新素材として脚光を浴びているファインセラミックスの重要特性である曲げ強さデータの解析を例に、新情報の創出を解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報の創出(3) －関連情報への展開－	前章で提起された新しい情報から、関連情報の産出へと展開されて行った事例を呈示する。	加瀬滋男
9	オフィスオートメーション(1) －ＯＡの内容とその影響－	ＯＡの目的・対象・手段について述べ、ＯＡの目ざすところを明らかにする。日米のＯＡの相違およびＯＡの影響にも話を進める。	魚田勝臣 （慶応義塾大学非常勤講師）
10	オフィスオートメーション(2) －ＯＡ機器の活用－	ＯＡ機器の主なものを概説し、通信手段・通信規約の標準化にもふれる。また、ＯＡへのアプローチの方法について解説する。	同上
11	オフィスオートメーション(3) －ＯＡの近未来像－	ＯＡ機器の変化の傾向について論じ、さらなる飛躍のために基礎的な研究の確立と日本独自のＯＡの展開の必要性を強調する。	同上
12	情報の伝達(1) －データ通信－	各種データ通信サービスの要点を概説し、電気通信事業法を解説してから、最近とみに叫ばれてきたＶＡＮ（付加価値通信網）にも言及する。	加瀬滋男
13	情報の伝達(2) －行政面における電気通信の長期構想－	電気通信システムに関する国（郵政省）の構想を要約し、あわせて情報通信産業の充実・強化についての電気通信審議会による答申の概要を解説する。	同上
14	情報産業(1) －産業人と情報産業－	産業人が情報産業を理解することの意義を強調してから、情報処理技術者試験を例示して読者の情報へ向けての関心を高め意欲を鼓舞する。	同上
15	情報産業(2) －産業の情報化と情報の産業化－	総合商社の新情報商社への転針を例に新情報産業の胎動を瞥見するほか、諸産業の情報部門にふさわしい人材の育成にも論及し、本講義の趣旨を総括する。	同上

＝産　業　と　企　業＝（R）

〔主任講師：黒沢一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

マクロな水準で認識される産業の仕組みの形成と発展と、マイクロな水準の行動主体である企業の活動との相互作用関係域をユニークな対象として考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業ー企業系の諸問題への接近方法	産業ー企業系が多元・重層構造をもった実体であることを述べ、これを把握するための方法を論ず。	黒　沢　一　清（放送大学教授）
2	国民経済ー産業系の計量システム；（その１）一般的フレーム・ワーク	国民経済の再生産構造を、各種産業の再生産システムとその構成、及び国民総生産が人口１人当り所得へと変換されるというこれら二つのサブ・システムをもって構成する。これをCILINシステムと呼ぶ。	同　上
3	国民経済ー産業系の計量システム；（その２）日本の例の計量分析	CILINシステムの日本のケースへの応用を示し、この体系の産業ー企業系問題における理論的、実践的意義を考える。	同　上
4	国民経済ー産業系の計量システム；（その３）国際比較	CILINシステムの国際比較への応用を示し、一国の経済的・産業的発達へのマクローセミマクロな水準での戦略情報を考える。	同　上
5	産業ー企業系を連結する付加価値生産性；（その１）理論	国民経済、産業及び企業を貫く経済成果指標である付加価値によって、マクローセミマクローマイクロを連結する生産性分析の体系を考察する。まず本章では一般理論を解明する。	同　上
6	産業ー企業系を連結する付加価値生産性；（その２）実態分析例	前章で与えられた理論を日本の経験に応用して、実践上の諸問題を提起して、ここにおける産業ー企業系分析を試みる。	同　上
7	産業ー企業系を連結する生産性・収益性分析システム；（その１）理論	総コスト収益性及び総投入生産性を結合したシステム（AIPRシステム）をもって、産業水準と企業水準での、収益性と生産性とをシステマティックに分析する方法を解説する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	産業―企業系を連結する生産性・収益性分析システム；（その２）応用	AIPRシステムを日本のケースに応用し、さらに日本と米国の幾つかの工業に適用し、これによって、日本における産業－企業系問題の基本問題のひとつを考察する。	黒　沢　一　清
9	産業と企業の国際競争力の構造と分析；（その１）巨視的特性	日本の製造業の生産性と収益性の国際水準での比較を行い、そこにみられる日本の産業的・企業的特性を浮き彫りにする。まずは巨視的な諸特徴を考察する。	同　上
10	産業と企業の国際競争力の構造と分析；（その２）微視的特性	前章にひきつづき、企業経営水準の諸特徴を考察する。	同　上
11	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その１）一般的構造	現代企業の生産力構造を解明し、とりわけ未来的展望において重要になる知識集約型スタッフ（ＫＩＳ）の生産性の構造と機能を考察する。	同　上
12	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その２）経営資源の構造	企業生産力構造の基礎である経営資源の構造を考察する。企業－社会系の土台である。	同　上
13	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その３）経営者及び管理者生産性の構造	企業生産力構造のサブシステムとしての、経営者生産性及び管理者生産性の構造を考察する。	同　上
14	企業生産性と本社機構の生産性の連結モデル	本社はＫＩＳによって担われる企業経営の中枢機構である。本章ではこの本社機能の生産性を大局的＝統計的に把握する一方式を考え、これをもって日本と米国の製造業の状況を比較する。	同　上
15	プロダクティヴィティ・スキーム；本講義の総括	一国の経済・社会の発達は、その国民の福祉のみならず、また国際社会のそれの、維持と向上に寄与するものでなくてはならない。こういう理念をもってする政策と連動のシステムを考察して、本講義の総括とする。	同　上

＝産　業　と　資　源＝（R）

〔主任講師：黒沢一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

産業と資源との交互作用域に発生している諸現象をどのように理解し、そしてその問題の解決のために、どのような方針を打ち出すことができるかを考える。この複雑きわまりない現象の背後に横たわる仕組みを明らかにし、それの動態を支配する法則性を解明し、産業活動における資源問題解決の洞察を与えようというのである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業―資源系研究の方法	産業資源問題とは一般にどういうものであるかを概観し、この問題を扱う学問的立場の特徴を述べる。メタ資源論がその一般的な立場である。	黒沢一清（放送大学教授）
2	産業―資源系の構造―その1：構造へのヴィジョン	世上一般にみられる資源問題の取り上げ方を吟味して、我々のメタ資源論のヴィジョンを示す。	同上
3	産業―資源系の構造―その2：メタ産業論のカテゴリー体系	我々のメタ資源論がその上に展開される理論的な土台としての、産業社会への最も根源の水準を認識するカテゴリー体系を与える。	同上
4	産業―資源系の構造―その3：資源、資源論のためのメタ構造とそのカテゴリー体系	前章の方法をより具体的に、資源問題の背後に横たわるメタ構造に応用し、展開する。	同上
5	産業―資源系の構造―その4：技術と資源の構造連関(1)	産業資源とは、産業の組織的・技術的状態を媒介として把握された資源である。そこで技術の構造及び資源の構造が解明されなければならない。	同上
6	産業―資源系の構造―その5：技術と資源の構造連関(2)	前回にひきつづき、資源概念の構造的内容の認識を深め、それによって資源問題の意味理解に進む。	同上
7	資源問題の基礎を支配する諸原理と関係	資源問題を支配する原理の複合性が、ある種の階統的な構造をもって仕組まれていることを解明する。エントロピー増大法則、エコロジー法則、人間社会を規律する法則などの関係である。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	無機系鉱物資源と産業	無機系鉱物をめぐる科学・工業・産業及び市場・消費の関係の仕組み、そしてそこに生起する産業資源問題を論じる。	黒沢一清
9	地下埋蔵の炭化水素系資源と産業	石炭・石油・天然ガス等の地下埋蔵の炭化水素資源をめぐる産業資源問題を論じる。いわゆる石油危機問題をどう理解すべきであるか。	同　上
10	エネルギー資源と産業	産業の血液といわれるエネルギーの問題を、化石燃料問題・大自然エネルギー利用問題等に即して論じる。	同　上
11	生物資源と産業	生物圏は、人間の生物的存在を支える直接の土台である。この生物再生産の循環系の中での、生物資源ー産業系の仕組みを考察する。	同　上
12	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその１：経営生産力と経営資源	企業という産業の行動主体の立場での資源とは何であるかを考察する。まずは経営生産力と経営資源との構造を解明する。	同　上
13	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその２：経営体の適応運動	産業水準及び社会の水準で生起している資源・エネルギー問題への企業の適応行動の姿を、経営者層の意識調査を通して考察する。	同　上
14	資源と産業構造	資源と産業構造とは、資源問題を媒介に相互に作用しあう。第２次大戦後の事情のもとに展開した資源多消費型産業構造が、いまや資源節約型、高次加工型産業構造に転換しつつある。そこに生まれている基本問題を考える。	同　上
15	総　　括	以上14回の講義を総括する。我々の研究方法の背景にあるヴィジョン、国際関係の中での日本の位置づけと債務、資源問題と環境問題の統一的理解。そして国土資源と国民資源という民族の主体性を支える資源への我々の実践、などがその軸である。	同　上

＝産業と環境＝（TV）

－産業－環境系の構造論的解明－

〔主任講師：黒沢一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、産業とそれの環境との相互作用域を対象として、そこに生起する現象を構造的に把握し、問題の解決への洞察を得るための基礎能力を養うことを課題としている。産業と環境の問題を、産業にとっての環境としてだけでなく、同時に、むしろ人間にとっての環境の交叉域を、産業と環境というフィールドで問題にしようというのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－環境系研究の方法	産業と環境との相互作用域に生じる現象をその日常性において観察し、我われの研究対象の特徴を示し、かつはこのような現象を研究することの現代的な意義を考える。	黒沢一清（放送大学教授）
2	産業社会のメタ構造	産業－環境系が、産業社会の中に占める構造的な位置を示し、これを把握するための方法としての構造論の概要を示す。まず最初として、産業社会の根源（メタ）構造を規定する。	同上
3	産業社会のメタ原理	産業社会のメタ構造の規定を受けて本章では、そうしたメタ構造を規律している原理、すなわちメタ原理を論じる。	同上
4	産業社会の一般構造	産業社会のメタ構造の内容を、多元・重層構造として描き、この一般的な意味内容を説明する。	同上
5	S－Fスキームの論理と操作	実体－構造－形態－機能という4つの次元をもって構成されるS－Fスキームの論理と、これをオペレーションする方法を述べる。	同上
6	産業－環境系の構造	以上に議論されてきた産業社会の一般構造をふまえて、いよいよ我われの産業－環境系の構造を確定しなければならない。ここでは人間－環境系の基礎の上に、この系と産業－環境系とが統一される構造が示される。	同上
7	意味論的環境	環境を産業・人間にとって外的なモノ、と見る段階から、本章では、それを人間のタームで意味理解されたモノと見る、つまり意味論的環境の議論に入る。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人間－環境系の総合及び文化環境	前章の意味論の一般的理解の上に、ここでは人間－環境系の全体構造を示す。	黒沢一清
9	環境管理の原理	産業－自然環境系を支配する最も基本的な諸法則を規定し、それらの間の構造的関連性を明らかにする。法則の階層性と止揚関係である。	同上
10	海の産業とその環境問題	産業－環境系の視野からのユニークな産業分類を示し、まずその中の最も基本的産業としての海の産業の環境問題を議論する。海と人間を媒介する漁業の意義である。	同上
11	緑の産業と環境問題	緑の産業、すなわち林業のもつ環境論的諸問題の基礎を考える。森林と人間を媒介する林業の意義である。	同上
12	生命の産業と環境問題	以上の諸章では、人間の外的環境と産業との関連を主として議論してきたが、本章では人間の内的環境とこれにかかわる産業としての生命産業との関係を考える。医療及び医薬品産業である。	同上
13	産業－地域社会系	産業を一般的に取り上げてそれの環境問題を考察してきたが、本章ではそれらをさらに特定の地域の上でいっそう具体的に考察する。地域社会というフィールドが基礎である。	同上
14	人間－産業－自然コンプレックスのシステム・シミュレーション	住民、各種産業、自治体等の、具体的な地域における複合体。これこそが人びとの眼前に展開されている最も具体的な“環境”である。そこに現われる問題としての環境の背後にある構造をモデルに描き、これを用いて実験を試みる。システム・シミュレーションの意義と役割りについて論じる。	同上
15	産業環境系研究の総括と展望	本講義の全体を総括して、この講義から我われはいったい何を学んだのか、そしてそうした知識がこの社会でどういう意味を持つのか、我われはこれによって、どのような産業的・生活的課題を課されることになるのか、等を考える。	同上

＝交　通　と　通　信＝(TV)

〔主任講師：岡野行秀（東京大学教授）〕

全体のねらい

一国の経済、世界経済の発展にとって、交通・通信は欠くことができない。国内的にも、また国際的にも、資源は地理的に偏在しており、これらの資源を有効に利用し、分業と協業を行なうためには、交通と通信の発達が前提になる。産業の発展と生活水準の向上にとって、交通と通信がどのような役割を果たすかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	交通と通信の役割	1. 交通と通信の意義 2. 交通と通信の関係 3. 経済活動と交通・通信	岡野行秀（東京大学教授）
2	交通の発達と地域開発	1. 地域開発における交通の役割 2. 交通の改善の影響 3. 交通条件と地価（地代）	同　上
3	交通（サービス）の需要	1. 空間的移動の需要 2. 派生需要とその性質 3. 交通（サービス）の需要に影響を与える要因 4. 交通（サービス）の需要の変動	同　上
4	交通手段の特性	1. 2つの特性 — 交通（サービス）の質と費用構造 2. トリップの費用 3. 交通サービスの費用構造 4. 各交通手段の費用構造 5. 混雑の費用	同　上
5	運賃・料金の決定	1. 運賃・料金の機能と役割 2. 運賃・料金の規制 3. 運賃形態 4. 運賃・料金規制の問題点 5. 道路の費用負担	同　上
6	交通市場の変化	1. 輸送構造の変化 2. 貨物輸送 3. 人の輸送 4. 交通市場の変化 — 競争市場へ	同　上
7	主要諸国の交通政策	1. 交通政策の目的と枠組み 2. 主要諸国の交通政策 3. 交通調整 4. 交通政策の評価	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代の交通問題	1. 鉄道の再編成 — 国鉄の分割・民営化 2. 規制緩和 3. 都市交通 4. 人口稀薄地域の交通 5. 外部不経済の問題 6. 展望	岡野行秀
9	通信の発達と経済社会	1. 電気通信の役割 2. テレコム・ネットワーク 3. テレコム・サービスの種類 4. 社会へのインパクト 5. テレコムの政策課題	南部鶴彦 （学習院大学教授）
10	通信需要	1. 市場と取引の形態 2. 電話需要の形態 3. 電話需要の今後	同上
11	通信サービスの供給	1. テレコム・ネットワークの3要素について 2. ネットワークの形状について 3. ネットワークと規模の経済性について 4. テレコム・ネットワークの特異性について	同上
12	通信料金の問題	1. 市場メカニズムと競争 2. 規模の経済性と供給 3. ネットワーク型消費と需要 4. 固定費用と平均費用 5. 独占と規制	同上
13	政府規制の問題	1. 供給の形態 2. 規制の特色 3. 内部相互補助の問題	同上
14	海外の規制制度	1. 各国の特色 2. アメリカ 3. イギリス 4. フランス	同上
15	通信の将来と通信政策	1. 国際電気通信の特色 2. 国際通信のネットワーク 3. 国際通信料金 4. 国際機関 5. 通信の将来と政策課題	同上 （岡野行秀）

＝流　通　と　商　業＝(R)

〔主任講師：鈴木安昭（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

われわれの生活にも、また企業の生産活動にも、流通活動は不可欠である。その中心的な担い手である商業は就業人口の二割余が従事している。そのような重要性にも拘らず流通や商業は十分理解されていないどころか誤解されてもいる。本講座ではそれらを理解するための基礎知識を平易に解説することを目的としている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	流通の社会的役割と流通機構	流通は必要悪で無い方が良いのだろうか。それとも流通は望ましい社会的役割を果しているし、今後も一層必要性を増してくるのだろうか。	鈴木安昭（青山学院大学教授）
2	流通機能(1)	流通の社会的役割の達成には流通機能が遂行される必要がある。社会的分業の結果として生産しない財は購入して所有権を入手しなければ消費できず、また購売を目的として生産が行われるが、そこには危険が伴うことも理解する。	同　上
3	流通機能(2)	生産と消費の地点と時点それぞれに発生する懸隔（へだたり）をうめるためには、輸送され、保管されなければならない。また、その過程で集められ、分割され、組合せがつくられる。	同　上
4	流通機能(3)	消費に関する情報をもとに生産され、生産された商品に関する情報を伝達して消費の意欲を換起する。それに対して消費者から購入の意図が情報として伝達される。こうして情報を伝達することが流通の不可欠の要素となる。	同　上
5	流通機能担当者の分化と統合	流通機能は、多くの担当者に多様に分化して遂行されるとともに、分化していたものが統合される。そこに参加するのは、不可欠の生産者と消費者から中間商人としての卸売業者と小売業者、さらに輸送業者や広告業など専門機能業者である。	同　上
6	消費者と流通	われわれの生活にとって流通活動はどのような意義があり、また福祉とはどのような関係であるか、消費者の買物場所選択行動の基礎にあるもの、消費者の買物費用、そしてそれらが小売業に与える影響などを学ぶ。	同　上
7	生産者と流通	生産者は財の生産に必要な原材料や機械・設備の購入に関して、そして生産した財の販売において流通機構と深いかかわりをもつのみでなく、生産した財の最終的な販売にいたるまでも管理の対象とするにいたった。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商業の存立基盤	生産者と消費者の中間の部門として商業部門が存立し、しかもそれが存立するほうが社会的に合理的である場合の根拠は何だろうか。さらに商業内部が多段階になる場合も考察しなければならない。	鈴木安昭
9	小売業の役割と機能	流通機構のうちわれわれ消費者にとって最も身近かな存在である小売業の果す社会的役割を確認し、その果している流通機能を整理してみよう。	同上
10	小売業の構造	小売業は多様な単位を構成要素として成立っている。その全体と変化の方向を把握するために、それを規模別、業種別、地域別そして形態別に整理し、それらの変化を、環境諸要因とかかわらせて学ぶ。	同上
11	小売業の諸形態(1)	小売業の店舗、企業そして企業間の組織には多様な形態がある。百貨店、スーパー、専門店チェーン・ストア、中小小売業者、ボランタリー・チェーン、フランチャイズ・システム、商店街、ショッピング・センター、生活協同組合などの諸形態の特徴を知るばかりでなく、そのような諸形態がなぜ生ずるのか、同一名称で呼ばれていればそれらは同質なのか、新形態の出現についての試論にはどのようなものがあるかなどを論ずる。	同上
12	小売業の諸形態(2)		同上
13	卸売業の役割と機能	卸売業は一般的には小売業よりも理解し難いものであろう。ここでは卸売業が果している会社的役割とその機能を整理し、さらにその存立基盤に影響を与える諸要因を考察する。	同上
14	卸売業の構造と諸形態	卸売業には巨大な総合商社から、食品など業種別総合卸売業者、地場産業と密接に結びついた産地的な市場を対象とした零細卸売業者、輸出あるいは輸入を地域的品目別に扱う専門商社など多様な構成要素が存在する。	同上
15	流通・商業に対する公共政策	流通・商業のあり方に対して、政府や地方公共団体は公権力によって介入している。それらはより望ましい方向を目指して、民間の経済主体の行動を規制し、助成し、あるいは紛争の調整を行っている。	同上

＝ サービス産業論 ＝(R)

（主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
古郡鞆子（明海大学教授））

全体のねらい

われわれはサービス産業を、勿論１つの産業として研究する。然し、高度成長をへて成熟段階に達した現代産業社会には、産業構造の大きな変動が進展している。その変動要因の１つはサービス経済化である。われわれはサービス経済化の実態と意義を明らかにし、サービス経済化とサービス産業の関連とサービス産業そのものを研究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	サービス産業の分析	分析の対象領域を、狭義のサービス業から、理念的に物財産業に対応する広義のサービス産業まで広く設定する。分析の視点はミクロ的視点からマクロ的視点を含み、かつ、歴史的視点に立つ。社会全体におけるサービス生産の社会的分業の展開過程の背後にある変動要因の１つをサービス経済化として規定する。次に、分析の基礎となるサービスの意味、性質、種類などについて検討。	磯部浩一（放送大学教授）
2	第三次産業の長期的動向	広義のサービス産業は、統計的には第三次産業として、近似的に把握できる。わが国の第三次産業の就業者構成比は、第二次世界大戦後に著しく増大したこと、経済発展と第三次産業の関連についての統計的分析の成果を明らかにする。	同上
3	サービス産業の成長	第三次産業のなかに含まれる狭義のサービス業に注目しながら、第三次産業のなかでも、とくにサービス業の就業者構成比の増加傾向の大きいことを明らかにする。家計消費における「モノ」離れとサービスへの移行化傾向、サービス経済化傾向が低成長経済のもとでも継続していること、その理由を明らかにする。	同上
4	サービス経済化と産業構造	サービス経済化の進展にともなう問題点、進展の実態と限界を明らかにし、サービス経済化のメカニズムを再検討する。産業のソフト化についてもふれる。	同上
5	サービス産業の分類	サービス産業は現在、生成分化の変化の過程にある。サービス産業の現状を分析するためには、現行の利用しうる統計では十分でない。現行の日本標準産業分類における問題点を検討し、今後の分析のために必要な統計のあり方を考察する。	古郡鞆子（明海大学教授）
6	就業構造のサービス経済化	サービス経済化の進展状況を就業構造の側面からとらえる。産業別・職業別就業構造の変化を概観し、サービス経済化の実態、サービス雇用の特徴などを明らかにする。	同上
7	サービス経済の労働問題	サービス経済化に伴い、労働市場では構造変化が起きている。ここでは、就業形態の多様化、労働力の流動化・２極分化・不分明化などの問題をとりあげる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	サービス経済化のインパクト	サービス経済化の雇用へのインパクトを考える。サービス経済化のメカニズム、労働生産性上昇の阻害要因、サービス経済と景気変動の関係などについて論じ、サービス経済の評価を行う。	古郡鞆子
9	サービス経済化と雇用対策	本格化するサービス経済社会に向けての具体的な労働対策を考える。労働需給のミスマッチを解消するための対策、変化に適応できる人材の開発の問題などをとりあげる。	磯部浩一
10	家計のサービス経済化	サービス経済化は家計のなかでも進展している。家計の消費と貯蓄の動向、家計消費のサービス化の実態と背景を明らかにし、今後の消費の方向を探る。	古郡鞆子
11	政府とサービス経済化	医療、教育、福祉などの公共サービスの実態と問題点を明らかにする。公共サービスの特性、公共サービスにおける政府の基本的役割を考え、公共サービスのあり方を検討する。	同上
12	企業とサービス経済化	企業のサービス経済化への関連、対応の経過を考察する。はじめに製造業のサービス経済化への対応、ソフト業務の内生、外生の状況をとり上げる。最後に、全産業について対事業所サービスについてふれる。	磯部浩一
13	サービス産業の盛衰と先端業種	業種別サービス業の成長と衰退を明らかにする。最初にサービス業の規模別構成、中小サービス業の流動性と成長性、サービス業の低成長業種と成長業種、さらに、サービス業の先端業種をとりあげる。	同上
14	サービス経済化と国際経済	国際経済的視点からサービス経済化を比較するには、多くの制約点がある。この点を前提としたうえで、主要諸国のサービス経済化の進展状況、サービス経済化の内容、そしてサービス消費支出の国際比較とを行う。次に、サービス貿易の具体例と定義をとり上げ、サービス貿易の現状を説明する。	同上
15	サービス産業の展望	展望を行うための前提を明らかにしたうえで、サービス経済化の限界、物財生産部門のサービス化、ソフト化、さらに産業の「融合化」現象をとりあげる。次に展望の手がかりとして参考になる調査結果を紹介し、ついで、サービス産業における企業規模の問題、消費者のあり方などにふれる。	同上

＝産業および生業としての農業＝（R）

〔主任講師：渡部忠世（放送大学教授）〕

全体のねらい

人類の生存に不可欠な食糧などを供給する農業は、人類の歴史とともに発展して、各地に独自な技術と文化を形成した。その発展の中で、農業は農民を支える生業としての側面から、社会に食糧・生産物を供給する産業としての側面を強化した。農業のこの両側面を世界と日本の農業発達史をたどりつつ考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	農業の２つの側面	産業、生産、なりわい 農業の定義、特徴 「貴農論 ― 農業の貴重なる所以」	渡部忠世 （放送大学教授）
2	農業の地域的ひろがり	農業の分類 農業類型の地域区分 文化としての農業 農耕文化基本複合	同上
3	世界の農耕文化(1) 根栽農耕文化と稲作農耕文化	作物起源の大中心 農耕起源の一元説、多元説 根栽農耕文化 稲作農耕文化	同上
4	世界の農耕文化(2) サバンナ農耕文化、地中海農耕文化、新大陸農耕文化	サバンナ農耕文化 地中海農耕文化 新大陸農耕文化 農耕文化の重層的発展	同上
5	農耕文化の発展―自給農業の成熟	焼畑農耕のシステム 焼畑農耕から定着農耕へ 輪作体系の成立と集約化	同上
6	東アジア水田農業の展開	日本へ渡来した稲作 中国における稲作技術の発展 わが国近世のイネの収量 近世農書の示す稲作技術	同上
7	南アジア畑作農業の展開	南アジアの畑作と雑穀の種類 南インド、デカン高原の畑作 南インドの農業体系の特徴 華北畑作との対比	同比

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヨーロッパの「農業革命」	南ヨーロッパの農業 三圃式農法から穀草式農法へ 「農業革命」以降	渡部忠世
9	アジアとヨーロッパの農業を比較して	アジアとヨーロッパの農業構造の比較 アジア農業の発展方向 ヨーロッパ農業の発展過程	同上
10	植民地拡大と企業的農業の成立(1) 新大陸と熱帯圏のプランテーション農業	アメリカの農業類型、その発展 アメリカの稲作 プランテーション農業の登場	同上
11	植民地拡大と企業的農業の成立(2) ヨーロッパによる世界農業の再編	アジアにおけるプランテーション農業の展開 プランテーション農業の特徴と変遷 プランテーション農業の残したもの	同上
12	自給的農業と企業的農業の性格	再び、農業の２つの側面 農業におけるエネルギー収支 商業的農業と近代化	同上
13	日本の農業をかえりみて	近代における稲作収量の増加 明治時代後半の技術革新 戦後の水稲収量の増加 伝統的農業の終焉へ	同上
14	戦後の日本農業	日本農業の転換 — 基本法の成立 減反政策と稲作の動き 農業技術の現況と問題点	同上
15	日本農業の将来	農業のいくつかの特性 農業、特に稲作の役割 日本農業の選択 まとめとして	同上

＝中小企業論＝（R）

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）〕

全体のねらい

1970年代以降、世界各国の中小企業に対する国民的関心は大きな高まりを見せている。わが国のこれまでの特殊・日本的と考えられていた中小企業問題は、日本経済が先進国段階に到達した現在、国際的視野からとらえ直す必要がある。出来る限りこの観点を加味することが、この中小企業論の狙いである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中小企業論の課題	研究対象としての中小企業 中小企業に対する社会的認識 中小企業の問題性 世界の中小企業	磯部浩一 （放送大学教授）
2	中小企業問題の展開と政策の推移	中小企業問題の発生 戦時経済下の中小企業問題 戦後の中小企業問題 高度成長と中小企業問題 中小企業問題の新展開	同上
3	中小企業理論の形成	先進資本主義国における小工業問題の展開	同上
4	中小企業の定義	定義の必要性 外国の中小企業の定義 中小企業の定義と本質	同上
5	中小企業の地位と役割	中小企業の地位 中小企業の役割	同上
6	日本経済の構造的特質と中小企業	日本経済に対する構造的接近 日本経済の構造的特質 大企業と中小企業の諸格差	同上
7	流通機構と中小企業	流通過程の基礎的な諸概念 流通機構における中小企業 日本の流通機構 低成長経済と流通機構	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中小企業の存立条件と存立分野	中小企業の存立条件 中小企業の存立分野 経済展開と中小企業の存立分野 産業構造の変化と中小企業の存立分野	磯　部　浩　一
9	中小企業の存立形態と下請・系列	下請制の研究と評価 下請中小企業 下請中小企業の問題性	同　　上
10	中小企業の経営者	中小企業の創業者 中小企業の成長と経営者 中小企業経営者の意識構造	同　　上
11	中小企業の経営・1	中小企業の経営管理の実状 中小企業経営の規模的特質 中小企業経営の新しい課題	同　　上
12	中小企業の経営・2	中小企業の業種類型 伝統工業型中小企業の経営 近代的工業型中小企業の経営 ベンチャー・ビジネス 業種間移動と事業転換	同　　上
13	環境変化と中小企業	はじめに 環境問題の重大化 経済環境の変化 中小企業の対応 地域の環境変化と中小企業	同　　上
14	中小企業の組織化	はじめに 中小企業の組織化の意義 中小企業の組織の必要性と目的 中小企業組織化の阻害要因と限界 中小企業組合の諸形態 中小商業組織化の諸形態 低成長経済へ移行後の組織化	同　　上
15	中小企業政策	中小企業政策の体系 中小企業政策の展開 今後の中小企業政策 おわりに	同　　上

＝ 技術史・技術論 ＝(TV)

〔主任講師：吉田光邦（京都大学名誉教授）〕

全体のねらい

社会や産業の構造をつくる主要な枠組としての技術の意味、またその歴史的な変化を紹介する。できる限り現実の産業史遺物、また歴史的テキストを紹介して、具体的な姿を示すことにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	技術の意味	代表的な中国、ヨーロッパの技術についての考え方を紹介。人類史のなかでの技術のあり方について述べ、特にヨーロッパの特徴である永久機関の考え方を説く。	吉田光邦（京都大学名誉教授）
2	日本の技術史－鉱業の場合(1)－	金、銀は人類の文明史のなかで特別の価値をもってきた。しかも金、銀の物理的性質からその製錬技術はほぼ共通する。生野銀山跡を例として、生産技術の内容を紹介。	同上
3	日本の技術史－鉱業の場合(2)－	鉄、銅は実用金属として人類の文明とともに歩んできた。銅の製錬はほぼ世界に共通する。しかし鉄はその産出状態によって特殊の生産技術を生んだ。日本では砂鉄を利用した独自のタタラ製錬法が発達。	同上
4	日本の技術史－農業の場合	栽培農業は人工による食物生産技術として、人間の技術意識に大きく関連する。そのため、日本や中国では多くの農業テキストがつくられてきた。江戸期以来のそれらを紹介して具体的な様相を紹介。	同上
5	手工業 (1)	木は世界のどこにでも存在する自然素材である。同時に木工技術は、その木のもつ特性、風土に強く影響される。自然に巧妙に対応してゆく技術としての木工を、江南（京都）の木工を例として説く。	同上
6	手工業 (2)	西アジア、ヨーロッパは、アマ、羊毛を繊維の素材とし、インドはワタ、中国や日本は、アサ類、蚕糸を素材とした。そこで各地で独自の繊維製作技術が発達する。しかし織物となれば、その技術は世界に共通である。	同上
7	ヨーロッパの技術史－手工業	中世ヨーロッパの諸都市には、多くの職人ギルドがおり、工房も多く存在した。それらの実態と、技術の内容の紹介。「百科全書」をはじめとする技術書の紹介を試みる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	錬金術	卑金属を貴金属に変えるという錬金術は、ヨーロッパの技術思想を語る重要なもの。ここから多くの化学的技術が生れた。その内容を紹介するとともに、中国の錬丹術を比較する。	吉田光邦
9	機械技術	機械とエネルギーの問題は、ヨーロッパの技術思想の重要な特徴である。永久運動は、つねにヨーロッパ技術の目標であった。ゾンカ・ラメリなどの技術テキストと、永久運動の分析。	同上
10	産業革命	技術革新は産業革命を生んだ主要要素のひとつである。蒸器機関による新エネルギーの発見と、その応用による産業と社会構造の大きな変化について述べる。	同上
11	技術教育	徒弟教育は手工業時代の重要な教育システムであった。それは東西ともに同じである。それはやがて学校システムによる教育体系として成長する。	同上
12	量産の技術	19世紀になって部品の相互可換性が高まるにつれて、量産システムが成立した。それは食品にはじまり、兵器、そして名高いフォードのシステムとなる。それは現代の大量消費の時代を生んだ。	同上
13	日本近代と技術(1)	江戸時代の末、外圧の影響によって幕府は軍事技術を中心とした工業化を進めた。お雇い外国人、プラント輸入、また自力開発などが平行する。明治の新政府も同様の方針をとり、工部省はその中心となった。	同上
14	日本近代と技術(2)	農業社会としての日本を近代化し、ついで工、商を発展させようとする方針は内務省によって実行された。富国強兵、殖産興業のラインである。富岡製糸所など、国営工業による国家指導型の工業化の歩みを述べる。	同上
15	技術と社会	第２次大戦後の技術革新は、コンピュータ、ロボットなどを中心として、激しい勢いで展開し、それは多くの変化や社会や産業のなかに生んでいる。主として現代技術の問題を論ずる。	同上

＝ 産業技術の動向 I ＝(TV)

〔主任講師：黒沢一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

近年に顕著な先端的産業技術の動向の典型的な形態を取り上げて、それらの諸特徴と成果、その将来への可能性及び社会的・経済的ならびに文化的関連性について考察する。産業技術の進歩の意味、及び技術と社会とのかかわりにおいて見られる諸問題に講義の焦点があてられる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－技術系研究へのヴィジョン－現代の産業技術の諸問題	現代の産業技術の典型的な例をあげ、それらが提起する諸問題を題材に産業－技術系研究へのヴィジョンを示す。	黒沢一清（放送大学教授）
2	産業－技術系の構造－産業社会のメタ構造(1)	我々の研究課題の構造を解明する。まず最初にこの産業社会のメタ構造を一般的に論じ、それの人間－自然系の構造を解明する。	同上
3	産業－技術系の構造－産業社会のメタ構造(2)	前章にひきつづいて、ここでは人間－人間系の構造、情報系とその構造を論じ、産業社会のメタ構造の全体を示す。	同上
4	産業－技術系の構造－技術の構造(3)	本章では前章までの議論を前提として技術の構造を示す。技術とは何か、生産技術と社会・人間性との関連性が構造論の水準で論じられる。	同上
5	自動化技術と産業	自動化の、産業技術進歩における位置づけとその課題、自動化の技術・工学的基礎、さらに産業目的・社会目的と自動化技術の関連性。最後に、いわゆる省力、省エネ、品質、技能、労働力市場等との関連性、などについて論じる。	森政弘（東京工業大学名誉教授）
6	自動化と人間性	自動化は経済的にも社会的にも重要ではあるが、英知をもって自動化を推進しなければ非人間化をまねく。自動化と人間化という、普通には対立相剋する２つを、いかにして両立させ合一化してゆくかに関する、実例と哲理について説明する。	同上
7	産業用ロボットと産業問題	産業用ロボットの工学的原理と課題、産業における普及場面とそこにおける諸問題、効率、省力、保全、労働問題等。	長谷川健介（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ファクトリー・オートメーション	ＦＡの工学上の基本問題。ＦＡの産業への実現上の基本問題。生産力、生産コスト、省エネ、省力、労働問題、管理上の諸問題等。	古川勇二（東京都立大学教授）
9	自動包装と産業	包装と自動化の工学上の基本問題。包装自動化の意義と産業上の諸問題。	中井英一（ボッシュ包装機㈱代表取締役）
10	ＩＣと産業	ＩＣ技術の技術史上の意義、産業生産力とＩＣ。生活とＩＣ。産業組織。国際競争と摩擦。	大道康則（㈶機械振興協会・経済研究所主任研究員）
11	メカトロニクスと産業	メカトロニクスの進展状況。産業生産力とメカトロニクス。社会的、経済的及び文化的諸問題。	同上
12	プロセスオートメーションと産業	プロセス産業とは何か、プロセスオートメーションの手法、技術の変遷と今後の課題について述べる。	杉田昌質（横河電機常務取締役）
13	先端技術と産業政策(1)	先端技術の将来動向、先端技術産業の地域社会における存立意義、および先端技術産業の立地特性の吟味。	土屋勉男（三菱総合研究所・産業経済研究室室長）
14	先端技術と産業政策(2)	産業技術基盤と産業政策の視点、先端技術の諸類型、地域産業政策のあり方とその現代的課題。	同上
15	総括	15回にわたる現代の先端技術、産業化及び産業の社会への影響についての諸問題を総括する。	黒沢一清

＝産業技術の動向Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：道家達将（茨城大学教授）〕

全体のねらい

今後の日本の産業技術の発展の保障は、日本における基礎科学・基礎技術の創造的発展が達成されるか否かにかかっている。日本の最先端の研究室で行なわれている研究の幾つかを紹介し、産業技術の動向を総合的に展望してみることにする。この研究は日本だけでなく人類の幸福のために必要であることが御理解いただけよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	材料工学(1) —有機材料工学	1. はじめに 2. 高分子の種類と特徴 3. 構造材料としての発展 4. 複合材料 5. 機能材料 6. 結び	高久　明 （東京工業大学教授）
2	材料工学(2) —無機材料工学	1. 無機化学と無機材料工学の定義 2. 新金属材料とエレクトロニクス材料 3. センサ材料 4. 無機材料の研究の将来	後藤和弘 （東京工業大学教授）
3	機械工学(1) —自動制御とロボット工学	1. はじめに 2. 自動制御におけるフィードバック系 3. ロボットにおけるフィードバック系 4. 知能機械としてのロボット 5. 自動化とロボット化の今後の展開	梅谷陽二 （東京工業大学教授）
4	機械工学(2) —医工学	1. 医工学とは何か 2. 医工学の範疇 3. 医工学の例 — 関節の構造と摩擦 4. 人工関節の設計	笹田　直 （東京工業大学教授）
5	合成化学	1. はじめに 2. 天然物の利用から人工物の創製へ 3. 化学工業と触媒 4. 有機合成科学と化学工業 5. 石油資源に頼らない産業技術は？	森川　陽 （東京工業大学教授）
6	生物工学	1. はじめに 2. なぜバイオなのか 3. 生物工学を支える基盤技術 4. 産業技術としての生物工学	相沢益男 （東京工業大学教授）
7	電子工学(1) —太陽電池	1. はじめに 2. 太陽電池とは何か 3. アモルファス太陽電池 4. その他の太陽電池 5. 太陽電池の高効率化 6. 着々進む太陽光発電の実用化 7. おわりに	高橋　清 （東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電子工学(2) —光通信	1. はじめに 2. 光通信のしくみ 3. 光ファイバ 4. 光デバイス 5. 光伝送システム 6. むすび	古屋一仁 （東京工業大学教授）
9	システム工学 —ゆらぎと予測	1. 「ゆらぎ」はどのような意味で重要か？ 2. 日常生活における「予測」行為 3. 予測の必要条件 4. 予測はどのようにして行うか 5. 予測理論から作曲をする	武者利光 （東京工業大学教授）
10	情報工学(1) —パターン認識	1. はじめに 2. 人間と機械の間の接点 3. 認識とは何か 4. パターン認識とは 5. パターン認識を可能とするために 6. パターン認識技術の動向と今後の課題	飯島泰蔵 （東京大学教授・東京工業大学名誉教授）
11	情報工学(2) —ホログラフィー	1. まえがき 2. ホログラフィーの原理 3. ホログラムの種類 4. 立体像のディスプレイ 5. 計測への応用 6. ホログラフィック光学素子 7. むすび	辻内順平 （東京工業大学教授）
12	エネルギー工学(1) —MHD発電	1. はじめに — MHD発電とは 2. MHD発電の開発研究の必要性 3. MHD発電の電気出力 4. 発電機の種類 5. 熱源と発電方式 6. 研究開発 7. エネルギーの有効利用	垣花秀武 （上智大学教授）
13	エネルギー工学(2) —核分裂と核融合	1. はじめに 2. 核分裂反応の特質　3. 核融合反応の特質 4. DT核融合システムが核分裂システムより有利となる可能性のある点 5. DT核融合システムの弱点 6. 核融合開発が成功するための要件 7. 結び	同上
14	環境工学(1) —景観工学	1. はじめに 2. 景観の要素と成り立ち 3. 課題と方法 4. 景観の予測手法 5. 景観の評価 6. 今後の展望	中村良夫 （東京工業大学教授）
15	環境工学(2) —都市工学	1. 都市と都市工学 2. 都市機能を支える物的要素 3. 日本の都市化と都市問題 4. 現代都市問題の特徴 5. 日本の都市の今後の課題 6. 都市工学のとりくみ　7. 計画案の立案 8. 計画案の評価と合意形成　9. 今後の展望	渡辺貴介 （東京工業大学教授）

＝システム工学＝(TV)

〔主任講師：浅居喜代治（大阪工業大学教授）〕

全体のねらい

大規模・複雑なシステムの計画・設計・運用のためのシステム工学への理解を深めるために、まず、その発達の歴史・アプローチ・応用例を示したのち、次にアプローチの順に各段階での方法論を説明し、終りに最近の総合的な実際例を挙げて、系統的かつ具体的に講義を進め、システム概念の把握と、システム思考の基礎を与えようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 システムとは	システム工学の概要 システムの定義・特性・考え方	浅居喜代治 （大阪工業大学教授）
2	種々のシステム	システムの分類 種々のシステムの例	同上
3	システム工学とは	システム工学の発達・考え方・他のシステム科学や技術との比較	同上
4	システム工学のアプローチ	システム工学のアプローチと方法論の概説	同上
5	システムの表わし方（モデリング）	システム表現の考え方と注意 数学的モデルと図的モデル	平井一正 （神戸大学教授）
6	種々のシステム・モデル	システムモデルの分類 モデルの例	同上
7	構造モデル	構造モデルの意義と作成	寺野寿郎 （法政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ファジィモデル	ファジィモデルの意義・理論・種類 モデル作成上の注意	寺野寿郎
9	システムの特性と解析(1)	システムの基本的特性（安定性・可制御性・可観測性・感度）の意義と解析法	北森俊行 （東京大学教授）
10	システムの特性と解析(2)	システムの基本的特性（信頼性・保全性・安全性など）の意義と解析法	同　上
11	良いシステムの求め方 （システム最適化）	種々のシステム最適化法	浅居喜代治
12	シミュレーションと試行法	シミュレーションの方法 種々の試行法	同　上
13	システム・ダイナミクス	システムダイナミックスの考え方と理論 動的モデルへの適用	榛沢芳雄 （日本大学教授）
14	都市システムへの応用	システムダイナミックスによる都市モデル シミュレーションによるシステム計画	同　上
15	ＯＡ、ＦＡのシステムへの応用	ＯＡ、ＦＡなどのシステムの計画・設計・運用 本書の内容の要約	浅井喜代治

＝人　間　工　学＝(TV)

〔主任講師：加藤一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

人間工学というのは発生的に二つの面をもっている。労働科学と経営工学がそれである。

しかし時代は推移しつつあり、大きな転回をみせようとしている。それは人間福祉への傾斜である。もちろん人間工学も新たな変化に対応しつつあるが、私は少し視野を広げ、人間と人間のあり方に焦点を合わせたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	人間工学とは ― 工学的人間学	人間は工学とどのようにかかわってきたか。人間機械論から人間システム論に至る人間と機械の問題について述べ、これからの展開に対する理解を深める。	加藤一郎（早稲田大学教授）
2	ブラックボックスとしての人間 ― 自動人形	人間機械論は、人間を外部からながめ、一種の機械として理解してゆくのが特徴である。技術の進歩にささえられて変遷し近代に至るその歴史と現状を展望する。	同　上
3	内側からみた人体 ― 生理工学	学問の分化と共に、人間を内側から理解することに重心が移った。レオナルドの解剖から近代の電気生理学に至る流れは、生理工学として現代的展開をみせはじめた。	同　上
4	脳のサイバネティクス ― 人工知能	人間の頭脳とコンピュータの間には大きなギャップがあるが、その一部を代行させることはできる。人工知能の開発と、それによる脳機能の理解の試みについて述べる。	同　上
5	情報チャンネルとしての皮膚 ― 官能検査	皮膚感覚の特異説は根拠のうすいモデルとなりつつある。これを例に、仮説・検証のプロセスを呈示する。代行情報チャンネルとしての応用と官能検査の人工化などにふれる。	同　上
6	発声のメカニズム ― 人工の口	言語が人間システムの中でもつ特質と、言語の構造、言語の習得、思考と言語の関係、さらに、音声発生の機構と、人工的に音声を発生させる方法について述べる。	白井克彦（早稲田大学教授）
7	聴覚のメカニズム ― 人工の耳	聴覚の機構と、その心理現象を含めた複雑な機能について、工学的な立場から考察する。さらに、音声の理解と人工の耳の可能性について言及する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	視覚のメカニズム ── 人工の目	われわれは物を見てその形を知り、意味を理解し、色彩豊かな3次元の空間を知覚する。このたくみな視覚のしくみと、視覚障害者に対する技術補助の問題について述べる。	大頭　仁 （早稲田大学教授）
9	身体リズムのメカニズム ── 電気刺激	人間の体内では、神経によって情報が伝達されている。神経に電気刺激を与えて心臓や腸管などのリズムを制御し、痛みをおさえるなど、人工的な身体制御も可能である。	内山明彦 （早稲田大学教授）
10	血液循環系のメカニズム ── 人工心臓	血液循環系を構成している心臓、血管、血管網、肺などのメカニズムと機能を工学的に解説し、あわせて心臓病治療と医工学、人工臓器の現況についても言及する。	土屋喜一 （早稲田大学教授）
11	骨と筋のメカニズム ── 人工関節・筋	骨生成の電気機械的メカニズム、筋の構造特性などの特有な性質をしらべる。また、これらの代替機器としての人工関節や人工筋についても紹介する。	加藤一郎 （早稲田大学教授）
12	手のメカニズム ── 人工の手	手の感覚系・運動系はともに人間特有のシステムをもつ。その巧緻性について、機械的構造や運動制御について調べる。また、義手やロボットについて現状を述べる。	同　上
13	足のメカニズム ── 人工の足	2足歩行の意義と問題点をさぐる。歩行の分析と、その正常・異常について考える。歩行機械によって足のメカニズムを解明し、義足への技術波及にまでふれる。	同　上
14	内面からみた人間 ── 心理工学	人間は心と体をもつ。心理学的知見をもとに、意識と情動の問題に工学的像を与え、バイオフィードバックを例に心と体の問題を考える。	同　上
15	人間と機械の共生 ── サイボット社会	人間とロボットが共生する社会における人間学としてサイボトロジーを提唱する。21世紀へ向けてホモ・ファーベルからホモ・ルーデンス、ホモ・サピエンスへの道を探る。	同　上

＝情　報　工　学＝(TV)

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

電子計算機の本質および実際を見極めるため、その仕組・原理・構成などをハードウェア、その利用法・プログラムなどのソフトウェア、ならびに応用技法等について基礎的な内容を講述する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	計算機概説(1)	いま計算機はどんなところで、どのように用いられているかを紹介しながら、計算機が多方面で活用されていること、いろいろの種類のものがあることを見て、計算機とはなにかに話を進める。	都倉信樹（大阪大学教授）
2	計算機概説(2)	計算機はデータ処理機械である。そのデータをどう表現し扱うのかについて説明する。また、計算機の内部を覗いてみる。	同　上
3	ゲートからALUまで(1)	計算機は一見複雑極まりないが、実際は簡単な要素から組み立てられており、想像よりは簡単なものである。もっとも基本の要素であるゲートから出発して、順々に計算機の回路を構成していく。	同　上
4	ゲートからALUまで(2)	計算機のなかで、データを加工するALUという部分について、その構成、設計についてのべる。	同　上
5	計算機の仕組と動作(1)	計算機の中での時間、フリップフロップなどの説明から入り、バス、記憶装置と説明を進める。前回までで計算機の基本的な構成はできあがったので、これをどのように動かすのかを説明する。バスの動作、プログラム内蔵方式計算機、具体的な計算機の命令、その実行の仕方、そして、計算機の制御回路の説明をする。	同　上
6	計算機の仕組と動作(2)		同　上
7	IC、VLSI、マイクロプロセッサ	最近の計算機の進歩は多くの関連技術の進歩に支えられている。その中でも最も重要なICやマイクロプロセッサについて考えてみる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	プログラムと言語(1)	プログラムを作るという作業の例を通して、その記述の仕方を順に見ていく。流れ図などの概略を記述するもの、アセンブリ言語、そして、コンパイル言語と進む。種々の処理系についても述べる。	都倉信樹
9	プログラムと言語(2)	高級言語の機能、構文の記述法などについて、説明する。言語の変遷、人間の言語との違いなども考えよう。	同上
10	アルゴリズム(1)	プログラム作成の主要なステップの一つはアルゴリズムの検討・設計である。いくつかの主要な例について、アルゴリズムの考え方、および、その評価の仕方などを述べる。	同上
11	アルゴリズム(2)	複数個のプロセッサにかかわるアルゴリズムについて考える。わりこみの概念についても説明する。	同上
12	ソフトウェア(1)	ソフトウェアとはなにか、ソフトウェアを作成することはどういう作業なのか、なにが問題なのか、ソフトウェアに関するいくつかの問題を説明する。特に、ソフトウェアの品質について考えてみよう。	同上
13	ソフトウェア(2)	ソフトウェアのいま一つの問題は、生産性の問題である。どういう問題があるのか、どうすればよいのだろうか、未解決な問題が多いが、その研究の状況をまじえ、ソフトウェア開発の問題を考えてみよう。	同上
14	計算機にできること、できないこと	計算機はどういう能力をもっているのだろうかという基本的な問題を考えよう。計算機にできないことはなにかについても説明する。	同上
15	動向と展望 ―さらに勉強するために―	この講義で扱った内容が情報工学全体の体系のなかに占める位置を示し、カバーできなかった事柄について補足し、あるいは、各人の興味に沿って引続き勉強するための案内もしたい。	同上

＝ 計　測　と　制　御 ＝ （TV）

〔 主任講師：森　政弘（東京工業大学名誉教授）
小川鑛一（放送大学助教授）

全体のねらい

希望通りの結果や経過や状態を得るために必要な操作を施すことを制御という。このためには、現状や結果を計測することが必要で、計測なしには制御は成り立たないといえる。本講義では、これらを踏まえ社会における計測と制御の活躍状況の解説を背景に、計測と制御を学んでゆくための必要最小限の工学的基礎事項を説明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	計測と制御の役割	1. 計測と測定について 2. 制御とは何か	森　政弘 (東京工業大学名誉教授) 小川鑛一 （放送大学助教授）
2	計測の意味と計測結果の利用法	1. 計測とは 2. 測ってどうする 3. 計測の定石	同　上
3	物理量とセンサ	1. 物理量について 2. 物理量とセンサ 3. センサ	同　上
4	センサの応用	1. ひずみゲージとは何か 2. ひずみゲージによるひずみ測定原理 3. 計測感度を上げる2ゲージ法と4ゲージ法 4. ひずみゲージの種々の応用	同　上
5	制御のすばらしさ	1. 温度調節のおじさん 2. 制御と操作 3. 制御と外乱 4. フィードバック制御 5. 負のフィードバック 6. 制御の名称分類	同　上
6	シーケンスの意味とシーケンス制御のあらまし	1. シーケンスとは 2. シーケンス制御とは 3. シーケンス制御の考え方	同　上
7	シーケンス制御回路	1. シーケンス回路の基本要素 2. 簡単なシーケンス制御回路 3. OR回路とAND回路の応用	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	シーケンス制御の応用	1. シーケンス制御の応用を拡大する電磁接触器とタイマー 2. 順序始動・停止シーケンス制御	森　政弘 小川鑛一
9	人間による制御の限界	1. 人間と機械の特徴 2. 動的システム 3. 数学モデルの誘導 4. ステップ関数とインパルス関数	同　上
10	制御理論入門 －ラプラス変換と伝達関数－	1. ラプラス変換とは 2. 伝達関数とは	同　上
11	フィードバック制御系の特性と周波数応答	1. フィードバック制御系のブロック線図と伝達関数について 2. 安定・不安定 3. 周波数応答とは	同　上
12	サーボ機構	1. サーボ機構とは 2. サーボ機構の制御装置 3. ナイキスト線図と系の安定判別法 4. デジタルサーボ機構	同　上
13	プロセス制御	1. プロセス工業とは 2. プロセス制御 3. ボード線図	同　上
14	制御用機器	1. サーボ機構とプロセス制御の特徴 2. 検出要素（センサ） 3. 制御装置 4. 操作要素（アクチュエータ）	同　上
15	まとめ	1. 計測について 2. 制御について 3. コンピュータと計測と制御	同　上

＝ 設 計 工 学 ＝ （TV）

― 解 析 と 総 合 ―

〔主任講師：阿武芳朗（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

本講では、設計の学問ならびに工業技術における位置付けとその意義、および設計の思考過程、行動実行過程、また、その評価、管理について論じ、社会に貢献し得る設計とはいかなるものかを会得させるための教養講義とする。前段（1～5回）は設計工学の基礎事項、中段（6～12回）は、設計目的の具体化のための技術的基本事項を、後段（13～15回）は設計の評価ならびにその管理事項について述べる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	設 計 概 説	1. 設計の本質 2. 設計の思考過程 3. 工学的設計と製品設計 4. 製品開発	阿 武 芳 朗 （東京理科大学教授）
2	設 計 と 創 造 性	1. 創造性の役割 2. 創造思考とその特性 3. 特許制度における発明 4. 創造性訓練 5. 創造的エンジニヤに必要な特性	同 上
3	言葉としての図面(I)	1. 図面の必要性 2. 第一角法と第三角法 3. 寸法記入 4. 寸法の許容限界の記入 5. 図面に必要なその他の情報	塚 田 忠 夫 （東京工業大学教授）
4	言葉としての図面(II)	1. 図面情報の集約化 2. 幾可公差の必要性 3. 公差を融通し合う考え方 4. 表面粗さ 5. 省略図 6. 図記号による系統図 7. コンピュータによる製図	同 上
5	設計とコンピュータ（CAD）	1. 設計図とコンピュータのかかわり 2. CADの概要 3. CADのシステムの構成 4. コンピュータとの対話 5. 形状を表すデータの扱い 6. モデリング 7. ソフトソリッドモデルのデータ構造	同 上
6	機 械 要 素	1. 機械要素の分類 2. 締結要素 3. 案内要素 4. 伝達要素 5. エネルギー吸収要素 6. 液体伝導要素 7. 標準規格および機械設計	舟 橋 宏 明 （東京工業大学 助教授）
7	解 析 と 総 合	1. 設計と総合 2. 設計と分析 3. 設計と解析 4. 最適化	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	運動の変換・伝達(I)	1. 運動の自由度 2. 運動の変換・伝達の基本形成 3. 機構の自由度 4. 機構の数の総合	舟橋宏明
9	運動の変換・伝達(II)	1. 機構の量の解析および総合 2. リンク機構 3. カム機構 4. 出力運動の変更	同上
10	材料と加工	1. 設計と工作法 2. 材料選択の段階 3. 除去加工工程の制限事項と工程設計	阿武芳朗
11	強度と剛性を考えた設計	1. 材料の剛さと強さ 2. 剛性設計 3. 強度設計 4. 強度設計における配慮事項	塚田忠夫
12	精度設計	1. 精度設計の考え方 2. 精度鈍感設計 3. 精度鈍感設計概念の具体例 4. 精度設計に対する設計者の任務	同上
13	設計と信頼性	1. 信頼性の定義 2. 信頼性の数式的表現 3. 機械システムの寿命曲線 4. 機械システムの故障現象 5. 信頼性達成のための設計	阿武芳朗
14	設計と経済性	1. 生産性と生産価値 2. 工業製品の価値と費用の発生 3. 製造原価 4. 原価の低減 5. 価値分析	同上
15	設計管理	1. 設計の業務 2. 設計の図面管理 3. 設計の情報管理	同上

＝物　質　工　学＝（TV）

主任講師：町田周郎（群馬大学名誉教授）
東　千秋（放送大学助教授）

全体のねらい

自然界に存在する物質（元素から化合物まで）のもつ各種の性質に関する基礎知識をもとに、自然界の物質を物理的、化学的および生物学的手法により人工的に処理し、人類に有効なエネルギーや材料として活用する過程について説明する。特に物質および材料の各種の性質の調べ方や新たに要望される性質とそれを生み出す手法等を現状における新材料・新技術等を例に解説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	物質工学の基礎Ⅰ ―人間と地質工学	1. 文明と材料 2. 地球の資源 3. 物質工学への導入 4. 物質工学の構成 5. 物質工学の展望	町田周郎 （群馬大学名誉教授） 東　千秋 （放送大学助教授）
2	物質工学の基礎Ⅱ ―物質の成り立ち	1. 原子の構造 2. 原子の結合 3. 分子間の結合 4. 物質の状態 5. 物質の成り立ち	同　上
3	物質工学の基礎Ⅲ ―資源から単一物質へ	1. 元素とその用途 2. 元素とその資源 3. 単体の製造法 4. 無機化学製品 5. 無機物質の高純度化法 6. 石油化学 7. 化学工業の特徴	同　上
4	物質工学の基礎Ⅳ ―低分子物質から高分子物質へ	1. 合金 2. セラミックス 3. 高分子	同　上
5	物質から材料へⅠ ―力学材料の世界(1)	1. 応力とひずみ 2. 力学材料の強さと温度 3. 力学材料の構造欠陥と強さ 4. 力学材料の複合化	同　上
6	物質から材料へⅡ ―力学材料の世界(2)	1. 金属材料の強化および機能性 2. 形状記憶合金 3. 超塑性合金 4. アモルフォス合金 5. エンジニアリングプラスチック	同　上
7	物質から材料へⅢ ―電子材料の世界(1)	1. 導電 2. 導電性材料 3. 絶縁材料	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	物質から材料へⅣ ―電子材料の世界 (2)	1. 半導体材料 2. 超伝導材料	町田周郎 東　千秋
9	物質から材料へⅤ ―電子材料の世界 (3)	1. エネルギー変換 2. 光電エネルギー変換 3. センサー	同　上
10	物質から材料へⅥ ―磁性材料の世界	1. 磁性 2. 磁気ヒステリシス曲線と磁性材料 3. 磁性材料の進展	同　上
11	物質から材料へⅦ ―光学材料の世界 (1)	1. 光と物質の相互作用 2. 発光材料 3. 受光材料 4. オプトエレクトロニクス集積回路	同　上
12	物質から材料へⅧ ―光学材料の世界 (2)	1. 物質と光透過 2. 光学レンズ 3. 光ファイバー 4. 光選択透過フィルム 5. 液晶材料	同　上
13	物質から材料へⅨ ―機能性高分子材料の世界	1. 機能性高分子の種類 2. 感光性高分子材料 3. 物質分離機能をもつ高分子材料 4. 酵素機能をもつ高分子材料	同　上
14	物質から材料へⅩ ―生体材料の世界	1. 生体と材料 2. 主な医用材料 3. 免疫学	同　上
15	ま　と　め ―将来への展望	1. 物質工学の現状 2. 物質工学の夢 3. 物質工学の問題点 4. 物質工学と倫理観	同　上

＝エネルギー工学＝（TV）

〔主任講師：丹生慶四郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギーの使用が、人間の生活や生産活動と密接に関係していることを、1日の生活、エネルギー使用の歴史、エネルギー経済、エントロピーの立場から調べてみる。次にエネルギー資源について、今後の見通しを含めて考察し、最後に、各種エネルギー間のエネルギー変換に関し、詳細に調べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活とエネルギー	1. 火と人間 2. 生活の中のエネルギー 3. 石油と文明	丹生 慶四郎 （東京工業大学教授）
2	エネルギー使用の歴史	1. 再生可能なエネルギー 2. 産業革命 3. 化石燃料 4. 資源予測	同上
3	エネルギー経済	1. 終戦直後の日本の石炭増産 2. 油田の発見と石油価格 3. 日本のエネルギー多消費産業への傾斜投資と経済発展 4. エネルギー消費弾性値	同上
4	エネルギー資源Ⅰ 自然エネルギー	1. 太陽エネルギー 2. 風のエネルギー 3. 海洋のエネルギー 4. 地熱エネルギー 5. 地震	同上
5	エネルギー資源Ⅱ 原子力1：核分裂	1. 特殊相対性理論と原子力 2. 質量欠損 3. ウラニウム 4. 原子炉 5. 海水中のウラン	同上
6	エネルギー資源Ⅲ 原子力2：核融合	1. 第2の火「原子力」 2. 核融合反応 3. クーロンポテンシャルと核力 4. 熱核反応 5. 自己点火温度 6. ローソン条件 7. 磁場閉じ込め　8. 慣性閉じ込め	同上
7	エントロピー1 巨視的考察と熱機関	1. エネルギー変換　2. エントロピー 3. カルノーの熱機関 4. 非可逆過程とエントロピー増加 5. 熱力学の第1法則と第2法則 6. 膨張とエントロピー増加 7. 混合とエントロピー増加 8. 高熱源とエントロピー　9. 開放系	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	エントロピー2 微視的考察	1. 微視的考察とエントロピー 2. 平衡分布と最大確率 3. エントロピーと経済 4. エントロピーと情報	丹生 慶四郎
9	エネルギー変換1 力学エネルギー	1. エネルギー変換 2. 力学エネルギー	同上
10	エネルギー変換2 熱エネルギー	1. 熱エネルギーから力学エネルギーへの変換 2. 冷凍サイクル 3. 熱エネルギーの伝達 4. 熱エネルギーから電気エネルギーへの変換	同上
11	エネルギー変換3 化学エネルギー	1. 燃焼 2. 電池 3. 水素 4. 生物	同上
12	エネルギー変換4 電気エネルギー	1. 電気エネルギーから力学エネルギーへの変換 2. 電気エネルギーから熱エネルギーへの変換 3. 電気エネルギーから光エネルギーへの変換	同上
13	エネルギー変換5 光・放射線エネルギー	1. 光エネルギーから電気エネルギーへの変換 2. 光エネルギーから化学エネルギーへの変換 3. 放射線エネルギーから電気エネルギーへの変換	同上
14	エネルギー変換6 核分裂エネルギー	1. 核分裂反応 2. 原子炉 3. 熱中性子炉 4. 高速増殖炉	同上
15	エネルギー変換7 核融合エネルギー	1. 核融合反応 2. 磁場閉じ込め方式 3. 慣性閉じ込め方式 4. 核融合炉	同上

＝都　市　計　画＝（TV）

〔主任講師：石原舜介（東京理科大学教授）
　　阪本一郎（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現在の都市問題に対処し将来に向けて都市をより住み良いものにしていくためには、都市に参加する人々が都市について深い認識を持つことが不可欠である。本講義は、都市計画の法律制度を解説するものではなく、また、都市計画の全体像を示すものでもない。今日の都市が抱える代表的課題を取り上げ、都市そのものへの理解を深めつつ都市計画の基本的考え方を学ぶことをねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	都市をとりまく環境の変化	1. わが国の都市化 2. 都市をとりまく環境の変化	石原舜介 （東京理科大学教授）
2	土地利用のコントロール	1. 都市の形成について 2. 土地利用計画の必要性 3. 市街化区域および市街化調整区域 4. 地域・地区制 5. 地区計画制度 6. その他の制度と今後の展望	同　上
3	土地利用の基礎	1. 土地利用の指標 2. 土地利用と環境 3. 土地利用の実態	阪本一郎 （放送大学助教授）
4	土地利用のしくみ	1. 土地利用の諸現象 2. 都市立地者の土地要求 3. 土地利用決定の均衡論的理解	同　上
5	土地利用の推移	1. 土地利用変化の促進要因 2. 土地利用変化の抵抗要因 3. 用途混合地域の成立	同　上
6	土地価格の形成	1. 土地の資産としての評価 2. 土地価格を表す数値 3. 価格形成の基礎的なしくみ 4. 土地価格に影響をもたらす要因	同　上
7	土地の供給	1. 土地需要への対応 2. 高度利用の方法	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	公共投資と都市振興	1. わが国の都市基盤施設の遅れ 2. 都市基盤施設整備の計画 3. 公共投資と地域振興	石原舜介
9	宅地開発と開発利益	1. 宅地開発の現状 2. 宅地開発の予測 3. 宅地供給事業 4. 開発利益の還元	同上
10	都市再生の課題と方法	1. 都市再開発の目的 2. 再開発事業の方法 3. 再開発の種類 4. 区域の大きさと再開発 5. 日本の再開発の流れ	深海隆恒 (東京工業大学助教授)
11	コミュニティ・デベロップメント	1. コミュニティの形成 2. 都市住宅の種類 3. 住宅、住宅地の整備 4. わが国の住宅および住環境整備	同上
12	都市産業の振興	1. 産業構造の変化 2. 産業構造変化の背景 3. 産業振興のメカニズム 4. 都市の情況 5. 産業振興の例	同上
13	快適環境の創造	1. うるおいのあるまちづくり 2. 都市美運動 3. 楽しい空間の例	同上
14	都市災害への対策	1. 物的被害から機能被害へ 2. 地域の危険度と被害の想定 3. 災害対策の概要 4. 災害に強いまちづくりへむけて	梶秀樹 （筑波大学教授）
15	都市計画の新たな視点	1. わが国の都市社会の変化 2. 均衡のとれた国土開発 3. 土地の合理的利用 4. 住宅・都市の再生 5. 都市インフラストラクチャーの整備 6. 都市の環境	石原舜介

＝仕事とくらしの経済学＝（TV）

〔主任講師：島田晴雄（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

このコースは、人々の仕事と暮しのさまざまな側面を経済分析の観点から明らかにする。経済は、人人のくらしの単位としての家計と仕事の場としての企業とから成り立っている。人々はくらしてゆくために必要な所得を、仕事をする事によって獲得し、それを消費して生活する。企業はそうした人々を雇って生産活動を行い、生産物を人々に売って人々に賃金を支払う。経済社会は家計と企業の間の、労働力と財貨の交換をつうじたこのような循環によって機能している。このコースではそうした経済社会のしくみを、家計の行動、企業の行動、そして労働力の需給を調節する労働市場の構造と変動、賃金の決定、失業、政府のはたらき、などの分析をつうじて明らかにし、さらに現代のトピックスである外国人労働者問題、労働時間短縮問題、日本の経営の特質と海外進出などについても紹介し、解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	労働力の構造と変動	労働力の類型別に見た労働力率格差ならびに変動の観察をつうじて日本の労働力の構造と変動の実態を明らかにする。	島田晴雄（慶応義塾大学教授）
2	家計と労働供給	労働力変動の大部分を占める女子労働の考察を手がかりとして家計の労働供給のしくみを経済理論的に明らかにするとともに、労働市場や経済変動に対するさまざまな帰結を整理する。	同上
3	生産技術と労働需要	生産技術を経済学的に位置づける企業の理論にもとづき、労働需要の決定と変動のメカニズムを明らかにする。	同上
4	企業組織と雇用管理	企業内労働市場における採用、訓練、昇進、定年といった雇用管理や賃金管理などの意味を経済理論および組織論を応用して理解する。	同上
5	賃金構造と労働市場	賃金格差構造を７つの側面についてとらえ、その変動の観察をとおして、異 労働力の需給を調節する労働市場の機構を明らかにする。	同上
6	マクロ経済変動と雇用・賃金	賃金と雇用の変動をより一般的にマクロ経済における物価と生産の変動の分析枠組の中でとらえ、マクロ経済モデルをふまえてその変動のメカニズムを明らかにする。	同上
7	団体交渉と賃金決定	団体交渉下の賃金決定制度を解説するとともに、そうした賃金決定のメカニズムを経済分析的に明らかにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	失業の発生と変動	失業の措置と変動の実態を観察し、その発生と変動のメカニズムを経済分析的に明らかにする。	島田晴雄
9	労働政策	労働基準、職業安定、人的能力開発など日本の労働行政のしくみとはたらきを体系的に解説する。	同上
10	労働の歴史	労働運動や労働立法の歴史的展開の経緯を展望して今日の経済社会における労働のあり方の制度的枠組や基盤を理解する。	同上
11	労働政策の経済的意味	労働力商品の特殊性に起因する労働市場での労働者の交渉上の地歩の弱さや労働市場の不安定性を経済理論的に解明し、それを補い是正するものとしての労働政策の経済的意味を明らかにする。	同上
12	外国人雇用問題	日本経済の国際化にともない日本の経済活動に参加する外国人は必然的に増加しつつあるが、そこから発生する法的、経済的、社会的そして政治的なさまざまな問題を整理して評価し、21Cに向けての総合的なあるべき対応の方向を考える。	同上
13	労働時間短縮	1980年代末の好況を背景に、日本の経済社会は戦後2番目の本格的な労働時間短縮の局面に入ったと考えられる。労働時間短縮の経済社会的要因を体系的に吟味し、21Cの日本人の生活、産業社会、経済のあり方を探る。	同上
14	日本の産業とヒューマンウェア技術	戦後日本の製造業は生産現場における人間の判断と能力を最大限に活用する生産システムを開発し、その国際競争力を大いに高めた、そうした技術の性質を国際比較の観点もふまえながら企業の生産および人材管理戦略の総合的観点から解明する。	同上
15	海外投資と日本の経営	近来日本の海外投資が急増している。海外投資は受入国にとっては多くのメリットがあり、またそうであればこそ投資が行われるわけであるが、月時に世界各国における日本企業のプレゼンスの急速な増大はさまざまな社会的、政治的摩擦を生んでいる。そうした状況下での日本の経営活動の実態を観察し、改革の方向を探る。	同上

＝管　理　会　計＝（TV）

〔主任講師：櫻井通晴（専修大学教授）〕

全体のねらい

管理会計は、経営者のために行われる会計である。企業会計は、財務会計と管理会計という２つの領域に区分することができる。財務会計が外部利害関係者のために財務諸表を作成し、報告することを主なねらいとしているのに対して、管理会計は、企業内部の利害関係者のために、経営管理に必要な会計情報を提供することをねらいとしている。本講義では、管理会計の基礎概念、手法を中心にして、会計をいかにして経営管理に役立てるかを述べる。その際、管理会計という学問の性格上、企業のトップにインタビューしたり、事例研究をいくつか試みたいと思う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	管理会計の意義・本質	1　管理会計と財務会計 会計とは　企業会計の領域　会計構造と会計報告 2　経営管理者と会計 企業の目的　経営者の機能　経営計画と統制　経営意思決定 3　経営組織とコントローラー制度 経営組織　ライン・スタッフ、委員会組織　コントローラー制度 4　管理会計の体系と本書の構成 管理会計の体系　本書の構成	櫻井通晴（専修大学教授）
2	財務諸表の分析	1　分析のための基準 収益性と流動性　損益計算書と貸借対照表　分析方法と比率分析 2　収益性の分析 資本利益率　資本回転率　売上利益率 3　流動性の分析 支払能力の分析比率　資本構成の分析比率　資本構成、資産と資本構成の分析比率 4　生産性、成長性、投資収益性、社会性の分析 生産性の分析　成長性の分析　投資収益性の分析　社会性の分析	同　上
3	管理会計上の諸概念	1　管理会計上の基礎概念 実体概念　継続企業の概念　貨幣的評価の概念 2　管理会計上の利益概念 限界利益　管理可能利益　貢献利益 3　計画と統制のための原価概念 操業度の変動と原価　管理可能性と原価　直接費、間接費とその配賦 個別費、共通費とその配賦　標準原価 4　経営意思決定のための原価概念概説 機会原価　増分原価　埋没原価	同　上
4	事業部制会計	1　事業部制組織 分権化と事業部制　事業部制の利点と欠点 2　事業部制の業績評価 責任会計　原価中心点　利益中心点　投資中心点　残余利益　売上利益率 3　本社費・共通費の事業部への配賦 本社費・共通費の性格　貢献利益か純利益か　本社費配賦の方法　社内金利制度 4　社内振替価格の設定 内部振替価格と社内振替価格　社内振替価格設定の基準	同　上
5	損益分岐点分析と直接原価計算	1　損益分岐点分析 損益分岐点分析とＣＶＰ分析　損益分岐点図表　損益分岐点分析の算式 2　損益分岐点分析の展開 固定費、変動費の増減　目標利益売上高の算定　目標売上利益率の売上高 安全余裕率 3　直接原価計算 直接原価計算の意義　全部原価計算と直接原価計算の製造原価　営業利益と損益計算書の相違 4　直接原価計算の機能 利益計画への活用　経営意思決定への活用　原価管理への役立ち　公表財務諸表と直接原価計算	同　上
6	利　益　計　画	1　経営戦略と長・中期利益計画 企業環境の変化と経営戦略　戦略的な長期経営計画と長期利益計画　中期経営計画、中期利益計画 2　利益計画のすすめ方 長、中、短期の利益計画　利益計画における費用・収益計画　利益計画の策定過程 3　利益計画における目標利益 目標利益の指標　目標利益における利益概念　目標利益の求め方 4　利益計画と企業予算 利益計画の本質と企業予算　利益計画と予算編制の関係	同　上
7	予　算　管　理	1　企業予算の意義と現状 企業予算とは・予算の体系 2　予算編成 経常予算編成の基礎　予算編成の手順　損益予算の編成　資金予算の編成 3　参加的予算管理とゼロベース予算 参加的予算管理　ゼロベース予算 4　予算統制 変動予算　予算差異分析　予算差異分析の限界	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	標準原価管理	1 標準原価管理とコスト・コントロール 標準原価計算とは　標準原価計算と原価管理（コスト・コントロール） 標準原価の種類 2 標準原価の設定 標準直接材料費の設定　標準直接労務費の設定　標準製造間接費の設定 習熟曲線と経験曲線 3 原価差異分析 標準直接費の差異分析　標準製造間接費の差異分析 4 標準原価管理の特徴と限界 標準原価管理の特徴　標準原価管理の限界	櫻井通晴
9	原価管理と管理工学的手法	1 原価管理の現代的意味 原価管理の２つの意味　原価低減　狭義の原価管理 2 原価低減の構造 経営環境の整備　経営構造の変革　業務執行活動の改善 3 工場自動化と原価管理 プロセス・オートメーションとファクトリー・オートメーション　原価企画（目標原価）　ソフトウェア原価管理 4 管理工学的手法 品質管理　在庫管理　現場の原価管理	同上
10	営業費、研究開発費の管理	1 営業費管理の基礎 営業費管理の重要性　営業費管理の困難性　営業費管理のための原価分類 2 物流費の管理 物流費管理の要点　輸送費の管理　保管費の管理　包装費の管理 3 販売促進費の管理 販売促進費管理の要点　販売促進費管理における貢献利益　販売促進費管理における割当型予算　広告宣伝費の管理　交際費の管理 4 一般管理費の管理 一般管理費管理の要点　事務の合理化と事務費の生産性分析 5 研究開発費の会計と管理 研究開発費の会計処理　研究開発費管理の要点　研究開発プロジェクトの評価	同上
11	資金管理	1 資金管理と資金の意味 資金管理の重要性　黒字経営と黒字倒産　資金の意味 2 資金構造計画と長期資金計画 資金構造計画の重要性　資金調達源泉　長期資金計画 3 資金計画表（資金運用表） 資金計画表とは　資金計画表の作成法　ケース１　資金計画表の具体的例示　ケース２ 4 資金繰り計画表（資金繰り表） 資金繰り計画表とは　資金繰り計画表の形式	同上
12	経営意思決定会計の基礎	1 経営者の意思決定と会計 意思決定とそのプロセス　意思決定会計の区分 2 経営意思決定のための増分分析 増分分析　配賦問題と意思決定　ケース　減価償却費の取扱 3 経営意思決定のための原価 増分原価　埋没原価　機会原価　その他の意思決定原価 4 不確実性への対応 不確実性と意思決定　期待値による不確実性の検討　分散による不確実性の考察　期待効用	同上
13	業務的意思決定のための会計	1 業務的意思決定と経営計画 業務的意思決定　経営計画上の位置づけ 2 自製か購入かの意思決定 一般理論　ケース　解き方 3 新製品（部門）の追加または旧製品（部門）廃棄の決定 一般理論　ケース　解き方 4 プロダクト・ミックスの意思決定 ２製品、販売上の１つの制約条件の組合せ　２製品、生産上の１つの制約条件の組合せ　２製品、販売・生産上の多くの制約条件の組合せ　多品種、多数の制約条件	同上
14	戦略的・業務的な価格決定	1 経営戦略と価格決定 価格政策と価格決定　価格決定の性質 2 経済モデルと価格決定 需要と価格　需要と価格弾力性　価格、生産量の決定　経済モデルの限界 3 会計モデルによる価格決定のメカニズム 全部原価法　部分原価法 4 現実の価格決定の類型と会計モデルの適用 確定価格契約と原価加算契約　ライフサイクルと価格決定　既存製品と新製品の価格決定　独占的製品、競争製品および寡占製品の価格決定　長期価格決定と短期価格決定	同上
15	戦略的意思決定と設備投資計画	1 戦略的意思決定のための会計 戦略的意思決定　設備投資意思決定の特徴 2 設備投資意思決定の基礎概念 現金流出入額（キャッシュ・フロー）　現在価値の概念と利子　資本コスト 3 投資プロジェクトの評価法 投資利益率法　回収期間法　内部利益率法　現在価値法 4 リスク、リース、プロジェクト・コントロールと設備投資意思決定 リスクの評価　リース　プロジェクト・コントロール	同上

＝税　務　会　計＝（R）

〔主任講師：武田隆二（神戸大学教授）〕

全体のねらい

法人税は、法人の各事業年度の所得の金額を課税標準として法人に課せられる税金であるから、法人税法の骨格は課税所得の算定にある。本講座では、課税所得計算の内容を会計学的見地から基礎づけ、かつ、その性格を明らかにすることを狙いとし、企業会計と税務会計との違いを理解できるように進めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	税務会計の制度的基礎	法人にはなぜ税金がかかるのか、課税所得を算定するための法令の体系はどうなっているのか、法人税の性格および仕組み、税務会計の性格、さらに商法会計や企業会計原則を含む制度会計といわれる会計領域の特質について明らかになる。	武田隆二（神戸大学教授）
2	課税所得計算の基礎構造	課税所得はどのように求められるのかという所得計算の仕組み、収費・費用計算の基礎におかれる「一般に公正妥当と認められる会計処理の基準」の意味、さらに、税法と商法とを橋渡しする「確定決算主義」の意義について説明する。	同　上
3	損金概念と債務確定主義	課税所得は益金の額から損金の額を控除して求められるが、ここでの損金の概念を規定する法概念が債務確定主義である。債務の確定という法的に安定した状態で損金を認識・測定しよしようとする債務確定主義の内容を会計学上の発生原則と対比する形で明らかにする。	同　上
4	益金概念と権利確定主義	課税所得算定における積極要素としての益金の額は、損金の額と同様に、法的に安定的となった債権確定の段階で認識・測定される。このような権利確定主義が、会計学上の実現原則とどのような関連にするのかを明らかにする。	同　上
5	売買損益等と益金の計算	益金の額に算入される典型的な取引について取り上げ、検討する。売買損益（一般販売、特殊販売、請負工事等に係る損益、有価証券の譲渡益、固定資産の譲渡益）のほか、受贈益や受取配当金の益金不算入等の諸問題を扱う。	同　上
6	たな卸資産の税務	たな卸資産とは、固定資産とどのような点で違いがあるのか、たな卸資産の取得価額をどのように認識するのか（原価集合論）、さらにその取得価額を各期間にどのように割当てたらよいか（原価配分論）、評価減、低価法の適用等について扱う。	同　上
7	有価証券の税務	有価証券の範囲とその取得価額、転換社債と新株引受権付社債の取扱い、身代り株式の付替計算、原価配分と評価換え（低価法・評価減）等、有価証券の税務の特徴について解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	固定資産の税務	固定資産会計もたな卸資産会計と同様に、原価集合論と原価配分論とから成り立っている。原価集合論では固定資産の範囲とその取得価額の問題が、また原価配分論では減価償却方法、定額法から定率法への変更等、耐用年数の適用の問題が扱われる。	武田隆二
9	資本的支出・評価減・除却の税務	固定資産に係る支出が修繕費として扱われるか、あるいは帳簿価額に加えなければならないか（資本的支出）、技術進歩等により固定資産が陳腐化した場合どのように扱われるか、さらに、耐用年数をまたずに除却等された場合の取扱いについて解説する。	同上
10	圧縮記帳の税務	国庫補助金、工事負担金等で取得した固定資産、保険金で取得した固定資産、交換により取得した固定資産について、租税政策的見地から固定資産の取得価額を圧縮するという手続により当該圧縮額を損金の額に導入する方式の会計処理と効果について考察する。	同上
11	繰延資産の税務	代価の支払が完了し、役務の提供を受けたにもかかわらず、その効果が将来発現すると期待されるものが繰延資産といわれるが、その範囲、償却方法について説明するとともに、税法特有のいわゆる9号繰延資産について解説する。	同上
12	給与、寄付金、交際費等の税務	税務上問題の多い給与、寄付金、交際費、罰科金、貸倒損失等の諸費用の損金算入の条件について説明し、税務上の特別の要請である行政上の考慮、公平の考慮がどのように作用しているかについて明らかにする。	同上
13	リース取引に伴う損益	法人によるリース利用状況の普及に伴い、リースの仕組み、リース取引に係る法人税の取扱いを、賃借人側の会計処理問題とリース会社側の会計処理問題とを含めて解説する。	同上
14	引当金、準備金の税務	引当金は債務確定主義の例外として税法上六つの引当金に限って、その設定が認められている。これら引当金の特徴を個別に考察するとともに、措置法で容認する各種準備金のうち日常性のある準備金についてその特徴を説明する。	同上
15	企業会計と税務会計との差異	企業利益と課税所得との差異の原因を類型化して説明し、その差異の形態と効果について解明することによって、税務会計と企業会計との性格の相違を浮彫りにしたい。最後に、税効果会計についても簡単に説明することにしたい。	同上

＝産業と環境・資源＝（TV）

〔主任講師：黒澤一清（放送大学教授）〕

全体のねらい

産業と環境の関係を、産業をめぐる物的・技術的関係ばかりでなく、また社会的・文化的関係をも含む、より一般化された構造的視野で扱う。こうすることによって、今日見られる産業資源問題、あるいは産業環境問題の、一方ではそれの根源への科学的研究を全面的に進める見通しが与えられるばかりでなく、他方ではこれらの問題の解決への洞察をも与えることが可能になる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業社会の構造の解明：その根源構造	複雑な産業社会現象の背景にある構造を、産業社会のメタ構造（根源構造）として把握する。	黒澤一清（放送大学教授）
2	産業社会の構造の解明：その一般構造	産業社会のメタ構造を、人間と自然との相互作用系と、人間と人間との間の相互作用系、またそれぞれの内容をなす構造について考察する。	同上
3	産業－環境－資源系における法則の構造	問題の構造を諸法則の構造として把握する。	同上
4	産業－環境系への費用－便益分析の適用とその問題点	Benefit-cost analysis 手法による経済学と生態学との統合モデルを検討する。	同上
5	環境汚染管理の分析的理論とその問題点：その1、外部費用と市場メカニズム	環境汚染管理の基礎的概念である外部費用と市場機能の限界の問題を扱う。	同上
6	環境汚染管理の分析的理論とその問題点：その2、政策	汚染管理の諸方策とその効果・限界の問題を考察する。	同上
7	環境汚染管理の分析的理論とその問題点：その3、制度と法	汚染管理の制度・法制との基本問題を考察する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	産業 ― 地域社会系の構造の基本問題	第7回までの分析的理論を実践に移す具体的なフィールドとしての地域社会の構造について考察する。	黒澤一清
9	産業 ― 地域社会系の構造と実践	前回の考察を具体的な例について考察する。	同　上
10	意味論的環境	産業―環境系の構造を人間的実践の立場から考察するときそこに意味論的環境が現われる。	同　上
11	企業水準での環境・資源問題の構造：その1、構造と原理	産業―環境―資源系の問題を、産業の実践主体としての企業の水準に具体化する。	同　上
12	企業水準での環境・資源問題の構造：その2、経営資源とその効果	問題を経営資源にしぼってそれの構造と機能を解明する。	同　上
13	人間―産業―自然コンプレックスのシステム・シミュレーション	この表題をひとつの数理モデルによって実験する事例を示す。	同　上
14	環境・資源問題への国際的視野	産業と環境・資源といった問題は、今日すぐれて国際的な性格を持っている。それの構造について考察する。	同　上
15	総　　括		同　上

＝ 技　術　史 ＝ (R)

― 人間と技術のふれ合い

〔主任講師：飯田賢一（東京工科大学教授）〕

全体のねらい

人間の生活とともにある技術、生きてゆくためにものをつくることは、どの民族にとっても、あらゆる文化の基礎である。現代の技術がいかに高度に発達しても、人間の技（わざ）と思想（知恵）が原点である。人間にとって真の技術とは何か。この視座をふまえ、東と西の比較を交えつつ、日本の産業技術のあゆみを考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	開講にさいして ― 身近な生活の中に「技術」と「歴史を考える。	序説。歴史とは現在と過去とのつきることのない対話である、との見地から、技術とその歴史を学ぶことの意味を考える。 (1) 「技術」と「歴史」について (2) 技術史の三つの段階 (3) 箸一（あた）半と現代の技術。	飯田賢一 （東京工科大学教授）
2	現代をどうとらえるか	総論（その1）。現実は、目にみえるものと、目にはみえないが肝心なもの（本質）をとらえると、ほんとうに理解できる。世界技術史の大きな流れの中での現代日本を考える。 (1) 日本の戦後技術史の意味。 (2) 鉄砲をすてた日本人。 (3) ブータンの鋼の切手。	同　上
3	近世日本の技術と文化	西欧と同じく18世紀の日本には、すでに新しい産業技術を生み出す土壌が整えられており、それが近代技術受容の原動力となった。その諸状況を探究する。 (1) 18世紀の技術思想。 (2) 産業技術書の普及。 (3) 和算とそろばん。	同　上
4	東と西の科学と技術	近世ともなると、東洋（日本）でも西欧でもそれぞれの風土に即して個有の技術観が成立し、産業技術の道を開拓していった。歴史的にどんな道がよいかをかえりみる。 (1) 『天工開物』と『デ・レ・メタリカ』 (2) 江戸のメカニズム　(3) 産業革命の教訓	同　上
5	近代日本の夜あけ	アヘン戦争を機にくずれゆく中華帝国の情勢と、イギリス産業革命の進展が、日本を明治維新へ向わせる国際環境を形成する。これに対応し、日本技術の西欧化が開始される。 (1) 明治維新前後の世界。 (2) 西欧科学の受容。 (3) 洋　高炉への道。	同　上
6	東と西の出会い	日米修好条約交換のため太平洋を渡ったのが東と西の直接の出会いである。欧米の技術文化・機械文明を日本人はどううけとめ、また先進諸国は日本人に何を期待したか。 (1) 万延元年（1860年）の使節たち。 (2) 鉄道の開幕。 (3) 福沢諭吉の『民情一新』。	同　上
7	日本の産業革命(1)	日本の近代工業化を支えた最初の産業は、製糸であり綿糸紡績業である。在来技術はどのように生かされ、国産工業がおこったか。 (1) 絹の道 (2) ガラ紡の発明 (3) 国産第1号機関車の出現	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	1890年の技術選択 ― 近代日本の光と影	明治国家の体制が確立した1890年（明治23年）ともなると、近代日本産業には光とともに影の部分が発生する。日本の東と西でどういう技術の道が選ばれたか。 (1) 足尾鉱毒事件の発生。 (2) 近代技術教育の形成。 (3) 琵琶湖 水と京都市電。	飯田賢一
9	日本の産業革命(2)	軽工業から重工業へ。その転回点で重要な役割をはたした官営八幡製鉄所の確立過程の技術史的解明は、今日の第三世界工業化の問題に対して多くの示唆を投げかける。 (1) 重工業化の展開。 (2) 官営八幡製鉄所の成立・失敗・自立。 (3) 外人科学者の眼。	同　上
10	近代日本の発明のあゆみ	総論（その2）。1885年の特許制度施行以来の日本人の創造性のあゆみを概説し、近現代の産業技術発展の原動力は何かを考える。 (1) 風土と技術と文化 (2) 産業構造と技術水準 (3) 技術発展の原動力	同　上
11	大正デモクラシーと科学技術	第1次大戦前後の国際交流の高まりと大正デモクラシーの流れの中で、日本の産業技術はようやく科学的技術としての基礎を確立しはじめる。ことに理化学研究所の意義を考える。 (1) 理工学研究機関の成立。 (2) 民衆の生活と科学技術。 (3) 理化学研究所の意義。	同　上
12	両大戦間の時代	軍事主導型の暗い谷間といわれるアウタルキー時代にも、国際性・創造性豊かな先駆者たちの仕事が底流にあった。そのいくつかを発掘し再評価する。 (1) 北の大地をひらく。 (2) エレクトロニクスの先駆者たち。 (3) 工業美学の思想。	同　上
13	戦争から平和へ	平和経済の到来をまって、日本の技術革新は導入技術をテコとしつつ漸次自主開発技術へと向った。その担い手としての技術者たちの科学的精神と詩のこころにも言及する。 (1) 科学技術者であるまえに人間であること。 (2) 日本の技術革新。 (3) 自主開発技術へ。	同　上
14	日米比較技術史	1950～60年代の日本の鉄鋼や自動車産業は、米国1920～30年代のそれと歴史的に類似し、対比が可能である。日本の技術は米国にどう追いつき、追いこしたか？ (1) 米国が「日本」だったころ。 (2) 日米の自動車競争。 (3) 「重厚長大」と「軽薄短小」	同　上
15	おわりに ― 日本の技術100年	これまでの講義を総合し、この100年の日本の産業技術のあゆみを回顧し、あらためて今日の国際化社会の中での日本の課題を考える。 (1) 創造と市民社会 (2) 現代技術と伝統文化 (3) 第三世界の工業化と日本	同　上

＝システム工学＝(TV)

〔主任講師：浅居喜代治（大阪工業大学教授）〕

全体のねらい

大規模・複雑なシステムの計画・設計・運用のためのシステム工学への理解を深めるために、まず、その発達の歴史・アプローチ・応用例を示したのち、次にアプローチについて、各段階での方法論を、順次説明し、終りに最近の総合的な実際例を挙げて、系統的かつ具体的に講義を進め、システム概念の把握と、システム思考の基礎を与えようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 システムとは	システム工学の概要 システムの定義・特性・考え方	浅居喜代治 （大阪工業大学教授）
2	種々のシステム	システムの分類 種々のシステムの例	同上
3	システム工学とは	システム工学の発達・考え方・他のシステム科学や技術との比較	同上
4	システム工学のアプローチ	システム工学のアプローチと方法論の概説	同上
5	システムの表わし方（モデリング）	システム表現の考え方と注意 数学的モデルと図的モデル	平井一正 （神戸大学教授）
6	種々のシステム・モデル	システムモデルの分類 モデルの例	同上
7	構造モデル	構造モデルの意義と作成	寺野寿郎 （法政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ファジィモデル	ファジィモデルの意義・理論・種類 モデル作成上の注意	寺野寿郎
9	システムの特性と解析(1)	システムの基本的特性（安定性・可制御性・可観測性・感度）の意義と解析法	北森俊行 （東京大学教授）
10	システムの特性と解析(2)	システムの基本的特性（信頼性・保全性・安全性など）の意義と解析法	同　上
11	良いシステムの求め方 （システム最適化）	種々のシステム最適化法	浅居喜代治
12	シミュレーションと試行法	シミュレーションの方法 種々の試行法	同　上
13	システム・ダイナミクス	システムダイナミックスの考え方と理論 動的モデルへの適用	榛沢芳雄 （日本大学教授）
14	都市システムへの応用	システムダイナミックスによる都市モデル シミュレーションによるシステム計画	同　上
15	ＯＡ、ＦＡなどのシステムへの応用	ＯＡ、ＦＡなどのシステムの計画・設計・運用 本書の内容の要約	浅井喜代治

＝設　計　工　学＝（TV）

―解　析　と　総　合―

〔主任講師：塚田忠夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

本講義は、学問ならびに工業技術における設計の位置付けと設計の思考過程、及びその総合的評価について論じ、社会に貢献し得る設計を会得するための教養講義である。講義の構成は、設計工学の基礎事項、設計目的の具体化のための技術的基本事項、設計の総合化事項からなる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	設計と創造性	設計を工業社会におけるエンジニアリング的なアプローチからその位置付け、思考過程を論じ、そのための基本を述べる。さらに、設計は総合する技術であり、設計過程で強く要求される創造性についても述べる。	塚田忠夫（東京工業大学教授）
2	総合的評価を考えた設計	設計は一つの構想を図面にして完了ではない。複数の設計案を創り、その中から全ての機能的要求を総合的に評価して最適な設計案を選び、さらにそれを改良しなければならない。ここでは、情報積算法を用いて総合的評価を考える設計法について述べる。	中沢　弘（早稲田大学教授）
3	情報伝達手段	人間が創造した構想を他人に正確に伝える手段に言語（図面）がある。三次元空間での物体の正確な情報は、二次元的な広がりをもつ図面によって伝達される。そのために、国際的に共通な理解ができる図面の約束ごとや表現法の基礎を述べる。	塚田忠夫
4	コンピュータ援用設計（ＣＡＤ）	機械的作業を得意とするコンピュータと創造的思考を得意とする設計者との相互の長所を結合すれば効率のよい設計が行える。道具としてのコンピュータとこれを利用する人間とのかかわり合い、及び作業分担について述べる。	同　上
5	機械要素	次回以降に例示される設計構造の基礎知識として、種々の機械に共通して使用される部品の形態、機能、使用目的を述べ、さらに機械要素と機械設計の係わりを考える。	舟橋宏明（東京工業大学教授）
6	解析と総合	設計にあらわれる二つの正反対の思考プロセス、すなわち設計解の諸支配因子を細かく分けて調べる解析と既存の知識から最適解を得る総合について述べる。	同　上
7	機械運動系の解析と総合（Ⅰ）	機械を運動系としてとらえ、運動の変換・伝達の基本形式を示し、系内の物体の数や入力の数などの間に成立する関係を解析し、また数の適合条件を満たす運動系の総合を行う。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	機械運動系の解析と総合（Ⅱ）	機械運動系の入力および出力運動の量的関係について解析し、また所要の入出力関係を満足する運動系の総合を行う。	舟橋宏明
9	設計と材料の選択	材料の性質は、本来部品として完成された性能を目標に選ばれる。しかし、素材から種々の加工を経るに従ってその材料の性質は変化する。このようなことを考慮した材料の選択法について述べる。	塚田忠夫
10	強度設計	機械の寿命の究極状態は壊れることである。予想される使用条件に耐え、繰り返し力が働く条件下で、強度と剛性を保証する設計を述べる。	同上
11	精度設計	高精度機械では、その構成部品に非常に高い精度が要求される。機械全体の組合せ精度を損なわずに、部品に適切な精度の配分をする考え方を精度設計と云う。	同上
12	信頼性設計	設計対象の機械、部品、システムなどが、規定の条件のもとで、所定の期間にわたって、所要の機能を維持し、遂行する確率を高いレベルに保つための考え方について述べる。	舟橋宏明
13	設計と加工	設計するという行為は、ものをつくることが最終の目標であるから、性能・コスト・納期などが満足される最良の加工法を考慮した設計が行われなければならない。ここでは、設計者の観点から再構築した加工法の概要を述べる。	中沢弘
14	機能の独立性の原理	設計をする際に、本質的に良くない設計に貴重な時間を浪費してしまうことがよくある。このような無駄を防いでくれる原理がある。その一つが機能の独立性の原理である。具体的事例を通してこの原理の意味と重要性を述べる。	同上
15	トータル設計の原理	設計を成功に導くもう一つの原理がトータル設計の原理である。この原理は、新たな機能的要求が追加されたとき、それを含めて全ての機能的要求を同時に総合的に最適化を図るのがよい設計法であることを教えている。これを具体的事例を通して解説する。	同上

＝ 哲 学 思 想 史 ＝(R)

（西洋近代の哲学思想）

〔主任講師：中 埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義はルネサンスに始まって１９世紀半ばにいたる西洋近代の哲学思想をその内容とし、哲学者の思想内容の細部に立ち入るよりも、哲学的な問題意識の流れを全体にわたって辿ることを目的とする。とくに世界（自然と人間）像および知識（学問）論の展開に重点を置く。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	ルネサンス	ルネサンス期の思想の特徴を「開かれた宇宙観」と「新しい人間像」という観点からとらえ、自然科学と人文主義の持つ思想的な意味をさぐり、さらにこの時期の自然哲学と神秘主義的な宗教思想について考える。	中 埜　肇（放送大学教授）
2	フランシス・ベーコン	「経験」にもとづく新しい学問の提唱者であるフランシス・ベーコンが展開した新しい知の構造（学問のプログラムと分類、イドラ論、帰納法など）について述べ、その意味と限界を考える。	同　上
3	デカルト	「普遍学」を構想し、その方法論の基礎を徹底的な懐疑によって達せられる「自我」（＝理性）の確実性に求めたデカルトの形而上学について述べ、その二元論的な世界観の問題点を探る。	同　上
4	ホッブズ	機械論の立場からする演繹的な思考方法を、自然現象よりもむしろ人間社会の構造に向けたホッブズが、社会契約の必然性と国家権力の絶対性の思想に到達した過程を明らかにする。	同　上
5	スピノザ	「神に酔える無神論者」と称せられたスピノザの汎神論が、実は絶対無限な神に対する信仰の論理的な帰結であったことを明らかにし、彼の思想が哲学の模範とされる理由を考える。	同　上
6	ライプニッツ	十七世紀において最大のスケールを持つ総合的哲学者であったライプニッツが、無限量で極微の実体「モナド」にもとづいて構想した連続的で調和的な世界像の本質を明らかにする。	同　上
7	ロックと啓蒙思想	啓蒙思想の先頭に立つロックが十七世紀の独断的な理性論に対抗し、近代的な知識論の出発として、初めて人間の認識能力を批判的に吟味し、経験主義の哲学を定礎した意味を探る。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	バークリと同時代の思想家たち	ロックの知識論をさらに進めて、「在る」ことを「知られている」ことに還元する観念論の立場に達したバークリ僧正の信仰と思想を、同時代の思想との関連で考える。	中埜　肇
9	ヒ　ュ　ー　ム	ロックに始まる知識吟味作業の完成者であったヒュームが、経験主義の立場を徹底することによって懐疑論に接近したプロセスとその意味を、因果の問題などを手がかりにして考える。	同　上
10	フランス啓蒙思想とルソー	イギリスに始まった啓蒙思想がフランスに入ってラジカルなものになった過程および文明と進歩に寄せる啓蒙思想の信頼を徹底的に批判したルソーの立場について述べる。	同　上
11	ドイツ啓蒙思想とカント	啓蒙思想のドイツ的なあり方をフリードリヒ大王やヴォルフにおいて見たのち、啓蒙の精神を深めることによって独自の批判哲学を構想したカントの問題意識を『純粋理性批判』について考える。	同　上
12	カ　ン　ト（つづき）	カントの批判哲学の発展を『実践理性批判』、『宗教哲学』および『判断力批判』に即してたどり、カント哲学の画期的な意味について考える。	同　上
13	ドイツ観念論哲学	カントの哲学が後継者たちによって変容され、さらにフィヒテやシェリングの思考を通して、一元論的な体系構成へと発展するにつれて、哲学がロマン主義の色彩を濃くしてゆく過程について述べる。	同　上
14	ヘ　ー　ゲ　ル	ドイツ観念論哲学のみならず、近代の哲学思想全体がヘーゲルにおいて頂点に達したことを、彼の絶対理性（＝精神）の哲学とその方法である弁証法とについて考察する。	同　上
15	ショーペンハウアー・キルケゴール・マルクス	ヘーゲルの絶対理性の哲学を徹底的に批判して新しい哲学的視野を開き、近代から現代への思想的移行の先駆をなした三人の思想家の歴史的な意義について考える。	同　上

＝社会思想史＝(R)

〔主任講師：城塚　登（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキァヴェリの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城塚　登（共立女子大学教授）
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピュウリタニズムに引継れる。	同　上
3	民主主義思想の成立(I)	ピュウリタン革命に出合ったホッブスは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同　上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスにおいてロックは社会契約について考えを進め、「主権在民」の考え方を確立する。	同　上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想は、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想家に受けとめられ、啓蒙思想として展開。反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同　上
6	「市民社会」への反省	自由と平等を掲げたフランス革命は、流血と専制をもたらした。ヘーゲルは、スミスが解明した「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同　上
7	初期社会主義思想	イギリスのオウエンは労働者の生活改善に努め、協同生活・協同労働の村を開いて社会主義を説き、フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだとサン・シモンが主張した。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして人間の自己疎外克服を人間解放の課題とする。	城塚　登
9	マルクスの共産主義思想	唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く、資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアニズムと社会民主主義	イギリスの「フェビアン協会」は社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党は議会活動による労働者の権利拡大という路線を提出した。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	ロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。西欧では、ルカーチ労働者階級の主体的自覚の形成が課題とした。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、会社などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、人間はそれと対決しなければならないと説く。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀、資本主義社会は産業的合理化を進めたが、同時に非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもった。その病理を指摘したマンハイム、リースマンを見る。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会の人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義の新しい問題を指摘したハーバーマスをとりあげる。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	近代日本における社会思想の展開を概観し、日本の社会の現状を考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会化などが日本の特殊性とからみながら引き起す問題にどう対処していくか。	同　上

＝知識と学問の構造＝(R)

－知の構築とその呪縛－

〔主任講師：大森荘蔵（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

1つの中央構造線が現代学問の中央を貫いてこれを2つに分断している。自然科学と文化科学に、理科と文化に、そしてスノウの言う2つの文化に、更にこの分断は日常生活での人間観をも貫いている。この分断の基底には物と心の分裂があると私は考える。日本と西洋の両方にこの分裂の由来を尋ね、学問と人間観の一体性を回復することを試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	全体の予備的説明。西欧では16、17世紀の科学革命によって世界観の転換が始まった。これを「略画的世界観」→「細密世界観」への転換とみる。それが幕末維新期に日本で同じ転換を促した。これによって物の死物化、心身の分裂が生じた	大森荘蔵（東京大学名誉教授）
2	略画的世界観	略画的とは精密な計測、表面的な論理的整合性にこだわらぬこと。そこでは天地人は一体として共感し、人間は神、霊、死者と共生し、過去と未来は現在に溶融する。動物、岩石も霊を持ち、物は生き生きとして死物ではない。	同上
3	日本における略画世界	古代神話、本居宣長の国学、江戸時代のインテリを支配した朱子学、そして基流思想としての仏教、における略画世界観について述べる。荻生徂徠、伊藤仁斉三浦梅園、等にも言及。そして幕末に強くなった洋学受容について。	同上
4	西欧古代中世における略画的世界観	イオニア自然学、アリストテレスに例をとる。細密世界観への起動力をもっていたデモクリストの原子論はアリストテレスの圧力で押えこまれた。更に細密化の始動としての天文学、静力学、解剖学にも触れる。	同上
5	略画の密画化その始まり	「円」信仰の呪縛からの最初の解放としてのケプラー、アリストテレス的神学に対する挑戦としてのコペルニクス地動説。細密数量描写としてのガリレイの動力学。連続量描写を可能とした微積分学。	同上
6	略画の密画化不可避の過程	ガッサンディによる古代原子論の復活。化学の領域での原子論の確認。それに基づいた「点描法」（原子論的描写）の進展。ラプラスの天体力学。それらにより物はほぼ死物と化した。一方神は遙か天上に死霊は街を歩きにくくなった。	同上
7	密画化と数量化	外部自然の細密描写が人体に及ぶとき人体の死物化が進行する。レオナルド、ベッサリユウスの解剖学。それがデカルトの「人間論」に至って人体は動物機械となる。当然「心」は分離独立し、「機械の中の幽霊」（ライル）となる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	密画の陥穽 －物の死物化－	だがデカルトの予想が現実化するには300年を要した。血液循環、呼吸、食物消化、発生と遺伝、これらの生命現象の細密描写が完成するまで紆余曲節があった。人体が死物体となるには手がかかったのである。	大森荘蔵
9	感覚的性質のストリップ	神経伝導、脳の機能の細密描写は今だに進行中である。しかしそれが完成しても心の機械化とはならない。逆に心はますます死物人体から浮き上り人だまのように浮遊している。心身の分裂は増大し現代人の迷いとなっている。	同上
10	二元論の構造的欠陥	西欧の密画世界観の受容は主として江戸期の医師によって行われた（例えば解体新書）。その時以来今日までその人間観が最も抵抗をうけたのは当然である。その抵抗の模様を観察する。	同上
11	二元論批判	無限の宇宙の細密描写を現実にはなしえない。そのため公理的方法に近い理論化が必要となる。その理論による説明とは何であるか。一方略画的描法をも併用せざるをえない社会人文科学における描写方法（デュルケム、ウェーバー、リッケルト）。	同上
12	原子論による密画描写	細密描写の基本は世界の時間的変化の描写である。この「変化」の概念を分析すると、可能な描法は原子論的描法と場描法としかないことを論証する。現代自然科学はまさにこの論理的選択可能性の枠内で展開してきたのである。	同上
13	人体の密画描写と知覚因果説	ここで残された現代の問題、心身問題に入る。まず生命論ではアリストテレスの形相としての霊魂論に還るべきと考える。それは上記の略画、密画両世界観の「重ね合せ」、「重ね描き」として理解できるからである。	同上
14	物と感覚の一心同体性	一方心の問題もまた上記二描法の「重ね描き」として理解しうる。密画世界観によって死物化された物はそれによって略画世界観でもっていた生命を取り戻すであろう。これを記憶、感情、想像、美的感覚等において説明する。	同上
15	自然の再活性化	一方、外界からの刺激による脳の興奮それによって生じる知覚像、という生理学の細密描法を批判、それに代えて「脳透視」の見方を提出し、幻像や十人十色を説明する。これによって両描法の「重ね描き」が完成し、心と物は昔の和合に返る。	同上

＝行　為　と　規　範＝(R)

〔主任講師：黒田　亘(東京大学名誉教授)〕

全体のねらい

自然的存在であると同時に社会的、政治的な存在である人間は、さまざまな規範に従いつつ、それぞれの個性に応じた価値の実現を目指して生きる。そういう人間存在の多面性を集約的に表現する"行為"について、基本的な諸概念と諸問題の分析を試み、実践哲学の基礎的な構想を固める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 (所属・氏名)
1	行為について	「行為」という概念は自然現象を分類する概念とは性格を異にする。われわれが自分の意志行為についてもつ独得な知識にまず注目し、これを手がかりとして「行為」の分析を行う。	黒田　亘 (東京大学名誉教授)
2	規範について	意志行為とはすなわちまた「規則に従う行為」である。ひろく規則一般の観察と分類を試みたうえで、とくに「規範」と呼ぶべき規則に固有な性格と機能とを説明する。	同　上
3	価値と規範	「規範」と並ぶ実践哲学の主要概念は「価値」である。大観すれば西洋倫理思想史は、価値あるいは目的を中心とする学説と、規範ないし義務を根本とする学説のたたかいの歴史である。	同　上
4	「自然主義の誤り」について	二つの立場の対立は、行為の正誤をめぐる実践的推論の構造に根差している。アリストテレスの分析を範としてこの構造を考察し、ついでムーアの自然主義批判に論及する。	同　上
5	実践的知識の構造	ムーア以後の分析的倫理学では、まず事実と価値を切り離したうえで事実から価値への推論の正当性を論じるのが常道である。この問題設定の背後にある認識論的な前提を批判する。	同　上
6	意志行為の分析(1)	西洋認識論の主流をなす内在主義の正当化理論は、意志行為の原因と理由とを峻別する反自然主義の行為論と表裏一体である。これに対して筆者は意志行為の因果的解釈を目指す。	同　上
7	意志行為の分析(2)	「基礎行為」の概念を導入してアリストテレス学説の現代的な整理を試み、また行為の因果連関と出来事の因果連鎖とを区別して行為論の基本的な枠組みを整える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人格の概念	意志行為の因果連関は行為主体たる人格と、人格が設定する行為の目的とによって限界づけられる。とくに責任の問題との関連でこの事情を説明する。	黒田　亘
9	自由と決定	行為の因果的解釈は決定論や宿命論とは結びつかない。「選択の自由」や「予言破りの自由」に関する議論を批判的に検討し、人格的な行為の因果連関にそくして自由を捉えなおす。	同上
10	欲望と意志	善と知って行わず悪と知りながら行う「無抑制」の現象は、ソクラテスの昔から理性尊重の倫理学説にとっての試金石であった。因果説の観点からこの問題の首尾一貫した解釈を与える。	同上
11	快楽説をめぐって	行為を動機づける快・苦の現象は重要な検討課題である。快楽説に対する道徳的な反感や、要素主義の感覚心理学にはとらわれずに生活のなかの快苦の現実を直視したい。	同上
12	功利主義の検討	快楽または幸福の増大をもって行為の正しさの決定基準とする功利説について考察する。まず、「功利の原理」すなわち「最大幸福の原理」を正確に紹介し、解釈上の重要論点を挙げる。	同上
13	正義について	正義の諸規範を最大幸福の原理によって基礎づけ、正義を功利に帰着させることは可能であろうか。J・S・ミルの「功利主義論」に基づいて問題を提起する。	同上
14	嘘と約束	言葉に関する誠実の義務、という特殊な正義の規範について前章の問題を細かく検討する。これに関するカントの議論とミルの功利主義的解釈を対比し、それぞれの長所と短所を見る。	同上
15	契約と功利	功利説に鋭く対立するものとして契約説の正義論があり、道徳と政治をめぐる現代の理論的状況も両学説の対決を中心に動いている。この事情に注目しながら実践哲学の今後を語る。	同上

＝ 宗教学を学ぶ ＝（R）

〔主任講師：阿部美哉（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

宗教の世界は音によって満たされているともいえる。聖なる世界からのメッセージを媒介するものが音である。本講義においては、ラジオのメディアとしての特性を最大限に生かすために、放送講義の中心となる部分を宗教にまつわる音を使った録音構成によるものとする。印刷教材は、その音を問題提起として受けとめ、学生自らが考えていく学習の手引とする。15回の流れは、宗教の原初形態から近代宗教への宗教史的展開を追うものとし、それぞれの回において宗教に関する基本的な理論を紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	夜明け	講座を開始するに当たって、この科目の基本的な枠組を理解し、今後の学習に対処するための学習態度、特に、ラジオ番組の聞き方についての身構えを作る。 この講では、宗教学の性格およびその対象と方法について、基本的に理解し、初期の宗教学が、なぜ「宗教の起源」という問題を考察の対象としたかについて考え、さらに、「アニミズム」および「ヌミノーゼ」という概念について学習する。	阿部美哉（愛知学院大学教授）
2	祈り	第1回の講義において、我々の宗教的な感覚の基礎に、自然を恐れると同時にそれに引かれるという感情のあることを見てきた。今回は、そういった理解を踏まえて、最も基本的な宗教行為と考えられる「祈り」に焦点を当てる。 祈りが成立するためには、祈りの対象となる「聖なるもの」の観得が不可欠である。「聖と俗」という宗教的世界における基本的な二分法について理解する。	同上
3	呪術	祈りが、聖なるものへの祈願的な働きかけであるとするなら、「呪術」は、聖なるものへの操作的な働きかけだと見ることができる。超自然的な力を利用して、世界をコントロールしようとする手立てとしての呪術について理解する。 呪術の世界を感覚的にとらえるとともに、呪術と科学、呪術と宗教の関係および呪術の類型、えらびに呪術の現代的な現れ方について考える。	同上
4	集団的沸騰	シャーマン等に見られる呪術的な神がかりが、個人の次元において、日常的な意識の状態から脱するための試みであるのに対して、集団的な神がかりの状態が存在する。そういった状態は「集団的沸騰」と呼ばれる。それは、集団全体が日常的な意識を超えて、聖なる世界に近付く機会である。この集団的沸騰という考え方について理解するとともに、その具体的な現れである「祭り」について理解する。	同上
5	儀礼	人間が円滑な日常生活を送るためには、俗なる世界を超越した聖なるものをコントロールしていかなければならない。そのための手段が「儀礼」であり、儀礼が宗教の本質的な部分を構成していることを理解する。 さらに、儀礼の様々な形態について学び、それぞれの目的や特徴について考える。儀礼が頻繁に営まれるのは、世界の秩序を維持するためであり、危機を克服するための行為であることを理解したい。	同上
6	神話	儀礼の背後には、その儀礼の意味を語る「神話」が存在することを理解する。神話は、あらゆることの起源を語る聖なる物語であり、そこでは世界の誕生、人間の誕生、死の起源、穀物の起源等が説明される。また、善と悪との闘争について語る神話も多く、善の勝利と悪の敗退についての神話が人々の行動のモデルとして作用すること、また、神話は権力の歴史的な根拠を証明するためにも使われることを理解する。	同上
7	終末論とユートピア	神話と儀礼によって、カオスの上にコスモスを打ち立ててきた人間には、世界が再び元のカオスへと崩壊していくことへの恐怖が存在する。その恐怖から生まれてきた、世界の終わりへの信仰に「終末論」がある。終末論	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	メディエーターと教祖	聖なる世界からのメッセージを伝達するためには、その媒介者である「メディエーター」を必要とする。メディエーターは、「他界」からの死者のメッセージを伝達する場合もあるし、神霊のメッセージを伝達する場合もある。そういったメディエーターの多様な形態と、機能を理解するとともに、メディエーターの一つの形態であり現実の世界に新たな秩序を打ち立てようとする「教祖」という存在について理解する。	阿部美哉
9	物語と信仰	教祖を初めとする宗教者の生涯が、その死後、聖なる価値を有する「物語」として定着化され、信者の間に伝承されていくことを理解する。この聖なる物語は、信者たちにとっては人間の生き方、信仰生活のモデルであり、少しでもこの物語に示された生き方に近づくことが、目標とされる。「信仰」という行為に対して、こういった宗教者の人生の物語が深い影響を与え、具体的な指示を与える点について理解する。	同上
10	文化と社会	一つの源から始まった各宗教は、その勢力を拡大し、様々な「文化」や「社会」の間に広がっていくにつれて、土着・既成の宗教的世界の影響を受け、その形態を変化させていく。そこに成立するのが、各種の「教団」であり、教団は各地域や各民族の「宗教的世界」との融合・対立の上に展開する。したがって、既成の宗教的世界と対立し、その変革を志向する場合もでてくることになる。ここでは、宗教集団と文化・社会の関係を理解する。	同上
11	聖地と巡礼	宗教的な世界においては、空間は均質ではない。最も聖なる価値を帯びた空間が「聖地」であり、聖地は時に世界の中心として考えられる。「巡礼」は、聖なるものを求める行為の一つであり、その形態は様々である。聖地と巡礼との関係、巡礼と通過儀礼の類似性と異質性、そして巡礼における体験の特徴などについて理解する。	同上
12	教会と社会制度	宗教の発展とともに、聖なる世界にふれるための場が日常の世界で重要な位置を占めるようになる。「教会」の誕生である。教会は、神の存在を知らしめることによって、日常の生活に秩序を与える機能を果たす。そこに様々な儀礼、儀式が生まれ、制度が形成されていく。 教会の制度について考えるとともに、その社会制度との関係や発展の歴史について理解をすすめたい。	同上
13	セクトと世俗化	社会制度の変化は、宗教の世界にも大きな影響を与える。社会分業の進展は、宗教制度の多様化に結びつく。教義や儀礼の合理化が押し進められ、脱神話化がはかられる。生活の領域においても、俗なる世界が聖なる世界から独立し、聖なるものによる社会の公的領域の統合力は弱まってくる。様々な「セクト」が発生し、「世俗化」が進行する。セクトの発生と世俗化が、社会生活に及ぼす影響について理解する。	同上
14	神秘主義と内面化	宗教的な世界においては、様々な音がその世界を満たしていると同時に、すべての音が断ち切られた「沈黙」の状態が重視されている。沈黙は、すべての世俗的な音が排除された状態であり、その沈黙の中での祈りや、人と人、人と神との交りが宗教行為の目的とされる。超越的な聖なるものへ世俗のことばによって到達することは不可能であり、沈黙の中へかすかに聞こえてくる聖なる音はまさに「福音」に他ならない。この福音について理解する。	同上
15	家とアイデンティティー	これまでの学習を三点にしぼって振りかえってみる。	同上

＝構　造　と　解　釈＝（TV）

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

最初に現代の「構造主義」の考え方を追い、その特徴と限界を指摘する。次に、その前提となっている「近代科学」の背景と意義と射程を論ずる。こうして最後に、「解釈学」的哲学の持つ重要な意味について論究する。結局、全体としては、「構造」を取り出す考え方の解釈学的前提を明らかにし、逆に「解釈」の構造を解明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「構造と解釈」への問い	1. 普遍的なもの 2. 「構造と解釈」一般 3. 構造・解釈と存在了解	渡辺二郎（東京大学教授）
2	構造主義の登場	1. 構造主義とレヴィ＝ストロース 2. 構造主義における三つの前提	同　上
3	構造主義における構造	1. 構造の概念 2. 構造の一般的例示 3. レヴィ＝ストロースにおける例示	同　上
4	構造分析の実例とその帰結	1. 母方のおじと親族構造 2. 構造分析の拡大とトーテミズム批判 3. 野生の思考 4. その帰結―ブリコラージュと歴史批判	同　上
5	構造主義への批判	1. リクールによる批判 2. 主体性と客体性の交錯	同　上
6	近代科学の背景	1. 科学と人間の抗争 2. アリストテレスの存在観と自然観 3. 近代科学の登場	同　上
7	近代的知の射程	1. 思考法の革命 2. 世界統握の時代	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ラッセル批判	1. 存在概念の問題 2. 命題関数の性質としての存在 3. ラッセル批判	渡辺二郎
9	ディルタイと解釈学	1. 精神科学の基礎づけ 2. 了解と解釈	同　上
10	ハイデッガーの解釈学的現象学	1. 現存在の実存論的分析論 2. 解釈学的現象学の方法	同　上
11	了解と解釈と陳述	1. 存在可能の企投 2. 了解と解釈 3. 解釈の派生的様態としての陳述	同　上
12	語りと言葉	1. 存在の真実の露呈 2. 語りの世界 3. 言葉は存在の家である	同　上
13	詩人と芸術	1. 言葉の成るところ 2. 存在の真実の稔るところ 3. 詩人の使命	同　上
14	ガダマーの解釈学（その1）	1. ガダマー解釈学登場の背景 2. 主題と方法と立場 3. 『真理と方法』第一部の内容 4. 『真理と方法』第二部の内容（前半）	同　上
15	ガダマーの解釈学（その2）	1. 『真理と方法』第二部の内容（後半） 2. 『真理と方法』第三部の内容 3. 終わりに	同　上

＝存 在 と 価 値＝

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学の体系は、大別すると理論哲学、実践哲学、制作哲学の三部門から成る。この三部門を通じていずれに於いても最重要な概念は存在及び価値であろう。ところが従来理論哲学に於いて存在は形而上学が、価値は認識論がそれぞれ別々に問うてきた。そのため両者の関係は必ずしも明瞭ではない。本講義では一応歴史的にどのような考えがあったかを問うことも大切にするが、現代に生き未来を拓く人間として、存在と価値の問題をどのように考えているかを明らかにしたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 問題の提出とその現代的意義	存在と価値とを考えてきた伝統的類型を明らかにし、それらの思考が直面する現代的限界を示し、この古来の問題が持つ現代的意義を哲学的に考究する。	今 道 友 信（清泉女子大学教授）
2	歴史的省察 ― 交換可能性と分離的処理	存在と価値をめぐる最も基本的な考え方を歴史に求めるとすれば、両者の交換可能性並びに両者の分離的処理である。具体的に三人の哲学者に絞ってそれぞれの論理を明らかにする。	同 上
3	唯 物 論 的 考 察	18世紀に"関係"の哲学を樹立した唯物論者ディドロに言及し、主として現代の機械論哲学者ドゥルーズに於いて差異性を中心として、この主題を論ずる。	青 山 昌 文（放送大学助教授）
4	科 学 哲 学	20世紀に飛躍的展開を示している科学に注目する科学哲学、及び認識に新たな考察を試みる認知科学の視点から事実世界の変動と相関的に存在と価値の問題を考察する。	伊 藤 笏 康（放送大学助教授）
5	技 術 と 言 語	20世紀後半の哲学を刺激した問題の中で前々回及び前回の講義と連関して技術と言語とを取り上げ、それらをめぐる現代哲学の潮流の中で存在と価値がどのように組み合わされているかを論ずる。	今 道 友 信
6	間－客体性（Inter-objectivitas）	フッサールやマルセルがそれぞれの意味で主張した間・主体性の問題とは逆の視点から間・客体性の省察が必要になる。それが存在と価値と並ぶ第三の概念を導出するであろう。	同 上
7	脱存在論と倫理学	既にハイデガーに於いて西洋に於ける存在の哲学はある種のアポリアに直面した。それを予感してベルリンガーやジャンケレヴィッチは無の概念を深めた。それを一歩進めてレヴィナスは脱存在論の倫理学を第一哲学とした。その過程を論ずる。	橋 本 典 子（青山学院女子短期大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	芸術哲学としての美学	主として解釈を論ずる。確かに美の理念、美的経験や美的範疇も美学の重要な課題であるが、芸術は科学と並んで人間の営みとして最高のものであり、宗教と並んで神秘の啓示される限定された場なのである。この問題に関して存在の価値を問い、価値の存在を確かめる。	橋本典子
9	エコ・エティカ（Eco-ethica）	人間の生活環境の技術連関化に従い、技術は道具性を失なうことなく環境ともなった。この性格変化は単に価値の変化ばかりでなく、存在の変化でもありはしないか。人間はここで行為の原理をいかなる存在のいかなる価値に求めようとするのか。	今道友信
10	時の充実	悪とは時の非充実である。時の充実は、それならば単に善にとどまるのか。時の充実は存在や価値にとっていかなる意味があるのか。	同上
11	身の詩学	美しく創るために詩学がある。肉体でも物体でもない身という言葉がある。そしてそれは自身と言えば自我よりも自己そのものとなる。そのような身の美とは何であるか。そのような美を創る詩学とは何であるか。	同上
12	都市哲学（Urbanica）	日本では人口の８割が都市生活者である。世界の都市化は人間の存在状態と価値観に大きな変動を与えつつある。巨大都市と個人、巨大都市と国家とをめぐって、主題を探究する。	同上
13	死	生きる権利のある人間に死ぬ権利はないのか。存在理由を持つ人間に於いて死の理由はあるのか。自殺、所謂“安楽死”（エウタナジー）の可否をめぐって、存在と価値の人間学的展開を試み、更に自己同一性の先駆的終結としての死と差異性の問題を論ずる。	同上
14	存在を超えるもの	稀にではあるが人は寝食を忘れて何かにうち込むことがある。人は己れの存在を捧げるものをみつけた時幸せなのである。人間が自らの価値ある存在を捧げることによって何が出てくるのか。	同上
15	結び　人生経於ける哲学の意味	全体を総括し、講義のまとめを行なうと共に、その職業や社会的地位のいかんを問わず、人間として良く生きるために、即ち幸せに生きるために、人生に於ける哲学の意味を考える。	橋本典子

＝哲　学　的　人　間　学＝（TV）

〔主任講師：中　埜　　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな面で人間のありかたが深く問われている現代において、人間存在の本質を根本において、また全体として明らかにすることはきわめて重要な意味を持つ。哲学的人間学はこの課題を果たすことを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学的人間学の課題	哲学的人間学の目ざすもの、人間学と人類学との差異、哲学的人間学の視点と方法およびそれの簡単な歴史について述べる。	中　埜　　肇 （放送大学教授）
2	人間の独自性	宇宙における人間の独自な位置について考え、人間の独自性を不安定性、自覚性、両義性などの面について考察する。	同　　上
3	身体について	人間の身体が持つ意味およびそれの人間的な特殊性を哲学の問題として考える。	同　　上
4	心について	心とは何か、心は在るのか、心の働きはいかなるものか、意識と無意識などについて考察する。	同　　上
5	心身関係について	デカルト以来現代にいたるまで、単に哲学だけでなく、ひろく文化上の大問題である心と身体の関係について考える。	同　　上
6	生と死	人間にとって生と死は他の生物の場合と根本的に違う。この人間独特の生と死のあり方について論ずる。	同　　上
7	社会性について	人間の基本的な特質と言われる社会性の基礎にあるもの、社会秩序の本質、代表的な社会集団の人間学的意味について述べる。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	歴史性について	歴史意識の本質と生成、歴史と社会との関係、歴史観のあり方、世界史の問題などについて考察する。	中埜　肇
9	個体性について	神の死の前に立ったとき、明らかになる孤独性、それと人格や実存との関係、自我の問題などについて考える。	同　上
10	自然について	人間にとって自然とはなにか、自然に対して人間はどのように関わるか、その関わりが人間に何をもたらすかなどについて論ずる。	同　上
11	労働について	人間にとって労働はいかなる意味を持つか、労働はどのように進化するか、という問題を哲学的な視点から考察する。	同　上
12	技術について	人間は人間であるかぎり技術を用いる。そういう根源的な技術と現代のテクノロジーとの間にどのような発展があるかを哲学的に考え、また現代テクノロジーの人間学的意味を論ずる。	同　上
13	知識と情報	人間の文化の基礎にある言語の意味、それと思考との関係、さらに知識や学問などの知的な営みの本質について考える。	同　上
14	意味と価値	人間は事実よりももっと広大な意味の領域に生き、また価値によって定位されている。このことの持つ根源的な意義について論ずる。	同　上
15	文化と文明	文化と文明はどう違うか。それを人間の欲望充足のレベルの問題として考え、現代文明の本質に関する見解を述べる。	同　上

＝日本の言語文化＝（R）

〔主任講師：古田東朔（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代語自体を対象とし、それがどう作品とかかわりあいながら、言葉を形成してきたかの過程につってながめていく。文学作品はもちろん、それ以外の論説・翻訳・小学読本なども取上げ、話し言葉・書き言葉における問題点について考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の言語文化	全体の序説。明治期における書きことば（漢文訓読調・和文調）、話しことば（標準語・方言）、言文一致等々の問題が、政治・文化上の動きに応じて、どのように意識され、具体化されていったか。それらについての概観を行なう。	古田東朔（放送大学教授）
2	古代語と近代語	まず日本語の歴史について大きく見ておく。古代語と近代語に大きく2分されるが、それは係り結びの有無、二段活用の一般化に認められる。この外、音韻・敬語などの違いについても、合せて見ていく。	築島裕（中央大学教授） 山口明穂（東京大学教授）
3	江戸語から東京語へ	江戸時代のことばのうち、上方を中心とするものを上方語、江戸を中心とするものを江戸語という。特に後期の江戸語から明治期の東京語に至る過程、特色について見る。現代のことばの基礎となったものだからである。	坂梨隆三（東京大学助教授） 小松寺雄（埼玉大学教授）
4	「国語」意識の成立	日本の近代国家としての成立は、必然的に「国語」の意識を確立させるようになった。話しことば、書きことばにおいて、問題として考えられたことは、どのようなものであったのか。それらの数々について取りあげる。	古田東朔
5	方言と標準語・共通語(1)	明治以後、全国に共通に理解される標準的なことばとは、どのような理由から考えられたものであったか。また問題点はどこにあったか。江戸末期からの話しことばの実態と、その際の主張、政策等について、まずながめておく。	同上
6	方言と標準語・共通語(2)	前回のあとを受け、特に国語調査委員会による全国の音韻・口語法の調査（明治36）と、その影響について見る。その結果が口語の標準となる『口語法』編集に活用され、他方、方言研究の進展をうながしてきたことについて話し合う。	同上
7	口語と文語	「口語」といい、「文語」という。しかし、それはどのようなものをさしていうのか、外国語との接触による日本文法の再検討から始まり、やがて「文語」と「口語」という大きい枠が定められていく過程について見ていく。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言文一致の動き(1)	話しことばと書きことばを一致させようとする「言文一致」の運動は、明治になって盛んになる。江戸期の作品において、話しことばはどのように扱われていたか、幕末期から明治初期にかけて言文一致の主張や試みはどうであったのか。	清水康行（名古屋大学助教授）
9	言文一致の動き(2)	「言文一致」は小説だけに限られるものではない。前回を受け、三遊亭円朝の人情噺が速記により活字化され、『浮雲』に影響を及ぼした過程、その他の小説における試み、加えて小学校読本の談話体の文章などについて見る。	古田東朔
10	漢語・文語調の位置(1)	文語調は、長く書きことばにおいて正式のものとされてきた。それは、どのように用いられてきたか。まず、漢語の使用についてながめておき、ついで江戸期から明治初期の小説・論説・翻訳など、漢文訓読調の文章について見る。	同上
11	漢語・文語調の位置(2)	前回のあとを受け、明治期の漢文訓読調・和文調・その他文語調の小説等、いくつかについてながめる。当時文語調の占めていた位置について考えるとともに、口語と文語の文章の違い、以後の文章の大きい傾向についても見る。	同上
12	訳語による新しい世界	西欧との交渉、理解のため、訳語の試みがなされてきた。室町期・江戸期・明治前期において、和語・漢語による訳語がどのように用いられ、それによって相互の文化が理解され、新しい世界が紹介されていったかについて話し合う。	同上
13	言葉の登録	近代を切り開いていった言葉の数々は登録され、位置づけられていく。従来からのものに加えて、新しい訳語も含めた和語・漢語その他が、どういう観点からまとめられていったか。3つの辞書を取りあげ、その苦心のあとをたどる。	鈴木英夫（茨城大学教授） 進藤咲子（東京女子大学教授）
14	近代の敬語	対人関係の意識が、ことばにどう現われるか。明治以後の敬語には、かつての身分・地位によるものから人格の尊重へ、丁寧表現の増加へという傾向が見られるが、それらの主張や、実際の例、調査結果などについて見ていく。	古田東朔
15	言語文化のみかた	これまでのまとめ。まず、ことば自体について、これまでの資料による扱いについて見直し、ついで階層・地域・教育・男女差などによるみかた、さらに異文化を理解するためのことばの働きなどについて見ていく。	同上

＝上代日本文学＝（R）

〔主任講師：稲岡耕二（東京大学教授）〕

全体のねらい

万葉集は現存最古の歌集で、歌謡を母胎に文字による創作歌が生み出され、律令制度の確立とともに中国文化の刺激により文学的な洗練を加えていった100年余りの期間の、清新な　情歌を多数収録する。そうした万葉歌の形成・展開のすがたを、個々の歌人や作品に即して跡づけたい。今回は額田王・柿本人麻呂とその前後を扱う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	初期万葉歌の特徴 ―雑歌の場合―	万葉集の編纂年代 うたの記定 香具山の国見 宇智野の狩	稲岡耕二 （東京大学教授）
2	相聞歌の源流	歌垣の求婚問答　風土記に見る歌垣 天智朝以前の相聞歌とその特徴 初期万葉の相聞歌　磐姫皇后作歌について 初期相聞歌の特徴　天智天皇と鏡王女	同　上
3	額田王（一）	＜歌人の誕生＞　額田王の作品 宇治の宮処を回想するうた　旅立ちのうた 異伝をめぐって　共有・代作 情のゆくえ　近江遷都と額田王 近江遷都をめぐる状況　三輪山惜別のうた うたの＜場＞	身崎　壽 （北海道大学助教授）
4	額田王（二）	新しい役割　漢詩文の隆盛と額田王 蒲生野遊猟のおりのうた　相聞の演技 春秋競憐のうた　遊宴の花 額田王をめぐるなぞ　額田王に関する史料 鏡王・額田王の出自　額田王伝説 晩年	同　上
5	天智・天武天皇の歌とその挽歌	皇室歌人の条件　天智と天武　天智天皇の作歌　三山歌　立ちて見に来し　一五番歌のよみ　三山歌の構想　鏡王女との贈答 天武天皇の作品　吉野のうた　伝誦歌と創作歌　吉野の頌　藤原夫人との雪問答 天智・天武崩後の挽歌　女の挽歌　天智挽歌群　「天皇」への挽歌　天武挽歌	同　上
6	柿本人麻呂の生涯と作品	天武９年の七夕歌　吉備津妥女の挽歌 北山説と妥女の挽歌　人麻呂の長歌の性格 人麻呂の死　臨死歌　鴨山と依羅娘子 海のイメージ、山のイメージ　人麻呂の死地	稲岡耕二
7	人麻呂歌集（一） ―略体歌の性格―	二類の別 旋頭歌について 旋頭歌の創造 略体短歌について 新鮮な個の　情	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人麻呂歌集(二) —非略体歌について—	非略体歌の位置づけ <個の歌>への離陸 人麻呂調の形成 七夕歌の意義 二首の長歌	神野志 隆光 （東京大学助教授）
9	近江荒都歌と日並皇子挽歌	人麻呂作家の出発 人麻呂作歌の異伝 近江荒都歌の主題 日並皇子挽歌の思想 日並皇子挽歌の新しさ	同　上
10	石見相聞歌	石見相聞歌への視点 異伝と推敲過程 石見相聞歌の作品的完成と133歌 構成体としての構造と方法的意義 晩年作説をめぐって	同　上
11	泣血哀慟歌 —人麻呂の連作長歌—	亡妻挽歌の制作時期 人麻呂の妻たち 第1長歌 — 軽の妻の死 2首の短歌 第2長歌の構成	稲岡耕二
12	天智・天武の皇子女たち(一)	1 — 大伯皇女と大津皇子 — 大津皇子の謀叛事件　大伯皇女の悲傷　大津皇子と石川郎女　大津皇子の辞世歌 2 — 但馬皇女と穂積皇子 — 但馬皇女の悲恋　万葉集の「朝川」　穂積皇子による挽歌	同　上
13	高市黒人 —旅の歌人—	黒人の経歴 黒人の荒都歌 第三の旅の歌 黒人の鶴と赤人の鶴 八十湊の鵠	同　上
14	天智・天武の皇子女たち(二)	1 — 志貴皇子 — 神吹きかへす　連体形の用法　難波行幸時の歌　の御歌 2 — 長皇子 — 佐紀宮の宴歌　参河行幸時の歌　「あられ松原」と「早見浜風」 3 — 弓削皇子・紀皇女 — 三船の山の雲　紀皇女との恋	同　上
15	宴とみやび —長意吉麻呂と石川郎女	巻16の物名歌 意吉麻呂の応詔歌 三輪の崎の雨 石川郎女と田主との贈報歌	同　上

＝和文古典Ⅱ＝(R)

―王朝の文学―

〔主任講師：秋山　虔（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

400年にわたる平安王朝の文学の主たる担い手は平安京の貴族たちであったが、彼らによって創出された諸形態の文学の高度の達成は、後世に規範的意味をもちつづけ、日本的美意識の源流となった。そうした王朝文学の形成・展開の姿をさまざまの視角から追求する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	王朝文学の始発	前代の遺響　桓武新政　延暦の遣唐使　唐風謳歌　菅原道真	秋山　虔（東京女子大学教授）
2	『古今集』とその時代	『万葉集』以後の和歌　平安初頭の天皇と和歌　興福寺の法師の長歌―和歌の衰微　宮廷圏外における和歌　漢詩人にとっての和歌　藤原良房の役割　六歌仙　六歌仙以後の歌人と和歌　宮廷詩としての和歌の復活　和歌と漢詩　延喜の治世と『古今集』の成立　『古今集』仮名序　撰者達とその歌風　『古今集』の組織・内容	久保田　淳（東京大学教授）
3	物語文学の誕生―『竹取物語』と『伊勢物語』―	物語文学の誕生　『竹取物語』の成立と口誦伝承　『竹取物語』の創造性　漢文伝と物語文学　歌がたりと歌物語　『伊勢物語』の成立　歌物語の衰退	秋山　虔
4	日記文学の成立と展開―『土佐日記』と『蜻蛉日記』―	日記と日記文学　『土佐日記』―仮名文と女筆仮託　『土佐日記』にこめられた心　『蜻蛉日記』の世界と成立事情　古物語の超克としての身の上の日記　女流日記の諸作品	同上
5	虚構物語の成熟と基盤	物語の氾濫　物語は女性の心を慰めるもの　『うつほ物語』の世界と主題　『うつほ』物語の成立と作者　『落窪』物語の趣向	同上
6	『後撰集』、『拾遺集』の位置	『後撰集』の成立　『後撰集』成立の背景　『後撰集』の特色　梨壺五人の和歌に対する意識　物語的傾向　歌物語・説話集との関わり　花山院文学圏と『拾遺集』　『拾遺集』と『拾遺抄』　『拾遺集』の内容　万葉の古歌の意味　平明率直な歌風　和歌表現の可能性への模索　三代集の意義	久保田　淳
7	清少納言と『枕草子』	『枕草子』の成立事情　『枕草子』の特異性　中宮定子付の女房・清少納言　清少納言と中関白家の風儀　『枕草子』とその政治的背景　美の世界の自立	秋山　虔

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	紫式部と『源氏物語』の世界（一）	紫式部の生年・家系　紫式部の才質　紫式部の結婚、夫との死別　想像世界の理想像・光源氏　光源氏の人生の始発　好色者としての光源氏　光源氏とその准拠　『源氏物語』第一部の結末	秋山　虔
9	紫式部と『源氏物語』の世界（二）	宮仕え女房・紫式部の孤独　『源氏物語』創作の続行と第二部の世界　「宇治十帖」の世界と到達　『源氏物語』はどう読まれたか　紫式部の晩年	同上
10	『源氏物語』以後	『源氏物語』の屹立　『源氏物語』と『更級日記』　『更級日記』定家本の奥書　『夜の寝覚』　『浜松中納言物語』　『狭衣物語』後後期物語の位相　短編物語の傑作	同上
11	女流歌人と『後拾遺集』	一条朝の歌人群像　和泉式部と赤染衛門　和泉・赤染優劣論　その他の女流歌人達　後冷泉朝の和歌　白河天皇における政治と和歌　『後拾遺集』撰者藤原通俊　『後拾遺集』の部位の特色　『後拾遺集』の作者と作品　『後拾遺集』への批判とその意義	久保田　淳
12	和歌文学の革新―『金葉』『詞花』『千載』の時代―	白河院政の時代・社会　堀河朝の和歌　百首歌の方法と堀河百首・永久百首　文学遊戯から文学批評へ　和歌伝統の回顧　『金葉集』の成立　『金葉集』の新傾向　崇徳院と和歌　『詞花集』の成立　「武者の世」の始まり　『千載集』の成立　『千載集』の作者と作品	同上
13	歴史物語の諸相―『栄花物語』と『大鏡』―	『源氏物語』から歴史物語へ　『栄花物語』の内容と特質　後宮中心の宮廷史　『大鏡』―紀伝体の歴史　＜昔語り＞と＜言談＞の場と伝統　戯曲的構成と＜語り＞の方法　『大鏡』の歴史意識と表現　文体	多田一臣（千葉大学助教授）
14	説話文学の誕生―『日本霊異記』―	神話・伝説から仏教説話へ　『日本霊異記』―＜集＞の論理と撰述意図　歴史意識と自土意識　＜信＞の構図　私度僧の活動と『日本霊異記』　景戒の危機意識	同上
15	『今昔物語集』の世界	『今昔物語集』の成立まで　『今昔物語集』とその組織　院政期の意味　秩序と反秩序　話末評語の矛盾　＜語り＞の様式　文体の問題　文学史的意義	同上

＝和文古典Ⅲ＝(R)

―中世文学の展開―

〔主任講師：久保田　淳(東京大学教授)〕

全体のねらい

四百年に及ぶ中世文学の展開を、各時期の政治的社会的事件、文化思潮などと関連づけながら、具体的作家や作品に即して、明確に跡づける。

回	テーマ	内容	担当講師 (所属・氏名)
1	王朝から中世へ	内乱と平安京―新都市鎌倉の出現　中世文学の始発　『梁塵秘抄』の成立と後白河院　『梁塵秘抄』の世界　『今鏡』の乱世に対する意識　『水鏡』の意味するもの	久保田　淳 (東京大学教授)
2	新古今時代Ⅰ	新古今時代の範囲　西行の生涯　藤原俊成の生涯　西行と俊成の文学　九条家と新進歌人達　後鳥羽院歌壇の形成　『新古今和歌集』の成立　新古今歌人の方法	同　上
3	新古今時代Ⅱ	藤原定家の文学活動　その他の新古今歌人　藤原実朝と『金槐和歌集』　承久の乱　『新勅撰和歌集』と『百人一首』　法然・親鸞　明恵・道元　日蓮・一遍	同　上
4	鴨長明とその周辺	隠者たち　長明の出発期　数寄者として　新古今時代　草庵生活　『方丈記』の成立　源泉　『無名抄』　『発心集』　『宝物集』と『閑居友』	三木紀人 (お茶の水女子大学教授)
5	軍記物語の世界Ⅰ	転換期の歴史意識　軍記物語の成立　『保元物語』の特質とその世界　『平治物語』の特質とその世界	栃木孝惟 (千葉大学教授)
6	軍記物語の世界Ⅱ	『平家物語』の成立と展開　序章の意義　悪行者清盛の形象　平家嫡統の人人―重盛と維盛　勇将の生と死―義仲と義経　『平家物語』の作者　『承久記』の位置	同　上
7	説話の時代	説話の時代　開書類と『古事談』　『宇治拾遺物語』　貴族説話集のさまざま　『十訓抄』　『古今著聞集』　その後の仏教説話集　無住の著述　南北朝期以後	三木紀人

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	京と鎌倉	京と鎌倉　旅と文学　『海道記』と『東関紀行』　『十六夜日記』と『うたたね』　『信生法師集』と『飛鳥井雅有日記』　女流日記の特質　『弁内侍日記』と『中務内侍日記』　『とはずがたり』の世界　『竹むきが記』	三角洋一 （東京大学助教授）
9	南北朝動乱期の文学	両統迭立から南北朝動乱へ　『神皇正統記』と『梅松論』　『増鏡』の王朝文学的傾向　『太平記』の成立とその世界　歌の家の分裂　京極派和歌と『新葉和歌集』	久保田　淳
10	兼好とその前後	兼好の登場　出自と環境　遁世生活　歌壇の中で　『徒然草』の成立　序の問題　『徒然草』の展開　源泉　現世をこえるもの　兼好の晩年　死とその後　『一言芳談』　二条良基	三木紀人
11	中世芸能の世界Ⅰ	中世芸能　歌謡の流れ　今様　『梁塵秘抄』　早歌　早歌の題材・出典　早歌の展開　小歌の時代　小歌　狂言の小歌	橋本朝生 （山梨大学助教授）
12	中世芸能の世界Ⅱ	能・狂言の成立　能の形成　狂言の形成　能の作品　能作の流れ　花と幽玄　狂言の作品　狂言の素材　共感の哄笑　曲舞・幸若舞曲　舞曲　舞曲の素材	同上
13	物語の変貌	中世の物語の概観　『無名草子』と院政期の物語　『松浦宮物語』　『風葉集』と鎌倉期の物語　『石清水物語』と『我が身にたどる姫君』　改作の物語　『住吉物語』　『風葉集』以後の擬古物語　擬古物語から御伽草子へ　御伽草子の名称と特色　公家物の御伽草子　宗教物　武家物　『曽我物語』と『義経記』　庶民物・外国物・異類物	三角洋一
14	中世の心と言葉	古代語の伝統　口語体の発生　東ことばの混入　近代語論理の発展—条件表現　近代語論理の発展—格の意識　まとめ	山口明穂 （東京大学教授）
15	中世から近代へ	戦国乱世から家康の天下統一まで　文化の地方伝播と地方都市の形成　欣求浄土から生の肯定へ　俳諧の連歌　狂歌の成立と展開　歌謡・芸能における近世への移行	久保田　淳

＝ 和 文 古 典 Ⅳ ＝（R）

― 近 世 の 文 学 ―

〔主任講師：村松友次（東洋大学短期大学教授）
清登典子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

徳川幕藩体制のもと、商品経済の発達と識学層の増大に支えられて花開いた近世文学。その形成と展開の種々相を、中心的な作家・作品を取り上げながら検討してゆく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近世文学の胎動と仮名草子	1 近世文学の胎動 揺れる歌枕／憂世から浮世へ／出版ジャーナリズムの誕生 2 仮名草子の世界 パロディの文学／中世風の物語と新しい風／仮名草子の作者たち／浅井了意	篠原 進（青山学院大学助教授）
2	浮世草子と西鶴(1)	1 西鶴浮世草子の誕生と展開 俳諧のアバンギャルド／俳諧師西鶴／世之助の誕生／流行作家への道／疾走する西鶴／求心化する主題／西鶴工房	同 上
3	浮世草子と西鶴(2)	1 西鶴晩年の世界 桜影かなし―沈潜の季節／冬の西鶴―晩年の世界 2 西鶴の同時代人と西鶴以後の作者たち 西鶴の残香―本屋作者たち／マイナーの季節／やつしの世紀――風と其蹟／八文字屋の光と影―抗争へ／享保の其蹟／八文字屋の落日／気質物の復活	同 上
4	近世初期俳諧	1 近世俳諧の源流 俳諧の連歌／俳諧の始祖 2 貞門俳諧 松永貞徳／近世俳書の出版／貞徳の俳諧観 3 談林俳諧 反貞門俳諧の台頭／西山宗因／談林の俳風／談林俳諧の史的意義	清登典子（放送大学助教授）
5	芭蕉の世界(1)	1 芭蕉の出発 2 新風の旗手として 3 深川退隠 4 蕉風確立―『冬の日』時代 5 旅の芸術化―野ざらし紀行絵巻 6 『おくのほそ道』旅中、旅後の思索	村松友次（東洋大学短期大学教授）
6	芭蕉の世界(2)	1 蕉風円熟―『猿蓑』時代 2 軽み―『炭俵』時代 3 虚構の作品『おくのほそ道』 4 芭蕉の終焉	同 上
7	文人の時代 ―文人の成立と徂徠学―	文人成立の背景／文人とは／徂徠学の登場／徂徠学の文学観／成立期文人の典型／文人精神の余波	揖斐 高（成蹊大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近世和歌と国学	古今伝授と堂上歌壇の成立／堂上和歌と地下歌人／反堂上派の気運／国学の成立と万葉風の提唱／本居宣長の「もののあはれ」論／京都歌壇の新風／幕末の個性的な歌人たち	揖斐　高
9	前期読本と秋成	読本成立の背景／都賀庭鐘と『英草紙』／建部綾足の読本／上田秋成／『雨月物語』／『春雨物語』／前期読本の特色	長島弘明（名古屋大学助教授）
10	俳諧中興期と蕪村	1　蕉風中興運動 芭蕉没後の俳諧／蕉風中興運動／運動の担い手たち／運動の終焉 2　蕪村の人と芸術 蕪村の生涯／夜半亭継承／蕪村の立場／蕪村の創作意識／蕪村俳諧の世界／蕪村と芭蕉／発句中心の時代	清登典子
11	化政期俳諧と一茶	遊俳と業俳／我と来て遊べや親のない雀／西国行脚と『父の終焉日記』／化政期俳諧と一茶調／『七番日記』『おらが春』／一茶の評価	村松友次
12	狂歌・川柳	1　狂歌 近世以前の狂歌／近世初期の狂歌／狂歌と落首／貞門俳人の活躍／狂歌と他のジャンルの関係／貞柳とその一門／天明狂歌／天明狂歌以後 2　川柳 川柳の名称／柄井川柳／『誹風柳多留』の刊行と「川柳の成立」／「川柳」の世界	長島弘明 清登典子
13	戯作の世界(1)	戯作とは／文運東漸／談義本／酒落本／赤本・黒本・青本／黄表紙	板坂則子（群馬大学助教授）
14	戯作の世界(2)	寛政の改革／戯作の変化／後期黄表紙／合巻／人情本／天保の改革／滑稽本	同上
15	後期読本と馬琴	後期読本の形成／京伝の読本／馬琴の読本／その他の読本／読本の衰退	同上

＝近代文芸Ⅰ＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代文学における成熟期－１９１０年代－の作家（漱石・鷗外・荷風・谷崎・志賀・有島・藤村・秋声・芥川・啄木ら）と時代との関連、主要作品の構造と分析を行なう。１９１０年代の自然主義・反自然主義との対応、作家の芸術と実生活のかかわりを把握。また「白樺」「早稲田文学」「新思潮」「青鞜」など主要雑誌の検討

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「白樺」の出発 －大正文学の－ 発端 (1)	武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの「白樺」の前史と「白樺」初期の特色の究明。明治の「公」に対する大正の「私」の意識。文学と美術との接点。志賀の初期の日記・ノートなどの検討。「お目出たき人」と「かんかん虫」と「網走まで」の作品分析。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	「三田文学」をめぐって －大正文学の 発端 (2)	「三田文学」創刊号における永井荷風の「紅茶の後」の魅力と荷風の文学意識の検討。大逆事件における荷風を中心とする「三田文学」「スバル」関係者（佐藤春夫ら）の反応。「早稲田文学」との対比。パンの会の動向（これも美術と文学とが関連）。	同上
3	谷崎潤一郎の出現 －大正文学の－ 発端 (3)	谷崎潤一郎の最初期の戯曲と小説の分析。「刺青」と「秘密」などが中心。潤一郎と漱石とのかかわり－とくに「門」をめぐって－。「白樺」との差（「白樺」の場合は漱石では「それから」が軸となる）	同上
4	啄木と大逆事件 －明治の終焉－	啄木の代表的日記「ローマ字日記」の分析。「九月の夜の不平」から「呼子と口笛」に至る啄木の大逆事件への反応の点検。白秋の「思ひ出」との比較。鷗外の大逆事件への反応との比較。啄木と現代（寺山修司などを含めて）。	同上
5	漱石文学の魅力 －「夢十夜」「それから」「門」を中心に－	１９１０年前後の中期の漱石の作品分析。とくに「夢十夜」における作品の意味づけ。漱石とその門下生及び後進の文学者との関連、漱石の初期作品（「吾輩は猫である」や「草枕」など）と中期作品の内容と文体の相違。	同上
6	漱石文学の魅力 －「道草」と「明暗」を中心に－	漱石の晩年の二つの長編小説をこまかに分析し、一般によく知られている他の初期・中期の作品よりさらに意味があることに力点をおく。	同上
7	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	「暗夜行路」のプラスの評価とマイナスの評価をめぐって、作品の魅力をさらに精細に検討する。最初は「序詞」と前篇の構造、伏線、文体の面からはじめる。その前身である草稿の類（私小説「時任謙作」といわれているもの）も検討の材料に用いる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	後篇の展開と「大山」体験の意味をさぐる。数多くの志賀研究史とつきあわせ、この作品の影響と受容の歴史もあわせて考える。	紅野敏郎
9	「或る女」の検討－有島文学の特色－	「暗夜行路」と対比しつつ、有島の「或る女」の構造を分析する。前後篇をあわせて行ない、この作品の時代背学となった明治３０年代についても考えていく。また「白樺」に連載した前篇にあたる「或る女のグリングス」との対比も行なう。	同　上
10	藤村と秋声－「家」と「あらくれ」をめぐって	第二次「早稲田文学」の特色を検討しつつ、「家」の構造と「あらくれ」（「新世帯」など他の作品も含む）の構造を比較検討する。自然主義文学の特質、とくにその執拗なねばり強い人生とのかかわりに力点をおく。	同　上
11	花袋と白鳥－「田舎教師」と「何処へ」をめぐって	花袋における人生の苦悩と「田舎教師」との関連。回想集「東京の三十年」も材料に用いる。白鳥の人生観と「何処へ」との関連。明治３０年代の青年と４０年代の青年の意識の差に注目。白鳥の回想集「自然主義文学盛衰史」も材料に用いる。	同　上
12	文学史における大正５年（1916）の意味－近代と現代の接点－	鷗外の晩年の歴史小説の検討。ついで宮嶋資夫の「坑夫」、中條百合子の「貧しき人々の群」をあわせ眺め、白樺派、耽美派の全盛、自然主義文学者の執拗な奮闘をも視野に入れ、漱石の死（１２月９日）でしめくくられる大正５年の多層的な位置づけを行なう。	同　上
13	「青鞜」「奇蹟」「近代思想」の問題点－冬の時代と女性運動－	平塚雷鳥らの「青鞜」の出発と展開。広津和郎らの「奇蹟」の出発と特質。大杉栄、荒畑寒村らの「近代思想」の冬の時代における仕事の意味。堺利彦の「へちまの花」、土岐哀果（善麿）の「生活と芸術」にも言及。	同　上
14	芥川文学の特質－短編小説－の問題点	独歩や直哉を経て芥川において短編小説の魅力が発揮され、梶井基次郎・井伏鱒二らに引きつがれていく。初期の作品群を中心にする。第三次・第四次「新思潮」の検討もあわせ行ない、菊池寛・久米正雄・豊島与志雄らとの比較も考える。	同　上
15	「赤い鳥」「新しき村」「種蒔く人」の対比－ユートピアとプロレタリア文学－	鈴木三重吉の「赤い鳥」の運動、武者小路の「新しき村」の運動は同じ１９１８（大正７）年。この二つの根底にあったものをさぐり、ついで１９２１（大正１０）年よりはじまる「種蒔く人」の意味を探究する。	同　上

＝近　代　文　芸　Ⅱ＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

「近代文芸Ⅰ」で扱えなかった近代文学創出期の文学者坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外・北村透谷・樋口一葉・国木田独歩からはじまる近代の短編小説の系譜、正岡子規・与謝野晶子・島崎藤村・北原白秋・斉藤茂吉・萩原朔太郎ら近代の詩歌を中心に活躍した人を作品の特質を追求する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	近代文学の出発 1 逍遙と二葉亭	逍遙の文学論「小説神髄」と実作「当生書生気質」との関連と、逍遙の影響を受けた二葉亭の文学論「小説総論」と実作「浮雲」との関係を対照的に把握し、近代文学創出に際しての二人の文学者の同質と差異を探索する。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	近代文学の出発 2 森鷗外	ドイツより帰国した森鷗外のドイツ土産三部作の一つの「舞姫」をとりあげ、その作品構造を分析するとともに、官僚としての森鷗外と文学者としての森鷗外の心理の二重性をさぐる。	同上
3	近代文学の出発 3 北村透谷	自由民権運動に参加し、やがて離脱、政治から文学への道を歩いた透谷のペンによる活動を検討する。とくに透谷の評論活動は「文学者」というものの基本姿勢を如実に示す。近代の文学者のなかで理想と現実の矛盾に悩み、自殺した最初の人。	同上
4	近代の短編小説 1 樋口一葉	一葉の「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などをとりあげ、短編小説の切れ味の鋭さ、その魅力について言及。一葉の場合、西鶴の影響を受けた、テンポの早い雅文脈の文体、その物語性の展開について考察する。一葉の日記にも触れる。	同上
5	近代の短編小説 2 国木田独歩	詩から散文に移った独歩の資質、日記「欺かざるの記」と佐々木信子との恋愛、そのあと展開する短編小説「武蔵野」「忘れ得ぬ人々」「非凡なる凡人」「号外」「竹の木戸」などをとりあげ、独歩の短編の特質を検討する。	同上
6	近代の短編小説 3 正宗白鳥	読売新聞記者より作家に転じた正宗白鳥の初期の短編－「玉突屋」「塵埃」「五月幟」－などをとりあげ、自然主義文学者の皮肉な眼で見た人生の断片、それを描くつき放した手法について考察する。	同上
7	近代の短編小説 4 志賀直哉	「或る朝」のような日常生活のなかの不快から快へ切りかわる心理、「清兵衛と瓢箪」に見られる子供の豊かな肉眼による美の発見とそれを圧殺する大人たち、その他「祖母のために」「正義派」「范の犯罪」「城の崎にて」「真鶴」など簡潔無比な表現の技法について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代の短編小説 5 井伏鱒二	処女作といわれている「山椒魚」や早稲田時代の友人とのかかわりを描いた「鯉」、また「屋根の上のサワン」はじめ、ユーモラスでかつ諷刺の利いた詩情を含んだ井伏作品の特質を考察する。	紅野敏郎
9	近代の短編小説 梶井基次郎	「青空」創刊号に載せた「檸檬」を中心に若くして亡くなった梶井の名作を分析、昭和の文学者たちにその短編の心象風景は大きな影響を与えた。	同上
10	近代の詩歌 1 正岡子規	俳句と短歌の本質的な改革を行なった子規の病床生活の実体とその実作を検討、あわせて子規のエッセイの持つ写生文の力について考察する。	同上
11	近代の詩歌 2 与謝野晶子	「明星」の史的位置づけと、晶子の「みだれ髪」を中心に、歌人としてのわくをはずれた豊かな才能や女性としての生きかたの迫力などにも言及する。「明星」のなかから、啄木も高村光太郎も北原白秋も木下杢太郎も生まれてくる。	同上
12	近代の詩歌 3 島崎藤村	北村透谷のあとを受け、自殺せずに泥にまみれながらも生きつづけた藤村の初期の詩集について考察する。とくに「若菜集」から「落梅集」に至る四つの詩集を吟味する。	同上
13	近代の詩歌 4 北原白秋	詩人と歌人を兼備、さらに童謡や散文活動など多面な才能を発揮した白秋の初期の詩集「邪宗門」「思ひ出」と、歌集「桐の花」をあわせて考察する。郷土柳河とのかかわりで、文学と郷里（出身地）との関連もここで考える。	同上
14	近代の詩歌 5 若山牧水と斉藤茂吉	子規や伊藤左千夫のあとを受け、「アララギ」の発展につとめ、処女歌集「赤光」をまとめた茂吉の生きかたとアララギ的写実の方法と、九州日向より上京し、旅と酒を愛した若山牧水の流れるような自然のリズムを対比させる。	同上
15	近代の詩歌 6 高村光太郎と萩原朔太郎	光太郎の処女詩集「道程」の分析、また白秋の影響より出発した朔太郎の初期の歌集「ソライロノハナ」及び作表作「月に吠える」の検討。	同上

＝漢　文　古　典　Ⅰ＝(TV)

―江戸時代後期の儒学―

〔主任講師：頼　惟勤（千葉経済大学教授）〕

全体のねらい

日本において作られた漢詩・漢文について、江戸後半期を取り上げて諸作品を講読し、関連事項に及ぶ。これによって、日本漢学の日本文化において占める役割りが若干なりとも解明できることを目指すものである。各回とも講義の糸口を原則として頼春水『師友志』から取り、兼ねてその人の諸作品と関連分野とに及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	柴野栗山と赤壁会	柴野栗山（1736 － 1807）江戸昌平黌の儒官。寛政の学制改革に当った。享和2年10月の赤壁会の盛事を紹介する。	頼　惟勤（千葉経済大学教授）
2	尾藤二洲と白楽天の詩	尾藤二洲（1747 － 1813）昌平黌の儒官。晩年に白楽天の詩を好み、同僚の古賀精里との間で応酬した。その間の経緯を概観する。	同　上
3	古賀精里と通信使	古賀精里（1750 － 1817）昌平黌の儒官、肥前・佐賀の出身。曽て林述齋に従い、対島に赴き、朝鮮通信使に応接した。	同　上
4	岡田寒泉と実学の実践	岡田寒泉（1740 － 1816）昌平黌の儒官。のち関東の諸郡に出て代官となった。実学とは本来、実践躬行の学問の意味で、矢子学がその代表である。寒泉の学問がすなわちそれである。	同　上
5	服部栗齋と江戸市井の漢学	服部栗齋（1736 － 1800）江戸の麹湲書院の主。麹湲書院そのものは純粋に市井の漢学塾ではないが、そのような塾での基本的な教養がどのようなものであったかを取り上げる。	同　上
6	若槻幾齋と京儒	若槻幾齋（1744 － 1826）京の聖護院村に住み、その学行が幕府当局に認められて表彰されたこともあったという。	同　上
7	中井竹山と懐徳堂	中井竹山（1730 － 1804）大坂の懐徳堂の主。弟の履軒も著名な学者で、この兄弟の学問は広般な影響を世に与えた。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	葛子琴と混沌詩社	葛子琴（1739 － 1784）大坂の医にして且つ詩人。片山北海が主催する混純詩社の中で、その才名を称せられた。	頼　　惟勤
9	趙陶齋と黄檗僧	趙陶　（1713 － 1786）長崎に生れる。父は唐人。黄檗僧となり、還俗後、江戸・大坂・堺に転住。兼ねて全国を旅行した。僧侶の漢学に対する寄与は甚だ大きい。また道教的なものも案外に日本文化の中に侵透しているといわれる。	同　　上
10	飯岡義齋と家庭教育	飯岡義齋（1716 － 1789）大坂の儒医。曽て石門心学（大坂の尊性堂）を修めた。その子女に対する教訓は極めて熱心であった。	同　　上
11	菅茶山とその周辺	菅茶山（1748 － 1827）備後・神辺の詩人。京あるいは江戸において儒者文人と広く交った。詩人であると同時に、『福山志料』の纂修に関予し、随筆の分野でも著名である。	同　　上
12	高芙蓉と書画篆刻	高芙蓉（1722 － 1784）江戸時代の篆刻を芸術的水準にまで高めた。このころ漢の金印が出土したこともあって、漢の方寸印に倣った印が作られた。	同　　上
13	平賀中南と赤穂義士	平賀中南（1722 － 1792）安芸出身の儒者。大潮に学び、のち京坂に住んだ。『天野屋利兵衛伝』の刊行にも言及する。	同　　上
14	長久保赤水と地理天文	長久保赤水（1717 － 1801）水戸藩彰考館の学者。『大日本史』の地理志を纂修した。そのころの天文・地理・医学にも触れる。	同　　上
15	樺島石梁と親藩の学問	樺島石梁（1754～1827）久留米藩儒。細井平洲の門人・平洲は尾張藩に属する。紀州藩には礼制の研究者、あるいは文献学者が出た。	同　　上

＝漢　文　古　典　Ⅱ＝(R)

――中国小説史への視点――

〔主任講師：大塚秀高（埼玉大学助教授）〕

全体のねらい

中国は三千年に及ぶ悠久の歴史を持っており、小説の歴史もこれに応じて長い。しかし同じ漢字を使いながら、小説という言葉の意味内容は時に応じて違いを見せる。この小説概念の変遷を、小説がそれに立脚した物語の伝統に目配りしつつ、春秋戦国の時代から清代まで追跡し、かつ中国小説の日本への影響についても触れたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	小説と物語 史家と方士たち	萬言と小説　小説と小説家　史官と方士　史記と漢書　鴻門の会　陸賈と楚漢春秋　史書と演義小説　春秋と国語　方士の語った小説	大塚秀高 （埼玉大学助教授）
2	志怪から伝奇へ 史家と読者に於ける変化	志怪と五行・　緯思想　類書と古小説鈎沈　捜神記と干宝　曹丕と劉義慶　サロン文人と物語の伝統　伝寄の誕生　古鏡記と遊仙窟　物語の場	同　上
3	仏教と説教 応験記と遊行僧	応験記の成立　応験記的性格の志怪　金剛経応験記の流行　唐臨と冥報記　宋・明に於ける金剛経応験記　洪邁と夷堅志　鬼国母　文芸の担い手としての僧侶　転変と転経　説経と文芸	同　上
4	二都の夢 新たな「小説」の誕生	志怪にみる仏教の影響　六朝貴族社会の崩壊　俗講と市人小説　京と臨安　東京夢華録と夢粱録　瓦子と勾欄　説話四家　講史書と「小説」緑　新話と醉翁談録	同　上
5	神話の没落 から五通へ	霊怪の門庭　汀州と山魈　独足の山魈　山海経図　夔一足彙陽・　巨人　山都と猿　畢方・水客・その他　淫神五通　財神五通	同　上
6	類書から通俗類書へ 伝奇小説の変遷 そ　の　一	種本と話本　文言の伝奇と白話の伝奇　宋代の小説集　二つの醉翁談録　鴛鴦灯と紅　密約張生負李氏娘　類書と通俗類書　明代後期の通俗類書　伝奇小説の長篇化	同　上
7	短篇小説だった水滸伝 長篇小説の育たぬわけ	水滸伝成立史　梁山泊と百八人の好漢　宣和遺事　水滸の盗賊たち　好漢の銘々伝　水滸伝と「小説」　梁山に上れなかった好漢たち　白話小説と作者	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	法家と小説家の間 公案概念の変遷	醉翁談録の公案　明末の公案小説集　判決から捜査へ　疑獄集と折獄亀鑑　棠院比事と棠院比事物語　捕物帳と余象斗　名裁判官物語　万歴時代	大　塚　秀　高
9	包龍図の登場 講唱文芸のとりで	民衆に愛された包公　包公の実像と虚像　包公を巡る民間信仰　包公説話と「小説」　有名無名の判官たち、宝をめぐる物語　説唱詞話から説書へ　公案小説から俠義小説へ	同　　上
10	幽霊さまざま 伝奇小説の変遷 そ　の　二	元末明初　剪灯二話愛愛しの幽霊　崇る幽霊王魁負心と灰骨匣　自刎と怨念　彷徨える幽霊取殺す論理と取り締まる論理　鴛湖誌余雪窓談異と幽怪詩譚	同　　上
11	話本から小説へ 輯佚と創作	洪　の清平山堂　熊龍峯四種小説と通俗類書発跡変泰話本と紅白蜘蛛記記　三言百二十篇の素性　馮夢龍　柳七官人像の変化	同　　上
12	伝奇から小説へ 貞潔と女性の運命	劉小官雌雄兄弟　男装の目的　女性の孝と貞劉方三義伝　梁山伯と祝英台　心堅金石伝　霞箋記に於ける改悪　嫌疑と恥辱	同　　上
13	白蛇伝の登場 民衆のはぐくむもの	馮夢龍の白蛇伝　西湖の怪の物語　白蛇の物語　嫉妬と蛇　白蛇伝の成立　白娘子の解放	同　　上
14	金瓶梅から紅楼夢へ 才子佳人小説と佳人の男装	中国小説史上の才子佳人小説　長篇伝奇との関係　才子佳人小説と金瓶梅　金瓶梅と四大小説　万暦の気風　春秋配と呉江雪　佳人の男装風流配と鴛鴦譜　紅楼夢　文康の児女英雄伝	同　　上
15	さまざまな小説 清末小説に至る流れ	杜騙新書　照世杯　応挙を題材とする小説受験百態　儒林外史　李宝嘉の官場現形記　劉の老残遊記　李漁の小説　清代小説の多様性	同　　上

＝西洋古典学＝（R）

〔主任講師：久保正彰（東京大学教授）〕

全体のねらい

西洋古典とは、古代ギリシャ・ラテンの文物の漠然とした総称であるが、今回は、“古典”という規範を設けた古代ローマの修辞学の要請を出発点として、修辞とは弱者の立場擁護を主眼とすることを明らかにし、古典文学の中でも古典であるギリシア文学の中に、ヒューマニズムの母体ともいうべき修辞論の展開を具体的に辿ってみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 ── 西洋古典と西洋古典学	1. 西洋古典とは何か ギリシア・ラテン学事始め　ケーベル博士と弟子たち　西洋古典とは何をさすのか　西洋における「古典」概念の淵源　近世以降の西洋古典学の変貌 ── 古代学研究へ　付記 ── 作品伝承について 2. 西洋古典学とはどのような学問であるのか 2つの古代言語の関係　ギリシア文学とラテン文学は表裏一体　新喜劇はローマ喜劇の中から　ホメーロスとウェルギリウス ── 古典古代における文化交流　西洋古典学と古典文献学　古伝文献学における客観性と主観性　ローマの寒夜の月明について　エピローグ　〔参考文献〕	久保正彰（東京大学教授）
2 3	ホメーロス叙事詩の構造 ── 『イーリアス』を中心として	はじめに 1. ホメーロスの時代と作品 ヘーロドトスの証言　ホメーロスの年代　ホメーロスの生地　ホメーロスの作品伝承　初期の作品伝承　ヴェネチア本　ホメーロス詩のリズム　サルペードーンの言葉 2. ホメーロス叙事詩に映しだされた背景と神々 ホメーロス以前の文学　ホメーロスの言語に刻まれた歴史的過程　偉大な終わりと始まり　ホメーロスの神々　なぜオリュムポス山上に　祭祀神の場合　叙事詩の神々と祭祀神たちとの間の隔たり　神々の役割と限界　詩人ホメーロスの分身 3. ホメーロス叙事詩の演劇的技法 人間的動機のせめぎあいが、神々に会議を開かせる　繰り人形ではない人間たち　筋と性格　パトロクロスの場合　登場人物の選択（性格）選択から展開する筋 ── ホメーロス叙事詩の特色　劇詩人ホメーロス　『イーリアス』第24巻　神々の最後の会議　第1巻との対称性　嘆願　プリアモスとアキレウス　アルファからオメガをつらぬく訴え 4. ホメーロスの聴衆 ── 「アキレウスの盾」を中心に 聴き手たちはホメーロスの中にいる　比喩　王たちと民衆 ── サルペードーンの言葉　アキレウスの盾の世界　平和と戦争　生産の営み　牧畜　初期都市国家の世界　映されていない反面　盾の絵は何を伝えようとしているのか　〔参考文献〕	同上
4 5	ヘーシオドス ── 思想への道	1. 詩人誕生 詩の女神たちとの出会い　自らを語る詩人ヘーシオドス　ヘーシオドスの言語とホメーロスの言語　真実を歌う　詩人ヘーシオドスの位置づけ　叙事詩人としての職業的訓練　ヘリコーン山における祭祀　詩女神たちの叱責　新しい詩人の自覚　ホメーロスとの違い ── “真実の歌” 2. 思想への道 神々の道と人間の道　『神々の誕生』 ── 最初の神々　第2世代の神神 ── ティターン族　クロノス、ティターン族の王の位を奪われる　第3世代 ── ゼウスの支配　プロメーテウスの罪と罰　新旧世代の争い　ゼウス、妻をのみこむ　太古の神々 ── かれらの断片的記憶と伝承　系譜的発想に基づく整理　神々の世代　神々の王権交替 ── オリエント伝説との類似　ギリシアの神々、ギリシアの神話の誕生　『大地』女神の位置づけ　空間と世代との統一的枠組み ── 『大地』　『大地』のみが真の神 ── 弱者の守り　『大地』女神の働きを歌う 3. 『農と暦』 ── 人間の道 “私”が語る物語　“私”から“あなた”へのメッセージ　『農と暦』作品の“時と場所”　2つの『 い』の女神たち　ヘーシオドスの選択　人間のうける災禍と選択とのかかわり　人間の退歩 ── 『5つの種族』　鉄の時代　鉄の時代の構造　追いつめられた人間の群　侵略か、植民か　第3の道 ── 内からの出発　正義は大自然のリズムのなかに　ギリシアの歴史とヘーシオドスの教え　〔参考文献〕	同上
6 7	情詩人の再発見 ── その1	1. 『サッポーの手紙』 ギリシア情詩の特色 ── リズム構造　言語的特色　情詩人の作品伝承　作品詩巻の湮滅　サッポーの姿を求めて　『サッポーの手紙』の発見　ルネサンス人文学者たちのサッポー探究　カルデリーニ、サッポー断片を発見　メルラの文体的着眼　情詩人の断片探究　情詩の言語とリズムの復原を求めて　アーレンス、ヘルマン、ペルク 2. 情詩人たちの世界 パピルス詩巻に情詩人の作品再発見される　西暦2世紀編の情詩人作品集　最古の情詩人アルクマーン　アルクマーンの天地創造神話　情詩人の思想的広がり　サッポーとアルカイオス　古代文献の中に伝わったサッポーの作品と令名　パピルス詩巻からのサッポーの世界　叙事風の歌も　アルカイオス ── 内乱の詩　パピルス詩巻が映しだすアルカイオス像　アルカイオスの政治活動　ピッタコスのこと　アルカイオスの政治詩の特色　内乱の詩の語らぬ半面　貴族・民衆・僭主　内乱の別角度からの観察　ソローンの詩 ── 内乱に直面して　『大地』女神の証言を求めて　神話と政治とは別ものではない　〔参考文献〕	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8 9	情詩人の再発見 ── その２	1. ステーシコロス誕生 ステーシコロス、名のみの大詩人　作品断滅…影響といわれるもののみ　題名つきの作品13篇　叙事詩とのかかわり　『ヘレナー・悔悟の歌』　『オレステイアー』の残影　パピルス詩巻 ―『英雄帰郷』発見　『オデュッセイアー』のエピソードをもとに　ステーシコロスの場面処理　ホメーロス叙事詩を合唱　情詩へ　合唱英雄詩『ガーリュオナーイス』　パピルス断片以前 ― ヘーラクレース伝説の１エピソード　リズム構成　神々の集合 ― 筋書きの指示(?)　夢の鳥への場面移動　母親の演説　ダーリュオーンの決意のことば ― サルペードーンとの類似性　作戦の方針　死の比喩 ― ３度ホメーロス叙事詩を手本に　小叙事詩『ゲーリュオーンの歌』　直接話法部分の重要性　"劇詩"と"演劇詩"との違い　能曲との比較　能曲における叙事詩の演劇詩化　『実盛』の言葉　叙事詩から演劇詩への中途点へ　ステーシコロス・能曲・ギリシア演劇詩 2. パッキュリデースと　情詩の演劇的展開 パッキュリデース詩集、パピルス巻巻の中から現る　パッキュリデースについての伝承　ディテュラムボスの詩人、パッキュリデース　規模、形式上の特色　『若者たち』の物語　修飾性の大きい言語　船上の出来事　テーセウスの警告　ミーノース王の挑戦　テーセウス、挑戦に応じる　詩人の語りによる場面展開 ― 船上の真意　詩人の語り ― 海底への場面展開　生きている枕言葉の表現性　重なりあう情景 ―『イーリアス』第１巻　叙事詩的言語の変容と活性化　喪を恐れる英雄 ― パッキュリデースの審美観　悲劇詩との構造的比較　『テーセウス』の場合 ― 特異な対話構成　アテーナイ王アイゲウス対質問者　アイゲウス王の答え ― 怪しい男の出現　怪しい男についての問い　怪しい男の装束、風態 ― 判じものの形で明かされていくテーセウス伝説のエピソード　演劇的対話技法の応用　構造的差異　作品目的の差異　ステーシコロスからの１つの発展と完成　ディテュランボスと悲劇詩は双生児的関係　パピルス写本に現れる古代の校訂家たちの姿　〔参考文献〕	久保正彰
10 11	ギリシア悲劇の基本構造 ── アイスキュロスの『ペルシアの人々』	1. 悲劇の誕生 ゼウスの頭より　ステーシコロスからギリシア悲劇へ　アイスキュロス悲劇の規模　悲劇合唱隊の誕生　吟唱者から演技者へ　自らが作りだす演劇の場　演劇のリズム・合唱隊のリズムの相互補完　役者登場　視覚的要素の出現　演劇仮面の機能　タイプと組み合わせ　仮面と科白　演劇科白の言葉とリズム　２つの文化・２つの伝統　２つの流れの合流・融合　演劇活動を支える力　悲劇・喜劇の製作・上演は社会的現象　国家の行事としての演劇祭　アテーナイ民主政治の申し子 2. 『ペルシアの人々』の基本構造 唯一の歴史事件をテーマとしたギリシア悲劇　題材となったペルシア戦争の概要　サラミースの海戦　サラミース海戦から７年余りのち　プリューニコスの『ポイニーキアーの女たち』　悲劇の場はペルシアの王宮　合唱隊の配役　使者の報告　報告場面の設定　基本的合致点はただ１つ ― 敗者の体験として　アイスキュロスの使者場面　最も重要な違い　凹と凸とに映る勝敗の原因　誇張されねばならなかった真の理由　ダーレイオスの亡霊場面の背後には　エレトリアの劇場のせり上げ　人間でありながら大自然を支配しようとする愚挙　ダーレイオスの目に映じる真実の相　歴史・人間・大自然の摂理　ダーレイオスの言葉はギリシア世界をも包みこむ　ひとりの人間 ― クセルクセースの悲嘆　悲劇と歴史記述の最初の接点　〔参考文献〕	同　上
12 13	ギリシア演劇詩の完成 ── その１	1. 『オレステイアー』 ― アイスキュロス悲劇の完成 三部作構成を打ちだす　演劇の規模・観客の規模　ステーシコロスの『オレステイアー』　アイスキュロスの『オレステイアー』三部作　『アガメムノーン』 ― コロスの目を通じて　使者　原因分析 ― ダーレイオスの言葉　アガメムノーン登場　クリュタイメーストラー、王をあざむく　カッサンドラーの哀れな願い　人間とは…　アガメムノーン、断末魔の声　クリュタイメーストラーの言い分　『アガメムノーン』のリズムを支えている合唱隊　『コエーポロイ』の合唱隊　かの女たちは何もの　カッサンドラーの予言成就を見守る仲間たち　『エウメニデス』の合唱隊　クリュタイメーストラーと合唱隊は一体となっている　合唱隊は連鎖的に演劇の中心部へ　合唱隊の変容＝三部作の終結　演劇的手法の巧さ　三部作構成でなくては表現できなかったもの　合唱隊の仮面・装束から生じた必然的結果　『オレステイアー』における"完成"の意味 2. ソポクレース『エーレクトラー』 ― 「性格悲劇」の作劇法の完成 主人公たちはどうなったのか　古代悲劇と現代の心理劇との違いはあるが　登場人物によせられた観客の好奇心　悲劇詩人ソポクレースの登場　三部作構想からの離脱　演劇仮面と登場人物の性格　『アンティゴネー』における実験　『エーレクトラー』とアイスキュロス　合唱隊は中枢的機能を失う　性格の対比　変形された『コエーポロイ』のモティーフ　筋の展開は"性格"によって　だまされる側におかれたエーレクトラー　ソポクレースの"アイロニー" ― 嘘と真の取り違え　『アンティゴネー』冒頭場面の再来　オレステースの骨壺　余話 ― 名優ポーロスの『エーレクトラー』演技　仮面対仮面～魂対魂　仮面こそ、まことの心の映すもの　エピローグ　〔参考文献〕	同　上
14 15	ギリシア演劇詩の完成 ── その２	1. エウリーピデースの『タウリスのイーピゲネイアー』 オレステースはどうなったのか　かれだけを苦しめるもの　「恥」と「狂れ」、そしてそれよりも深いもの　清めの儀式　単純な分類は問題の本質を見落とす　オレステースを扱うエウリーピデースの三篇　『エーレクトラー』のオレステース　エウリーピデースの問題指摘　オレステースのためらい　母親処刑にひるむ　そして、悔悟　『オレステース』 ― 死に瀕したオレステース　死から生へ　アレオパゴスへ ― 解決に至らぬままに　アレオパゴスの法廷は救いにはならず　『タウリスのイーピゲネイアー』　出会い　オレステースへの手紙、その場で…　発見と逆転、そして脱出計画　エウリーピデースの演劇的手法　"けがれ"は"救い"に　幕引きの神アテーネー登場　アテーネー、祭祀樹立を命じる　ハライの祭祀　プラウローンの祭祀　２つの祭祀を１つに結びつけている理由は　すべては終わり、記憶のみが　プラウローン祭祀の意味　さらに解釈を進めれば 2. アリストパネースの古喜劇 ホメーロスの笑い　ホメーロス喜劇の観客たち　ヘーパイストスの悲喜劇　アポローンとヘルメース　ポセイドーンとヘーパイストス　喜劇創作の痕跡、消滅　アテーナイにおける喜劇上演　古きにさかのぼる喜劇の合唱隊　喜劇役者の扮装　喜劇の表現の自由　喜劇創作のむずかしさ　新しい喜劇の出発点　問題の提示と解決　『アカルナイの住民たち』　ディカイオポリスの名案　劇的対立とせめぎあい　ディカイオポリスの平和　悲劇のパロディーとしての喜劇　喜劇の科白　平和と反戦のテーマ　『蛙』 ― 教育過熱と"鉄の時代"　ストレプシアデースの悲劇　筋の統一・一貫性をめざして　笑いの質　人間みな同じ ― 違いは視点の高さ　雲の上、大空のかなたからの笑い　〔参考文献〕	同　上

＝日本語教授法＝（TV）

主任講師：宮地　裕（帝塚山学院院長）
田中　望（国立国語研究所日本語教育センター・日本語教育研修室長）

全体のねらい

外国人に対する日本語教育の振興は、社会的要請になってきたといってよいが、まだ日本語教育に関する知識は中等教育における英語教育あるいは一般に外国教育を反省するための契機となる。この講座では、日本語教育の方法とその裏付けとなる理論について、日本語教育を志望する学習者（実習生）視点に立って、具体的に解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語教育とは何か	実際の日本語教育の現場を見学することを手がかりとして、日本語教育に関する概括的な解説を行う。日本語教育の種類、国内・海外の現状、その抱える問題点などをとりあげる。	宮地　裕（帝塚山学院院長） 田中　望（国立国語研究所日本語教育センター・日本語教育研修室長）
2	コースデザインとは何か	教育の準備から終了にいたるまでの計画を作成することをコースデザインという。学習者のニーズを出発点にして、「何を」「どう」教えるかの計画の全体について考えていく。	同上
3	初級のコースデザイン	初級のコースデザインにおけるニーズ分析からシラバス、教授法の決定までを、われわれの実習コースについて具体的に考えてみる。	同上
4	初級の教室活動	シラバスや教授法は、実際の教室活動において実現される。主に初級のための各種の教室活動を概観し、われわれの実習コースに適切な教室活動を考える。	同上
5	初級のシラバス分析	シラバスから実際の教材作成や授業計画をたてる際に、学習項目の分析が欠かせない。ここではわれわれの実習コースの学習項目について、いくつかの観点からの分析を試みる。	同上
6	初級の教材作成	教室活動とそこで教えるべき具体的な学習項目に基づいて、次に教材を作成することになる。われわれの実習コースの具体的な教材をあげ、とくに教室活動との関連を考える。	同上
7	実際の授業のはこび方 ―― 教室内コミュニケーション	外国語教育の授業はすべて学習者や教員という参加者間のコミュニケーションでなりたっている。ここでは授業計画と、教室内コミュニケーションの質について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本語教育の多様性 ― 中国からの帰国者に対する日本語教育と海外の日本語教育	ここでは日本語教育の多様性、ことに第2言語としての日本語教育と海外での日本語教育について、コースデザインという観点から考えてみる。	宮地　裕 田中　望
9	中・上級のコースデザイン	中・上級のためのコースデザインを行う場合、初級との違いはどこにあるか。中・上級教育の特徴と、どのようなシラバス構成の観点にたつべきかを考察する。	同　上
10	中・上級の教室活動	中・上級の教育では「なめらかさ教育」の比率が高くなると同時に、いくつかの活動を有機的に組み合わせた「教室活動複合」のかたちが望ましい。そのための教室活動の具体的な形態について考えていく。	同　上
11	中・上級のシラバス分析(1) ― 談話型の分析	学習項目の分析は教材作成や授業計画作りに欠かせない。ここでは読解のための学習項目分析として、「談話」という言語単位をいくつかの観点から具体的に分析する。	同　上
12	中・上級のシラバス分析(2) ―読解過程の分析	ここで学習項目と考える読解は、「読解を含むコミュニケーション活動」である。現実に学習者に必要な読解能力とは何であり、それはどのような過程なのか考察する。	同　上
13	中・上級の教材作成	教室活動と学習項目の分析に基づいて、次に教材を作成することになる。われわれの実習コースの具体的な教材と教室活動をあげ、これまでの考察を総合して授業計画を組む。	同　上
14	教育の評価	評価という行動が教育のなかでもつ意味は何か、なぜ評価という行動が必要なのかを考えていく。コース内での評価行動、テストによる評価行動などを具体的に概観する。	同　上
15	日本語教育の将来	日本語教育はいま大きな曲り角にさしかかっており、量的にも質的にも変わらざるを得ない時期にある。ここではそうした日本語教育の現状、問題点、今後の課題について考える。	同　上

＝歴　史　の　理　論＝　(R)

〔主任講師：阿部玄治（放送大学教授）〕

全体のねらい

昔から多くの歴史書が書かれてきた。それらが示す歴史の特徴は何んであったかを探ることにより、今日歴史が問題とされている点を考えてみようとするものである。西洋の歴史を中心にして、歴史哲学よりは、歴史書の方により多く重点の貢をさくことにした。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	歴史の語義	歴史という用語は中国の「史」からでており史官の記述したものの意味だった。明治以後ヒストリの訳語として用いられ、広狭様々の意味で使われている。	阿部玄治（放送大学教授）
2	神話的段階の歴史	文字の発明以前には口頭の歴史というべき神話、伝説、歌謡などがあった。天地創造神話は人間の起源の歴史的説明と言える。	同　上
3	歴史と文学	ホメロス叙事詩は文学でもあり歴史でもある。歴史として、ヴィコはこれを「神の時代」に次ぐ「英雄の時代」と規定した。	同　上
4	歴史の誕生ヘロドトスの物語風歴史	ギリシアにおける歴史の誕生はイオニアのログラフォイに始まり、ヘロドトスにおいて「物語風歴史」の頂点に達する。	同　上
5	教訓的（実用的）歴史	トゥキュディデスとポリュビオスは史料批判に基づく正確な歴史を示すことによって読者に教訓を与えようとした。	同　上
6	世界史の成立	世界史は世界を一体として考察しうるようになったとき成立する。世界史が成立すると統一的紀年法の必要が生ずる。	同　上
7	キリスト教の歴史観	キリスト教が歴史の中にもちこんだ摂理の思想と時代区分の考えは、その後のヨーロッパの歴史に長く影響することとなる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アラブの歴史学	西洋古典文明を継承したアラブの文明は哲学・神学・科学の分野でめざましい発展を遂げ、その総合性の上にアラブの歴史学が成立した。	福島保夫 （埼玉大学教授）
9	史料批判と史料の蒐集 ―学問への第一歩	ルネサンス、宗教改革、印刷術の進歩と関連し、サン・モール学派やボランディストの史料蒐集は史料の外的批判を大いに進歩させた。	阿部玄治
10	史料の内的批判への道 ―啓蒙主義の時代	キリスト教の歴史観から解放されねば史料の学問的な内的批判には進めない。17―18 世紀は教会の支配からの自由を求めた時期であり、啓蒙の名のもとにそれが行われた。	同　上
11	歴史における進歩	啓蒙時代に入ると人類は歴史の中で進歩するという思想が強くうち出された。しかしフランス革命に失望した人々は中世をみなおし、ロマン主義歴史学が現われる。	同　上
12	ランケとヘーゲル ― 文献的歴史学と歴史哲学	19世紀前半には史料の内的批判によって真なる事実を採り出して叙述しようとするランケ史学が史学界に大きく影響する。他方歴史哲学はヘーゲルにおいて歴史発展の大構想を示す。	同　上
13	マルクス歴史学	マルクスの歴史学は摂理の社会主義版と言える。マルクスにとって社会法則は自然法則と同じような必然性をもつのである。	同　上
14	マルクス死後のマルクス歴史学	マルクス理論のマルクス自身における曖昧さは、その死後の社会の推移と相まって様々の修正理論を生み出し、一貫性に欠けるものとなった。	同　上
15	歴史家の方法論	自然科学と歴史学との違いを十分採り出して、歴史的認識のもつ内的矛盾を把握することが、歴史により貢献することになろう。	同　上

＝日本文化史＝（TV）

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本文化史にふくまれる文化は無数といえるほど考えられる。本講では、第一、日本古代の民間宗教ともいえる観音菩薩、地蔵菩薩、弥勒菩薩、阿弥陀如来、第二、連歌・俳諧、第三、民衆と政治権力と民衆宗教などを通じて、日本の社会に生まれ、育った文化をとりあげ、それぞれの歴史的背景のなかで日本文化の特色を考えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本文化史のねらい	1. 3つの問題点 2. 各回の概要	笠原一男 （放送大学教授）
2	現当二世の利益 —観音菩薩—	1. 観音と現世の利益 2. 観音と来世の救い 3. 観音霊場と巡礼	速水侑 （東海大学教授）
3	地獄からの救い —地蔵菩薩—	1. 地獄の救済者 2. 身代り地蔵 3. 十王信仰	同上
4	末法の救世主 —弥勒菩薩—	1. 兜率天上への願い 2. 末法到来と弥勒下生 3. 鎌倉仏教の出現と弥勒信仰 4. ミロクの世	同上
5	極楽浄土へのいざない —阿弥陀如来—	1. 祖霊追善と来世欣求 2. 『往生要集』と阿弥陀堂 3. 聖と往生伝の世界	同上
6	連歌から俳諧へ —その流れと担い手たち—	1. 和歌の流れ　2. 連歌の発生 3. 連歌の展開　4. 連歌の作り手たち 5. 連歌はどのように作られたか 6. 連歌と宗教　7. 連歌師の役割 8. 連歌の変質　9. 連歌から俳諧へ 10. 俳諧の目指したもの	奥田勲 （聖心女子大学教授）
7	連歌師 —職業としての文学—	1. 連歌に熱中する人々 2. 連歌の詠み方と規則　3. 連歌会の運営 4. 連歌の専門家の登場　5. 鎌倉時代の連歌師 6. 南北朝時代の連歌師　7. 救済と周阿 8. 室町時代の連歌師　9. 宗祇と宗長 10. 中世末期・江戸時代の連歌師	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地方文化と連歌	1. 染田天神連歌 2. 大山祇神社連歌 3. 白山万句 4. 地方武士と連歌	奥田　勲
9	宗祇から芭蕉へ —白河への旅—	1. 宗祇 2. 芭蕉 3. 宗祇と芭蕉の旅のあり方	同　上
10	芭蕉と旅 —奥の細道—	1. 『奥の細道』への出立 2. 室の八島から日光へ 3. 白河の関の彼方　4. 平泉 5. 最上川　6. 出羽三山 7. 越路・北陸・旅の終り	同　上
11	転換期の時代と民衆宗教	1. 政治の行きづまりと新しい時代 2. 複数で生まれる民衆宗教 3. 鎌倉仏教と古代仏教 4. 鎌倉仏教の救いの条件	小栗純子 (中央学術研究所講師)
12	鎌倉幕府と農民と親鸞	1. 鎌倉幕府の成立 2. 租税をめぐる領家・地頭と百姓 3. 関東の農民と親鸞 4. 信仰をめぐる領家・地頭と百姓	笠原一男
13	室町幕府と農民と連知	1. 室町幕府と守護大名 2. 惣村の農民 3. 土一揆する農民 4. 戦国大名と土一揆 5. 一向一揆	同　上
14	江戸幕府と農民と本願寺	1. 政治権力と民衆と宗教 2. 幕藩と真宗と民衆 3. 御文を利用して、一揆を押える	小栗純子
15	日本文化史の回顧と展望	14回にわたって論じられて来た日本文化史をふまえて、もう一度日本文化の特色を座談の形でふりかえって見る。あわせて将来の日本文化形成の基本的精神とはなにかを語りあっていただく。	笠原一男

＝アジア論 Ⅱ＝(TV)

〔主任講師：和田久徳（お茶の水女子大学名誉教授）〕

全体のねらい

日本をふくむ東アジアとその南に位置する東南アジアとは、古くから交渉があったが、日本との関係は近時とくに政治・経済・文化など各面で緊密化している。日本の将来にとって重視すべき東南アジアについて、諸民族の歴史とその特質を述べ、同地域の社会と文化の理解を深めたい。その際、日本とのかかわりに注意する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	初期の国家形成と東西海上交通	歴史時代初期の港市国家。紀元初頭の東アジアと南アジア・西アジアを結ぶ海上交通の繁栄。扶南の建国、その海上貿易活動と東西文化交流。扶南と古代日本。	和田久徳（お茶の水女子大学名誉教授）
2	諸民族の国家とインド文化	林邑の建国と海上活動、初期の中国文化受容。林邑と古代日本。ビルマ・マレー半島・インドネシア各地における「インド化」国家の出現。インド化の意味。	同上
3	シュリーヴィジャヤ王国と海上貿易(1)	初期のシュリーヴィジャヤ。シャイレーンドラ朝とボロブドゥール。八、九世紀の東西海上交通の盛況とシュリーヴィジャヤの海上貿易独占による繁栄。	同上
4	シュリーヴィジャヤ王国と海上貿易(2)	中継貿易隆盛の記録、国家の物質主義的性格。競争者クディリ国の興隆。チョーラ朝のシュリーヴィジャヤ遠征とシュリーヴィジャヤの弱化。	同上
5	古代クメール帝国の繁栄	前アンコール期、古代クメール帝国の成立とアンコール建築群、アンコール＝ワットと日本人の墨書。クメール帝国の内陸農業国家的性格。	同上
6	チャンパーの中継貿易とモン民族の諸国	チャンパーとヴェトナム・クメール帝国との抗争、チャンパーの中継貿易活動。ドヴァーラヴァティーの通商活動と古代日本。赤土・ハリプンジャヤ。	同上
7	ビルマの統一とヴェトナムの独立	ピューとモンの国家、パガン朝のビルマ統一、モン文化・南方仏教の導入。ヴェトナム独立の過程、呉・丁・前黎の各朝。李朝の中央集権政策。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ヴェトナム社会の発展	陳朝の中央集権と民族主義、国史の編纂、国家チューノムの使用。明朝の支配と後黎朝の独立回復。民族文化の興隆。チャンパーの中継貿易衰退とヴェトナムの南進。	和田久徳
9	タイ系諸国の成立と南方仏教(1)	スコータイ朝・ラン＝ナー王国の成立。ラーマ＝カムヘンの大国家建設、タイ文字の制定、民族文化の保持。スリランカ仏教の受容と伝播。	同　上
10	タイ系諸国の成立と南方仏教(2)	アユタヤ朝の成立、中央集権国家と海上貿易活動。ラーンサーン国の成立。クメール帝国の崩壊。ビルマの分裂、タウングー朝の再統一、ビルマ文化の展開。	同　上
11	ジャワ諸王国の展開とイスラム化	シンガサーリ朝からマジャパイト朝への繁栄。ジャワ北岸諸港市のイスラム教受容とマジャパイト朝の衰退、島嶼部のイスラム化の進展。イスラム文化の影響。	同　上
12	マラッカ国の政治と社会	マラッカの建国と明朝との関係。ムザッファル＝シャーのイスラム教受容と中継貿易国家の建設。イスラム化後のマラッカ国。モスレム国家としての特殊性。	同　上
13	マラッカ国の政治経済構造	直轄地・属領・朝貢国。スルタン家とブンダハラ家の協力による安定支配。武官ラクサマナ、港務官シャーバンダール。中継貿易の隆昌政策。土着支配層と外来海商との相互依存関係。	同　上
14	東南アジアと東アジア(1)	中国との初期接触、九世紀までの中国人の消極的態度。中国人の東南アジア進出と活動圏の拡大、その定着居住と現地社会におけるあり方。ジャワの中国人町。	同　上
15	東南アジアと東アジア(2)	パレンバンの中国人集団、アユタヤその他の中国人町。東南アジア船の東アジア来航と琉球国の東南アジア貿易。	同　上

＝ アジア論 Ⅲ ＝ （R）

〔主任講師：浜口允子（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では１０世紀以降２０世紀初頭に至るまでの中国の歴史をとりあつかう。この時期の中国社会は、社会のしくみ、経済、文化、対対関係など様々な面でそれ以前の社会と大きく異なるものであった。それは、中国が１９世紀中葉に西欧諸国と本格的に出会った時の姿でもある。この時期の歴史を学ぶことは、その後の近代中国がかかえた諸問題を由来に遡って理解することにほかならない。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宋代の歴史的位置	唐宋間が画期であることを述べ、本講全体を通して宋以降の歴史をどのような側面からみていくのか説明する。その初めとして宋の社会の基本的あり方について述べる。	浜口允子（放送大学教授）
2	南宋の政治と社会	南宋の時代は、南宋が金およびモンゴルと対峙しつづけたことによって性格づけられた。初期の秦檜の政策の基調と、それがその後どのような経緯をたどったかについて概観する。	同上
3	元の成立	元は中国全体を統治した最初の北方民族の王朝である。征服王朝とはなにか。遼・金の歴史をふりかえりながら、元の成立にいたる過程とそこでの問題点について考える。	同上
4	元の中国支配	元にとって最大の課題は、いかにしてモンゴル主導の統治を行うかであった。元の支配の特質を明らかにし、だがその特質ゆえに安定的な支配が継続しえなかった経緯について述べる。	同上
5	明の成立とその体制	明は征服王朝・元に否定して「漢民族の復興」を旗幟に建国した。その基盤となったものは何か。明の基本的体制である里甲制に焦点をあて、その仕組みについて考える。	同上
6	明の社会の変貌	１５世紀から１６世紀にかけて明の社会は変貌した。里甲制が崩壊し、税制は一条鞭法となった。この変動の過程をあとづけ、郷紳の存在に注目する。	同上
7	清の建国と中国統治	清は満州族の王朝であり征服王朝であるが、明の制度をおおむね引き継ぎ、要所をおさえて支配体制を確立した。その要点は何であったか。地丁銀制、郷紳支配などを説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	清の盛期と衰退	１８世紀の乾隆帝の時代は、対内的にも対外的にも際だった盛期であった。だがその中で醸成されていた諸矛盾は、１８世紀末から急速に顕われてくる。それは何であったか。近代前夜の状況を明らかにする。	浜口允子
9	経済発展の諸相 (1)　農業と農村	農業生産にとっても宋代は画期であった。農具、品種、作物分布、そして農業のあり方のうえでも近代に連なる様相が現れてきた。先ずそれをおさえ、ついでその後の変化を概観する。	同　上
10	経済発展の諸相 (2)　商業と都市	中国において商業の歴史は古い。だが、これもまた、宋の時代を境に大きく変化する。国の統制は後退し、私的経済活動が活発となり、商業が隆盛となった。そのもたらしたものを考える。	同　上
11	経済発展の諸相 (3)　手工業	われわれが現在目にする歴史の精巧な手工業製品はどのような体制の中で生み出されたものなのか。それは近代工業につながりえたのか。この疑問に対して近代以前の手工業を概観する。	同　上
12	人々のつながり (1)	中国の歴史を通して、人と人とのつながりの中で、最も基底的なものは家族であり宗族であった。その特徴と歴史的な変化の過程を概観する。	同　上
13	人々のつながり (2)	農村においても、都市においても、人々は再生産の維持や、生活の保証や、営業の利益のために相互に結び合っていた。各時代の地縁的なつながりや同業者間の結合について考える。	同　上
14	近代の始まり	中国の近代は、アヘン戦争にはじまる「外圧」と太平天国による「内乱」の中ではじまった。この危機に対し、ではどのような対応がなされたのか。１９世紀後半の動きを概観する。	同　上
15	近代の歩み	1912年、辛亥革命によって２千年にわたる王朝体制は終わりをつげ、アジアで初の共和国が成立した。２０世紀初頭の、ここに至る過程をたどりつつ、それが何であったかを考える。	同　上

＝ヨーロッパ論Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：木村尚三郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパ世界における人びとの生き方、物の考え方、歴史と文化の特質、その心と形を、日本との対比においてさまざまな視点から明らかにするのが、全体のねらいである。最近におけるヨーロッパの変貌はいちじるしく、対日感情も激変しており、これを踏まえながら、私たちのこれからの生き方をも探っていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ヨーロッパと日本	大陸主義の進展／「文化の闘い」の時代／大陸型海洋国家の出現	木村尚三郎（東京大学教授）
2	変貌する現代ヨーロッパ(I)	フランスの「奇妙な敗北」／ナショナリズムの後退／大陸間戦争としての第二次世界大戦	同上
3	変貌する現代ヨーロッパ(II)	重要視されはじめた「日常生活史」／低成長時代の「死」の認識	同上
4	変貌する現代ヨーロッパ(III)	土集団の時代と土離れ勢力の時代／生産と進歩の上昇期／商業・交通と調和の安定期	同上
5	ヨーロッパの農村社会(I)	プロローグ―自然と時間の観念／森と人間の戦争／日本の自然とくらべて／神から機械が生まれた／ゴシック寺院は森のイメージ	同上
6	ヨーロッパの農村社会(II)	農民生活の十二か月	同上
7	ヨーロッパの都市(I)	都市の空間学／乾いた理論と意志の世界／都市の時代	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ヨーロッパの都市 (Ⅱ)	歴史意識がつくった街／均整備あふれる近代パリ／大革命の流血の記憶きざむコンコルド広場／中世パリの顔／セーヌに浮かぶ船、シテ島	木　村　尚三郎
9	ヨーロッパの文化 (Ⅰ)	光を求める／復活祭／狩りの文化／死と向かって生きる／悪魔	同　上
10	ヨーロッパの文化 (Ⅱ)	教会の鐘の時間支配／一日は真夜中から始まる／ローソクが刻む時／時間人／日本の時間観／市庁が時間を支配する	同　上
11	ヨーロッパの家族 (Ⅰ)	変貌しつつある家族関係／理性の時代から感性の時代へ／家と家族の概念／靴はなぜ脱がない／血縁の重視／日本の家神・土神	同　上
12	ヨーロッパの家族 (Ⅱ)	子育て／徒弟制度と手づくり教育／他人のメシを暖かく	同　上
13	キリスト教(Ⅰ)	孤独／拒絶の精神／土の匂い／情感／悔いあらため	同　上
14	キリスト教(Ⅱ)	葡萄酒の魅力／集い、食べ合う／復活／慈善／土離れ／教会と多国籍企業	同　上
15	これからの時代を生きる	一を求める心／集う／内心の時代／お陰様／タイムスパン	同　上

＝アメリカ論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：猿谷　要（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

北米（アメリカ合衆国とカナダ）について、各方面からその特色を論ずる。北米はいま日本ともっとも深い関係をもつようになったが、その本質は必ずしもまだ十分に理解されてはいない。従来とかく断片的になりがちだったアメリカ論を、ここで十分にまとめて展開し、正確な理解を得られるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	若い共和国の誕生	ヨーロッパ人にとっての“発見”　インディアンとの出会い　初期の植民地　大西洋上の奴隷貿易　植民地時代の生活と文化　植民地間の戦争　独立への気運　独立戦争の経過　独立革命の成果　独立革命の影響と世界	猿谷　要（東京女子大学教授）
2	セクションの発展と衝突	デモクラシーの発展　孤立主義への傾き　フロンティアの西進　太平洋岸への道　北部資本主義社会　南部奴隷制社会　アメリカ文化の成熟　南北対立の激化　南北戦争のさなかで　南北戦争の遺産	同　上
3	世界的強国への発展	南部の再建　フロンティアの消滅　独占資本の成立　自由放任の政治　激増した新しい移民たち　帝国主義への道　改革の気運　第1次大戦へ参戦　債務国から債権国へ　世界最初の大衆消費時代	同　上
4	超大国の影響力と価値観の変動	大恐慌とニューディール　国際的緊張の高まり　第2次世界大戦　パックス・アメリカーナ　東西冷戦の進行　赤狩りの50年代　変革と激動の60年代　怒れる若き反逆者たち　絶対から相対へ移った70年代　80年代の展望	同　上
5	アメリカン・デモクラシーの特色	アメリカ政治の特徴　権力の分立　連邦会議　大統領　行政部　裁判所　選挙　政党　有権者　圧力集団	阿部　斉（放送大学教授）
6	アメリカ外交の特色	外交政策の決定　孤立主義　膨張主義　自由主義的同質性　イデオロギー外交　冷戦とアメリカ外交　デタント外交の展開	同　上
7	資本主義経済の発展	市場経済体制の確立　フロンティアの開拓と鉄道の発達　工業と農業の利害対立　西欧諸国との競争　独占の発達と反トラスト立法　繁栄の20年代　不況の30年代とニューディール　混合経済への道	嘉治元郎（放送大学副学長）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	経済の当面の諸問題	平時経済への転換　ドル不足からドル過剰へ　インフレーションの諸様相　成長の促進と福祉の充実　ドル体制の破綻　経済の再建をめざして　世界経済の中のアメリカ	嘉治元郎
9	人種・民族・女性	「人種の坩堝」神話　WASP中心からモザイクへ　ヨーロッパ系　黒人　インディアン　スペイン語系　日系アメリカ人　少数派としての女性　女性の平等をめざして	猿谷　要
10	社会の特色を彩る諸要素	州権の国　東部　南部　中西部　西部　摩天楼と荒野　暴力と犯罪　家庭の崩壊　ボランティア精神	同上
11	アメリカ的生活様式	アメリカン・デモクラシー　情報化社会　神を信じる人びと　高等教育の大衆化　中産階級　庶民のふところ具合　自動車社会　大衆文化　若者文化	同上
12	カナダ歴史の特色	フランス系カナダ社会の伝統　アメリカ革命の影響　英領北アメリカ植民地の遺産　国際環境に影響されたコンフェデレーション　コンフェデレーションの意義　困難な国家統一　漸進的な「独立」の達成　定義しがたいカナダ・ナショナリズム　永遠の課題：アメリカ合衆国との関係　永遠の課題：ケベック問題	同上
13	カナダモザイク文化	対先住民関係の特徴　フランス文化の遺産　アカディア人とケベック人　王党派の到来　その他のイギリス系カナダ人　英領北アメリカ法と教育・言語問題　リエルの二つの「叛乱」　移民の多様化　日系移民の問題　多様文化主義へ	同上
14	日米関係の流れ	アメリカ側からみた日本開国　異文化接触の原点　友好の第1期　対立の第2期　戦争の第3期　蜜月の第4期　競合の第5期　物の国際化から心の国際化へ　未知の世界へ入る	同上
15	変貌するアメリカ	ヨーロッパ人のアメリカ論　日本人のアメリカ論　アメリカン・スタディーズ　アメリカ国内の地殻変動　国際関係の多極化　太平洋時代の幕あけ　アメリカの夢は終わったのか	同上

＝ アメリカ論 Ⅱ ＝（TV）

〔主任講師：増田義郎（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

ラテン音楽やマヤ、アステカ、インカ等の古代文明などによって日本に知られている中南米は、その歴史、文化において特色に富み、またその政治・経済・社会も、19世紀の独立期以来独特な歩みを示して、第三世界の中でも、他のアジア・アフリカ地域と全くことなった個性を持つ。その個性とはなにか。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乾燥地帯・高原・熱帯低地	・中南米の概略 ・中南米の地形 ・中南米の気候 ・海流と風 ・人間と自然	増田義郎（東京大学名誉教授）
2	多様な民族、多様な言語	・複雑な民族構成 ・中南米の原住民 ・スペイン人 ・ポルトガル人 ・アフリカ人 ・その他の民族的要素 ・多様な言語	同上
3	マヤ・アステカ・インカ	・中南米の古代文化 ・農耕への道 ・文明への道 ・宗教都市の繁栄 ・動乱と統一 ・アステカとインカ ・その他の民族	同上
4	バロック文化の開花―中南米の植民地時代	・イベリア文化と中南米 ・問題の発端―征服と破壊 ・現実とユートピア ・植民地官僚制の成立 ・バロック文化の渡米 ・植民地時代文学 ・その前夜	同上
5	独立運動と共和国成立	・閉ざされた大陸 ・自由化の要望 ・内乱の世紀 ・ハイティの独立 ・独立運動の開始 ・独立運動の性格 ・ブラジルの独立	同上
6	クーデター・革命・民主主義	・中南米政治の特徴 ・独立後の混乱期 ・安定した寡頭制の時代 ・寡頭制の危機の時代 ・人民主義の時代 ・軍事政権の時代 ・模索の時代 ・政治的不安定の原因	恒川恵市（東京大学助教授）
7	中南米政治の争点	・政党と政党制 ・軍部と軍事政権 ・カトリック教会 ・外国への経済的依存 ・アメリカ合衆国による干渉 ・棍棒政策と善隣外交 ・キューバ革命以後の米国の政策 ・自立への動き	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	経済発展の光と影	・経済発展の長期的趨勢（一次産品輸出経済の発展・輸入代替工業化の進展・経済統合）　・戦後期経済発展の特徴（持続的成長と投資率の上昇・所得分配の不平等化）　・農業と工業の構造（工業の構造の特徴・農業の構造ー不平等な土地所有制度）　・不完全就業とインフォーマルセクター	細野昭雄（筑波大学助教授）
9	累積債務とインフレの80年代危機	・累積債務危機の実態（不況とインフレ・累積債務の規模）　・債務危機の直接的要因（交易条件の悪化・資本市場の変化）　・債務危機の構造的要因（積極的開発政策と自由化政策）　・中南米経済の展望	同上
10	躍動する新しい文化	・19世紀の中南米文化　・社会的抗議の文学 ・メキシコ革命と壁画運動　・新しい文学 ・ブームの文学　・モデルニスモ以後の詩人	増田義郎
11	メキシコ―変革と伝統	・国土と住民（気候と風土の多様性・住民の居住パターン・住民の言語と文化）　・メキシコ革命（ポルフィリオ・ディアス時代・1910年革命と1917年憲法・カルデナス政権・「革命」の後退） ・現代メキシコの政治・経済（石油資源と累積債務・ＰＲＩ体制の衰え・アメリカ合衆国との関係）	恒川恵市
12	ブラジル―未来の国	・中南米最大の国ブラジル　・悲しき熱帯 ・ブラジルの成立　・砂糖産業と奴隷の輸入 ・産業の変遷　・帝国から共和国へ　・工業化の時代	増田義郎
13	ペルー―砂漠・高原・熱帯林	・対蹠的な三つの自然　・住民と都市　・ペルー副王領の成立　・植民地封建制　・独立から共和国へ　・20世紀のペルー	同上
14	アルゼンチン―豊かさの中の停滞	・繁栄と停滞の歴史（豊かさのなかでの停滞・温帯農産物輸出による繁栄）　・社会の特徴と政治的不安定（輸出経済の危機とペロン政権の登場・軍事政権の功罪）　・経済構造と長期的停滞 ・最近の政治と経済	細野昭雄
15	カリブ海地域―非ラテン的な中南米	・カリブ海地域とは　・自然と住民　・スペイン人の侵入　・ヨーロッパ諸勢力の侵入　・アメリカ合衆国のカリブ海進出　・自立への動き	増田義郎

＝美の本質と様態＝(R)

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）
橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）〕

全体のねらい

本講義は、東西の美学史を学びながら、美学の基礎的概念について研究を深め、美の本質やその様態を考えるものである。美の様態とは、美の現象形態のことであり、芸術美もその一つである。本講義では、主に芸術を媒介として考察を進め、真や善と並んで、人間のあこがれる理念である美を省察し、美学の新しい可能性を拓きたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	芸術的超越 —孔子と諸子百家—	ギリシア・ラテン古典文化と並びせられるシナ古典文化は、東洋に位置する日本の文化の基礎のひとつである。その中でも代表的な孔子の美学説を中心に考える。芸術段階説や世界超越説などが明らかにされる。諸子百家の若干の人々にふれる。	今道友信 （清泉女子大学教授）
2	一者とその影 —荘子と六朝時代—	孔子を否定的に超える荘周の学説を中心として、一者の形而上学的美について論じる。ここでは、真の超越としてのエクスタシーが風の象徴を以て論じられている。尚、シナ古代の花と言われる六朝の芸術論にもふれる。	同上
3	植物的世界観 —日本の古代・中世—	日本の古典を介して日本文化の特色のひとつとして植物的世界観が立てられていると見て、それとの関連に於いて、古代・中世の芸術論を解明する。	同上
4	幽玄と旅 —日本の近代—	日本近代の芸術論を介して、独特の美的カテゴリーとしての幽玄を論じ、また、美を求める実践としての旅について考える。	同上
5	形相 —西洋古代—	西洋美学の源流としてのギリシア哲学に於ける美や芸術の省察を、基本概念としての形相（イデア）を中心に考える。手続として、ソークラテース以前、プラトーンとアリストテレース、プローティノスを省察する。	同上
6	光 —西洋中世の美学—	西洋中世の美学を、基本象徴としての光を軸にして省察する。この時代の美学思想は従来軽視されて来たが、芸術論としても重要であることを示す。	同上
7	数と言語 —ロゴス—	ルネサンスの時代精神は、ヒューマニズムと比であると言われるが、比の原理である数が美や芸術に於いて占める重要性を考える。比は、ロゴスであるが、ロゴスは言語でもあって、ここに言語を重視するヒューマニズムの考え方も問われることになる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	実在と模倣 —近代美学の黎明—	近代美学の伏線がデカルトのコギトーにあると考え、またパスカルの芸術論、ライプニッツの美の省察を介し、認識と主観が中心となる近代美学の前半を課題にする。	青山昌文 （放送大学助教授）
9	関係と美 —近代美学の自立と超克—	近代美学の自立性を樹立したバウムガルテンの認識論的美学の特色と、ディドロの関係の美学の新しい解釈により、ここに近代を超克する力が秘められていることを明らかにする。	同上
10	無限・完成・分裂	ロマン主義、ドイツ観念論、それらに対する反動という思想的激動の時代としての近代終末期の美学説を省察する。	今道友信
11	虚構 —新しい認識方法—	芸術に必要な契機としてのフィクションすなわち虚構を、新しい認識方法に着目しつつ、演劇を例にして省察する。	伊藤公一 （放送大学助教授）
12	音楽美学	音楽の特質をその時間構造を通して明確にし、音楽と精神との関わりを創造の面から省察する。特に音楽作品に内在する形而上学的力の可能性について論じる。	橋本典子 （青山学院女子短期大学助教授）
13	美と時間 —芸術と倫理—	比較芸術学の立場から、諸芸術の根本構造を明らかにする。更に芸術創造に於ける崇高性という概念との関わりから、芸術創造に於ける倫理的側面、時間を越えた人間の精神的美（美善）を追究する。	同上
14	カロノロジア	現代、技術連関の時代との関係に於いて新しい美学、カロノロジアを省察する。無を介するその論理的構造を明確にすると共に、人間の存在の彼方に輝く美、すなわち存在論を越えた新し思想について省察する。	同上
15	結び	全体を総括し、特に美的判断の問題を手がかりにして、新しい創造論へ向けての論理的省察が行なわれ、新しい美学への指針が示される。	今道友信

＝文芸史と文芸理論＝(R)

〔主任講師：轡田　収（学習院大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの古典古代から近代に至る文学の生産とそれに対する理論ないし学的反省との関係を捉えていく。この視点をとると、時代により、言語圏ないしは国により、実践と理論とは独特な成互関係をもつことが明らかになろう。それによって、一国の文学史のみを見ることでは得られない各言語文化の特異性が浮き彫りにされよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	実践と理論	1. 文学の理論と西欧の特質 2. ギリシアにおける「理論」 3. テオリア・プラクシス・ポイエーシス 4. 理論と実践の歴史的変化 5. 芸術の理論と芸術の歴史的位置 6. 『詩学』とミメーシス	三島憲一 （学習院大学教授）
2	古典古代(1) ―ギリシャ―	1. ギリシア悲劇 2. アリストテレスの『詩学』	岡道男 （京都大学教授）
3	古典古代(2) ―ラテン―	1. ラテン的世界の始まり 2. ホラティウスの『詩論』―『詩作技術』 3. クインティリアーヌスの『弁論家の教育』	同上
4	中世(1) ―ラテン的世界としての中世―	1.「ラテン中世」とは何か―歴史的複合体としてのヨーロッパ　2.カール大帝の偉業―学業改革と文化運動　3.学校教材用の著作家の選択―文芸作品についての「正典」の形成　4.詩作品の解釈の枠組み―ヨーロッパにおける文学教育の歴史 5.人文主義者による「12世紀のルネサンス」―「自国語」文学の多彩な様相	南大路振一 （姫路獨協大学教授）
5	中世(2) ―フランス―	1. 現存するテクストの性格―筆写され口誦された作品 2. 北フランスのトルヴェール 3. 南フランスのトルバドゥール 4.「非抒情詩」と犯罪詩人フランソワ・ヴィヨン 5. ロマン（物語）の誕生	新倉俊一 （東京大学教授）
6	中世(3) ―ドイツ秘められた詩学―	1. はじめに 2. 耳を楽しませる文芸 3.「アルトゥース・ロマーン」（「アーサー王物語」） 4. 行数比による作品構成 5. 中世文芸の特質	平尾浩三 （東京大学教授）
7	中世(4) ―イギリス―	1. 古英詩の特質 2.『ベーオウルフ』―ゲルマン民族の英雄叙事詩 3. チョーサーの文学	安東伸介 （慶応義塾大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	俗語文学の栄光 —イタリア—	1. 俗語文学の誕生 2. 清新体派とダンテ 3. 『神曲』の構造 4. ペトラルカとボッカッチョ	河島英昭 （東京外語大学教授）
9	近代文学への道(1) —フランス—	1.16世紀ルネサンスの豊かな軌跡　2.文芸理論の登場とセビエの『フランス詩法』ールネサンス精神の発裂　3.デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』　4.古代人模倣ーロンサール、ドービニェ、モンテーニュ　5.マレルブへの反抗ー第1期の過渡期　6.アカデミー・フランセーズと文芸理論の基礎固めーシャプランの書　7.第2期（1660－1690年）の作家の活躍ーパスカル、ラシーヌ、モリエール	成瀬駒男 （国学院大学教授）
10	近代文学への道(2) —イギリスー エリザベス朝—	1. 詩の擁護はなぜ必要だったか 2. 民衆の娯楽・文芸と国民性の形成 3. シドニーの批評論と詩の本質 4. 近代イギリス文学の成立	児玉久雄 （学習院大学教授）
11	近代文学への道(3) —ドイツ—	1. 遅咲きの近代文学 2. オーピツのドイツ詩改革 3. 新しい文学制作は翻訳から 4. 言語育成と言語協会 5. 文学活動と地域の特色 6. 理論と実践との関係 7. 新興の文学ジャンル—小説	轡田収 （学習院大学教授）
12	小説の興隆	1. 「小説」とはなんであったか 2. 小説の3系統 3. 騎士冒険小説から英雄恋愛宮廷小説へ 4. 悪者（ピカロ）小説 5. 牧人小説 6. 小説の変貌と展開	同上
13	文学と天才	1. 天才概念の成立 2. 規範美学批判と市民社会 3. 天才と自然 4. ドイツにおける天才思想の開花 5. 天才の神格化—ヘルダーとゲーテ 6. 天才の芸術と市民社会 7. ＜天才＞と＜趣味＞	大貫敦子 （学習院大学助教授）
14	文学と国民意識 —ドイツを例に—	1. 「国民」という概念 2. 国民運動と国民意識 3. 解放戦争と『ニーベルンゲンの歌』 4. 国民意識と文学の歴史 5. ドイツ学の成立 6. 精神科学と国民意識	轡田収
15	社会と文学の自律性	1. 近代と芸術の自律性 2. 理性の自己分析と芸術 3. 市民社会の代償としての芸術 4. 芸術の自律性とアヴァンギャルド 5. 芸術の自律性の動揺—反省の深化	三島憲一

＝美術史と美術理論＝（TV）

〔主任講師：友部　直（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

今日、精神的な豊かさを求めて、美術への関心が高まっている。この番組では、単なる美術の通史ではなく、トピックを含めて、映像的な魅力を通して、学習者を美術の世界へひきこむようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	美術とは	1. 色と形の役割 2. 表現の様式 3. それぞれの立場 4. 能力の問題	友部　直 （共立女子大学教授）
2	日本 ～彫刻(1)天平彫刻～	1. はじめに 2. 飛鳥・白凰の彫刻 3. 天平初期の彫刻 4. 天平盛期の彫刻 5. 天平後期の彫刻 6. 肖像彫刻 7. 結び	宮　次男 （実践女子大学教授）
3	日本 ～彫刻(2)鎌倉彫刻～	1. 鎌倉美術の特色　2. 南都復興 3. 東大・興福二大寺の造仏　4. 運慶 5. 快慶　6. その他の慶派仏師たち 7. 慶派以外の仏師集団　8. 関東彫刻 9. 肖像彫刻　10. 裸体像 11. 結び	同　上
4	日本 ～絵画(1)仏画～	1. 仏画とは 2. 奈良時代の仏画 3. 平安前期の仏画 4. 平安後期・11世紀の仏画 5. 平安後期・12世紀の仏画 6. 鎌倉時代の仏画 7. 結び	同　上
5	日本 ～絵画(2)絵巻物～	1. 絵巻とは 2. 絵巻の発生 3. 源氏物語絵巻 4. 信貴山縁起 5. 伴大納言絵詞 6. 鳥獣戯画 7. 結び－平安絵巻の性格	同　上
6	中国(1) ～皇帝の墓陵～	1. 中国美術のあけぼの　2. 新石器時代の彩陶　3. 仰韶文化の彩陶　4. 馬家窯文化の彩陶 5. 大汶口文化の彩陶と龍山文化の黒陶 6. 河姆渡文化　7. 夏・殷時代の社会と文化 8. 殷王朝の青銅器　9. 最盛期の青銅器 10. 俑の出現　11. 秦始皇帝の兵馬俑	東山健吾 （成城大学教授）
7	中国(2) ～石窟寺院～	1. 仏教と仏教文化 2. 石窟寺院 3. 五胡十六国時代の涼州 4. 炳霊寺石窟 5. 敦煌莫高窟 6. 莫高窟初期の壁画 7. 雲岡石窟	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中　　国 (3) ～水墨画と陶磁器～	水墨画 1. 山水画の成立　2. 荊浩とその後継者たち 3. 郭熙と三遠　4. 宋画院の山水画 5. 江南の山水画家　6. 南宗画 陶磁器 1. 最初の陶器　2. 青磁　3. 黒釉　4. 白磁 5. 磁州窯　6. 青花（染付け）	東　山　健　吾
9	西　　洋 ～王墓と神殿～	1. エジプト美術の特性 2. ピラミッド ― 巨大な王墓 3. 神々の住まい ― 神殿	友　部　　直
10	西　　洋 ～神殿と劇場～	1. 神々と人間 2. 時代と様式 3. パルテノンとアクロポリス 4. 官能的な女神たち	〃
11	西　　洋 ヨーロッパ中世 ～街と大聖堂～	1. 神の栄光のために 2. 大聖堂の時代 3. 都市と城	〃
12	西　　洋 ルネサンス美術(1) ～人間の世紀～	1. ルネサンスとは 2. 古代美術の復活 3. ルネサンス美術の開花 4. マサッチォなど	〃
13	西　　洋 ルネサンス美術(2) ～絵画の黄金時代～	1. レオナルド・ダ・ヴィンチ 2. ミケランジェロ 3. ラファエロ、ティツィアーノなど	〃
14	西　　洋 ヨーロッパ近世 ～王侯の芸術～	1. 時代の転換 2. 宮廷を彩る 3. アルプスの北で 4. ヴェルサイユ宮殿 5. ロココの成立 6. 雅びなる宴に	〃
15	新しい視覚 ～19・20 世紀の ヨーロッパ美術～	1. 凋落に向う貴族社会 2. ロマン主義と古典主義 3. 現実を直視する 4. マネと印象主義 5. セザンヌと後期印象派 6. 視覚の冒険	〃

＝ 演 劇 史 と 演 劇 理 論 ＝（TV）

〔主任講師：毛利三彌（成城大学教授）
西　一祥（日本大学教授）〕

全体のねらい

日本演劇の特質は、ジャンルの並存性と生きた伝承性にある。本講座は各専門ジャンルの講師の分担講義により、古代から現代への演劇史の流れに沿いつつ、各ジャンルごとの演劇の展開を重層的にみていく。また随時アジア芸能や西洋演劇との比較・対比を通して日本演劇の環境や本質をグローバルな視点から多角的に考究する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	演劇の源流	原始芸能 古代歌舞の種々相 伎楽の伝来	高山　茂 （早稲田大学講師）
2	中世芸能の胎動	舞楽の受容と定着 散楽の展開と演技 神楽	〃
3	中世芸能の諸相	田楽の成立と展開 猿楽の発展 延年の能 雑芸の種々相	〃
4	猿楽・民衆から貴族へ	大和猿楽と観阿弥 観阿弥の猿楽改革 世阿弥と足利義満 世阿弥と二条良基 世阿弥と足利義持	西　一祥 （日本大学教授）
5	花と幽玄	世阿弥の能－「井筒」を例として－ 世阿弥芸術論の“花”と“幽玄” 世阿弥以後の能 豊臣秀吉と能	〃
6	能のあゆんだ道	徳川幕府と能 民衆と謡 岩倉具視と能 能の海外公演	〃
7	“おかし”の精神	狂言の成立 猿楽座の“おかし” 狂言の分類と例 “おかし”の底にあるもの	〃

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	語りの系譜	語りものの歴史的な流れ 『浄瑠璃姫物語』と義太夫節の創始 竹本義太夫と近松門左衛門	藤波隆之 （国立劇場芸能部長）
9	歌舞伎の誕生	歌舞伎発生の環境 阿国歌舞伎の構成と展開 「物真似狂言尽し」へ	〃
10	爛熟の美	歌舞伎史の時代区分 市井の写実劇 南北の劇作術 天保改革と三座の移転	〃
11	伝統と変容	幕末から明治初期の歌舞伎界 明治維新と歌舞伎界の変容 散切狂言と活歴劇の登場 演劇改良会と天覧劇	〃
12	西洋演劇の潮流	ドラマの歴史における最初の大きな山 演劇の新しい芽ー中世の宗教劇ー ドラマの歴史の二つ目の山 18世紀の演劇熱狂	毛利三彌 （成城大学教授）
13	演劇近代化の試み	近代演劇の露払い リアリズム演劇の始まり 近代劇の確立者、イプセン 舞台の近代化 日本の演劇近代化 自由劇場と文芸協会	〃
14	新劇の時代	新劇生成期 近代戯曲の成立 築地小劇場 プロレタリア演劇の盛衰 戦中・戦後の新劇	〃
15	現代演劇の行方	20世紀前半のヨーロッパ演劇 ブレヒトとアルトー 不条理演劇 アンダーグラウン演劇＝60～70年代の前衛演劇 現代演劇の行方	〃

＝音楽史と音楽論＝(TV)

－日本の音楽に世界の音楽を投影する－

〔主任講師：柴田南雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

ＴＶの特性を生かし、教室で教科書をなぞるようにでなく、縄文・弥生の石笛や琴にはじまり、古典音楽から現代音楽まで、各地の遺跡のロケや邦楽・洋楽の実演もとりまぜ、しかも東西音楽の通史となるよう話を進める。同じ時代に、日本と中国、日本と西洋でどのような音楽が行なわれていたか。つねにそれらを比較考察しながら話をすすめる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	外来音楽と日本人	『日本』へのヒトの渡来と音楽的祖先―『日本』をとりまく環境、『日本』にはいつからヒトが住んだか、言語から見た『日本』へのヒトの渡来、音楽史に特有の構造について―外来音楽と日本人、西洋音楽史の時代区分について	柴田南雄（放送大学教授）
2	音楽文化の深層を探る	縄文時代の日本の楽器―各地出土の石笛、宗教音楽の純粋な形、石笛と能管との類似、各種の土笛、骨笛と貝笛、木製の楽器、諸外国の古代の楽器―中国の楽器、ヨーロッパの最古の楽器、オリエントの楽器、旧約聖書に現れる楽器、ギリシャの楽器、北欧の金管楽器、インドの楽器、少ない日本の楽器の出土品、音楽の始原に関する諸説	同　上
3	祭祀の音楽	弥生・古墳時代の日本の楽器―“弥生の笛”損は西日本から出土、土師器の笛など、もっとも原始的な弓、琴・和琴・箏、各地の遺跡から出土した琴、ずんぐり型の琴、琴を持つ埴輪、金銅の雛形琴、楽器としての銅鐸、銅鐸以外の打楽器、木製の横笛、同時代の中国の音楽、馬王堆漢墓の楽器、２つの音楽論、雲岡石窟の楽器演奏人物像、同時代の西洋の音楽、ギリシャの楽譜と初期キリスト教の音楽、いろいろな音楽論	同　上
4	制度化と学習	大陸からの音楽の輸入と雅楽寮の設立―朝鮮３国からの音楽、雅楽寮の発足、この時代の主な楽器―唐楽の楽器と楽譜、三韓楽の楽器、雅楽と声明の伝来―宴楽が主体の雅楽、声明は寺院の儀礼の唱礼、西洋における聖歌の集大成と聖歌学校の創設―グレゴリウス法王の聖歌集大成	同　上
5	芸術音楽の胎動期	平安時代の日本の音楽―雅楽の楽制改革、「左方」と「右方」、催馬楽、朗詠、神楽と声明、ユニークな今様、田楽と猿楽、文献に見られる演奏場面、西洋の単旋律聖歌・世俗歌と、多声音楽の発生―単旋律聖歌と典礼劇、世俗歌の変遷、複旋律の歌唱法オルガヌムの登場	同　上
6	諸国を行脚する音楽	鎌倉・南北朝時代の日本の音楽―平曲（平家琵琶）、早歌、猿楽から能楽へ、雅楽の衰退、普化尺八、西洋のさまざまな声楽曲種と記譜法の成立―世俗歌曲の隆盛、ドイツのミンネザンク、スペインのカンティガなど、多声音楽のモテトゥス、新記譜法と「アルス・ノヴァ」	同　上
7	ルネサンス	室町、戦国、安土・桃山時代の音楽―能楽の大成、一節切の輸入、薩摩琵琶の起こり、三味線の渡来、西洋ルネサンス音楽の開花、ＴＤＳの機能和声法の確立、記譜法の整理、フランドル楽派、ドイツ・プロテスタント音楽の誕生、ヴェネツィア楽派、ラッススのマドリガーレ、パレストリーナのミサ曲、モンテヴェルディとオペラの誕生、ヌオーヴェ・ムジケ（新音楽）、フランスとイギリスの音楽、スペインの音楽、西洋と日本の相違	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	キリシタン音楽	布教時期の区分、ザビエルの来日とキリシタン音楽の初期―西洋音楽との最初の出会い、クラボ、チャラメラとフラウタ、聖歌集、最初の音楽教育、セミナリヨの創設と天正の少年使節―セミナリヨの教科とオルガンの輸入、少年使節の演奏、布教に効果あった音楽、キリシタン音楽の日本音楽への影響―薩摩琵琶への影響、筑紫箏への影響、段物への影響、今も歌いつがれる隠れキリシタンの〈オラショ〉―生月の歌オラショ、	柴田南雄
9	東と西のバロック音楽	東西の共通性、彼我の決定的相違点、上方芸能優勢の江戸時代前半―平調子の成立、三味線の地歌、箏曲の組歌、浄瑠璃・義太夫節、歌舞伎、西洋バロック音楽の盛期―声楽曲が主流	同上
10	古典派・ロマン派	元文以後、江戸時代後半の邦楽―常磐津、清元、新内、長唄、箏曲、三味線、胡弓、東西の音楽のあり方の相違―作曲家の輩出	同上
11	隆盛の絶頂と無からの出発	西洋音楽は創造活動の絶頂期―この時期の音楽の特徴、〈無〉の状態からの吸収・模倣―明治以前からあった軍楽隊、讃美歌、音楽取調掛、東京音楽学校、作曲科設置のおくれ、伝統邦楽の衰退	同上
12	両大戦間の状況	西洋音楽は新古典主義の時代―ノイエ・ムジーク、シェーンベルクの12音技法、日本の洋楽―その演奏と創作活動―邦楽はさらに後退、洋楽演奏の充実、作曲活動の開始	同上
13	第2次大戦後の作曲界	(A)音列音楽（ミュジック・セリエル）、(B)初期の電子音楽、(C)ミュジック・コンクレート、(D)偶然性の音楽、(E)諸民族の音楽語法の借用、(F)ミニマル・ミュージック、(G)ロマン主義の復興	同上
14	第2次大戦後の演奏界	作曲の時代様式との平行関係、録音による演奏の比較―ロマン主義・表現主義の演奏家、新即物（新古典）主義の演奏家、第2次大戦後の演奏家、時代の音楽様式を決定するもの―基準となりやすい“旧美学”、パトロンの影響と聴衆の好み	同上
15	未来の展望	ヒトの年齢、世界の諸文明の年齢、諸芸術連鎖説、西洋音楽史におけるサイクル現象について、気候変化と半音階様式の相関関係、音楽史のリズム論について、ヴィオラの「世界音楽史―4つの時代区分」、未来の音楽はどのような形をとるか―新様式への旅立ち、西洋音楽の等質化と世界音楽の誕生	同上

＝民　族　音　楽＝（R）

主任講師：柴田南雄（放　送　大　学　教　授）
　　徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）

全体のねらい

民族音楽学の近年の研究成果を踏まえ、ヒトと音楽のかかわりから生じる根源的な諸問題を考える。また、それらの問題と関連する諸民族の音楽の実例をなるべく豊富に紹介するが、たんなる鑑賞の素材としてではなく、それが属する文化の文脈の中でいかなる意味を持っているかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	総　　論	1.人間の音楽的な営みをさぐる　2.異文化理解としての比較音楽学　3.比較音楽学から民族音楽学へ	柴田南雄（放送大学教授） 徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
2	音楽と人々の生活―アフリカ	はじめに　1.ことばと音楽　2.生活と音楽　3.楽器と音具（タイコ、木琴、指ピアノ、その他の楽器）　おわりに	江口一久（国立民族学博物館助教授）
3	音楽と神話	1.神話表現としての音楽　2.神話の音楽的叙述 3.楽器の神話的起源　4.神話の音楽的象徴化 5.音楽の神話的意味	山田陽一（島根大学専任講師）
4	音楽と構造	1.音律とテトラコード　2.旋法体系―ダストガーハを中心に　3.旋法上の巡歴―グーシェを中心に 4.リズムと形式	拓植元一（東京芸術大学助教授）
5	音楽と文化変容―変歴する音楽	1.「トルコ音楽」　2.メヘテルハーネ 3.「トルコ風に」　4.軍楽と式楽　5.伝播と変容	同上
6	音楽と楽器―音による点と線の表現	1.音の文化的意味づけ、そして音楽　2.点在性のテクスチュア　3.線条性のテクスチュア 4.点と線を超えて	山口修（大阪大学助教授）
7	音楽と祭り	はじめに　1.シンガポールの華人と地方劇の種別 2.祭りの行事の中の酬神戯　3.各劇種の盛行度合いと使用楽器　4.戯棚と伴奏音楽演奏状況 むすび	上参郷祐康（東京芸術大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	音楽と演劇	1.文化としての音楽　2.意味をもつ音・感じる音 3.語りの音・状況の音　4.演技する音・異界の音 5.ミューズとサラスヴァティ　6.インド音楽の伝統　7.インド音楽の総合性	小西正捷 （立教大学教授）
9	音楽とパフォーマンス	1.パフォーマンスを研究する意義　2.演奏技法からコスモロジーへ（バリ島の事例）　3.パフォーマンスと相互作用（奈良県の事例）　4.パフォーマンスの枠組み	中川　真 （京都市立芸術大学講師）
10	音楽と社会―イスラエル、アラブ	1.ユダヤ人とアラブ人（離散ユダヤ人、「イスユム化」と「アラブ化」）　2.民族と音楽（アイデンティティを求めて、宿命と賛歌をうたう、千夜一夜物語の音楽世界）　3.音楽と宗教（宗教儀礼と音楽、「声」による賛歌、コーラン朗唱、神秘派の音楽儀式）　4.音楽と政治（『黄金のエルサレム』、クルスームの歌）	水野信男 （兵庫教育大学教授）
11	音楽と伝承	1.第二次口頭性　2.規範的な楽譜と記述的な楽譜 3.楽譜の形態（擬声語的な種類、文字・数字による種類、図式的な種類、術語による種類、混合種） 4.口三味線と身体性と口頭性	徳丸吉彦
12	音楽と記録	1.民族音楽の現場―フィールド・ワーク 2.採譜と分析	谷本一之 （北海道教育大学教授）
13	音楽と都市文化―南北アメリカ	はじめに　1.ジャズとニューオリーンズ（クリオール）　2.ニューヨークとティン・パン・アリー 3.ニューヨーク・ラテンサルサ　4.ニューヨークのストリート・カルチャー　ヒップ・ホップ 5.西の拠点　ロサンジェルス　6.ナッシュヴィルとカントリー音楽　7.カントリー・ミュージック 8.ラジオ番組の波紋	鈴木道子 （国立音楽大学非常勤講師）
14	西洋クラシック音楽と民族性	1.民族音楽と西洋芸術音楽　2.西洋音楽の歴史　3.西洋クラシック音楽と演奏（イタリア人の音楽性、ドイツ・オーストリア人の音楽性、フランス人の音楽性）　4.ヨーロッパ周辺国諸民族の演奏に表れた音楽性（ロシア人音楽家によるドイツ音楽の演奏、ドイツ人音楽家によるロシア音楽の演奏、ハンガリー人の弦楽器の音色）　5.中近東の諸民族の演奏（レバノンのピアニストによるベートーヴェン演奏、トルコのピアニストによるブラームス演奏）6.アジアの諸民族の演奏他	柴田南雄
15	音楽と人種・言語・民族	付・音楽の始原説について 1.人種・民族と音楽文化　2.言語と音楽文化 3.西洋作曲様式のもとでの民族性 付・音楽の起源に関する過去の諸説について	同上

＝文化人類学＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

文化人類学という学問を一言で定義すれば、世界の諸民族のもつ文化や社会について比較研究する学問だと言える。それらの特色を具体的・実証的にとらえていくところに特徴がある。本講においては文化人類学の諸分野における今までの成果を概観し、日本人、日本文化の問題や国際理解など、身近な課題にも眼をむけていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文化人類学とはどんな学問か？	フィールド・ワークの学問　アメリカにおける区分法　英国における区分法　ドイツ、オーストリアにおける区分法　日本における区分法　民俗学と民族学　欧米におけるこの分野の歴史　日本における歴史　人種と民族	祖父江　孝　男（放送大学教授）
2	文化：人間の特質	人間の特質としての言語能力　動物の鳴き声　人間の言語の特色　言語の役割(1)コミュニケーション　言語の役割(2)記憶と複雑な思考　人間だけがもつ文化　文化はいつ生まれたか？	同　上
3	文化の進化、文化の伝播	19世紀の文化進化論　モルガンの社会進化論　進化論にかわって登場した伝播論　イースター島の問題　タバコの伝播	同　上
4	生業と経済	狩猟と採集が最初の段階　狩猟の規模によって生活形態が異なる　不安定な狩猟採集民の経済　農耕とその起源　穀物農耕により人間の生活はどう変わったか　日本の場合を考える　牧畜の起源	同　上
5	衣・食・住を考える	衣類の種類と系統　身体装飾　食物の基本型：主食の獲得と利用　調理の基本型　住居の基本型	同　上
6	言語とコミュニケーション(1)	音声学　音楽　構造言語学とエティックの立場、エミックの立場　言語の系統―比較言語学	同　上
7	言語とコミュニケーション(2)	言語の分類(1)文字のある言語、ない言語　言語の分類(2)形態による分け方　サピア・ウォーフの仮説　非言語的コミュニケーション	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家族と親族(1)	原始乱婚制説をめぐって　モルガンの方法における誤り　一夫一婦制と一夫多妻制　一妻多夫制家族　婚姻後の居住場所の分類	祖父江　孝　男
9	家族と親族(2)	父系制と母系制　母系制　リネージと民族　日本の同族　イトコ婚をめぐるレヴィ・ストロースの学説　レヴィレート婚、ソロレート婚　冗談関係と忌避　配偶者選択における自主制	同　上
10	超自然観と宗教	アニミズムとアニマティズム　宗教と呪術　呪術の分類　妖術（ウィッチクラフト）　シャーマニズム　日本のシャーマニズム	同　上
11	民族芸術と音楽・芸能	民族芸術　民族音楽学からみた日本の音楽　芸能	同　上
12	文化と心理・民族性	民族性・国民性は文化によって作られる　マーガレット・ミードによるニューギニア研究　日本文化と日本人の心理、国民性　重要な因子としての歴史と風土　県民性を例にとって考える　風土ということばの意味　家族関係としつけの様式	同　上
13	文化変化と文化変容	文化変容（アカルチュレーション）　文化変容の種類　ハワイの場合、北米インディアンの場合　相対主義　カルチャー・ショック　反文化変容運動　文化変容をどう評価するか　戦後日本の文化変化	同　上
14	国際理解と国際交流	村垣淡路守のこと　エスノセントリズムと相対主義　異なった背景に異なった慣習　日本人の対外感覚	同　上
15	エピローグ	触れ残した諸領域　認識人類学　医療・映像・教育人類学　都市人類学　象徴人類学・女性の人類学　80年代の人類学　フィールド・ワークの方法と倫理	同　上

＝アフリカ論＝（TV）

〔主任講師：川田順造（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

アフリカの姿を過去現在にわたってかなりくわしく、しかも全体像がつかめるような形で紹介する。写真、図版、ビデオ、録音（道具、衣類、楽器などの実物も）を豊富に使い、アフリカの姿がいきいきと視聴者に伝わるように工夫する。日本人との関係でのアフリカ、現在から未来へ向かってのアフリカについても十分考えるようにしたい。地域別各論では、それぞれの地域での現地調査経験の長い専門家を適宜ゲストに招いて、川田がきき役になり対談形式で他の地域と対比させながら次第に全体像が作られていくようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自然と人	1. アフリカの自然 2. アフリカの人種	門村　浩（東京都立大学教授） 尾本恵市（東京大学教授）
2	アフリカの言語	1. アフリカの言語の分類と分布 2. 源郷（homeland）の推定と言語の拡散 3. アフリカの言語の特徴 4. 多言語併用と共通語 5. 太鼓ことば	加賀谷良平（東京外国語大学助教授）
3	歴史の中のアフリカ	1. 文字史料と遺跡の欠如 2. アフリカ史の諸性格 3. 植民地化以前の国家	川田順造（東京外国語大学教授）
4	都市・新しい民族形成	1. 多部族共生の国民社会 2. 部族本位制社会―アフリカの伝統的社会 3. アフリカ社会の植民地化 4. 植民地に対する住民の反応 5. アフリカ社会の都市化 6. アフリカ都市の社会的特性 7. アフリカの国民社会	日野舜也（東京外国語大学教授）
5	ベルベル文化とイスラム―北アフリカ	1. 北アフリカ文化の多元性 2. ベルベル人とベルベル文化 3. イスラム化の過程 4. 伝統的なマグリブ社会と文化の特徴 5. 北アフリカ的個性とアイデンティティ	宮治美江子（東京家政大学教授）
6	家畜と人間	1. はじめに　2. 東部アフリカ牛牧文化複合 3. 家畜の個体識別 4. 家畜の分類と民俗遺伝観 5. 色・模様の認識 6. 色・模様を介した世界観そして儀礼 7. 特定の色・模様（家畜）へのアイデンティティと攻撃性	福井勝義（国立民族学博物館助教授）
7	サバンナと森林の文化	1. 多様な自性条件 2. 自然と食生活 3. 自然と物質文化 4. 産物と交易 5. 人種・言語・社会 6. 外の世界との交渉 7. 王と商人	川田順造

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	農産物と魚の物々交換—中部アフリカ	1. ソンゴーラの焼畑耕作の方法 2. ソンゴーラの焼畑作物の構成 3. マニオクの調理法に見る三つの伝統 4. アブラヤシへの依存　5. ザイール川の漁労民 6. 農産物と魚の物々交換 7. 物々交換市の制度 8. 農耕民の客分としての漁労民	安溪遊地 （山口大学助教授）
9	東アフリカ農耕社会の家族と親族	1. 東アフリカの農耕社会 2. 家族・リネージ・クラン 3. 複婚家族の実態 4. 冗談関係と忌避関係	松園万亀雄 （東京都立大学助教授）
10	アフリカの採集狩猟文化	1. ムブティ・ピグミー 2. ブッシュマンとの比較	原子令三 （明治大学教授） 田中二郎 （京都大学教授）
11	女性とその世界	1. はじめに 2. 日常の生活 3. 女性の一生 4. 女性の領域、女性の世界 5. おわりに	上田冨士子 （新潟大学非常勤講師）
12	アフリカの世界観—知恵と力	1. 世界観の基調 2. 神観念をめぐって 3. 双極論 4. トリックスター	阿部年晴 （埼玉大学教授）
13	ものと人間	1. ものと人間のかかわりの原型 2. からだの延長としての道具 3. 「もの」の文化的意味 4. 工人集団と技術の継承 5. 技術の停滞と変革	川田順造
14	商品経済の進展と開発の問題	1. 輸出向け換金作物の導入 2. 鉱産物輸出経済の形成 3. 輸入製品の流入 4. 独立後の工業化の動き 5. 農村開発重視への転換	吉田昌夫 （アジア経済研究所コーデイネーター）
15	アフリカが提起するもの	1. 私たちにとってのアフリカ 2. アフリカと他の世界との交渉 3. 受動性と同化力 4. アフリカから学ぶもの	川田順造

＝イギリスの言語文化＝（TV）

〔主任講師：橋口　稔（東京大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの時代から20世紀の現代まで、主として文学作品をとおして、イギリス文化の諸相を歴史的に辿ってみようと思う。短いものであっても英語のテキストを読むことを交えながら、イギリスの言語文化の特質を明らかにしたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	英語の歴史	・「イギリス」という言葉　・古英語、中英語、近代英語　・近代英語とシェイクスピア　・英語の語彙	橋口　稔（東京大学教授）
2	シェイクスピアⅠ	・ルネサンスの潮流　・＜新しい学問＞の展開　・近代英語による新しい詩　・エリザベス朝の演劇と劇場　・シェイクスピアと「地球座」	同上
3	シェイクスピアⅡ	・ストラトフォードのウィリアム・シェイクスピア　・劇作家ウィリアム・シェイクスピア　・シェイクスピアの四つの時期　・史劇・喜劇・悲劇について　・シェイクスピア劇の韻律	同上
4	欽定訳聖書	・欽定訳聖書とは何か　・英国国教会の成立　・聖書の英訳　・欽定訳聖書の誕生　・欽定訳聖書の英語　・その後の英訳	同上
5	ミルトン	・ピューリタンの精神　・ミルトンのすぐれた才能　・ピューリタン革命　・ピューリタン　・『失楽園』	同上
6	ロビンソン・クルーソウ	・海外冒険物語　・『ロビンソン・クルーソウ』　・無人島の位置　・入植者ロビンソン　・作者ダニエル・デフォー	同上
7	近代小説に見る生活Ⅰ	・ジェントリー階級　・フィールディングの『トムジョウンズ』　・オースティンの『高慢と偏見』　・相続と結婚　・作者オースティン	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ロマンティシズム	・ワーズワースと自然　・『抒情歌謡集』・『序曲』　・イギリスの産業革命　・イギリスのロマンティシズム　・ジョン・キーツと美	橋口　稔
9	近代小説に見る生活Ⅱ	・イギリスのパブリック・スクール　・パブリック・スクールの功罪　・ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』　・二つの国民	同上
10	ヴィクトリアニズム	・帝国主義的繁栄　・テニソンの『イン・メモリアム』　・アーノルドの『ドーヴァー・ビーチ』・ハーディーの『テス』	同上
11	ブルームズベリー・グループ	・新しい時代への期待　・グループのメンバー・G.E.ムアの『倫理学原理』　・グループの人間関係　・グループの基本姿勢　・ストレイチーと伝記　・ヴァージニア・ウルフの『波』	同上
12	T.S.エリオットとD.H.ロレンス	・エリオットの詩集　・ロレンスの『息子たちと恋人たち』　・ジェントリー文化への影響	同上
13	オーデン世代	・オーデン・グループの人たち　・『新署名』と『新領土』　・W.H.オーデン　・スペイン戦争・オーウェルの『カタロニア讃歌』　・『ウィンガン波止場への道』より　・『動物農場』と『1984年』　・オーデンの長詩	同上
14	第二次世界大戦後Ⅰ	・新しい演劇―『怒りをこめて振り返れ』　・労働者階級出身の作家たち　・アラン・シトリー・オズボーンの及ぼした影響　・新しい桂冠詩人	同上
15	第二次世界大戦後Ⅱ	・戦後のイギリス　・新しい詩人たち　・ラーキンの『教会へ行く』　・新しい小説　・新しい小説家たちの登場　・マードックの『鐘』	同上

＝アメリカの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、Introduction to American Culture という副題が示しているように、アメリカを国家、国民、文化として紹介することを目的としている。講義は主にハワイ大学のアメリカ研究科の教授によってすべて英語で行われる。受講生はすでに「中級」以上の英語を習得していることが必要である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	The American City	ピューリタンによる“a city on the hill”の建設に始まったアメリカは、その後、摩天楼のそびえる近代都市を築いた。アメリカの都市の歴史、特徴、問題点を説明する。	James Mccutheon professor university of Hawaii（ハワイ大学教授）
2	American Ideas of Nature	アメリカ人は広大な国土を開拓して近代産業国家を築いてきたが、近年、アメリカ人の自然に対する考え方は大きく変化し、開拓よりも保存と保護を重視するようになってきた。	Robert Weyeneth Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
3	The American political and Economic Institutions	民主主義国としてのアメリカの政治制度と、資本主義国家としてのアメリカ経済制度を紹介し、アメリカ政府がどのような機能を果たしているかを説明する。	Harry H.L. Kitano professor university of california, Los Angeles（カルホルニア大学教授）
4	The American Family	多民族国家であるアメリカには、典型的な、あるいは標準的な家族はない。近年、アメリカで目立つ現象は、独身主義者と働く母親が増えてきていることである。	同上
5	The American Mass Medid	まず、多民族国家であるアメリカのマスメディアの全体的な特徴を説明し、次に、アメリカにおける多様な種類のマスメディアの受容状況を述べる。	同上
6	Popular Culture in America	今日のアメリカの大衆文化はテレビに大きな影響を受けるようになったので、テレビ番組を通してアメリカ人の好みや価値観を探ることができる。	Floyd Matson professor University of Hawaii（ハワイ大学教授）
7	Movies in American Culture	アメリカで起きた映画産業は今日でも多くの人に娯楽を提供している。メロドラマや西部劇、サイエンス・フィクション、喜劇はアメリカ映画の不動のジャンルである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	Sports in America	アメリカ人の闘争的で野心的な性格は、アメリカ人のスポーツに反映している。今日では多くのスポーツが職業化し、優れた選手はアメリカンドリームの象徴と見なされている。	Seymour Lutzky professor University of Hawaii（ハワイ大学教授）
9	Regional Patterns of American Culture	アメリカにも特色のある文化をもった地域がある。この章では、ニューイングランド、ニューヨーク、南部、西部、カリフォルニアの地方文化を紹介する。	David E. Bertelson Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
10	Women in American Culture	1960年に始まったアメリカにおける女性運動の動機と成果を紹介し、現在アメリカの女性が社会と家庭で直面している新しい問題を取り上げる。	Judith Hughes Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
11	American Culture and Society The American Writier in the twentith Century	今世紀のアメリカの代表的な作家であるドライサー、ヘミングウェイ、スタインベック、ライト、モリソン、アップダイクがアメリカをどうとらえていたかを論じる。	Judith Hughes Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
12	"Ereryone Came from Somewhcre Else" The U.S. as a Nation of Nations	多くの民族が移住してきた今日のアメリカを築き上げたが、これらの民族が経験した新しい生活と社会への適応とアメリカ人としてのアイデンディティを高めた過程を説明する。	Mark Helbling Associate professor University of Hawaii（ハワイ大学准教授）
13	"We and They": Dominant Croups and Efhnic Minorities	多民族国家であるアメリカには、多数民族が少数民族や有色人種を支配したり差別したりするという歴史があった。現在、民族問題がどのように解決されているかを説明する。	peter Rose professor Smith College（スミス大学教授）
14	" In Many One" The Character of American Democracy	アメリカは世界で最初の近代民主主義国家である。アメリカ人が理想とする民主国家、アメリカ人の民主的な生き方、アメリカ人の流動性などを紹介する。	同上
15	Americas World Rose	二つの世界大戦を経てアメリカは世界で指導的な役割を演じるようになったが、同時に、多くの外交問題と果てしない軍事力拡張競争に巻き込まれることにもなった。	同上

＝アメリカの言語文化 II＝(R)

［主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
Nicholas J. Teele（同志社女子大学助教授）］

全体のねらい

この科目は、アメリカで使われている英語、いわゆる「アメリカ英語」（American English）の社会的・文化的背景を説明し、受講生がアメリカ英語の性質と多様性をよりよく理解し、アメリカ英語をより効果的に使えるようになることを目的としている。受講生はすでに「中級」以上の英語を習得していることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アメリカ英語の多様性	この科目の全体的な紹介を兼ねてアメリカ英語にはどのような多様性があるのか、言葉の多様性と社会的および文化的要素とどのような関係があるのかを概観する。	比嘉正範（放送大学教授）
2	黒人英語	アメリカの人口の10パーセント以上を占めている黒人の間で使われているいわゆるBlack Englishの特徴を具体的に説明し、アメリカ英語の一方言としてのBlack Englishに対する理解を深める。	田中幸子（椙山女学園大学教授）
3	アメリカ英語の男女差	アメリカ英語の男性語と女性語の特徴を具体的に説明し、両者の差を明らかにする。	井出祥子（日本女子大学教授）
4	アメリカ英語の敬語	アメリカ英語にも敬語があることは意外に知られていない。日本語の敬語と比較対照しながら、アメリカ英語の敬語の特徴と使用状況を具体的に説明する。	同上
5	アメリカ英語の比喩	アメリカ英語で使われている比喩の言語的構造と内容的特徴を具体的に説明し、比喩を比較文化的に考察する。	平賀正子（放送大学助教授）
6	アメリカ英語のオノマトペ	どの民族の言語にも特有の擬声語（onomatopoeia）があるが、本章では日本語の擬声語と比較対照しながらアメリカ英語の擬声語を紹介する。	筧寿雄（神戸大学教授）
7	アメリカにおける広告の言葉	アメリカは広告と広報活動の盛んな国である。アメリカにおける広告の言葉の特徴を発想と表面の面からとらえて比較文化的に説明する。講義は英語で行う。	Vance E. Johnson（明治大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	アメリカの初等および中等教育における英語教育	日本における国語教育に匹敵するアメリカにおける英語教育が小学校と中学校でどのように実施されているかを説明する。講義は英語で行う。	Nicholas J. Teele（同志社女子大学助教授）
9	アメリカの大学における英語教育	アメリカにおける国語教育である英語教育が大学の一般教養課程の一部としてどのように行われているかを説明する。講義は英語で行う。	同上
10	アメリカにおける外国語教育	英語が国際語になっているのは事実だが、アメリカの高校や大学で外国語教育が行われているのも事実である。アメリカにおける外国語教育の現状、特徴、問題点などを報告する。	牧野高吉（北海道教育大学教授）
11	アメリカにおけるピジン英語	一般にピジン英語は単なる不完全な英語と見なされがちだが、アメリカで使われているピジン英語の特徴、造語力、表現力などを説明する。	比嘉正範
12	アメリカにおけるバイリンガリズム	アメリカは多民族、多文化、多言語の国といわれている。このような国におけるバイリンガリズム（二言語使用）あるいはマルティリンガリズム（多言語使用）の現状、問題点、これに対する政府の政策などを紹介する。	本名信行（青山学院大学教授）
13	アメリカ英語の「人間・社会関係文」	人間関係を作ったり、保ったり、壊したり、修復したりするときに使われる表現を「人間社会関係文」、略して「関係文」と呼んでいるが、アメリカ英語の関係文の特徴を比較文化的に説明する。	比嘉正範
14	アメリカ英語の民主化	民主主義や民主化は政治に限られたことではない。多くの社会で言語が人間差別や社会階級意識維持の手段として使われてきた歴史があるが、アメリカではどのようにして言語の民主化が行われてきたか、あるいは行われつつあるかを論じる。	同上
15	国際語としてのアメリカ英語	英語が国際語になっているといわれても、英語にはイギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語などがあり、それぞれの国際性は必ずしも同一でない。この章では国際語としてのアメリカ英語の現状と今後の発展を論じる。	比嘉正範 Niholas J. Teele

＝ドイツの言語文化＝（TV）

〔主任講師：辻　　瑆（東京大学名誉教授）
　　三島憲一（学習院大学教授）〕

全体のねらい

日本におけるドイツ像の成立をふりかえった上で、ドイツ文化がアイデンティーティーを獲得したとされるゲーテ時代と、そのゲーテ時代の文化を政治的統一のためのイデオロギーと化してゆく19世紀後半の状況を対比、時には政治的な遅れの故に、高度の内省的、批判的文化を作り出してゆくドイツ独特のメカニズムを解読する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の中のドイツ、ドイツの中の日本	この講義の意図　さまざまなドイツ像・日本像　森鷗外と姉崎嘲風　憧憬の対象と粗暴な自己正当化　そのつどそのつどのドイツ　変わらないドイツ像・いぶかるドイツ人　失われていく差異の意義　ようやく始まる理解	三島憲一（学習院大学教授）
2	ニュルンベルクに見るドイツ史	ニュルンベルク市を例としてのドイツ史概観	辻　瑆（東京大学名誉教授）
3	啓蒙の時代(1)―フリードリヒの世紀―	啓蒙主義と脱魔術化　啓蒙主義と市民階級　批判の精神　公共の場での啓蒙	三島憲一
4	啓蒙の時代(2)―カントと批判精神―	ドイツ啓蒙主義の特質　ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ　単子論　その後のドイツ思想の特質　クリスチャン・ヴォルフ　イマヌエル・カント　カントの問い　『純粋理性批判』　『実践理性批判』と『判断力批判』	木田　元（中央大学教授）
5	感性の解放―「若きヴェルテルの悩み」を中心に―	啓蒙主義と芸術　新時代に先駆ける文学　個人と社会慣習とのはざま　貴族と市民　小説『ヴェルター』の反響　解放か逃避か　作品解釈と時代	轡田　収（学習院大学教授）
6	フランス革命とドイツ観念論	政治と哲学　政治と芸術　古代と美と自由　ドイツ観念論　ヘーゲル―精神現象学と人類の「教養」　理念と現実	木田　元 三島憲一
7	ロマン派の夢―市民社会と芸術	初期ロマン派とフランス革命　政治革命から「美的革命」へ　市民社会批判としての合理主義批判　世界の「ロマン化」　ロマン的イロニー　後期ロマン派　ヨーロッパ的運動としてのロマン主義	大貫敦子（学習院大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	芸術から社会の現実へ—ハイネを手掛かりに—	ハインリヒ・ハイネ　「芸術時代の終焉」　市民階級の理想　7月革命期のドイツとフランス　解放戦争前後の国民意識　7月革命とハイネ　『フランスの画家』『フランスの状態』　3月前期の文学史　時代に呼びかける詩『ドイツ、冬物語』『ドイツ、冬物語』より	轡田　収
9	歴史の世紀—擬古典主義と記念碑—	市民社会と歴史　芸術は過去のもの　歴史と国民意識との結びつき　歴史志向の帰結—芸術の馴致　精神科学の制度化　記念碑その他	三島憲一
10	ドイツ帝国の時代—文化批判と社会運動—	教養俗物への批判　『悲劇の誕生』とヴァーグナー　アポロ的とディオニュソス的　ソクラテスと芸術の解体　ヴァーグナーとの不和　近代批判と未来への期待　二つの文化	同上
11	終わりか始まりか—世紀末とカフカ—	ニーチェとそれに続く時代　世紀末　解放か？　アール・ヌーボー（ユーゲント・シュティール）　ミュンヘン　文芸誌と画家　作家たち　凋落　終わりか始まりか、フランツ・カフカ　書くことと生きること	辻　瑆
12	帝国の瓦解とワイマル時代	帝国の矛盾と表現主義　第一次大戦の敗北と共和国の誕生　共和国の苦難　黄金のワイマル文化　建築と映画　共和国の終焉	山本　尤（京都府立医科大学教授）
13	30年代とナチズム	ヒトラーの政権掌握　文化統制と亡命　大衆の熱狂と反ユダヤ主義　知識人のナチへの期待　第三帝国の崩壊	同上
14	二つのドイツ	敗戦と東西の分裂　47年グループとハイデガー　フランクフルト学派など学生叛乱　分裂の認定と平和的な共存	三島憲一
15	現代の中のドイツ	トーマス・マンの呼びかけ　なぜまたもやプロイセン・ドイツなのか　日本とドイツの近似性　日本とドイツの対照性　ヴァイツゼッカー大統領の講演　ギュンター・グラスとシュテファン・ハイム　グラスの見解　文化によるアイデンティティー　脅威の下で　ハイムの見解　何がちがうか　伝統と断絶　さまざまな社会運動と緑のグループ　生の直接性を求めて　ヨーゼフ・ボイス　ユルゲン・ハーバーマス	辻　瑆

＝ドイツの言語文化Ⅱ＝（TV）

〔主任講師　辻　　瑆（東京大学名誉教授）
　　三島憲一（学習院大学教授）〕

全体のねらい

「言語文化１」では啓蒙主義以後のドイツの激動の歴史と反省的な文化のあり方を扱ったのを承けて、「言語文化Ⅱ」では現代のドイツ語圏、それも主としてドイツ連邦共和国（西ドイツ）の社会と文化の様々な側面に光をあててみたい。地方ごとの特色、家庭や女性の問題、政治の仕組みや労働組合のあり方、また現代の芸術や文学などをときには日本の状況と比較しながら紹介し、考えてみたい。同時に生きたドイツ語にもできるだけ触れるようにするつもりである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ語圏の地方歴史と自然	ドイツ語圏には四つの国があり、個々の国の地方も領邦国家であった歴史を持つ。その歴史と自然条件、生活と産業を概観する。	轡田　収（学習院大学教授）
2	連邦制－ドイツの方言・連邦制	多種多様なドイツ語の方言は生活と伝統の反映である。方言と標準語の中間に地域の通用語がある反面、言語障壁も生じている。また、ラントと連邦との関係を任務と権限、立法範囲などから見る。	同　上
3	政治の仕組	西ドイツを中心に基本的な政治の仕組や制度、重要政党の傾向、政治倫理、一般市民のもつ民主主義についての理解などを扱う。	三島憲一（学習院大学教授）
4	労働と余暇	ドイツ人の職業生活、職業観はどのようなものであろうか。また労働者の共同決定、労働組合のあり方なども見ていく。さらに余暇の過ごし方を述べる。	同　上
5	西ドイツ社会の家庭	ドイツの家族のあり方も、価値観の激しい変動の影響を強く受けている。伝統的な市民階級の家族像から、60年代後半の反権威主義運動を経て、新しい家庭観へ移っていく課程を見る。	大貫敦子（学習院大学助教授）
6	西ドイツ社会の女性	家族、そして社会全体の変化に大きく寄与したのが女性の意識の高まりである。女性運動のさまざまな新しい動きを見る。また、そのような変化の文学的表現も扱う。	同　上
7	教育と社会	ドイツ連邦共和国の教育制度は複雑に見える。また平等主義的な教育制度も定着しなかった。これを歴史的な背景から見ていく。	エンゲルハルト・ヴァイグル（東京大学外人講師）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	職業教育と大学	ドイツ独特の職業教育とはどのようなものであるかを見る。さらに大学内の制度や授業のあり方などを日本の場合とも対比しつつ明らかにしていく。	エンゲルハルト・ヴァイグル
9	都市と住宅(1)	日本との対比を出発点として、特に西ドイツの都市の現状と歴史的な変遷を見ていく。城壁と城門に守られていた都市も、19世紀には人口の増加、工業化、交通の発達などにともなって大きな変貌を遂げる。	辻　　理（東京大学名誉教授）
10	都市と住宅(2)	第二次大戦で、大都市が壊滅的な打撃を受けた西ドイツの復興はめざましかった。しかし1970年代後半からは乱立する高層住宅群に対する反省と後悔が出始め、都市計画への住民参加もなお、一層強められていく。	同　　上
11	過去の傷(1)	第二次大戦の侵略国でありながら、過去の国家的犯罪に対する態度は日本とドイツではかなり異っている。西ドイツにおける過去克服の試みを抵抗運動の位置づけや制度面などから見る。	三島憲一
12	過去の傷(2)	過去の問題が知識人や作家、そして公共の世論で、どのように論じられているかを、いくつかの逸話などによって構成し、日本の状況とも比較して考える。	同　　上
13	ドイツの文学・芸術(1)	60年代、70年代を中心に、ベルをはじめ現代作家の業績や芸術家のグループの活動を概観する。東ドイツの文学、芸術にも触れる。	岩淵達治（学習院大学教授）
14	ドイツの文学・芸術(2)	70年代の内面化傾向、女流文学の動き、演劇、映画の傾向をさぐり、80年代の文学を考察する。	同　　上
15	新しい社会運動	現在の社会制度や文化にかろるものを見つけようとする「アルタナティーヴェ」のさまざまな局面、「カウンター・カルチャー」や「緑の人々（緑の党）」などを通して、現代産業社会の問題点と新しい社会運動の行方を考える。	大貫敦子

＝フランスの言語文化Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）
西澤文昭（青山学院大学助教授）〕

全体のねらい

広く世界にあって、またヨーロッパという歴史的文化的共同体の中にあって、フランスがフランスである所以はどこにあるのか。フランス語の成立と発展を縦軸とし、現代世界におけるフランス文化の独自性の解明を横軸として、フランスの言語文化の在り様にアプローチする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	フランスという国	フランスはどういう国であり、フランス文化の独自性はどこにあるか。フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	フランス語の現状	フランス本国以外では世界のどんな地域でフランス語が話されているか。ベルギー・スイス・カナダ・アフリカにおける公用語としての現況。また国内にあって、標準フランス語と方言との関係はどのようなものか。	西澤文昭（青山学院大学助教授）
3	ヨーロッパの成立・フランスの成立	ヨーロッパという概念はいつ、どのような形で、またフランス国家・フランス人という意識はどのようにして明確になり成立してきたか。ローマ帝国の崩壊、キリスト教の成立と発展、アラブ文化などを視座に入れ、探る。	同上
4	フランス語の誕生	ラテン文化の継承。南仏文化と北仏文化。フランス語が一民族の、一国家の言葉として意識され確立するまでを概観する。	同上
5	ルネサンス期のヨーロッパとフランス	先進国イタリアとフランスの関係。ユマニスムとは何か。古典研究がフランス語の発展にどのような影響を与えたかを見る。	同上
6	ヨーロッパの公用語	ヨーロッパ宮廷文化におけるフランス語の地位の向上。十七・十八世紀のフランス語論。伝統と革新。アカデミー・フランセーズの成立とその役割。	同上
7	啓蒙思想とフランス革命	啓蒙思想は、フランスとヨーロッパ諸国の間にどのような関係を生み出したか。ルソーを中心に18世紀の思想の特色を探る。	永見文雄（中央大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	食の文化史	葡萄酒はいつから飲まれるようになったか。香辛料はどこから来たか。フランス料理の原点を探る。	西澤文昭
9	衣の文化史	中世からルネッサンスの衣服を中心に服飾の文化を通観する。	同上
10	住の文化史	都市の成立と市民階級の誕生に焦点をあて、フランス文化を見る。	同上
11	小説について	フランス近代小説は19世紀とともに始まる。小説の読者層、科学と文学の関連などを、バルザックを具体例として見る。ロマン派の成立とその言語観について、その後の様々な主義主張を見据えながら、考察する。	石井晴一（青山学院大学教授）
12	詩について	ヨーロッパにおける比較言語学の成立と象徴派詩人ステファヌ・マラルメの活動に焦点をあて、19世紀後半の文学について学ぶ。	竹内信夫（東京大学助教授）
13	フランス語と外来語	現代技術の進展につれ目立つようになった英語の流入。すでにはるか以前から外国語はフランス語に取り入れられてきた。借用語の歴史からフランス文化がどのようにして外国文化を受容してきたかを見る。	西澤文昭
14	マス・メディアとジャーナリズム	現代のフランスのマスコミはどのような状況にあるか。テレビを中心として、ジャーナリズムの現場からのリポート。	福井芳男
15	フランスと日本	日本人のフランス文化、フランス語受容の流れを辿り、日仏文化交流の草創期について考える。	井戸桂子（放送大学助教授）

＝フランスの言語文化Ⅱ＝　（TV）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランスの文化を作りあげたものは、長年にわたる作家、思想家、芸術家、それらを支えた民衆たちであった。現代のフランス精神に大きな跡を残している。各世紀の重要な文化事業（文化作品を中心とする）を選び、その証明を通じて、フランス文化の現在を浮き上らせていく。毎回短かいフランス語の文を読む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	フランス文化を支えるもの　文学と映像　文学研究とは	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	フランスのルネサンス	ルネサンスとは　フランソワ・ラブレ	同上
3	Kユマニストの文字と思想ーロンサールとモンテーニュー	プレイアード派　ロンサール　モンテーニュ　モンテーニュについて（インタビュー）	福井芳男 塩川徹也（東京大学助教授）
4	世界像の転換と人間ーデカルトとパスカルー	天文学の発展と世界観の変革　デカルトとパスカル	福井芳男
5	古典の美とは	Classicisme　コルネイユ、ラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌ	同上
6	雅びな宴 Fete galante	社交界での男と女の恋のかけひき　恋の分析そして快楽の追求	同上
7	啓蒙の光	新しい時代の精神とフィロゾフたち　社交性の開花　『百科全書』の世界　『百科全書』と現代	福井芳男 鷲見洋一（慶応大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	革命の火	フランス革命　カルナヴァレ博物館長に聞く（インタビュー）　革命学群像	福井芳男
9	ロマン主義革命	スタール夫人とシャトーブリアン　ヴィクトル・ユゴー　ロマン主義とは何か	福井芳男 井戸佳子 （放送大学助教授）
10	あるジャンルの運命 －運命－	小説の大衆化　バルザック、スタンダール　ゾラ	福井芳男 宮原信 （東京大学教授）
11	ブルジョワ社会における知性	1857年、ボードレール、フロベールの2つの裁判で、知識人とブルジョワ社会との関係が極度に緊張した。 －ボードレール、ヴエルレーヌ、呪われた詩人たち	福井芳男 井戸佳子 モーリス・パンゲ （東京大学講師）
12	詩的言語の革命	詩的言語の変革　ロートレアモン、ランボー、ジェルマン・ヌーヴォー、マラルメ、ヴェルレーヌ、クロ、コルビェール　象徴主義の終わり	福井芳男 菅野昭正 （東京大学教授）
13	世界観の革新	「NRF」とアンドレ・ジッド　アンドル・ジッド　マルセル・プルースト	福井芳男 岩崎力 （東京外国語大学教授）
14	人間存在への問いかけ	実存主義から構造主義へ　カミュ・サルトル	福井芳男 モーリス・パンゲ
15	文化の交流	フランス文学と日本　フランスにおける日本学について　フランスにおける日本文学の紹介の現状　フランスにおける日本文学の翻訳、及びその中の新しい動きについて	福井芳男 井戸佳子

＝ロシアの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシアの言語、文学、思想、芸術を、具体的なテーマに即しながら、しかし同時に常に歴史的な視点・枠組を忘れずに展望し、ロシア文化をいかに理解すべきかということを解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ロシア文化の地理的・歴史的背景	ロシア ― 果てしなく続く広大な平原のイメージ。そのロシア文化を生み出したロシアの自然と、その歴史を概観する。全体の導入部をなす。	外川継男（上智大学外国語学部教授）
2	ロシアと日本 ― 初期の交渉史	ロシアは、むかしから日本の北にある隣国であった。18世紀の後半から始まる日本とロシアの交渉の歴史を、その原点にさかのぼって考える。	同上
3	聖なるロシア ― キリスト教の受容	ヨーロッパで最も若いキリスト教国ロシア。東方正教への改宗によって、ロシアは国家的統一を果たし、ヨーロッパ古典文化の世界の仲間入りをする。	栗原成郎（東京大学助教授）
4	遊牧民とのたたかい ―『イーゴリ軍記』の世界	ロシア中世文学の最高傑作『イーゴリ軍記』は南方から侵入する遊牧民とたたかわざるを得なかったロシア人の歴史の貴重な記録でもある。『イーゴリ軍記』をとおして、ロシア人と遊牧民とのたたかいを見てゆく。	同上
5	フォークロアに現れた民衆の心 ―むかし話を中心に	イワンの馬鹿は、なぜ民衆のアイドルだったか、イワン王子はなぜ民衆の理想的君主像だったか ― むかし話からロシア人の心理を考える。	中村喜和（一橋大学教授）
6	ロシアの美的世界Ⅰ ― 古きロシアをたずねて	ロシア芸術はその根元においてイラン系民族スキタイ、サルマティアとのふれあい、ビザンディン文化・ギリシア正教の影響も強くうけた。中世における芸術・文化の発展と中世に深い根をもつ民衆芸術について考える。	川端香男里（東京大学教授）
7	西欧への窓 ―ペテルブルクの建設	「ヨーロッパへの窓」として建設された都市ペテルブルクの歴史は、そのまま近代ロシアの歴史でもある。都市建設の文化的政治的背景について述べ、レニングラードと改名された今日のこの都市の運命について考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	母なる都モスクワ — いまとむかし	東ヨーロッパの平原の中心に位置し、首都としてロシアの歴史と最も深く結びついてきたソビエト最もの都市のめまぐるしい変貌ぶりを概観する。	中村　喜和
9	ロシアの「村」 — 文学にみる農村問題	ロシアの社会・文化の根幹をなす農民・農村の実像と、それが文学にどのように描かれているかを、18世紀から今日のソ連まで歴史的にたどってみる。	島田　陽 （東京大学教養学部助教授）
10	ロシアの美的世界Ⅱ — 音楽と絵画	18世紀は、ロシアが西欧からもっぱら学びとる時代であったが、すぐにロシア的な、ロシア独自の文化を生む素地をつくった時代でもある。この18世紀から19世紀の「自立」の時代までを音楽と絵画の面から見てゆく。	川端　香男里
11	ロシア文学の黄金時代Ⅰ —プーシキンとゴーゴリ	ロシア・ロマン主義の時代は「詩」の黄金時代であったが、ロシア文化自立の時代でもあった。ロマン主義の歴史的意義を考え、代表的作家としてプーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、チュッチェフをとりあげる。	同　上
12	ロシア文学の黄金時代Ⅱ —ドフトエフスキーとトルストイ	ドフトエフスキイとトルストイによって代表される19世紀ロシア文学は、1880年代以降世界中にロシア文学ブームをまき起す。ロシア文学ブームの実像をさぐり、ドフトエフスキイとトルストイを比較しつつ両作家の個性と歴史的意義を考える。	同　上
13	ロシア演劇の魅力	演劇はロシアが最も大きな影響を外国に与えた分野である。18世紀からモスクワ芸術座、革命前後の前衛劇、今日のソビエト演劇までを歴史的に展望する。	島田　陽
14	ロシアの美的世界Ⅲ —銀の時代からアヴァンギャルドへ	19世紀末の無気力と沈滞の時代から「銀の時代」がどのように生まれたかを考え、20世紀のアヴァンギャルドに至るロシア芸術の発展のあとをたどってみる。	川端　香男里
15	ソビエト時代の社会と文化	ロシアは20世紀初頭に文学・芸術と政治の両面で世界をリードしたが、スターリン時代を経て社会・文化のあらゆる面で数多く困難に直面している。その問題を歴史的に考えてみる。	同　上

＝ロシアの言語文化Ⅱ＝ （R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア文学を中心にロシア的なるもの、ロシアの伝統を考えることを意図した「ロシアの言語文化Ⅰ」を受けて、名文章、名語句、成句、諺等、ロシア語の具体的表現例をもとにして、ロシア文化の多様な側面をとりあげ、ロシア文化の特質をさぐる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 —ロシア的なるものとは	ロシアの風土と自然を概観し、また、プーシキン、チェッチェフの文章をもとに、ロシアという国のイメージを探りつつ、ロシア史を貫く特質について考える。	川端香男里 （東京大学教授）
2	ロシア語について	自分の母国のことば—ロシア語を自分の生命のごとく愛したトゥルゲーネフの散文詩『ロシア語』を軸に、ロシア語の歴史、特徴、さらにプーシキン、ロモノーソフのロシア語とのかかわりについて述べる。	栗原成郎 （東京大学助教授）
3	ロシアの民衆文化Ⅰ —異教の神々とキリスト教の聖者たち	民間信仰の多様な世界と、その後にはいってきたキリスト教との結びつきを解明しながら、ロシアの国の大多数を占めた農民の精神世界について考える。	同上
4	ロシサの民衆文化Ⅱ —民間歴による年中行事と民衆の歌	ロシアにおいて重要な役割を果たしてきた口承文芸を、儀礼歌、とくに農耕儀礼歌を中心にすえて、春夏秋冬の移り変わりの中でとらえてゆく。	同上
5	ロシアの民衆文化Ⅲ —諺・諺的成向・名句名言	ロシア民衆の体験から発した、生活の智慧の凝縮的表現である簡潔な諺、諺的成句を通して、ロシア人の日常生活、習俗、ものの考え方を明らかにする。	同上
6	ロシアの民衆文化Ⅳ —諺にみる民衆の生活文化	農耕・牧畜・漁業などの経済活動とのかかわりの深い諺を、その寓意を通して考え、ロシア人の民族的心性について考察する。	同上
7	ロシアの自然Ⅰ —「祖国」と自然	「プラストール」「タスカー」などのロシア語の概念を理解しながら、ロシアの詩人がいかに自然を見つめてきたか、そこに光をあてて文学と自然、「祖国」と自然とのかかわり合いを考える。	川端香男里

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ロシアの自然 Ⅱ —ロシアの詩に見る「秋」の感情	ロシアにおける秋の情感を、プーシキンの詩『秋』を読みながら理解する。そしてロシアの詩人の多くが、感情や感受性だけでなく、「思想」をこめてロシアの自然を歌っていることを考察してゆく。	川端　香男里
9	ロシアの自然 Ⅲ —ロシアの森と河	ロシアの自然風土の中で、人間と動物とのかかわり合いを生活史的に見てゆくと同時に、プーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』に見られるフォークロアの世界にもふれてゆく。	同上
10	ロシアの大地 —ロシア人はどのように旅をしたか	プーシキンの詩『冬の道』を援用して、ロシア人の旅について考える。自然の営みと、そこに生活し、行き交う人々の姿を通しての農業・交通の歴史的考察。	同上
11	都市と農村 Ⅰ —ロシアの都市の成り立ち	18世紀以降のロシア近代化の中で、ペテルブルクという近代都市が成立するが、これは古いロシアの伝統の中にまったく新しい要素を生み出した。都市がロシア近代史に提起した問題を考える。	同上
12	都市と農民 Ⅱ 農村と農民	近代化が進む中で、農村および農民は社会の矛盾を最も深刻に味わわせられることになる。今日のソ連をも含めてロシア文学の最も重要なテーマである「農村」について考察する。	同上
13	民族 Ⅰ	百を越える民族、百を越える言語を話すロシア＝ソ連、その中にあって国家構成員であるドイツ人、ユダヤ人はいかに生きているか。さらに、時にはロシアの歴史の主役を担ってきたコサックについても考察してゆく。	同上
14	民族 Ⅱ	今日のソ連を構成する諸民族の中で、最大の人口をもつ東スラヴ族のロシア人、次いでウクライナ人の歴史と現状を考える。一方、非スラヴ系民族はいかに生きてきたか、その苦難の歴史を考察する。	同上
15	ロシアとソ連 —連続と変化	1917年の革命による国家としての名称と体制の一大変革は、それまでのロシア的なものにどのような変化をもたらしたか、あるいは変化せずにどのように生き続けているのか、功罪両面にわたって考察してゆく。	同上

＝社会思想史＝(R)

〔主任講師：城塚　登（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキァヴェリの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城塚　登（共立女子大学教授）
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピュウリタニズムに引継れる。	同　上
3	民主主義思想の成立(I)	ピュウリタン革命に出合ったホッブスは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同　上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスにおいてロックは社会契約について考えを進め、「主権在民」の考え方を確立する。	同　上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想は、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想家に受けとめられ、啓蒙思想として展開。反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同　上
6	「市民社会」への反省	自由と平等を掲げたフランス革命は、流血と専制をもたらした。ヘーゲルは、スミスが解明した「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同　上
7	初期社会主義思想	イギリスのオウエンは労働者の生活改善に努め、協同生活・協同労働の村を開いて社会主義を説き、フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだとサン・シモンが主張した。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして人間の自己疎外克服を人間解放の課題とする。	城塚　登
9	マルクスの共産主義思想	唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く、資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアニズムと社会民主主義	イギリスの「フェビアン協会」は社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党は議会活動による労働者の権利拡大という路線を提出した。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	ロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。西欧では、ルカーチ労働者階級の主体的自覚の形成が課題とした。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、会社などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、人間はそれと対決しなければならないと説く。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀、資本主義社会は産業的合理化を進めたが、同時に非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもった。その病理を指摘したマンハイム、リースマンを見る。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会の人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義の新しい問題を指摘したハーバーマスをとりあげる。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	近代日本における社会思想の展開を概観し、日本の社会の現状を考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会化などが日本の特殊性とからみながら引き起す問題にどう対処していくか。	同　上

＝ 思 考 と 論 理 ＝（R）

〔主任講師：大森荘蔵（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

思考、論理という曖昧模糊とした二概念を明確にすることによって、両者の関聯が言語の場にあることを示そうとする。そして具体的に日常日本語の中から若干の語の意味規則を撰んでそれらの規則から現行市販されている教科書の論理学が導出されることを示すことによって論理の言語規則説の一般的証明を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	本章の目的　本題の誤解　「思考」の曖昧さ　「思い」も思考　「思い」の言語化　言語規則説　記号論理学　我が国での記号論理　思考と論理　規則説の述べ方	大森荘蔵（東京大学名誉教授）
2	思考とは？	思考の意味の曖昧さ　「思い」としての思考　知覚（perception）に対しての思考（conception）　思考的理解の様々　知覚の中に籠った思考　四六時中常に思考	同上
3	思考と言語	経験は普通言語化されない　言語以前の経験という誤解　想起とは過去形の経験　思考が言葉になる　夢の場合　繰返して誤解を排する	同上
4	論理とは？	論理的正しさを手掛りにして「論理」を考える　排中律の形式の正しさ　言語規則説　出発点となる語を選ぶ―四つの接続詞　それら接続詞の意味規則　論理学の導出　結果の検定　日本語から論理学が導出される　言語規則と論理的正しさとの関係の実例　平面幾何学の語群　親戚名集団　等高線の意味により平面図から切断面図を導出する	同上
5	言語規則から論理を導く	言語規則説の証明の必要　局所的論理　全域的論理　非主題的な言葉から出発　非主題的な名詞・動詞　接続詞は非主題的　真理値表による接続詞の意味表現　真理値表を使って複合文の真理値を決める　恒真文型　接続詞間の依存関係	同上
6	述語論理(1)	言語規則説を述語論理に及ぼす　主語―述語の表表記法　関係を含む述語の表記法　「すべて」の表記(x)　「すべて」の範囲　話題世界を不定にしておく存在記号の導入　最大数に関する文例　束縛変項、自由変項述語文の簡単な表記法　真理値による述語の定義　n座述語　$(xi)H(x_1, x_2, xn)$　と$(xi)H(x_1, x_2, xn)$の真偽　述語論理の文型　回帰定義　妥当文型　公理系による公式的証明	同上
7	述語論理(2)	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　総称詞の接続機能　論理は世界に相対的　E.T生物の論理	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	異なる言語に異なる論理？	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　論理は世界に相対的	大森荘蔵
9	論理的必然性	必然性をとり上げる　論理的文は経験的検証と無縁　排中律の場合　規則に従う　規則に従わないと	同上
10	古典的三段論法	古典的三段論法と記号論理学　三段論法各種　正しい三段論法　推論型と文型　推論型と文型の相互導出　接続詞　矛盾文型から任意の文が推論できる	同上
11	思考の論理性	二つの結論　思考は必ず論理的？　論理と言い換え　首尾一貫　はやり言葉の論理	同上
12	形式化とコンピュータ	形式性の必要　形式化と機械化　算盤　コンピュータ　接続詞に対応するスイッチ回路　・のスイッチ　Vのスイッチ　～のスイッチ　機械的解法　決定可能性	同上
13	人間・脳・コンピュータ	言い廻しの危険　§1コンピュータ　コンピュータは「計算する」　機能的同類化　§2脳　「脳が…する」　脳過程　重ね描き　キメラ命題　キメラ命題は無意味　脳には機能的同類化は及ばない	同上
14	言語と世界	言語表現という誤解　事物の輪郭　「家」の固定「家」の制作　言葉に生活が籠る　人の動作　カントの図式論も同様　時間順序　時間順序の制作　要約　人間的意味を世界に与える	同上
15	論理と世界	世界の法則としての論理　論理は経験法則ではない　論理は言語を通して世界に成り立つ　時間順序　カントと規則説　今一つの観点　命題論理の接続機能　古典物理と量子論　弁証法論理　有効性の観点　結論	同上

＝中古日本文学＝　（R）

〔主任講師：秋山　虎（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

平安尊都から鎌倉幕府の開設までの400年間、平安時代の文学を一般には中古文学と呼ぶ。主たる担い手は　族たちであるが、彼らによって創出された多彩な文学の達成は後世に現範的な意義をもちつづけ、日本的な美意識の源流をなした。この中古文学の展開の姿を史的に追求する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	古文学の始発	桓武天皇による平安　都にはじまるこの時代の文化は、勅撰漢詞（文）集に象徴されるように、まず大々的な唐風文化に特徴づけられる。3の様相と歴史的意義を探り、やがて3の唐風がしだいに和様化していく過程を説く。	秋　山　　虎（東京女子大学　教　授）
2	『古今集』とその時代	漢文学の全盛時代に和歌は貴族たちの表立った文学とは目されなかったけれども、万葉時代以来の伝統が絶えたのではない。その様相を追跡し、やがて中古今集Ⅱの成立に至る経過を説述するとともに、この最初の勅撰和歌集の世界の特質について論ずる。	久保田　　淳（東京大学教授）
3	物語文学の誕生 —『竹取物語』と『伊勢物語』—	本来は口　の文芸であったモノカタリが、この時代に固有の意義を担いつつ仮名散文の虚構文学として発達する事情、およびいわゆる歌物語が成立する経緯を探って、物語文学の本質は何かを考える。	秋　山　　虎
4	日　文学の成立と展開 —『土佐日記』と『蜻蛉日記』—	物語文学と並んで仮名散文の日記文学の成立している事情を、記録としての日記や和歌との関わり3の他の要因から考えてみる。また日記文学によって、いかに人間の内面世界が　り起こされるに至ったかを明らかにする。	同　　上
5	虚構物語の成熟と基盤 —『うつほ物語』と『落窪物語』—	当時の物語が貴族社会の女性の消閑の具として無数に作られていた実状を説明し、それらのなかで特異な作品であるがゆえに現存する『うつほ物語』や『落窪物語』について、3の成立の意義を考える。	同　　上
6	『後撰集』・『拾遺集』の位置	漢詩に代わって公的な文学の座を獲得した和歌は、貴族たちの私的な生活感情を託す表現手段として日常生活に根づいた。そうした和歌の機能、詩物語との関わり、また後代に及ぼした影響などについて考察する。	久保田　　淳
7	清少納言と『枕草子』	日本人の美意識の伝統に規範的意義をもつ『枕草子』の特質や3の成立事情を、作者清少納言の個性や3の生活的背景との関わりにおいて考える。	秋　山　　虎

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	紫式部と『源氏物語』の世界(一)	『源氏物語』の作者紫式部の人生を家集や『紫式部日記』等によって考察し、物語執筆の経緯を推定し、主人公光源氏の栄華を語る『源祝物語』の第Ⅰ部の世界の主観・構造を説明する。	秋山　虎
9	紫式部と『源氏物語』の世界(二)	『源氏物語』の第Ⅱ・Ⅲ部の世界の推移・主題の展開の様相を追跡し、物語文学史のうえに抜きんでた独自の達成について考える。	同　上
10	『源氏物語』以後	『源氏物語』が以後の文学に対してどのような影響力をもちつづけたか。『更級日記』の作者菅原　標女の源氏物語をはじめ、長短編の物語群の様相を概観する。	同　上
11	女流歌人と『後拾遺集』	一条天皇朝、和泉式部・赤染衛門など女流歌人が輩出した後唐文化の最盛期を受けて、『後拾遺集』が撰集されたが、その時代背景はいかなるものであったかを考察し、同集の成立が王朝和歌史の屈折点に位置する理由を明らかにする。	久保田　淳
12	和歌文学の革新―詞花の時代―	王朝期文化とは矛盾する性格をはらむ完政朝文化の性格と浄土歳の添造か和歌文学にいかなる影響を及ぼしたか、歌人層の変化、歌の場の変質などの諸相を追求する。	同　上
13	歴史物語の諸相―『栄牡物語』と『大鏡』―	歴史的事実を素材とする、いわゆる歴史的物語、『栄花物語』・『大鏡』などの成立の意義を考え、それぞれに描き出される世界について説明を加える。	多田一臣（千葉大学助教授）
14	説話文学の誕生―『日本霊異記』―	説話文学の世界は、貴族を中心とする王朝文学いわば周縁に位置している。最古の説話集である『日本霊異記』を取り上げながら、説話文学誕生の意義を考える。	同　上
15	『今昔物語集』の世界	『今昔物語集』の厖大な説話群を統一するものは何であったのか。説話内容の分析を通じて、その世界認識のありかたについて考える。	同　上

＝アジア論Ⅳ＝（R）

〔主任講師：武田幸男（東京大学教授）〕

全体のねらい

朝鮮は私たちに最も近く、緊密な国であった。そこに住む朝鮮人は今までも、そしてこれからも大切な隣人である。隣人が長い間に築き、育ててきた朝鮮の歴史を理解することは重要であり、また興味のあることである。その朝鮮の歴史について、国際的な広い視野からとらえ直し、その複雑で多様な流れを一貫して追究してみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	朝鮮半島と朝鮮歴史の流れ	朝鮮半島は、朝鮮の歴史が展開した主要な舞台であった。そこで、次回からの具体的な講義の前に、まず、歴史の舞台としての朝鮮半島の特色を理解し、そのうえで、時期を追って認められる歴史上の変化・発展をたどり、朝鮮歴史の流れの特質について考えてみたい。	武田幸男（東京大学教授）
2	朝鮮史のあけぼの	朝鮮半島に人類がはじめて足跡をしるしたのは、今から数十万年前のことであった。やがて人々は農業を発展させ、金属器の使用をおぼえて　各地ではそれぞれ首長層を中心とする政治・宗教的な社会が成立した。考古学の成果によって、この過程をあとづけてみたい。	木村誠（東京都立大学助教授）
3	古代国家と三国の形成	朝鮮半島における国家形成は、たえず周辺諸民族との関連のもとで、長く複雑な経過をたどった。古朝鮮の興亡から、中国の郡県支配をへて、高句麗・百済・新羅などの成立に至る歴史の流れを概観し、朝鮮における国家形成の特質を考えてみたい。	同上
4	三国の抗争と新羅の統一	6世紀初め、新羅は高句麗のくびきを脱すると、南部の加羅諸国を圧迫し、やがて併呑して、朝鮮半島は文字どおり三国時代を迎える。三国間の抗争は、中国・日本をまきこみ複雑に推移するが、この新羅の台頭を軸に、百済・高句麗の滅亡に至る政治過程を述べる。	季成市（早稲田大学非常勤講師）
5	統一新羅と　海	新羅は7世紀後半の国際的な激動期をきりぬけ、三国統一を達成する。いっぽう北部の高句麗の旧地は放棄されたが、しばらく後に、ここに高句麗遺民を糾合して、　海が建てられた。約二百年間、南北に並存した新羅と　海の社会及び文化について述べる。	同上
6	高麗の成立と展開	１０世紀初めに建国し、後三国を統一した高麗は、主に唐・宋の制度を模範として諸制度をととのえ、１１世紀ころ最盛期を迎えた。しかし１２世紀には地方の農民の動きが活発となり、中央の政情も不安定となった。高麗前期の興起とそのかげりとを概観してみたい。	浜中昇（神田外語大学教授）
7	武臣政権の成立とモンゴルの支配	１２世紀後半に武臣が政権を握り、以後百年続いたが、この時期はまた民衆反乱の時代でもあって、高麗の支配体制は大きく変化した。その後、高麗はモンゴルの嵐にまきこまれ、その支配をうけるが、やがて新興層の台頭がみられた。高麗後期の激動ぶりを概観したい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	朝鮮王朝の成立と発展	１４世紀の末、朝鮮王朝が成立した。王朝は新興の士大夫層とともに、朱子学を統治理念として導入し、新しい中央集権的な国家体制を整えた。その支配と社会のシステムに力点をおきながら、王朝の成立やその後の政治史の展開過程、文化の発展について概観してみたい。	山内弘一（上智大学 専任講師）
9	朝鮮王朝後期の社会と文化	朝鮮王朝の社会体制は、１６世紀末の豊臣秀吉による侵略を契機として大きく変化し、１８世紀には新しい様相を帯びるようになった。そこで、社会や文化に現われた新傾向に力点をおきながら、欧米など外国勢力が進出してくるまでの政治史の過程を概観してみたい。	同上
10	開国と近代的改革運動	１９世紀後半における朝鮮の開国は、国内体制の不備と不平等条約によって、国内的・対外的矛盾を激化させていた。開国を進める開化派は近代的改革を断行して、危機の克服をはかったが、改革は挫折した。その挫折の要因をめぐって、多角的に検討してみたい。	朴宗根（熊本商科大学 教授）
11	植民地への転落過程	朝鮮が近代的改革の挫折で混迷していたのに対し、日本は軍国主義体制を整え、日清戦争と日露戦争によって清とロシアを排除するとともに、朝鮮人の抗日運動を抑圧して、ついに1910年、植民地にした。そこで、朝鮮の植民地化過程とその特徴を考えてみたい。	同上
12	武断統治と三・一運動	1910年に朝鮮は名実ともに日本の植民地になった。朝鮮総督のもとに憲兵警察が猛威をふるい、生殺与奪の権を握った。しかしそれは朝鮮人の抵抗の力を内にむかわせ、それが１９年の三・一運動となって爆発した。三・一運動を中心に、１０年代の朝鮮について考えたい。	宮田節子（早稲田大学 非常勤講師）
13	支配政策の転換と民族運動の展開	三・一運動の後、日本は支配の基本方針として同化政策を強化しながら、支配政策の手直しをおこなった。その一環として民族新聞の発刊が許され、朝鮮人はこれを武器として多彩な民族運動を展開する。２０年代の支配と抵抗の緊張関係を軸に、話を進めてみたい。	同上
14	朝鮮民衆と皇民化政策	１５年戦争がはじまると、朝鮮も日本の大陸兵站基地として再編された。しかし朝鮮民衆にとって、戦争は地国同士の争いにすぎない。このような醒めた民衆の存在が、日本を狂気じみた皇民化政策にかりたてた。その矛盾に焦点をあて、植民地支配の本質を考えたい。	同上
15	朝鮮歴史の流れと国際関係	前回までの講義によって、朝鮮歴史の長い流れをたどってきた。そこで最後にふりかえってみると、流れをつらぬいて歴史の発展が認められるとともに、またその時々における周辺諸民族、諸国家との密接な交流が確かめられる。朝鮮の歴史と国際関係を考えてみたい。	武田幸男

＝ヨーロッパ論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：阿部玄治（放送大学教授）〕

全体のねらい

東ヨーロッパは地形的に際立った境界をもたないため絶えず東西の強大な勢力の侵入をうけ、その都度稀々の影響をうけてきた。東ヨーロッパで最大の国家を形成したロシアを中心に、これらの諸影響を、響を歴史の理論とも関連させながら考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	東ヨーロッパの範囲	東ヨーロッパという言葉が示めす地理的範囲が定まるのは第2次世界大戦（ソ連では第2次祖国戦争という）以後でする。ヨーロッパとか西洋という概念の変遷とも絡めて、ソ連を中心とする社会主義国家圏としての東ヨーロッパを考察する。	阿部玄治（放送大学教授）
2	ナポレオン侵入と東ヨーロッパ	ナポレオンの侵入に対するロシアの戦いは第一次祖国戦争と呼ばれる。その経過とこれがロシア革命運動に与えた影響を考察する。	同上
3	第一次世界大戦と帝政ロシアの崩壊	二月革命によって帝政ロシアは崩壊した。これに最も大きく影響したと思われる諸要因 ― 経済、戦争、革命運動、行政などについて考察する。	同上
4	十月革命と社会主義国家ソ連の成立	十月革命を成功させた経済的必然性と呼ばれるものや、革命勢力の組織力について、ネップに至るまでの経過とあわせて考察する。	同上
5	第2次大戦前の東ヨーロッパ	第一次大戦後成立した東ヨーロッパの小民族の諸国家は、独ソの間にはさまれて独立を失ってゆく。そこに第2次大戦を生み出したもろもろの要因も生じてきたのである。	同上
6	東方遊牧民の東ヨーロッパ侵入	スキタイ、サルマート、フン、アヴァール、マジャールなど東方古代、中世における東方遊牧民の侵入と、そのスラブ世界に与えた諸影響を考察する。	同上
7	ロシアの建国とノルマンの侵入 (1)	ロシアに侵入したノルマンによりロシアに最初の国家ができたとするロシアの年代記「過ぎし才月の物語」について、その写本の系統など史料の外的批判を中心に考察する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロシア建国とノルマンの侵入　(2)	「過ぎし才月の物語」につづいて、ノルマン建国を支持するとみられる他の諸史料を示めし、史料の内的批判を展開する。	阿　部　玄　治
9	ロシア建国とノルマンの侵入　(3)	ノルマン説を反　するとみられる諸史料を示して、史料の内的批判を続け、侵入したノルマンの役割を考察する。	同　　上
10	キエフ国家とビザンツ	キエフ国家に対するビザンツの影響、ギリシア正教の影響などを考察する。	同　　上
11	西方に進んだノルマン人 東西の封建制	西の向ったノルマン人はイギリス、フランスからシチリアに入り、西方文化の影響下に入る。東西の封建制を比較しながら、ロシアに入ったノルマン人の場合と比較する。	同　　上
12	モンゴル侵入とドイツ騎士団侵入の影響 キエフの衰頽	1240年のモンゴルのキエフ攻略によってキエフは衰頽したとされるが、キエフ衰頽の経過をペチェネーギャポロベッツといった東方遊牧民侵入とも関連させて考察する。	同　　上
13	リトヴァ大公国の興隆とポーランドリトヴァの合併	ドイツ騎士団の東方進出に対抗して、リトヴァ大公国が興隆し、モンゴル侵入と絡みながら、白ロシア、ウクラクナを支配下におきポーランド合併して、東ヨーロッパの大国となってゆく。	同　　上
14	モスクワの興隆	モンゴルの支配下にあって功妙な外交政策によって力をたくわえたモスクワは、東北ロシアにおける大国への道を歩み始める。	同　　上
15	東方に対する勝利と西方への進出	イヴァン3世に至ってモンゴル支配から独立したモスクワ公国は、イヴァン雷帝によってカザン汗国、アトラハン汗国を滅ぼして東方に勝利し、西方バルト海への進出を計ることになる。これ以後ロシアの東西への拡大が続くこととなる。	同　　上

＝文芸史と文芸理論＝（R）

〔主任講師：轡田　収（学習院大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの古典古代から近代にいたる文学の生産とそれに対する理論ないし学的反省との関係を史的に捉えてゆく。このような視点をとると、文学の実践と理論とは、時代により、国あるいは言語圏により、独特な相互関係をもっていることが明らかになるであろう。ひとつの国の文学史のみを目にしたのでは気がつかないような、さまざまな言語文化　の共通性、そして特異性を考察してみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	古典古代　(1) — ギリシア —	1. ギリシア悲劇 2. アリストテレスの『詩学』	轡田　収 （学習院大学教授） 岡　道男 （京都大学教授）
2	古典古代　(2) — ラテン —	1. ラテン的世界の始まり 2. ホラティウスの『詩論』— 詩作技術 3. クゥインティリアーヌスの『弁論家の教育』	同　上
3	中　世　(1) — ラテン的中世 —	1. 「ラテン中世」とはなにか — 文化的統合体としてのヨーロッパ 2. 「古典」あるいは「正典」の形成 3. １２世紀のルネサンス	轡田　収 南大路　振一 （姫路独協大学教授）
4	中　世　(2) — フランス —	1. テクストの性格 — 口承と筆写 2. トルヴェールとトルバドゥール 3. 犯罪詩人フランソワ・ヴィヨン 4. ロマンの誕生	轡田　収 新倉俊一 （東京大学教授）
5	中　世　(3) — ドイツ —	1. フランス種の叙事詩 2. ドイツが誇る『ニーベルンゲンの歌』 3. 作品の中の批評	轡田　収 未　定
6	中　世　(4) — イギリス —	1. 古英詩の詩学 2. 『ベーオウルフ』 3. チョーサーの出現	轡田　収 高田康成 （東京大学助教授）
7	俗語文学の栄光 — イタリア —	1. 俗語文学の誕生 2. 清新派とダンテの『神曲』 3. ペトラルカとボッカッチョ	轡田　収 河島英昭 （東京外語大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代文化への道 (1) — スペイン —	1. 黄金の時代 2. セルバンテス、カルデロン、ローペ・デ・ベーガ 3. 批評家グラシアン	轡田 収 牛島信明 （東京外語大学教授）
9	近代文学への道 (2) — フランス —	1. 文芸理論の登場 2. デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』 3. ＜古代人の模倣＞ 4. 古典主義の確立	轡田 収 成瀬駒男 （国学院大学教授）
10	近代文学への道 (3) — イギリス —	1. 必要だった詩の擁護 2. 文芸と国民性 — エリザベス朝文学 3. シドニーの批評論	轡田 収 未定
11	近代文学への道 (4) — ドイツ —	1. 遅れてきた国民 2. 詩の改革 — オーピツの詩論 3. 国語の育成 4. 新興の文学ジャンル — 小説	轡田 収 未定
12	小説の興隆	1. 小説（ロマン）とは何であったか 2. 小説の3系統 3. 小説の理論は小説そのもの	轡田 収 辻 邦生 （学習院大学教授）
13	文学と天才	1. 文学の近代と天才概念 — 市民社会の旗手「天才」 2. 天才と自然 3. 天才と美学の変貌	轡田 収 大貫敦子 （学習院大学助教授）
14	文学と国民意識 — ドイツを例に —	1. 「国民」という概念 — 国民運動と国民意識 2. 国民意識と文学の歴史 3. ドイツ学の成立 — 精神科学と国民意識	轡田 収 三島憲一 （学習院大学教授）
15	社会と文学の自律性	1. 近代と芸術の自律性 2. 理性の自己分析と芸術 3. 市民社会の代償としての芸術 4. アヴァンギャルドと芸術の自己反省	同上

＝イギリスの言語文化Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：橋口　稔（東京大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの時代から２０世紀の現代まで、イギリスの言語文化の諸相を、社会との関連に触れながら、歴史的に辿ってみようと思う。主として文学作品をとおして考察することになるので、作品を読んでもらうことを課題にするつもりである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	英語の歴史	イギリスについて考える場合に、まず基本的に知っておく必要のあること一応解説した上で、英語の変遷の歴史を説明する。	橋口　稔（東京大学教授）
2	シェイクスピアⅠ	イギリスのルネサンスを時代的背景のもとに考察し、シェイクスピアを生みだすにいたるエリザベス朝演劇の特質を考える。	同上
3	シェイクスピアⅡ	シェイクスピアの生涯を分っている範囲で説明し、その上でシェイクスピアの作品の本質について考えてみる。	同上
4	欽定訳聖書	1611年に刊行された「欽定訳聖書」について考えながら、併せてイギリスの宗教について考察を加える。	同上
5	ミルトン	ミルトンの生涯について考えながら、ピューリタンの精神がイギリスの文化において持つ意味について考察する。	同上
6	ロビンソン・クルーソウ	イギリスの海外進出という背景を考慮にいれた上で、デフォーの『ロビンソン・クルーソウ』について考えてみる。	同上
7	近代小説に見る生活Ⅰ	主としてオースティンの『高慢と偏見』に描かれた、カントリー・ハウスの生活をとおして、ジェントリー階級に対する考察を行なう。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロマンティシズム	１８世紀末から１９世紀初頭にかけてのロマンティシズムの動向を、当時の社会的背景と関連させて考えてみる。	橋口　稔
9	近代小説に見る生活Ⅱ	ジェントリー階級の子弟が学ぶパブリック・スクールのことを、ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』によって考えてみた上で、貧しい階級の子供たちのことも、ディケンズの小説をとおして考えてみる。	同　上
10	ヴィクトリアニズム	ヴィクトリア朝の風潮を、テニソンの詩などによって考えた上で、ヴィクトリアニズムに対する批判も取り上げて考察する。	同　上
11	ブルームズベリー・グループ	ストレイチー、ウルフ、ケインズ等をメンバーとする私的な集まりであったブルームズベリー・グループをとおして、1900年代から1920年頃までのイギリスの文化の変化について考察する。	同　上
12	T．S．オリオットとD．H.ロレンス	アメリカに生れてイギリスに帰化したエリオットと、炭坑夫の子として生まれたロレンスを取り上げて、イギリス文化の問題を考えてみる。	同　上
13	オーデン世代	W．H．オーデンを中心とする1930年代に活躍した詩人、作家たちの世代を取り上げて、第一次世界大戦後から第二次大戦にかけてのイギリスの文化の動向を考える。	同　上
14	第二次世界大戦後Ⅰ	第二次世界大戦後のイギリス文化の執しい動向を、1950年代に登場してきた作家たちによって考えてみる。	同　上
15	第二次世界大戦後Ⅱ	同じ第二次世界大戦後の動向をさらに考察し、現代イギリス文化を展望する。最後に、日本とイギリスの関係を取り上げて、結びにする。	同　上

＝イギリスの言語文化Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：川西　進（東京大学教授）
　　山内久明（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの政治的・経済的統合の機運が高まる中で、イギリスの文化と社会は、広い間口と深い奥行きのある国有のアィデンティティを保ち続けている。イギリスを知ることは、それ自体としての価値があるだけでなく、世界的視野の確立のためにも不可欠である。イギリスを形作る構成要素を、多角的・総合的に考察したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	イギリスの自然と社会	自然環境としてのイギリスの地理と気候、それらがイギリス社会の発展過程とどのように関わって来たか。	川西　進（東京大学教授） 山内久明（東京大学教授） Graham Law（恵泉女学院大学助教授）
2	イギリスの田舎と都会	イギリスの田舎と都会の分岐と交流、またそれらが、人々の想像力の中でどう捉えられ表現されてきたか。	山内久明 G. E. H. Hughes（東京大学外国人教師）
3	イギリスの民族的成り立ち	ケルト、ア・グロ・サクロン、デーン、ノルマンなどの征服、服従、対立、融和の歴史としてのイギリスの民族的成り立ち、さらには「新しいイギリス人」と呼ばれる有色移民の問題。	山内久明 Graham Law
4	イギリス英語の多様性	いわゆるクウィーンズ・イングリッシュ、BBCイングリッシュのような標準英語のほかにイギリスには細かく分岐した多様な方言がある。地域差に加えて、さらには階級差もあって、イギリス英語は複雑極まりない。こうした問題を考える。	川西　進 A. P Collins（東京大学外国人教師）
5	イギリスの政治	議会政治、政党、政治思想の長い歴史を持つイギリスの政治の特質を考える。	山内久明 河合秀和（学習院大学教授）
6	イギリスの経済	産業改命、資本主義、帝国主義、社会福祉など、近代経済の典型を示し、数多くの秀れた経済学者を輩出したイギリスの経済の特質を考える。	山内久明 早坂　忠（東京大学教授）
7	イギリスの社会 ―　階級制の問題	階級制度に立脚した質の高いエリート文化と、他方にある労働者階級との分極化。それがイギリスの文化と社会の形成にどのように関わって来たか。	川西　進 Graham Law

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イギリスの教育(1) — 学　校	公立と私立のほか、それぞれの中でも多様性を持った複線方式の学校制度が、イギリスの文化と社会にどう関わって来たか。	川　西　　進 山　内　久　明 Graham Law
9	イギリスの教育(2) — 大　学	中世に起源を持つオクスフォードおよびケンブリッジの両大学をはじめとして、近代の諸大学、新興大学など、異なる背景を持つ大学と、イギリスの文化と社会との関わり合い。	山　内　久　明 G.E.H. Hughes
10	イギリスの宗教	ローマ・カトリック教会から離反して成立した英国国教。さらに英国国教から離反し対立するノン・コンフォーミズム。宗教がイギリスの文化と社会にどう関わって来たか、考察する。	川　西　　進 A.J. Pinnington （早稲田大学 専任講師）
11	イギリスの思想	ニュートンの科学思想の基盤となった経験主義哲学の伝統を持つイギリスの哲学をはじめとして、近代における社会思想なども含めて考察する。	川　西　　進 杖　下　隆　英 （東京大学教授）
12	イギリスの文学	シェイクスピア、ミルトン、ディケンズなど大作家を輩出したイギリス文学の特質は何かを考える。	川　西　　進 A.P. Collins
13	イギリスの芸術	建築、音楽、絵画、演劇など、イギリスの芸術について考える。	川　西　　進 Clair Hughes （津田塾大学助教授）
14	イギリスの国民性	国民性は、ある意味で文化と社会の真随であるとも言えるが、安易に概括化し単純化することは禁物である。イギリス人自身が、また外国人が、イギリスの国民性をどう考えて来たか。	山　内　久　明 A.P. Collins
15	イギリスと世界	ヨーロッパ、英連邦、アメリカ、日本などと、イギリスはどう関わろうとしているのかを考えることにしたい。	川　西　　進 山　内　久　明 Joseph Moran （筑波大学 外国人教師）

＝博物館学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：大塚和義（国立民族学博物館助教授）〕

全体のねらい

現在、日本に限っても、じつに多様な、しかも膨大な数の＜博物館＞が存在する。これらをいくつかのタイプにまとめて、現代の博物館像を把握することが主眼である。そのうえに立って、現代社会に機能する文化的装置として博物館とこれを理論づける博物館学とはどのようなものかを学びとる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	博物館の誕生	博物館建設の構想シナリオから完成公開にいたるプロセスをたどる。ことに近代100年を記念するモニュメントとして、都道府県レベルの大規模博物館の構想と実現をめぐってさまざまな問題点をとりあげ、現代における文化的装置としての博物館の存在を問う。	大塚和義（国立民族学博物館助教授）
2	地域と文化の展示	日本の南端に位置する沖縄を例にとり、その風土に育くまれた歴史と文化の地域的特性を展示から読みとる。	同上
3	建物の移設による展示	移設された建物群の生みだす空間を基礎にした生活と文化の追体験の場。街並み保存とのちがいも指適する。	同上
4	博物館と資料	磯漁の民俗研究調査をもとに、資料収集や展示、さらに調査結果の刊行など一連のプロセスをとおして、博物館資料のひとつのありかたを提示する。	同上
5	アイヌ民族文化	日本のなかの少数民族アイヌの伝統文化の現在とその展示。文化継承の場として有効に機能している例としてとりあげる。	同上
6	多様な民族文化	世界のさまざまな民族文化を理解するための博物館、＜もの＞をとおした異文化の理解を示す。	同上
7	美術館の世界	さまざまな美術をとおして、人間の思考や表現の多様性を示す。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	科学技術	文化を創造し発展させていく道具である科学技術の歴史と現在を紹介し、さらに人類の未来にも触れたい。	大塚和義
9	自然との共生	人間をとりまく自然の展示を紹介する。とくに自然史博物館、動物園、水族館、植物園など人間と共生関係にあるものを主眼とする。	同上
10	大学の博物館	大学における教育と研究資料として収集された資料の公開展示をみる。	同上
11	個人コレクションの展示	ある個人の眼をとおして収集されたコレクションを紹介し、ひとつの価値観でつらぬかれた資料のもつ意味を考えたい。	同上
12	企業の博物館	特定の企業が、それぞれの生みだした<商品>の歴史や技術の展示を試みており、このジャンルのものが近年急激に増加している。産業技術史博物館構想にも触れる。	同上
13	博物館のネットワーク	埼玉県に例をとり、中核の博物館と地域的特色をもった分館とか連携して、大きな文化装置として機能する姿を紹介する。	同上
14	博物館の仕事	博物館における資料の収集、整理、保存、研究調査、展示、市民サービスなどさまざまな仕事を紹介する。	同上
15	博物館史	博物館が今日に至るまでの歴史的歩みと、これからの未来像はどのようなものかを概観する。	同上

＝ 解　析　学 ＝ （R）

〔主任講師：長坂建二（放送大学助教授）〕

全体のねらい

基礎数学Ⅰの実数変数の微分・積分学に引き続いて、複素変数の微分・積分学（関数論）について述べる。コーシーの定理を中心に、定積分の計算に役立つ留数計算に習熟する。更に、微分方程式論において基本的な解の存在定理、線形微分方程式の解法、級数による解法などを述べ、応用性を高める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	複素数の導入とその性質	複素数を、実数の対として導入し、極形式による表示、加減乗除の幾何学的意味を考え、その性質に言及する。	長坂建二（放送大学助教授）
2	複素数の初等関数	一次変換の定義と性質についてまず述べる。ついで、実数変数の初等関数の知識を用いて、複素変数の初等関数　代数関数、指数関数、三角関数、対数関数、巾乗関数、逆三角関数を導入し、複素関数特有の多価性についての注意を述べる。	同　上
3	正　則　関　数	複素関数の連続性・微分可能性について述べ、微分可能な複素関数（正則関数）がコーシー・リーマンの微分方程式をみたすことを示すと共に、基本的な性質について述べる。	同　上
4	正則関数の性質	複素微分に関する諸定理と共に、複素微分の例を与える。また、正則でない関数の例を述べると共に、正則関数がみたす性質を、実数関数の場合と対比しつつ言及する。	同　上
5	複素関数の積分	実数関数の積分の概念を復習し、その自然な拡張となるように、複素関数の積分を正則弧上の複素積分として定義し、その基本的な性質を示す。	同　上
6	コーシーの定理	複素関数論において、最も重要なコーシーの定理を紹介し、証明の概略を述べる。また、単連結な領域の説明と例を与える。	同　上
7	コーシーの積分公式とその応用	複素積分の例として、円周積分を計算するついでコーシーの定理から、正則関数に対するコーシーの積分公式を導くと共に、リウヴィルの定理より代数学の基本定理を証明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	留数計算	複数関数のゼロ点や極等の特異点を定義し、実数の微分・積分学の範囲では、求めることが困難であった定積分の値を複素積分、特に留数計算によって求められることを示すと共に、複素関数のローラン展開について述べた。	長坂健二
9	有名な微分方程式	微分方程式論の誕生と微分方程式論の内容を概観し、求積法で解が求められる、変数分離形、同次形、一階線形微分方程式の解法と共に、一階の微分方程式として有名な、ベルヌーイの微分方程式、リッカチの微分方程式の解法について述べる。	同上
10	存在定理	ダランベール（ラグランジュ）、クレローの微分方程式の解法と解の性質について述べる。ついで、一階常微分方程式が、リプシッツの条件をみたす時、初期値を満足する唯一の解が存在するという存在定理を逐次近似法により証明する。	同上
11	ルジャンドルの微分方程式	応用上きわめて重要な2階線形微分方程式のうち、巾級数を利用して解を求められるジャンドルの微分方程式、およびベッセルの微分方程式の解法を概説する。	同上
12	線形微分方程式	n階線形微分方程式の解の性質を、ロンスキー行列式との関係と共に説明し、一般解の求め方を与え、定数係数の場合には特性方程式を解くことにより解が求められることを例と共に示す。	同上
13	連立線形微分方程式Ⅰ	連立線形微分方程式を行列表現し、定数係数の場合には、係数行列の指数関数を考えることにより、解が求められることを示す。また、行列の指数関数の性質にも触れる。	同上
14	連立線形微分方程式Ⅱ	前章に引き続いて、連立線形微分方程式の解法についてのべる。定数係数行列の固有値と固有ベクトルとスペクトル分解との関連を説明し、計算法を与える。	同上
15	実社会と微分方程式	自然現象や、社会現象を記述する目的で生れた数々の微分方程式やその解釈について述べ、数学と社会との関連を考える。	同上

＝ 現 代 応 用 数 学 ＝ （R）

〔主任講師：伊理正夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在の社会において実際に応用され役に立っている数理的手法を、数学的な立場から整理して講じる。しかし数学的な厳密性をあまり強調しすぎないように注意し、なるべく実際に手法が使われている場面における動機づけを重視し、かつ具体的な問題に直面したときにそれをどう扱うべきかの行動指針をも与えるよう努める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	数と量と次元 — 数の体系	1. 自然数　6. 記数法 2. 整数　7. 実数 3. 乗算　8. 複素数 4. 有理数 5. 数の大小関係	伊理正夫 （東京大学 教授）
2	数と量と次元 — 物理量の表現	1. 次元と単位 2. SI単位系	同 上
3	数と量と次元 — 物理量の演算	1. 量の間の乗除算と同次元性　2. 量の間の加減算　3. 行列・ベクトル算と次元　4. 次元解析　5. 数学的関数の引数の次元　6. 量の間の関係を示すグラフ、表、計算式の書き方	同 上
4	線形システムの数学 — 線形システム1：入出力関係 因果関係	1. 線形システムとは何か 2. 線形関係の例 3. 線形システムの例	韓 太舜 （専修大学 教授）
5	— 線形システム2：基本的諸概念（その1）	1. 行列の基本変形 2. 行列式 3. 一次独立と一次従属 4. ベクトル集合の階数	同 上
6	— 線形システム3：基本的諸概念（その2）	1. 逆行例 2. 基底と基底変換 3. 固有値	同 上
7	— 線形システム4：	1. 部分ベクトル空間 2. 線形変換の像と核 3. 入出力変数の部分的入れ替え 4. 出力変数の部分的拘束 5. システム変数の並び換え	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	離散システムの数学 — 離散システム1：関係、順序、グラフ	1. 関係とは　2. グラフ　3. グラフと関係 4. グラフによって表現されるシステム 5. 2部グラフ　6. 路と閉路 7. タイセットとカットセット 8. 木と補木	佐藤　創 （専修大学助教授）
9	システムの数学 — 離散システム2：グラフの行列表現 グラフの分解	1. グラフの行列表現 2. 部分グラフ 3. グラフの連結性 4. 2部グラフのマッチングと被覆	同　上
10	システムの数学 — 離散システム3：最短絡と最小木	1. 最短路問題とは 2. グラフと最短路問題 3. 距離が非負の最短路問題 4. 一般の最短路問題 5. 最小木 6. グリーディ算法	韓　太舜
11	システムの数学 — 離散システム4：最大流とマッチング	1. 最大流問題とは 2. 流れと容量 3. 増量可能路 4. 最大流問題の解法 5. 最大流・最小カット定理 6. マッチング問題	同　上
12	連続システムの数学 — 連続システム1：常微分方程式モデル（その2）	1. 微分とその意味 2. 微分方程式の定義と分類 3. 微分方程式の解と解法 4. 常微分方程式によって記述される現象	佐藤　創
13	— 連続システム2：常微分方程式モデル（その1）	1. 微分方程式の定常解と周期解 2. 平衡点の安定性 3. 周期解の安定性	同　上
14	— 連続システム3：偏微分方程式モデル（その1）	1. 多変数関数の偏微分 2. 偏微分方程式の定義と分類 3. 解の自由度と境界条件 4. 偏微分方程式によって記述される現象	同　上
15	— 連続システム4：偏微分方程式モデル（その2）	1. 熱伝導方程式〔例14.1〕の解法 2. 対流のある拡散方程式〔例14.2〕の解法 3. 弦の振動方程式〔例14.3〕の解法 4. 波動方程式〔例14.4〕の解法 5. 定常的温度分布を表す方程式〔例14.5〕の解法 6. 膜の振動方程式〔例14.6〕の解法	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	連続システム・5： 差分方程式モデル	1. 差分方程式の定義 2. 差分方程式によって記述される現象 3. 差分方程式の解法	佐藤　創
17	最適化の数学 — 最適化　1： 数理計画法	1. モデル 2. 最適化 3. 在庫問題 4. 価格決定問題 5. 2人零和ゲーム 6. 日程計画問題 7. 線形計画問題 8. 非線形計画問題	韓　太舜
18	— 最適化　2： 線形計画法の解法	1. 線形計画問題の図式解法 2. スラック変数と基底変換 3. 連立一次方程式と基底変換 4. シンプレックス法 5. 双対問題	同　上
19	システムの数学 — 最適化　3： 確率的モデル	1. 確率論からの準備 2. 待ち行列 3. 一斉取り替え問題 4. 最適停止問題	佐藤　創
20	情報処理の数学 — 数値情報処理1： 計算機の中での数の表現と誤差	1. 数の表現と丸め誤差 2. 情報落ちと桁落ち	星　守 （千葉大学助教授）
21	— 数値情報処理2： 補間、補外、関数近似	1. 補間法 2. 補外法 3. スプライン補間 4. 関数近似	同　上
22	— 数値情報処理3： 数値微分、数値積分	1. 数値微分 2. 数値積分	同　上
23	— 数値情報処理4： 線形計算（連立方程式）	1. ガウスの消去法とLU分解 2. 逆行列の行列式 3. 3項方程式 4. 反復改良法	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	― 数値情報処理５：線形計算（反復法、平均、分散、線形最小２乗法）	最小二乗法（正規方程式を使わない方法について触れるか？） 1. 反復法 2. 平均・分散の計算 3. 線形最小２乗法	星　　守
25	― 数値情報処理６：非線形方程式・代数方程式	1. 反復法 2. ニュートン法 3. 代数方程式	同　上
26	― 数値情報処理７：常微分方程式	1. 一段法 2. 多段法 3. 高階微分方程式連立微分方程式	同　上
27	― 数値情報処理８：偏微分方程式	1. 偏差分演算子 2. 放物型偏微分方程式の解法 3. 双曲型偏微分方程式の解法 4. 楕円形偏微分方程式の解法	佐　藤　　創
28	― 非数値情報処理１：算法の複雑度とデータ構造	1. 計算量 2. 線形計算 3. 多項式の計算 4. データ構造	星　　守
29	― 非数値情報処理２：ソーティング	1. 単純挿入法 2. 単純選択法 3. 単純交換法 4. ソート法の改良 5. 各算法の比較	同　上
30	― 非数値情報処理３：グラフと地図の表現	1. 地理グラフ　2. 地理グラフの接続関係 3. 接続関係の計算機表現　4. 接続関係の誤り検査　5. 線と面の順序つき検索　6. グラフの計量　7. グラフの幾可学的問題	韓　　太　舜

＝現代数学特論Ⅰ＝（R）

〔主任講師：吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

数学の性格を統一的にとらえるやりかたの一つに、論理の基本概念と集合論の基本概念だけをもとにし、他のすべての数学的な概念を、次々と定義していくというのがある。このやりかたを知ってもらうことを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	1. 数学 2. 論理学 3. 数学と論理学 4. 集合律と単	吉田夏彦（お茶の水女子大学教授）
2	集合	1. 集合の概念 2. 外延性 3. 包括の原理 4. 関係、写像	同上
3	論理記号	1. 論理記号 2. 定義	同上
4	集合論の公理	1. 包含記号、等号、部分集合 2. 外延性の公理と包括の公理	同上
5	集合論の展開（その1）	1. ラッセルの矛盾 2. クラス表現 3. 幾つかの概念の定義 4. 半群とモノイド	同上
6	命題論理	1. 式 2. みずまし 3. いれ1, いれ2、とり、¬いれ、¬とり 4. Vやつを使う推論の形式 5. Vとりの書き換え	同上
7	決定問題（その1）	1. 問題につっての問題　6. 不完全性定理 2. トートロジー 3. 命題論理の構成（その1） 4. 命題論理の構成（その2） 5. 定理式	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	述　語　論　理	1. 言　語　　6. 幾つかの定義と派生推論図 2. 項　　7. 公理式と証明図 3. 命題式　　8. 解釈と形式化 4. 推論図　　9. 完全推定理 5. 論証図	吉　田　夏　彦
9	集合論の展開 （その２）	1. 形式的構成 2. 代数系 3. 数学的構造 4. 順序数 5. 基　数	同　上
10	リカースィヴ函数	1. 函　数　　6. 表　現 2. 基礎的な函数 3. 函数を作っていく操作 4. 例 5. テュアリングの計算機	同　上
11	不完全性定理	1. 第一不完全性定理 2. 算術化 3. 第二不完性定理	同　上
12	決　定　問　題 （その２）	1. 形式的構成い関する決定問題 2. 否定的な解決	同　上
13	集合論の展開 （その３）	1. 三つの立場 2. 連続体問題	同　上
14	公理の整合性と独立性	1. 選択公理の整合性 2. 三つの公理の独立性 3. 正しさ	同　上
15	抽　象　と　具　体	1. 実在論と実用説 2. 数学と哲学	同　上

＝データ解析法の基本＝(TV)

〔主任講師：林　知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

データによる現象解析法をデータ解析法と名付ける。どのようにデータをとり、どのようにデータを解析して情報を取り出すかの方法を言う。これには、現象をどう取扱うかのフィロソフィーが重要で、この上に立って必要に応じ数理的・統計的方法が開発されるものである。まずデータ解析をする上での基本となる考え方・方法を述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	データとは何か	データとデータ解析　対象をいかに把握するか　標識づけについて　データによる現象解析の順序	林　知己夫（放送大学教授）
2	グラフ化の重要性	グラフ化の意義　いくつかの数値例とその効用	同　上
3	データにおける質と量		同　上
4	データの性格・Ⅰ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	はじめに　測定値が数量である場合	同　上
5	データの性格・Ⅱ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	実例　偏りの出方について　誤差を考慮して正しい結論を導き出す方法　その1－単純集計の場合　誤差を考慮して正しい結論を導き出す方法　その2－関連分析の場合　回答確率の推定　回答確率推定の実例	同　上
6	多次元空間における分散	基本概念と一般化分散　多次元のチェビシェフ不等式と集中楕円・一般化分散	同　上
7	判別の尺度・Ⅰ	判別の基本概念　相関比　多次元の場合の相関比	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	判別の尺度・Ⅱ	判断成功率　判断成功率と相関比 η^2 との関係　多次元の場合	林　　知己夫
9	距離と一般化分散と線型判別関数	距離と分散　線型判別関数	同　　上
10	多次元データ解析の重要性	集団表章と個人表章　多次元的推理の重要性　考えの筋道　推論の陥穽	同　　上
11	因子分析法と主成分分析	因子分析法　スピアマンの2因子法、ホルツィンガーのバイファクター法、サーストンの多因子法、ガットマンのラデックス法、タッカーの3相因子分析法　主成分分析法　主成分分析法と多因子分析法、多因子分析法の妥当性の検討　適用上の注意	同　　上
12	データ解析における数量化	その発生　数量化の意義と根本思想	同　　上
13	数量化の基本概念	数量化の二つの立場　データ表現の基本　数量化の諸方法の位置づけ　反応確率を求める一方法	同　　上
14	外的基準がある場合・Ⅰ ― それが数量である場合 ―	モデル　計算　制約条件のあるとき	同　　上
15	外的基準がある場合・Ⅱ ― それが数量でない場合 ―	モデル　計算　外的基準Tの個数による算式の違い　要因が量質まざりあっている場合　多次元の場合　判別の方法　外的基準が1次元でなく要因の線型和を考えない場合　7の実例	同　　上

＝データ解析法の進歩＝（TV）

〔主任講師：林　知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

データ解析の基本を習得した上で、さらに学ぶべき必要のある重要な方法について述べる。基本だけでは、実際の現象を有効に取扱って情報をとり出すことは出来ないので、より進んだ方法を説明する。これらの方法は「基本」のフィロソフィーの上に立つものである。ここでは質的データを解析するための数量化の諸方法を中心に話をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	要約 ― データ解析法の基本		林　知己夫（放送大学教授）
2	外的基準がある場合のデータ処理	始めのデータ　外的基準が数量である場合の計算例　外的基準が数量でない場合の計算例	同　上
3	外的基準がない場合の数量化・Ⅰ ―パタン分類の数量化・その1	モデル　計算　多次元の場合　相関表の関連性をみるための方法	同　上
4	― パタン分類の数量化・その2 ―	表の書き直し　人工データーもとのデーター　データ構造の直観的把握　パタン分類による計算　計算例	同　上
5	― パタン分類の数量化・その3 ― ― 応用例	日本人の考えの筋道　日本人における「日本的近代ー伝統」の思想　自然観に対する日独仏比較	同　上
6	外的基準のない場合の数量化・Ⅱ ― eij型の数量化 その1 ―	説明　モデルおよび計算　実例	同　上
7	― eij型の数量化 その2 ―	二つのものの間の関係Rijに基づく諸方法　K－L型数量化　K－L型数量化の実例	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	一対比較法の数量化・Ⅰ―ガットマンの一対比較表―	問題の発生　モデルと計算式	林　　知己夫
9	一対比較法の数量化・Ⅱ―一対比較法における矛盾と数量化―	問題に対する考え方　二つのモデルⅠとⅡ　モデルⅠの解法　数値例　最小2乗法による解　応用上の注意	同　　上
10	多次元尺度解析法・Ⅰ―　原理と応用	問題の発生　モデルの構造　問題の展開と適用方法　実例　例題	同　　上
11	多次元尺度解析法・Ⅱ―MDA－ORの理論	基本的考え方　1次元の場合のモデル　S次元空間において解くための方法－階層的次元作成法（hierarchical construction method）	同　　上
12	多次元尺度解析法・Ⅲ―MDA－ORの実例とMDA－UO―	MDA－ORの実例　MDA－UOの考え方　モデルと計算式　理論理解のための例示	同　　上
13	多次元尺度解析法・Ⅳ―続MDA－UOとMDA－ORとの比較	欠測値がある場合のモデルと計算　異なった要因間の関係を取り扱う考え方　MDA－ORとMDA－UOの比較	同　　上
14	三つの要素の間の関係に基づく数量化	個人差ある場合のMDS（INDSCAL）　Tucker（タッカー）の三相因子分析法　eijk型数量化　Harshman（ハーシュマン）のPARAFAC	同　　上
15	分類とクラスター化	はじめに　分類の基本概念　分類の諸方法　その他の考察	同　　上

＝統　計　学　特　論＝(R)

主任講師：林　知己夫（放送大学教授）
：鈴木　達三（統計数理研究所教授）

全体のねらい

この特論では、統計学の基礎において極めて肝要な意味を持つ情報量規準の理論をとりあげ、統計モデルの選択という基本的問題と関係付けて話を進める。もう一つは、実際問題において今日要請の高い統計的社会調査法の理論と応用の問題をとりあげることにした。両者は一見異るが思想的に相通ずるものがある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
第1部　情報量規準と統計モデル			
1	情報の抽出と統計モデル	統計学で利用される確率的構造は、データから必要な情報を抽出する方法を作り出すための統計モデルである場合が多い。統計モデルのこのような用い方を事例によって解説する。これに関連して尤度ならびに最尤法の概念について説明する。	赤池弘次（統計数理研究所長）
2	統計的検定とモデル選択	統計的検定については種々の誤解があり、概念上の混乱が見られる。データに基づいて特定の統計モデルを選択する問題との関係を調べることによって、統計的検定の困難点を明らかにする。特に尤度比検定について論じる。	同　上
3	エントロピーと情報量	熱力学的エントロピー概念の確率論的考察を行なったボルツマンの業績を紹介し、これが確率分布の間の隔たりの自然な尺度としての情報量概念の本質を明らかにするものであることを述べる。これと尤度概念との関係について解説する。	同　上
4	モデル選択と情報量規準ＡＩＣ	情報量を用いた統計モデルとデータとの適合度を測るために、情報量規準ＡＩＣが導入された。ＡＩＣの基礎にある考え方を説明し事例によってその実用性を示す。特に検定によるモデル選択との対比を通じてＡＩＣの特色を明らかにする。	同　上
5	ベイズモデルとその応用	未知のパラメータに対して、先験分布とよばれる確率分布を想定する統計モデルがベイズモデルとよばれる。このようなモデルに基づく推論の特長を情報量を用いて明らかにする。特に、尤度概念の適用によって実用的なデータ処理法が得られることを示す。	同　上
第2部　統計的社会調査法			
6	標本調査法の発展Ⅰ	「確率論・統計学」において標本抽出理論の基本を述べたが、ここでは通常用いられるシステマティック標本抽出、多相抽出法、比推定法　不等確率抽出法、エリア抽出法の問題について述べ、さらにパネル調査、標本ローテーションに関する諸問題を述べる。	林　知己夫（放送大学教授）
7	標本調査法の発展Ⅱ	よく利用される全国規模の層別二段抽出による標本調査を例にとり達成精度の計算および地域抽出法による実績精度の計算例をのべる。さらに面接調査、自記式調査、電話調査等各調査方式の特色および利用可能な補助資料に応じた標本調査計画を具体的に説明する。	鈴木達三（統計数理研究所教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	質問文作成と調査票の構成	調査目的に沿った質問文作成と調査票の構成について標本設計、調査誤差の問題　利用可能なデータ解析の諸技法、分析における考え方等をふまえて説明する。以下の時系列比較、国際比較方法論においてのべる調査等を具体例としてとり上げ説明する。	鈴　木　達　三
9	調査における誤差の諸問題	調査においては、その対象、分野により固有の誤差があるが、一般的には標本抽出に関する諸誤差のほか、調査不能による誤差、調査法による誤差、回答者による誤差がある。これらを数量的に評価し、調査の全体の精度を考えるための基本事項を説明する。	林　　知己夫
10	社会調査における回答誤差	調査実施過程における誤差のうち、回答者に関連するものを具体的に述べ、さらに回答結果の信頼性について考える。個人の回答の不確定性をどのように考えるかいくつかのモデルについて述べる。	鈴　木　達　三
11	データ構造と統計的推論	得られたデータの性格をまず把握することの重要性を説明する。つぎに　多次元的データの関連性を通して、データ構造をさぐり出す方法について述べ、これから統計的推論をどのように導き出すかを説明する。	林　　知己夫
12	時系列比較方法論Ⅰ	継続データは時系列変動をみることによって事象の兆候を鋭敏に示すものであるので、どのようにしてこれを探り出すかを説明する。これは、マクロ的な見方に基くことが適切なこともあるし、ミクロ的な構造を通して見ることが有効なこともある。	同　　上
13	時系列比較方法論Ⅱ	継続調査データを実際に分析することによって個別の調査データでは分らなかったことが具体的に示される。マクロ的な見方の例として、時系列分析、コウホート分析をとり上げ、ミクロ的な見方として質問項目の相互関連分析の例をとり上げて説明する。	鈴　木　達　三
14	国際比較方法論Ⅰ	ここでの国際比較としては、統計的調査による意識の国際比較の問題をとりあげる。標本抽出の方法、質問文の作成のあり方、マクロ的なデータ分析の効用と限界、考えの筋道の比較の重要性などについて説明する。	林　　知己夫
15	国際比較方法論Ⅱ	国際比較調査においては、国内調査では目立たない技術的な点も重大な問題となる。また具体的な分析手法も慎重な取扱いが必要となる。これらの点を実施例に則して具体的に説明し　分析にとり上げる質問の組合せを選択することにより分析結果の有用性が高まることを示す。	鈴　木　達　三

＝ 時 系 列 論 ＝ （R）

〔主任講師：尾崎　統（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

時間の経過と共に不規則な変動を示す現象の統計的解析法を論じる。必要な基礎的概念の説明をはじめに行い、ついで一般的に良く知られている線形時系列モデルについて解説しその利用法を論じる。非線形時系列モデルあるいは事象の発生時点の系列の特徴を解析するための点過程モデル等の新しい話題についても概説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	1.時系列とは何か　2.時系列解析と確率過程　3.予測と時系列　4.状態空間表現　5.点過程　6.むすび	赤池弘次（統計数理研究所所長）
2	確率論的な基礎	1.はじめに　2.偶然事象と確率　3.確率空間　4.確率変数、確率分布および期待値　5.主な確率分布とその乱数	尾崎良彦（統計数理研究所助教授）
3	確率過程の基礎概念	1.確率過程　2.定常性　3.自己共分散関数　4.Rxx(s)とPxx(s)の性質　5.相互共分散関数　6.推定	尾崎　統（統計数理研究所教授）
4	線形システムとフーリエ解析	1.スペクトル　2.フーリェ級数　3.フーリェ積分　4.確率過程スペクトル　5.時系列のスペクトル　6.白色雑音のパワースペクトル　7.線形システム　8.多入力システムのスペクトル解析	同　上
5	スペクトルの推定	1.ピリオドグラム解析　2.ピリオドグラムのスムージング	同　上
6	予測とARモデル	1.時系列解析と予測　2.自己回帰モデル　3.自己回帰モデルのあてはめ　4.AR過程のシミュレーション	石黒真木夫（統計数理研究所助教授）
7	ARMAモデルとスペクトル	1.AR過程のパワースペクトル　2.線形システムのインパルス応答関数とMAモデル　3.ARMAモデルとARMA過程のパワースペクトル　4.ARMAモデルのあてはめ　5.特性多項式	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	統計的モデル構成とＡＩＣ	1.パワースペクトルの推定とモデル選択 2.パラメータの推定誤差とＦＰＥ　3.情報量規準ＡＩＣ	石　黒　真木夫
9	カルマンフィルター	1.システムの状態　2.状態空間表現　3.状態空間表現の例：ARモデルとARMAモデル 4.状態推定の問題―予測、ろ波、平滑化　5.カルマンフィルター　6.平滑化　7.カルマンフィルターの応用	北　川　源四郎（統計数理研究所助教授）
10	多変量時系列モデル	1.多変量時系列　2.多変量自己回帰モデル 3.自己回帰モデルの推定　4.多変量時系列の予測　5.多変量時系列のスペクトル解析	同　　上
11	フィードバックシステムの解析	1.問題点　2.フィードバックシステムの時系列モデル　3.システムの解析、ノイズ寄与率 4.一般の場合　5.解析例	同　　上
12	統　計　的　制　御	1.統計的制御の必要性　2.制御システムの状態空間表現　3.モデルの推定　4.準備　5.最適制御入力　6.シミュレーションによる検討　7.制御系設計の実例	同　　上
13	ベイズモデル―非定常モデル―	1.非定常時系列とベイズモデル　2.季節調整法　3.地球潮汐データ解析　4.コウホート分析	石　黒　真木夫
14	非　線　形　モ　デ　ル	1.Lynxデータ　2.リミットサイクル　3.非線形時系列モデル　4.推定	尾　崎　　統
15	点　過　程　モ　デ　ル	1.線分の長さはよる表記法　2.区間に含まれる点の個数による表記法　3.条件つき危険度関数（Conditional intensity function）　4.点過程のシミュレーション法　5.点過程の　度と最　法 6.線形回帰型モデル　7.統計モデルの選択　8.線形因果モデルと地震活動の地域的関連性	尾　形　良　彦

＝統計的データ解析とソフトウエア＝　（TV）

〔主任講師：大偶　昇（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

現象解析を進める場合に、データの収集・獲得に始まり、それを分析に適した形に表現し、それらのデータから意味のある情報を引出すまでの過程で必要となる数理的な方法がデータ解析法である。とくに観測特性や個体が多数の場合の多次元データの解析は、諸現象に潜む複雑な情報を理解の易な形に要約する手段として有効である。講義ではまず、データ解析で考えるデータとは何かについて述べる。次に、データ解析の情報探索ならびにその視覚化の基本操作であるグラフィカル表現法について概観する。さらに多次元データ情報を縮約化するための主な手法（主成分分析、パターン分類法など）を解説する。続いて、データを分類し、そこに内在する類似性や差異性を洞察するための方法である分類法（自動分類法、クラスター法）の主な方法について解説する。また、これらの多次元データ解析法を活用するためには、コンピュータと統計ソフトウェアの支援が不可欠である。そこで、統計ソフトウェアの歴史、考え方、その役割を述べるとともに、実際にそれらがどのようにデータ解析の諸場面で役立つかを、統計ソフトウェアの紹介や分析事例を交えて解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	多次元データ解析	多次元データとは データの測定と収集 データ解析の処理の流れ データ解析におけるコンピュータの役割 データ解析と統計ソフトウェア	大偶　昇 （統計数理研究所 教授）
2	データの性質	データの種類 データ表の形式 データの規模 データ表を表わす記号	同　上
3	データの視覚化 ―グラフの活用とその効用	グラフを用いる目的 グラフと統計手法の関連 グラフの表わす情報とグラフの利用法 探索的なグラフィカル手法 グラフィカル表現の効用とグラフ作成上の注意	同　上
4	データの縮約化	データの縮約化とは何か 位置を表わす主な縮約値 ばらつきをみる縮約値 平均値や平方和を用いる理由 その他の縮約値 ボックスプロット図（箱ひげ図）の作り方	同　上
5	多変量データの縮約化	2変量データの要約 積和と共分散 簡単な実験と例 多変量データの縮約	同　上
6	量的データの合成指標化 ―主成分分析法―	合成指標化の目的とその意味 合成指標の作り方 4変量データの合成指標化 主成分の主な性質 主成分分析の適用上の留意点 補足 ― 主成分の求め方 ―	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
7	質的データの合成指標化 — 関連分析法 —	問題の背景 分析対象となるデータ表とその意味 プロフィルと重心座標 成績データの分析例	大　偶　　昇
8	関連分析法の数理	2元クロス表の関連分析法 関連分析法の主な性質 追加処理	同　　上
9	多重クロス表の関連分析法	A表の関連分析 バート表の関連分析 2項目の場合の関連分析	同　　上
10	分類法の基礎	分類とデータ解析 分類が関連する研究分野 データ解析における分類手法の概要	同　　上
11	類似と差異	類似性と非類似性 量的データの類似度と非類似度 質的データの類似度と非類似度 多値型データの類似度・非類似度 類似度や非類似度にみられる性質	同　　上
12	非階層的分類法	分割の総数 分割最適化型の手法 — k・means 法 — 数値例による検討	同　　上
13	階層的分類法	凝集型手法とは 凝集型分類法の基本的な考え方 クラスター間の距離 組み合わせ的手法	同　　上

＝ 量 子 論 ＝ （TV）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）
　　阿部龍蔵（東京大学教授）〕

全体のねらい

原子や分子の行動は量子論にしたがっている。従って、化学や物理学の基礎的理解には量子論が必要である。放送大学の化学や物理学の講義の中には量子論を使わなくてもなんとか理解できるものもあるが、量子論を理解していなくてはわからないものもある。量子論をまともに学ぶためには数学的な基礎が必要であるが、この講義ではそれほど予備知識がなくてもなんとか重要なことは理解できるようになるようにと考えてある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	量子論はなぜ必要か	1. 古典物理学の破綻 2. ラザフォードの原子模型の欠点 3. 水素原子のスペクトル 4. 光電効果	阿部龍蔵 （東京大学教授）
2	波と粒子の二重性	1. アインシュタインの関係 2. ド・ブロイ波 3. ボーアの水素原子模型	同　上
3	シュレーディンガー方程式	1. 古典的な波動方程式 2. シュレーディンガー方程式	同　上
4	シュレーディンガー方程式の簡単な例	1. 波動関数 2. シュレーディンガー方程式の例	同　上
5	一次元調和振動子	1. 一次元調和振動子 2. エネルギー固有値 3. エルミート多項式	同　上
6	量子力学と古典力学	1. エーレンフェストの定理 2. 量子力学の一般原理 3. 不確定性原理	同　上
7	水　素　原　子	1. シュレーディンガー方程式 2. 球面調和関数 3. 水素原子のエネルギー	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	スピンと量子統計	1. 角運動量 2. スピン 3. 量子統計 4. スピンと磁気モーメント	阿部龍蔵
9	原子の構造	1. 水素原子の原子軌道 2. 原子の大きさは何で決まるか 3. ヘリウムの変分法 4. リチウム原子とイオン化電圧 5. 構成原理と元素の周期律 6. 希ガスの安定性とオクテット	細矢治夫 （お茶の水女子大学教授）
10	二原子分子	1. 2個の水素原子についての思考実験 2. 調和の振動子とモース曲線 3. ハトイラーとロンドンの説明 4. 精密な理論計算 5. 共有結合の2通りの理解の仕方（VBとMO）	同上
11	多原子分子の構造と性質（Ⅰ） 飽和化合物	1. 不対電子同士の結合 2. 結合の間の角度 3. 軌道の混成 4. 原子価 5. 飽和炭化水素	同上
12	多原子分子の構造と性質（Ⅱ） 不飽和化合物	1. エチレンとアセチレン 2. δ結合とπ結合 3. ブタジエンからポリアセチレンまで 4. ヒュッケル分子軌道法 5. ポリエンの電子スペクトル 6. ベンゼンと芳香族炭化水素 7. その他の不飽和化合物	同上
13	分子の振動と回転	1. 分光学の基礎 2. 分子の振動 3. 分子の回転 4. 分子内回転 5. まとめ	下沢隆 （埼玉大学教授）
14	分子の電気的・気的性質	1. 電気的性質 2. 磁気的性質 3. 常磁性共鳴吸収（電子スピン共鳴：ESR） 4. 核磁気共鳴（NMR）	同上
15	化学反応の電子論	1. 水素分子の生成 2. 活性化エネルギー 3. 重水素の交換反応 4. 芳香族化合物の置換反応 5. ウッドワード・ホフマン則 6. HOMO-LUMO相互作用理論 7. 夢のある分子の設計	同上

＝現代物理学Ⅰ＝（R）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

物理学20.世紀のはじめの30.年間に大きく変った。それまでの、ニュートンの力学とマクスウェルの電磁気学を二本の大黒柱とした古典物理学が、相対性理論と量子力学に席をゆずったのである。この講義では、その必然性をしらべ、変革の深さを測って、現在の物理学の動きを見定めたい。探究は依然つづいているのだから。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	力学的世界観	古典物理学の二本の大黒柱の一方をなしたニュートン力学の構造を復習する。それは、初期条件と力の法則、運動方程式の三つ組を骨として未来を決定論的に予言する。一時は、これによって宇宙の万象を運動に還元して捉えきることができるとさえ思われたのだが？	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電磁場と光	第1回に引きつづき、古典物理学のもう一方の大黒柱であったマクスウェルの電磁気学の構造を復習する。ここでは、力学の主役であった粒子にかわって「場」が登場するが、初期条件と運動方程式から未来を決定するという論理は変らない。光も場の伝播である。	同上
3	相対性理論（1）	光が伝わるのは、電場の変動が磁場を生み、その磁場の変動が電場を生み……という連鎖による、でも、光と並んで光の速さで走ったら、光は変動のない静止した電磁場に見えるだろう。いや、それはあり得ない。アインシュタインはこの疑問を追及して相対性理論に到達した。	同上
4	相対性理論（2）	光の本性の追及から時間と空間の概念の根本的な再検討が必要になり、相対性理論が生みだされた。それは同時にマクスウェルの電磁場の法則に潜んでいた美しい対称性をあらわにすることであり、それを力学にも及ぼすとニュートンの法則を変革することにもなった。	同上
5	原子論の発展	どんな物質も極微の粒子 ー原子ー の集まりだという考えは遠くギリシャの昔からあった。なぜ、人はその考えに誘われたのか？どのようにして、人は、その目にも見えず触ってもわからない微粒子の存在を、長い歴史の間に確信するようになったのか？	同上
6	電子とその役割	物質の普遍的な構成要素として最初に発見された微粒子は電子である。もちろん、極微の粒子が直接に見えたわけではない、粒子と仮定し力学と電磁気学で予想を立てて実験した結果が決して予想と違わなかったのだ。その延長線上で物質の熱的・光学的性質も解明できそうで？	同上
7	放射能の発見と原子核	放射能の新しさは3つある：不変と信じられてきた元素の壊変を伴う、真空放電や化学反応に比べエネルギーが桁違いに高い、偶然事象だ。放射能のもたらす高エネルギー粒子と物質の相互作用の研究が原子核の発見に結実したが、これは原子が安定に存在し得ないことを意味した。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	量子の発見	物質が光を放出したり吸収したりする現象においても古典物理学は窮地に追いこまれていた。プランクは熱した物体のだす光の色の問題で光はエネルギーの定まった塊であると考えざるを得なくなり、マクスウェル理論との折り合いに悩んだ。光は粒子なのだろうか？	江沢　洋
9	量子力学の世界	原子や分子の内部に入るとニュートンの力学は破綻する。その世界の基本法則として1926年に量子力学が発見された。ここでは電子はとびとびのエネルギーしかとれないが、しかし状態を連続的に変える。この不連続と連続の矛盾を止揚するのが重ね合わせの原理である。	同　上
10	量子力学の構造	重ね合わせの原理の一つの数学的表現が物質の波動性である。波はさまざまの形をとり得るが、原子のとびとびのエネルギーは定常波に対応する。そして、初期条件に応じたそれらの重ね合わせが実験し、重ね合わせの位相が時間とともに連続的・因果的に変化してゆく。	同　上
11	量子力学的観測とアインシュタインのパラダイス	電子は、状態変化こそ波動で表現されるが、個々に観測すれば粒子として立ち現われる。その集積は、しかし、状態変化の波動性を反映して干渉や回折の模様を示す。こうした波動と粒子の二重性を媒介するのが確率解釈である。その含意を追うと奇妙なパラドクスに出合う。	同　上
12	角運動量の量子力学	原子構造の探究への準備、角運動量とは、太陽系の惑星の運動で基本的だったケプラーの法則に現われる面積速度に相当する。原子ひ小さな太陽系なので、そこで惑星に当る電子の運動を調べてゆく上で角運動量が基本的に重要である。量子力学でも、このことに変りはない。	同　上
13	原子の構造	量子力学によって、原子の構造は歯車仕掛けの機械などと同じように精密に計算できるようになり、周期律をはじめとして諸性質の謎が解けた。原子たちが互いに結合して分子を作る仕組みもわかり、化学は物理学の翼下に入った。いまや分子の設計も可能である。	同　上
14	エネルギー準位と物質の性質	電子と原子核が多数あつまった系の物理的な振舞いも量子力学で計算し予言することができる。そのとき、系のエネルギー準位は一般に極めて密に並ぶが、ところどころに隙間ができることがある。こうした準位の並び方と、その上への電子の分布のしかたで物質の特性がきまる。	同　上
15	素粒子	原子・分子・固体の構造を解明した量子力学も原子核の内部には適用できないのではないかと疑われた時期がある。ての　も中性子の発見と中性微子の仮説で解けた、湯川秀樹は原子核をひとかたまりに結び合わせている力の特質から新粒子の存在を予言し素粒子論の扉を開いた。	同　上

＝現代物理学Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

現代物理学Ⅰで得た量子力学的世界に対する理解を、実験などヴィジュアルな題材を通して一層ふかめる。最先端の研究をしている研究室を訪問して“現代”に触れるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶	物質は粒子の集まりだという認識が現代物理学の出発点である。それらの粒子は、原子なら直径にして百億分の一メートル、原子核ならその十万分の一、そんなに小さい粒子たちのことがどうしてわかったのか？　雪の結晶からはじめて考えを進めてみよう。	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電子と原子核の発見	電子も原子核も、机の上にのる小さな手づくりの実験装置で発見された。しかも古典物理学をあやつって！　どんな実験とどんな論理がつかわれたのか振りかえって、これからの勉強の足場を固めよう。	同　上
3	光の本性 (1)	光は波であるといわれ、また粒子であるといわれて、歴史上に争いが続いてきた。それを現代の眼で見たらどうなるか？　実験をしながら考える。まず、光の波動性から、それは何を意味するか？　証拠は？	同　上
4	光の本性 (2)	光には、もう一つの顔がある。粒子性である。それは何を意味するのか？　どうすれば、その顔は見られるのか？　粒子の顔をもちながら波動としても立ち現われて干渉や回折を示すということが、どうして可能なのか？　現代の技術でその実態をあばく。	同　上
5	電子に見る粒子性と波動性	電子も、しかるべく舞台を設定すれば波のような振舞いを見せてくれる。では、そのとき粒子らしさはなくなってしまうのか？　最近、技波がつくれるようになったので、それを利用して美事な実験をお目にかける。	同　上
6	量子力学の発見	電子の、そして極微の世界の他の粒子についても、粒子性と波動性をひとつかみに統一して捉えるのが量子力学である。これが、原子や分子の内部ではニュートンの力学にとって代るのだ。しかし、まったく縁が切れるわけではなく、ニュートン力学も新力学発見への道案内になる。	同　上
7	量子力学的な運動とは	原子のなかでの電子の様子を表わすと称して雲のような絵がよく描いてあるが、少しも電子が運動しているように見えない。量子力学の世界にも運動があらわになる現象もある。この世界のいろいろの運動をコンピューター・アニメーションでお目にかけよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	定常状態とエネルギーの不連続性	電子力学的粒子の運動を波動で表わすと、限られた空間に閉じこめられた運動は特定のとびとびのエネルギー値しかとれないことが導かれる。この命題こそ、原子が光を特定の波長でのみ出す理由であり、原子の安定性と個性の根元である。この重要な命題はどう導かれるのか？	江沢　洋
9	原子と分子	原子の構造と化学結合の仕組みを明らかにしたことは量子力学の大きな成果の一つである。原子や分子のなかをX線や電子線で見るというのは、どうすることか、そこに見える姿は何をわれわれに語るか。	同　上
10	温度と物性	温度というものは、原子の世界のざわめきの指標である。温度を下げてゆきながら原子たちのざわめきの変化を聴いてみよう。そのとき電気抵抗などの物性はどう変ってゆくか？　極低温に達すると電気抵抗がストンと0になる。これは超伝導状態への相転移である。	同　上
11	固定の中の電子	現代のエレクトロニクスは半導体の量子力学的な特質をフルに利用している。特に、強い電場をかけてその表面に電子たちを押しつけた系（MOS素子）は、電子の密度を人が意のままに制御することのできる理想的な「実験室」である。その基礎物理から応用まで。	同　上
12	極低温	極低温で液体ヘリウムが相転移をおこし粘性を失なう現象。そのとき、流体の常識に反するさまざまの振舞が見られる。これらも、しかし、ちゃんと量子力学の法則にしたがい、起るべくして起っていることなのである。そうわかるまでには何十年もかかったが。	同　上
13	相転移	固定や液体は、温度をゆっくり変えてゆくと体積や電気伝導度などの性質がなだらかに変化する。しかし、水が氷になるときのように、特別の温度では性質がガラッと変わる。これが相転移である。そのとき原子の世界では何が起っているのか？　アニメーションを混えて。	同　上
14	高エネルギー物理(1)	素粒子の内部構造や相互作用を研究するには、それらを高いエネルギーで衝突させて反応を見る。エネルギーが高いほど微細な世界が見えるというのが物資の波動性の帰結である。そのため年々、加速器が巨大化する。最近完成した電子と陽電子の衝突型大加速器を見る。	同　上
15	高エネルギー物理(2)	物質の究極的構成要素の研究はどこまで進んだか。これから何を問題提起し、どう自然に迫ってゆくか、新しい加速器による実験の出発のときに、歴史的展望に立つ研究の抱負をきく。	同　上

＝物質の科学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：田丸謙二（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

高校で習った気体についてのテーマを原子・分子という微視的立場から見直す。

理想気体の状態方程式やそのはずれとしておこる諸現象に対して、微視的立場からの説明を与える。さらに、気体分子の構造や結合および反応について、簡単な量子力学的説明を与える。現在の研究を紹介し、この分野の研究の最先端を示す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	空気 (1) 気体の巨視的性質と粒子モデル	空気が気体として認識されてから、どのようにその実体が明らかにされて来たかの歴史を述べる。気体が原子や分子から形成されているという概念に到達した実験的・理論的根拠を明確にする。理想気体、実在気体と臨界現象についての関連にもふれる。	近藤　保（東京大学教授）
2	空気 (2) 気体における分子運動	気体の巨視的な性質を示す状態方程式が、微視的な性質から気体分子運動論を用いてどのように説明されるかについて述べる。気体粒子間に相互作用が存在するとき、理想気体の状態方程式がどのようになるかを示し、臨界現象などを説明する。	同上
3	空気 (3) 気体分子のスペクトルと構造	空気の成分分子による発光、吸収スペクトル回折現象などについて述べる。電波天文台によって観測された星間分子のスペクトルなどを示す。このようなスペクトルを解析することによって、どのように分子の構造や内部状態が解明されるかを示す。このような解析の基礎となる量子力学的な理論を平易に解説する。	同上
4	空気 (4) 分子衝突と化学反応	空気中で一番重要な燃焼反応について、原子・分子の立場から説明する。	土屋荘次（東京大学教授）
5	空気 (5) 化学反応の機構	環境化学の立場から、光化学スモッグの発生に関連した光化学反応の初期過程を考察する。このような反応過程理解の基礎となる簡単な反応理論（あるいはモデル）について、平易に解説する。	同上
6	空気 (6) 気体分子のレーザー光化学	現在、これら分子の構造や反応の研究はどこまで進んでいるか、最新の話題は何かについて概観する。レーザー、分子線、質量分析器などを用いた最新の研究例を紹介し、どのような方向を研究しようとしているか、そのねらいなどについて述べる。	近藤　保
7	水 (1) 水の特異な性質	地球と宇宙における水の存在様式と量について述べ、次に近代科学の発展とともに水に関する知識とその利用がどのように進んできたかを概説する。水が特殊な物性をもつ化合物であることを類縁化合物との対比から明らかにする。	田隅三生（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	水 (2) 水分子の構造と水の3相	水蒸気、水、氷の状態図とクラウジウスークラペイロンの式、蒸気圧降下、沸点上昇、共沸、凝固点降下、寒剤、溶解度、電離、PH、移動度、当量電導度などについて概説する。	田隅三生
9	水 (3) 氷の構造	自由分子としての水分子の分子構造とその決定法、氷の結晶構造とその決定法、水分子の電子構造と双極子モーメント、水素結合の本質について述べる。重水についてもふれる。	菅宏 （大阪大学教授）
10	水 (4) 液体としての水の構造	液体としての水の構造とその研究法について述べ、物性との関連性を考察する。粘性、表面張力、単分子膜、ミセル形成、界面活性剤の作用などを概説する。	中西浩一郎 （京都大学教授）
11	水 (5) 生体物質との関わり合い	生体物質、とくにタンパク質と生体膜の構造と機能が水の存在とどのようにかゝわりあっているかを考察する。	野田春彦 （放送大学教授）
12	食塩 (1) 結晶構造をきめる	結晶の構造、また結晶をつくっている分子の構造はどのようにしてわかるかを食塩を例として説明する。波の回折の原理を学んだあと結晶によるX線の回折の実例を見る。	小谷正博 （学習院大学教授）
13	食塩 (2) 弾性と振動	結晶の中で原子や分子は静止しているわけではない。熱は物質の中で振動としてたくわえられているし、また音は物質のなかを波として伝わってゆく。このような振動やまた物体に力を加えたときに起る弾性変形が原子間の力とどのように関係しているかを述べる。	同上
14	食塩 (3) 光学的性質	食塩は目に見える光に対しては透明であるがある波長の赤外線に対しては強い吸収を示す。また食塩の屈折率は波長によって異る。光が物質を通りぬけるときに起るこれらの現象がどのように物質の構造と結びつけて理解されるかを解説する。	同上
15	食塩 (4) ソーダと塩素	食塩は化学工業における主要な原料の一つでソーダ灰、か性ソーダ、塩素などの無機薬品がつくられ、ガラス製品、繊維製品、医薬品、などの製造、上水道の滅菌など広く利用されている。ソーダと塩素の製法と利用について説明する。	笛木和雄 （東京大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	鉄　(1) 百獣の王、ライオン ー百金の王、鉄ー	i）鉄は諸々の金属の中でも最も重要な位置を占める。ii）鉄の特徴を合金化、相変態、焼入性、加工性、集合組織、等で述べる。iii）鉄と鋼の定義。iv）鉄の結晶構造。v）現代製鉄法の概要、鉄鉱石の還元による銑鉄の製造と酸素精錬による鋼の製造法を簡単に述べる。	田中智夫 （川崎製鉄㈱エンジニアリング事業部研究開発センター所長）
17	鉄　(2) 転　移　論	i）鉄の塑性変形挙動と降伏強度、引張強度の定義。ii）クリープ強度、疲労強度の概念。iii）理論強度と実際の材料強度との　離。iv）転位論の概要。転位モデルによるすべり変形。Zrancк-Read 源、部分転位と交叉すべり、多結晶体の構造と降伏のメカニズム、等を述べる。	同　上
18	鉄　(3) 鉄の百面相	i）鉄合金の成り立ち。ii）状態図の熱力学と状態図の読み方。iii）鉄ー炭素２元状態図とその重要性。iv）相変態の概要。拡散変態と非拡散変態、特にマルテンサイト変態の特徴を述べる。v）連続冷却変態図。vi）各種熱処理法。vii）ミクロ組織と機械的性質の関係。	同　上
19	鉄　(4) 高機能性鉄材料	合金設計と製造プロセス制御により機能性の高い鋼を作ることが出来る。i）低温靱性の優れた鋼ー脆性破壊のメカニズムと低温靱性。ii）形状記憶合金ー熱弾性マルテンサイトの利用。iii）集合組織制御ー（111）集合組織による深絞り用鋼とGoss 方向による方向性珪素鋼。	同　上
20	炭　素　(1) ダイヤモンドとグラファイト ー混成軌道ー	有機化合物の中心元素である炭素原子の結合様式をSP^3、SP^2、SP 純成軌道について説明する。これらの結合をもつ典型的な化合物、ダイヤモンド、グラファイトの性質、興味ある点をとりあげる。	池本　勲 （東京都立大学教授）
21	炭　素　(2) ー分子内部回転と回転異性体ー	炭素ー炭素の単結合および２重結合のまわりの内部回転について説明し、内部回転ポテンシャルの形、ポテンシャル障壁の高さと回転異性体、幾何異性体の存在との関係を明らかにする。鎖状分子、合成および天然高分子、生体高分子の分子構造との関連にもふれる。	田隅三生
22	炭　素　(3) 有機化合物の多様性	有機化合物の主な骨格は炭素と水素からできているが、これに、酸素、窒素、硫黄、リンなどのいわゆるヘテロ原子が加わることにより、真に有機化学の特徴である有機化合物の多種多様性が実現できることを、原子団、官能基などの概念によって系統的に説明する。	武井　尚 （東京工業大学助教授）
23	炭　素　(4) 光学活性体の有機化学	右手型と左手型という、立体的・空間的な分子構造の差異によって生ずる光学異性体の世界を、糖、アミノ酸、抗性物質など身近な例から題材をとりあげて解説する。あわせて、分子模型の使い方、絶対配置の表示法、光学活性体の作り方などについても解説する。	野平博之 （埼玉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	炭素 (5) 生態を構成する有機化合物 ー生命現象を荷なう核酸について	炭水化物、タンパク質、アミノ酸、脂質、核酸など、生物体を構成する主要物質の構造とその役割を明らかにし、これらの物質に対する有機化学的な研究方法と、その成果および生命化学における今後の役割について展望する。	畑辻明 （東京工業大学教授）
25	炭素 (6) 分子を彫る ー有機化合物の合成と反応	有機化学は、生命の合成能力に対する畏敬・あこがれ・挑戦というような気持が入り混って発展してきたが、近年において、独自の合成手法の発展も著しい。多種多様な有機化合物をいかに自在に合成できるようになったか、その最新の手法と考え方を解説する。	向山光昭 （東京大学教授）
26	高分子 (1) 高分子の特徴	繊維、プラスチック、ゴム等日常生活に欠かせない材料として数多くの合成高分子物質が使われている。一方、核酸、タンパク質、多糖は生物にとって必須の高分子物質である。これらの用途、機能にとって高分子であることはどんな意義があるのかを考える。	井上祥平 （東京大学教授）
27	高分子 (2) 高分子の構造と性質	高分子物質の性質の特徴の一つは、熱的性質、力学的性質、電気的性質などの物理的性質にあり、これが用途の基礎ともなっている。ここではこれらの性質が高分子化合物の分子構造、および分子の集合体の構造とどのように関連しているかを考える。	同上
28	高分子 (3) 高分子をつくる	高分子化合物はどのようにして合成するか、その分子の大きさはどのような要因で決まるか、分子の構造を制御するにはどんな方法があるかを考える。また実際の高分子材料をつくるに当たって、フィルムや糸はどんな方法で成型・加工するかについても触れる。	同上
29	高分子 (4) 高分子の反応	高分子の化学反応によってまったく新しい高分子をつくり出したり、部分的反応によって性質を変化させたりすることができる。ここでは高分子の化学反応の特徴とその応用について考える。物理的性質の特徴と化学反応性を組合せた機能性高分子の例にも触れる。	井上祥平
30	表面の科学	1. 表面の特徴 2. 表面の調べ方 3. 化学吸着と触媒作用 4. 表面の特性 5. 表面原子の動き 6. 表面の修飾 7. 触媒反応の速度 8. 触媒の通電性	田丸謙二

＝物質の科学Ⅱ＝（TV）
—ミクロからみた物質—

〔主任講師：上村　洸（東京大学教授）〕

全体のねらい

物質の示す様々な巨視的性質をミクロの法則で如何に解明できるかを、量子論の初歩的な段階から出発して、分り易く講義する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質の構成要素 ～ 原子	1. 水素原子、問題の定式化 2. 角運動量と球関数 3. 水素原子のエネルギー	上村　洸 （東京大学教授）
2	原子から分子へ	1. 多原子原子、1電子近似の取り扱い 2. 原子構造と元素の周期率 3. 分子の形成－水素分子	同　上
3	原子から結晶へ	1. 結晶構造 2. 結晶中の電子の状態 3. ブロッホ関数	中尾憲司 （筑波大学助教授）
4	結晶の中の電子	1. バンド構造 2. バンド構造の別の見方 3. バンド構造と物質の分類	同　上
5	化学結合と結晶の分類	1. 金属の自由電子モデル 2. 化学結合と凝集エネルギー 3. イオン結合 4. 共有結合 5. 金属結合 6. ファンデルワールス結合	上村　洸 中尾憲司
6	半導体	1. 半導体の特徴 2. 正孔 3. 電子と正孔の分布 4. 不純物半導体	中尾憲司
7	固体の伝導現象	1. 電気伝導 2. ホール効果と磁気抵抗効果 3. 強磁場中の電気伝導とエネルギー状態 4. 量子ホール効果	川路紳治 （学習院大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	光に対する性質	1. 光の性質 2. ローレンツ振動子模型 3. 物質の光学的性質と電子状態	国府田 隆夫 （東京大学教授）
9	半導体素子の基礎	1. 少数キャリアの注入　2. pn接合 3. pnp接合型トランジスター　4. トンネル・・ダイオード　5. 金属・半導体接合ダイオード（ショットキー・ダイオード）　6. フォト・セル、太陽電池とフォト・ダイオード　7. 発光ダイオードと半導体レーサー　8. 電界効果トランジスター	川路紳治
10	磁性の起源	1. 電子の磁気モーメント 2. マクロな磁気モーメント 3. 自由原子・自由イオンの磁気モーメント 4. 閉殻の電子による反磁性 5. 原子の固有磁気モーメントと常磁性 6. 伝導電子による磁性	近桂一郎 （早稲田大学教授）
11	磁性体	1. 強磁性体の磁化 2. フェライトの自発磁化 3. 中性子回折と磁気構造 4. 交換相互作用 5. 自発磁化の温度変化	同上
12	磁性体と光	1. 磁性イオンの光吸収 2. 結晶場遷移 3. 結晶場と軌道角運動量の消失 4. 強磁性体の光吸収と偏光 5. 磁気光効果 6. 磁気光効果の応用	同上
13	超伝導	1. はじめに 2. 超伝導現象 3. 位相と干渉 4. 粒子数と位相 5. 電子対 6. なぜ対か	小林俊一 （東京大学教授）
14	固体の表面構造	1. はじめに 2. 表面構造を探る 3. 半導体清浄表面の構造	塚田捷 （東京大学助教授）
15	表面の電子状態	1. 表面のバンド構造 2. 電子の密度分布と仕事関数 3. 電子分光法 4. 吸着現象	同上

＝ 物 質 の 科 学 Ⅲ ＝（TV）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

我々の見る物質は100種に足りない元素の組み合わせであるが、ほとんど無限ともいえる種類のものが発見され、それについての研究が進んでいる。古くから知られている物質の性質について新しい理解ができることもある。これらをできるだけ広範囲に取り入れて、それを基礎的な理解につなげようというのがこの科目の狙いである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶の成長	1. はじめに　2. 環境相　3. 駆動力 4. 核形成　5. ものの運ばれ方　6. ラフな界面とスムーズな界面　7. 渦巻成長 8. 結晶の形を支配するもの	砂川一郎 （東京大学教授）
2	半導体超格子	1. はじめに 2. ヘテロ構造と選択ドーピング 3. 量子井戸と半導体レーサー 4. 共鳴トンネル効果とその応用 5. まとめ	覧見博義 （日本電気KK光基礎研究部長）
3	金属多層膜	1. はじめに 2. 非平衡物質とは 3. 多層膜（人工格子）の生成 4. Fe－Mg 人工格子 5. 人工格子の利用	新庄輝也 （京都大学教授）
4	アモルファス半導体	1. アモルファス半導体とは 2. アモルファス半導体の種類と製法 3. アモルファス半導体の物理的性質 4. アモルファス半導体の応用	丸山瑛一 （日立基礎研究所長）
5	高分子鎖の形態と物性	1. 弧立した一個のポリマー分子の形態 2. ポリマー鎖の形態の実験的研究 3. 高分子鎖の屈曲性 4. 高分子鎖の形態と高分子物性	永沢満 （豊田工業大学教授）
6	繊維生体高分子	1. タンパク質繊維 ●ペプチド鎖の寸法　●ペプチド鎖の二次構造　●生体の繊維 2. 糖を含む生体の長鎖状分子 ●核酸　●キチンとセルロースとデンプン	野田春彦 （放送大学教授）
7	粒状生体高分子	1. 粒状タンパク質 ●粒状タンパク質の折り畳み　●活性部位 ●タンパク質の結晶 2. 多糖の粒状分子 3. 膜 ●ミセルと単位膜　●膜とタンパク質	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	機能性高分子	1. 高分子の機能 2. 機能性高分子とは 3. イオン交換樹脂 4. 感光性樹脂 5. 電気的機能 6. 医用高分子	井上祥平 （東京大学教授）
9	コロイド (1)	1. コロイドの定義と特性 2. コロイドの分類 3. ミセルコロイド概論 4. 界面活性剤のはたらき(I)－溶液物性 5. 界面活性剤のはたらき(II)－界面物性	北原文雄 （東京理科大学常務理事）
10	コロイド (2)	1. 粒子コロイドの分類 2. 粒子コロイドの調整 3. 粒子コロイドの特性 4. 粒子コロイドに対する無機電解質の効果 －DLVOの理論 5. 粒子コロイドに対する界面活性剤の効果 6. 粒子コロイドに対する高分子の効果	同上
11	膜	1. 界面膜と独立膜 2. 生体膜と膜透過 3. 膜の機能 4. ろ過による物質分離 5. 膜透過と逆透過 6. 電解質の膜透過と膜電位	中垣正幸 （京都大学教授）
12	ゼオライト	1. 骨格構造 2. 分子篩作用とガス吸着 3. イオン交換性 4. 触媒作用	高石哲男 （豊橋技術科学大学教授） 堤和男 （豊橋技術科学大学教授）
13	セラミックス	1. セラミックスの進歩 2. セラミックスの種類 3. セラミックスの強さともろさ 4. セラミックスをつくる 5. セラミックスの微細構造と高温強さ 6. セラミックスはどこまで強くできるか	沢岡昭 （東京工業大学教授）
14	超微粒子	1. 粒子の大きさ　2. 超微粒子と超微粉 3. 超微粒子の製法　4. 不活性ガス中での蒸発 5. バルクとの違い　6. 久保効果 7. クラスターの実験　8. 技術への応用	上田良二 （名城大学容員教授）
15	情報生体高分子	1. 蛋白質と核酸 2. 遺伝子DNAの構造と遺伝情報 3. 遺伝情報の発現 4. 遺伝子操作 5. 蛋白質工学	三浦謹一郎 （東京大学教授）

＝生命のしくみⅠ＝（TV）

― 生化学のしくみ ―

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

生物はさまざまな物質からできている。これらの物質の働きによって、生物の活動が支えられている。この点をいくつかの例によって示し、これらの生体内物質の特徴的な性質と機能を説明し、生化学の基礎的な内容を紹介する。特別な予備知識は必要ではないが、初歩的な化学の用語を理解できることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生体に含まれる物質	タンパク質、脂質、糖など、生物をつくり上げている物質について紹介し、これら有機化合物の特徴と構造について説明し、とくにタンパク質の構成成分であるアミノ酸をとりあげる。	木原弘二（慶応義塾大学教授）
2	生体の構成成分	生体物質のうち高分子物質であるタンパク質、核酸、多糖などでは、その3次元的な形が機能と密接に関連している。その形が化学構造によってどう定まるかを、原子の大きさと原子間の結合とから考える。	野田春彦（放送大学教授）
3	栄養のとりこみ	食物は消化されて、さまざまな化学変化を受け、身体の成分として利用されたり、エネルギー源として分解されたりしている。これらの説明を通して、酵素の働き方を述べる。	木原弘二
4	代謝 ―遺伝病 (1)―	身体の中で起こっている化学変化は、すべて酵素の作用によって進行しているが、この酵素の欠陥により起こるフェニルケトン尿症・ガラクトース血症など遺伝性の病気について紹介する。	同上
5	タンパク質の構造	酵素の主要成分はタンパク質だが、他にもヘモグロビンなど、酵素ではないタンパク質が重要な働きをしている。ヘモグロビンの分子が遺伝的に異常な鎌型赤血球貧血症について述べる。	同上
6	呼吸のしくみ	生命活動を遂行するエネルギーの源泉は、酵素による反応段階を経て、糖は脂質の酸化的分解によって確保され、その中間産物は、他のいろいろな成分の合成の素材として利用されている。	同上
7	エネルギーの利用	エネルギーはＡＴＰの形をとって、細胞内への物質の吸収、いろいろな物質の合成などのほか筋肉の収縮、神経における情報伝達など、細胞のさまざまな活動のために利用されている。	丸山工作（千葉大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	タンパク質合成	成長途上の幼い個体では、身体の成分として新しくタンパク質を合成しなければならない。しかし成長した個体でも、毎日タンパク質が合成されている。その反応のしくみについて述べる。	木原弘二
9	調節	身体の各器官は、それぞれの独自の機能を果たしているが、つねに相互の活動状況が個体の維持に都合のよいように調整されている。主として、タンパク質合成の制御について述べる。	同上
10	脂質 ―遺伝病 (2)―	細胞が合成する成分には、身体や細胞の構造に関係した、糖や脂質に属する物質がある。その物質の正常な分解に支障がある遺伝病として、粘液多糖類蓄積症、糖脂質蓄積症を紹介する。	同上
11	生物界における 元素の循環	すべての生物界の物質は、太陽の光のエネルギーを、植物が利用して、二酸化炭素を糖に変える光合成反応にもとづいてつくり出されたものである。この反応と窒素化合物の生物界での利用、分類の過程について述べる。	同上
12	細胞と細胞膜	細胞には、いくつかの構造体が含まれ、それぞれ機能を分担しているが、その成分の７０％は水である。水の特別な性質、細胞の膜との関係を紹介し、改めて細胞の働きについて整理する。	長野　敬 （自治医科大教授）
13	ＤＮＡの複製	タンパク質の構造を指定しているDNAは、細胞の分裂とともに、娘細胞に同一分子が均等に伝えられなければならない。 DNA分子の合成のしくみについて解説する。	木原弘二
14	遺伝子工学	最近話題となっている遺伝子工学の現状を紹介して、特定の遺伝子を確認できた例を説明する。また、この技術を利用して、ヒトの遺伝病の原因となる欠陥遺伝子を明らかにして、胎児診断に応用されていることを述べる。	同上
15	物質系としての生命	全体のまとめとして、生命現象は、生物特有のタンパク質、 DNAなどの物質の存在なしには考えられないこと、その機能の遂行に必要なエネルギー、および情報の役割について述べる。	木原弘二 長野　敬 野田春彦 丸山工作

＝生命のしくみⅡ＝（TV）

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

“生命のしくみ － 化学の立場Ⅰ”で一通り学んだ点を基礎知識として、これらの知識の根拠を改めて確かめ、また、補充発展させることを目的としている。主に、個々の独立した問題を取り上げて、基礎的な紹介では触れることのできなかった点を検討し、現代の生化学が直面している問題を二・三紹介する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	物質観と生命観	物質についての考え方をギリシャ時代から中世、近代へと辿り、一方、生物については生命に特有な力やしくみが想定されてきたことを紹介し現代の考え方と対比する。	木原弘二（慶応義塾大学教授）
2	有機化学の確立	１８世紀末頃から、有機化合物が多数発見、確認された。その後、化学的な研究の発展にともない無機物質と有機物質の区別が明確化し、生化学研究の基礎となる。	同　上
3	トリプトファンのトリプトファン　見発見	トリプトファンは必須アミノ酸の一つで、他のアミノ酸よりもかなりその発見が遅れた。しかし、このアミノ酸の存在を示す反応は一世紀ほど以前から知られていた。その発見が遅れた理由を示して、物質を確認することの重要さについて述べる。	同　上
4	尿酸と痛風	尿酸は、精製され確認された最初の有機化合物の一つである。尿酸の血中濃度が高いと痛風の発作が起こる。ヒトという生物に特有な事情が発作の条件となっている。	同　上
5	ビタミンC	私たちの健康な生活の維持には、適量のビタミンを摂取する必要がある。ビタミンCを例にして、生体が必要としている物質の働き、研究法の発展を紹介する。	同　上
6	コラーゲン	ビタミンCの欠乏で、影響を受けるのはコラーゲンである。このタンパク質には特殊なアミノ酸が含まれ、標準的なタンパク質とはラセン構造の様子が異なってくる。	同　上
7	ＡＢＯ血液型物質	赤血球の表面には、血液型を決定している物質が存在する。ＡＢＯの血液型は1801年に発見されたが、約半世紀後に血液型を決定する糖脂質が確認された。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	組織移植適合性抗原	臓器移植の際の問題に、移植片に対する拒絶反応がある。この免疫現象には白血球の細胞膜表面の抗原が関係している。抗原型にはA，B，C，DRの5群がある。	木　原　弘　二
9	タンパク質の細胞内分解	タンパク質は、細胞全体が分解される以外に、細胞内部で絶えず分解されている。分解の過程で、それぞれのタンパク質は異なった速さで分解され消失していく。	同　　上
10	アンチ・トリプシン	白血球の働きのためにはタンパク質を加水分解する酵素が必要である。しかし分解の過剰な作用を抑止するタンパク質が血液中に存在し、調節が行われている。	同　　上
11	コレステロールの代謝	コレステロールは、細胞の膜の重要な成分であり、常に合成されている。しかし、合成と利用の均衡が崩れて、血液中の濃度が高くなると高コレステロール血症として障害を起こす。家族性高コレステロール血症についての最近の研究の成果を述べる。	同　　上
12	酵素活性の調節	酵素の活性は精妙なしくみで調節されている。肝でのグリコーゲンの分解と合成に関係する酵素系、および大腸菌のグルタミン合成酵素を例として解説する。	同　　上
13	ホルモン放出因子	ホルモンによる調節において、そのホルモンの産正放出は視床下部から放出される別のペプチドに支配されている。副腎皮質刺激ホルモンの放出因子などを解説する。	同　　上
14	ヘモグロビン遺伝子	DNA分子を切断し、適切に結合することによって、動物、特にヒトの遺伝子を純粋にし、その構造を究明することが可能となった。ヘモグロビン遺伝子の例を考える。	同　　上
15	生　命　と　物　質	講義全体を振り返り、物質についての研究から生命現象が究明されてきた成果をまとめる。このことを通して、生命とは何かについての考えを整理する。	同　　上

＝植物の生理＝　（TV）

〔主任講師：増田芳雄（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

植物は動物と異なり、特有の構造と機能をもっている。その機能の１つは自栄養、すなわち光合成で、これによって太陽エネルギーを蓄え、地球上の全生物の生命を支えている。植物の形態形成と生理的機能は遺伝子のもつプログラムに従って発現されるが、それは環境要因にも影響される。植物に特徴的な構造・機能の調節を焦点にする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	植物生理その特性	地球上の全生物の生存を支える緑色高等植物のもつ特別な機能と構造に関する研究分野が植物生理学である。その研究の発展の歴史的展開を概観しながら植物の特性について考察する。	増田芳雄（大阪市立大学教授）
2	水分生理と気孔	植物は大量の水を吸収し、蒸散する。高い木のてっぺんまで、水は熱力学の法則により容易に上昇する。水の蒸散の制御は気孔により行われ、環境条件、植物ホルモンにより開閉運動は制御されている。	倉石晋（広島大学教授）
3	光合成　Ⅰ　明反応	光合成過程の前半の部分、すなわち光の関与する過程（光エネルギーの捕足、電子の伝達、ATPの合成）のしくみ及びこの過程の行われる舞台となっている構造について理解する。	辻英夫（京都大学教授）
4	光合成　Ⅱ　暗反応	光合成において、前章で述べた変化に引き続いて起こるCO_2固定の過程を理解し、このCO_2固定経路の多様化と環境との関係を考える。光合成産物の細胞内、組織間の移動についても理解する。	同上
5	窒素固定とタンパク質合成	微生物との共生による窒素固定または土壌窒素の吸収から始まり、窒素の同化、タンパク質の合成、合成以後のタンパク質の会合と細胞内輸送に至るまでの過程を取り扱う。遺伝情報発現調節のしくみについても考える。	同上
6	植物ホルモンの働き	植物が環境要因の影響を受けるとき、植物ホルモンが仲だちとなって植物の成長・分化を調節している。これら植物ホルモンの作用について概説する。	増田芳雄
7	遺伝的変異と生理的機能	高等植物のもつ遺伝子は形質を発現し、特定の形態を形成し、生理作用を示す。しかし、遺伝的形質は環境により発現し、植物は環境に適応した形態や生理作用を示す。	倉石晋

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	細胞成長と細胞壁	細胞壁は植物細胞を取り囲む多糖類を主成分とする構造であり、植物の成長・分化にさいして大きな役割をはたしている。ここではとくに細胞の伸長成長における細胞壁の構造や性質の意味について考える。	山　本　良　一 （帝塚山短期大学 助教授）
9	器官相互作用	植物の個体としての調和のとれた成長を可能にする極性と器官相互作用という二つの現象について考える。	神　阪　盛一郎 （大阪市立大学 教　授）
10	植　物　の　運　動	光などの環境刺激に反応して起きる植物の運動は屈性と傾性の二つに大別される。植物が刺激を感受して運動する機構について考える。	同　　上
11	細織培養と分化全能性	植物組織培養確立の歴史は、植物細胞が分化全能性を持つことの証明の歴史でもあった。その歴史的展開を振り返りつつ、植物における分化全能性について解説する。	原　田　　宏 （筑波大学教授）
12	形態形成と遺伝子発現	分化全能性を有する培養細胞・組織で得られた形態形成機構に関する知見について解説する。また、形質転換組織・個体の基礎・応用研究への利用についても述べる。	同　　上
13	光形態形成とフィトクロム	植物はさまざまな光情報を受けとって環境に適した体制を整える。それらの多くに関与するフィトクロムの働きを中心として、植物に対する光の作用機構を考える。	滝　本　　敦 （京都大学教授）
14	生物時計と花芽の形成	植物は生物時計を利用して日の長さを測定し、適当な季節に花を咲かせる。生物時計の概略を説明した後、光周反応による花芽形成の機構を考える。	同　　上
15	植物と環境ストレス	植物は高温、低温、水不足、塩ストレスなどにより影響を受ける。植物はやや弱いストレスにより耐性となり、ストレスを受けないと耐性を失う。	倉　石　　晋

＝生態学概論＝（R）

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体ー個体群ー群集の各レベルにおける生物と無機的環境、生物と生物との関わり合いを具体的事例をあげて講義し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて生態学の基本的原理と概念を理解させ、また環境問題に対する生態学の視点も述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生態学とは ー序論ー	生態学とは何か。この講義の導入部として生態学の対象、方法および環境要因の捉え方などについて述べる。	岩城英夫 （筑波大学教授）
2	生物と光環境	生態系のエネルギー源である太陽光の分布と季節変化は生物の生活に大きな影響を与える。生物と光要因との関係を、光と植物の光合成・成長、光と動物行動との関連を中心に述べる。	同上
3	生物と温度環境	生物は種類により異なる温度限界と耐性温度を持っている。温度環境は地球上の場所により異なり、これに応じて生物の生活期間や分布が決められていることを述べる。	同上
4	生物と大気要因	大気の成分中、二酸化炭素は植物の光合成作用の制限要因になりやすい。酸素は水生生物の生活を制約する。生物と大気要因との関係を説明し、風や大気汚染の影響についても触れる。	同上
5	生物と水環境	陸地における水の分布と植物の水収支について述べ、植物の生育や分布にとって水が重要な制限要因であることを説明する。	同上
6	生物と土壌環境	植物の生育は土壌の物理的・化学的性質によって影響を受ける。一方、植物や土壌生物の存在は土壌の形成に大きな役割を果していることを述べる。	同上
7	気候と植生の分布	温度と降雨量の地理的分布に応じて、地球上にはさまざまなタイプの植物群系が分布している。生活形と気候条件との関係、過去の気候変化に伴う植生の変遷についても触れる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	個体群の成長と調節	生物の集団（個体群）における個体数は、有限の環境において無限に増加することは不可能である。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、その機構についてまず理論的に述べ、ついで実例を見ながら論じる。	藤井宏一（筑波大学助教授）
9	動物の密度効果と“なわばり”	有限の環境下において動物の個体数が増加すればいつかは過密の状態に達する。このような過密状態に対する動物の対応の仕方について論じる。また、過密を避ける機構、特に“なわばり”について、例を用いて論じる。	同上
10	競争と“すみわけ”	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か。その機構についてまず理論的に取り扱い、さらに、種間競争の結果として起こる“すみわけ”について、観察例を用いて説明する。	同上
11	植物間相互作用	植物の種内競争と種間競争の仕組みについて述べる。まず同種の植物間で起こる競争密度効果と自然間引について述べ、次に異種の植物間の競争の機構について説明する。	岩城英夫
12	捕食関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）は生物群集内における生物相互作用の中でも一番重要な関係の一つである。まず捕食関係の動態に関する理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食関係の果す役割について説明する。	藤井宏一
13	絶滅と安定性	局所的に見た時、ある特定の生物種がその場に長期にわたって存続するとは限らない。その絶滅の機構は何か。生物種の生物群集の中での役割を論じつつ、各生物種の絶滅の可能性、そして群集そのものの安定性について論じる。	同上
14	植物の繁殖戦略	植物には一年生・多年生、草本・木本などさまざまな生活の仕方があり、それぞれ特徴的な成長・繁殖様式をもっている。異なった環境下でこれらの生活様式がどのような生態的意義をもつかについて説明する。	岩城英夫
15	生物群集の構造と組成	生態系の性格を決める上で最も重要なのは植物群落の種類組成と空間構造である。群落構造は生態系の微環境に影響し、また動物の分布もそれに対応して独特の群集構造を形成することを述べる。群集構造の季節的変化についても触れる。	同上

＝ 集 団 遺 伝 学 ＝ (R)

― 遺伝子はどのように進化するか ―

〔主任講師：石和貞男（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

集団遺伝学は、個体の集まりである集団を対象として、その遺伝的構成がどのような法則に支配され、時とともにどのように変化していくかを追求する学問で、究極的には生物の進化機構の解明を目的としている。この学時は現在、高度の数学的理論体系を軸として各種生物集団における観察結果（とくに分子レベルの変異）の解析と理論の検証を行っている。本講義では、放送大学の趣旨にのっとり、集団遺伝学のあらましの一端をできるだけ平易に、そして人間とのかかわりを念頭において、解説してゆきたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	遺伝の基礎	遺伝の基礎となる概念 ― 例えば、遺伝子染色体、DNA等 ― を的確に把握させる。特に、有核細胞のDNAにおける遺伝子の一般的構造等、分子レベルの知見を強調する。	石和貞男（お茶の水女子大学教授）
2	任意交配集団と近親交配	遺伝子プールや遺伝子頻度の概念およびハーディ・ワインベルクの法則を理解させる。また、個体間或いは遺伝子間の遺伝的近さを測る近交係数を紹介する。	同上
3	量的形質の遺伝	わかりやすい実例を示しながら、量的形質とはどんな形質かを理解させ、それに寄与するポリジーンの意味を把握させる。また、量的形質の遺伝率等にも言及する。	同上
4	突然変異	突然変異が遺伝的変異を起こす最も基本的な機構であることを理解させ、いろいろなタイプの突然変異があることを紹介する。特に、DNAレベルでの最近の知見も示す。	五條堀孝（国立遺伝学研究所助教授）
5	自然淘汰	適応度の定義を理解させ、形質レベルにおいて如何に自然淘汰が働いているなかを、工業暗化等の例をあげて説明する。また、有名な淘汰モデル ― 超優性モデルや頻度依存型淘汰モデル ― を紹介し、その現実性を議論する。	同上
6	集団の変異 Ⅰ ―形態レベル蛋白質レベル―	集団内変異の保有機構をめぐるフィッシャー・ライト論争、そしてタンパク質多型現象をめぐる中立説論争を紹介し、多型現象の生物的・進化的意味合いを議論する。	石和貞男
7	集団の変異 Ⅱ ― DNAレベル ―	組み換えDNA技術等の進歩により、遺伝的変異が直接DNAレベルでみられることを理解させる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	集団の変異性　Ⅲ —ヒト（人類） 集団—	人類集団における形態・タンパク質・DNAレベルのいろいろな変異を紹介する。特に、日本人の蒙古系人種としての遺伝的特徴や国際結婚の増加等に注目しながら、日本人集団における遺伝的構成の将来を議論する。	石和貞男
9	分子進化　Ⅰ —タンパク質分子 からみた進化—	1960年代に始まった分子進化の研究が、タンパク質のアミノ酸配列データの集積によって成功し、分子時計という有用な概念が出されて来た過程を紹介する。	五條堀　孝
10	分子進化　Ⅱ —DNA配列から みた進化—	DNA配列決定の改善により、DNA配列データが爆発的に増加した現実を踏まえ、アミノ酸配列データからではわからなかった新しい分子進化学的知見を紹介する。特に、多重遺伝子族の進化の重要性を示す。	同　上
11	分子進化　Ⅲ —分子進化と 分子生物学—	分子生物学上の最近の発見 — 例えば、偽似遺伝子や可動遺伝子など — の進化的意義を考察する。また、遺伝子変換と協調的進化の関係といった最近の知見も紹介する。	同　上
12	分子進化　Ⅳ —ウイルス遺伝 子の進化—	ウィルス遺伝子の進化と起源を調べることは、ウィルス病の治療や予防に役立つだけでなく、ウィルス自身の進化を知るうえでも重要である。ここでは、がんウィルスやエイズウィルスの遺伝子を中心にして、その進化速度やウィルス系統間の進化的関係などを議論する。	同　上
13	人種の起源と分化	ヒトの皮膚色等の例をあげながら、人種というのがどのように分化し、そしてその分化がいつ頃起こったかを議論する。その際、タンパク質多型のデータを利用した根井の遺伝的距離という量の有用性を紹介する。また、その分化と適応の関係も考察する。	同　上
14	集団遺伝子におけるこれからの問題	組み換えＤＮＡ技術やＤＮＡ配列決定法のさらなる発展が予想される現在、集団遺伝学的に興味ある問題のうち、どれが解決可能で、どれが解決不可能かを広範囲に議論する。	同　上
15	遺伝学からみた人類の未来	現代医療技術が目ざましい発達により、悪い遺伝子をもつ個体が生き残る。つまり「個体としての利益と生物種としての利益の矛盾」が今、人類集団に問われている。遺伝学的知見が、この原理的矛盾にどのような解決を与えることができるかを、いろいろな角度から検討する。	石和貞男

＝ 動 物 の 進 化 ＝（TV）

〔主任講師：丸山工作（千葉大学教授）〕

全体のねらい

生物の進化の経過、その多様性、その仕組みについて現在の生物科学がどのようにみているかを各専門家を通じて解説する。とりわけ、分子進化論の最近の進歩は、生物進化に新しい見地をひろげており、ヒトの由来についても考えをおさせている。ごく基本から、新知見にいたるユニークなシリーズ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生物の進化	生物の進化の概論	丸山工作（千葉大学教授）
2	ガラパゴスの動物相	1. ダーウィンとガラパゴス 2. ガラパゴスの地質学 3. ガラパゴス諸島での種分化 4. ダーウィンの自然選択説と適応	八杉龍一（科学史家）
3	生命の起源	1. 生物学的一様性　7. RNA酸素 2. 化学進化　8. まとめ 3. 年代決定 4. 最少要素生物 5. 宇宙子 6. 微化石	野田春彦（放送大学教授）
4	分子レベルの進化と中立説	1. はじめに 2. 遺伝的浮動について 3. 突然変異遺伝子の種内への蓄積過程 4. 分子進化の特徴と中立説 5. おわりに	木村資生（遺伝学研究所教授）
5	分子進化系統樹と動物の起源	1. 生物系統論の試み　2. 分子進化学と分子時計　3. 分子系統樹　4. 5SrRNAによる生物系統樹　5. 生物界の全体像　6. 後生動物の起源　7. 後生動物の系統“異説” 8. 5SrRNAによる後生動物の系統樹 9. おわりに	堀寛（名古屋大学助手）
6	動物の系統樹	1. はじめに　2. 化石　3. 生きている化石（living fossils）　4. 比較形態学　5. 発生学　6. 生態学、生物地理学　7. 生化学、生理学　8. 遺伝学、飼育動物の場合 9. 動物の系統樹	蒲生重男（横浜国立大学教授）
7	細胞器官の起源	1. ミトコンドリア 2. DNAとゲノム 3. 遺伝子転写系 4. タンパク質合成系 5. タンパク質輸送系 6. 共生説か内生説か	石川統（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	種の分化	1. 大進化と小進化 2. 種とは何か？ 3. 亜種問題 4. 時間要因と環境要因 — 一つの種系統（lineage）のたどる道 5. 絶滅も進化の一コマ	浜田隆士 （東京大学教授）
9	行動の進化	1. はじめに　2. カモ類の求愛行動の進化 3. 2つの問題　4. 転位行動　5. 儀式化 6. クジャクの場合　7. 行動戦略と進化 8. ESS（進化的に安定な戦略）	日高敏隆 （京都大学教授）
10	原生動物	1. 原生動物とは 2. 原生動物の行動制御の進化 3. イオンチャンネルより見た原生動物の進化	内藤豊 （筑波大学教授）
11	無脊椎動物にみる退行進化	1. 器官の退化していく進化　2. 鍾乳洞の中の世界　3. 水性の洞窟動物　4. 陸生の洞窟動物　5. 洞窟動物に共通する特性　6. 洞窟性脊椎動物にみられる退行進化の証拠　7.甲虫類にみられる退行進化の段階　8.水生洞窟動物の由来　9. 陸生洞窟動物の由来　10.退行も進化のひとつ	上野俊一 （国立博物館室長）
12	脊椎動物	1. 脊椎動物とはなにか 2. 脊椎動物の基本体制 3. 相同と相似 4. 体制の進化	養老司 （東京大学教授）
13	ヒトの進化(1)	1. 霊長類の進化　6. 新人段階 2. 人類への進化 3. 猿人段階 4. 原人段階 5. 旧人段階	原和郎 （東京大学教授）
14	ヒトの進化(2)	1. はじめに 2. 分子時計とは 3. ミトコンドリアDNAの分子時計 4. ヒトに一番近い類人猿はどれか 5. グロビン偽遺伝子の分子時計	長谷川政美 （統計学研究所室長）

＝植物と菌の系統と進化＝（TV）

〔主任講師：西田　誠（千葉大学教授）〕

全体のねらい

植物と菌の起源と進化を生活史と比較形態学を通じて考察する。系統分類における形質についてもふれる。植物については、特に陸上植物の進化の方向とその必然性を地質時代の環境との関連において考えようとするものである。本講では菌は動・植物にてい立する第３の生物群として扱う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	藻類の分類と分類形質	紅藻・褐藻・緑藻は古い時代に分類された呼び名であるが、色が違うと光合成産物や生殖細胞の形態なども異ることがわかり、色による藻類の分類は自然分類と評価されるようになった。藻類の分類形質は植物界全般にも適用できる。	千原光雄（筑波大学教授）
2	紅藻と褐色の生活環	藻類の生活環の様式は多様である。紅藻には２世代型と３世代型があり、褐藻には同形世代型、コケ型、シダ型、後世動物型がある。 動物型の生活環をもつホンダリラ類は藻類の中で最も高度に分化した体制をもち、陸上の高等植物に比較できる藻類である。	〃
3	緑藻の系統と生活環	緑藻は、1.陸上植物に連なる系統群、2.淡水に分布する緑藻、3.海に生育する系統群の３つに分類できる。生活環の様式は、１と２では単相型で、これはコケ型、シダ型の始原型と思われる。３には同形世代型、コケ型、シダ型、後生動物型がある。	〃
4	植物の上陸１ 緑藻の細胞学	現生植物の細胞構造や細胞器官の複製機構の比較研究（特に細胞分裂、核分裂の微細構造、鞭毛装置構造など）によって浮び上ってきた祖先の植物像を紹介する。また、陸上に生育圏を拡大することができた条件を細胞レベルで解説する。	堀　輝三（筑波大学助教授）
5	植物の上陸２ 緑藻の生理化学	現生の緑色植物にみられる光合成を中心とした物質代謝系の多様化が、それらの植物が出現したと推定される地球上の環境（酸素、二酸化炭素濃度など）の変化に対しどのように適応し、エネルギー獲得様式を進化させてきたかを考察する。	猪川倫好（筑波大学教授）
6	コケとシダ （造卵器植物）	水中で単相で生活する緑藻や車軸藻から進化した緑色植物としてコケとシダをとらえる。水中から陸上へと生活圏をひろげる過程でおける造卵器の形成と退化、機械組織・フラボノイドの発達、水の欠乏に対応する気孔や通道組織の発達などを解説する。	水島うらら（上野学園大学短期大学部教授）
7	葉の進化	テロム説による葉の進化を解説。ハナヤスリ科（シダ類）の裸葉と実葉が示す葉の立体的構成を大葉進化の中途段階に留るものとして理解し、茎頂と葉の形態形成様式から茎と葉のちがいを論じ、維管束植物の茎頂分裂組織の進化を紹介する。	今市涼子（玉川大学農学部講師）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	花と種子1 種子の成立	石炭統の種子化石から、テロムが大胞子のうを包み、珠皮となり、胚珠が成立する過程を推論する。いっぽうシダ植物の前裸子類からソテツ系統と球果類系統へと進化したという推論を材解剖学の上から考察する。	西田　誠 （千葉大学教授）
9	花と種子2 花の構成	花は短縮したシュートであり、おしべは小胞子葉、めしべは大胞子葉であるとするゲーテの変態論にはじまり、ゴノフィル説による花の器官学的解釈までを紹介する。いっぽう、花の原型を地質時代のソテツ類、針葉樹類に探り、花々二系列のあることを紹介する。	西田　誠
10	被子性	心皮（大胞子葉）が胚珠包んでめしべを形成するのが被子植物の特徴である。その前ぶれは裸子植物に見られる。被子性は種子の保護と散布に役立つ。いっぽう、心皮説では説明困難なめしべの解釈についてはゴノフィル説がある。	田村道夫 （神戸大学教授）
11	重複受精	被子植物の生殖細胞の行動の特徴は、1.精核（精子）が花粉管により胚珠まで送られること。2.2個の尤核のうち、1つは卵核と合体して胚をつくり、他は極核と合体して内胚乳をつくることである。これらの発生学的性質を裸子植物と対比させて説明する。	山下貴司 （お茶の水女子大学助教授）
12	被子植物の起源	モクレン類と尾状花序類 古植物学的例証 花（結実器官fructificafion）の化石	西田　誠
13	菌の形質と分類(1)	菌は動物界・植物界に対応する菌界の生物である。これは生物群の系統進化の考察の結果であるが、その考察は後に行うことにしてここではやず、菌界に二つの亜界 — 原核菌亜界（細菌の仲間）と真核菌亜界（かび・きのこの仲間）があることを述べる。	寺川博典 （東京医科歯科大学名誉教授）
14	菌の形質と分類(2)	次に、原核菌亜界の分類上重要な形質と分類群5門について述べ、従来の一般的分類法との比較を行う。さらに、真核菌亜界に含まれる菌の重要な形質と分類9門について述べ、それぞれの特徴に基づいて、従来の系統進化の考え方との比較を行う。	〃
15	菌の系統進化	従来、菌は下等植物とされるか、または真核菌類を動物界・植物界に対する菌類界として原核菌類は別界に含められた。しかし菌の起原と進化を考察すると、原核菌類と真核菌類とは一界をなすものであり、生物界は動・植・菌の三界からなる（生物三元論）	〃

＝動物の行動と社会＝（TV）

〔主任講師：日高敏隆（京都大学教授）〕

全体のねらい

動物の行動をさまざまな面から眺めてみて、そのしくみ、生存にとっての意味、社会とのかかわり、学習、進化などを理解し、人間の場合についても新しい視点を開く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	動物行動学ーエソロジーとは	動物行動学（エソロジー）とは、いったい何をどのように研究する学問なのか。その概念と研究内容を概説する。	日高敏隆
2	行動のおこるしくみ	われわれのまわりにはさまざまな動物たちがいる。その多様な行動の背後にある行動をおこすしくみー生得的解発機構に焦点をあててみたい。	山下恵子（都留文科大文学部非常勤講師）
3	探索と定位	動物は種によって、主に使っている感覚器が異なっている。各々の動物がどのような感覚で環境を探索し対象を定位しているのか、具体例をあげながら考察する。	同上
4	コミュニケーション	動物たちの社会的な生活はリリーサー（解発因）という信号のやりとり、すなわちコミュニケーション（情報の伝達）によって成り立っている。その具体例をみてみよう。	新妻昭夫（立正大学非常勤講師）
5	適応度とは	動物は繁殖のために、驚くほど多大な努力を払っている。この努力や精巧に組みたてられた行動のしくみは、いったい何のためのものなのか。	日高敏隆
6	適応のための戦略	動物たちは適応度を高めるために、どのような戦略を採用しているのか。具体例にそくして、それを検討してみたい。	山下恵子
7	社会構造－1ー群れとなわばり	動物は社会的な存在である。個体と個体の関係、すなわち社会関係について、「群れ」と「なわばり」という観点から、そのメカニズムを考察する。	新妻昭夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会構造－2－配偶システム	動物の配偶関係のかたちは、一夫一妻、一夫多妻、ハレムなどじつに多様である。じっさいにどのような形態があり、それがどのように決定されるのか、具体的に考えてみよう。	新妻昭夫
9	社会構造－3－真社会性	共同育児、繁殖と労働の分業、世代の重なり、という社会的特徴をもつアリ、ハチ、シロアリは、真社会性の動物とよばれている。その行動と社会を、具体例をあげながら詳述する。	山下恵子
10	利他行動と包括適応度	動物の世界には、一般に「利他行動」とよばれている行動がたくさんみられる。これは、適応度という考え方では説明できない。そこで括適応度という概念が提出された。	日高敏隆
11	最適戦略とＥＳＳ	動物たちは、自分の適応度を高めるために、いろいろな戦術や戦略をとっている。最適戦略（もっとも効率的な戦略）とＥＳＳ（進化的に安定な戦略）についてみてみよう。	同上
12	行動の進化	化石になることのない「行動」や「社会」の進化は、どのようにして調べることができるのか。比較行動学の基本概念、遺伝的変異と自然淘汰、そして近年の性淘汰の理論を検討する。	新妻昭夫
13	共進化	２つ以上の種がたがいに密接な影響をおよぼしあいながら、相互に進化していくことを共進化という。一方だけではほとんど生存できない相互依存の関係が成立するような場合もある。具体的にその例をみながら、先進化の仕組みを考察する。	山下恵子
14	行動の発達－プログラムと学習－	動物の行動の発達には、生得的な部分と学習される部分があり、両者が複雑にからみあっている。そのプログラムについて、具体例をみながら検討してみる。	新妻昭夫
15	動物の行動からみた世界	本講義をまとめるにあたって、動物の環境世界について考察を加え、さらにエソロジーという観点から人間そのものをみてみたい。	日高敏隆

＝ 脳 と 行 動 ＝ （TV）

〔主任講師：伊藤正男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

脳の研究は、現代生物科学の極めて重要な課題の一つであり、その医学上の応用や人工知能開発への波及効果に対する期待も大きい。この講座では、現在自然科学の手法を動員して行われている脳の研究の成果をもとに、脳の構造とその働き方の仕組みを解説する。更に、脳と行動の関わりを考察し、脳と心の問題に言及する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	脳の働き	脳とは何か。動物の行動に現われるその複雑で精妙な働きは如何にして生まれるのか。そして、どのようにして脳は我々の精神の担い手になるのであろうか。	伊藤正男（東京大学名誉教授）
2	ニューロン	脳は膨大な数のニューロンから成っている。ニューロンは電気信号を発生し、伝播させ、特殊な化学物質を分泌して相互に情報を伝え合う。	同上
3	脳の構造	脊髄、延髄、小脳、橋、中脳、間脳、大脳と呼ばれる脳の各部分は、それぞれ特徴のある構造をしており、脳の働きの上で違う役割を分担している。	同上
4	反射系	脳の働きのもっとも底辺にあるのが反射である。多数の反射をうまく組合わせて実施する働きは脳に特有のものである。反射における信号の伝わり方を調べてみよう。	同上
5	脊髄下降路	延髄より上位の中枢から脊髄へ何本もの下降路が降りていく。その信号は、自動脊髄で行われている反射を活動させたり、停止したり、種類を切り換えたりする働きがある。代表的な下降路の構造と作用を調べる。	同上
6	小脳	小脳は直接、あるいは脊髄下降路を介して間接に反射系につながり、反射の働きを正確な、円滑なものにする。いかにも計算機に類似した小脳の働きや構造について考察する。	同上
7	大脳基底核	大脳の深部にある幾つもの核の集合体で、運動の自動的な制御の中枢である。これが病気で侵されると、いろいろな型の不随意運動が起ってくる。大脳基底核は運動制御における自動的な安定装置の役を担っているようである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚系	皮膚、目、耳、鼻、舌で受けたいわゆる5感の情報は神経信号に変えられて上位の中枢へ送られる。脳はどのようにしてこれらの情報を分析し、外界のイメージを作り出すのであろうか。	伊藤正男
9	随意運動	われわれは意のままに運動を行うことができるが、その仕組みはどうなっているのであろうか。大脳の運動野で生まれた司令信号が脊髄に送られて運動を引き起す過程を分析してみる。	同上
10	情動	われわれの感情の根底にあるのは、外界からの刺激に対する生物学的な価値判断である。この価値判断機構は視床下部にあり、大脳辺縁系に助けられて働くと思われる。	同上
11	本能行動	摂食、飲水、性行動など本能的な行動は情動と密接な関係があり、大脳辺縁系、視床下部が中枢として働く。本能行動と脳とのかかわりについてしらべてみる。	同上
12	睡眠と覚醒	通常の睡眠はノンレム睡眠と呼ばれるがこれが時折レム睡眠と呼ばれる別の型に切り変わる。覚醒とこれら2型の睡眠のリズムが作り出される脳内の仕組みについて考えてみよう。	同上
13	記憶と学習	脳の記憶装置は、使い方によって信号の伝わり方が変化する可塑性シナプスにより作られている。これらのシナプスが神経回路網に組込まれて脳の学習機能が生まれる。	同上
14	大脳連合野	大脳皮質の感覚野、運動野の間を占める連合野は動物が高等になるにつれて発達し、人間では大脳表面積の大半を占める。ここに言語野が生まれ、思考等の高次機能が含まれる。	同上
15	脳と心	反射に始まって大脳連合野まで、脳の構造と機能について一歩一歩登ってきたが、最後に「脳と心」の問題を考えてみよう。心は果して脳の働きとして最終的にとらえうるであろうか。	同上

＝太陽系の科学＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）〕

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近までの研究成果をふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	研究の歴史	導入として全15回のカリキュラムを述べ、つづいて古代やギリシャ時代から太陽系天文学発展の歴史を概観し、現代の探査機による太陽系探査にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。	小尾信彌（放送大学副学長）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上
3	地球の運動に伴う現象	自転や公転、歳差など地球の運動に伴って見られる諸現象は、1年の季節、時刻や時間等を通じて古来われわれの生活や自然の認識に大きくかかわってきた。これらについて学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
4	月、惑星の現象	月や惑星に見られる諸現象は、古くから天文学が発展し、宇宙の構造（太陽系のモデル）を形成するのに大きな役割を果たしてきた、これらについて学び、さらに日、月食についてもふれる。	同上
5	惑星運動の法則の発見	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（東京大学教授）
6	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは面積速度の法則（第2法則）について、3の諸側面を学ぶ。	同上
7	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第3法則を導く	万有引力の法則からは、2体の運動について公転の平均距離と公転周期のあいだに、いわゆる第3法則が導かれる。ここでは3の導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	堀　源一郎
9	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月、一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上
10	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降発展した摂動について学ぶ。	同　上
11	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理化学的な性質を学ぶ。	村山定男（国立科学博物館理化学研究部長）
12	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。木星型惑星に属する衛星について学ぶ。	同　上
13	隕石と彗星	彗星に関する物理化学的な知識、構造等に関する知識も、1985～86年のハレー彗星の観測を通じて大きく進んだ。ここでは彗星やそれに伴なう流星等について学ぶ。また、隕石についての諸研究の成果についても学ぶ。	同　上
14	太陽と惑星	太陽やその活動についての研究も、最近の宇宙探査を通じてめざましい進展が見られる。また、太陽放射やその活動が惑星など太陽系の諸天体に及ぼす影響等についても新知見が得られている。ここでは、それらの成果について学ぶ。	桜井邦朋（神奈川大学教授）
15	これからの太陽系	太陽系についての研究がこれからどのように進展していくかについて、さまざまな側面から、理論的な研究や観測、探査等の進展と可能性について話し合う。	同　上

＝恒星天文学＝　（TV）

〔主任講師：吉岡一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

恒星に関する基礎知識を得るとともに、それらの知識を観測あるいは理論をもとに得る過程について理解することを目的とする。そのために、恒星の運動、連星の解析、ＨＲの図、恒星の大気および内部構造を例に取り、それらの知識を得る方法を具体的に、演習形式も交えて学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	年周視差と距離	1. 恒星の定義 2. 恒星の重要性 3. 講義の展開 4. 恒星の名前 5. 年周視差と距離 6. 年周視差の測定 7. 年周視差測定の歴史	吉岡一男 （放送大学助教授）
2	固有運動と太陽運動	1. 固有運動とその測定 2. 視線速度とその測定 3. 太陽運動と特有運動 4. 銀河系の回転とオールト定数	同上
3	永年視差・統計視差と運動星団の方法	1. 天体の距離の重要性とその測定 2. 永年視差とその測定原理 3. 統計視差とその測定原理 4. 運動星団の方法とその原理	同上
4	実視連星の解析	1. ２重星と連星 2. 連星の種類 3. 連星の軌道要素 4. 伴星の位置の表示と実視連星の判別 5. 実視連星の解析	同上
5	視線速度曲線の解析	1. 連星の頻度 2. 分光連星の解析 3. 分光連星の特徴	同上
6	光度曲線の解析	1. 食連星の特徴 2. 食連星の分類 3. 光度曲線の解析 4. 力学視差の決定	同上
7	等級と光度	1. 等級の定義とポグソンの式 2. 見かけの等級と絶対等級 3. 実視等級と写真等級 4. 放射等級と放射補正 5. 等級の測定	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	スペクトル型と色指数	1. 星のスペクトルとスペクトル型 2. 連続スペクトルによる表面温度の決定 3. 色指数と表面温度	吉岡一男
9	HR図と恒星の分類	1. ＨＲ図の歴史 2. ＨＲ図と恒星の分類 3. 恒星の光度階級と分光視差 4. ＨＲ図の特質 5. ２色図	同　上
	恒星大気を決める基礎法則	1. ボルツマンの式とサハの式 2. バルマー線強度と表面温度 3. 放射強度と放射流束	同　上
11	恒星大気の物理量の決定	1. 吸収係数と光学的深さ 2. 静水圧平衡の方程式 3.放射輸送の方程式と放射平衡 4. 温度分布の理論計算 5. 大気物理量の理論計算	同　上
12	恒星大気の化学組成の決定	1. 周辺減光と温度分布 2. スペクトル線の輪郭と等価幅 3. ファイン・アナリシスとコース・アナリシス 4. 星の種族と化学組成	同　上
13	恒星のエネルギー源	1. 太陽エネルギー源 2. 水素燃焼反応 3. その他の熱核反応	同　上
14	主系列星の構造と質量光度関係	1. 内部構造を決める式 2. 内部構造の計算 3. 質量光度関係 4. ホモローグ星	同　上
15	脈動変光星と周期光度関係	1. ピリアルの定理と星の進化 2. 脈動変光星と周期光度関係 3. 周期光度関係の導出 4. おわりに	同　上

＝宇宙の構造と進化＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙の特徴や構造から、それが形成された100数十億年の歴史についての理解を深める。専門分野の講師によって、各分野の最前線の研究にもふれる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙と宇宙論	1. 宇宙と宇宙論 2. 宇宙の構造と進化 3. 内容の展開について	小尾信彌 （放送大学副学長）
2	宇宙探究の歴史Ⅰ ー開かれた無限宇宙	1. 宇宙論とは 2.「閉じた有限宇宙」からの脱却 3. 開かれた無限宇宙	佐藤文隆 （京都大学教授）
3	宇宙探究の歴史Ⅱ ービッグバンの発見	1. 宇宙のモデル 2. 星の進化と元素の起源 3. 新しい観測手段 4. 進化する天体と宇宙 5. ビッグバンの発見 6. 宇宙と人間	同上
4	光学天文台Ⅰ	1. 望遠鏡 2. 位置観測 3. 撮像観測 4. 測光観測	小平桂一 （国立天文台教授）
5	宇宙の現状Ⅰ	1. 天体の観測 2. 光や電波（電磁放射） 3. 天体が放つ放射とその観測	小尾信彌
6	宇宙の現状Ⅱ	1. 光が伝える天体の情報 2. 原子のエネルギー状態 3. 原子のスペクトル 4. スペクトル線の幅 5. 太陽や恒星の連続スペクトルー熱放射 6. 電波天体の連続スペクトルー非熱的放射	同上
7	宇宙の現状Ⅲ	1. 宇宙の階層構造 2. 超銀河団と銀河団 3. 銀河 4. 恒星 5. 冷たい天体	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	光学天文台 Ⅱ	1. 分光器 2. 低分散分光観測 3. 高分散分光観測 4. 干渉計観測	小平桂一
9	相対論的宇宙論 Ⅰ	1. 運動の相対性 2. 光の特殊性 3. 特殊相対論 4. ローレンツ変換 5. 特殊相対論の実験的裏付け	江里口良治 （東京大学助教授）
10	相対論的宇宙論 Ⅱ	1. 加速度運動と慣性力 2. 一般相対性原理と等価原理 3. 重力理論としての一般相対論 4. 一般相対論の検証	同　上
11	相対論的宇宙論 Ⅲ	1. ニュトン的宇宙論 2. 宇宙原理 3. 膨張宇宙 4. 宇宙の地平線 5. 膨張宇宙の密度と温度	同　上
12	相対論的宇宙論 Ⅳ	1. 重力の強さと時空の歪み 2. シュワルツシルド時空中の運動 3. 事象の地平面とブラックホール 4. ブラックホール候補 5. ブラックホールの蒸発	同　上
13	初期の宇宙進化 Ⅰ	1. ビッグバン宇宙確立史 2. 宇宙の初めの1000秒の出来事 3. 宇宙黒体輻射	池内　了 （国立天文台教授）
14	初期の宇宙進化 Ⅱ	1. 宇宙の大規模構造 2. 銀河形成の2つのシナリオ 3. おわりに	同　上
15	電波天文学 Ⅰ ―電波による宇宙の観測	1. 電波と光 2. 電波望遠鏡 3. 野辺山の45m電波望遠鏡 4. 野辺山の五素子電波干渉計 5. まとめ	海部宣男 （国立天文台教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	電波天文学Ⅱ ー電波でみた宇宙	1. 宇宙における電波の発生 2. 星間分子雲からの星の誕生 3. 銀河中心核と宇宙ジェット	海部宣男
17	恒星の誕生	1. 恒星進化論 2. 星間ガス雲 3. 恒星誕生のダイナミックス 4. 星間塵と星間分子 5. 星の誕生の現場 6. 主系列星への収縮	杉本大一郎 （東京大学教授）
18	恒星のエネルギー源と主系列星の寿命	1. 恒星のエネルギー源は何か 2. 原子核融合のエネルギー 3. 恒星の内部構造 4. HR図と主系列 5. 主系列星の寿命	同上
19	巨星への進化と死	1. 巨星への進化 2. その後の進化と原子核反応 3. 恒星の死	同上
20	星の進化論の意義	1. 極限状態の物理 2. 物質世界の歴史 3. 恒星はなぜ進化する	同上
21	恒星進化の残骸Ⅰ	1. 観測されている超新星 2. 大質量星の爆発するタイプ2の超新星 3. 白色矮星が爆発するタイプ1の超新星	野本憲一 （東京大学助教授）
22	恒星進化の残骸Ⅱ	1. 超新星の残骸 2. 中性子星	同上
23	大気の外からみる宇宙 ーX線天文学	1. 大気の壁 2. X線の空 3. X線星の正体 4. つぶれた星ー中性子星とブラックホール 5. X線パルサーとX線バースト 6. 人工衛星「はくちょう」と「てんま」 7. かに星雲 8. 銀河系外のX線源	小田稔 （理化学研究所理事長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	銀河の進化と元素Ⅰ	1. 銀河進化の基本的物理過程 2. 星間物質の物理状態 3. 分子雲からの星生成 4. 巨大バブルの形成	池内　了
25	銀河の進化と元素Ⅱ	1. 星生成の基本データ 2. 星の進化のデータ 3. 放出されたガスの混合過程 4. 銀河の進化と重元素 5. おわりに	同上
26	太陽系の構造と起源　Ⅰ	1. 太陽系の構造 2. これまでの太陽系起源論	中澤　清 （東京工業大学教授）
27	太陽系の構造と起源　Ⅱ	1. 惑星の形成過程 2. 木星型惑星の形成 3. 地球の形成・進化 4. 太陽系内小天体の起源	同上
28	生命のはじまりと惑星の進化	1. 生命と物質 2. 生命の起源 3. パンスペルミア 4. 生命の歴史 5. 生命構成物質の合成 6. 惑星環境と生命	大島泰郎 （東京工業大学教授）
29	地球外生命を探る	1. 太陽系に生命を探る 2. 太陽系外の生命 3. 銀河系内における文明社会 4. 地球外文明探査 5. 地球外文明への送信	同上
30	まとめとこれからの学習	1. さらに勉強したい人に 2. 自分でいろいろ考える	小尾信彌

＝宇宙像の変遷＝(TV)

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代宇宙論の解説ではなく、人類が過去に、どのように宇宙を把握しようとしてきたか、という点を振り返り、そのなかから、≪科学的宇宙観≫が生れてくる過程を跡付けることを、主たる目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙観とは何か	宇宙観の一般的な意味を探る。人類が、自分の知っている世界を空間と時間の上で拡大し、世界の初め（と終り）、世界の果て、などを考え、さらに人間をそのなかに位置付ける、という営みを、神話として行ってきたことを日本と中国を例にとって、考える。	村上陽一郎（東京大学教授）
2	インド人の宇宙観	神話的宇宙観の典型として、インドの古代的な宇宙神話を取上げる。空間、時間の構造などを手掛りに、≪須彌山説≫も学ぶ。また天文学との関りにも触れよう。	楠葉隆徳
3	ギリシアの宇宙観	プラトン、アリストテレスらの≪哲学≫に先行する神話的宇宙像と、そうした≪哲学的≫宇宙像との関りや、その特徴について述べる。	村上陽一郎
4	地球中心モデル —プトレマイオスの場合—	ギリシア的宇宙論のなかから生れた、数学的天文学としてのプトレマイオスの説を取り上げる。どのように天体の動きを記述しようとしたか、そこでは、宇宙の構造はどのように考えられていたか、を探る。	同上
5	アラビアの宇宙観	7世紀に出現したアラビア世界では、どのようにギリシアを受け継ぎ、またどのようにイスラム独自の着想をそれに付け加えたかが問題となる。ここではその点を考えてみる。	楠葉隆徳
6	中世からルネサンスへ —西欧の場合—	ユダヤ＝キリスト教的な宇宙観の特徴は、「創世記」にある如く、神の世界創造にある。ギリシアやイスラムの学問を受け継いだ西欧世界が、中世、あるいはルネサンスに、どのように、世界創造とそうした学問とを組合せて、統一的宇宙像を造ろうとしたかを探る。	村上陽一郎
7	コペルニクスの登場	ルネサンスの宇宙像の一つが、太陽中心的モデルであり、コペルニクスはその代表者と考えられている。それが≪科学的≫宇宙像とはかなり距離のある宇宙観として提案されていることを学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ケプラーの宇宙観	近代天文学の祖と言われるケプラーもまた、ルネサンス宇宙像を抱いていた一人である。ケプラーの占星術や、天体についての考え方が、≪科学的≫宇宙像とどう違うか、重なるか、という点に焦点を当てよう。	村上陽一郎
9	ニュートンと近代宇宙観	ニュートンの出現で、天体の運動を説明する基本法則は出揃った。しかしニュートンその人の描いていた宇宙像と、近代に生れたニュートン力学的世界像との間にも、大きな距りがあることを認めなければならない。	同上
10	コスモスの崩壊	17世紀後半、デカルト哲学の浸透と、ニュートン法則の解明とから、従来のような、意味と構造と秩序をもった宇宙、つまりコスモスは、次第に、単なる天体を容れる空間と、均質な長い時間、という≪科学的≫な宇宙概念に変質し始める。この点を考えよう。	同上
11	観測器械の進歩と天文学	ガリレオ、ニュートン以来、望遠鏡の改良は目覚しく、掃天観測が行われるようになり、とくに南半球から観測される天体が、新しい知識を我々に与え、近代的天文学が誕生する。	同上
12	地球を測る	それとともに、我々の住む地球についてのさまざまな観測が詳しくなり、宇宙のなかでの地球の位置も次第にはっきりしてくる。	同上
13	現代天文学とその宇宙観　その1	13、14回を通じて、オルバースの道理からビッグ・バン仮説の成立までの経過を辿り、そのなかで、現在の科学的宇宙像がどんなものであるかを、探る。	小平桂一（国立天文台教授）
14	現代天文学とその宇宙観　その2		同上
15	宇宙と人間	宇宙に飛び出した人間は、宇宙のなかで、再び、科学を超えた世界に出会う。こうした体験を踏まえ、現在の我々人間が、科学的宇宙論の向うに何を見ようとしているのか、を考えて、本講の締め括りとする。	村上陽一郎

＝地球の科学Ⅰ＝（TV）

― 固　体　地　球 ―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球は固体地球・水圏・気圏の３つの大きな層圏から構成される。そのうち、固体地球について説明する。最近数十年間における固体地球に関する研究の進展はいちじるしいものがある。それらの内容についても説明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	固体地球の層圏	固体地球は球状の層圏から構成される。地表から地心へ向って、地球表層、マントル、外核、内核から構成される。地球表層としては地殻、あるいは地殻とマントルの最上層部で構成されるプレートという岩石圏がとり上げられる。これらについて学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	地球の物理的性質	地球はほとんど球形であるが、若干形がずれている。このような地球の形状について学ぶ。また、地球には重力、地磁気が存在する。これらについて学ぶ。さらに、他の天体との関係で、地球には潮汐現象がある。また宇宙線がふりそそぐ。これらについて学ぶ。	同　上
3	内因的作用による地表の変化	地球内部の諸要因によって生じる変化が、地表まで達して変化を与えることがある。それは火山であり、地震によって生じる断層であり、また隆起や沈降である。これらの事項について学ぶ。	同　上
4	外因的作用による地表の変化	地表は大気の温度変化を受けたり、結氷・融氷による膨張・収縮の作用を受けて風化する。また流水の作用によって侵食されて堆積物を生じる。堆積物は運搬され堆積される。また大陸氷河の消長によって海水準が変動し、相対的な隆起・沈降が起る。これらを学ぶ。	同　上
5	火成岩	地球表層の内部およびマントルの内部では固相の物質の一部がとけてマグマとなっている。マグマが冷却固結したものが火成岩である。火成岩には深成岩、火山岩およびその中間の岩石がある。また酸性岩、中性岩、塩基性岩、超塩基性岩の別がある。これらを学ぶ。	同　上
6	堆積岩	地表とくに海底に堆積した堆積物は、長年月の間に続成作用を受けて堆積岩になる。礫・砂・泥が固化した砕屑岩、生物源の生物岩、化学的に沈澱した化学的堆積岩、さらに火山源の火山性堆積岩がある。これらについて学ぶ。	同　上
7	変成岩	火成岩、堆積岩が地下深所である条件下での圧力・温度のもとにおかれると固相を保ったままで内部の原子配列が変化し、別種の岩石となることがある。これを変成岩という。変成岩もときに別種の変成岩となることがある。これらについて学ぶ。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対年代と絶対年代	地層中には化石が含まれることが多い。それらの中には生存期間の限られた示準化石がある。地質時代はまず主としてこれら示準化石によって区分された。これを相対年代という。一方、放射性同位体によって岩石の年代を測定して絶対年代が組まれた。これらを学ぶ。	奈須紀幸
9	地質調査と地質図	地球表層の岩石分布や構造は地質調査によって解明される。地質調査には、地表の調査、ボーリング調査、空中からの調査がある。こうした調査の結果は地質図にまとめられる。地質調査の方法および地質図の読み方も含めてこれらの事項を学ぶ。	同上
10	プレートの動態	地球の表層は数枚のプレートによっておおわれている。これらのプレートは相対的に運動しているものも多い。プレートは中央海嶺中軸部で新生し、潜没帯でひとつのプレートの端は潜没して地球内部へ沈んで消失する。こうしたプレートの動態について学ぶ。	同上
11	潜没帯	ひとつのプレートが隣り合う他のプレートの下へ潜没する場所では潜没帯が形成される。潜没帯では地形的には海渚が形成され、潜没面に沿って地震が多発する。また潜没面のある範囲でマグマが形成され易く、その部分は火山帯となる。これらについて学ぶ。	同上
12	古生物の進化	地球表層に生物が芽生えたのは海洋が形成されてからある期間を経た頃であった。先カンブリア代の終り頃から骨格をもつ生物が増加し化石として残るようになった。これら古生物は進化しつつ変化してきた。その変化のあり方について学ぶ。	同上
13	造山帯	隣り合う2つのプレートが押し合う場合、主として圧縮力がはたらいて、プレートの境界は近で変形が起る。これを造山運動という。造山運動に伴って山脈が形成されることも多い。造山運動のあり方についてはその考察に変化があった。これらの事項について学ぶ。	同上
14	地球表層の変遷	地球表層はその形成の初期から核になる部分を中心としてその周囲で造山運動をくり返しつつ伸張し大陸の部分が拡張してきた。一方、大陸は分裂・移動した痕跡も残している。このような地球表層の変遷のあり方について学ぶ。	同上
15	地下資源の利用	地球表層には金属資源や石油・石炭・天然ガス等の地下資源が賦存する。また地下水も資源のひとつと言える。これら地下資源の在り方とその利用について学ぶ。	同上

＝地球の科学Ⅱ＝（TV）

― 日 本 列 島 ―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

私達が生活の基盤をおく日本列島について、地球科学的な視点からその本質を追及する。日本列島は太平洋とアジア大陸の境に位置する弧状列島で、環太平洋変動帯の一部である。日本列島は典型的な変動帯で、火山帯、地震帯を伴い、地史的にも多くの変動を経験した。これらのことについて学ぶ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本列島の特徴	日本列島は本州を中心とし南北方向に長くのびた大小の島々よりなり、アジア大陸の東端に位置し、太平洋およびフィリピン海に面する。環太平洋変動帯の一部を占める。このような日本列島の特徴について学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	日本の地質	日本列島は幾つかのプレートが接し、せめぎ合う場所に位置する。そのため、地質は複雑である。そのような複雑な日本列島の岩石の分布の様相と地質構造の大勢について学ぶ。	同上
3	日本の気象	日本列島は南北方向に長く、気象の在り方も場所によって大きく変る。しかし、全般的には中緯度の偏西風帯に位置し、気象は西から東へと移ってゆく。高気圧、低気圧、前線はいずれも東進する。台風は別の経路をたどる。これらの事項や気候について学ぶ。	同上
4	日本をめぐる海	日本列島は周囲を海にめぐらされている。南方からは黒潮や対馬暖流が北上し、北方からは親潮が南下する。このような日本周辺の海流について学ぶ。また、海水の性質について学ぶ。さらに日本周辺の波浪、津波について学ぶ。	同上
5	日本列島とプレートの動き	日本列島は大局的には太平洋プレート、ユーラシアプレートおよびフィリピン海プレートが接する場所に位置する。アメリカプレートの西端も北海道東部までのびている可能性もある。これらのプレートの動態について学ぶ。	同上
6	日本周辺の海底	日本周辺には太平洋、フィリピン海、東シナ海、日本海、オホーツク海などの外洋、縁海が分布する。これらの海底にはさまざまな地形的特徴が見られ、また堆積物や基盤の岩石についても多くの知見が得られている。これらの事項について学ぶ。	同上
7	日本の地震	日本列島ではその周辺からはじまる潜没面が列島の下部に達している。そのため日本列島は地震帯に重なっている。これら地震帯で発生する地震の発生機構などを考究しつつ地震帯の特性について学ぶ。また地震予知の在り方についても学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の火山	太平洋底は日本海溝をへて東北日本の下へ、また伊豆・小笠原海溝をへてフィリピン海の下へ潜没する。フィリピン海底は西南日本の下へ潜没する。これに伴って日本列島には多くの火山が分布する。これら火山の諸々の特性について学ぶ。	奈須紀幸
9	日本の古生代・中生代	日本列島で発見された最古の化石は古生代オルドビス紀に属する。また最古の岩石は約20億年前のものである。そして日本列島の各地に古生代、中生代に属する岩石が分布する。一部には先カンブリア代と推定される岩石が分布する。これらのことについて学ぶ。	同上
10	日本の新生代	古第三紀の日本は比較的静穏な時期で浅海がひろがり主要炭田が胚胎した。新第三紀は変動の激しい時期でグリーンタフなどの形成をみた。第四紀には海水準の変動があり海岸線が前進・後退をくり返した。このような事項について学ぶ。	同上
11	日本の地下資源	日本列島はモザイクを集めたような複雑な地質構造を有する。そのため広大な面積を占める地下資源の分布は見られぬ。そのかわり、各種の金属資源、非金属資源がスポット的に分布する。とくに黒鉱は注目される。地下水資源も含めてこれらの事項について学ぶ。	同上
12	日本の海陸境界	日本列島は狭長な国土に対して長大な海岸線を有する。その海岸線には岩石海岸、砂浜海岸、内湾に面した干潟海岸の別がある。また、氷期、間氷期にともなう海水準の変動で海岸は前進、後退をくり返し、大陸棚を形成した。これらのことについて学ぶ。	同上
13	日本における地球科学の進展	日本が西欧の科学を全面的にとり入れ始めたのが百年余り前からである。地球科学の分野においてもそのことは同様であった。そしてこの一世紀余の間に日本列島に関する地球科学的研究も著るしい進展をみた。その経過について学ぶ。	同上
14	関東地方の地史	日本列島の中でも一例として関東地方をとり上げ、より詳細な地史を学ぶ。関東地方は日本列島の中でも最も広大な関東平野とそれをとり巻く山脈地帯、および伊豆、三浦、房総の半島によって形成される。そこで生起した地史的な経緯について学ぶ。	同上
15	日本列島と人間生活	私達は生活の基盤を日本列島においている。従って、日本列島の地学的特性と私達の日常生活とは、きわめて多くの点について深い結びつきがある。こうした関連性についていろいろの視点から学ぶ。	同上

＝大気と海洋＝（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球をおおう大気、および固体地球表面の７割をおおう海洋の本質を知るために、色々な専門分野にわたって学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	大気の構造	気温・湿度・気圧・風向・風速などは絶えず変化している。とりわけ、高さに伴う変化は大きく、例えば、数千kmの高低緯度間の気温差はわずか１０kmの高度差によって体験できる。地球規模でみた大気の平均構造の実態を把握し、以下の各章の理解に役立てる。	○浅井富雄（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸（放送大学教授）
2	大気の熱収支	大気運動のエネルギー源は太陽である。地球に降り注ぐ太陽放射エネルギーが大気中をどのように伝達され分配されたか、その道筋をたどり一方、地球も宇宙空間に向けて熱放射エネルギーを放出して、大気・地球系のエネルギーの収支が成り立っている。大気の熱平衡について考察する。	同上
3	雲と降水	水蒸気の凝結や昇華、水滴の凍結などによって微細な水滴や氷晶が空気中に形成される。それらの粒子は併合過程を経て、雲粒から雨滴へと成長する。雲や降水の形成にいたる微視的物理過程について述べ、さらに、雲と降水の巨視的動態にもふれる。	同上
4	対流と局地風 －大気運動その１－	４、５章では主に大気の運動を扱う。最初に地球大気の運動のしくみとその特徴を要約し、次に、中・小規模の運動として地表面付近に形成する対流混合層と水平の温度差によって生じる海陸風や山谷風をとりあげる。	○木村龍治（東大・海洋研・助教授） 奈須紀幸
5	低気圧と台風 －大気運動その２－	日々の天気は高・低気圧の動向に大きく支配されている。大規模な運動として、長大な前線を伴う温帯低気圧と巨大な渦巻きの熱帯低気圧（台風）に焦点を合わせ、それらの構造や発達のしくみについて記述し、さらに、これらの気象現象と大気大循環とのかかわり合いについてもふれる。	同上
6	気候の変動	地球上に大気が生成して以来、大気の状態は絶えず変動をくり返しながら今日にいたっている。気候変動のしくみについては不明な点が多いが、これまでの気候変動の実態とその原因、とりわけ海洋の果たしている役割について述べ、最後に人間活動の気候変動におよぼす影響についてふれる。	○浅井富雄 奈須紀幸
7	大気研究の歴史	日常身近かな天気の変化から地球規模の大気大循環にいたるまで、気象についての我々の知識や考え方がどのようにして養なわれ育ってきたかを、その発展の節目に重点をおいてふりかえり、併せて国際協力のもとで維持・展開されている世界の気象観測や予報の現状を示す。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	海洋探究の歴史	海洋の科学的探検の時代から現今の海洋実験の時代までにわたり、主として海洋と海底の構造と運動の面から探究の成果を概観し、海洋の科学へと誘うよすがとする。	○寺本俊彦（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
9	海洋大循環	海洋の物理現象の中でも特に顕著な海洋大循環について、その成因、構造について説明し、それらを更に深く理解する上で必須な課題である人工衛星からの観測や深層の循環の観測について述べ、関連する重要なトピックスである海洋－大気系の大規模変動や海洋温度差発電についてふれる。	同　上
10	波と潮汐	海洋では常に沖から岸に向って波が打ち寄せている。この波はどこで作られ、どのような性質があるのか、実験を行って説明する。特殊な波として、高潮と津波に触れる。次に潮汐のメカニズムと水理模型による瀬戸内海の潮流の研究について述べる。	○木村龍治 奈須紀幸
11	海洋の物質循環	生物の活動を通じて、いろいろな元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についてもふれる。	○服部明彦（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
12	海洋の生態系	海洋の生物は大小の部分生態系に分れ、200m以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年、内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向がみられる。	○堀越増興（元東京大学教授） 奈須紀幸
13	海底の生いたち	深海底は中央海嶺で生れ、横に数cm／年の速さで移動しながらしだいに深さを増してゆく。海底が生れる場所には多数の割れ目があり、熱水が噴出して重金属を析出させていたり、溶岩が露出している所もある。マリアナトラフなど島弧の背後（陸側）にも小規模ながら海底が生れつつある海域がある。	○小林和男（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
14	深海底の沈み込み	海溝は世界中で最も深い場所であるが、海洋のへりに細長く並んでいる。深海底はここから斜めに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震や地震の波の伝わり方から確認されている。海溝の地形や沈み込みのようすは地域によって異なっていて、地震の起こり方や火山活動の歴史にも関係をもっている。	同　上
15	大陸棚の生いたち	大陸の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外線の水深は、ほぼ120～140m程度である。このような海底地形が生じたのは氷期・間氷期の繰返しに対応した海水準変動が原因であることが判明した。その経緯について説明する。	奈須紀幸

＝現代資源論＝（R）

〔主任講師：山口梅太郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割りには、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	鉱物資源と文明	・道具の使用　・青銅器の発達　・鉄の時代 ・資源とその利用	山口　梅太郎 （東京大学教授）
2	成長の限界	・成長の限界　・石油20年説　・資源の価格と消費	同　上
3	資源の有限性について	・地殻中の元素　・再生不可能な資源	同　上
4	鉱床の分類と成因	・鉱床　・埋蔵(鉱)量と資源量　・鉱床の形成 ・鉱床の分類　・マグマ鉱成床　・堆積成鉱床	武内　寿久禰 （東京大学教授）
5	貴金属、非鉄金属資源	・金　・銀　・銅　・鉛・亜鉛	同　上
6	構造材用金属資源	・鉄　・マンガン　・アルミニウム　・チタン	同　上
7	鉄合金用金属資源	・錫・タングステン・モリブデン　・ニッケル ・クロム　・コバルト（Co）	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	先端技術に必要な鉱物資源	• 希土類（RE）　• 核融合発電　• リチウム（Li）　• ベリリウム（Be）　• ニオブ（Nb）　• シリコン（Si）	武　内　寿久禰
9	核燃料鉱物資源	• 原子力発電に必要な地下資源　• ウラン鉱床の形成　• ウラン資源の偏在と資源確保　• 放射性廃棄物の処分	同　　上
10	非金属鉱物資源	• 近代産業を支える非金属資源　• 石灰石　• ダイヤモンド　• リン鉱　• 蒸発岩　• 粘土鉱物　• 沸石　• 流黄	同　　上
11	エネルギーと文明	• はじめに　• エネルギー需要の推移と現状　• エネルギー需給の将来予測	冨　永　博　夫 （東京大学教授）
12	エネルギー資源	• はじめに　• 化石燃料資源　• 核燃料資源	同　　上
13	天　然　ガ　ス	• はじめに　• 天然ガスの探査、開発、生産　• LNGの生産と輸送　• LNGの用途　• LNGの冷熱の利用　• 天然ガスのメタノールへの変換利用	同　　上
14	石　　油	• はじめに　• 石油の鉱床　• 石油の探鉱　• 石油の開発と生産　• 石油の強制回収　• 海底石油の開発	同　　上
15	石　　炭	• はじめに　• 石炭の成因と分類　• 石炭の生産と供給　• 石油の利用技術の開発	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	オイルサンド	• はじめに　• オイルサンド資源の埋蔵量 • オイルサンド鉱床の特性　• 採収技術 • ビチュメンの精製	冨永博夫
17	オイルシェール	• はじめに　• オイルシェールの資源埋蔵量 • オイルシェールの性状　• 採掘と乾留の技術 • 精製プロセスと製品	同　上
18	わが国の鉱物資源とその確保	• 日本は資源のない国ではない　• 鉱物資源の輸入　• 資源確保の方策	山口梅太郎
19	鉱物の探査と評価	• 鉱床探査の必要性　• 山相学　• 地質調査 • 物理探査　• 地化学探査　• 試錐　• 数理地質学の応用　• 海外における探査	武内寿久禰
20	鉱山の開発　(I)	• 合理的な開発	山口梅太郎
21	鉱山の開発　(II)	• 坑内採掘　• 採鉱法　• 坑内環境の整備	同　上
22	鉱山の開発　(III)	• 特殊な方法による鉱物資源の採取　• 採掘作業のロボット化	同　上
23	鉱石の処理　(I) －処理のフロー－	• 鉱石の事前処理　• フルイ分けおよび分級	井上外志雄 （東京大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	鉱石の処理　(Ⅱ) －物理的分離の原理と方法	・比重選別　・静電選別　・磁力選別　・色彩選別	井　上　外志雄
25	鉱石の処理　(Ⅲ) －物理化学的分離の原理と方法	・浮遊選別	同　　上
26	鉱石の処理　(Ⅳ) －製　錬	・乾式製錬　・湿式製錬	同　　上
27	海から得られる鉱物資源	・溶存鉱物資源　・陸上から海底へ連続する鉱床　・海底の堆積鉱床　・深海底熱水鉱床	山　口　梅太郎
28	未利用資源とリサイクル	・未利用資源　・低品位資源の開発　・自然エネルギーの利用　・廃棄物利用　・リサイクル ・再資源化の問題　・再資源化の技術	井　上　外志雄
29	資源開発における情報処理	・探査情報の処理　・鉱山開発とＯＲ手法 ・原料の配合とプラントの自動制御	同　　上
30	資源開発と環境問題	・資源開発に伴う自然環境の破壊　・資源利用と環境保全との調和	山　口　梅太郎

＝ 応 用 数 学 ＝ （R）

〔主任講師：藤田　宏（明治大学教授）〕

全体のねらい

応用解析の視点から応用数学の基本的な発想法、概念および方法を解説する。素材はできるだけ平易なものに限り、また、証明主義にこだわらない納得による理解によって展開していく。情報化社会における応用数学は知性的であると共に大衆的でもあるべきであると考えるからである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	増殖の数理；指数関数の復習	最も初歩的な発展系である増殖の数理から導入し、基礎数学Ⅰおよび解析で復習の指数関数を見直す。1階常微分方程式の復習的解説をかねる。	藤田　宏（明治大学教授）
2	振動の数理；複素指数関数の復習	質点の振動の数理から導入し、複素変数の指数関数を見直す。線型常微分方程式の復習的解説をかねる。	同　上
3	質点の運動方程式	質点の運動の基本法則であるニュートンの運動方程式を材料として、ベクトル値関数の微分法および自励系（力学系）への導入を行なう。	同　上
4	関数空間との出合い	現代の応用解析の基盤である関数空間の最初の出合いとして、重ね合せの原理（線型計算）、ノルム、内積を扱う。	同　上
5	関数空間での収束	関数空間での収束の概念は理論上も実用上も応用解析の基礎である。イメージ的把握をねらいとして学ぶ。	同　上
6	弦の釣り合い；2点境界値問題	2階常微分方程式の境界値問題を解説する。グリーン関数を導入する。	同　上
7	超伝導の数理；フーリエ級数	フーリエの方法による1次元熱方程式の扱いを通じ、フーリエ級数の解説を行なう。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	弦の振動の数理	典型的な双曲型方程式である1次元波動方程式をフーリエ級数を応用して扱う。	藤田　宏
9	フーリエ級数からフーリエ変換へ	フーリエ級数から移行する立場でフーリエ変換の考察に入る。後者の種々な応用についても触れたい。	同上
10	変分法との出合い	最大最小問題の延長上にある変分法の基礎概念を解説する。	同上
11	変分法の応用	変分原理に基づく近似解法（有限要素法を含む）や最適化などの話題を扱う。	同上
12	超関数との出合い	応用解析の立場からδ関数の理解を中心として超関数の解法を行なう。	同上
13	超関数の応用	偏微分方程式の扱いにおける超関数の役割りを解説する。	同上
14	非線型問題1（自励系の安定性）	非線型常微分方程式系である自励系の解の挙動、とくに安定性について解説する。	同上
15	非線型問題2（解の爆発）	非線型偏微分方程式が支配する驚くべき現象の一つとして、半複型放物型方程式の解の爆発を紹介する。	同上

＝ベクトル解析＝（R）

〔主任講師：小島守生（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

微分・積分学および線型代数学に引続いて、ベクトル関数の解析学、すなわち、ベクトル場の微分、積分法とその応用を学ぶ。ベクトル解析は力学の一部と考えられるくらい物理学とのかかわりが深いが本講では、ガウスの発散定理とストークスの定理とストークスの定理を目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ベクトル	ベクトルの定義を与え、線型代数学の簡単な復習をする。	小島守生（慶応義塾大学教授）
2	スカラー積（内積）	ベクトルの内積を用いて、ベクトルの計量的性質を調べる。	同上
3	ベクトル積（外積）	3次元内積空間に特有の、ベクトルの外積、またはベクトル積を定義する。	同上
4	ベクトルの微分	ベクトル値関数の微分法を学ぶ。1変数だけでなく、多変数の場合も同時に取扱う。	同上
5	空間曲線	ベクトル解析の応用として、空間曲線に関する基本的事項を考える。弧長、接線、曲率、捩率等の関係を記述するフルネの公式を求める。	同上
6	スカラー場の勾配	空間に点の関数 ― スカラー場 ― が与えられたとき、その変化率を調べる。そのためにスカラー場の方向微分係数、勾配を考える。	同上
7	座標変換とベクトルの成分	直交座標系を別の直交座標系に変換する際のベクトルの成分の変換法則を求める。直交変換、直交行列の復習でもある。そしてこれはつぎの章で定義するベクトル場の発散、回転の座標変換での不変性の準備でもある。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ベクトル場の発散と回転	ベクトル場の発散、回転を定義し、勾配との関係等も考える。	小島守生
9	線　積　分	前章までは微分を考えるだけであったが、本章から積分に入る。線積分は定積分の自然な一般化である。曲線に沿って定義された関数を積分することを考える。	同　上
10	2重積分と線積分	平面内の有界閉領域上での2重積分と、領域の境界曲線上の線積分に関するグリーンの定理を証明する。普通の定積分が原始関数の境界での値の差に等しいことの一般化である。	同　上
11	曲　面	空間内の曲面を位置ベクトルで表示し、接平面や、曲面上の曲線の弧長、曲面分の面積等を考慮する。	同　上
12	面　積　分	曲面の部分上で関数を積分する。これは2重積分の概念の一般化である。曲面の向きが問題になる。	同　上
13	ガウスの発散定理	ベクトル場が　間内の有界閉領域のまわりで与えられたとき、ベクトル場の発散量の領域内での積分と、境界曲面上でのベクトル場の法線成分の積分が等しくなるというガウスの発散定理を証明する。平面上のグリーンの定理の一般化である。	同　上
14	ストークスの定理	平面上のグリーンの定理を曲面上の対応する定理 － ストークスの定理 － に拡張する。	同　上
15	積分路に無関係な線　積　分	線積分は一般には積分路に関係するが、それが関係しない特別な場合を考察する。	同　上

＝数学基礎論＝（R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学基礎論という研究分野の起こりを簡単に説明したあと、公理的集合論、ゲーテルの不完全性定理、無矛盾性証明、などを話題の中心にして、数学基礎論の概要について解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数学における集合論的方法	数学における集合論的方法の必要性と、集合論のパラドックスとを説明し、数学基礎論の発端について述べる。	前原昭二（放送大学教授）
2	集合論の公理	集合論のパラドックスの一応の解決策としての公理的集合論を、記号論理の方法を用いずに説明する。	同上
3	数学的命題の形式化	公理的集合論の論理式を例にとり、論理式の概念を説明する。	同上
4	数学的推論の形式化	述語論理の推論を、自然な論理計算の形で説明する。	同上
5	数学的証明の形式化	命題論理や述語論理、ならびに集合論における基本的な性質のいくつかの証明を与える。	同上
6	ゲーデル数	ゲーデル数について説明する。	同上
7	不完全性定理	ゲーデルの不完全性定理と、それから得られる無矛盾性に関する結果について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自然数論の形式化	ゼクェンツの形式を用い、1階の自然数論の形式化を与える。	前原昭二
9	自然数論に対する無矛盾性証明の必要性	有限の立場における考え方を説明し、自然数論の無矛盾性証明の必要性についてのゲンツェンの見解を紹介する。	同上
10	自然数論の無矛盾性証明のアイディア	自然数論に対するゲンツェンの無矛盾性証明の、初期のアイディアについて述べる。	同上
11	直観論理	直観論理の基本的な立場を説明し、その基本的な論理法則についてのべる。	竹内外史（イリノイ大学教授）
12	ファジー論理	ファジーの概念を説明し、直観論理の特殊な場合としてファジー論理をとらえ、その論理体系についてのべる。	同上
13	計算論	計算可能な関数の論理を概説する。又種々の分野との関係について言及する。	同上
14	集計論の課題	現代集合論の課題並びに成果について解説する。更に将来の展望を行う。	同上
15	基礎論の将来	現在の基礎論の種々の方向について解説する更に情報科学との接近などについて言及する。	同上

＝計量生物学・行動計量学＝　(TV)

〔主任講師：林知己夫（放送大学教授）
　　水野欽司（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

統計学の体系化に二つの行き方がある。本学では方法論的立場から講義の体系を組み立てきた。今回は、もう一つの行き方、対象今野を区分けし、それぞれの分野での生きた統計的方法論という立場からフィールドと理論と一体化した講義を組み立てる。生物学、医学・生態学の分野における計量生物学と行動医学の分野における行動計量学についての講義を行う。履修には、微分積分学　総型代転学、確率論、統計学の基礎知識を必要とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	医学・生物統計学 —1— 実験計画法	生物等のバラツキが不可避な対象に対して、その存在を認めた上で客観的なデータを得るための実験技術が実験計画法である実験計画法が創始された農事試験から初め、臨床試験や動物実験に実験計画法がどのように用いられているか、その基礎概念の解説と共に概観する。	大橋靖雄 （東京大学助教授）
2	医学・生物統計学 —2— 安全性試験（毒性）	マウスやラットなどの小動物、培養細胞、細菌などを用い、化学物質の安全性を評価するための膨大な実験研究が行なわれている。莫大なデータとスケジュール管理に用いられているコンピュータシステムの紹介を含め、実験の品質管理とヒストリカル・コントロールの利用（データベースの構築）、統計解析の問題（dose-response や多重性）、新しい実験系の評価の問題等について概説する。	同上
3	医学・生物統計学 —3— 臨床試験	患者を対象とした臨床試験のうちとくに第3相を取り上げ、患者の割り付け、データ収集と管理、解析という一連の研究過程を追う。臨床試験の登録やメタアナリシス、統計解析（生存時間解析など）、コンピュータネットワークの利用などの話題にも触れる。	同上
4	医学・生物統計学 —4— 疫学的研究	疫学的研究の例として、放射線影響研究所で最近行われた受動喫煙と肺　の関連の研究を紹介する。利用したデータの紹介に絡め、同研究所の設立からこれまでの貢献にも簡単に触れる。疫学的研究方法とくにケースコントロール研究の意義と限界にも言及する。	同上
5	計量生物学 —5— 計量医学 その1 健康予測	外的基準のない多変量解析のうち最も代表的な主成分分析を解説する。さらに応用として、ヒトの心機能に関する生体情報を利用して、心機能評価の方法の一例を具体的に説明する。更に、薬剤等病気の治療後の計量的機能改善評価の表現応用も説明する。	駒澤勉 （統計数理研究所教授）
6	計量生物学 —6— 計量医学 その2 健康予測	外的基準のない数量化理論第Ⅲ類（パターン分類）の質的データ分析を解説する。さらに応用事例に動脈硬化性疾患の早期発見のための集団健康検診の全国的規模の大量データを利用して、健康の計量的予測法について説明する。	同上
7	行動計量学 —1— 順序づけと分類	ソシオメトリーにおける人間関係の図式化、自由連想実験による被験者の分類、嗜好検査や官能検査にもとづく人とものの分類等からいくつか具体的なデータを取り上げて、順序づけと分類のために統計的方法（クラスター分析、多次元尺度解析、数量化3千類、主成分分析、因子分析等）をどのように利用し、その結果をどのように解釈するか具体的に示す。	岩坪秀一 （大学入試センター助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	行動計量学 —2— 予測と判別	テレビ番組の視聴率の予測、スポーツにおける過去の記録をもとにした勝負の結果の予測、文体からみた本物と偽物との判別、パターン認識における自動識別等の分野からいくつかの具体的なデータを取り上げて、それらに対して予測と判別のための統計的手法（重回帰分析、数量化1類、判別分析、数量化2類等）をいかに適用し、結果の信頼性をどのように評価するか具体的に説明する。	岩坪秀一
9	行動計量学 —3— 社会調査の実際	一般市民の意識、態度、価値観などを調べる際に必要な統計的方法の応用を紹介する。実例として、昭和28年から5年置きに継続8回行って来た日本人の国民性調査を取り上げ、標本抽出（サンプリング）を始めとする調査法の実際、および分析の進め方などを、わかり易く講述する。	水野欽司（統計数理研究所教授）
10	行動計量学 —4— 実験設計の特色	行動科学的な“実験”は、理工学の実験とは種々の面で異なる配慮を必要とする。ここでは、その実験法の統計的特徴について紹介する。例示として、地震防災教育において、どういう教材・訓練が子どもたちに“よい効果”を与えるか、などの実験結果を具体的に検討し、この種の実験の重要な諸問題を述べる。	同上
11	計量生物学 —7— 森林の生態 その1 森林成長の要因	森林は地形・地質・土壌・気候・樹種などによる自然環境とその森林の育成にかかわる住民の意識・利用目的・造林技術などの人為的環境によってさまざまな形態をしめす。その様子を日・独・仏・フィンランドの森林の比較によって説明する。	石田正次（帝京技術科学大学教授）
12	計量生物学 —8— 森林の生態 その2 森林成長モデル	森林が自然及び人為的ないろいろの条件のもとに成長していく過程を統計的に解析してこれをモデル化し、コンピューターシミュレーションによって条件の変化が林相に及ぼす影響を検討しながら森林の将来予測と保全についての考察を行う。	同上
13	計量生物学 —9— 動物生態学その1 野生動物の生息数推定	野生動物の生息数を知るための統計学でよく知られている捕獲—再捕獲法について解説する。さらに、積雪上の足跡を利用して、ノウサギの生息数を推定する方法を具体的に説明する。これには生態学・統計学・コンピュータの学際的研究の不可欠のことを示す。	林知己夫（放送大学教授）
14	計量生物学 —10— 動物生態学その2 野生動物の生息数推定	積雪上の足跡を利用する仕物り法（少面積地区において有効）、ヘリコプターによるビュツフォン　の原理を基礎におく方法（大面積地区において有効）について具体的に説明する。ヘリコプター法は、ノウサギのほか、キタキツネ、カモシカへの応用も可能で、その方法を解説する。	同上
15	計量生物学 —11— 動物生態学その3 野生動物の生息数推定	に推定する被害法あるいは投入・除去法と言われる事について説明する。カモシカについてこの方法とヘリコプターによる方法との併用について具体的に説明する。最後に動物の生態に適した諸統計的方法についてまとめ、野生動物生息管理の問題に言及する。	同上

＝ 物質とエネルギー ＝（R）

〔主任講師：池上雄作（東北大学教授）〕

全体のねらい

自然界を形づくっている物質エネルギーの科学でもっとも基本的なことがらを学習する。とくに化学熱力学、量子化学、分子分光の基本的な事項を解説し、物質とエネルギーの不可分のかかわり合いを学ぶことによって自然への理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	エネルギーの形態	広い視野から“仕事をする能力”としてのエネルギーのいろいろな姿をとらえたあと、物質とエネルギーのかかわり合いを述べ、エネルギー略史を概説する。	池上雄作（東北大学教授）
2	物質の構成	多様な物質の分類や構成をどう理解するかについて、基礎化学の中から分子、原子、イオンなどの粒子概念を簡潔にまとめる。つづいて、「結合とエネルギー」,「物質変化とエネルギー」について解説して、次回以降のための基礎概念をつくる。	同上
3	熱と仕事：内部エネルギーと熱力学第一法則	第3～7回では化学熱力学の基本を取り上げる。本章では力学的エネルギーから入り、仕事、系の考え方、内部エネルギー、熱力学第一法則、そして理想気体の膨張を例に可逆過程と不可逆過程を順次解説する。	王蟲伶太（福島大学教授）
4	熱容量とエンタルピー	熱容量とエンタルピーの概念を導入し、物質の状態変化や化学変化に伴う熱エネルギーの移動、熱量加算の法則、標準エンタルピー変化を順次解説する。	同上
5	エンタルピー値と物質構造	前回の後を受けて内部エネルギー変化とエンタルピー変化の測定法を述べ、実際の物質構造や化学結合とエンタルピー値がどのように結びついているかを平易に解説する。	同上
6	物質変化の方向：エントロピーと熱力学第二法則	自然に起こる変化には主としてエネルギー変化で理解できるものとそうでないものとがある。自発変化を取り上げて乱れの関数の必要性を説明し、エントロピーの概念を導く。そして熱力学第二、第三法則に入る。	同上
7	自由エネルギーと化学平衡	エネルギーとエントロピーからギブス自由エネルギーを導き、化学ポテンシャルまで解説する。つづいて、二、三の化学反応系での反応の進行の可能性を予測するための熱力学量を取り上げ、平衡条件を導く。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	エネルギー量子の概念	以下4回にわたってミクロの世界のエネルギーと化学構造との結びつきを解説する第1回目は、プランクの量子仮説、光量子説、ボーアの原子模型、光と電子の粒子性と波動性について順次説明し、エネルギー量子の概念を理解する。	米沢　貞次郎 （近畿大学教授）
9	原子の電子状態	“とびとびのエネルギー値”をもつ電子の運動状態を表す波動方程式について述べ、これから明らかにされた水素型原子の電子状態の特徴つづいて複雑な原子の電子配置を整理して解説する。	同　上
10	化学結合と電子状態	化学結合の基本例である水素分子の量子論的な取り扱いと炭素の混成軌道について解説する。つづいてエチレンや共役二重結合をもつ分子のπ電子の分子軌道法による取り扱い方を取り上げる。	同　上
11	電子構造と反応性	分子の電子構造に対する量子論的取り扱いは、構造を理解するのに必要であるだけでなく、反応の進み方を解釈するのに極めて有用であり、フロンティア電子理論もその一つである。電子構造と化学反応性について例とともに解説する。	同　上
12	電磁波とスペクトロスコピー	光と電波で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで広い周波数範囲にわたり、$E = h\nu$のエネルギーをもつ。電磁波の性質について、つづいて物質の発光や光の吸収が物質のエネルギー準位と密接な関係があることを説明し、スペクトロコピーを概説する。	池上　雄作
13	吸収スペクトルと分子構造	多くの物質は紫外、可視、赤外光を吸収してその物質に特有なスペクトルを見せる。紫外・可視吸収スペクトルと赤外吸収スペクトルに分けて、化学構造と対応させて解説する。	同　上
14	核磁気共鳴と電子スピン共鳴	近年NMRとESRスペクトルが広く利用されるようになった。磁場中に置かれた磁性核と不対電子のそれぞれラジオ波とマイクロ波の共鳴吸収を、その基礎概念とスペクトルの実例について解説する。	同　上
15	まとめ： 物質変化とエネルギー変化	本講のまとめとして、化学反応と活性化エネルギー、生体とエネルギー等について補足し、最後に物質変化に伴うエネルギー変化の大きさを概観した。	同　上

＝ 力とエネルギー ＝（TV）

〔主任講師：戸田盛和（東京教育大学名誉教授）〕

全体のねらい

物理学を学ぶには、まず力学を勉強し、ついで電磁気学へ進むのがふつうである。この「力とエネルギー」は力学にあてられる。ニュートンの運動の法則にもとづいて、物体粒子の運動、流体の運動を考え、分子の力学的運動を考慮して熱現象を扱う。回転運動、電子の運動なども取扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	運動の法則	摩擦のない等速運動。慣性。重心の等速運動。慣性。質量。力。運動の法則。（予定の項目を記す。以下同様）。	戸田盛和（東京教育大学名誉教授）
2	微分積分	1直線上の運動。速さと距離の関係。ベクトル、速度と加速度。運動方程式。解析力学。	同上
3	振動	単振動。三角関数sim，cos の説明。固有振動、共鳴、共振。減衰振動。	同上
4	惑星の運動	ケプラーの法則、万有引力と運動の法則による月および惑星の運動の解明。	同上
5	仕事とエネルギー	仕事、エネルギーの定義、単位。ベクトルのスカラー積。位置エネルギー。運動エネルギー。回転のエネルギー。エネルギー係存の法則。	同上
6	熱とエネルギー	熱量の定義、単位。熱の仕事当量。分子。気体、液体、固体における分子の運動。気体分子運動論。	同上
7	熱力学	熱力学の法則。統計力学の基本的な考え方（等重率の原理）。ボルツマン因子。温度。圧力。エントロピー。秩序とエントロピー。相変化。低温物理学。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	力の釣り合い	ここの原理。静止流体。アルキメデスの原理（浮力）。パスカルの原理（圧力、応力）。三力の釣り合い。懸垂線。	戸田盛和
9	流体力学	連続の方程式。ベルヌーイの式。流体力学の運動方程式。渦なしの流れ。渦。粘性のある流体。境界層。揚力。乱流	同上
10	波動	波動方程式。その解。重ね合わせの原理（線形、フーリエ級数）。ホイヘンスの原理、水面波。格子波。非線形波。	同上
11	地球の自転	動く座標系。遠心力。コリオリカ。フーコー振子と地球の自転。台風の渦。	同上
12	コマの運動	回転体。角運動量。慣性モーメント。回転エネルギー。剛体の自由回転。対称コマ。コマの歳差運動。	同上
13	荷電粒子の運動	電場の中の運動。磁場の中の運動。ローレンツカ。電子の運動。電流と磁場との関係。イオンの運動。質量分析器。	同上
14	高速粒子の運動	相対論的力学。速度による質量の変化。加速器。高エネルギー物理学。	同上
15	最近の話題	非線的力学。カオス。力学系の理論。その他、力学とエネルギーとに関する最近の研究について述べる。	同上

＝ 生 態 学 概 論 ＝ （R）

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体 － 個体群 － 群集の各レベルにおける無機的環境、生物と生物との関わり合いを具体的事例をあげて説明し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて生態学の基本的原理と概念を理解させる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生態学とは － 序 論 －	生態学とは何か。この講義の導入部として、生態学の対象、方法、生物と環境との関係、生態系概念などについて述べる。	岩 城 英 夫 （筑波大学教授）
2	陸の環境、海の環境	生物は海で発生し、やがて陸に進出した。生物の生存の場としての陸地と水界の環境の特徴を比較し、様々な生物がその生育地の環境に適応するために、どのような形態と機能を発達させたかについて述べる。	同 上
3	生 物 と 土 壌	陸地の生物の生存は土壌に依存している。土壌は植物に必要な水分と栄養塩類を供給すること、また植物や土壌生物の存在は土壌の形成に大きな役割を果していることなどについて説明する。	同 上
4	気候と植生の分布	気候（温度と降水）条件の変化に応じて地球上には様々なタイプの植物群系が分布している。また局地的な環境の違いによっても生物の分布は変化することを述べる。過去の気候変化に伴う植生の変遷についても触れる。	同 上
5	個体群の 成長と調節	生物の集団（個体群）の個体数は有限の環境においては無限に増加することは不可能であり、いつかは過密状態に達する。このような状況下での生物の対応の仕方についてまず理論的に述べ、ついで実例（主に動物）を見ながら論じる。	藤 井 宏 一 （筑波大学教授）
6	種間競争と “すみわけ”	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か。その機構についてまず理論的に取り扱い、ついで観察例を用いて説明する。また種間競争の結果として起こる“すみわけ”についても論じる。	同 上
7	植物間相互作用	植物の種内競争と種間競争の仕組みについて述べる。まず同種の植物間で起こる競争密度効果と自然間引きについて述べ、次に異種の植物間の競争の機構について説明する。	岩 城 英 夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	捕食関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）の動態に関する理論について述べ、次に実例を用いて自然界での捕食関係のはたす役割、特に生物群集の安定性への捕食関係の役割について論じる。	藤井宏一
9	植物の繁殖戦略	植物には様々な生活形があり、それぞれ特徴的な成長・繁殖様式をもっている。異なった環境下でこれらの生活様式がどのような生態的意義をもつかについて説明する。	岩城英夫
10	動物の生存戦略	動物の種（そして個体）はより多くの子孫を残すために、限られたエネルギーをいかにうまく利用し、その目的を達成するか。理論で予想されること、実際に動物がやっていることを対比し、生物の進化を絡めて論じる。	藤井宏一
11	物質生産	生態系のエネルギーの流れにおいて植物（生産者）がはたしている役割を論じ、植物群落の生産構造と光合成の関係、各種生態系の一次生産量と環境要因との関係などについて説明する。	岩城英夫
12	食物連鎖とエネルギーの流れ	生物群集における食物連鎖と栄養段階から見た群集構造、食物連鎖を通じてのエネルギーの流れとその効率、生食連鎖と腐食連鎖などについて基本的な法則性と実例を説明する。	同上
13	物質循環	生物体を構成する元素は生物と環境の間を繰り返し循環して使われる。地球的規模で循環する炭素、窒素、水の動きと、生態系内および生態系間での栄養塩類の循環について説明する。	同上
14	遷移と生態系の発達	植物群落の種組成や構造が時間と共に変化発達する遷移の系列と遷移の最終段階である極相について具体例をあげて述べ、次いで遷移の機構、遷移の進行に伴う生態系の特性の変化について説明する。	同上
15	人間活動と生態系	自然の生態系は人間活動によって改変され、農業生態系や都市生態系がつくられる。人間活動に伴う生態系の変化について具体的に説明し、自然と人間活動の調和について論じる。	同上

＝ 脳と行動 ＝ （TV）

〔主任講師：伊藤正男（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

脳は心の座であり、その構造と働きについて正確な知識をもつことは、人間を理解する上に重要である。この講義においては神経細胞の性質や脳の解剖的構造の基礎知識に始まり、感覚、運動、感情、記憶、意識などの脳の基本的な働きの仕組みを解説する。近代的な脳の研究の現状についての理解を深めるよう努める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	脳の構造と機能	脳とは何か。どのように進化し、発達してきたものであろうか。その精妙な働きは如何にして生まれるのであろうか。現在、脳はどのような方法により研究されているのか。また、脳の研究の進歩は我々に何を教え、何をもたらすのであろうか。	伊藤正男（東京大学名誉教授）
2	ニューロン	燃は膨大な数のニューロンの集合体で、脳の各部には精緻な構造をもつ神経回路網がある。ニューロンは電気信号を発生しこれを伝え合う。ニューロン同士の継ぎ目では特殊な化学伝達物質が分泌されて信号を仲介する。この継ぎ目の作用には興奮と抑制とがある。	同上
3	反射	脊椎動物の脳には一定の構造がある。脊髄、橋、小脳、中脳、間脳、大脳と呼ばれる各区分はそれぞれ特徴のある構造を持ち、脳の働きの上で異なる役割を演じている。このような脳の階層構造と、内部の機能局在について概説する。	同上
4	姿勢と歩行の中枢	脳の働きの最も底辺にあるのが反射である。幾つかのニューロンがつながって反射　を作り信用を伝える。我々の体には沢山の反射が備わっている。脳にはこれら沢山の反射をうまく組み合わせて目的に合った働きをさせる統合機能が備わっている。	同上
5	小脳	反射よりは複雑あるが、やはり自動的に機能する運動反応として、姿勢、歩行、並びに目のサッケード運動のメカニズムを考察する。これらの運動反応の中枢は延髄から間脳にかけて存在し、その神経回路網構造は反射路に比べてずっと複雑である。	同上
6	大脳基底核	小脳は体の制御系を助けて制御を正確に円滑に行うようにする働きがある。運動の練習は小脳の働きによるものである。この働きを担う小脳の神経回路網は美麗な多層構造をもち、如何にも計算機に似た機能原理によって働いている。	同上
7	視床	大脳の深部にある神経細胞のいくつかの塊の集合体である。この核は運動の自動制御の中枢であり、これが病気で侵されると色々な特徴的な不随意運動が起こってくる。大脳基底核の神経回路網構造とその機能原理について考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	視床下部	感覚系のうち視覚系についてその情報処理の仕組みを調べる。網膜で受けた視覚刺激の情報は大脳の幾つもの領域を次々と転送されながら処理されていく。距離や動きの空間情報と、見たものの形のパタン情報はそれぞれ別々の経路を通って処理される。	伊藤正男
9	大脳辺紡系	我々は心のままに運動をすることが出来るがその仕組みは大脳の皮質にある。大脳の運動野、運動前野、補足運動野の三つの領域が連合して随意運動の指令信号を作りだし、これを脊髄におくり出す。随意運動のプログラムが作られる過程について考える。	同上
10	睡眠と覚醒	我々の感情の根底にあるのは生物学的な価値判断機構である。この価値判断機構は視床下部にあり、大脳辺縁系に助けられて働くものと思われる。視床下部の刺激により動物に怒り、不安、恐れなどの不快情動を起こすことが出来る。	同上
11	大脳と感覚	摂食行動、飲水行動、性行動、攻撃行動、探索行動などの本能行動は情動と密接な関係があり、視床下部と大脳辺縁系の働きにより起こる。本能行動がどのように視床下部あるいはその近くにプログラムされているのかなど本能行動の脳内メカニズムを考える。	同上
12	大脳と運動	乳類の生活の２４時間周期は視床下部の一部で作られる。通常の睡眠はノンレム睡眠と呼ばれるが、時々レム睡眠と呼ばれる型に変わり、この時に夢をみる。こういうリズム活動を作り出す脳内の機構と、その生物学的な意味を考える。	同上
13	記憶と学習	脳の記憶装置は活動により性質の変わる可塑性シナプスである。これらのシナプスが神経回路網に組み込まれて脳の学習機能が生まれる。体で覚える運動学習は小脳の、頭で覚える認知学習は大脳の神経回路網の働きによるものである。	同上
14	大脳連合野	大脳の運動野と感覚野の間をしめる連合野は動物の進化とともに発達し、人間では大脳皮質面積の三分の二を占める。ここに言語野が生まれ、高次の思考機能が生まれた。左右の大脳半球の機能が分化し、通常左半球が言語機能を、右半球が非言語機能を担う。	同上
15	脳と行動	脳の構造と機能の相関について考察してきたが、最後に心の問題を論ずる。脳が心の座であり、脳の進化の過程で人の心が創発したことは疑いないが、脳の神経回路網とその連合して作る大きな神経システムの働きとして心は最終的に理解されるであろうか。	同上

＝ 宇宙の構造と進化 ＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学副学長）〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙と3の天体について、3の特徴や構造、また誕生や進化について、できるだけ具体的に理解を深める。専門部野の講師により、それぞれの分野の基礎とともに、最前線の研究にもふれる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙と宇宙論	1. 宇宙と宇宙論 2. 宇宙の構造と進化について 3. 内容の展開と学習のし方について	小尾信彌 （放送大学副学長）
2	宇宙探求の歴史Ⅰ	1. 宇宙論とは 2.『閉じた有限宇宙』からの脱却 3. 開かれた無限宇宙 （予定内容）	佐藤文隆 （京都大学教授）
3	宇宙探求の歴史Ⅱ	1. 宇宙のモデル 2. 星の進化と元素の起源 3. 新しい観測手段 4. 進化する天体と宇宙 5. ビッグバンの発見 6. 宇宙と人間　（予定内容）	同上
4	宇宙の現状Ⅰ	1. 宇宙の階層構造 2. 光と電波（電磁放射） 3. 天体の放射とその観測 4. 光が伝える天体の情報	小尾信彌
5	宇宙の現状Ⅱ	1. 原子のエネルギー状態 2. 原子のスペクトル 3. スペクトル線の幅 4. 天体の連続スペクトル ― 熱放射など	同上
6	光学天文台Ⅰ	1. 望遠鏡 2. 位置観測 3. 撮像観測 4. 測光観測	小平桂一 （国立天文台教授）
7	光学天文台Ⅱ	1. 分光器 2. 低分散分光観測 3. 高分散分光観測 4. 干渉計観測	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	相対論的宇宙論Ⅰ	1. 運動の相対性 2. 光の特殊性 3. 特殊相対性 4. ローレンツ変換 5. 特性相対論の実験的裏付け	江里口　良　治 （東京大学助教授）
9	相対論的宇宙論Ⅱ	1. 加速度運動と慣性力 2. 一般相対性原理と等価原理 3. 重力理論としての一般相対論 4. 一般相対論の検証	同　　上
10	相対論的宇宙論Ⅲ	1. ニュートン的宇宙論 2. 宇宙原理 3. 膨張宇宙 4. 宇宙の地平線 5. 膨張宇宙の密度と温度	同　　上
11	相対論的宇宙論Ⅳ	1. 重力の強さと時空の歪み 2. シュワルツシルド時空中の運動 3. 事象の地平面とブラックホール 4. ブラックホールの候補 5. ブラックホールの蒸発	同　　上
12	初期の宇宙進化Ⅰ	1. ビッグバン宇宙の誕生 2. ＧＵＴの時期 3. インフレーション宇宙	池　内　　了 （国立天文台 助教授）
13	初期の宇宙進化Ⅱ	1. ビッグバン宇宙確立史 2. 宇宙の初めの1,000秒の出来事 3. 宇宙黒体輻射	同　　上
14	初期の宇宙進化Ⅲ	1. 宇宙の大規模構造 2. 銀河形成の２つのシナリオ 3. おわりに	同　　上
15	電波天文学Ⅰ	1. 電波と光 2.電電波望遠鏡 3. 野辺山の４５ｍ電波望遠鏡 4. 野辺山の五素子電波干渉計 5. まとめ	海　部　宣　男 （国立天文台 助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	電波天文学 Ⅱ	1. 宇宙における電波の発生 2. 星間分子雲からの星の誕生 3. 銀河中心核と宇宙ジェット	海部宣男 （国立天文台 助教授）
17	恒星の誕生	1. 恒星進化論 2. 星間ガス雲 3. 恒星誕生のダイナミックス 4. 星間座と星間分子 5. 星の誕生の現場 6. 主系列星への収縮	杉本大一郎 （東京大学教授）
18	恒星のエネルギー源と主系列星の寿命	1. 恒星のエネルギー源は何か 2. 原子核融合のエネルギー 3. 恒星の内部構造 4. HR図と主系列 5. 主系列の星の寿命	同上
19	巨星への進化と死	1. 巨星への進化 2. 3の後の進化と原子核反応 3. 恒星の死	同上
20	星の進化論の意義	1. 極限状態の物理 2. 物理世界の歴史 3. 恒星はなぜ進化する	同上
21	恒星進化の残骸 Ⅰ	1. 観測されている超新星 2. 大質量星が爆発するタイプ2の超新星 3. 白色矮星が爆発するタイプ1の超新星	野本憲一 （東京大学助教授）
22	恒星進化の残骸 Ⅱ	1. 超新星の残骸 2. 中性子星 3. ブラックホール	同上
23	大気の外から見る宇宙 — X線天文学	1. 大気の壁　2. X線の空 3. X線星の正体 4. つぶれた星 — 中性子星とブラックホール 5. X線パルサーとX線バースト 6. 人工衛星『はくちょう』と『でんま』 7. かに星雲　8. 銀河系外のX線源	小田稔 （理化学研究所 理事長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	銀河の進化と元素 I	1. 銀河進化の基本的物理過程 2. 星間物質の物理状態 3. 分子雲からの星生成 4. 巨大バブルの形成	池内　了
25	銀河の進化と元素 II	1. 星生成の基本データ 2. 星の進化データ 3. 放出されたガスの混合過程 4. 銀河の進化と重元素 5. おわりに	同上
26	太陽系の構造と起源 I	1. 太陽系の構造 2. これまでの太陽系起源論	中澤　清 （東京工業大学教授）
27	太陽系の構造と起源 II	1. 惑星の形式過程 2. 木星型惑星の形成 3. 地球の形成と進化 4. 太陽系内小天体の起源	同上
28	生命のはじまりと惑星の進化	1. 生命と物質 2. 生命の起源 3. パンスペルミア 4. 生命の歴史 5. 生命構成物質の合成 6. 惑星環境と生命	大島泰郎 （東京工業大学教授）
29	地球外生命を探る	1. 太陽系に生命を探る 2. 太陽系外の生命 3. 銀河系内における文明社会 4. 地球外文明探査 5. 地球外文明への送信	同上
30	これからの宇宙論	1. これからの宇宙論 2. 全体のまとめ	小尾信彌 杉本大一郎

＝ 大 気 と 海 洋 ＝（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球表面の約３割は陸地で占められ約７割は海洋でおおわれている。さらに陸地と海洋の上を大気の層が厚くおおっている。これら大気と海料に関する本質の解明は近年大きな進展をみた。それらの内容について、いろいろの専門の角度から学ぶ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	大気の構造	気圧・気温・湿度・風向・風速などは絶えず変化している。とりわけ、高さにともなう変化は大きく、例えば数千kmの高低緯度間の気温差は僅か１０kmの高度差によって体験できる。地球規模でみた大気の平均構造の実態を把握し、以下の数章の理解に役立てる。	○浅井富雄（東京大学教授）
2	大気の熱収支	大気運動エネルギー源は太陽である。地球に降り注ぐ太陽放射エネルギーが大気中を伝達される道筋をたどる。一方、地球も宇宙空間に向けて熱エネルギーを放出して、大気・地球系のエネルギーの収支が成り立っている。大気の熱平衡について考察する。	同上
3	雲と降水	水蒸気の凝結や昇華、水滴の凍結などによって微細な水滴や氷晶が空気中に形成される。それらの粒子は併合過程を経て、雲粒から水滴へと成長する。雲や降水の形成にいたる微視的物理過程について述べ、さらに、雲と降水の巨視的動態にも触れる。	同上
4	大気の運動	大気は地球とともに自転しているが、地球上から見ると、地表面に相対的な運動（風）が存在する。その仕組について考える。気圧傾度力を生み出す原因、気圧と風の関係、コリオリの力、大気循源の種類、地１付近の風と上空の風の違いなどについて学ぶ。	○木村龍治（東京大学助教授） 奈須紀幸
5	天気の変化	四季に応じてさまざまに変化する大気の仕組について考える。冬の北西季節風は日本海側に豪雪、太平洋側にカラカラ天気をもたらす。初夏は梅雨、夏から秋にかけて台風が天気を特徴づける。	同上
6	気候の変動	地球上に大気が生成して以来、気候は絶えず変動をくり返しながら今日にいたっている。気候変動のしくみについては不明な点が多いが、これまでの気候変動の実態とその原因、とりわけ海洋の果している役割について述べ、人間活動の影響についても触れる。	○浅井富雄 奈須紀幸
7	大気研究の歴史	日常身近かな天気の変化から地球規模の大気大循環にいたるまで、気象についての我々の知識や考え方がどのようにして養なわれ育ってきたかを、その発展の節目に重点をおいてふりかえり、国際協力のもとで維持・展開されている世界の気象観測や予報の現状を示す。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	海洋探究の歴史	人は海に住人ではいないが、海とは極めて深いかかわりを持っている。生きてゆく上での必要性からだけでなく、海の未知を探るという夢を秘めて、古来続けられてきた探究の過程を振りかえり、海洋の科学へいざなうよすがとする。	○寺本俊彦（神奈川大学教授） 奈須紀幸
9	海洋大循環	海洋における諸々の過程の中でももっとも顕著なもののひとつであり、他の過程にも大きな影響を及ぼしている大循環を採りあげ、その成因、構造および機構などがどのように調べられ、どこまで明らかにされたかを述べるとともに、今後の研究を展望する。	同上
10	波と潮汐	海岸に打ち寄せる波は、沖に風が吹いて発生した風浪がうねりに変化したものも多い。風の作用で水面にどのような波が立つのか説明する。海洋の内部に発生する内部波についても述べる。次に、潮汐のメカニズムを考察する。タイダル・ボアについても触れる。	○木村龍治 奈須紀幸
11	海洋の物質循環	生物の活動を通じて、いろいろな元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についても触れる。	○服部明彦（神奈川大学教授） 奈須紀幸
12	海洋の生態系	海洋の生物は大小の部分生態系に分れ、200m以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが、深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年、内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向が見られる。	○堀越増興（千葉大学教授） 奈須紀幸
13	海底の生い立ち	深海底は中央海嶺で生れ、横に数cm／年の速さで移動しながらしだいに深さを増してゆく。海底が生れる場所には多数の割れ目があり、熱水が噴出している重金属を折出させたり、溶岩が露出している所もある。マリナナイライフなど島弧の背後（陸側）にも小規模ながら海底が生れつつある海域がある。	○小林和男（東京大学教授） 奈須紀幸
14	深海底の沈み込み	海溝は世界中でもっとも深い場所であるが海洋のへりに細長く並んでいる。深海底はここから斜めに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震や地震の波の伝わり方から確認されている。海溝の地形や沈み込みの様子は地域によって異なっていて、地震の起こり方や火山活動の歴史にも関係を持っている。	同上
15	大陸棚の生いたち	大陸や島弧の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外縁の水深は、ほぼ120～140m程度である。このような海底地形を生じたのは氷期・間氷期のくり返しに対応した海水準変動が原因であることが判明してきた。その経緯について述べる。	奈須紀幸

＝ 現 代 資 源 論 ＝ （TV）

〔主任講師：山口梅太郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割りには、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	鉱物資源と文明	フリントや黒曜石など石器時代を象徴する資源をはじめとして、青銅器時代、鉄器時代、現代に至る文明にかかわる資源の役割りを概説し、さらに、資源の浪費は文明の破滅へ導くとしたローマクラブの「成長の限界」などについて論ずる。	山 口 梅太郎（東京大学教授）
2	鉱物資源の特性とその確保	鉱物資源は、堀りとすればいずれは無くなってしまうこと、また、その存在が世界的に偏りがあること、その開発には多くの困難を伴うことなどを述べた後、こうした鉱物資源を如何に確保するか、とくにわが国の状況について概説する。	同 上
3	金属鉱物資源	鉄、銅、コバルトなどの金属資源について、その鉱床、分布、埋蔵量など、いくつかの金属を例にとって解説し、その問題点を論ずる。	武 内 寿久禰（東京大学教授）
4	非金属鉱物資源	石炭石、硫黄、燐鉱石など非金属鉱物もまた地下から得られる重要な鉱物資源であるが、それぞれ特長のある資源問題をかかえている。	同 上
5	新しい鉱物資源	超伝導技術をはじめとした最近の科学技術の進歩は希土類やレアメタルと呼ばれる従来なじみの薄かった元素や金属に光を当てた。これら新しい元素や金属の資源の動要性、存在の状況、開発の技術などを概説し、将来を展望する。	同 上
6	核燃料鉱物資源	7回以下のエネルギー鉱物資源と関連して、ウラン、トリウムなどの核燃料鉱物資源について解説する。併せて、リチウムやジルコニウムなど原子炉材料として重要な資源についても触れる。	同 上
7	エネルギーとその資源	地熱、太陽、水素など新しいエネルギー資源を含めて、将来のエネルギー供給のバランスを展望し、その中における石油や石炭などの化石燃料資源の占める重要さを論ずる。	富 永 博 夫（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	石炭・石油・天然	石炭、石油、天然ガスなどはエネルギー資源であるばかりでなく、重要な工業原料である。これらの利用の歴史、その化学、将来を展望する。	富永博夫
9	オイルサンド・オイルシェールなど	石油の代替資源といわれるオイルサンド、オイルシェールとはどんなものか、その他の代替資源はあるのか等、石油代替資源の特性と開発の可能性を探る。	同上
10	鉱山とその開発(Ⅰ)	鉱物資源の供給源である鉱山の開発はまず鉱床の発見からはじまる。鉱床の性質、鉱床探査の技術、発見した鉱床の評価、開発の可能性の検討などをまとめる。	武内寿久
11	鉱山とその開発(Ⅱ)	鉱床をどのように開発し、鉱石を採　する技術について述べる。露天掘、坑内採掘、砂鉱床の採掘、あるいはインプレースリーチングなど、いろいろな採取方法が行われる。	山口梅太郎
12	鉱山とその開発(Ⅲ)	鉱山から掘り出された鉱石は、多くの場合、そのままでは利用できない。鉱石の中の不用な部分を取除き、品位を高める選鉱の技術、鉱石から金属を取出す製錬の技術について述べる。	井上外志雄（東京大学助教授）
13	海から得られる鉱物資源	海水に溶けている各種の塩類も重要な鉱物資源であり、最近はウランを採取することも試みられている。海岸や浅い海に堆積している砂利や砂、錫やチタンなど。さらには深海底に知られるマンガン団魂など、海には多くの資源がある。	山口梅太郎
14	未利用資源とリサイクル	マンガン団魂やオイルシェールなどのほかにも、まだ十分に利用されていない資源は多い。これらの未利用資源の有効利用を考え、また、利用された後捨てられる資源をもつ一度活用するリサイクルの問題を考える。	井上外志雄
15	資源開発と環境問題	鉱山をはじめとして、鉱物資源の開発は、どうしても自然環境の破壊を伴うことになる。資源の確保と自然環境の保護をどのように調和させたらよいか、破壊された環境をどうしたら回復できるのか等を考える。	山口梅太郎

＝ 生 活 と 環 境 ＝　（R）

〔主任講師：矢部章彦（お茶の水女子大学名誉教授）
仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

「生活と福祉」専攻の柱となっている個別の専門別の具体的な主題を、環境との関わりあいという共通の視点からとらえて分析検討し、専門間の境界領域の問題を探る中から、本専攻の共通課題を明らかにすることを目的とする。学生にとっては、卒業研究のテーマ設定に手がかりを与える機会にもなることが期待される。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と環境 —序　論—	“生活と福祉”専攻の担当者を中心に主題に関する境界領域の問題を探り、新たな研究の進展に役立てたい。主要な柱は、生活技術を源流とする衣食住の課題、社会的ないし文化的視点からの生活福祉、これに生涯健康科学という新しい視点を加えて所論を展開する。	矢部章彦 （お茶の水女子大学名誉教授）
2	住生活(1) 高齢化社会と住環境	主として統計資料を中心として欧米には殆ど例を見ない三世代居住がわが国に多く見られる理由が何か、また今後高齢化社会の到来が予想される中で三世代居住がどの様に変わっていくのかその動向について考える。また老人特有の生理的、心理的な特性を明らかにする。	本間博文 （放送大学教授）
3	住生活(2) 高齢者の住宅事情	高齢者世帯の住宅事情を各種の統計資料に基づいて考察する。中でも三世代同居世帯に着目し、平均的な住宅条件、並びに住空間の使われ方の実態を調査結果に基づいて明らかにし、三世代同居の現代的な意義並びに住宅に関する現状の問題点と改善の指針を探る。	同上
4	住生活(3) 高齢者世帯の家族関係	三世代同居世帯の住計画を行うに当たって、その家族生活の実態を知る必要がある。時間と空間の座標軸の上に投影された家族生活をもとに望ましい三世代同居世帯の家族関係を考え、このような家族関係を実現するための住計画の基本方針を明らかにする。	同上
5	衣生活(1) 生活文化史へのアプローチ	フランスにおける生活文化の調査に関し、これまでの成果と近年アナール派が提唱する新しい方法と課題について、衣生活の問題を中心に述べる。	徳井淑子 （お茶の水女子大学助教授）
6	衣生活(2) 衣の歴史と環境	生活文化史の新しいテーマの一つとして注目されている清潔感の歴史を衣生活とのかかわりの中で、西欧に	同上
7	衣生活(3) 生活の中の色	ニュートンとゲーテに始まる色についての論争を原点に、新たに生活を受皿として色を考えてみる。東西の色についての認識について、重ね色目と紋章の色を例に配色についての問題提起を試みる。	矢部章彦 徳井淑子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣生活(4) 白さの意識革命	色の一つである白を特にとりあげ、民族固有の白によせる思い、宗教と結びついた白の戒律、などが科学技術のもたらした新しい白の出現によって、どの様に変貌しつつあるかを、新しい技術社会への反省をこめて、論じてゆきたい。	矢部章彦
9	衣生活(5) と環境	洗濯をはじめとする“洗う”という営みに関連して、古来からの石けんと合成洗剤とが出会って以来の、さまざまなアツレキを通して、ヒトにとって便利さとは何か、地球環境の生態系を乱しているヒトのあり方とは、などについて考えてみる。	同上
10	食生活(1) 食と社会環境	食は基本的な生活の領域であるが、社会環境の影響を強く受ける。ここでは社会環境を人口学の立場から捉え、社会の年齢構造、世帯類型、都市の規模、地域環境の区分によって主食パターン分布の分析を試みる。	宮崎基嘉（放送大学教授）
11	食生活(2) 食と家族	生活の基本単位である家族は、食の営みに深いかかわりをもっている。食と家族とのかかわりを知る一つの方法として、家族が欠けたり加わったりすることが食のどのような変化につながるかについて考えてみたい。	同上
12	食生活(3) 食の生態学	人が「食べること」のしくみを、人間、食物、環境の三つを要素として、これらのつながりを捉えようとするが食の生態学である。この学問はまだ若いが、体系化の手がかりを三つの事例を中心に考えてみる。	同上
13	健康と生活(1) 健康と衣服	室内、戸外を問わず、大気の温度、湿度、気圧に対し生体は相応の生体反応をおこす。衣服は、外界の直接刺激に対する緩解作用を重要な機能の一つとしている。また衣服自体が刺激となることも多い。衣服に対する生体反応のしくみを考える。	本間日臣（元放送大学教授）
14	健康と生活(2) 健康と食生活	成人病の多くがライフスタイル病と呼ばれる状況下で、食習慣は最も大きな影響因子の一つである。健康保持のためには、栄養物の選択のみでなくその摂取の方法も重要である。食生活と健康問題を消化管の反応を中心に具体的に考える。	同上
15	健康と生活(3) 健康と住生活	住居内の空気の汚染度、温度、湿度をはじめ、住居の構造、音響など健康に直接関与する因子が多い。例えば入浴一つをとっても浴場の構造、湯の温度、カビの発生など問題とすべき点がある。住生活と密接に関連する病態のしくみを考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	健やかな子を生むために—新しい感染症の視点から(1)	人間の誕生から生涯にわたるからだと心の精緻なはたらきは、これらを微妙に安定させ活動させている維持機構によって支えられているが、これは天与の生命現象である健康な子を生むには母親となる女性の健康が基盤である。特に妊娠から出産、授乳、保育などの過程で子供の将来の健康に密切に関係する性行為感染症など新しい感染症がクローズアップしてきた。クラミジア、トキリプラフマ、HB、肝炎ウィルスなどについて述する。	古谷　博（放送大学教授）
17	母と子のつながり—新しい感染症の視点から(2)	母と子のつながりにおけるウィルス感染症として最近注目されている成人　細胞白血病ウィルス、ヘルペスウィルス、ヒト乳頭腫ウィルスなどについて述べた。これらのウィルスの基礎的研究とその検査・疫学・臨床の発展は、そのまま母子健康科学における重要な部門の一つを占めるに至っている。母と子の密切なつながりのもとにある同産期が特に濃厚な潜伏的継代感染をおこす時期であるという事実を強調したい。	同上
18	女性のライフスパンと健康	出生と乳児死亡の減少、平均寿命の延長、それに高学歴化と社会進出の増加は、女性の生涯のすごし方、健康観に次第に変革し、結婚、家庭、育児などの考え方にも変化がみられている。社会環境との不断の相互関係のもとにある。女性の長いライスパンにおける健康の意義について考えたい。	同上
19	精神衛生(1)食の心理学	食事とそれに付随する行動について、心理学の視角から考える。すぐれて現代的な疾病である神経性無食欲症を出発点とし、文化の発達とともに　離した身体と食物、さらには象徴性を失った現代の食卓状況に関して検討する。	織田尚生（甲南大学教授）
20	精神衛生(2)衣・住と日本人の心	衣服は着る人の自己表現の手段になると同時に、自我と社会あるいは自我と深層とを媒介する装置としての機能をもつ。この点について、文化人類学や民話学の知見を採用しながら考察を進める。	同上
21	精神衛生(3)心の健康とケースワーク	本章は、心理学と社会福祉の接点にかかわる。心の健康を損なうことによって生活上の困難を生じた人々に対して、PSWがどのような形で、援助を行うか、その構造と実際について学ぶ。	同上
22	福祉と余暇(1)人間の社会生活と環境(1)	人間の生活は、人間をとりまく社会環境との相互作用のなかではじめて成り立つものである。言いかえれば、人間は環境と関わりあうなかで、はじめて人間としての生活を営むことが可能となる。かかる意味での人間の社会生活の成り立ちと機序を明らかにする。	仲村優一（放送大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
23	福祉と余暇(2) 人間の社会生活と環境(2)	人間の生活にとって社会的・文化的環境のもつ意味の重要性を明らかにした上で、人間の社会生活をさまたげる環境要因について吟味してみる。その上で、生活上の社会問題解決の方途を、人間の社会環境に照明をあてつつ考えてみる。	同　上
24	福祉と余暇(3) 環境とその対策(1)	環境問題とは何か、および、その顕在化と社会的対応策が講じられるに至ったプロセスを吟味する。特に公害対策基本法と関連法、および、国連人間環境宣言等を中心にその意義を検討してみる。	仲村優一
25	福祉と余暇(4) 保健医療と国際協力	国際化の意味を明らかにした上で、国際的にみた保健医療状況を点検してみる。特に、開発途上地域の恵まれない状況に対する先進開発国の援助のあるべき方向をさぐってみる。	同　上
26	福祉と余暇(5) 環境問題と国際協力	国連人間環境宣言やナイロビ宣言の中から環境問題をめぐる国際協力のあり方をめぐってみる。その上で、かが国の開発途上国援助の現状と問題点を明らかにする。	同　上
27	福祉と余暇(6) 労働時間と余暇	生活時間のなかで、とくに働いている人は、労働時間の占める割合が高く、その他の生活の在り方を律する。またそれは、家族生活にも影響がある。その関係について、現在の労働時間短縮問題を焦点におきながら、今後の生活のあり方との関連を述べる。	一番ケ瀬　康子 （日本女子大学教授）
28	福祉と余暇(7) 余暇と生活空間	学歴の向上、高齢化、労働ち短縮などの諸状況のもとで、余暇時間がふえてきている現代において、その余暇が、どのようにつかわれるかは、人生の在り方に大きな意味をもつ。その在り方を規制するものとして、生活空間の状況を考察してみる必要がある。	同　上
29	福祉と余暇(8) ボランティア活動と生活文化	余暇時間の中で積極的な創造性を持つボランティア活動は、福祉のみならずさまざまな生活場面の文化を創造していく意味を持つ。環境を生活者の例からのりこえていく活動の在り方を、ボランティア活動を通じてとらえる。	同　上
30	生活と環境 ―まとめ―	29回に及ぶこれまでの講義の内容を復習整理した上で、「全体のねらい」、及び、1の序論で提起された目標に照らして、全体のまとめの検討をする。その上で、それぞれの学問の広がりから新たな学問の展開の可能性を追求してみる。	仲村優一

＝心理と教育＝（TV）

―社会化―

〔主任講師：中川大倫（信州大学名誉教授）
深谷昌志（元放送大学教授）〕

全体のねらい

社会化は個人の行動と社会の要請との間の持続的な相互作用を大きく含む。従来は主として児童期頃までに実現される過程と考えられていた。しかし、現代は社会的構造の大きな変動下にある故、本講では、この問題を人の長いライフサイクルの過程においてとらえ、可能なかぎり方法論に視点をおいて講述をする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会化についての概要	社会化とはどんなことか。学習、適応、自己統制、文化の内面化などとのかかわりはどうか。そして、その社会化が歴史的にどのように考えられてきたか。現代の社会化の特色はどうか、その範囲はどうか、これらの問題について論述する。	小口忠彦（お茶の水女子大学名誉教授）
2	社会化研究の歩み―方法論を中心に―	遊びの研究を素材としながらアンケート調査を中心とした量的な調査の進め方を概観する。特に、コンピューターを利用した調査の基本を紹介し、あわせて、事例調査の進め方にも付言していきたい。	深谷昌志（元放送大学教授）
3	縦断的方法と横断的方法	乳児期から老年期まで、異なった年齢における人間の行動についての観察や測定などの結果を、成長の順序に従って、タテに関連づけようとする研究方法を中心にして説明する。	小口忠彦
4	母子相互作用	母子間のやりとり（turn-taklng）を中心にして微笑反応の出現、人見知りの発生などを研究する際の方法について考察する。	新井邦二郎（埼玉大学助教授）
5	言語の発達	社会化と言う視点から言語発達をとらえる。具体的には、(1)言語発達の流れ、(2)言語発達の個人差、(3)言語発達と思考との関連などについて考えることにする。	岩立志津夫（信州大学講師）
6	マザリングをめぐって	乳幼児期の親子関係、特に母子関係のあり方は、近年大きく変わってきた。ここでは、比較文化的な視点から、わが国の「母子一体化」の内実を、マザリングの概念を用いて国際比較調査などによって明らかにする。	中川大倫（信州大学名誉教授）
7	子やらいの世界	子供のしつけ方の日本的な源流を江戸時代に戻る形で考えていく。この回では、日本の古い雑誌や本の利用の仕方を考えていく。あわせて聞き取り調査の進め方の基本についても紹介していく。	深谷昌志

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「エミール」を手がかりとして	「エミール」を手がかりとして、西欧の子どものしつけ方のルーツを探っていく。あわせて欧米の原著や雑誌などを利用しての研究の進め方についての基本を紹介する。	志村鏡一郎（静岡大学教授）
9	学校文化	学校制度がどう形成され、それが子どもの人間形成にいかにかかわっているかを考察する。教育史の研究の進め方について、主として、明治以降の資料の扱い方を紹介していく。	深谷昌志
10	ひとの振り見て習う──モデリング──	「朱に交われば赤くなる」と言うことわざのとおり、社会的行動の発達に対してモデリングは大きな役割を果たしている。このモデリングに関する実験的研究を紹介しながら、実験的研究法の目的や手続きについて考えていく。	肥田野直（放送大学教授） 山口勧（東京大学助教授）
11	学級	学級集団は、子供が学校の中で生活していく場であり、そうした集団を通して、子供たちはさまざまなものを学んでいく。学級集団は40人前後なので、質量ともに分析しにくい側面をもつ。そうした小規模サイズのデータ処理を考えていく。	深谷昌志
12	父親らしさの変貌	父親の姿が変わってきたといわれる。たのもしいが、しかし、やさしさも持った父親が増加している。そうした父親の姿をとらえるのにどうしたらよいのか。アンケート調査を中心として、その手続きを紹介していきたい。	同上
13	国際化社会に育つ	海外に勤務する両親とともに幼年期・少年期を外国で過した後に帰国した、いわゆる海外子女・帰国子女たちの異文化間体験と、その人格形成へのかかわりについて考察し、国際化社会に育つ子どものもつ諸問題を理解する。	小林哲也（京都大学教授）
14	適応と逸脱	社会化というと、適応にイメージを置きやすいが、逸脱のアングルも社会化研究の重要な側面を形成している。ここでは、逸脱現象を研究レベルでどうとらえていったらよいのか、そうした方法論を深めていく。	麦島文夫（帝京大学教授）
15	からだとの出会い──性の問題──	身体的成熟、とくに第二次性徴の発見が、青年の心理面に、どのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して青年がどのような問題に直面し解決していかねばならないのか、といった諸問題を研究する際の方法について考える。	福富護（東京学芸大学助教授） 宮川知彰（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	学力をとらえる	学力という用語は、日本独特のものだといわれる。一般には、人間の能力のうち、学業によって達成・評価された「特殊な力」（成績）と定義される。ここでは我が国の学力観をふまえ、学力の内容と形成の過程（プロセス）を、具体的なデータによって分析する。	岡崎友典（放送大学助教授）
17	アイデンティティと自立	青年期には、おとな社会に適応できる一個人の人格としての自立、アイデンティティの成立が期待されるが、この問題について考えるさいの方法について考える。	久世敏雄（名古屋大学教授）
18	青年期における性役割の社会化	男も女も人間である。ただ、性による社会的分業がなされる社会（男と女が区別される）では、「性差」がどのように形成されるかが、その社会的背景とかかわって教育上の問題とされる。ここでは、性的社会化について各種の調査データをもとに学習する。	神田道子（東洋大学教授）
19	青雲の志し	近代日本社会の成立期（変革期）に、重要な役割を果たした青年たちの、人生の軌跡を文献資料によって分析する。明治・大正時代の「青年の志し」の形成過程を、人材輩出ルート（政・財・官界別）と社会発展と対応させて考察する。	深谷昌志
20	現代の進路選択	子どもから大人へ。青年期の進路選択は、彼らの社会人としての「成人役割」を決定する。上級学校進学者も、最終的には「就職」の関門を超えなければならない。ここでは、「職業的社会化」と職業選択との関連を、各種の調査データを用いて分析する。	岡崎友典
21	青年の適応と逸脱	青年期には精神内界の均衡を保ちながら大人社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、身体の急激な変化や生活条件が作用して非適応状態や逸脱行動を招くことがある。この問題を研究するさいの方法について考察する。	秋葉英則（大阪教育大学教授）
22	青年のサブ・カルチャー	学校は教育目的・内容によって類別されているが、同種の学校間にもその特性により学校差が形成される。中でも非制度的（インフォーマル）な文化としてのスクールカラー（学校文化）が、学校の性格を規定することがある。ここでは、中・高等教育機関を中心にスクールカラーの調査データをもとに「仕学青年」の文化の諸特徴について学ぶ。	耳塚寛明（国立教育研究所）
23	職業生活への適応	社会化の問題を人生の長いライフサイクルの中で捉えると、学業を終了し、職業生活に入ることは、新たな社会化の問題に直面することになる。本講は高度成長と技術革新を伴った経済社会の激しい変動の中に生きる働く者の諸問題を取り上げて講述する。	越河六郎（労働科学研究所研究員）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	働く母親の問題 ーマターナル・ デプリベイションー	親になることは、生物学的には容易でも心理的にはそれほど簡単でない。そこで、親になる心構えの形成を子どもの人間形成に関連させて深めていく。併せて、質的なデータを量的に処理していく方法論を深めていく。	深谷和子 （東京学芸大学教授）
25	技術革新の中での適応 ―ＯＡ化社会の中で生きる―	現在、我々が直面する技術革新のテンポは極めて速い。本講はこの技術革新の激しい流れの中に生きる者の適応問題に焦点をあてる。即ち技術革新が生んだ高度のＯＡ化と働く者との関係を中心に、技術革新と人間疎外の克服等現代の成人が直面する問題にふれる。	椎名新一 （杉野女子大学講師） 中川大倫
26	地域生活と余暇活動	成人の行動様式は情報化の到来につれて変容をとげつつある。かつての地域に変わって、心理的な空間は広がりを見せ始めている。そうした行動のパターンを追う方法を調査の形を辿りながら深めていきたい。	岡崎友典
27	老年期における心的硬さ ー老年期と適応	人生の各ステージには、それぞれ特有の問題があり、固有の研究法が必要となる。老年期における心理学的研究は、いまだ確立された段階ではないが、そこでの研究法を、特に臨床的手法を中心にながめてみたい。	荒井保夫 （横浜市立大学講師）
28	老人と家庭	老年期をライフステージにより類型化する。類型別に家族関係、役割の特徴を整理し、老人が達成すべき課題を明らかにする。特に変動する社会にあって、老人が社会に適応するには多くの困難が伴う。調査資料をもとに社会的課題についても学ぶ。	袖井孝子 （お茶の水女子大学助教授）
29	老化に対する適応 ―再社会化―	老年期の入口で大半の人々は、子供の自立、定年退職等でこれまで自分が持っていた役割を失う。そのことで社会との接触を断たれてしまう人もあるが、社会の中で老人として新たに、その役割を見いだす人もある。老年期の生きがいの問題を考えてみる。	村瀬孝雄 （立教大学教授） 下中順子 （東京都老人総合研究所研究員）
30	エピローグ	講義の全般を概観し、検討し、残された課題を整理して述べる。	中川大倫 深谷昌志

＝ 都 市 の 研 究 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
菊竹清訓（建築設計事務所長）〕

全体のねらい

都市化現象は20世紀から21世紀にかけての、人類共通のおおきな課題のひとつであろとおもわれる。この総合科目では、この都市のさまざまな側面について、学際的な接近をこころみ、たんに社会科学のみならず、人文、自然にまたがる都市の総合的研究の成果とこんごにのこされた問題点をあきらかにするとともに、この主題の周辺に卒業研究をもとめる学生に刺激と方向をあたえるように講義内容を配慮した。また、受講者の便宜をはかり、問題別に整理をはかるため、４単位科目30本の番組を５本ずつ６つのサブ・ユニットにわけて、担当講師もおおむねそのサブ・ユニットに対応してふりわけることとした。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	都市現象の考察	「都市化」ということばはよく使われるが、この講義では「都市化現象」という視覚からとらえることにする。その背景はなんだろうか。	菊竹清訓（建築設計事務所長）
2	都市とはなにか	都市ということばや概念をわれわれは日常的に使っているが、都市の定義はむずかしい。その諸説をふまえて都市の本質をさぐる。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
3	近世都市の類型	日本の近世は全国に都市が噴出し、本格化した時代であった。ここでは、都市が形成されるにいたった三つのパターンを考察する。	同上
4	首都の成立と変化	日本で十世紀以上にわたって首都でありつづけた京都は、その歴史とともに大きく変化してきた。首都とはいったいどんな性格を特徴としているのだろうか。	同上
5	都市のシンボル	都市にはかならず象徴機能がともなう。それぞれの都市が、いったいなにをそのシンボルとしているのかをさぐってみる。	同上
6	経済構造の変化と都市化	都市は経済の中心である。都市のなかで経済はどんな構造とはたらきをもっているのか、それを吟味する。	高橋潤二郎（慶応大学教授）
7	都市化の一般過程	都市、とりわけ大都市が形成されてゆくプロセスを理論的、現実的にとらえておくことは、現代のわれわれにとっての急務だ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	都市システムの研究	都市は雑然としていて、とらえどころがないようにさえみえる。だが、そこには、あきらかにシステムがある。その本質をさぐってみよう。	高橋　潤二郎
9	アーバン・ゲーム	都市の人間たちは、それぞれに利害をもっている。その利害が葛藤を生み、また問題解決の糸口にもなる。利害をゲームとしてこの問題をとりあつかう。	同　上
10	都市の経済法	都市経済は複雑で、しかも高度の相互依存性をもっている。ひとつの商品のなかにもその混み入ったプロセスが結晶していることを実証する。	同　上
11	人類・村落・都市	人間の居住形態は歴史とともに進化してきた。ここでは、人類史の視点から、都市という居住形態の特徴をとらえて、現代を再検討する。	米山　俊直（京都大学教授）
12	都市のパースナリティ	都市環境は、そこに生活する人びとに独特の影響をあたえ、いわゆる「都会人」をつくる。社会・文化をパースナリティ＝都市のかわから考察する。	同　上
13	都市のエスニシティ	都市が世界的にひろがれば、都市はことなった民族的背景をもった多くの人びとの雑居の場となる。そうして雑居性がもたらす問題点をさぐる。	同　上
14	御成街道盛衰記	むかしからある都市は、時の流れとともに変貌してゆく。そうして都市の新陳代謝もひとつの実例に照らしてとらえなおしてみよう。	同　上
15	都市と都市文化	文化とは「生活様式」のことだ。都市に生きる人たちには、特有の生活様式がある。それはいったい、どのような性質のものであるのか、をかんがえる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	都市政策の課題	都市には行政機能が不可決だ。とりわけ現代という時代を考えれば、行政のもつ役割は大きい。どのようなことがらが、行政上の問題なのであろうか。	田村　明 （法政大学教授）
17	都市経営と自治	都市は行政のがわからみれば、経営の対象でもあろう、そして、そこでは、自治体としての責任と義務が問われる。自治体のあり方を検討する。	同　上
18	都市の拡大と都市	首都圏、近畿圏などにみられるように、都市の圏域はどんどん拡大してゆく。一千万をこえる人口をもつ都市もめずらしくはなくなった。そこで考えるべき課題のひとつは分散化であろう。	同　上
19	市民参加と 「まちづくり」	住みやすい都市環境をつくってゆく力は行政機関だけではない。むしろそれよりもたいじなのはその都市に住む住民の力であろう。その実例をとりあげる。	同　上
20	都市のルールと都市のデザイン	都市生活は自由だが、同時に、おたがいが快適に生きるためにはルールが必要であろう。そのルールは、計画やデザインの面にも反映されてくる。	同　上
21	都市と建築	都市は、せまい空間にたくさんの人が生活する、という特徴をもっている。その多くの人口を収容するためには都市型の建築が必要だろう建築が都市にたいしてもつ役割を考察する。	菊竹清訓
22	臨海都市	都市の立地はさまざまでありうるが、とりわけ海と都市とは密切な関係をもってきた。それを現代の時点で、ふたたび見直してみたい。	同　上
23	都心都市	多くの都市では、その都心部がビジネスセンターとなって、中核的な機能をもつようになった。その都心部での都市現象を検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	人　工　土　地	土地が足りない、と多くの人がいう。しかし、その解決策のひとつとして、土地を人工的につくる、という方法もあるだろう。その実例をしめしながらかんがえる。	菊　竹　清　訓
25	海　上　都　市	人工土地のほかに、人間が海面上を利用して生活し、しごとをすることも技術的に可能になってきた。将来の都市像のひとつとして海上都市をとりあげる。	同　上
26	都　市　と　情　報	現代の都市では、多くの情報が集積し、処理されている。しかしその原型はふるい時代から用意されていた、ここでは、	加　藤　秀　俊
27	非都市のゆくえ	日本の国土は都市現象におおわれているが、そのなかで、都市から離れている過疎の地域もすくなくない。そうして「非都市」の現状と将来をかんがえる。	同　上
28	都　市　の　景　観	都市は美しくあってほしい。たんに機能だけでうごくのではなく、人間にとってたのしく美しい景観が都市には必要だ。景観論の立場から都市を再検討する。	菊　竹　清　訓
29	未　来　都　市	都市は歴史の産物である。そして、もしも未来をいうのか、将来に予想される歴史であるとするなら都市がこれからどうなってゆくのかをかんがえることも重要であろう。	同　上
30	都　市　の　未　来	未来をつくってゆくのは、しょせん人間の努力というものであろう。全講義をふりかえりながら、こんごにのこされた諸問題を論ずる。	加　藤　秀　俊

＝ 情報化時代の産業・技術 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

この印刷教材は「産業と技術」専攻の専任教授の全員と客員教授により分担執筆される。

各分担者は、すでに大きな変化が予想されながら進行しつつある高度情報化と、各自の専門分野の学問研究との相互関連や、研究の進展状況、研究課題等を明らかにし、履修生の卒業研究のテーマの選択、指導の助けとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	高度情報化の進展 ―実態と意義―	1970年代以降、世界の経済は大きな変動期に入り、その要因、内容、期間、進行方向について議論がなされている。変動の波は国際化、成熟化、高齢化等があり、とくに技術革新の波のうち、高度情報化は進展が早い。ここでは高度情報化の進展の実態と意義を明らかにし、経済・社会・産業への影響を検討したい。	磯部浩一 （放送大学教授）
2	情報化の進展と産業構造	産業構造の変化発展の方向は、生産の迂回化、工業化、重工業化、重化学工業化、省資源化、さらに、サービス化、情報化と次々に変化してきた。産業の空洞化現象も心配されている。情報化が産業構造にどのような影響を当えるかを考える。	同上
3	情報化の進展 ―企業と政府―	情報化の進展はアメリカにおいてＡＴＴの分割、日本では、ＮＴＴの民営化を進めた。ＡＴＴの分割は多様化による大量生産の少量生産への転換が、生産や企業の基盤にまで影響を与えたといわれる。その根底には多様化があり、高度情報化も同じ脈絡で考えられる。これらの点について、企業と政府の役割を考える。	同上
4	情報化社会の労働 ―量と質の変化	コンピュータは人間の単純労働や肉体労働を代替する。労働の現場では、情報時代の新しい労働環境に適合しにくい労働者が出てきたり、テクノストレスを訴える者が増えている。ここでは、ＭＥを中心とする技術革新や情報化の進展が雇用や失業、労働の中身や転務内容にどんな影響を与えるかを検討する。	古郡鞆子 （明海大学教授）
5	情報化と流通機構(Ⅰ)	生産と消費・産業用使用の懸隔を架橋する流通機能においては情報伝達は不可欠の機能である。それがなぜ不可欠であるかを理解し、伝達されるべき内容と伝達する手段の多様性を整理する。そして情報伝達機能を遂行する。	鈴木安昭 （青山学院大学教授）
6	情報化と流通機構(Ⅱ)	このような情報伝達機能の遂行にコンピュータが導入され、企業内と企業間の伝達に情報化が進展した。POSやVANなど現在進行中の情報化を中心とした流通システムの現状と問題点をとり上げる。	同上
7	情報化と地域の活性化 ―情報交流の場づくり	情報化の進展は地域社会に様々な波紋を投じているが、これを地域振興整備の手段の１つとして積極的に活用しようとする動きが活発である。実例を紹介しながら、その問題点と可能性を検討す。	熊田禎宣 （東京工業大学教授） 阪本一郎 （放送大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報化と地域の計画づくり ―知恵の集約と合意形成	計画の役割が大きくなりつつある現代社会では、計画の合理性・妥当性が強く要求されている。利害対立の調整が重要な課題となる「まちづくり」においては、計画策定に際して新しい情報システムの開発と利用が期待されている。このことを説明する。	熊田禎宣 阪本一郎
9	情報と機械	電気・光・音・温度などの物理量は、物の生産や工場の自動化、放送や電話あるいは緊急時など社会情報の伝達に不可欠な情報媒体である。これら物理量の情報伝達と処理を技術的立場より、その特徴について考察し、情報と自動化との関わりについて述べる。	小川鉱一 （放送大学助教授）
10	情報伝達と処理	身近に見られる自動販売機、自動車、カメラなどをはじめ、NC工作機械、ロボット、自動搬送機など生産現場における最近の機械には、エレクトロニクスが組み込まれ、知能化を一歩進めた機械となっている。これらの機械と情報との関係について説明する。	同上
11	情報技術の歴史をたどる	情報技術の革新は常に社会を変革してきた。情報技術が社会をどのように変えて来たのか。そしてこれからの高度情報化社会を支えるマイクロエレクトロニクスは私たちにどのような社会をもたらしてくれるのかを見る。	東千秋 （放送大学助教授）
12	情報化時代の産業のコメ―LSI	情報化時代の産業の米といわれる、マイクロエレクトロニクスの代表、小さなICチップは、大規模集積回路（LSI）で構成される中身のよく分からないブラックボックスである。LSIとはなにか、それはどのように作られ、将来はどうなるのか述べる。	同上
13	情報化と生産技術 ―生産の自動化をめざして	情報技術が広く浸透してきた今日の高度情報社会の中にあって、情報の活用に先駆的役割を果たしてきた工業における、従来主軸あったハードウェア技術と、今日ますます重要な位置を占めてきたソフトウェア技術の発展について述べる。	町田周郎 （群馬大学名誉教授）
14	情報化社会と生産技術展望 ―生産無人化の行方	高度情報化時代の生産の場においては、広汎多種の情報蒐集と迅速な情報処理によって最適条件の設計、加工生産また評価・管理などを行う技術が浸透してきている。ここではいくつかの例について現状を述べるとともに将来を展望する。	同上
15	プロジェクト管理の高度手法 ―GERT―	PERTタイプのネットワーク計画法をより一般化したGERT（Graphical Evaluation and Review Technique）の初歩的事項を概説し、広くプロジェクト管理への関心の高揚に資したい。	加瀬滋男 （放送大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	構造化技法によるシステム設計 ―データ中心への接近	最近企業が頭を悩ましているシステムのバックログ問題の打開策として、システムの構築に構造化技法の採用が期待されている。その考え方、ツール、技法のあらましを展望し、伝統的手順との差異を明らかにしたい。	味村重臣 （産業能率大学教授）
17	エントロピー・モデルによる市場構造分析 ―新銘柄進出の市場分析と価格選定	消費者の購買行動における銘柄選択の問題を、市場情報の有効利用の観点から、エントロピー・モデルにより分析する手法について解説する。あわせて、既存の市場に新銘柄が進出してきた場合の市場構造分析と新銘柄の価格選定についても講述する。	太田　宏 （大阪府立大学教授）
18	経営戦略と前提 ―環境予測企業目標能力評価	経営戦略の設定は、未来の多くの環境予測情報に依存する。そこで社会・経済、技術、市場、資源政府規制等の因子を中心に、企業をめぐる環境予測の内容を説明する。	小林靖雄 （元放送大学副学長）
19	経営戦略の設定	環境予測にもとづいて、企業がとりうる戦略の諸代案のうち一つを選択する意思決定は、フォーマルな手法をもちえない。ここではその基本的前提と、若干の接近方法について述べる。	同　上
20	情報化時代の生産システム ―ファクトリー・オートメーション―	近年、ＦＡ、すなわち機械加工および組立の高度な自動化が進められている。本講義では、より柔軟性のある自動生産システムとして注目されるＦＭＳ（フレキシブル生産システム）の概要を説明するとともに、これからの生産システムのあり方について解説する。	横山雅夫 （福島大学助教授）
21	情報化時代の生産管理	より高度な生産システムの発展のためには生産管理システムの開発が不可欠である。本講義では、多品種少量生産を行う生産システムにとって重要な、負荷配分や加工のスケジューリングを中心として、問題のとらえ方と計画手法について解説する。	同　上
22	情報化とマーケティング ―マーケティング革新の背景―	消費市場は、「分(少)衆化」「個別化」した市場へと変質してきた。大衆ではなく「個」の市場をいかにつかむかが、マーケティングの最大の課題である。情報化の進展に支えられ、個々のニーズを掌握するというマーケティング上の革新が起こりつつある。	伊藤公一 （千葉商科大学教授）
23	情報化とマーケティング ―マーケティング革新の展開―	このマーケティング革新とは、川下発想（メーカー・卸）、付加価値提供志向(卸)、生活者の欲求への適合（小売）である。革新を支え、促す情報化として、①情報ネットワーク（ＶＡＮ他）、②顧客データベース化、③ＰＯＳシステム、④ニューメディア、を取り上げる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	企業内容の開示制度	現在、わが国の株式会社は証券取引法と商法の定めによって、その事業内容を、いわゆる財務情報として開示しなければならないことになっている。本講では、有価証券報告書の制度、および、貸借対照表などの公告の制度につき、現状をあきらかにする。	江村　稔（放送大学教授）
25	財務情報と情報革命	投資家などに開示すべき会計情報について近年、会計学者による研究が進んでいる。とくにW.H.ビーバーの「財務報告革命」は注目さるべき業績である。本講では、この書物をとりあげて論じてみよう。	伊藤邦雄（一橋大学助教授）
26	情報化の進展と企業の資金部門の変貌	コンピュータを始めとする情報機器の発展は、高度成長期にみられた銀行との話し合いをもとにした資金の調達と資金繰りから、より多くの情報を収集し、迅速に対応した資金の管理を促してきた。ここでは、その変貌の跡を辿り、これからの課題を考える。	古川浩一（東京工業大学助教授）
27	情報化が経営財務に及ぼす影響の諸側面	企業の資金調達力は、その企業に対する資本市場の評価と密接に関連する。企業は自らの経営成績を会計報告書という形で利害関係者に報告している。この報告書によって与えられる会計情報が企業の評価とどのように関連しているかを検討する。	同上
28	ＯＡの基礎―ＯＡと歴史と狙い	ＯＡを理解するために、まず、「ＯＡの歴史と背景」を考察し、その本質を見極める。そして、「ＯＡの狙い」は、一体、何であるのか、その狙いに到達するためには、如何なる「ＯＡ化のステップ」を必要とするのかを、考察する。	中村光男（㈱岡村製作所経営情報システム研究所研究開発室長）
29	ＯＡの実践―ＯＡの現状・動向・課題	昭和55年前後から注目されたＯＡも今や定着しつつある。そこで「ＯＡ化の現状」を把握し、次に、今後のリード・ソフト・通信・環境整備・情報管理技術の向上と共に「高度情報化社会におけるＯＡの動向」につき、若干の考察を行い、「今後の課題」を提起する。	同上
30	総括	本講義に対する補遺や敷衍を試み、全体的なまとめを行う。あわせて来るべき時代の産業および技術の動向を展望し、今後の勉学の便に供する。	江村　稔 磯部浩一 町田周郎 加瀬滋男

＝科学と宗教＝（R）

主任講師：大森荘蔵（東京大学名誉教授）
橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
伊藤公一（放送大学助教授）

全体のねらい

科学と宗教というテーマは大きく、且つ単なる教条的理解や道聴塗説に止まってならぬ面を持っている。本講座は総合講座として、学説の記憶というより、学生諸君がこのテーマについて自分の意見を形成することを狙いにしている。それ故教材は記憶すべき玉条集でなく、諸君が意見形成する際の対話相手と考えてほしい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 －科学信仰の源流	科学の確かさはどこに由来するのかをテーマとし、科学記述の世界と日常世界のかかわりを検討する。	大森荘蔵 （東京大学名誉教授）
2	関係の原初形態 －古代は過ぎ去った影と過ぎ去らない基礎との共在する場である－	古代ギリシアのソークラテース以前の哲学に於いて、科学と宗教がどのように関係していたかを論定する。代表的学者を取り上げ、祖型に分類した。	今道友信 （清泉女子大学教授）
3	科学と宗教 －科学者として宗教者として	科学者であり同時に宗教家である立場から、この問題を論じ、自然現象の科学的把握も神のメッセージを含むこと、その意味では、宗教も科学も一つであることを説明し、また、すべての文化的営みが一つの方向を持っていることを論じている。	柳瀬睦男 （上智大学教授）
4	神はどこに住むのか人間はどこに住んでいるのか	人間の王国を建設するところに科学の仕事があるが、それは神の国の土台の上に据えられなくてはならないことを、人間の在るべき場所を求める哲学的考察によって明らかにしている。	加藤信朗 （東京都立大学教授）
5	「物理学者にとって神とは　」	ガリレイからニュートンを経て十九世紀に至る宗教観と、ハイゼンベルクの眼を通して見た現代物理学の創始者たちの宗教観との対比により、それらの類似と相異が汲みとられるようにした。現代科学者による問題の展開が簡明に論じられる。	小田稔 （理化学研究所 理事長）
6	心の本質をめぐる科学と宗教	心、特に「わたし」の扱いを中心として、科学的世界観と宗教的世界観の特徴と限界を明らかにする。それらは二つの相異なる原語によって語られるから、直ちには結びつかない。宗教言語に習熟するためには自己革新が必要である。	稲垣良典 （九州大学教授）
7	宗教的言語が披く地平と科学的世界	頌歌を材料に取り、宗教的言語がいかなる働きをもち、いかなる世界を披くか、またそれは科学言語の披く世界といかに異なるかを検討する。	宮本久雄 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	科学的真理と形上学的真理	現代の日本を代表する哲学者として西田幾多郎と松本正夫を取り上げ、両者に於ける科学論と宗教論とを基にして、標題のテーマを考察している。西田は自力宗教と述語論語、松本は啓示宗教と主語論理というように、相互に尖鋭な対立がある。	橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
9	存在と意味	科学言語と日常言語を比較し、存在に目を向ける前者と意味を求める後者を対比し、科学言語が作る科学的世界の強さと弱さを検討する。	大森荘蔵
10	科学の問いと宗教の問い ー技術・科学・宗教	技術・科学・宗教はそれぞれ何を求める活動なのか。それらの答えるべき「問」によって三者の区別を試みる。	伊藤笏康（公一）（放送大学助教授）
11	「賢者ナータン」	十八世紀ドイツ啓蒙思潮の代表的文人レッシングの「賢者ナータン」を材料として、宗教間の対立、それを超える人間的真情の交流の重要性を述べる。理神論、啓蒙主義、科学的合理主義等の本質を考察し、道徳教説に於ける人間的一致の重要性を説いている。	坂部恵（東京大学教授）
12	科学時代に似合った宗教心を求めて	現代人は、科学者を含めて、倫理的責任が問題になる時、良心に訴えるか、宗教に頼ることを止める傾向が強い。その原因の一つは、宗教の側の言語表現の不適切性にありその改善が望まれる。	橋本典子
13	科学と宗教 その架け橋 ーリクールとオリベッティ	リクールとオリベッティーとの筆者の直接対話を基にして、科学と宗教の結びつきの可能性を問う。リクールを介して、詩的言語の解釈が、オリベッティーを介して、倫理がそれぞれ媒介となることを明らかにした。	山本信（東京女子大学教授）
14	科学と宗教、 そして人間 ー知ることと生きること	科学は客観を、宗教は主体を問題とし、衝突はないはずであるが、知識の強情と信念の偏執が原因となって両者の関係は複雑となる。科学が自然を問題にするように、人間は宗教に関し、自己の安心立命のみならず、社会の歴史の行方に責任を持つべきである。	橋本典子
15	生命哲学と宗教 ーアンリ・ベルクソン	科学と宗教の接点の一つは生命と死の問題である。この問題に関しては、ベルクソンを介して、独自の考察を求めることも一つの方法である。科学と宗教を直接に関係づけず、科学と哲学の比較を通じて、道徳や宗教を論じる。	小尾信彌（放送大学副学長）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	宇宙論	現代の天文学者として科学と宗教について論じる。そのため、人間が何故ここにいるのか、という問い、私が今何故ここにいるのかという問いを出発点として宇宙の構造と進化の面からそれについて考える。	小尾信彌（放送大学副学長）
17	科学理論と宗教「理論」	求めるものに応じて理論は異なる力動的構造を取る。その面から科学と宗教と技術の活動としての差は何か、また三者を連続的につなぐものは何かを検討する。	伊藤笏康（公一）
18	科学・宗教・合理化	科学と宗教を統一的に見る視点を、マックス・ウェーバーの「人間の生の合理化」に求め、両者が合理化の過程の中で緊張関係に立つことを明らかにした。近代以後、科学が生の全面に合理化を果したので、宗教は非合理の中に閉じ込められた。	浜井修（東京大学教授）
19	死	死は科学の超克出来ない現象であり宗教の基本的課題なのである。その視点からディー教授の宗教観を直接対話で尋ね、ジャンケレヴィッチを介して死の瞬間の意味を探り、死が原罪に基づくとされるところから悪の問題を考えた。	橋本典子
20	科学と禅ー漱石の世界より	近代科学との出会いを経験した漱石の世界に於いて、科学的精神と宗教の相異を考察するため、『門』と『行人』の二作品の解釈を行った。禅を『坐』とし科学を『走』と規定した。	大橋良介（京都工芸繊維大学教授）
21	科学と宗教の基本的関係ー二つとも古くから別々の明るさを求めている	両者の異同、混同、劇的調和という意味論的＝価値論的問題を縦軸とし、過去、現在、未来を横軸として、両者の基本的関係を論じている。	今道友信
22	言語の働きとしての科学と宗教	科学も宗教も、＜こころ＞言語の働きによって生成する地平であり、ともに「全体を求める」性格をもつ。「全体を求める」＜こころ＞言語の機構としての「縮重」を中心にし、両者の異同を検討する。	井上忠（日本大学教授）
23	技術文明と宗教ーガブリエル・マルセル	技術が世界を支配し始めた時代から思索の生活に入ったマルセルは、技術社会に於ける人間性喪失の危険に気付いた最初の人々に属する。宗教による希望が単なる欲求と異なり、人間を新生に導くことを明らかにした。	橋本典子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	愛と死	科学者として信仰をもつ自己の経験を手がかりにして、先ず、個人に於ける両者の関係を論じ、次に体制として自己変革を経た宗教に対しそれを経験しない科学に向けて、科学のあるべき姿を価値論的に提案している。	垣花秀武（上智大学教授）
25	良寛・道元 ウィトゲンシュタイン	「論理」を広い意味での探究原理と考えるとき、良寛や道元の得た論理は何であったか。また近年、そのいみでの論理を重視した哲学者にウィトゲンシュタインがいる。三者の論理を中心にして考察する。	黒埼宏（成城大学教授）
26	科学・倫理・宗教 ―エマニュエルレヴィナス	存在を限度とする形而上学に飽き足らず、存在の彼方を志向して、倫理学を第一哲学とする現代哲学者レヴィナスの思索を通じて宗教を論じる。「顔」に於いて「汝殺すなかれ」という神の命令を読むのは周知の特色である。	橋本典子
27	将来の問題 ―これは省察であって予言ではない。しかし，推理と決意とは想像とともに時を先駆ける―	科学と宗教が現実を解釈する二つの目であることを明らかにし、将来に於ける宗教の必然性とその存立条件を、エゴ・エティカとの連関に於いて考察している。	今道友信
28	悪について ―それは時間の非充足である。	悪の本質を時間の非充足ないし非充実と見る新しい見地から、宗教・科学・科学技術と悪の関わり合いを考察した上で、災悪と罪悪とに於ける宗教の役割を論じている。	同上
29	科学と宗教 ―死の問題を例として	人間の死の問題を例として、両者の関係について哲学的思索を展開する。宗教は自己の中に科学技術を受け入れてあまりあるもの、すなわちそれによって侵されない大きな力であることを、生死が無生死であり、無生死が生死することの体得を通して明らかにする	辻村公一（京都大学名誉教授）
30	知識と意見	『科学と宗教』の講義は、教養学部の最も教養らしい教養として提示されているものである。このような問題については知識よりも多くの卓れを意見に接することが大切でる。これを「受ける」のみではなく、これに「反応」して考えるべきである。	大森荘蔵

＝ 生　命　論 ＝（TV）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

生命は歴史を通じて人類の強い関心を集めてきた。十九世紀以来生物学、生物化学の新しい展開にともない生命の考え方は大きく変わり、分子生物学の出現で物質を基礎とする考え方は確実なものとなった。この考え方と従来の考え方とを比較考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	この講義全体の編成の方針を概略説明し、ここで採用した考え方以外の考え方をも考慮した上で、全体的視野の下で勉学の指針を与える。	野　田　春　彦 （放送大学教授）
2	歴史宗教哲学と生命	人類の有史以来の生命に対する考え方を総説する。特に宗教書や哲学書に現れた世界観など古代以来の生命に対する考え方の変遷を現代の知識と関連させて見直す。	伊　藤　笏　康 （放送大学助教授）
3	生気論と機械論	生物学が物質的基礎を持たなかった時代には、物理学や化学で理解できない未知な原理が働いて初めて生命現象が起こるという考え方をせざるを得なかった。それが今でも本当かどうかを考える。	大　森　荘　蔵 （東京大学名誉教授）
4	生命の最小単位	地球上の生物全部に共通の部分があればそれは生命にとって必須の部分であろう。さらに必須でない部分があればそれを除く。最少の部品で構成される生物はどんなものかを探ってみる。	野　田　春　彦
5	筋　収　縮	生物の細胞の基本的運動能力を考察する。細胞分裂に際しての細胞内の動き、鞭毛の運動、繊毛の運動、筋肉の運動などの構成や運動機構の異同についても考察する。	江　橋　節　郎 （岡崎国立共同研究機構生理学研究所所長）
6	増　殖　と　分　化	単細胞の生物は細胞分裂によって増殖し、多細胞生物は細胞分裂によって成長し、さらに増殖する。基本となる細胞分裂の機構とその生物種による微細な差を考察して、生命機構全体との関係を考察する。	平　本　幸　男 （放送大学教授）
7	構　造　形　成	単細胞生物でも、多細胞生物でも、タンパク質分子が集合して形成する構造は個々のタンパク質に固有の化学構造にもとづいて自動的に作られる。多細胞生物では細胞の集合の方式も生物の形を決定する。これらに内在する原理を考察する。	野　田　春　彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	酵素	生物体内の化学反応で共有結合が形成されるときにはほとんどの場合に酵素が関与している。この酵素の物質としての性質、作用機構と構造との関係などが、どこまで物理化学的に理解できているかを考察する。	野田春彦
9	ホメオスタシス	生物体内では条件を一定に保とうとする傾向がある。その中で特に物質代謝系に関係する物質の濃度を一定に保持する機構については研究が進んでいるので、それを説明する。	同上
10	太陽と地球と生物	現在の地球上では生物界への炭素化合物の取り込みは殆ど全部植物の光合成によっている。光合成の産物が食物連鎖を通じて動物や菌類を養っている。その全体像を地球的規模で考察する。	同上
11	物質代謝とエネルギー代謝	生命現象の特徴の一つは材料物質が常に流れていることである。流れを作るためにはエネルギーが必要である。それらの流れの相互関係と、その機構を考察する。	同上
12	遺伝	遺伝現象の基礎となる分子生物学的機構は全部解明されているわけではない。染色体とDNAの関係などをも含めて、分子レベルの考え方をできるだけ現象に結び付ける試みをする。	同上
13	タンパク質の生合成	遺伝子の構造として保持されている遺伝情報の具体的発現はいろいろあるが、その中でよく研究されているのはタンパク質の生合成である。その機構の細目を検討してみる。	同上
14	分子の進化機構	永い年月にわたる遺伝子の変化が進化の基本であるが、DNAの具体的な構造とその変化の可能性を実際の遺伝子の構造と関連させて考察する。	宮田隆（九州大学教授）
15	核酸の構造と機構	1. 核酸の所在 2. 核酸の立体構造 3. 染色体とDNA 4. 核酸のヌクレチオチド配列　の分析	野田春彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	個人差と人種	1. 遺伝的多型 2. 遺伝子の多様性と人種 3. タンパクからDNAへ	尾本恵市 （東京大学教授）
17	中枢神経	多細胞生物の多数の細胞の行動を統制する方法の一つは神経によるものである。生物が進化して、その神経の中に中枢神経系が現れて全体をまとめるようになると生物の行動は複雑になる。人間は言葉を使うことによって更に新しい行動様式を開発した。	久保田競 （京都大学霊長類研究所教授）
18	記憶について	知能は記憶の基礎の上で働くものであるが、その記憶というものの本質を考え直す試みをする。	大森荘蔵
19	精神と生命	人間の立場から生命を考えると、精神の働きが常に念頭にある。山川草木に生命を感ずるのは、人間の側から感情その他を移入する結果である。その他日常の多くの場合について色々の面からの考察を試みる。	香月秀雄 （元放送大学長） 大森荘蔵 野田春彦 伊藤公一
20	自然知能と人工知能	計算機は脳の能力の一部を遂行するものであるが、最近の計算機では人工知能と呼ぶこともできるような能力を備えるものがある。両者の比較から脳の能力に対して新しい見方も現れるかもしれない。	甘利俊一 （東京大学教授）
21	免疫	鳥類と哺乳類は侵入する外敵に対抗するために、特別な細胞群を用意している。これらの細胞群が多種類の外敵に対して対抗できることの原理、その際に合成されるタンパク質などについて最近の進歩を考察する。	大沢利昭 （東京大学教授）
22	消化と吸収	我々の日常生活では、食事の消化と吸収は意識されないことが多い。もし意識されるようになると異常が存在する。平常の場合にはどのように進行しているか、異常になると何がおかしいのかを考察する。	橘正道 （千葉大学教授）
23	考える脳のメカニズム	1. 思考時の大脳連合軸の活動 2. 大脳の神経回路網 3. 意識と注意 4. と幻覚 5. 記憶の2型	伊藤正男 （東京大学名誉教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	病気	体の部分について意識するようになると、そこに何かの異常があることが多い。しかし異常がないのに意識が先行することもある。何を正常と呼び、何を異常と呼ぶかについて考察してみる。	香月秀雄
25	抗生物質とその効き方	薬の中で抗生物質は効力の原理が明らかなものである。細菌が如何にして抗生物質を生産するか、抗生物質が相手の細菌の生理作用のどこを阻害するかを調べてゆくと、生きるということの分子生物学的な基礎と深く関係していることが多い。	大村智（北里研究所副所長）
26	老化と寿命	多細胞生物の個体は必ず老化する。加齢による器官の変化、死亡率など老化の基本データを供覧し、老化に関して今までに提出された仮説を説明し、老化と栄養の関係や寿命の予測など現在ではまだ答えのできていない問題についても考察する。	松村外志張（明治乳業ヘルスサイエンス研究所 研究員）
27	臓器移植	医療の手段の一つとして故障のある臓器を摘出して他人から正常な臓器を移植したり、人工の臓器を取り付けたりすることが行われる。実際の方法、功罪、将来の見通しなどを論ずる。	香月秀雄
28	生と死	人間の意識の中で、自己の死というものは特異な地位を占める。歴史的な思い込みを取り去って、虚心胆懐に考察を試みる。	大森荘蔵
29	物質と生命	地球上の生命の物質的基礎は相当程度明らかになってしまった。しかし宇宙のどこかで生命を構成するときに、現在地球上にみられる生命と同じものだけを考えるので十分かどうかは確かではない。	野田春彦
30	生命とはなにか、改めて考える	各方面から考察した生命の本質を再び復習し、考察の足りなかったところを補い、将来研究すべき点について論ずる。	野田春彦

＝ 文 学 の 東 西 ＝ （R）

〔主任講師：辻　　瑆（東京大学名誉教授）
　　芳賀　徹（東京大学教授）〕

全体のねらい

「文学」や「東西」の意味、日本文学の特質などを検討したのち、主に芳賀講師によっていくつかの主題に則し、日本と諸外国間の関連と影響関係を比較文学の成果として解明する。後半は西欧諸国・中国と日本との間において、対照比較、受容の問題等を論じ、全体として日本文化のアイデンティーを求める試みとしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「文学の東西」をめぐる環境(1) “文学”および “東西”の概念	「東西」及び「文学」について東西からする配慮を行い、この二つの概念の歴史的な変遷についてもふり返ってみたい。	芳賀　徹（東京大学教授） 三好行雄（大妻女子大教授） 小山弘志（国文学研究資料館々長） 辻　瑆（東京大学名誉教授）
2	「文学の東西」をめぐる環境(2) 日本語の特性と文学への影響	世界の中で言葉の孤児である日本語の特性を考察したのち、この特性が文学に与えているであろう影響を、各種の仮説として論じる。	三好行雄 小山弘志 古田東朔（放送大学教授） 辻　瑆
3	「文学の東西」をめぐる環境(3) 比較と日本文学	比較の可能性と不可能性について論じたのち、比較文学という学問の成立根拠を問う。	芳賀　徹 小山弘志 佐伯彰一（中央大学教授） 辻　瑆
4	比較文学の歴史	比較文学という学問の西欧における歴史とともにその日本における展開と成果を解説する。	芳賀　徹
5	桃源境の系譜 (1) 陶淵明の桃源郷	中国文学に取材する。	同　上
6	桃源境の話 (2) 東アジアの理想郷	日本の江戸文学までを扱う。	同　上
7	桃源境の話 (3) 日本における桃源郷	近代文芸に取材する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	きりしたんとクリスチャン (1) 西欧キリスト教文学と日本	南蛮文学の翻訳及びヨーロッパにおける文化史的背景を扱う。	加納孝代 （青山女子短期大学助教授）
9	きりしたんとクリスチャン (2) 明治時代の聖書と讃美歌の日本語訳	寛永までを扱う。	同上
10	蘭学事始 (1)	新井白石について。	大久保喬樹 （東京女子大学助教授）
11	蘭学事始 (2)	杉田玄白について。	同上
12	ヴィクトリア朝英国と日本人 (1)	岩倉使節団と福沢諭吉。	川西進 （東京大学教授）
13	ヴィクトリア朝英国と日本人 (2)	夏目漱石をめぐって。	芳賀徹
14	住居（すまい）の詩（その1）	俳句。芭蕉、蕪村、一茶、草田男など。	同上
15	住居（すまい）の詩（その2）	詩。バシュラール、リルケ、萩原朔太郎、田中冬二など。	川本皓嗣 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	〔中国と日本(1)〕 唐以前	唐以前の中国文学と日本との関係を、一、二の事例に即して論ずる。	竹田晃（東京大学教授） 辻理
17	〔中国と日本(2)〕 白話小説	唐・宋の伝奇小説と、それにもとづく日本の小説を取り上げて、比較考察する。	尾上兼英（東京大学教授）
18	〔ロシアと日本(1)〕 ロシア文学の近代日本文学への影響	日露間の文化的交渉を簡単にたどったあとで、トゥルゲーネフからトルストイ、ドストエフスキイ、チェーホフに至るロシア文学が日本近代文学成立上に演じた重要な役割を説明し、同時に日本的理解の偏よりについて論ずる。この偏よりはソビエト期に更に大となる。	川端香男里（東京大学教授） 辻理
19	〔ロシアと日本(2)〕 ロシア文学と日本文学 ― 対比的考察	外国文学の影響の及ぶ「終着点」であるという点で両国の文学は多くの歴史的形態論的特徴を持つ。また文壇のあり方、作家の生き方にも相似た面がある。これらの共通点・類似点を指摘しつつ、さらに両文学の相違、両文学の民族的特性へと話を進める。	同上
20	〔フランスと日本(1)〕 フランス文化の自己理解― 演劇を主として―	フランスの文化がいわゆるアイデンティティーを獲得し、明確な自己理解を行うのは17世紀のことである。演劇を中心としてその経緯を解明しながら、一部は現代にも話題を拡げて日本とのコントラストを浮き彫りにしてみたい。	渡辺守章（東京大学教授） 辻理
21	〔フランスと日本(2)〕 フランスと日本の散文詩	詩とは何よりもまず形式の面で散文と異るものだった。どのようにして、散文のままで「ポエジー」が成り立つようになったか。ボードレールや萩原朔太郎の場合に即して考える。	阿部良雄（東京大学教授） 井戸桂子（放送大学助教授）
22	〔イギリスと日本(1)〕 ソネットの受容	ソネット（十四行詩）という、約束事の多い窮屈な西洋の詩型が、日本でどのように受容され、変容したか、イギリスのソネットとその翻訳、日本の創作ソネット数篇を取り上げて考察し、東西文学の特質の一端を明らかにしたい。	川西進 辻理
23	〔イギリスと日本(2)〕 二つの自然観 ― ワーズワスと芭蕉	ワーズワスと芭蕉とは、ともに花鳥風月をうたった詩人であるが、そのうたい方にどのような差異があるか、そしてその差異はどのような考え方、ものの見方の相違から生ずるかを、具体的な詩句に当たって考察する。	上島建吉（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	〔アメリカと日本(1)〕 日米の自然観	日米の自然観が文学にいかに表われているかを考える。南北戦争以前の文学をとり上げマクロコズムとミクロコズム、17世紀清教徒達の見た神意の啓示としての自然、19世紀ロマン主義の作家エマソンとメルヴィルの相対立する自然観などを論じる予定。	島田太郎 （東京大学助教授） 辻　理
25	〔アメリカと日本(2)〕 アメリカ文学における自然と文明	自然と文明の対立はアメリカ文学における最大の主題の一つといえるが、この問題は西部フロンティアと深く関係している。この授業ではマーク・トウェインなどの作品を通してそれを検討し、さらに日本人の自然・文明観との比較によってその独自性を明らかにする。	渡辺利雄 （東京大学助教授）
26	〔ドイツと日本(1)〕 ゲーテの「普遍性」	ゲーテの普遍性と言われるものを、市民階級・市民文化との関連から考察し、『若きヴェルターの悩み』を中心に、日本における受容の様態に触れたい。	辻　理 大貫敦子 （学習院大学助教授）
27	〔ドイツと日本(2)〕 カフカとその受容	カフカの作品を通じて翻訳と理解の可能性と不可能性を論じる。	辻　理
28	〔スペインと日本〕 『ドン・キホーテ』	『ドン・キホーテ』と近代小説の誕生について考察したのち、『ドン・キホーテ』受容史についても論ずる。	桑名一博 （東京外語大教授） 辻　理
29	〔中南米と日本〕 現代のラテン・アメリカ文学	現代ラテン・アメリカ文学の魅力と強い影響力とを論じ、その位置づけを試みる。	同　上
30	まとめ	概観と各種の事例の考察とが自然に語るものが何であったかを、まとめとして論じておきたい。	芳賀　徹 辻　理